

# 市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II

## (本文編2)

2015

市原市教育委員会

すわだい てんじんだい  
市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡 II  
(本文編2)

2015

市原市教育委員会



## 本文編 2 目次

### 第 2 章 遺構と遺物

第 3 節 その他の遺構と遺物 .....	635
1 土坑・土壙 SK(1~350) .....	635
2 溝 SD(1~29) .....	789
3 その他の遺構 SX(1~3) .....	798
4 遺構外の遺物 .....	817
土器    中世陶器    土製品    石製品    金属製品    玉類    その他	
5 SW80 地区 8号墳出土の遺物 .....	839
土器    石製品    金属製品    その他	
6 諏訪台古墳群墳丘出土の縄文遺物 .....	844
土器	
064    099    セ 72・73    セ 28    セ 54    SW83    SW80・81	
土製品    石製品	

### 第 3 章 分析

第 1 節 諏訪台古墳群出土土器の胎土分析 .....	927
第 2 節 諏訪台古墳群から出土した釘付着木質の樹種 .....	940
第 3 節 諏訪台古墳群出土古墳時代人骨について .....	948
第 4 節 諏訪台古墳群出土石器等石材鑑定 .....	952

### 第 4 章 総括

第 1 節 諏訪台古墳群中における終末期方墳と律令制墳墓 (改葬系区画墓) の狭間 .....	963
第 2 節 遺構の変遷	
1 墳墓    2 土壙・土坑 弥生~中世    3 その他の遺構と遺物 .....	968



## 本文編 2 挿図目次

Fig.449	SK1、SK2、SK9、SK10 実測図	637	SK130 実測図	690	
Fig.450	SK12、SK13、SK14、SK15、SK16、SK17、SK18、SK19 実測図	640	Fig.471	SK131、SK132、SK133、SK134、SK135、SK138 実測図	691
Fig.451	SK22、SK23、SK24、SK25、SK26、SK27、SK28、SK29 実測図	643	Fig.472	SK136、SK137(1)実測図	692
Fig.452	SK20、SK21、SK30、SK31、SK32 実測図	646	Fig.473	SK137(2)実測図	693
Fig.453	SK34、SK35、SX1 実測図	647	Fig.474	SK139、SK140、SK141、SK142 実測図	696
Fig.454	SK36、SK37、SK39、SK42 実測図	648	Fig.475	SK143、SK144、SK147、SK148 実測図	699
Fig.455	SK43、SK44、SK45、SK46 実測図	651	Fig.476	SK149、SK150、SK151 実測図	702
Fig.456	SK47、SK48、SK49、SK50、SK51、SK52 実測図	654	Fig.477	SK152、SK153、SK154、SK155 実測図	705
Fig.457	SK53、SK54、SK55、SK56、SK57 実測図	657	Fig.478	SK156、SK157、SK158、SK159、SK160 実測図	706
Fig.458	SK59、SK60、SK61 実測図	660	Fig.479	SK161、SK162、SK163、SK165、SK166 実測図	709
Fig.459	SK62、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69 実測図	661	Fig.480	SK164、SK167、SK168、SK169、SK170 実測図	712
Fig.460	SK70、SK71、SK72、SK58、SK73、SK74 実測図	664	Fig.481	SK171、SK172、SK173、SK174、SK175 実測図	715
Fig.461	SK75、SK76、SK77、SK78、SK79 実測図	667	Fig.482	SK176、SK177、SK178、SK179 実測図	716
Fig.462	SK80、SK81、SK82、SK83 実測図	670	Fig.483	SK180、SK181、SK182 実測図	719
Fig.463	SK84、SK85、SK86 実測図	671	Fig.484	SK183、SK184、SK185、SK186 実測図	722
Fig.464	SK87、SK92、SK93、SK94 実測図	674	Fig.485	SK187、SK188、SK189、SK190 実測図	725
Fig.465	SK95、SK96、SK97、SK98、SK99、SK100 実測図	677	Fig.486	SK191、SK192、SK193 実測図	728
Fig.466	SK101、SK102、SK103、SK104、SK105、SK108 実測図	680	Fig.487	SK194、SK195、SK196、SK197、SK198 実測図	729
Fig.467	SK106、SK107、SK109、SK110、SK111 実測図	681	Fig.488	SK199、SK200、SK201、SK202、SK203 実測図	732
Fig.468	SK112、SK113、SK114、SK115、SK116、SK117、SK118 実測図	684	Fig.489	SK204、SK205、SK206、SK207 実測図	735
Fig.469	SK119、SK120、SK121、SK122、SK123、SK124 実測図	687	Fig.490	SK208、SK209、SK210 実測図	736
Fig.470	SK125、SK126、SK127、SK129、SK130 実測図	690	Fig.491	SK211、SK212、SK213、SK214 実測図	737

Fig.492	SK215、SK216、SK217、SK218、 SK219 実測図	740	SK314 実測図	790
Fig.493	SK220、SK221 実測図	743	Fig.513	SK315、SK316、SK317、SK318、 SK319、SK322 実測図
Fig.494	SK222、SK223、SK224 実測図	744	Fig.514	SK320、SK321、SK323、SK324、 SK325、SK326 実測図
Fig.495	SK225、SK226、SK227、SK228、 SK229 実測図	747	Fig.515	SK327、SK328 実測図
Fig.496	SK230、SK231、SK232、SK233、 SK234 実測図	748	Fig.516	SK329、SK330、SK333 実測図
Fig.497	SK235、SK236、SK237、SK238、 SK239、SK240、SK241 実測図	751	Fig.517	SK331(1)実測図
Fig.498	SK242、SK243、SK244、SK245、 SK246、SK247 実測図	754	Fig.518	SK331(2)実測図
Fig.499	SK248、SK249、SK251、SK252、 SK256 実測図	757	Fig.519	SK331(3)実測図
Fig.500	SK253、SK254、SK255 実測図	760	Fig.520	SK331(4)、SK332(1)実測図
Fig.501	SK257、SK258、SK259、SK260、 SK261 実測図	763	Fig.521	SK332(2)、SK334、SK335、SK336、 SK337、SK338 実測図
Fig.502	SK262、SK263、SK264、SK265 実測図	764	Fig.522	SK339、SK340、SK341、SK342、 SK343 実測図
Fig.503	SK266、SK268、SK269、SK270、 SK271 実測図	765	Fig.523	SK344、SK345、SK346、SK347、 SK348、SK350 実測図
Fig.504	SK272、SK273、SK274、SK275、 SK276、SK277 実測図	768	Fig.524	SD1、SD2、SD3 実測図
Fig.505	SK278、SK279、SK280 実測図	771	Fig.525	SD4、SD5、SD6、SD7 実測図
Fig.506	SK281、SK282、SK283、SK284、 SK285 実測図	774	Fig.526	SD8、SD9、SD10 実測図
Fig.507	SK286、SK287、SK288、SK289、 SK290 実測図	775	Fig.527	SD11、SD12、SD13、SD14、SD15、 SK349 実測図
Fig.508	SK291、SK292、SK293、SK294 実測図	778	Fig.528	SD16、SD17、SD19 実測図
Fig.509	SK295、SK296、SK297、SK298、 SK299 実測図	781	Fig.529	SD18、SD20 実測図
Fig.510	SK300、SK301、SK302、SK303、 SK304 実測図	784	Fig.530	SD21、SD22、SD23、SD24、SD25、 SD26 実測図
Fig.511	SK305、SK306、SK307、SK308、 SK310 実測図	787	Fig.531	SD27、SD29、SD31 実測図
Fig.512	SK309、SK311、SK312、SK313、 SK314 実測図	790	Fig.532	SD28 実測図
			Fig.533	099 地区ピット群遺構実測図
			Fig.534	遺構外遺物 土器(1)実測図
			Fig.535	遺構外遺物 土器(2)実測図
			Fig.536	遺構外遺物 土器(3)実測図
			Fig.537	遺構外遺物 土器(4)実測図
			Fig.538	遺構外遺物 土器(5)実測図
			Fig.539	遺構外遺物 土器(6)実測図
			Fig.540	遺構外遺物 土器(7)実測図
			Fig.541	遺構外遺物 中世陶器実測図

Fig.542	遺構外遺物	土製品実測図	827	Fig.578	縄文土器(20)実測図	873
Fig.543	遺構外遺物	石製品実測図	828	Fig.579	縄文土器(21)実測図	874
Fig.544	遺構外遺物	金属器等(1)実測図	829	Fig.580	縄文土器(22)実測図	875
Fig.545	遺構外遺物	金属器等(2)実測図	830	Fig.581	縄文土器(23)実測図	876
Fig.546	遺構外遺物	金属器等(3)実測図	831	Fig.582	縄文土器(24)実測図	877
Fig.547	遺構外遺物	金属器等(4)実測図	832	Fig.583	縄文土器(25)実測図	878
Fig.548	遺構外遺物	金属器等(5)実測図	833	Fig.584	縄文土器(26)実測図	879
Fig.549	遺構外遺物	金属器等(6)実測図	834	Fig.585	縄文土器(27)実測図	880
Fig.550	遺構外遺物	金属器等(7)実測図	835	Fig.586	縄文土器(28)実測図	881
Fig.551	遺構外遺物	金属器等(8)実測図	836	Fig.587	縄文土器(29)実測図	882
Fig.552	遺構外遺物	金属器等(9)実測図	837	Fig.588	縄文土器(30)実測図	883
Fig.553	遺構外遺物	金属器等(10)、玉類 実測図	838	Fig.589	縄文土器(31)実測図	884
Fig.554	SW80 地区遺物(1)実測図		840	Fig.590	縄文土器(32)実測図	885
Fig.555	SW80 地区遺物(2)実測図		841	Fig.591	縄文土器(33)実測図	886
Fig.556	SW80 地区遺物(3)実測図		842	Fig.592	縄文土器(34)実測図	887
Fig.557	SW80 地区遺物(4)実測図		843	Fig.593	縄文土器(35)実測図	888
Fig.558	縄文土器出土遺構		845	Fig.594	縄文土器(36)実測図	889
Fig.559	縄文土器(1)実測図		854	Fig.595	縄文土器(37)実測図	890
Fig.560	縄文土器(2)実測図		855	Fig.596	縄文土器(38)実測図	891
Fig.561	縄文土器(3)実測図		856	Fig.597	縄文土器(39)実測図	892
Fig.562	縄文土器(4)実測図		857	Fig.598	縄文土器(40)実測図	893
Fig.563	縄文土器(5)実測図		858	Fig.599	縄文土器(41)実測図	894
Fig.564	縄文土器(6)実測図		859	Fig.600	縄文土器(42)、土製品実測図	895
Fig.565	縄文土器(7)実測図		860	Fig.601	包含層出土土器の分布 1(捺糸文系)	896
Fig.566	縄文土器(8)実測図		861	Fig.602	包含層出土土器の分布 2(捺糸文系・ 無文)	896
Fig.567	縄文土器(9)実測図		862	Fig.603	包含層出土土器の分布 3(沈線文系)	897
Fig.568	縄文土器(10)実測図		863	Fig.604	包含層出土土器の分布 4(条痕文系)	897
Fig.569	縄文土器(11)実測図		864	Fig.605	包含層出土土器の分布 5(羽状縄 文系)	898
Fig.570	縄文土器(12)実測図		865	Fig.606	包含層出土土器の分布 6(浮島・興 津式)	898
Fig.571	縄文土器(13)実測図		866	Fig.607	包含層出土土器の分布 7(諸磯式)	899
Fig.572	縄文土器(14)実測図		867	Fig.608	包含層出土土器の分布 8(加曾利B式・ 曾谷式)	899
Fig.573	縄文土器(15)実測図		868	Fig.609	包含層出土礫の分布	900
Fig.574	縄文土器(16)実測図		869	Fig.610	縄文石製品(1)実測図	901
Fig.575	縄文土器(17)実測図		870			
Fig.576	縄文土器(18)実測図		871			
Fig.577	縄文土器(19)実測図		872			



Fig.611	縄文石製品(2)実測図	902
Fig.612	縄文石製品(3)実測図	903
Fig.613	縄文石製品(4)実測図	904
Fig.614	縄文石製品(5)実測図	905
Fig.615	縄文石製品(6)実測図	906
Fig.616	縄文石製品(7)実測図	907
Fig.617	縄文石製品(8)実測図	908
Fig.618	縄文石製品(9)実測図	909
Fig.619	縄文石製品(10)実測図	910
Fig.620	縄文石製品(11)実測図	911
Fig.621	縄文石製品(12)実測図	912
Fig.622	縄文石製品(13)実測図	913
Fig.623	縄文石製品(14)実測図	914
Fig.624	縄文石製品(15)実測図	915
Fig.625	縄文石製品(16)実測図	916
Fig.626	縄文石製品(17)実測図	917
Fig.627	縄文石製品(18)実測図	918
Fig.628	縄文石製品(19)実測図	919
Fig.629	縄文石製品(20)実測図	920
Fig.630	縄文石製品(21)実測図	921
Fig.631	縄文石製品(22)実測図	922
Fig.632	縄文石製品(23)実測図	923
Fig.633	縄文石製品(24)実測図	924
Fig.634	縄文石製品(25)実測図	925
Fig.635	縄文石製品(26)実測図	926

## 第3節 その他の遺構と遺物

### 1 土壌・土坑

#### SK1 TJ地区 (Fig.449、PL.54)

F11-66 (新Grid) 付近に位置する地下式土壌である。周囲には同時期の遺構は確認出来ず、単独で位置する。また、いわゆる方形周溝状遺構のような方形区画は伴わない。

本遺構は、発掘調査時点ではTJ-2号土壌墓として呼称されている。

遺構は竪坑部分と有天井の横坑部分で構成される。平面形状は、竪坑部は長楕円形を呈し、規模は確認面で2.24m×1.52m、底面は不整形を呈し、1.16m×0.84mを測る。確認面からの深さは、1.50mを測る。断面形は長軸方向、短軸方向ともに逆台形だが、長軸方向がより大きく開口する。

有天井部の平面形は、扇形もしくはイチジク形で、奥行きを主軸方向とした主軸長は、0.84m、副軸長は0.96mを測る。断面形状はほぼ長方形だが、竪坑からの接続坑から奥壁側へは段状に下がった面が作られている。天井から底面までは0.36mで、竪坑底から0.30m上位に作られている。底面は平坦だが、主軸方向に幅0.09m深さ0.03mの直線状の溝が貫通する。方位は長軸方向からN-12°-Wである。埋葬施設とみられるが狭小であるため、火葬骨もしくは再葬骨を納めたとみられるが、骨の遺存は認められない。

#### SK2 TJ地区 (Fig.449、PL.54)

F15-46 (新Grid) 付近に位置する地下式土壌である。周囲には同時期の遺構は確認出来ず、単独で位置する。また、いわゆる方形周溝状遺構のような方形区画は伴わない。

本遺構は、発掘調査時点ではTJ-3号土壌墓として呼称されている。

遺構は竪坑部分と一段上位に作られた方形坑で構成される。平面形状は、竪坑部は不整形長方形を呈し、規模は確認面で2.84m×1.18m、底面は不整形長方形を呈し、1.64m×0.84mを測る。確認面からの深さは、0.96mを測る。断面形は長軸方向では、底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がるのに対し、短軸方向では左右不均等の逆台形を示す。

竪坑の一段上位に作られた玄室とみられる方形坑の平面形は、ほぼ正方形で、奥行きを主軸方向とした主軸長は(0.78)m、副軸長は0.70mを測る。断面形状は歪んではいるが、ほぼ正方形を呈する。天井は認められない。確認面から底面までは0.69mで、竪坑底から0.18m上位に作られている。竪坑底面は平坦だが、主軸方向に幅0.06m、深さ0.03mの直線状の溝が認められる。竪坑、玄室部共通の方位は、長軸方向からN-40°-Wである。玄室部は狭小であるため、火葬骨もしくは再葬骨を納めたとみられるが、骨の遺存は認められない。

#### SK3 064地区 (Fig.15)

E4-83 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に、周辺で群集する土坑群からはやや離れて単独で位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されておらず、全体図に平面形のみが記されている。

平面形状は、不整楕円形で、規模は計測不能、記録類が限られ詳細は不明である。そのため、本報告でも全体図のみの図示にとどまる。

遺物は確認できない。

#### SK4 064地区 (Fig.15)

E4-56 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に群集して位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されておらず、全体図に平面形のみが記されている。平面形状は、隅丸方形で、規模は計測不能、記録類が限られ詳細は不明である。そのため、本報告でも全体図のみの図示にとどまる。

遺物は確認できない。

#### SK5 064地区 (Fig.15、PL.54)

E4-38 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に群集して位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されていないが、全体図に平面形が記されており、また、写真からは本遺構がいわゆる側壁扶込み土壇であるとわかる。平面形状は、等高線方向に長い不整楕円形で、規模は計測不能、記録類が限られ詳細は不明であるため、本報告では全体図のみの図示にとどまる。遺物は確認できない。

#### SK6 064地区 (Fig.15)

E4-18 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に、群集して位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されておらず、全体図に平面形のみが記されている。平面形状は、周囲に掘り込みが多く不明瞭であるものの、不整形で、規模は計測不能。しかし記録類が限られ詳細は不明であるため、本報告でも全体図のみの図示にとどまる。遺物は確認できない。

#### SK7 064地区 (Fig.15)

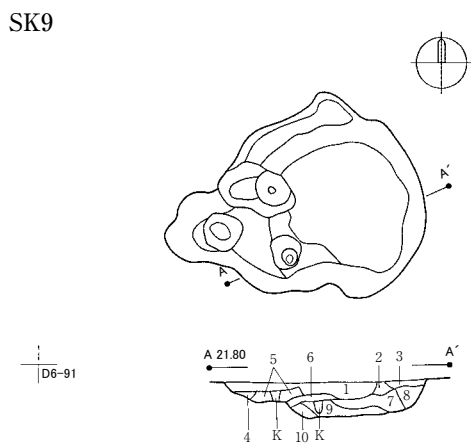
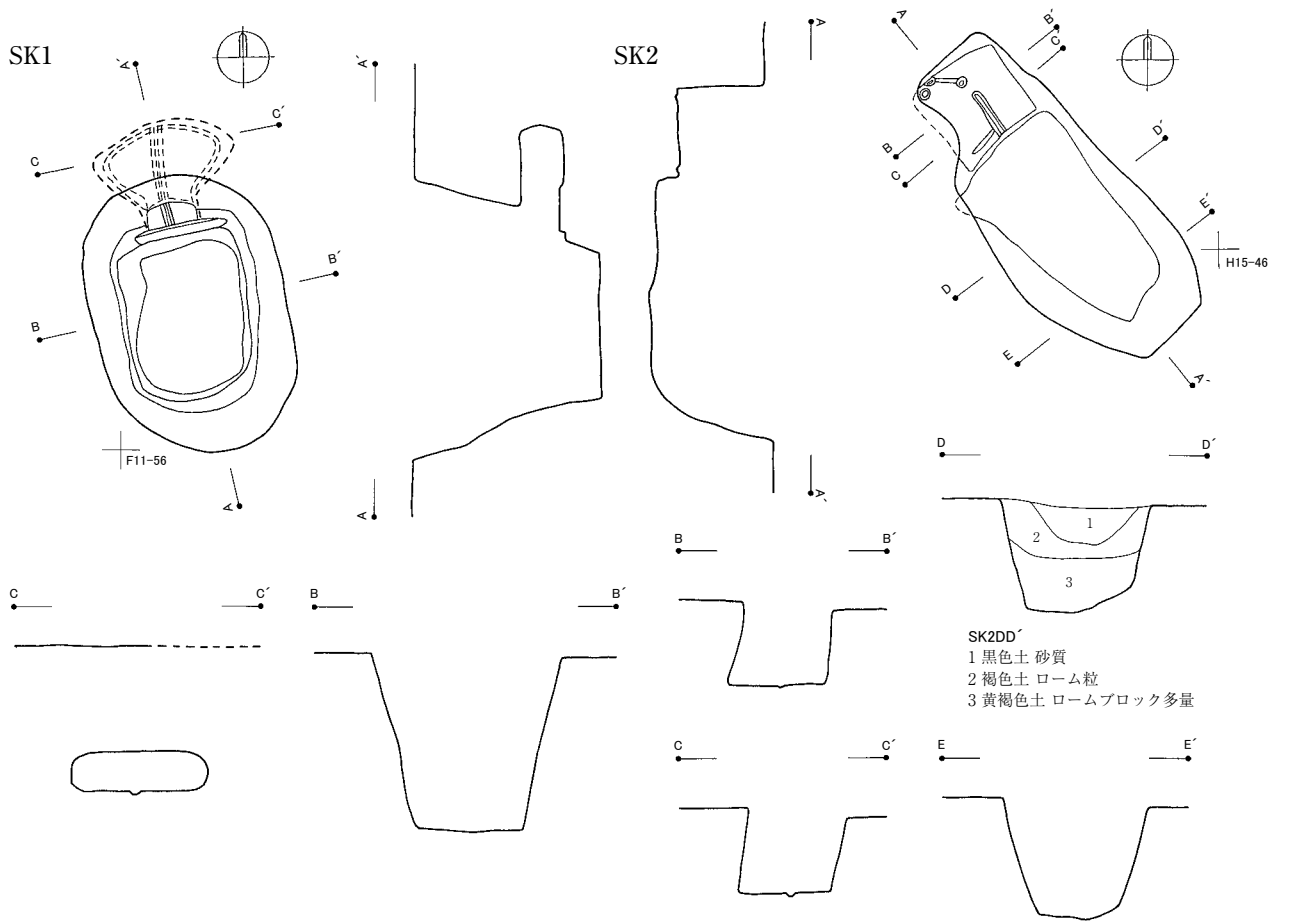
E5-00 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に、群集して位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されておらず、全体図に平面形のみが記されている。平面形状は不整楕円形で、規模は計測不能、記録類が限られ詳細は不明であるため、本報告でも全体図のみの図示にとどまる。遺物は確認できない。

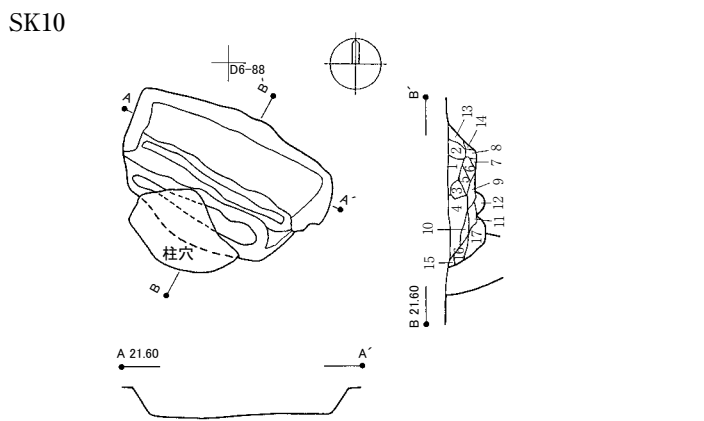
#### SK8 064地区 (Fig.15、PL.54)

D5-75 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側に傾斜する斜面に、周辺で群集する土坑群からはやや離れて位置する。

本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されていないが、全体図に平面形が記されており、また、写真から土壇である可能性が高い。平面形状は、長方形で、規模は計測不能、記録類が限られ詳細は不明であるため、本報告でも全体図のみの図示にとどまる。遺物は確認できない。



- SK9AA'**
- 1 暗灰褐色土 ローム粒若干 やや軟質
  - 2 暗褐色土 やや黄色土 硬質
  - 3 暗褐色土 ロームを疎らに含む
  - 4 黄褐色土 ローム 軟質
  - 5 暗褐色土 やや明るい やや軟質
  - 6 暗褐色土 やや灰色土 やや軟質
  - 7 暗灰褐色土 硬質
  - 8 暗黄褐色土 ローム 硬質
  - 9 黄灰褐色土 ローム 硬質
  - 10 暗灰褐色土 ローム 軟質



- SK10BB'**
- 1 暗褐色土 5層よりやや黒い ローム粒
  - 2 暗褐色土 1層より黒い ローム粒
  - 3 暗褐色土 ローム粒多量 少し硬質
  - 4 暗褐色土 1層より黒い ローム粒若干
  - 5 暗褐色土 ローム粒
  - 6 暗褐色土 ローム粒多量
  - 7 暗褐色土 ローム粒
  - 8 暗褐色土 ローム粒 硬質
  - 9 暗褐色土 5・6層より黒い ローム粒
  - 10 暗褐色土 ローム粒多量 軟質
  - 11 暗褐色土 10層より黒い 9層よりやや黒い 12層よりローム粒少ない 軟質
  - 12 黒色土 ローム 軟質
  - 13 暗褐色土 炭化粒、焼土粒、ローム粒多量
  - 14 暗褐色土 ローム粒
  - 15 暗褐色土 4層より黒い ローム粒
  - 16 暗褐色土 17層より黒い ローム粒
  - 17 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒 硬質

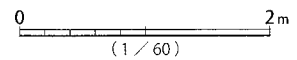


Fig.449 SK1、SK2、SK9、SK10 実測図

### SK9 064地区 (Fig.449)

D6-91 (新Grid) 付近に位置する土坑である。竪穴建物跡を掘り込んで単独で位置する。北側に小型のいわゆる方形周溝状遺構が位置するが、関係性があるか検証できない。

本遺構は、発掘調査時点では064-SK207として呼称されている。

平面形状は、不整楕円形で、規模は確認面で2.04m×1.68m、底面は不整楕円形を呈し、1.36m×0.76mを測る。確認面からの深さは、0.27mを測る。断面形は長軸方向では、底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。底面は比較的平坦。方位は長軸方向からN-75°-Eである。出土遺物は無い。

### SK10 064地区 (Fig.449)

D6-88 (新Grid) 付近に位置する側壁抉込み土坑である。周囲にはSK9・11があるが、散漫なまとまりを呈する。竪穴建物跡を掘り込んで位置し、南西側で攪乱を受ける。

本遺構は、発掘調査時点では064-SK938号として呼称されている。

遺構は竪坑部分と一段下位に作られた不整長楕円坑で構成される。平面形状は、竪坑部は不整長方形を呈し、規模は確認面で1.60m×(1.12)m、底面は不整長方形を呈し、計測不能×0.36mを測る。確認面からの深さは、0.24mを測る。断面形は長軸・短軸方向で、底面から緩やかに立ち上がる。

竪坑の一段下に作られた不整長楕円坑は、長軸長、1.24m、短軸長(0.42)mを測る。断面形状は底面に凹凸が認められる。天井は認められない。確認面から底面までは0.30mで、竪坑底から0.06m下位に作られている。長軸方位はN-64°-Wである。遺物は出土していない。

帰属時期は不明である。

### SK11 064地区 (Fig.15、PL.55)

E6-08 (新Grid) 付近に位置する土坑である。SK9・10散漫なまとまりを呈する。竪穴建物跡を掘り込んで位置する。

本遺構は、発掘調査時点で064-SK206として呼称されている。が全体図に図示され、写真は残るが他の記録類が認められないため、詳細は不明である。本報告では全体図への図示にとどまる。

平面形状は、不整形で、規模は計測不能。2遺構が重複している可能性もある。出土遺物は無い。

### SK12 064地区 (Fig.450、PL.55)

E6-45 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側にSK11が位置するが、散漫なまとまりを呈する。重複遺構は無い。

本遺構は、発掘調査時点で064-SK932号として呼称されている。

平面形状は、円形で、規模は1.25m×1.20m、確認面からの深さは、0.63m、を測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Wで、底面は円形でほぼ平坦である。断面形状は、平坦な底面からは緩く立ち上がるが、側面は垂直方向に立つ。出土遺物は無い。

### SK13 064地区 (Fig.450、PL.55)

E8-80 (新Grid) 付近に位置する土坑である。SM-の墳丘内に単独で位置する。発掘調査および整理

段階でSM-の埋葬施設ではないと判断されている。東側で攪乱を受けている。

本遺構は、発掘調査時では遺構番号は付与されていない。

平面形状は、長方形で、規模は(1.65)m×(0.95)mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Eである。底面は長方形を呈するが、断面形状は記録類が少なく詳細不明である。

出土遺物は無い。

#### **SK14 064地区 (Fig.450)**

G7-08 (新Grid) 付近に位置する土坑である。周囲に土坑はなく、単独で位置する。竪穴建物跡を北西部で掘り込んでいる。

本遺構は、発掘調査時では064-SK940と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は計測不能×1.77m、確認面からの深さは、1.02mを測る。主軸方位は長軸方向からN-57°-Wである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈する。木棺痕は検出されていない。出土遺物は無い。

#### **SK15・16 064地区 (Fig.450、PL.55)**

F7-82 (新Grid) 付近に位置する土坑である。周囲に土坑は無く、単独で位置する。南に隣接する竪穴建物跡との関連性は否めない。

本遺構は、発掘調査時点で064-SX909、910として呼称されている。

平面形状は、共に円形で、規模はSK15が0.70m×0.70m、確認面からの深さ0.12m、SK16が0.45m×0.40m、確認面からの深さは0.30mを測る。底面は共に円形でほぼ平坦。断面形状は、いずれも底面から緩やかに立ち上がり、開き気味に開口する。覆土中に焼土が含まれる。

出土遺物は無い。

#### **SK17 064地区 (Fig.450、PL.55)**

F7-40 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北側にSK18が位置する。竪穴建物跡を掘り込んでいるものとみられる。

本遺構は、発掘調査時には064-SK936と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は1.00m×0.60m、確認面からの深さは、0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-56°-Wである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向で長方形を呈し、底面から明確に立ち上がる。

出土遺物は無い。

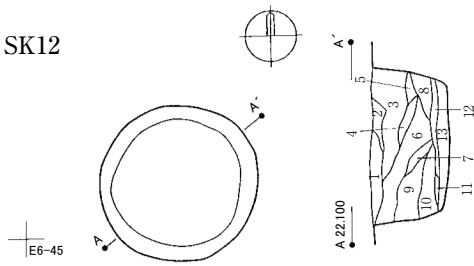
#### **SK18 064地区 (Fig.450、PL.55)**

F7-40 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南側にSK17が位置する。

本遺構は、発掘調査時には064-SK937と呼称されている。

平面形状は、不整形で、規模は1.60m×1.10m、確認面からの深さは、0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-65°-Wである。底面は不整長方形で、平坦である。断面形状は、短軸方向では胴張の

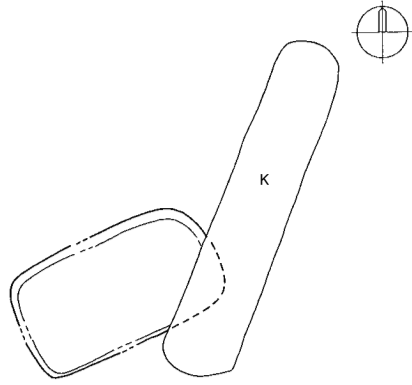
SK12



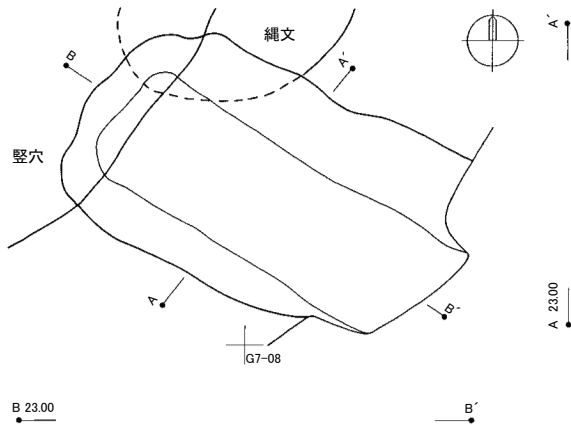
SK12AA'

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 2 暗褐色土 1層より黒い ローム粒
- 3 暗褐色土 2層より黒い ローム粒多量、黒色土粒
- 4 暗褐色土 ローム粒若干
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 1層よりやや黒い ローム粒多量 硬質
- 7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 8 暗褐色土 6層より黒い ローム粒 硬質
- 9 - ロームブロック・ローム粒・黒色土粒混合層 軟質
- 10 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒 硬質
- 11 暗褐色土 骨粉
- 12 - 骨粉の集中層
- 13 暗褐色土 ローム若干

SK13

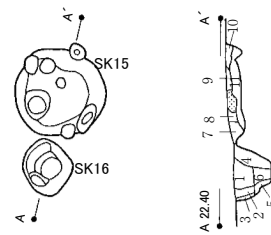


SK14



SK15・SK16

F7-82

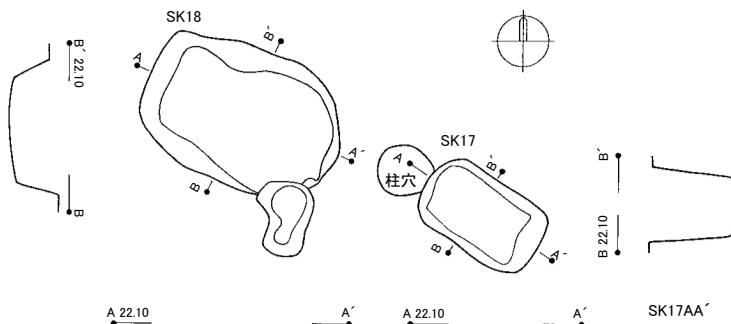


SK15・16AA'

- 1 暗褐色土 ローム粒 硬質
- 2 - 暗褐色土・ローム粒の混合層
- 3 暗褐色土 ローム粒多量 軟質
- 4 暗褐色土 1層よりローム粒多い
- 5 - ロームブロック
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土 ローム粒
- 9 暗褐色土 焼土
- 10 暗褐色土 黒色土
- 11 暗褐色土 ローム粒

SK17・SK18

F7-40



SK17AA'

- 1 灰茶褐色土 ローム粒を疎らに含む
- 2 茶褐色土 ロームブロック
- 3 灰褐色土 ローム粒を疎らに含む
- 4 暗茶褐色土 ロームブロック・ローム粒多量、黄褐色土 硬質
- 5 暗褐色土 ローム粒を疎らに含む
- 6 暗茶褐色土 ローム粒を疎らに含む
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多量

SK19

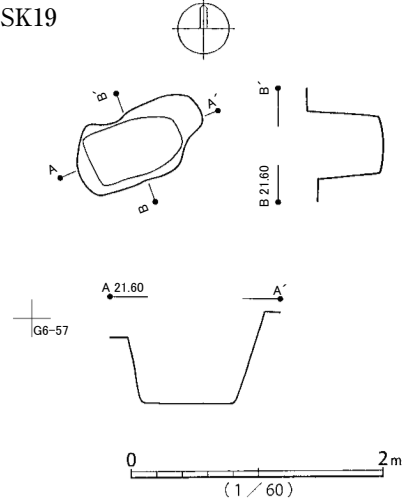


Fig.450 SK12、SK13、SK14、SK15、SK16、SK17、SK18、SK19 実測図

逆台形で、底面から明瞭に立ち上がる。

出土遺物は無い。

#### SK19 064地区 (Fig.450)

G6-57 (新Grid) 付近に位置する土坑である。周囲に土坑は認められず、単独で位置する。

本遺構は、発掘調査時には064-SK935と呼称されている。

平面形状は、不整形で、規模は1.10m×0.55m、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は不整長方形で、平坦である。断面形状は、短軸方向では長方形、長軸方向では逆台形を呈し、底面から明瞭に立ち上がる。

出土遺物は無い。

#### SK20 064地区 (Fig.452、PL.56)

G6-02 (新Grid) 付近に位置する土坑である。近接して土坑は無く、単独で位置する。

本遺構は、発掘調査時には遺構番号は付与されていないが、記録類には「お棺」とある。

遺構は竪坑と、それに付随するステップ状の掘り込みで構成される。平面形状は方形で、規模は1.40m×1.30m、確認面からの深さは0.51mを測る。ステップ状の掘り込みは、平面形が隅丸方形で、0.34m×0.60m、確認面からの深さは0.33mを測る。この掘り込みを軸方向とした主軸方位はN-82°-Eである。底面は方形で外周部に深さ0.1mの溝が廻る。断面形状は、長軸方向で逆台形を呈し、底面から緩やかに立ち上がる。

出土遺物は無い。

#### SK21 064地区 (Fig.452、PL.56)

G5-28 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南側のSK21～30の一群に近接して位置する。

本遺構は、発掘調査時には064-SK927と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は1.85m×1.50m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-63°-Wである。底面は長方形で緩やかな起伏が認められる。断面形状は、長軸・短軸方向とも方形を呈し、底面から明瞭に立ち上がる。木棺痕跡は認められない。

出土遺物は無い。

#### SK22 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する土坑である。本遺構の西側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構はこの密集した中のSK23・27と重複するが、新旧関係は不明。規模からSK23に伴う可能性もある。発掘調査時はSK910～914と呼称されている。

平面形状は、現状では不整形を呈するが、本来の形状は復元できない。現状での規模は計測不能、確認面からの深さは1mを測る。

出土遺物は無い。



### SK23 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。発掘調査時にはSK910～914と呼称されている。本遺構の西から北側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構・土坑が8基密集した形で位置する。本遺構はこの群中のほぼ中心に位置し、遺構の重複が激しい。SK22、24～29の7遺構と重複し、新旧関係は土層断面図から、SK24より新しく、SK25・27・28より古い。SK22・26との関係は不明だが、SK22は本遺構に付属する可能性も否めない。

平面形状は、幅広の長方形で、規模は2.30m×2.20m、確認面からの深さは1.08mを測る。主軸方位は長軸方向からN-25°-Eである。底面は幅広の長方形でほぼ平坦で、長軸線北北よりに深さ0.05mのピットが1ヶ所認められる。断面形状は短軸方向で、長方形に近い逆台形を呈し、底面からの立ち上がりは鋭い。覆土中には若干の炭化物粒が認められるが、焼土は認められない。

出土遺物は無い。

### SK24 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。本遺構の西から北側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構はこの群中の北西端に位置し、東・南側でSK23・25と重複する。新旧関係は土層断面図から本遺構が古い。新旧関係の判然としないSK22・26を除けば、群中で最も古いことになる。発掘調査時には064-SK910～914と呼称されている。

平面形状は、他遺構によりプランが乱れているが、現状から長方形もしくは正方形とみられ、規模は計測不能、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は求め難いが、重複のない2辺は周辺遺構のそれと近似した角度を示している。底面は長方形でほぼ平坦である。断面形状は、長方形で、底面からは鋭く立ち上がる。覆土には特徴的な状況は観察されていない。

出土遺物は無い。

### SK25 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。本遺構の西から北側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構はこの群中の西端に位置し、SK23・24・26と重複する。新旧関係は土層断面図からSK23・24より新しいが、SK26に対しては記録類が無く不明である。発掘調査時には064-SK910～914と呼称されている。

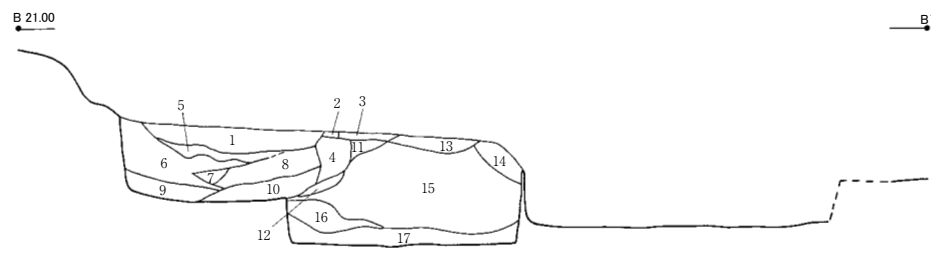
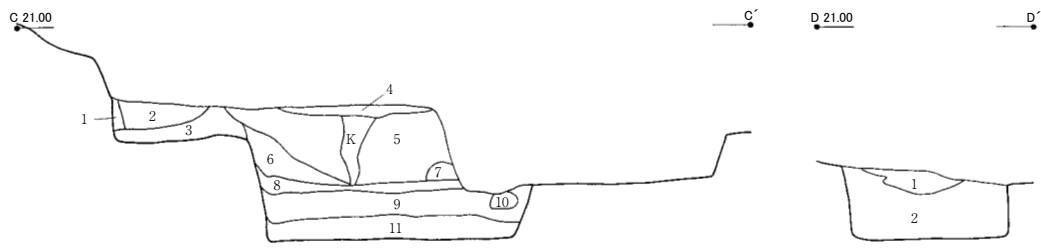
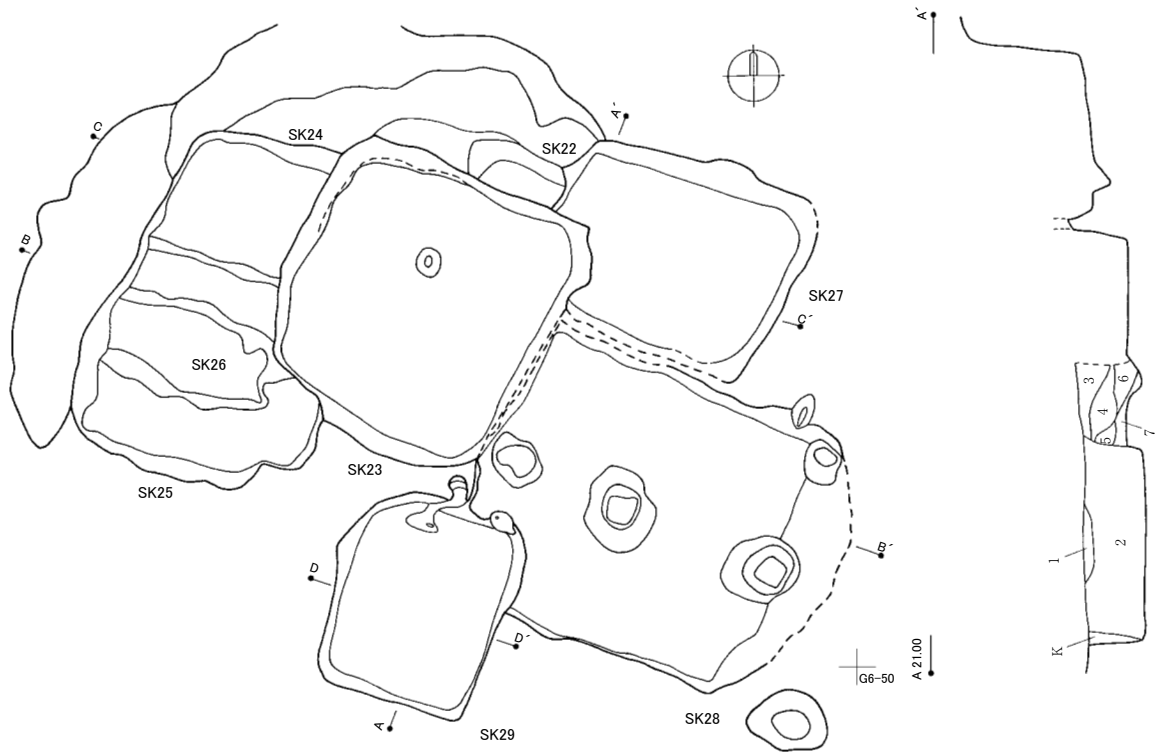
平面形状は、SK23によりプランが乱れているが、不整長方形を復元でき、規模は(2.00)m×1.75m、確認面からの深さは、0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は鍋底形に中央に向かって傾斜する。断面形状は、底面から丸みを帯びて垂直方向立ち上がっている。覆土には特徴的な状況は観察されていない。主軸方位が近似することからSK26は本遺構に帰属する可能性もある。

出土遺物は無い。

### SK26 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する土坑である。西から北側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認め

SK22・SK23・SK24・SK25・SK26・SK27・SK28・SK29



SK22 ~ 29AA'

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 2 一炭の小片若干、ロームブロック・ローム粒 ロームブロック・ローム粒主体の層
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒
- 5 暗褐色土 白色土粘土粒
- 6 暗褐色土 黒色土ブロック
- 7 一黒色土粒若干 ローム粒・ロームブロック主体の層

SK22 ~ 29BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 2 黒色土 ローム粒
- 3 一ローム粒主体の層
- 4 黄色土 ロームブロック・ローム粒主体
- 5 一黒色土ブロック ロームブロック・ローム粒主体
- 6 黄色土 ロームブロック、ローム粒集中
- 7 一ローム粒・ローム小ブロック、黒色土
- 8 一ローム粒、黒色土粒
- 9 一ロームブロック、黒色土粒 ローム粒主体の層
- 10 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒 (部分的にローム粒集中)
- 11 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 12 黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロック
- 13 一黒色土、ロームブロック・ローム粒 ロームブロック・ローム粒主体の層
- 14 黄色土 ローム粒集中
- 15 黄褐色土 黒色土粒若干、ロームブロック・ローム粒集中
- 16 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒
- 17 一ロームブロック・ローム粒主体の層

SK22 ~ 29CC'

- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色土 黒色土粒若干、ローム粒・ロームブロック
- 3 黒色土 ローム粒・ロームブロック
- 4 黒色土 ローム粒若干
- 5 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土
- 6 黄褐色土 ローム粒多量 5層より黒色土少量
- 7 一ローム粒主体の層
- 8 一ローム粒・ロームブロック主体の層
- 9 一黒色土若干 ロームブロック・ローム粒主体の層
- 10 一ロームブロック
- 11 一ロームブロック多量・ローム粒

SK22 ~ 29DD'

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 2 一炭の小片若干、ロームブロック・ローム粒 ロームブロック・ローム粒主体の層

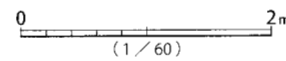


Fig.451 SK22、SK23、SK24、SK25、SK26、SK27、SK28、SK29 実測図

られ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。SK25と重複するが、記録類が無く、新旧関係は不明である。本遺構は、発掘調査時では064-SK910～914として呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.50m×0.80mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面の平面形状は不整形であるが、断面形状・覆土の状況は記録類が無く不明である。主軸方位が近似することから、SK25に帰属する可能性がある。

出土遺物は無い。

#### SK27 064地区 (Fig.451)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。西側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構はこの群中の北東端に位置する。西から南側でSK22・23・28と重複し、新旧関係は、土層断面図からSK23より新しいが、SK22・28に対しては不明である。発掘調査時点では064-SK916として呼称されている。

平面形状は、隅丸の幅広長方形で、規模は2.00m×(1.55)m、確認面からの深さは、0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は隅丸の幅広長方形でほぼ平坦であるが、長軸方向に水平、短軸方向では南側に10°傾斜する。断面形状は方形で、底面からは丸みを帯びて垂直方向に立ち上がっている。覆土の状況は不明。

出土遺物は無い。

#### SK28 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。西側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構は群中の西端に位置する。西側でSK23・27・29と重複し、新旧関係は、土層断面図からSK29より古いが、SK23・27に対しては不明である。最古とみられるSK24とは遺構の切り合い状況からは検証出来ないが、区画の掘り込みとの位置関係から、これに先行する可能性も否めない。発掘調査時点では064-SK917と呼称されている。

平面形状は東辺が膨らむと推定されるが、ほぼ幅広の長方形で、規模は(3.00)m×2.25m、確認面からの深さは、0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-67°-Wである。底面は幅広の長方形で、平坦・水平である。長軸方向に3ヶ所のピットが並び、深さは西側から0.13m、0.67m、0.62mを測る。断面形状は長方形で、長軸方向では底面から丸みを帯びて垂直方向に立ち上がっている。覆土の状況は不明。群中で最も規模が大きく、3連ピットを伴うことから、周辺の土坑とは一線を画す。

出土遺物は無い。

#### SK29 064地区 (Fig.451、PL.56)

G6-50 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。西から北側に小規模の台地整形形状の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構は群中で南側に位置する。北東側でSK28と重複し、土層断面図から本遺構が新しい。発掘調査時点では064-SK918として呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は(1.70)m×1.35m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長

軸方向からN-18°-Eである。底面は長方形で平坦・水平である。断面形状は長方形で、底面から丸みを帯びて垂直方向に立ち上がっている。覆土からは人為的な埋戻しが推定される。群中で最も小規模とみられる。

出土遺物は無い。

### SK30 064地区 (Fig.452)

G5-67 (新Grid) 付近に位置する方形竪穴状遺構である。西から北側に小規模の台地整形の掘り込みが認められ、この付近に方形竪穴状遺構が密集した形で位置する。本遺構は群中では唯一重複がなく、南端に単独で位置する。発掘調査時点では064-SK922として呼称されている。

平面形状は、長方形であるが歪んだプランである。規模は2.25m×1.30m、確認面からの深さは、0.87mを測る。主軸方位は長軸方向からN-23°-Eである。底面は不整長方形だが、南辺から東辺にかけてかぎ型にテラス状の段を持つ。断面形状は、長・短軸方向で逆台形呈し、底面から鋭く立ち上がって直線的に開口する。南辺両隅にピットが認められるが、本遺構に帰属するかは不明である。

出土遺物は無い。

SK22～30は、位置関係、軸方位（長・短を無視して、北東方向の軸を主軸とした場合、65°～72°と角度差7°に収まる）において極めて強い関連性が認められる。

### SK31 064地区 (Fig.452、PL.56)

G5-55 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南側に下る緩斜面に位置する位置する。西側にSK32が近接するが新旧関係は不明。本遺構は、発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。

平面形状は不整長方形で、規模は2.10m×(1.75)m、確認面からの深さは0.19mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。底面は長方形でほぼ平坦・水平である。断面形状は、短軸方向で逆台形、長軸方向では長方形を呈するが、緩斜面に位置するため、遺構上部および南側は検出されていないとみられる。底面からは丸みを帯びて立ち上がっている。北東隅付近に掘り込みがあるが、土の堆積状況は本体とは連続しない。西側には隅付近にピットが2ヶ所認められる。

出土遺物は無い。

### SK32 064地区 (Fig.452、PL.56)

G5-55 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南側に下る緩斜面に位置する位置する。東側にSK31が近接するが新旧関係は不明である。発掘調査時点では064-SK920として呼称されている。

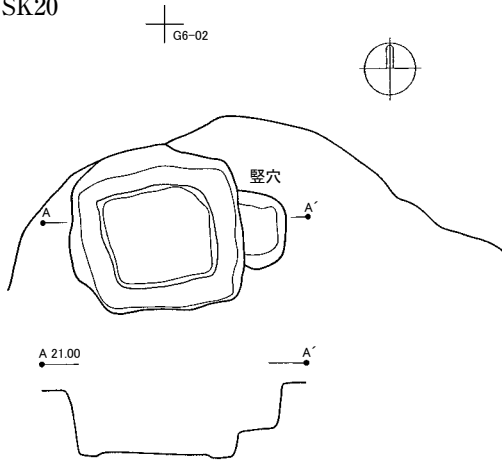
平面形状は、不整形で、規模は1.20m×1.20m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Wである。底面は不整形で中央が深く、外周は僅かに浅い。断面形状はなべ底型で、底部からの立ち上がりは不明瞭である。覆土の状況から、短期間に埋没した状況がうかがえる。

出土遺物は無い。

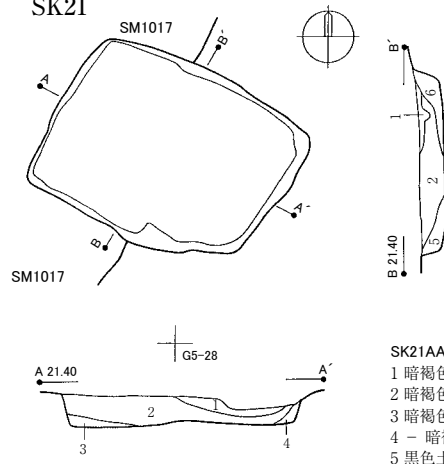
### SK33 064地区 (Fig.15)

G4-18 (新Grid) 付近に位置する地下式土壇である。発掘調査時点では遺構番号は付与されてい

SK20

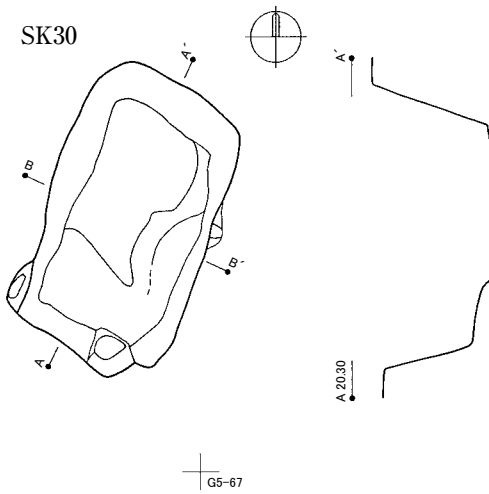


SK21



- SK21AA'・BB'
- 1 暗褐色土 ローム粒
  - 2 暗褐色土 黒色土粒多量、ローム粒若干
  - 3 暗褐色土
  - 4 - 暗褐色土混じるローム粒主体層
  - 5 黒色土 ローム粒
  - 6 黒色土 ローム粒多量

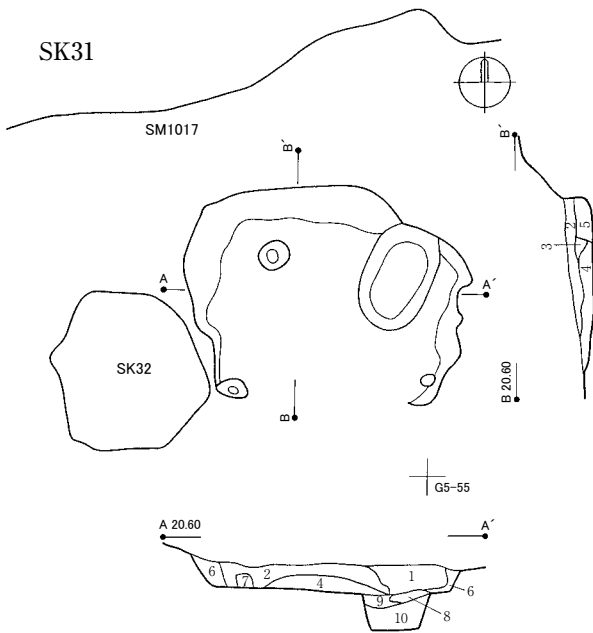
SK30



- SK31AA'・BB'
- 1 黒色土 ローム粒
  - 2 暗褐色土 ローム粒多量
  - 3 暗褐色土 4・5層よりローム粒多い軟質
  - 4 暗褐色土 ローム小ブロック
  - 5 暗褐色土 やや黒い ローム粒
  - 6 - ロームブロック・ローム粒主体層
  - 7 暗褐色土 ローム粒 軟質
  - 8 - ロームブロック
  - 9 暗褐色土 ローム小ブロック
  - 10 黒色土 ローム粒

- SK32AA'
- 1 暗褐色土 ローム粒多量・ローム小ブロック若干

SK31



SK32

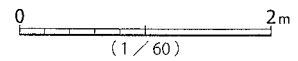
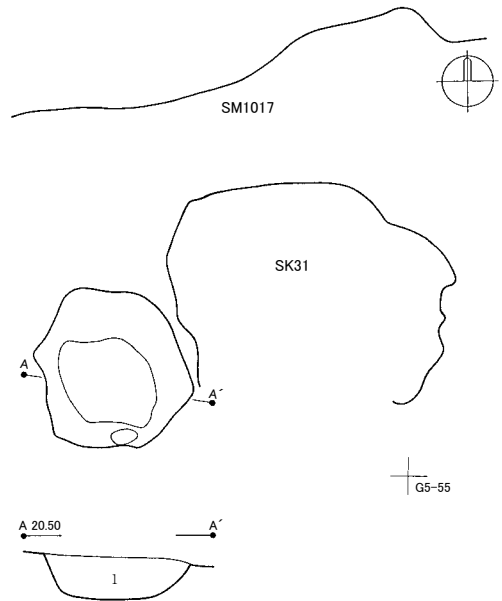


Fig.452 SK20、SK21、SK30、SK31、SK32 実測図

SK34・SK35・SX1

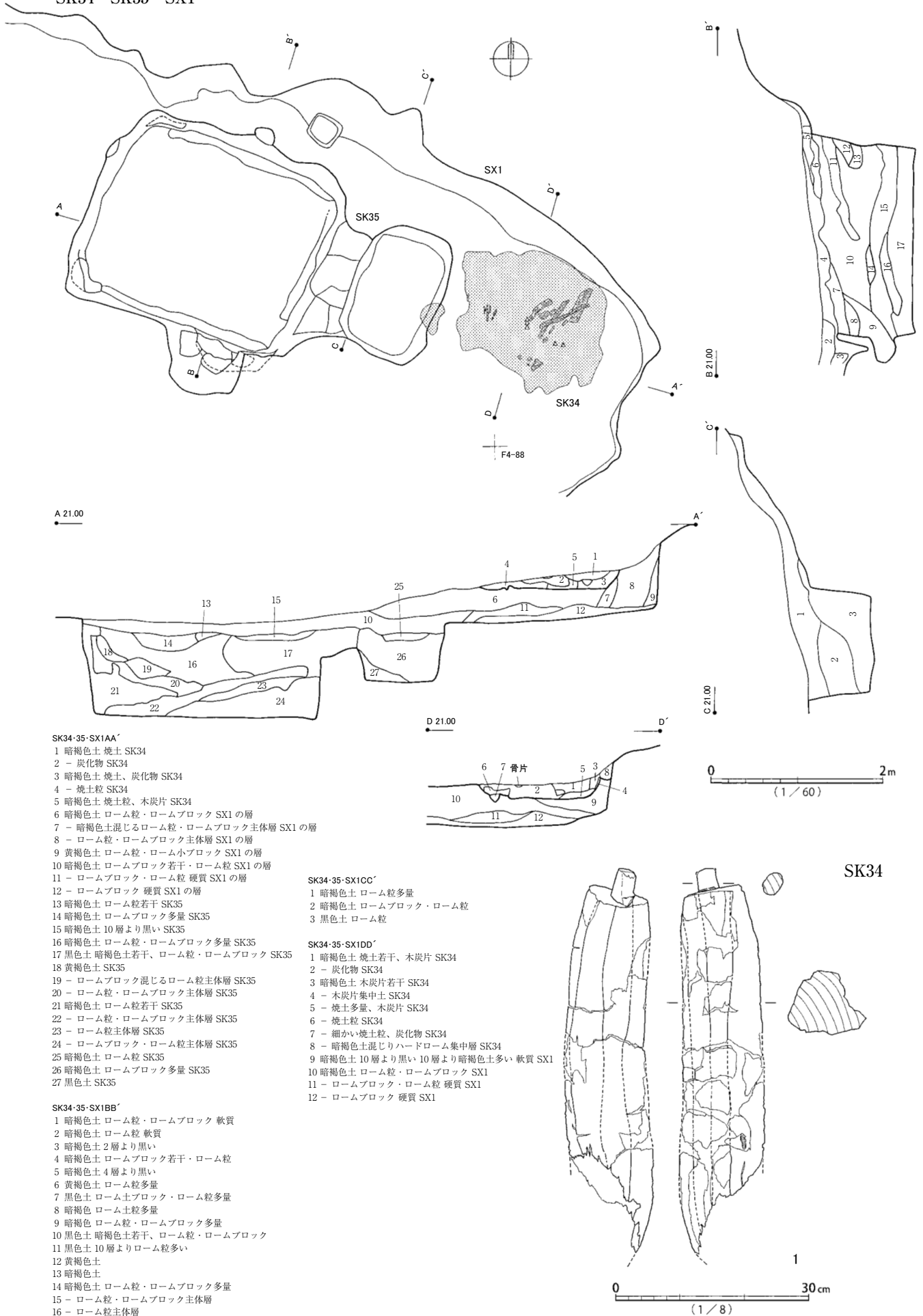
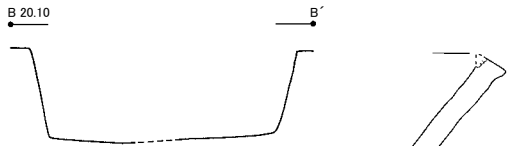
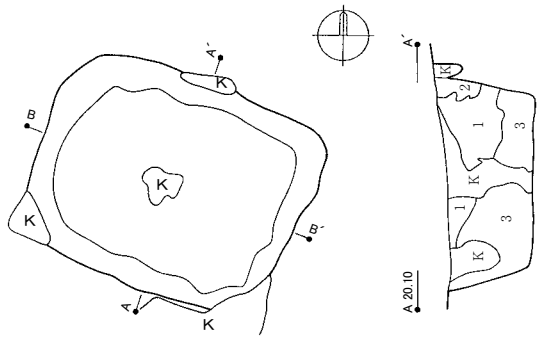


Fig.453 SK34、SK35、SX1 実測図

SK36

F4-55



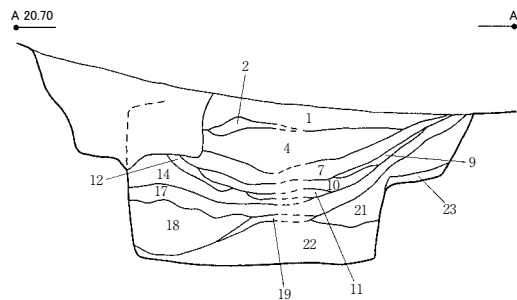
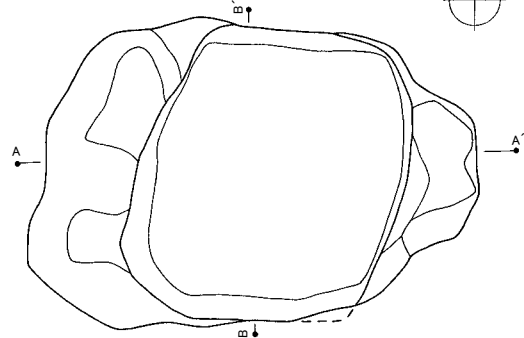
SK36AA'

- 1 黒色土 ロームブロック、暗褐色土
- 2 - ローム
- 3 - 暗褐色土混じるロームブロック主体層

0 (1/3) 10cm

SK37

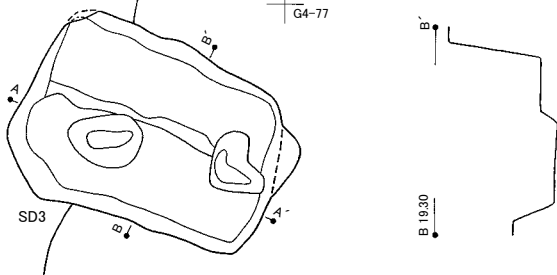
F4-33



B 20.70

SK39

G4-77

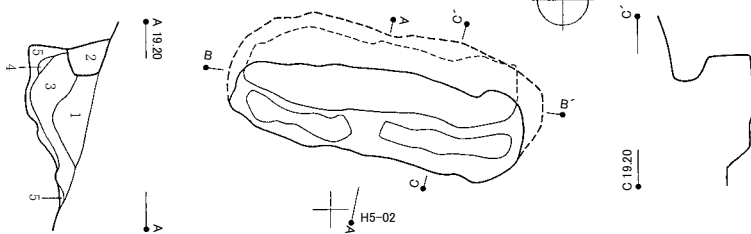


A 19.30

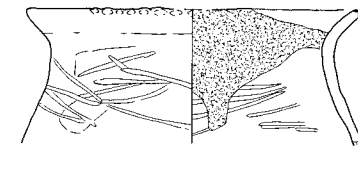
SK42AA'

- 1 黒色土 暗褐色土若干
- 2 - ロームブロック主体層 天井部
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒多量
- 5 - ローム粒主体層

SK42



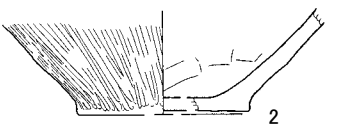
B 19.20



0 (1/60) 2m

SK37AA'·BB'

- 1 暗黄褐色土
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (3~7 cm) 多量
- 3 暗褐色土 軟質
- 4 暗褐色土 ロームブロック (2~5 cm) 少量
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック、黒色土
- 6 黒色土 ローム粒 軟質
- 7 暗茶褐色土 ローム小ブロック
- 8 暗茶褐色土 ローム粒
- 9 暗褐色土 ロームブロック (1~3 cm) やや軟質
- 10 暗茶褐色土 ロームブロック (3~5 cm) やや軟質
- 11 黒褐色土 ローム粒 (軟)、暗褐色土 (硬質)
- 12 暗茶褐色土 ローム粒多量
- 13 暗黄褐色土 ロームブロック (3~5 cm)
- 14 暗褐色土 ロームブロック (2~3 cm)、暗黄褐色土 (硬質、ブロック状)
- 15 暗褐色土 ローム粒、暗黄褐色土粒
- 16 暗褐色土 黒褐色土多量、ローム粒
- 17 暗褐色土 ロームブロック (3~7 cm) 多量、黒褐色土
- 18 黒褐色土 ローム小ブロック (粒~1.3 cm) 混
- 19 暗褐色土 ローム粒・小ブロック やや硬質 粘りがある
- 20 暗褐色土 ロームブロック (3 cm) 少量・ローム粒・小ブロック多量 軟質
- 21 - 硬質 ローム崩壊土、再堆積
- 22 - ロームブロック (4~7 cm) 多量 ローム崩壊土
- 23 - ロームブロック 硬質



0 (1/4) 15cm

Fig.454 SK36、SK37、SK39、SK42 実測図

い。記録類も無いため詳細は不明。本報告では全体図に図示するにとどまる。

平面形状は、楕円形で、規模は計測不能。

出土遺物は無い。

#### SK34 064地区 (Fig.453、PL.216)

F4-88 (新Grid) 付近に位置する土壌である。南西方向に下る斜面に作られた台地整形であるSX-1の覆土上層に位置する。新旧関係は土層断面図からSX-1より新しい。発掘調査時は遺構番号を付与されていない。

平面形状は、不整形で、規模は2.07m×1.40m、確認面からの深さは0.50mを測る。主軸方位は長軸方向からN-45°-Wである。底面の平面形は不明だが、ほぼ平坦で水平である。断面形状は、長軸・短軸方向とも底面から丸みを帯びて開き気味に立ち上がる。覆土中には炭化物や焼土が多く含まれ、骨片(△)も散在するが数量が極めて少ない。火葬の場を示す可能性がある。

出土遺物は1が炭化材である。被熱による変形が著しい。断面形は不整形だが、木目の中央方向から、扇型に木取りされているとみられ、みかん割りとみられる。用途は不明だが、端部に突部が作られており、組み合わせ部材の一つとみられる。

#### SK35 064地区 (Fig.453、PL.94)

F4-88 (新Grid) 付近に位置するいわゆる地下式坑である。南西方向に下る斜面に作られた台地整形であるSX-1の整形面中央に位置する。西側にはSK36、上層にはSK34が位置する。新旧関係は土層断面図から、SK34より古く、SX-1とは明確な時期差は認められない。SK36に対しては不明である。発掘調査時点では064-SX908と呼称されている。

本遺構は、平面形状が隅丸長方形の竪坑と、隅丸幅広方形の主室で構成される。規模は主室が(2.86)m×(2.44)m、確認面からの深さ1.13mを測り、竪坑は(1.32)m×1.56m、確認面からの深さ0.72mを測る。主室の主軸方位は長軸方向からN-69°-Wである。竪坑は、底面が隅丸長方形で、ほぼ平坦・水平であり、断面形状は長軸・短軸方向で方形に近い逆台形を呈し、底面から鋭く垂直方向に立ち上がっている。

主室は、底面が隅丸方形で、ほぼ平坦であるが、西側以外の外縁部には、溝状の浅い窪みが認められる。水平は、竪坑方向に僅かに傾斜する。竪坑と主室の連結部は、竪坑側からは0.70mほどの段差を有し、頂部は主室側に明瞭に傾斜している。

覆土の堆積状況を見ると、初期の埋没土が竪坑方向から堆積していることから、この段階までは天井部が存在していたとみられる。

出土遺物は無い。

#### SK36 064地区 (Fig.454、PL.56・193)

F4-55 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南西方向に下る斜面に作られた台地整形であるSX-1の整形面北西側に位置する。東側にSK35が位置する。新旧関係はSK35、SX-1に対し不明である。発掘調査時点では064-SK931と呼称されている。



平面形状は、隅丸長方形で、規模は2.10m×1.80m、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は不整長方形で、ほぼ平坦であるが、北東方向に僅かに傾斜する。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈し、底面から鋭く立ち上がっている。覆土はロームブロックで占められており、人為的な埋戻しが想定される。

出土遺物は常滑播鉢である。

#### SK37 064地区 (Fig.454、PL.57)

F4-33 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北西側に下る斜面地に位置する。周辺にはSK36・38が隣接するが、南西斜面に位置するSX-1の台地整形面からは外れているとみられる。新旧関係はいずれに対しても不明である。発掘調査時は064-SK934と呼称されている。

遺構は隅丸長方形の竪坑の両長辺外周に不整形の掘り込みが伴う平面形状を呈する。隅丸長方形の竪坑規模は2.35m×2.10m、確認面からの深さは1.26mを測る。主軸は長軸方向からN-11°-Eである。底面は隅丸長方形で、断面形状は鍋底形に中央部が外周部に比べやや低い。底面からは垂直方向に明瞭に立ち上がり、短軸方向断面では左右両側にテラス状の平坦面が伴うように見えるが、断面図から、西側は後世の掘り込みである可能性が高い。覆土には焼土・炭化物等認められないが、ロームブロックが主体的に堆積していることから、天井部があったのかもしれない。

出土遺物は無い。

#### SK38 064地区 (Fig.15)

F4-23 (新Grid) 付近に位置する土坑である。北西方向に下る斜面に位置する。周囲にはSK37が北側に近接するが、新旧関係は不明である。発掘調査時には遺構番号は付与されていない。

記録類が無いため、全体図に図示するにとどまる。

平面形状は、不整長方形で、規模は計測不能。

出土遺物は無い。

#### SK39 064地区 (Fig.454)

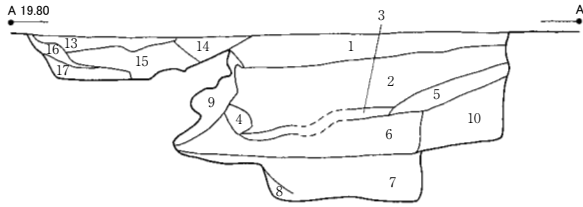
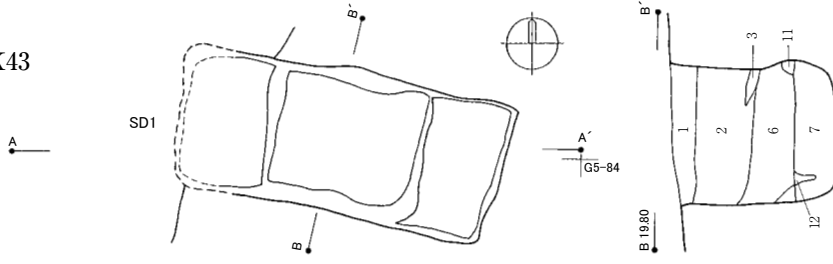
G4-77 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に、SD-3と重複して位置するが、新旧関係は不明。SD-3を同時期の台地整形に伴う遺構と捉えれば、平坦面につくられていた可能性もある。南東側にSK40が位置する。発掘調査時には064-SK929と呼称されている。平面形状は不整長方形で、規模は2.10m×1.45m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-65°-Wである。底面は不整長方形で、規模は1.90m×0.65mを測る。木棺痕は認められない。底面の北側には、0.12m上位に平坦面がある。底面には2ヶ所浅いピットが認められるが、本遺構に伴うか不明。

出土遺物は無い。

#### SK40 064地区 (Fig.15)

G4-88 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置するが、西側に位置するSD-3を同時期の台地整形に伴う遺構と捉えれば、平坦面につくられていた可能性もある。西側にはSK39が位置する。

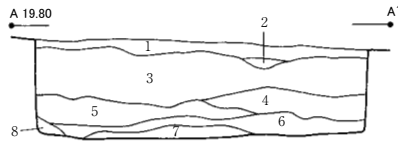
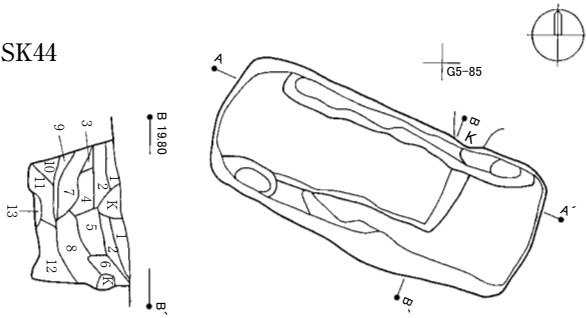
SK43



SK43AA'-BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒が主、黒色土粒若干
- 2 暗褐色土 5層より明るい黒色土粒、ローム粒
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒若干
- 4 暗褐色土 ローム粒若干
- 5 暗褐色土 2層より黒い・10層より明るいローム粒若干、黒色土粒
- 6 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 7 真黄色土 ローム粒・ローム・ロームブロック、黒色土粒若干 若干硬質 ローム粒・ロームブロック集中土層
- 8 一粘土、褐色土 北山のくずれ
- 9 暗褐色土 ロームブロック
- 10 暗褐色土 ローム若干
- 11 黄褐色土 ローム粒、黒色土粒若干
- 12 黒色土 ローム粒若干
- 13 暗褐色土 ローム粒
- 14 暗褐色土 ローム粒
- 15 暗褐色土 17層より黒い ローム粒若干
- 16 黒色土 ローム粒
- 17 16層より黄色土 ローム粒 特に多い 硬質

SK44



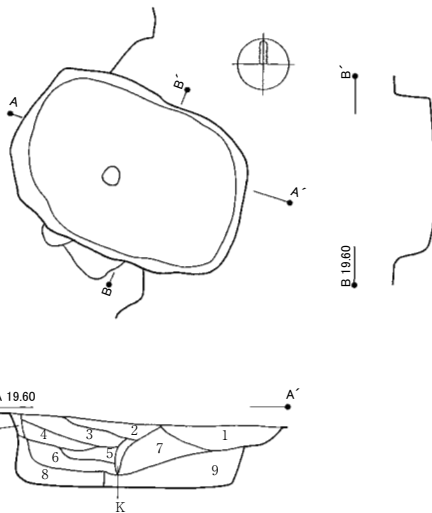
SK44AA'

- 1 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 2 黒色土粒、ローム小ブロック・ローム粒
- 3 黒色土 ロームブロック・ローム粒、暗褐色土
- 4 黒色土 ロームブロック・ローム粒
- 5 暗褐色土 ローム粒
- 6 黒色土 ローム粒
- 7 黄褐色土 ロームブロック、黒色土粒
- 8 暗褐色土若干混じるローム粒主体層

SK44BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒
- 2 黒色土粒、ローム小ブロック・ローム粒
- 3 ローム粒、黒色土粒
- 4 黒色土 ロームブロック・ローム粒
- 5 黒色土 ロームブロック多量・ローム粒
- 6 ローム粒、黒色土粒
- 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒
- 8 黒色土 ロームブロック・ローム粒 4層よりローム粒少ない
- 9 黒色土 ローム、暗褐色土
- 10 黒色土若干混じるローム主体層
- 11 黒色土 ロームブロック・ローム粒 12層よりロームブロック多い
- 12 黒色土 ロームブロック・ローム粒 8層よりロームブロック少ない
- 13 ロームブロック主体層

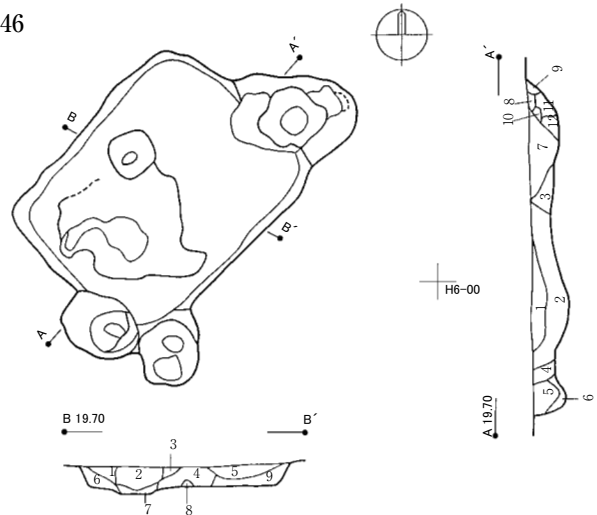
SK45



SK45AA'

- 1 暗褐色土混じるローム粒主体層 やや硬質 SD903の層
- 2 ローム粒主体層 軟質
- 3 ロームブロック・黒色土粒・暗褐色土粒混じるローム粒主体層
- 4 暗褐色土若干混じるローム粒主体層
- 5 ローム粒主体層 4層より暗褐色土多い
- 6 暗褐色土多量、ローム粒主体層
- 7 暗褐色土混じるローム粒主体層 硬質
- 8 黒色土混じるローム粒・ロームブロック主体層
- 9 ローム粒主体層 8層より黒色土少ない

SK46



SK46AA'

- 1 ロームブロック・ローム粒主体層
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒
- 3 黒色土 ローム粒多量
- 4 暗褐色土 ローム粒多量
- 5 黄褐色土 ローム粒多量、黒色土粒
- 6 ローム・ロームブロック
- 7 ロームブロック・ローム粒主体層
- 8 黄褐色土
- 9 ハードローム
- 10 黄褐色土 黒色土粒、ローム粒
- 11 黄褐色土 暗褐色土、ローム粒
- 12 ハードローム主体層

SK46BB'

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 3 黒色土粒混じるローム粒・ロームブロック主体層
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒、黒色土粒
- 5 黒色土混じるロームブロック・ローム粒主体層
- 6 ローム粒・ロームブロック主体層
- 7 2層よりローム多い
- 8 ローム粒主体層
- 9 5層より黒い

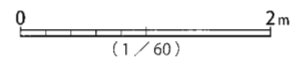


Fig.455 SK43、SK44、SK45、SK46 実測図

発掘調査時点では遺構番号は付与されていない。記録類が無く、本報告では全体図に図示するにとどまる。平面形状は、不整形で、長楕円形の土坑が二つ並んだような形状を呈する。規模は計測不能。平面形からは側壁挟込み土壇とも考えられる。

出土遺物は無い。

#### SK41 064地区 (Fig.15、PL.57)

H5-11 (新Grid) 付近に位置する地下式土壇である。南斜面に位置する。北側にはSK42が位置する。発掘調査時点では064-SX906と呼称されているが、詳細の判る記録が無いため、本報告では全体図に図示するにとどまる。平面形状は、長楕円形で、規模は計測不能、確認面からの深さは計測不能である。主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は長楕円形で平坦ではない。底面の主軸方位は長軸方向からN-84°-Wである。

平面プランは遺構の上端であり、南側壁面を掘り込んだ埋納施設部分は含んでいない。

出土遺物は無い。

#### SK42 064地区 (Fig.454、PL.57・175・193)

H5-02 (新Grid) 付近に位置する側壁挟込み土壇である。南斜面に位置する。西側でSD-1と重複する位置にあるが、新旧関係は不明。SD-1が同時期の台地整形に伴う遺構であれば、平坦面に位置した可能性がある。発掘調査時には064-SX904として呼称されている。

断面形状は、短軸方向では北側が垂直方向に立ち上がるのに対し、南側はなだらかに立ち上がる。長軸方向では底面から垂直方向に鋭く立ち上がり、断面形が長方形を呈する。底面は0.18mほど北側の壁面を掘り込んでおり、底面の一部が有天井となる。南側には一部テラス状の平坦面が認められる。

出土遺物は、1・2いずれも流れ込みとみられる。

#### SK43 064地区 (Fig.455、PL.58)

G5-84 (新Grid) 付近に位置する土壇である。南斜面に位置する。SD-1と西側で重複し、土層断面図からは、本遺構が先行する。そのため、SD-1を区画溝と捉えるならば、土坑群を伴う遺構ではないことになる。東側にはSK44が近接する。発掘調査時点では064-SK924と呼称されている。

主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は長方形で、中央に1.26m×1.16mの方形の掘り込みがある。断面形状は、長軸・短軸方向共に底面から丸みを帯びて垂直方向に立ち上がる。覆土の状況から、中央にある方形の掘り込みは、人為的に埋め戻されている可能性もある。

木棺痕は検出されていない。

出土遺物は無い。

#### SK44 064地区 (Fig.455、PL.58)

G5-85 (新Grid) 付近に位置する土壇である。南斜面に位置する。東西方向にSK45・43が近接する。発掘調査時点では064-SK921と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は2.70m×1.18m確認面からの深さは、0.75mを測る。主軸方位は長

軸方向からN-66°-Wである。底面は長方形で、北西側で僅かに方形に窪み、短軸方向では南側にやや傾斜する。断面形状は、長軸・短軸方向で底面から明瞭に垂直方向に立ち上がり、長方形を呈する。底面北側には幅0.18m、深さ0.07m程の溝が掘られている。覆土からは木棺痕は認められない。

出土遺物は無い。

#### **SK45 064地区 (Fig.455、PL.58)**

H5-05 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。東側でSD-02と重複し、土層断面によると本遺構が先行する。西側にSK44が近接する。発掘調査時点では064-SK928と呼称されている。

平面形状は、隅丸方形に近い楕円形で、規模は1.90m×1.32m、確認面からの深さは、0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-67°-Wである。底面は楕円形で平坦で水平。断面形状は、斜面山側では底面から明瞭に垂直方向に立ち上がるが、谷側は開いて立ち上がっている。覆土の堆積状況からは特記される観察は無い。

出土遺物は無い。

#### **SK46 064地区 (Fig.455、PL.58)**

H6-00 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。やや距離をおいて西側にSD-2、SK45が、東側にはSK47が位置する。発掘調査時点では064-SK909と呼称されている。

平面形状は、隅丸長方形で、規模は(2.04)m×1.56m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-43°-Eである。底面は隅丸長方形で、凹凸があり平坦とは言えない。断面形状は、長軸・短軸方向で底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がっている。棺痕跡は認められない。周囲に認められるピットは、土層断面図に記載があるものについては本遺構より新しい。出土遺物は無い。

#### **SK47 064地区 (Fig.456、PL.58～59)**

H6-01 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。東西にSK48・46がやや離れて位置する。発掘調査時点では064-SK908として呼称されている。

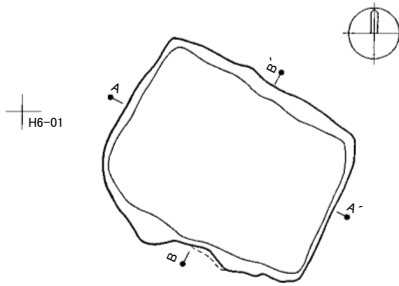
平面形状は長方形で、規模は1.86m×1.44m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-61°-Wである。底面は長方形で、僅かに波打つ。断面形状は、長軸・短軸方向共に底面から明瞭に立ち上がり、僅かに開きながら開口する。覆土の状況からは特記する事象は観察されていない。棺痕跡は認められない。

出土遺物は無い。

#### **SK48・49 064地区 (Fig.456、PL.59)**

H6-24 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には10基ほどの方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構はその西端に位置する。SK48・49は、位置関係、主軸方位の近似から、近い時期に作られた可能性が高い。新旧関係は、土層断面図では不明瞭であるが、SK48がSK49より新しいとしておく。発掘調査時に、SK48・49は064-SK906・907と呼称されている。

SK47



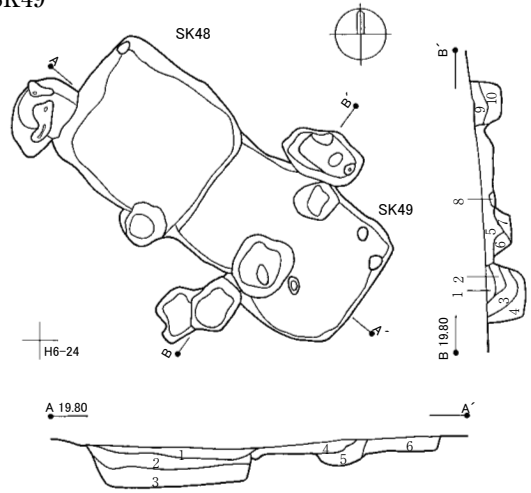
SK47AA'

- 1 暗褐色土 ローム粒
- 2 黒褐色土 ブロック状のローム粒
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 4 黄褐色土 暗褐色土粒若干
- 5 暗褐色土 ローム粒若干・ロームブロック
- 6 黄褐色土 暗褐色土若干
- 7 - 暗褐色土混じるロームブロック・ローム粒主体層
- 8 黒褐色土 非常に粘質
- 9 - 暗褐色土混じるロームブロック・ローム粒主体層
- 10 - ロームブロック・ローム粒主体層

SK47BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒
- 2 暗褐色土 ローム粒
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 4 - 暗褐色土混じるロームブロック・ローム粒主体層
- 5 - 暗褐色土混じるローム粒主体層
- 6 黒色土
- 7 黒褐色土 非常に粘質
- 8 黒色土 ロームブロック若干
- 9 - ロームブロック・ローム粒主体層

SK48・SK49



SK48-49AA'

- 1 - 暗褐色土粒、ローム粒・ロームブロック
- 2 - 暗褐色土若干混じるロームブロック・ローム粒集中層
- 3 - ロームブロック・ローム粒集中層
- 4 暗褐色土 ローム粒多量
- 5 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック、黒褐色土 軟質
- 6 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒多量

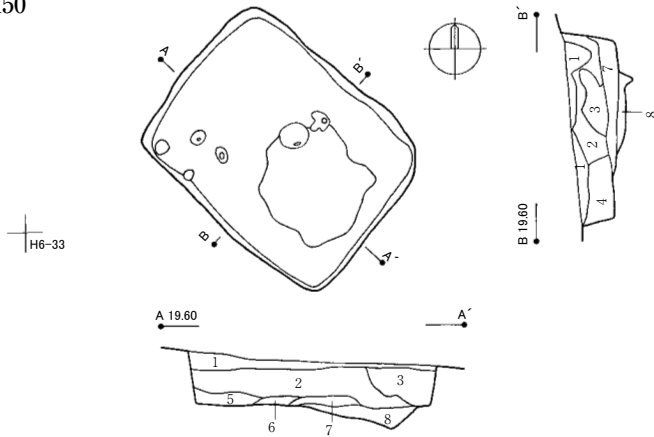
SK48-49BB'

- 1 黒褐色土
- 2 - 黒褐色土粒、ローム粒
- 3 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒
- 4 - ローム粒・ロームブロック集中層
- 5 暗褐色土 ローム粒多量
- 6 - ロームブロック・ローム粒集中層
- 7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック、黒褐色土 軟質
- 8 - 暗褐色土若干混じるローム粒集中層
- 9 暗褐色土 ローム粒
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック多量 軟質

SK50AA'-BB'

- 1 暗褐色土 ロームブロック、黒色土ブロック若干
- 2 暗褐色土 ロームブロック若干 硬質
- 3 黒色土 ロームブロック
- 4 - 黒色土ブロック多い やや硬質
- 5 - 黒色土ブロック、ロームブロック・ローム粒
- 6 - 黒色土混じるローム粒主体層
- 7 - 黒色土ブロック、ロームブロック
- 8 - 黒色土若干混じるローム主体層

SK50



SK51・SK52

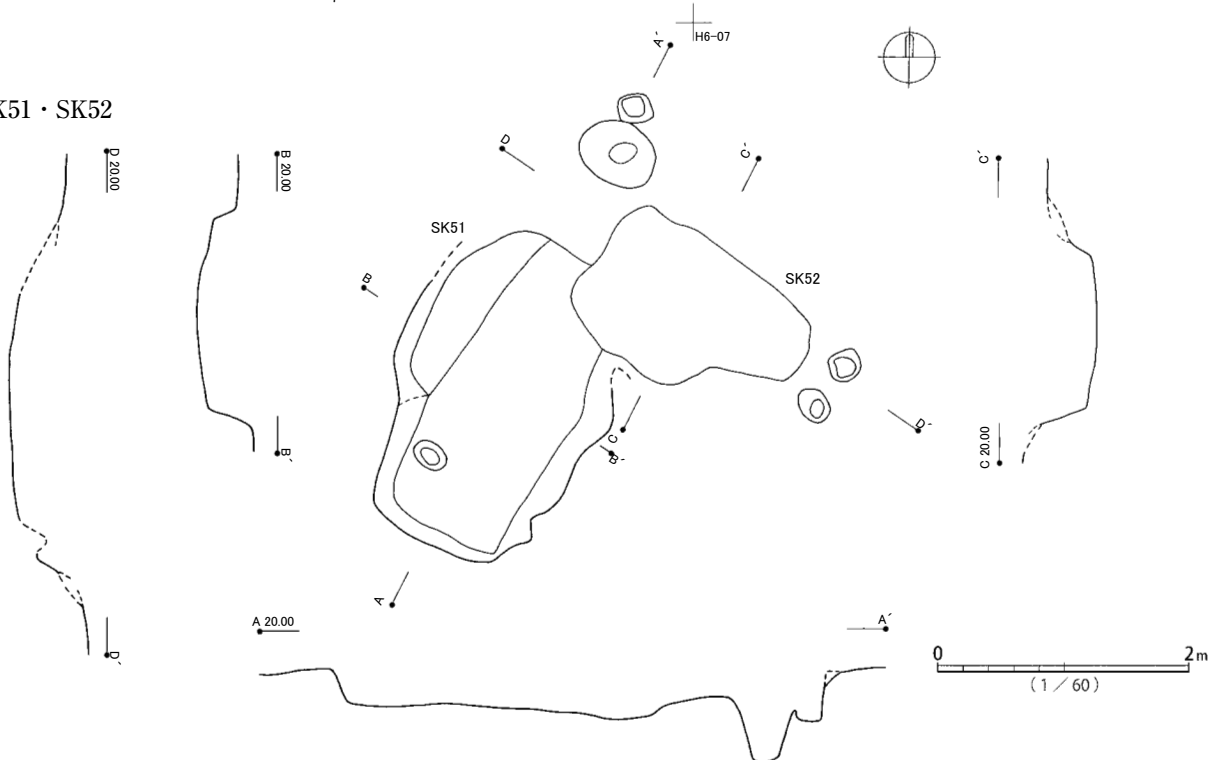


Fig.456 SK47、SK48、SK49、SK50、SK51、SK52 実測図

SK48の平面形状は方形で、規模は1.30m×1.20m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位は長軸方向からN-52°-Wである。底面は方形で平坦且つ水平である。断面形状は、底面から明瞭に、やや開きながら立ち上がっている。覆土の状況からは、棺痕跡は認められない。

出土遺物は無い。

SK49の平面形状は長方形で、規模は計測不能×(1.20)m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-52°-Wである。底面は長方形で先後するピットにより不明瞭だが、おおむね平坦且つ水平である。断面形状は逆台形を呈するとみられ、底面から明瞭にやや開きながら立ち上がっている。覆土の状況からは、棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

### SK50 064地区 (Fig.456、PL.59)

H6-33 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、SK48・49と共にその西端に位置する。発掘調査時点では064-SK904と呼称されている。

平面形状は、長方形で規模は1.96m×1.54m、確認面からの深さは、0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-50°-Wである。底面は長方形で平坦だが、短軸方向では山側に傾斜する。断面形状は、逆台形で、底面から僅かに開きながら明瞭に立ち上がる。底面南東側に浅い掘り込みが認められるが、覆土の堆積状況から、本遺構に先行するか、機能時には埋まっていたと考えられる。棺痕跡は認められない。

出土遺物は無い。

### SK51・52 064地区 (Fig.456)

H6-07 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構はその中央付近に重複して位置する。新旧関係は不明。発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。

SK51の平面形状は不整長方形で、規模は計測不能×1.76m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-29°-Eである。底面は長方形で比較的平坦だが、長軸方向で山側に傾斜する。断面形状は、短軸方向で鍋底形を呈し、中央部が深く、縁辺にかけて緩やかに浅くなる。長軸方向では北東側がSK52との重複で不明瞭だが、逆台形を想定する。底面から開きながら立ち上がっている。底面南西側にピットが認められるが帰属関係は不明。棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

SK52は記録類が無いため、詳細は不明。不整形で、規模は1.79m×1.16mが推定される。出土遺物は無い。

### SK53 064地区 (Fig.457)

H6-08 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構はその中央付近に位置する。発掘調査時点では遺構番号は付与されていない。記録類に限られ、詳細は不明である。

平面形状は長方形で、規模は1.75m×1.50m、確認面からの深さは、(0.24)mを測る。主軸方位は長

軸方向からN-45°-Wである。底面は北隅の形状から隅丸方形が想定され、平坦且つ水平であるが、外縁部に溝状の掘り込みが認められるものの、全周するか不明。断面形状は、逆台形で、底面から開きながら立ち上がる。棺痕跡は認められない。また周辺のピットについては関連性は不明である。出土遺物は無い。

#### **SK54 064地区 (Fig.457、PL.59)**

H6-27 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、その中央に位置する。発掘調査時点では064-SK915と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は1.50m×1.10m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-53°-Wである。底面は方形で、平坦且つ水平、断面形は、長軸・短軸方向で逆台形を呈し、底面から丸みを帯びて、僅かに開きながら立ち上がる。棺痕跡は認められない。また、山側底面にあるピットについては、本遺構に伴うか不明である。出土遺物は無い。

#### **SK55 064地区 (Fig.457)**

H6-38 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、その東端に位置する。発掘調査時点では064-SK903と呼称されている。

平面形状は、不整楕円形で、規模は(1.25)m×(1.10)m、確認面からの深さは0.69mを測る。主軸方位は長軸方向からN-44°-Eである。底面は不整楕円形で、平坦である。断面形状は、鍋底形で、中央が深く、外周部にかけて僅かに浅くなり、底面から開きながら、明瞭に立ち上がる。

出土遺物は無い。

#### **SK56 064地区 (Fig.457、PL.60)**

H7-00 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、その北端に位置する。発掘調査時点では064-SK901と呼称されている。

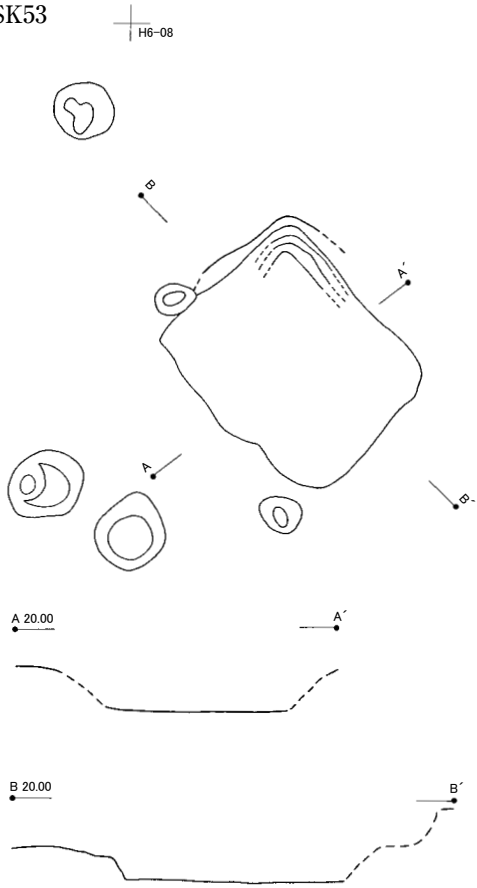
平面形状は、長方形で、規模は1.95m×1.60m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-61°-Eである。底面は長方形で平坦且つ水平である。断面形状は、逆台形だが、底面で僅かに丸みを帯び、僅かに開きながら明瞭に立ち上がる。棺痕跡は認められない。覆土が下位から上位まで、ほぼ均一な土であるため、人為的に短期間に埋められた可能性がある。出土遺物は無い。

#### **SK57 064地区 (Fig.457)**

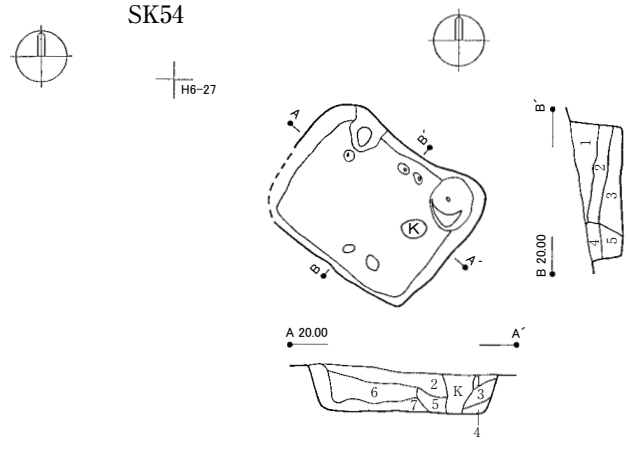
H7-30 (新Grid) 付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構はその東端に位置する。西側でSD31とは重複するが、新旧関係は不明である。発掘調査時点では064-SK902と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は1.75m×(1.35)m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸

SK53



SK54



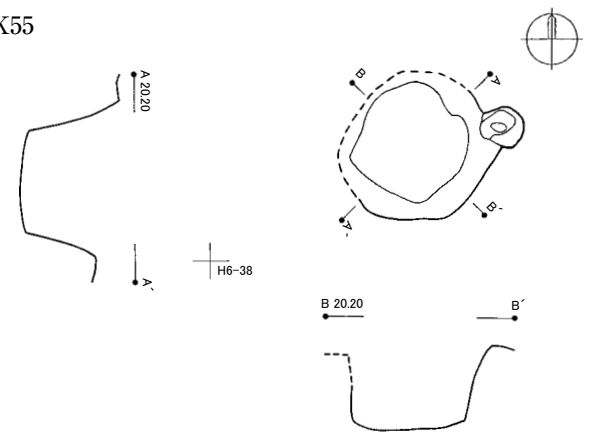
SK54AA'

- 1 - ロームブロック・黒色ブロック主体層 硬質
- 2 - 黒色土含むロームブロック主体層
- 3 暗褐色土 ローム粒多量 やや軟質
- 4 - 黒色土粒混じるローム粒主体層
- 5 - 4層よりロームブロック多い
- 6 - 黒色土含むローム粒・ロームブロック主体層
- 7 - 6層より黒いローム粒主体層

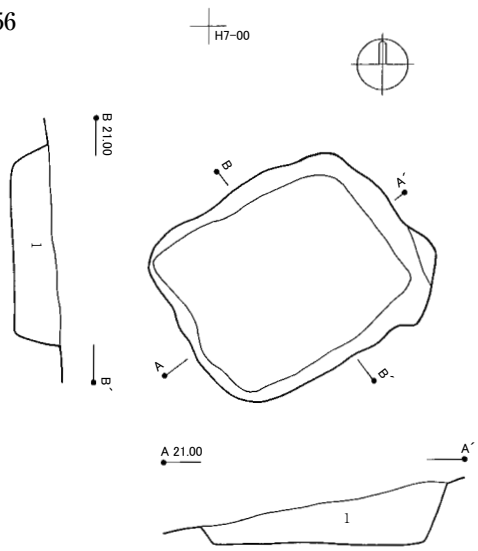
SK54BB'

- 1 - 黒色土含むローム粒・ロームブロック主体層
- 2 - 黒色土含むロームブロック主体層 やや軟質
- 3 - 2層より黒いローム粒主体
- 4 黒色土 ローム粒多量 硬質
- 5 黒色土 ローム粒 軟質

SK55



SK56



SK57

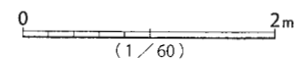
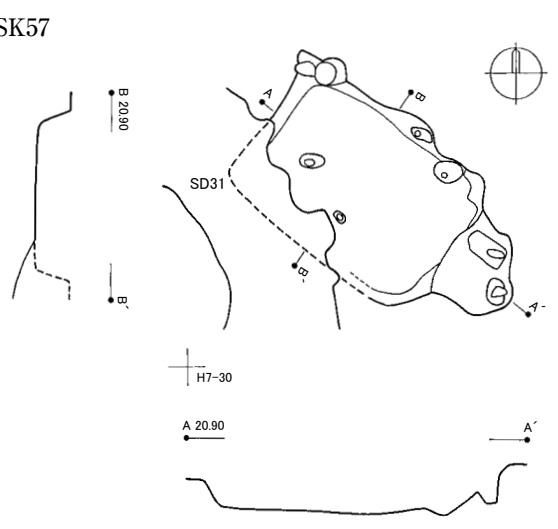


Fig.457 SK53、SK54、SK55、SK56、SK57 実測図



方向からN-53°-Wである。底面は長方形で平坦且つほぼ水平である。断面形状は、逆台形で、底面から僅かに開きながら明瞭に立ち上がる。棺痕跡は認められない。また、重複するピット、土坑との帰属関係は不明である。

出土遺物は無い。

#### SK58 099地区 (Fig.460)

I10-22付近に位置する土坑である。竪穴建物跡(1018)の覆土中に位置し、南側でSK73と重複する。土層断面図から、本遺構が竪穴建物跡(1018)・SK73より新しい。発掘調査時点では099-3033B号遺構と呼称されている。

平面形状は、不整形だが、本来はで長方形あるいは楕円形を呈していたと考えられる。現状での規模は1.48m×計測不能、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向から、N-64°-Wである。底面は不整形、断面形状は左右非対称な形状を示す。出土遺物は無い。

#### SK59 064地区 (Fig.458、PL.60)

H7-50(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、その東端に位置する。発掘調査時点では064-SK905と呼称されている。

平面形状は、長方形で規模は1.90m×1.55m、確認面からの深さは、0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-47°-Eである。底面は長方形で平坦且つ水平である。断面形状は、算盤玉のように側面が内湾する。棺痕跡は認められない。北東辺には0.90m×0.33mの掘り込みがあるが、土層断面図によれば本遺構に先行する土坑である。

出土遺物は無い。

#### SK60 064地区 (Fig.458、PL.60)

H6-57(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。周囲には方形・不整楕円形の土坑が一群を形成しており、本遺構は、その南端に位置する。発掘調査時点では064-SX201と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.30m×1.00m、確認面からの深さは1.08mを測る。主軸方位は長軸方向からN-47°-Eである。底面は長方形で平坦だが、南西傾斜する。短軸方向では山側に傾斜する。断面形状は、底面から明瞭に立ち上がり外反する。棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

#### SK61 064地区 (Fig.458、PL.60)

H6-73(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に単独で位置する。発掘調査時点では064-SX902と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.90m×1.80m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-Eである。底面は不整形で、凹凸があり平坦とは言えず、テラス状の平場がある。断面形状は、左右不均等で、底面から播鉢状に開いて立ち上がる。周囲に認められるピットは、土層断

面図に記載があるものについては本遺構より新しい。出土遺物は無い。

#### SK62 064地区 (Fig.459、PL.60)

H5-39(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に単独で位置する。発掘調査時点では064-SK919と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は3.22m×2.12m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-62°-Wである。底面は隅丸長方形で、平坦且つ水平であり、外周には幅0.21mほどの溝が廻る。断面形状は、長軸・短軸方向で、底面から丸みを帯びて内湾しつつ立ち上がっている。棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

#### SK63 064地区 (Fig.15、PL.61)

H4-36(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。やや距離をおいて北側にSD3、SK40が、さらに東側にはSK41が位置する。発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。記録類が限られ、詳細は不明である。

平面形状は、楕円形で、規模は計測不能である。出土遺物は無い。

#### SK64 064地区 (Fig.15、PL.61)

H4-53(新Grid)付近に位置する土坑である。南斜面に位置する。東側にはSK63が位置する。発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。

平面形状は、隅丸長方形で、規模は計測不能である。主軸方位は長軸方向からN-67°-Wである。棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

#### SK65 099地区 (Fig.459、PL.61)

I7-84付近に位置する土坑である。南東側にSK66・67が位置する。発掘調査時点では099-3051号遺構と呼称されている。

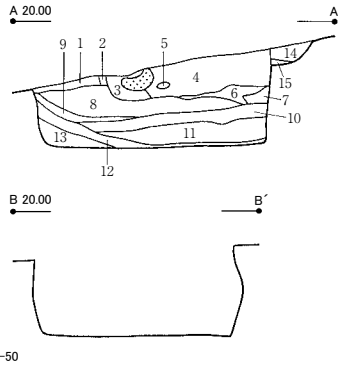
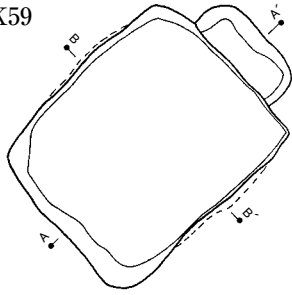
平面形状は長楕円形で、規模は2.06m×1.04m、確認面からの深さは、0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-40°-Eである。底面は長楕円形で、北東側に僅かな傾斜面を伴う。断面形状は、短軸方向では逆台形、長軸方向ではやや鍋底形に中央が深く、外周が浅くなる。底面からは直線的に立ち上がる。出土遺物は無い。

#### SK66 099地区 (Fig.459)

J7-06付近に位置する土坑である。南側にSK67が近接する。発掘調査時点では099-3052号遺構と呼称されている。

平面形状は、不整長楕円形で、規模は2.96m×0.90m、確認面からの深さは、0.16mを測る。主軸方位は長軸方向からN-65°-Eである。底面は長楕円形で幅は極めて狭い。長軸方向には水平であるが、短軸方向では北西側に傾斜する。南西側にピットが認められる。断面形状は、長軸方向では逆台形だが、短軸方向では不整形を呈する。

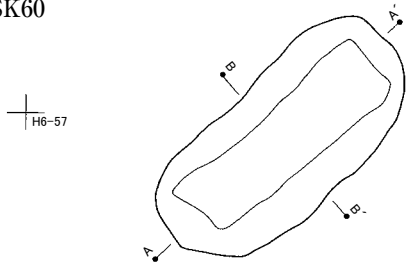
SK59



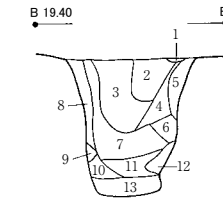
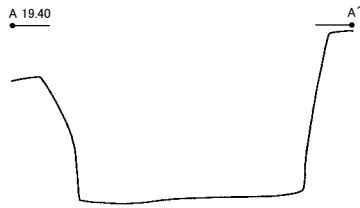
SK59AA'

- 1 - 暗褐色土混じるローム粒・ローム小ブロック集中層
- 2 黒色土
- 3 - ロームブロック・ローム粒、白色粘土、黒色土ブロック
- 4 黒褐色土 ローム粒若干・ロームブロック 硬質
- 5 黒色土 ローム粒若干・ロームブロックローム粒、白色粘土
- 6 黒褐色土 ロームブロック
- 7 黒褐色土 ロームブロック若干
- 8 - 黒色土ブロック、ロームブロック・ローム粒、暗褐色土粒 軟質
- 9 - ローム大ブロック
- 10 - 黒色土ブロック多量 8層よりローム粒少ない
- 11 - ローム粒、黒色土粒集中層
- 12 - ローム粒、黒色土粒、白色粘土
- 13 - ローム粒、黒色土粒含む白色粘土主体層
- 14 暗褐色土
- 15 - ロームブロック

SK60



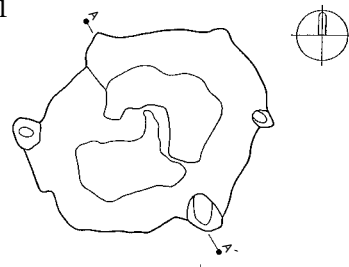
H6-57



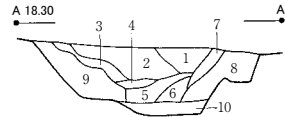
SK60BB'

- 1 - 暗褐色土混じるローム粒集中層
- 2 黒色土 ローム粒若干
- 3 暗褐色土 ローム粒
- 4 暗褐色土 ローム粒多量
- 5 - ロームブロック混じるローム粒集中層
- 6 - ローム粒集中層
- 7 暗褐色土 ローム粒多量
- 8 暗褐色土 ローム粒多量
- 9 - ローム粒集中層
- 10 - 暗褐色土混じるローム粒集中層
- 11 - 暗褐色土ブロック含むローム粒集中層
- 12 - ロームブロック含むローム粒集中層
- 13 暗褐色土

SK61



H6-73



SK61AA'

- 1 暗褐色土 硬質
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 ローム
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム粒
- 6 暗褐色土 ローム小ブロック 軟質
- 7 暗褐色土 ローム粒多量
- 8 - ローム粒主体層
- 9 暗褐色土 ロームブロック
- 10 - ロームブロック主体層

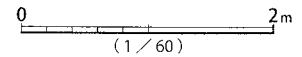
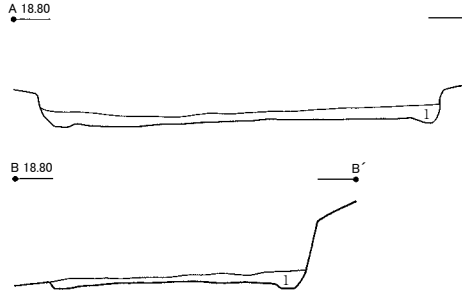
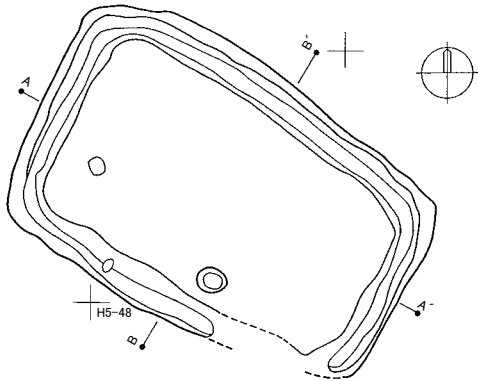


Fig.458 SK59、SK60、SK61 実測図

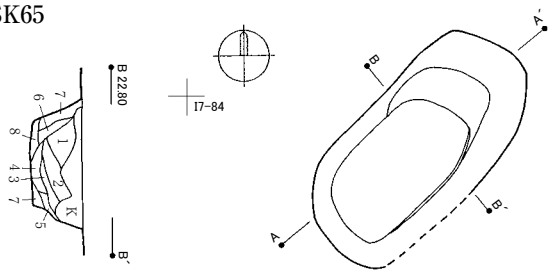
SK62



SK62AA'・BB'

1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒、粘土ブロック

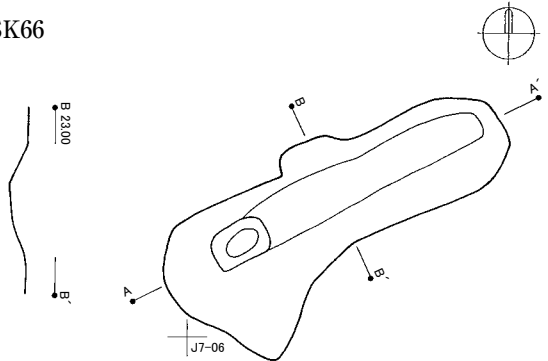
SK65



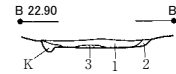
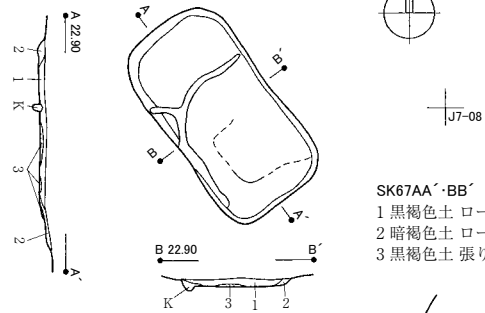
SK65BB'

- 1 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒
- 2 黒褐色土 ローム微粒 硬質
- 3 黒褐色土 ソフトローム小塊 硬質
- 4 黒褐色土 ソフトローム・ローム粒 硬質
- 5 黒褐色土 ローム若干多め 硬質
- 6 黄褐色土 ローム主体、黒褐色土粒
- 7 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土粒
- 8 暗褐色土 ソフトローム多量 よくしまる

SK66



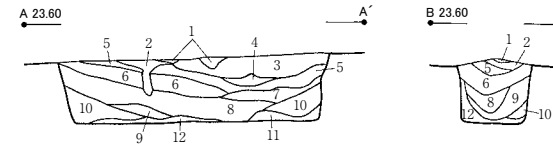
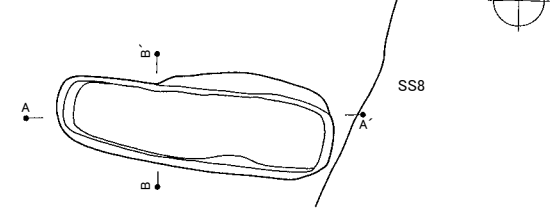
SK67



SK67AA'・BB'

- 1 黒褐色土 ローム微粒
- 2 暗褐色土 ローム小ブロック
- 3 黒褐色土 張り床状

SK69



SK69AA'・BB'

- 1 淡赤褐色土 焼土が主体
- 2 暗赤褐色土 焼土粒・黒褐色土の混合層
- 3 黒褐色土 焼土微粒
- 4 黒褐色土 ソフトローム粒多、焼土微粒少量
- 5 黒褐色土 ソフトローム粒、焼土微粒少量、暗褐色土粒
- 6 黒褐色土 ソフトローム粒少量、黒色土粒多量
- 7 黒色土 暗褐色土粒多量 総体に軟質
- 8 黒褐色土 暗褐色土粒多量、ローム微粒
- 9 黒色土 暗褐色土粒多量 総体に軟質
- 10 黒色土 暗褐色土小塊多量
- 11 黒褐色土 ソフトローム粒 軟質
- 12 暗褐色土 ローム大粒 多量

SK68

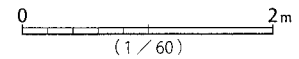
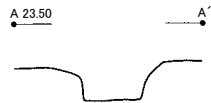
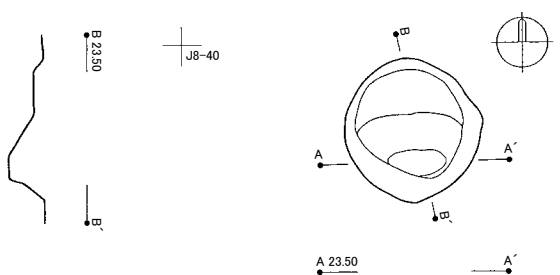


Fig.459 SK62、SK65、SK66、SK67、SK68、SK69 実測図

出土遺物は無い。

#### SK67 099地区 (Fig.459)

J7-08付近に位置する土坑である。北側にSK66が近接する。発掘調査時点では099-3053号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は1.68m×0.86m、確認面からの深さは、0.07mを測る。主軸方位は長軸方向からN-35°-Wである。底面は隅丸長方形で、平坦・水平であるが、南西面から短軸方向に横断するように細い溝状の窪みが認められる。断面形状は、長軸方向で逆台形、短軸方向鍋底気味に中央が深く、外周が浅い形状を呈する。出土遺物は無い。

#### SK68 099地区 (Fig.459)

J8-40付近に位置する土坑である。SS10方形周溝墓の方台部に単独で位置する。新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3058号遺構と呼称されている。

平面形状は、円形で、規模は1.14m×1.08m、確認面からの深さは、0.28mを測る。主軸方位は長軸方向からN-1°-Wである。底面は楕円形で呈するが、上端に対して狭小である。断面形状は、長軸方向では逆台形、短軸方向では方形を呈する。発掘調査時点ではSS10との関係について積極的な判断は行っていない。記録類では判断に資するものが無いため、遺構平面プランを鑑み、関連性が低いものと判断した。

出土遺物は無い。

#### SK69 099地区 (Fig.459)

I9-84付近に位置する土坑である。SS8が近接して単独で位置する。新旧関係は後述する。発掘調査時点では099-3037号遺構と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は2.22m×0.74m、確認面からの深さは、0.50mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は長方形で平坦かつ水平である。断面形状は、長軸方向では逆台形、短軸方向では方形を呈する。覆土の状況では第一埋没土以降が急激に堆積した状況が伺える。木棺痕は認められないが、断面形状と鑑み、埋葬施設と判断した。

SS8との関連性については、SS8の平面プランを見ると、SK69を避けるように周溝が歪んだ形状を呈する。このことから、検討を要するが、本遺構がSS8に先行するものと判断しておく。出土遺物は無い。

#### SK70 099地区 (Fig.460、PL.61)

H10-42付近に位置する土坑である。東側にSK71が近接する。発掘調査時点では099-3035号遺構と呼称されている。

平面形状は、長方形で、規模は1.72m×0.94m、確認面からの深さは、0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-58°-Wである。底面は長方形で平坦かつ水平であるが、南東側で0.43m×0.25mの浅い窪みが認められる。断面形状は、長軸・短軸方向で方形を呈する。覆土の状況から埋葬施設と判断

した。

現場図面には東隅付近の底面に、棒状炭化物が記されているものの、現物は確認できないため、性格は不明である。その他の出土遺物は無い。

#### SK71 099地区 (Fig.460)

H10-22付近に位置する土壇である。西側にSK70が近接する。発掘調査時点では099-3036号遺構と呼称されている。平面形状は、長楕円形で、規模は2.08m×0.64m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Wである。底面は長楕円形で、比較的平坦で、且つ水平である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈し、底面から丸みを帯びて僅かに内湾しながら立ち上がっている。覆土の状況から、本遺構を埋葬施設と判断した。出土遺物は無い。

#### SK72 099地区 (Fig.460、PL.61)

H11-28付近に位置する土壇である。北側に2m離れてSM1162があるが、土壇としては単独で位置する。新旧関係は不明である。発掘調査時点では099-3023号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.62m×0.82m、確認面からの深さは0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は長方形で、断面形状は、長軸・短軸方向で鍋底形を呈する。底面はハードローム層に作られており、若干の凹凸が認められる。底面は、中央部付近に、1.67m×0.40mの範囲に赤色化した部位が認められ、また、覆土中にも炭化物、焼土粒が確認されており、強い燃焼があったことが伺える。また、長軸方向のほぼ中央南寄りに深さ0.06mのピットが認められ、燃焼面が掘形に及ぶことから、本遺構に帰属する。

出土遺物は無い。

#### SK73 099地区 (Fig.460)

I10-22付近に位置する土坑である。竪穴建物跡(1018)の覆土中に位置し、北側でSK58と重複する。土層断面図から、本遺構が竪穴建物跡(1018)より新しく、SK58より古い。発掘調査時点では099-3033A号遺構と呼称されている。

平面形状は、不整長方形で、規模は1.48m×計測不能、確認面からの深さは0.47mを測る。主軸方位は長軸方向から、N-70°-Wである。底面は隅丸長方形、もしくは長楕円形、断面形状は、長軸方向で鍋底形、短軸方向ではU字型を呈する。

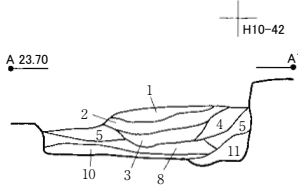
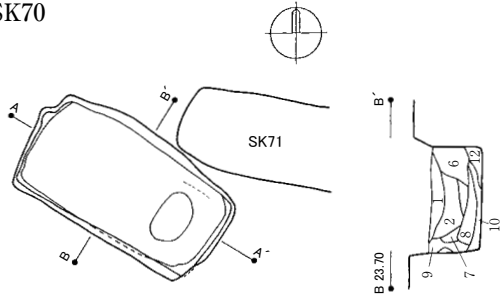
出土遺物は無い。

#### SK74 099地区 (Fig.460)

I10-62付近に位置する土坑である。南側に竪穴建物跡(1032)が近接する。発掘調査時点では099-3034号遺構と呼称されている。平面図以外の記録類が無く、詳細は不明。

平面形状は、長方形で、規模は2.02m×0.82mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-Wである。出土遺物は無い。

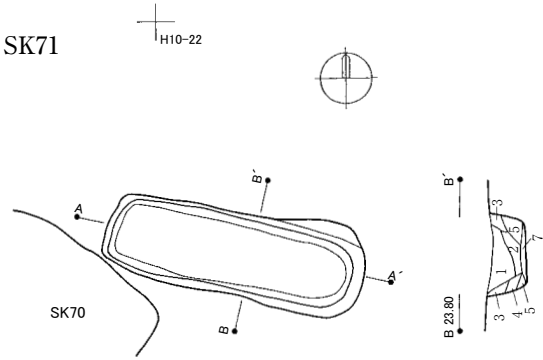
SK70



SK70AA'-BB'

- 1 黒色土 暗褐色土粒
- 2 黒褐色土 黒色土に暗褐色土小塊、ローム粒
- 3 黒褐色土 黒色土に暗褐色土粒多量
- 4 黒褐色土 きめ細かい黒色土主体、ローム大粒
- 5 黒褐色土 きめ細かい黒色土主体、ソフトローム・ローム大粒
- 6 暗褐色土 暗褐色土にソフトローム粒多量
- 7 暗褐色土 6層にローム大粒多量
- 8 暗褐色土 ソフトローム塊、暗褐色土小塊
- 9 暗褐色土 ローム粒 2：暗褐色土 1の比
- 10 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒及び小塊多量
- 11 黒褐色土 4層よりやや明るいきめ細かい黒色土主体、4層に類する
- 12 暗褐色土 ソフトローム塊、暗褐色土小塊

SK71



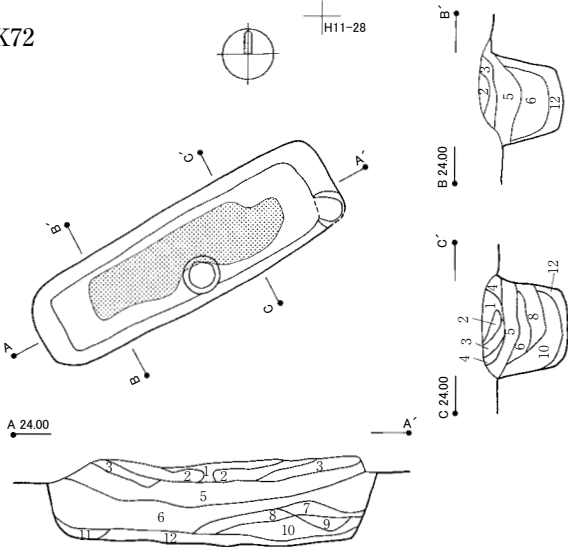
SK71AA'-BB'

- 1 暗褐色土 黒色土粒・ローム粒・ローム大粒の混合土
- 2 黒褐色土 暗褐色土・黒色土粒・炭粒の混合層
- 3 黒褐色土 暗褐色土・ローム粒の混合層
- 4 黒褐色土 暗褐色土・黒色土粒・ソフトローム粒の混合層
- 5 暗褐色土 暗褐色土・黒色土粒・ロームの混合層 硬質
- 6 暗褐色土 暗褐色土層 軟弱
- 7 暗褐色土 3：暗褐色土 1の比 硬質

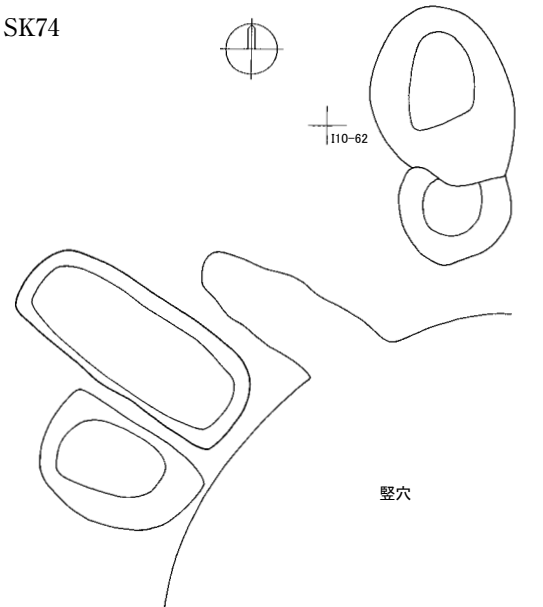
SK72AA'-BB'-CC'

- 1 暗赤褐色土 黒褐色土・焼土・炭の混合層
- 2 暗赤褐色土 焼土主体、炭粒多量
- 3 暗赤褐色土 黒褐色土・焼土・炭の混合層
- 4 黒褐色土 黒褐色土多量 2層より焼土少量
- 5 黒褐色土 焼土微粒極少、暗褐色土小塊、ローム微粒
- 6 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土小塊各多め
- 7 黒色土 11層に類似 粘性あり
- 8 暗褐色土 6層にローム多量、黒色土
- 9 暗褐色土 6層にローム多量、黒色土
- 10 黒色土 11層に類似 粘性あり
- 11 黒色土 暗褐色土粒
- 12 暗褐色土 黒褐色土・ソフトロームの混合層・ローム小ブロック

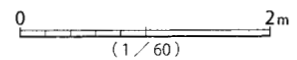
SK72



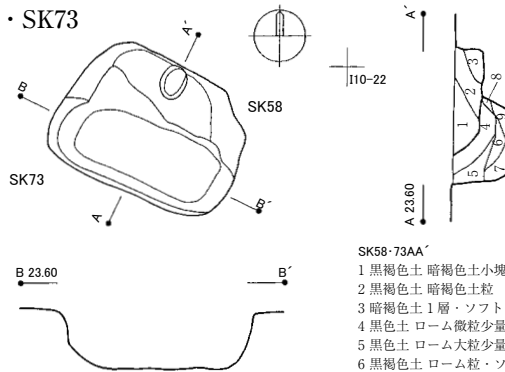
SK74



竪穴



SK58・SK73



SK58・73AA'

- 1 黒褐色土 暗褐色土小塊
- 2 黒褐色土 暗褐色土粒
- 3 暗褐色土 1層・ソフトロームの混合土
- 4 黒色土 ローム微粒少量
- 5 黒色土 ローム大粒少量
- 6 黒褐色土 ローム粒・ソフトローム、黒色土粒
- 7 暗褐色土 黒色土・ローム小ブロック・ソフトロームの混合土
- 8 暗褐色土 黒色土・ソフトロームの混合土・ローム大粒
- 9 暗褐色土 黒色土・ロームブロックの混合土

Fig.460 SK70、SK71、SK72、SK58、SK73、SK74 実測図

### SK75 099地区 (Fig.461)

I10-07付近に位置する土坑である。竪穴建物跡(1012・1013)に重複する。新旧関係は土層断面図から本遺構が新しい。発掘調査時点では099-3030号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.50m×1.00m、確認面からの深さは0.53mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。底面は隅丸方形で、比較的平坦且つ水平である。断面形状は、短軸方向では逆台形だが左右非対称で、北側に大きく開いて開口する。長軸方向では、東側で垂直方向に立ち上がる。現場所見では下位に人為的な内部施設が認められるため、土坑であると判断している。但し図面上は該当する人為的な部位を断定できない。出土遺物は無い。

### SK76 099地区 (Fig.461)

I10-26付近に位置する土坑である。北東にやや離れてSK75が位置する。発掘調査時点では099-3032号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.20m×1.00m、確認面からの深さは、0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-78°-Wである。底面は長楕円形で比較的平坦且つ水平である。断面形状は鍋底形を呈し、底面から丸みを帯びて、やや開きながら開口する。覆土の状況は東西で異なるが、明瞭な棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

### SK77 099地区 (Fig.461)

I11-82付近に位置する土坑である。南側で竪穴建物跡(1031)と重複し、東側にSM1115が位置する。新旧関係は、土層断面から、(1031)に対し本遺構が新しい。西側で攪乱を受けている。発掘調査時点では099-3022号遺構と呼称されている。

平面形状は、楕円形で、規模は2.60m×1.75m、確認面からの深さは、0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-78°-Wである。底面は長楕円形で凹凸が激しいが、ほぼ水平で、棺痕跡範囲が1段窪んでいる。断面形状は、長軸方向が下位は長方形で、上位は逆台形に開き、短軸方向は、左右非対称で、北側が底面から直線的にやや開き気味に立ち上がるのに対し、南側は明瞭な立ち上がりを持たずに、内湾しながら開口している。北東側でオーバーハングしている部位が認められる。底面に認められる長方形の窪みは木棺を据えた範囲と考えられ、1.69m×(0.38)m、深さ0.65mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-77°-Wである。

### SK78・79 099地区 (Fig.461、PL.61・204・215)

SK78はI12-02付近に位置する土坑である。東側にSK79が近接する。新旧関係は不明であるが、現場所見では同様な粘土層が共通して認められること、相互の位置関係から、極めて近い時期のものと捉えている。発掘調査時点では099-3021B号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は0.76m×0.72m、確認面からの深さは、0.26mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Wである。底面は不整形で凹凸があるものの、おおむね平坦で、断面形状は鍋底形を呈する。出土遺物は無い。

SK79はI12-02付近に位置する土坑である。西側にSK78が近接する。新旧関係は不明であるが、現



場所見では同様な粘土が共通して認められること、相互の位置関係から、極めて近い時期のものと捉えている。発掘調査時点では099-3021A号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.24m×1.18m、確認面からの深さは、0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-78°-Wである。底面は不整形で凹凸があるものの、おおむね平坦で、断面形状は長軸・短軸方向で鍋底形を呈する。出土遺物は、1が鈴形土製品としたが、分銅の可能性はある。2が鉄片、他に軽石が覆土上層よりの出土と記録されるが、軽石は確認できない。周囲に粘土範囲が認められるが、垂直方向の記録がないため、遺物との関係は不明である。

#### SK80 099地区 (Fig.462、PL.61～62)

H13-62付近に位置する土坑である。竪穴建物跡(1050)と重複する。新旧関係は土層断面から本遺構が新しい。発掘調査時点では099-3024号遺構と呼称されている。

平面形状は、隅丸長方形で、規模は2.15m×1.00m、確認面からの深さは、0.53mを測る。主軸方位は長軸方向からN-34°-Wである。底面は隅丸長方形もしくは、長楕円形で、凹凸が認められるものの、おおむね平坦且つ水平である。断面形状は、鍋底形で、底面から丸みを帯びて開きながら立ち上がる。墓壇の可能性はあるが、覆土の状況は自然堆積で、明瞭な棺痕跡が認められないことから、土坑としておく。出土遺物は無い。

#### SK81 099地区 (Fig.462)

I13-66付近に位置する土坑である。竪穴建物跡(1071)と重複する。新旧関係は、現場所見から本遺構が新しい。発掘調査時点では099-3364号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は(4.10)m×0.95m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-49°-Wである。底面は長方形で平坦且つ水平である。断面形状は、逆台形を呈する。出土遺物は無い。帰属時期は、現場所見から近世の所産と考えられる。

#### SK82 099地区 (Fig.462)

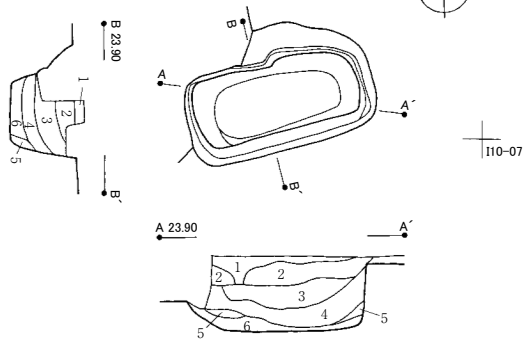
J15-88付近に位置する土坑である。南側にSM1009が位置する。重複する遺構は無い。発掘調査時点では099-3030号遺構と呼称されているが、この番号を付与した遺構が2遺構存在するため、本遺構は欠番となっていた099-3029号遺構を整理段階で付与している。

平面形状は隅丸長方形で、規模は3.35m×1.10m、確認面からの深さは0.79mを測る。主軸方位は長軸方向からN-67°-Eである。底面は隅丸長方形で、僅かな凹凸が認められ、長軸方向では水平だが、短軸方向では北側に傾斜する。断面形状は、底面から丸みを帯びて垂直方向に立ち上がる。覆土の状況は自然堆積とはいえ、内部に構造体が存在したと考えられる。特に北側の土層断面で顕著に認められる。構造体は木棺を推定するが、規模等を判断する材料に欠ける。出土遺物は無い。

#### SK83 099地区 (Fig.462、PL.62)

L16-28付近に位置する土坑である。北側にSM1009が位置する。重複する遺構は無い。発掘調査時点では099-3135号遺構と呼称されているが、この番号を付与した遺構が2遺構存在するため、本遺構

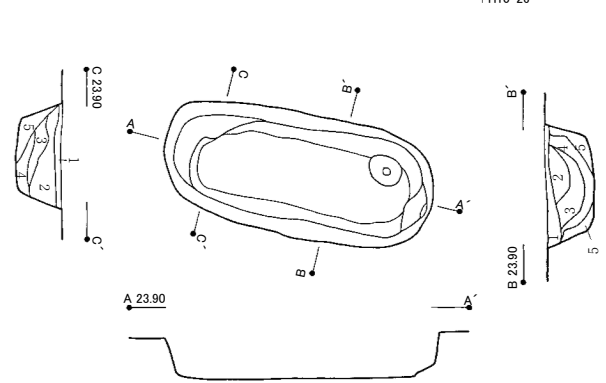
SK75



SK75AA'-BB'

- 1 黒褐色土 黒色土・ローム微粒の混合層
- 2 黒褐色土 黒色土 軟質
- 3 黒色土 黒色土とローム・ソフトローム多量
- 4 暗褐色土 暗褐色土・黒色土・ロームの混合層
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック 硬質
- 6 暗褐色土 黒色土多量

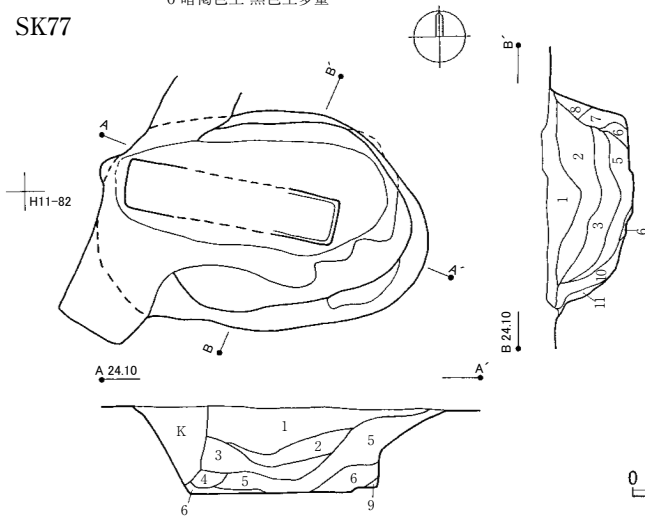
SK76



SK76BB'-CC'

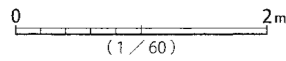
- 1 黒褐色土 暗褐色土粒
- 2 黒褐色土 暗褐色土粒、ソフトローム粒
- 3 黒褐色土 暗褐色土粒多量、ローム大粒少量
- 4 暗褐色土 3層・ソフトロームの混合層
- 5 暗褐色土 4層より明るいローム多量

SK77

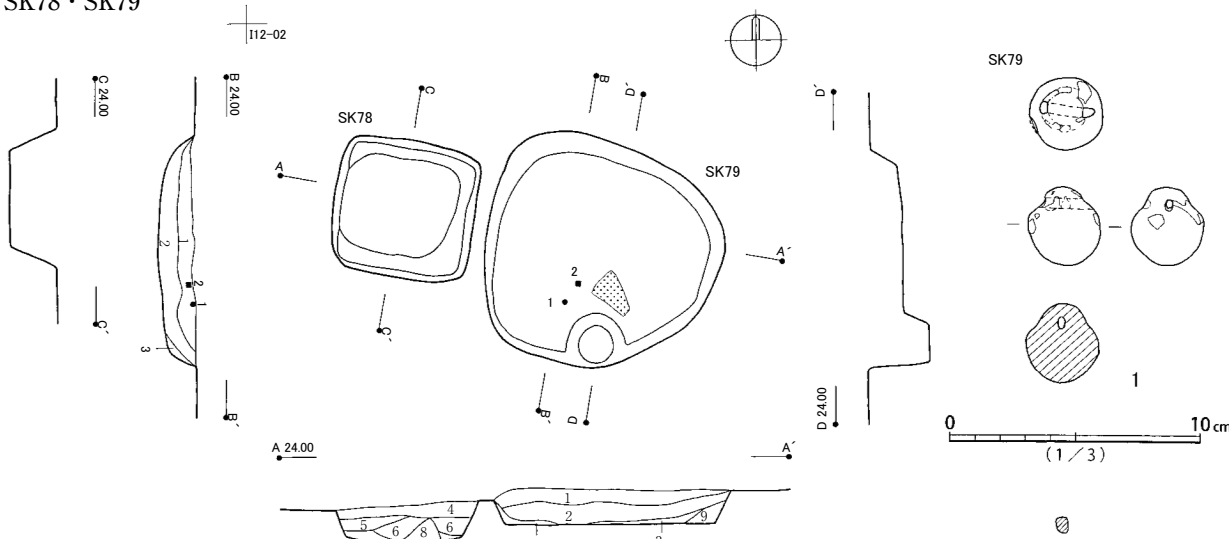


SK77AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム大粒
- 2 黒褐色土 暗褐色土小塊多量
- 3 黒色土 暗褐色土粒、ソフトローム小塊・ローム微粒
- 4 黒色土 ローム微粒
- 5 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒各多量
- 6 黒褐色土 ローム小ブロック・ソフトローム粒多量
- 7 黒褐色土 ソフトローム微粒多量
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック・ソフトローム各多量
- 10 暗褐色土 ローム小ブロック多量
- 11 ソフトロームブロック



SK78・SK79



SK78・79AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム微粒、粘土微粒各少量
- 2 黒褐色土 ソフトローム粒
- 3 黒褐色土 ローム大・小粒多量
- 4 黒褐色土 ローム粒・ソフトローム粒、粘土塊
- 5 暗褐色土 4層・ロームの混合層
- 6 暗褐色土 ローム粒多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック
- 8 暗黄褐色土 ソフトローム主体
- 9 ロームブロック

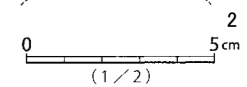
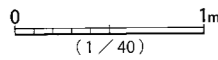


Fig.461 SK75、SK76、SK77、SK78、SK79 実測図

は整理段階で仮番号を付与している。

平面形状は長楕円形もしくは隅丸長方形で、規模は2.50m×1.15m、確認面からの深さは、0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。底面は長楕円形で平坦且つ水平である。断面形状は、逆台形でやや丸みを持って開きながら立ち上がる。長軸方向の両端部に深さ0.19mのピットが認められる。長軸方向の覆土の状況から、木棺が置かれた可能性があるが規模は不明。

出土遺物は無い。

#### SK84 099地区 (Fig.463、PL.62)

L16-60付近に位置する土坑である。北側にSM1009が、東側にSM1139が位置する。重複する遺構は無い。発掘調査時点では099-3136号遺構と呼称されているが、この番号を付与した遺構が2遺構存在するため、本遺構は整理段階で仮番号を付与している。

平面形状は、隅丸長方形で、規模は3.62m×2.76m、確認面からの深さは、0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。大きく垂直方向に2段の構造を持っており、上段はテラス状を呈し、表面には凹凸が認められる。断面では、西から東にかけて曲面をもって傾斜する。下段は上段から0.51m深く北側に寄って掘り込まれている。北側面では僅かに天井を有する。底面は隅丸長方形で、平坦だが、東側に僅かに傾斜する。断面形状は長軸方向で逆台形を呈し、底面から明瞭に立ち上がり、開きながら開口する。覆土の状況から、下段に木棺が置かれた可能性があるが、規模は不明。出土遺物は無い。

#### SK85 099地区 (Fig.463)

J13-62付近に位置する土坑である。西側で竪穴建物跡(1101)と重複し、北側で攪乱を受けている。新旧関係は土層断面から(1101)に対して本遺構が新しいとみられる。発掘調査時点では099-3026号遺構と呼称されている。

平面形状は、長楕円形で、規模は2.44m×1.04m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は長楕円形を呈し、長軸方向の両端部に一段高い平坦面を有する。断面形状は長軸方向で、底面から丸みを帯びて立ち上がり、平坦面からは垂直方向に明瞭に立ち上がる。覆土の状況からは明瞭な木棺痕は認められない。中央部の底面を有する窪みは、ロームブロック主体で、人為的に均された後に機能した旨の現場所見がある。出土遺物は無い。

#### SK86 099地区 (Fig.463)

J13-80付近に位置する土坑である。西側に竪穴建物跡(1127)が近接する。重複する遺構は無い。発掘調査時点では099-3027号遺構と呼称されている。

平面形状は、円形で、規模は(1.50)m×1.50m、確認面からの深さは0.38mを測る。西側の方形状の張り出しは、土層断面から、同時期のものではなく、のちの掘り込みであることが判る。底面は円形で、僅かに凹凸が認められるが水平である。断面形状はフラスコ状を呈し、底面から丸みを帯びて内傾して立ち上がる。覆土は自然堆積で、上層に微量の焼土粒を含む。出土遺物は無い。帰属時期は、不明だが縄文時代の遺構である可能性も否めない。

### SK87 099 地区 (Fig.464、PL.175)

K13-26 付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。発掘調査時点では 099-311 号遺構と呼称されている。

全体の平面形状は方形二つが連結した形状で、規模は 3.40m×1.75m、確認面からの深さは、1.08m を測る。主軸方位は長軸方向から N-1°-E である。北側に張り出したテラス状の平坦面は遺構確認面より 0.42m で、底面より 0.66m 上位に位置する。底面は方形で北側に寄って位置し、細かな凹凸があり、北側に傾斜する。断面形状は、南側では木根による攪乱が認められるが、長軸・短軸方向で対称性は低い。底面には人骨が認められるため、北側の方形部分は埋納坑とみられる。本来は、南側の方形竪坑と、北側へ一段下がった方形の埋納坑で構成されていたと考えられ、埋納坑には天井があった可能性もあるが、土層断面図が無いため評価不能である。

人骨は、北側に傾斜する底面から出土し、土師器甕をかぶせた状態であった。現場所見には骨の被熱が記録されていないことと、人骨が不自然に一点に集中して出土していることから、改葬墓とみられる。遺物は 1 が土師器甕で、底面直上に口縁を下にして出土している。

帰属時期は、確証はないが、出土した甕から 9 世紀中頃の所産と考えられる。

### SK88 099地区 (Fig.17~18)

K13-48 付近に位置する土坑である。SK87 など本遺構を含め 12 基の土坑により一群を形成する。周囲には西側に古墳時代終末期以降とみられる方形周溝状遺構の SM1047 が、東側には帰属時期は不明であるが、円墳の SM1036 が近接する。本遺構は記録類が限られ、全体図に掲載した以外の個別図面は作成していない。

発掘調査時点では 099-3117 号遺構と呼称されている。

平面形状は、不整形もしくは不整楕円形で、規模など詳細は不明である。木棺痕は検出されていない。出土遺物は無い。

本遺構を含む土坑群の性格や時期は確定し得ないが、集落に近い位置にあることから、古墳との関係のみを問題とすることはできないが、SM1047 の西側に展開する SK101 などを含む一群は、墳墓周溝内には認められない配置をとることから、墳墓より後出で、SM1047 に関連する遺構である可能性がある。

### SK89 099地区 (Fig. 17~18)

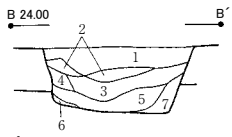
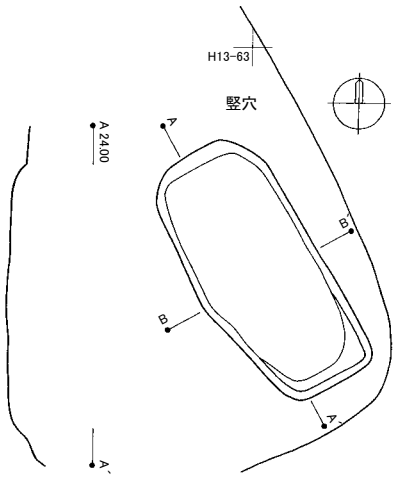
K13-48 付近に位置する土坑である。SK87 など本遺構を含め 12 基の土坑により一群を形成する。周囲には西側に古墳時代終末期以降とみられる方形周溝状遺構の SM1047 が、東側には帰属時期は不明であるが、円墳の SM1036 が近接する。本遺構は記録類が限られ、全体図に掲載した以外の個別図面は作成していない。

発掘調査時点では 099-3116 号遺構と呼称されている。

平面形状は、不整形もしくは不整楕円形で、規模など詳細は不明である。木棺痕は検出されていない。出土遺物は無い。

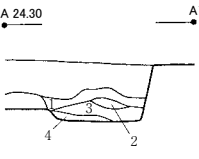
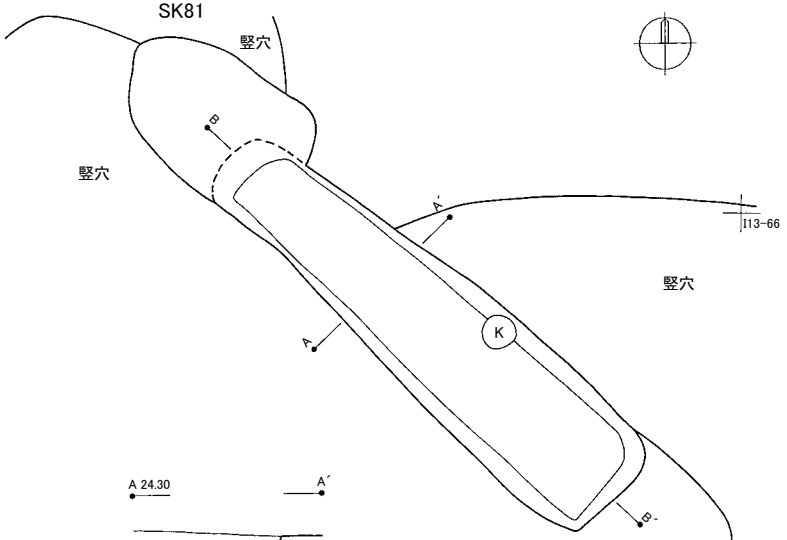
本遺構を含む土坑群の性格や時期は確定し得ないが、集落に近い位置にあることから、古墳との関係のみを問題とすることはできないが、SM1047 の西側に展開する SK101 などを含む一群は、墳墓周溝内

SK80



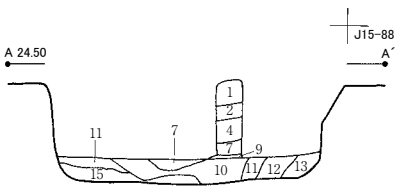
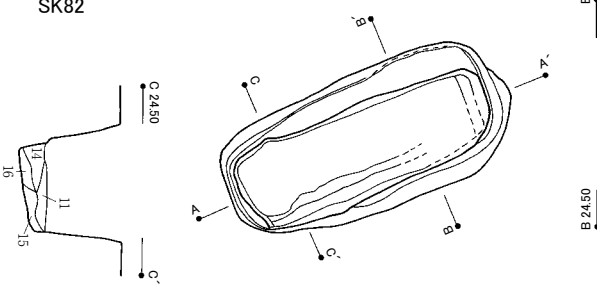
- SK80BB'
- 1 黒褐色土 暗褐色土小塊多量
  - 2 黒褐色土 暗褐色土小塊、ローム粒・ソフトローム粒
  - 3 黒褐色土 暗褐色土小塊・黒色土粒多量
  - 4 黒褐色土 暗褐色土小塊、ローム微粒、黒色土粒
  - 5 黒色土 暗褐色土粒多量、ローム微粒
  - 6 暗褐色土 ローム・黒褐色土・暗褐色土粒の混合層
  - 7 黒褐色土 暗褐色土小塊、ローム微粒、黒色土粒

SK81



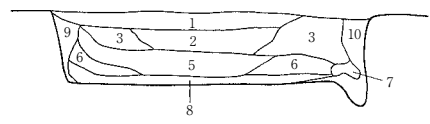
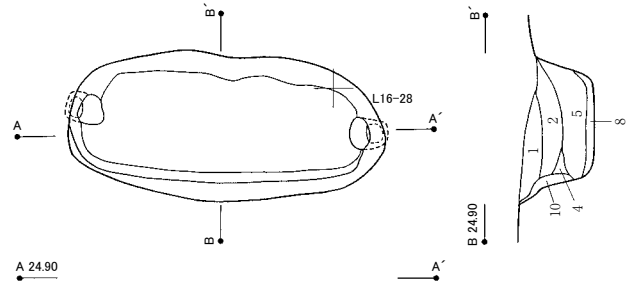
- SK81AA'
- 1 暗褐色土 暗褐色土塊多量・黒色土粒多量 やや暗い
  - 2 暗褐色土 暗褐色土塊多量・黒色土粒多量、焼土微粒多量
  - 3 暗褐色土 暗褐色土塊多量・黒色土粒多量、ロームブロック少量
  - 4 暗褐色土 暗褐色土塊多量・黒色土粒多量、ロームブロック多量、黒色土粒

SK82



- SK82AA'・BB'・CC'
- 1 黒褐色土 暗褐色土小塊
  - 2 黒色土 暗褐色土小塊、ローム微粒
  - 3 黒色土 暗褐色土小塊、ソフトローム粒多量
  - 4 黒褐色土 暗褐色土小塊・黒色土粒多量
  - 5 黒褐色土 ローム大粒・ソフトローム粒
  - 6 暗褐色土 ローム小ブロック
  - 7 黒褐色土 ローム大粒・ソフトローム小塊
  - 8 — ローム塊
  - 9 黒褐色土 ローム粒多量
  - 10 黒褐色土 ローム粒多量 ローム、黒褐色土半々
  - 11 黒褐色土 ローム粒多量
  - 12 黒色土 ローム微粒
  - 13 黒色土 ローム大粒・ソフトローム粒
  - 14 黒褐色土 ローム粒多量 ローム、黒褐色土半々
  - 15 黄褐色土 ローム大ブロック集合層
  - 16 黒褐色土 ローム大ブロック・大粒混入
  - 17 褐色土 ローム・暗褐色土の混合土
  - 18 褐色土 ローム大ブロック・ローム、暗褐色土
  - 19 黄褐色土 ロームが主体、暗褐色土小塊
  - 20 褐色土 ローム大ブロック・ローム、暗褐色土
  - 21 黄褐色土 ロームが主体、暗褐色土小塊

SK83



- SK83AA'・BB'
- 1 黒褐色土 ローム粒若干
  - 2 黒色土 ローム粒若干
  - 3 黒褐色土 ローム粒多量
  - 4 —
  - 5 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒
  - 6 黒褐色土 ローム粒多量・ロームブロック若干、褐色土
  - 7 褐色土 ロームブロック
  - 8 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック
  - 9 —
  - 10 暗黄褐色土

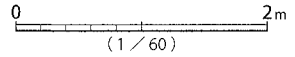
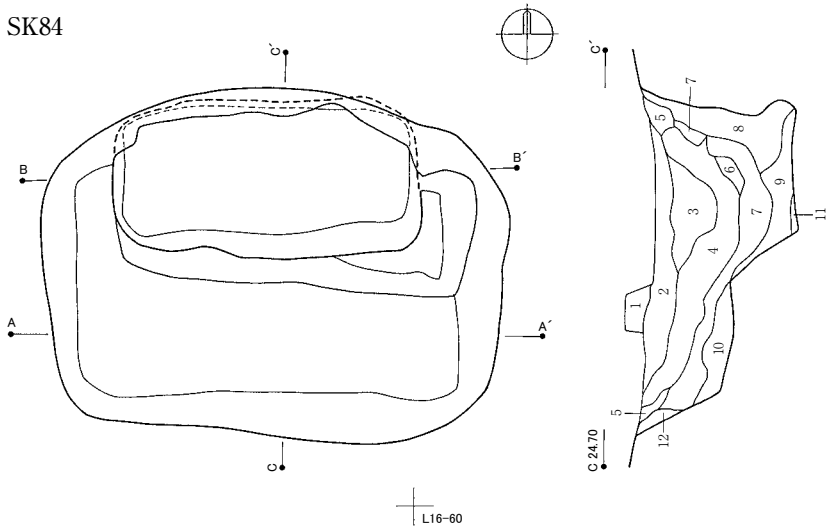


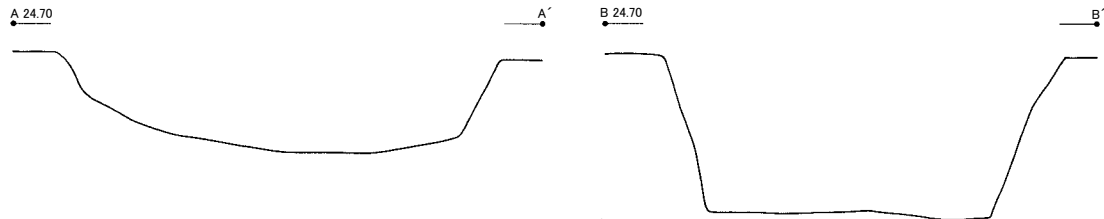
Fig.462 SK80、SK81、SK82、SK83 実測図

SK84

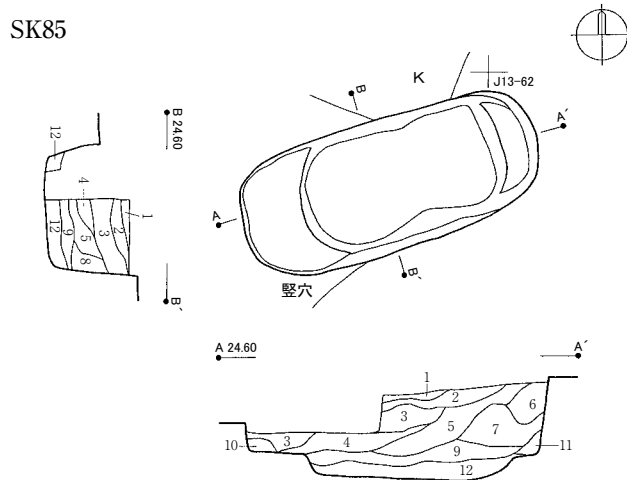


SK84CC'

- 1 黒褐色土 黒色土、ローム粒若干
- 2 黒褐色土 黒色土、ローム粒若干
- 3 黒褐色土 褐色土ブロック、ローム粒
- 4 黒褐色土 1層に近い褐色土 3層より少量
- 5 暗褐色土 ローム粒多量 壁流れ込み
- 6 暗褐色土 ローム粒 7層より少量
- 7 暗褐色土 褐色土、ローム粒多量
- 8 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・ローム塊若干 天井落下による
- 9 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック 天井落下による
- 10 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック やや硬い
- 11 暗褐色土
- 12 — ロームブロック



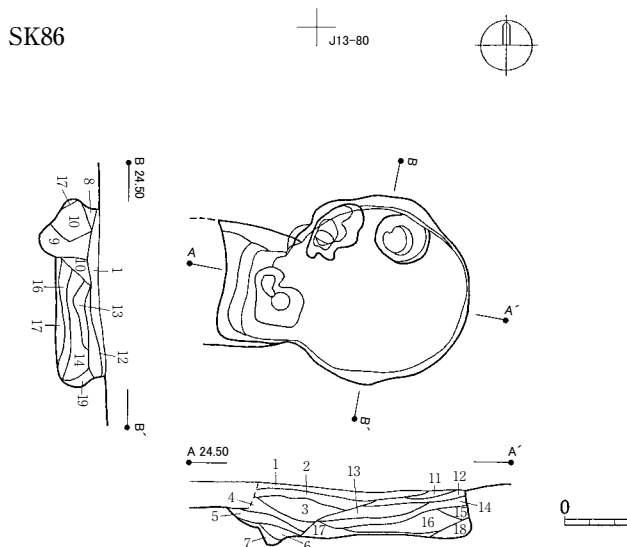
SK85



SK85AA'・BB'

- 1 黒褐色土 黒褐色土に暗褐色土小塊多量
- 2 黒褐色土 黒褐色土にローム大ブロック・ローム大粒多量
- 3 黒褐色土 黒褐色土に暗褐色土小塊多量
- 4 黒褐色土 黒色土に暗褐色土粒多量、ローム大粒少量
- 5 黒褐色土 黒色土にローム小ブロック多量
- 6 黒褐色土 黒色土にローム小ブロック、暗褐色土粒多量、炭化粒子
- 7 黒褐色土 黒褐色土にローム大ブロック・ローム大粒各多量
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック層に黒褐色土粒少量
- 9 黒褐色土 黒色土にローム小ブロック、暗褐色土粒多量、炭化粒子
- 10 暗褐色土 暗褐色土小塊の集合層に黒褐色土粒
- 11 黒色土 黒色土 軟質
- 12 褐色土 ローム大ブロックとローム粒の集合層

SK86



SK86AA'・BB'

- 1 黒褐色土 暗褐色土小塊
- 2 黒色土 暗褐色土小塊、ローム微粒
- 3 黒褐色土 暗褐色土小塊多量
- 4 黒褐色土 暗褐色土小塊多量、ローム粒、焼土微粒
- 5 暗褐色土 暗褐色土粒多量、ローム大粒・小粒多量
- 6 暗褐色土 5層に黒色土粒混入
- 7 褐色土 ロームが主体 軟質
- 8 褐色土 ソフトロームブロック (主体)
- 9 黒褐色土 黒色土・暗褐色土・ローム粒の混合土 植物の根による攪乱か?
- 10 暗褐色土 ソフトローム塊多量
- 11 黒褐色土 暗褐色土小塊
- 12 黒色土 暗褐色土小塊、ローム微粒
- 13 黒褐色土 暗褐色土小塊・黒色土粒多量
- 14 黒色土 暗褐色土小塊、ソフトローム粒多め
- 15 黒褐色土 暗褐色土小塊・黒色土粒多量
- 16 黒褐色土 ローム大粒・ソフトローム粒
- 17 暗褐色土 ローム小ブロック
- 18 黒褐色土 ローム大粒・ソフトローム小塊
- 19 暗褐色土 ローム・ソフトローム小塊・黒褐色土の混合土

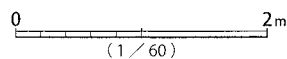


Fig.463 SK84、SK85、SK86 実測図

には認められない配置をとることから、墳墓より後出で、SM1047に関連する遺構である可能性がある。

### SK90 099地区 (Fig.294)

K14-22付近に位置する土坑である。SM1036盛土下に位置し、東側にSK91が隣接する。SK87など本遺構を含め12基の土坑により一群を形成するが、墳丘下に位置することから、SK91とともに、他の土坑とは性格・帰属時期が異なる可能性がある。

発掘調査時点では099-3114号遺構と呼称されている。

平面形状は、楕円形もしくは不整楕円形で、規模は1.04m×0.86m、確認面からの深さは計測不能、主軸方位は長軸方向からN-0°である。木棺痕は検出されていない。

出土遺物は無い。

本遺構を含む土坑群の性格や時期は確定し得ないが、集落に近い位置にあることから、古墳との関係のみを問題とすることはできない。特にSK91以外の土坑群とは、墳丘下に位置するという立地上の違いを重視するれば、SM1036に先行するものである可能性が高い。

### SK91 099地区 (Fig.294)

K14-22付近に位置する土坑である。SM1036盛土下に位置する。西側にSK90が隣接する。SK87など本遺構を含め12基の土坑により一群を形成するが、墳丘下に位置することから、SK91とともに、他の土坑とは性格・帰属時期が異なる可能性がある。

発掘調査時点では099-3115号遺構と呼称されている。

平面形状は、楕円形もしくは不整楕円形で、規模は1.20m×1.00m、確認面からの深さは計測不能、主軸方位は長軸方向からN-1.5°-Eである。木棺痕は検出されていない。

出土遺物は無い。

本遺構を含む土坑群の性格や時期は確定し得ないが、集落に近い位置にあることから、古墳との関係のみを問題とすることはできない。特にSK90以外の土坑群とは、墳丘下に位置するという立地上の違いを重視するれば、SM1036に先行するものである可能性が高い。

### SK92・93 099地区 (Fig.464)

SK92はK13-64付近に位置する土坑である。SM1047の東側に位置し、東側にSK93が近接する。遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3112号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.20m×1.55m、確認面からの深さは、0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-25°-Eである。底面は円形で平坦且つ水平で、東側上位にテラス状の平坦面をもつ。断面形状は整理段階の再構成図から逆台形を呈する。出土遺物は無い。

SK93はK13-66付近に位置する土坑である。SM1047の東側に位置し、西側にSK92が近接する。遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3113号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は3.80m×0.75m、確認面からの深さは、0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-62°-Wである。底面は長楕円形を呈し、平坦且つ水平で、長軸方向両端部に階段状の段が認められる。断面形状は整理段階の再構成図から逆台形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK94 099地区 (Fig.464)

K13-68付近に位置する土壙である。竪穴建物跡(1129)と重複し、西側にSM1047、南側にSM1051が位置する。(1129)との新旧関係は、土層断面図から本遺構が新しい。発掘調査時点では099-3109号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.25m×1.00m、確認面からの深さは、0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Wである。底面は長方形で、平坦且つ水平である。断面形状は長方形に近い逆台形を呈し、側面は、特に長軸方向で垂直方向に立っている。覆土の状況から木棺の存在を想定する。規模は、土層最下部の状況から長軸1.75m×短軸0.50mを復元する。出土遺物は無い。

#### SK95 099地区 (Fig.465)

K14-80付近に位置する土坑である。北側にSM1036が近接するが、遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3110号遺構と呼称されている。記録類が限られ、エレベーション図は整理段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は2.20m×1.70m、確認面からの深さは、0.12mを測る。主軸方位は長軸方向からN-29°-Eである。断面形状は、長軸方向で逆台形、短軸方向ではレンズ上を呈する。出土遺物は無い。遺構の性格は不明である。

#### SK96 099地区 (Fig.465)

L13-28付近に位置する土坑である。西側にSM1047が位置し、遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3108号遺構と呼称されている。記録類が限られ、エレベーション図は整理段階で復元している。

平面形状は長方形で、規模は2.60m×1.40m、確認面からの深さは、0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Eである。底面は長方形で水平を保っていない。断面形状は、長軸方向で中央から両側面にかけて傾斜し、短軸方向では北側に傾斜する。立ち上がりはいずれも明瞭で、開きながら開口する。出土遺物は無い。形状から土壙の可能性もあるが、決定的な根拠に欠ける。

#### SK97 099地区 (Fig.465)

L13-44付近に位置する土坑である。北西側にSM1047が近接し、南東側でSK98と重複する。新旧関係は現場所見から、SK98に対し本遺構が新しいとみられる。発掘調査時点では099-3104号遺構と呼称されている。記録類が限られ、エレベーション図は整理段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は1.75m×1.50m、確認面からの深さは、0.96mを測る。主軸方位は長軸方向からN-36°-Wである。底面は楕円形で極めて狭い。断面形状は、漏斗状を呈するが、北側上位に狭い平坦面がある。出土遺物は無い。帰属時期は不明であるが、現場所見から、新しい掘削である可能性も否めない。

#### SK98 099地区 (Fig.465)

L13-44付近に位置する土壙である。北西側にSM1047が近接し、西側でSK97と重複する。新旧関



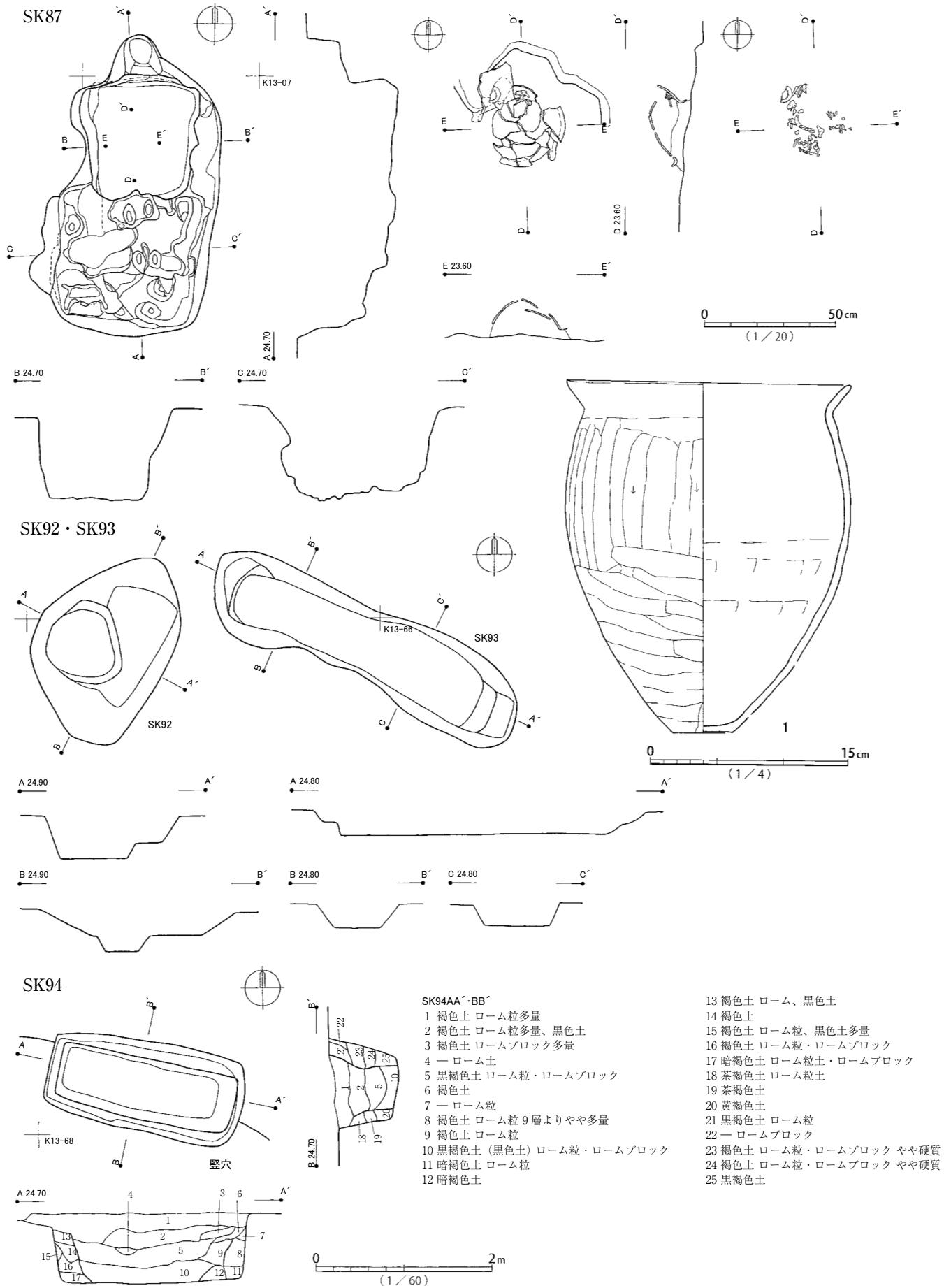


Fig.464 SK87、SK92、SK93、SK94 実測図

係は現場所見から、SK97に対し本遺構が古いとみられる。発掘調査時点では099-3105遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.35m×1.50m、確認面からの深さは、0.80mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Wである。底面は長方形を呈し、長軸方向で僅かな段差を持つ。断面形状は漏斗状を呈し、底面幅に対し、開口部の幅は、短軸方向でより広く開口する。覆土の状況からは、明瞭な内部施設の痕跡は見いだせないが、規模・形状から土壇と判断した。出土遺物は無い。

#### **SK99・100 099地区 (Fig.465、PL.62)**

SK99はK11-42付近に位置する土坑である。東側にSM1091が近接し、SK100と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3132号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため詳細は不明である。

平面形状は不整形で、規模は1.90m×1.70m、確認面からの深さは、0.28mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Eである。底面は楕円形を呈する。出土遺物は無い。

SK100は、K11-42付近に位置する土坑である東側にSM1091が近接し、西側でSK99と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3133号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため詳細は不明である。

平面形状は隅丸方形か不整形で、規模は2.90m×(1.90)m、確認面からの深さは、0.16mを測る。主軸方位は長軸方向からN-44°-Eである。底面は隅丸方形に近い。出土遺物は無い。

#### **SK101・102・103 099地区 (Fig.466、PL.62～63)**

SK101は、K11-82付近に位置する土坑である。SM1091・1158間に位置し、東側でSK102と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3082号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られ、エレベーション図は、整理作業段階で復元している。

平面形状は隅丸方形か円形とみられ、規模は1.68m×(1.63)m、確認面からの深さは、0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-34°-Eである。底面は円形に近い。出土遺物は無い。

SK102は、K11-82付近に位置する土壇である。SM1091・1158間に位置し、西側にSK101が南側にSK103が重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3081号遺構と呼称されている。平面形状は隅丸長方形で、規模は(2.44)m×1.74m、確認面からの深さは、0.78mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。底面は隅丸長方形を呈する。断面形状は、短軸方向で左右非対称であり、南側が底面から開きながら立ち上がるのに対し、北側では、立ち上がってから内傾する。いわゆる有天井土壇の壁面に似るが、上部の張り出しが、底面端部を超えていないことがそれとは異なる。覆土の状況から、内部施設があった可能性があるが、棺痕跡は不明瞭で、規模は不明。出土遺物は無い。

SK103は、K11-82付近に位置する土坑である。SM1091・1158間に位置し、北側にSK102が重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3083号遺構と呼称されている。エレベーション図は整理段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は1.52m×1.48m、確認面からの深さは、0.11mを測る。主軸方位は長軸方向からN-45°-Wである。底面は不整形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK104 099地区 (Fig.466)

K11-64付近に位置する土坑である。東側にSM1091が近接し、SK105と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3084号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られ、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は2.20m×1.82m、確認面からの深さは、1.09mを測る。主軸方位は長軸方向からN-3°-Wである。底面は楕円形を呈し、北側に一段高い平坦面を持つ。出土遺物は無い。

#### SK105 099地区 (Fig.466)

K11-64付近に位置する土坑である。東側にSM1091が近接し、西側でSK104が重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3085号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は長楕円形とみられ、規模は計測不能×0.88m、確認面からの深さは、0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は長楕円形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK106・107 099地区 (Fig.467)

SK106はK11-68付近に位置する土坑である。北側でSM1091と、南側でSK107と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3086号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は2.12m×(1.64)m、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Wである。底面は不整形を呈する。出土遺物は無い。

SK107はK11-68付近に位置する土坑である。北側にSM1091が近接し、SK106と重複するが、新旧関係は不明。発掘調査時点では099-3087号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は1.98m×1.64m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Eである。底面は不整形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK108 099地区 (Fig.466、PL.63)

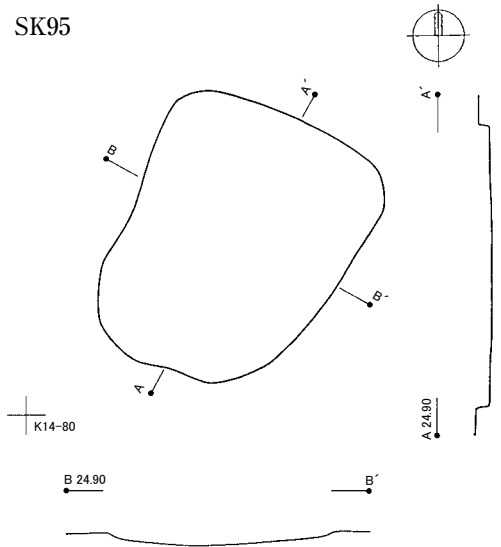
K11-88付近に位置する土坑である。北側にSM1091、東側にSM1047が位置し、SK106・107・109が近接する。発掘調査時点では099-3088号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.16m×0.90m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Eである。底面は隅丸長方形で平坦且つ水平である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈し、底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。内部施設を示す痕跡は認められない。覆土の状況は自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

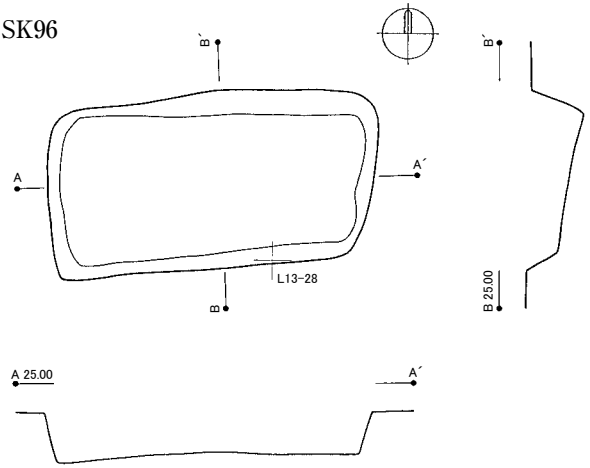
#### SK109 099地区 (Fig.467)

L11-06付近に位置する土坑である。北側にSK106・107・108が、南側にSK111が近接する。発掘調査時点では099-3089号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図

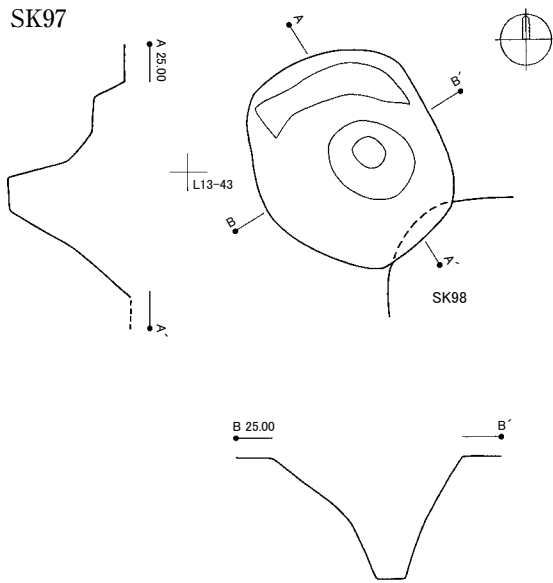
SK95



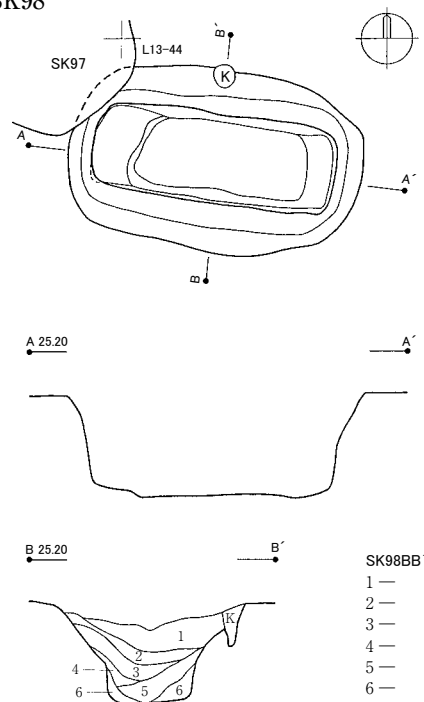
SK96



SK97



SK98



SK99 · SK100

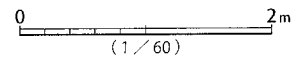
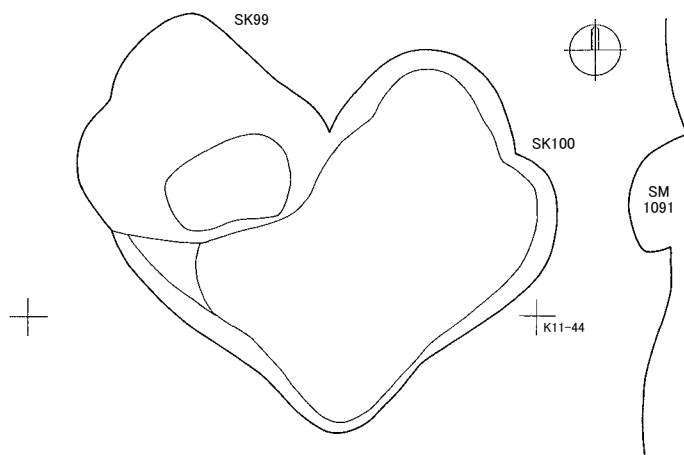


Fig.465 SK95、SK96、SK97、SK98、SK99、SK100 実測図

は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は3.46m×2.28m、確認面からの深さは0.78mを測る。主軸方位は長軸方向からN-48°-Eである。底面は不整形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK110 099地区 (Fig.467、PL.63)

L11-02付近に位置する土壌である。西側にSM1166が近接する以外は、周囲の土坑からは距離を置いて位置する。発掘調査時点では099-3090号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.26m×1.08m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-65°-Eである。底面は隅丸長方形を呈する。断面形状は、短軸方向では鍋底形を呈するが、記録類から、北側側面の下位が部分的に上端線より外側に張り出していることが判る。長軸方向では東側に向けて浅くなる形状を呈する。覆土の状況からは、内部施設の痕跡は得られないが、側壁の状況から有天井土壌と判断した。出土遺物は無い。

#### SK111 099地区 (Fig.467、PL.63)

L11-28付近に位置する土壌である。北側にSK109が位置する。発掘調査時点では099-3091号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.44m×1.20m、確認面からの深さは0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は楕円形で、断面形状は、長軸・短軸方向で鍋底形を呈し、底面から丸みを帯びて開きながら立ち上がる。覆土の状況からは、木棺痕はやや不明瞭ではあるが土壌としておく。出土遺物は無い。

#### SK112 099地区 (Fig.468)

L12-20付近に位置する土坑である。東側にSM1047が、西側にSK117が近接する。発掘調査時点では099-3092号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は2.35m×1.85m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-19°-Wである。底面は楕円形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK113 099地区 (Fig.468、PL.63)

L11-42付近に位置する土壌である。北側から南側にSM1166、SS27、SM1157が、東側にSK114が位置する。発掘調査時点では099-3099号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.50m×1.70m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-10°-Wである。底面は隅丸長方形を基調とするが、南東隅が南側に突出する。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。覆土の状況から内部施設の存在が想定され、規模は短軸方向で0.85mを測る。出土遺物は無い。

#### SK114 099地区 (Fig.468)

L11-64付近に位置する土坑である。西側にSK113、東側にSK115・116が位置する。発掘調査時点では099-3100号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は円形で、規模は1.75m×1.50m、確認面からの深さは0.93mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Wである。底面は不整形で東側上位に平坦面がある。出土遺物は無い。

#### SK115・116 099地区 (Fig.468、PL.193)

SK115は、L11-68付近に位置する土坑である。西側にSK114が、南側にSK116が近接する。発掘調査時点では099-3094号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は円形で、規模は1.00m×0.85m、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位は長軸方向からN-22°-Eである。底面は楕円形を呈する。出土遺物は1が土器甕で覆土中から出土している。

SK116は、L11-68付近に位置する土坑である。北側にSK115が近接する。発掘調査時点では099-3095号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は1.55m×0.95m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-74°-Eである。底面は長方形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK117 099地区 (Fig.468)

L12-40付近に位置する土坑である。東側にSK112、SM1047が位置する。発掘調査時点では099-3093号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.60m×1.65m、確認面からの深さは0.63mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。底面は不整形長方形を呈し、南側面の過半を溝状の掘り込みが位置する。出土遺物は無い。

#### SK118 099地区 (Fig.468)

L12-46付近に位置する土坑である。北側にSM1047が近接する。発掘調査時点では099-3103号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は2.70m×2.20m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Eである。底面は楕円形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK119 099地区 (Fig.469)

L11-88付近に位置する土坑である。西側にSM1157が位置する。発掘調査時点では099-3098号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元して

SK101・SK102・SK103

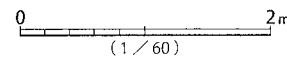
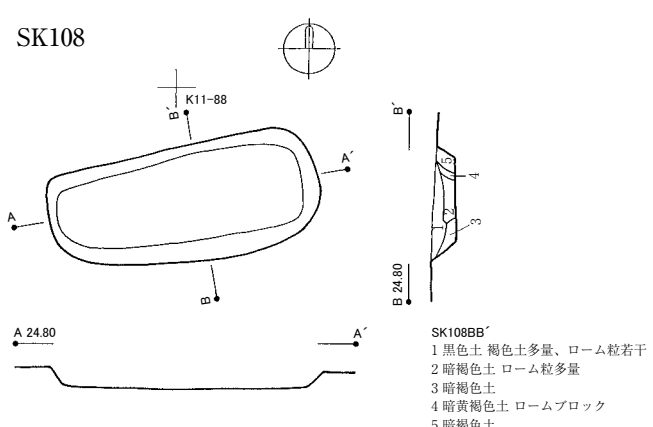
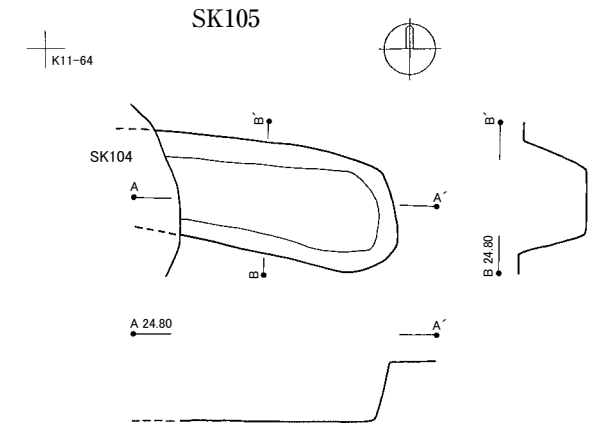
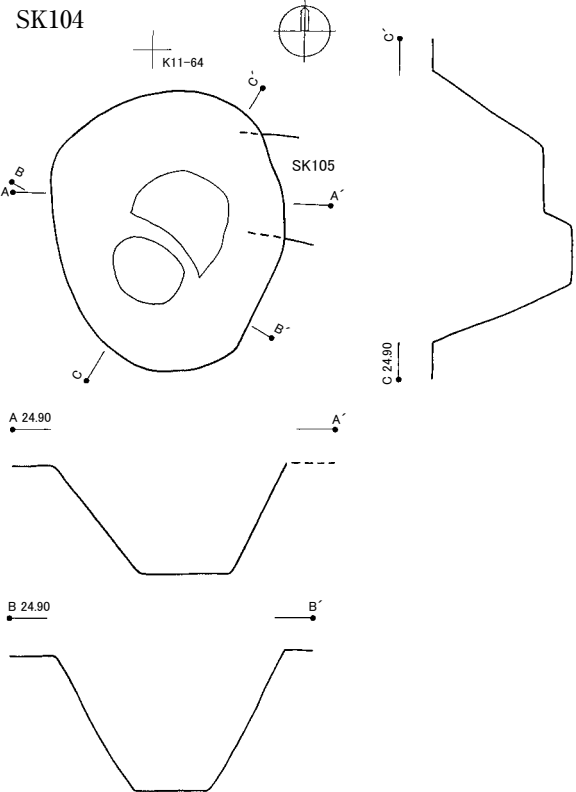
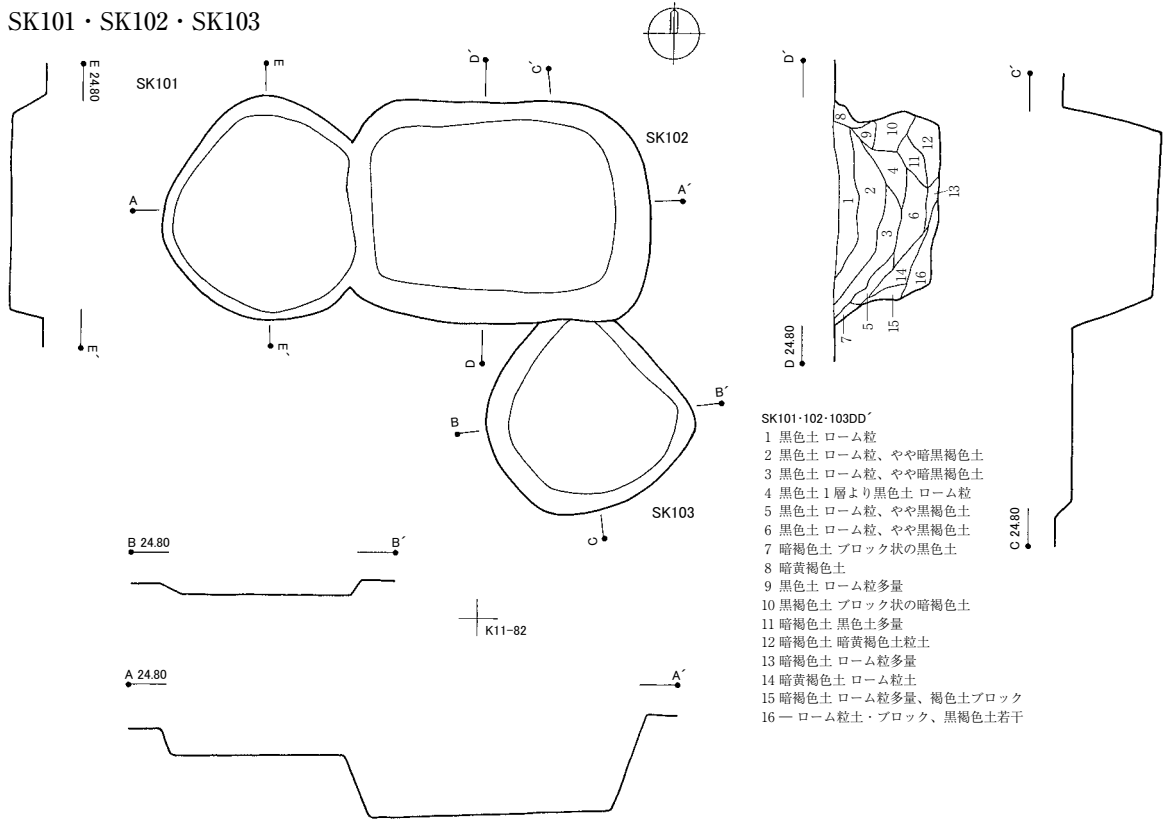
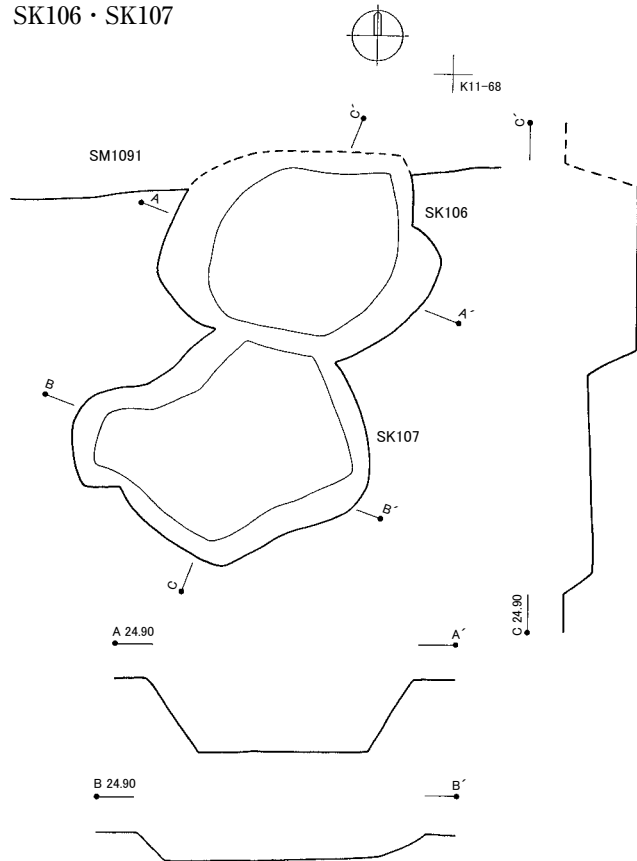
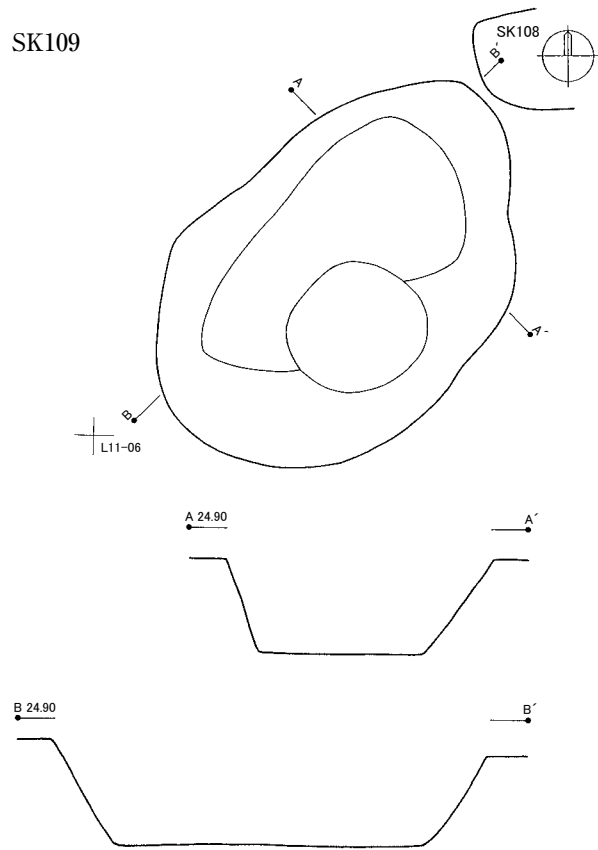


Fig.466 SK101、SK102、SK103、SK104、SK105、SK108 実測図

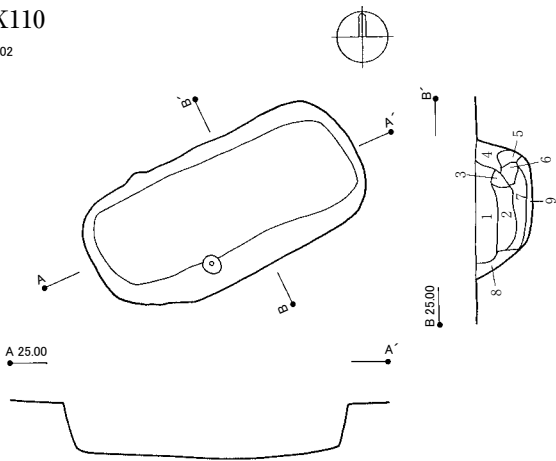
SK106・SK107



SK109



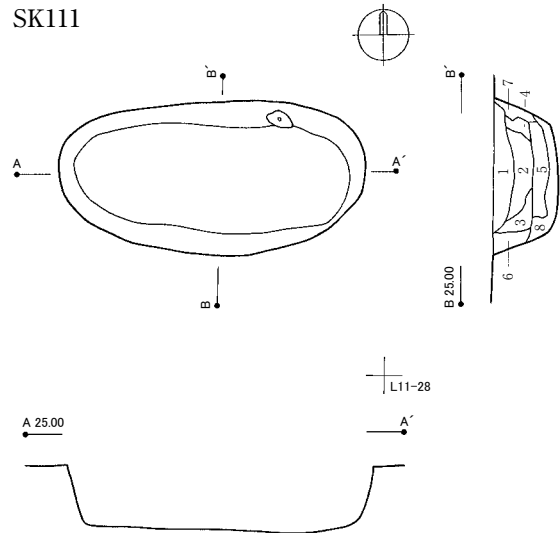
SK110  
L11-02



SK110BB'

- 1 黒色土 ローム粒若干
- 2 黒色土 ローム粒若干
- 3 黒色土 ローム粒若干
- 4 暗黄褐色土
- 5 黒褐色土 ローム粒多量
- 6 暗黄褐色土
- 7 暗褐色土 ブロック状のローム粒、褐色土
- 8 黒色土 ローム粒若干
- 9 -

SK111



SK111BB'

- 1 黒色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 2 黒色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 3 黒色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 4 黒色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 5 黒色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 6 暗褐色土 ローム粒
- 7 暗褐色土 ローム粒
- 8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック

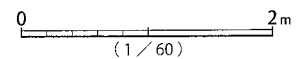


Fig.467 SK106、SK107、SK109、SK110、SK111 実測図



いる。

平面形状は不整形で、規模は1.60m×1.10m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Wである。底面は楕円形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK120・121 099地区 (Fig.469、PL.63)

SK120は、K4-82付近に位置する土坑である。南側にSS86が位置する。発掘調査時点では099-3062号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、詳細は不明である。

平面形状は長楕円形で、規模は2.04m×0.86m、確認面からの深さは不明。主軸方位は長軸方向からN-55°-Eである。底面は長楕円形を呈する。実測遺物は無いが、覆土中から縄文土器片が出土している。

SK121は、K4-82付近に位置する土坑である。北側にSK120が近接し、南側で土坑(3064)と重複する。新旧関係は記録類から本遺構が新しいとみられる。発掘調査時点では099-3063号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、詳細は不明である。

平面形状は方形で、規模は(2.56)m×2.34m、確認面からの深さは不明。主軸方位は長軸方向からN-61°-Eである。底面は方形を呈する。出土遺物は無い。

#### SK122 099地区 (Fig.469、PL.63)

K4-84付近に位置する土坑である。南側にSS-86が、西側にSK121が近接し、西側で攪乱を受ける。発掘調査時点では099-3067号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、詳細は不明である。

平面形状は楕円形で、規模は2.30m×1.66m、確認面からの深さは不明。主軸方位は長軸方向からN-7°-Wである。底面は楕円形を呈する。南西隅に位置するピットは確認面から0.27mを測る。実測遺物は無いが、歯が出土しているとの記録が残る。

#### SK123 099地区 (Fig.469)

K4-86付近に位置する土坑である。北側にSD8、南側にSK124、東側にSK125が位置する。

発掘調査時点では099-3070号遺構とされたが、2遺構に付与されていたため、整理作業段階で099-3068号遺構とした。本遺構は記録類が限られているため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は3.76m×3.06m、確認面からの深さは、0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-23°-Wである。底面は不整形を呈し、北側に楕円形の落ち込みが位置する。この落ち込みは、別遺構の可能性はあるが、記録類が限られ断定できない。この落ち込みは2.16m×1.08m、確認面からの深さは0.29mを測り、主軸方位は長軸方向からN-60°-Eであり、規模・形状はSK-120・124に近似する。

実測遺物は無いが、縄文土器が出土している。

#### SK124 099地区 (Fig.469、PL.64)

K4-88付近に位置する土坑である。北側にSK123が近接する。発掘調査時点では099-3069号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理段階で復元している。

平面形状は不整長方形で、規模は2.20m×1.00m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Eである。底面は長方形で北側側面の一部が外側に張り出す。出土遺物は無い。

#### SK125 099地区 (Fig.470、PL.64・204)

K4-68付近に位置する土坑である。西側にSK123が近接する。発掘調査時点では099-3071号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は1.20m×0.85m、確認面からの深さは不明。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。底面は長方形で、北側上位に同規模のテラス状の平坦面が認められる。出土遺物は1が銅製の煙管吸い口、2が短刀、もしくは刀子の茎から関にかけてとみられ、鍬の収まる部位に木質が遺存する。いずれも覆土中の出土である。

#### SK126 099地区 (Fig.470、PL.64)

K5-62付近に位置する土坑である。北側にSS-95が位置する。発掘調査時点では099-3072号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は1.90m×(1.55)m、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位は長軸方向からN-21°-Wである。底面は楕円形で外周を幅0.20mほどの溝がめぐる。

出土遺物は無い。

#### SK127 099地区 (Fig.470)

L5-20付近に位置する土坑である。SS85の東側周溝端部に重複する。新旧関係を示す記録は無い。発掘調査時点では099-3079号遺構と呼称されている。

平面形状は不整円形で、規模は1.95m×(1.80)m、確認面からの深さは0.69mを測る。主軸方位は長軸方向からN-82°-Wである。底面は不整円形を呈するが、南側が調査区境界となるため完掘ではない。調査区境界を跨ぐ位置を鑑みると、本遺構はSS85周溝端部となる可能性がある。出土遺物は無い。

#### SK128 099地区 (Fig.15～16)

L6-08付近に位置する土坑である。西側には古墳(SW80-253)が位置する。発掘調査時点では099-3138号遺構と呼称されているが、2遺構に同番号が付与されていたため、整理段階では本遺構には仮番号を付けている。本遺構は記録類が限られているため、全体図に図示するにとどまる。

平面形状は隅丸長方形で、規模は計測不能。主軸方位は計測不能である。出土遺物は無い。

#### SK129 099地区 (Fig.470)

L7-45付近に位置する土坑である。SM1002に下層に位置する。発掘調査時点では099-3140号遺構と呼称されているが、記録類が限られるため詳細は不明である。

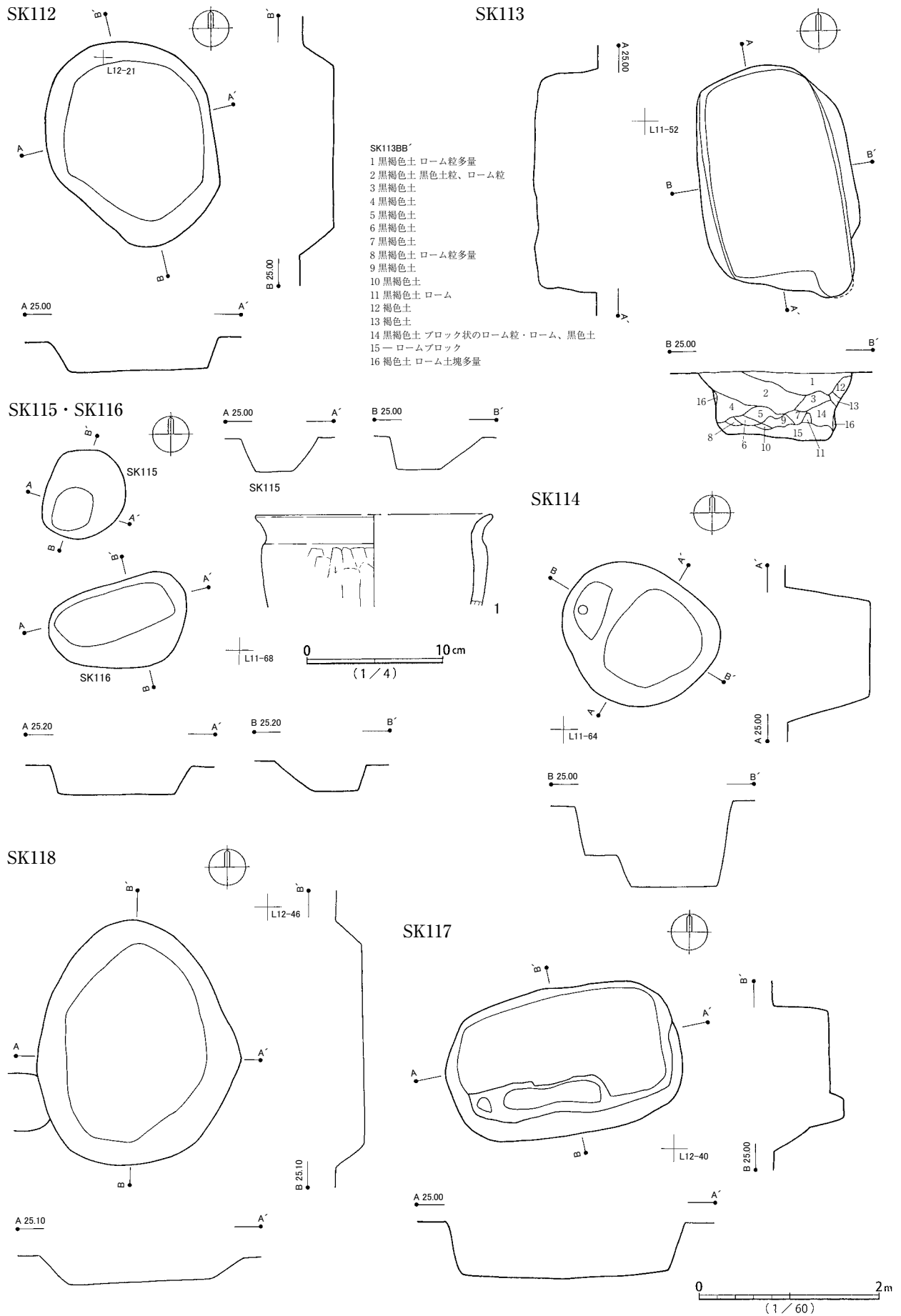


Fig.468 SK112、SK113、SK114、SK115、SK116、SK117、SK118 実測図

平面形状は長楕円形で、規模は2.55m×1.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は長方形を呈する。出土遺物は無い。平面形状から、土壇である可能性が高いが、判断する根拠が弱いので土坑としておく。

帰属時期はSM1002以前とはいえるものの、上限は不明である。

#### SK130 099地区 (Fig.470、PL.64・204)

K8-58付近に位置する土壇である。SS11の方台部北東辺に位置する。発掘調査時点では遺構が付与されていないため、整理段階で仮番号を付けている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は0.95m×(0.68)m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-43°-Wである。底面は隅丸長方形で、断面形状は短軸方向では鍋底形で、長軸方向では長方形に近い形状を呈する。北側に長方形の掘り込みが認められ、土層からは本遺構より新しくなることは無いが、伴うか否かは判断材料に乏しい。東側では浅く掘り込まれ、遺構上端ラインが失われている。

出土遺物は、1が鉄鍋である。隣接グリッド(旧GDグリッド)で鉄鍋の脚とみられる鉄製品が1点出土しており(Fig.546、遺構外37)、同一個体である可能性がある。但し、既刊のTJ地区調査概報中に「第99号住居址から人骨の頭部がカブトと考えられる鉄製品の中に納められて出土」という記載がある。この鉄製品については、鉄鍋であることが調査担当者への聞き取りから判明している。このことから、本遺跡では鉄鍋が最低2個体は出土していることとなるため、報告では1が脚付である可能性を示すのみとする。出土状況は、覆土上層に伏せた状態で出土しているほか、現場所見では、鉄鍋の直下にはヒトのものとみられる歯のほか、覆土最上層中には下顎の小片や骨粉を検出しており、本遺構が鍋かぶりの土壇であったことが判る。

#### SK131 099地区 (Fig.471、PL.64)

L8-68付近に位置する土壇である。近接する遺構は無く、北西正方向にSM1026が位置する。発掘調査時点では099-3122号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.28m×0.78m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-65°-Eである。底面は長方形を呈し、断面形状は逆台形で、底面から丸みを帯びて、やや開きながら開口する。また、長軸方向東寄りには、長さ1.20m×幅0.50mの範囲が僅かに窪む。覆土の状況から木棺が据えられたとみられる。出土遺物は無い。

#### SK132 099地区 (Fig.471)

M8-02付近に位置する土坑である。北側にSM1002が、南東にSK133が位置する。発掘調査時点では099-3125号遺構と呼称されている。本遺構は記録類に限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は不整形で、規模は2.50m×1.64m、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-31°-Wである。底面は3ヶ所に分かれ、不整形、楕円形を呈する。断面形状は定形を成さない。出土遺物は無い。

### SK133 099地区 (Fig.471)

M8-02付近に位置する土坑である。北西方向にSK132が位置する。発掘調査時点では099-3127号遺構と呼称されているが、記録類が限られ、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は長楕円形で、規模は2.04m×0.44m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-49°-Eである。底面は長楕円形を呈する。出土遺物は無い。

### SK134・135 099地区 (Fig.15・471)

SK134はM8-28付近に位置する土坑である。南西方向にSS20が位置し、東側にはSK135が近接する。発掘調査時点では099-3124号遺構と呼称されているが、記録類が限られ、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は楕円形で、規模は1.88m×1.48m、確認面からの深さは0.16mを測る。主軸方位は長軸方向からN-34°-Eである。底面は長楕円形を呈する。出土遺物は無い。

SK135はM9-00付近に位置する土坑である。南西方向に西側にSS20が位置し、西側にはSK134が近接する。発掘調査時点では099-3126号遺構と呼称されているが、記録類が限られ、本報告では全体図に図示するに留まる。出土遺物は無い。

### SK136 099地区 (Fig.472)

L9-84付近に位置する土坑である。近隣に遺構は無く、単独で位置する。発掘調査時点では099-3123号遺構と呼称されているが、2遺構で番号が重複しており記録類に混乱が認められる。一方は木根跡と判断できたため、本遺構を採用したが、詳細は不明である。

平面形状は長楕円形で、規模は3.38m×1.70mを測る。帰属時期は、不明である。

### SK137 099地区 (Fig.472~473、PL.64~65・204~205)

M9-66付近に位置する土坑である。東側にSM1025・1004が位置する。発掘調査時点では099-3129号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は3.04m×1.74m、確認面からの深さは0.93mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。底面は隅丸長方形を呈し、平坦且つ水平である。断面形状は、短軸方向では側壁が太鼓状に外側へ張り出す。長軸方向で中位以上は短軸方向と同様に胴張りだが、下位においては西側が亀腹状に立ち上がるのに対し、東側では内湾しながら立ち上がる。覆土の状況を見ると、掘り形底面直上に粘土を充填した部位が北側を中心に認められ、現場所見では平面的に方形を復元していることから、木棺の固定に使われたと考えたい。しかし、平坦に堆積する最下層であるローム主体層中に収まることから、やや解釈に難しさが残る。復元可能な木棺は(2.10)m×(0.64)mを測り、主軸方位は長軸方向からN-80°-Eである。土層断面図と遺構写真が整合しないが、本報告ではそのまま掲載する。

出土遺物は、1~24が鉄鏃で、接合率が低く、元来の本数を求めることは難しいが、少なくとも6~7本あったものとみられる。

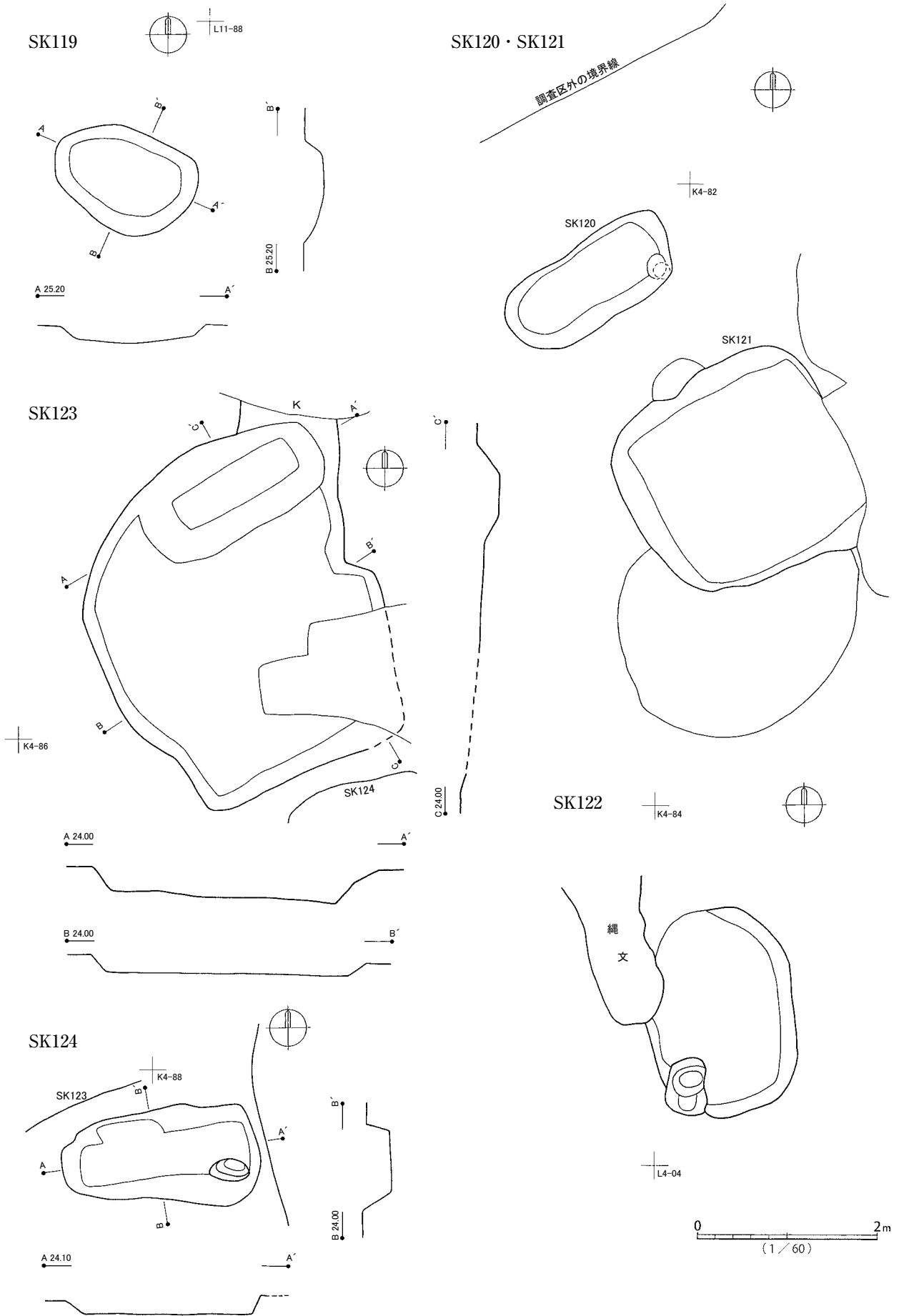


Fig.469 SK119、SK120、SK121、SK122、SK123、SK124 実測図

### SK138 099地区 (Fig.471、PL.65・214)

N9-08付近に位置する土坑である。重複する遺構は無く、東側にSM1004・1025が位置する。発掘調査時点では099-3130号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.10m×0.98m、確認面からの深さは、0.49mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。底面は隅丸長方形で、断面形状は短軸方向で逆台形、長軸方向では逆台形だが、底面が鍋底気味にやや湾曲する。木棺痕が検出され、平面形は長方形を呈し、規模は1.35m×0.39m、深さ0.44mを測る。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。現場では、①粘土量が極めて少ないこと。②木棺痕東側(小口)にのみ粘土塊が見られ、上位は内側に崩れていること。③木棺痕西側(小口)には粘土粒が認められ、北側とともに硬質であること。④最下層が硬質であることなどが観察されている。また、④については最下層上面を棺底と判断したことを、この層中から玉類が出土したことから、掘形底面を棺底と訂正している。しかし、遺跡内の埋葬施設を概観すると、本遺構のように最下層にロームを主体とする層が複数確認でき、平面や断面の状況も棺底として矛盾が無いとみられることから、本報告では、最下層上面を棺底と判断する。

遺物の出土位置は棺底東部に集中しており、被葬者の首から胸にかけて玉類が着けられていたとみられる。

遺物は、1から6が棗玉で、6が滑石製である以外は琥珀製である。7から9は丸玉もしくは白玉で、7・8が滑石製、9が蛇紋岩製である。10はガラス小玉である。

### SK139 099地区 (Fig.474)

N9-48付近に位置する土坑である。SS26と重複して位置する。新旧関係は土層断面図から本遺構が新しい。本遺構は発掘調査時点では遺構番号を付与されていないが、図化されていたため整理報告段階で土坑として報告する。

平面形状は楕円形で、規模は2.54m×(1.28)m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Wである。底面は楕円形を呈する。断面形状は短軸方向で底面から丸みをもって立ち上がる逆台形を呈するとみられる。出土遺物は無い。

### SK140 セ54地区 (Fig.474)

W20-85付近に位置する土坑である。SM1136マウンド内に位置する。新旧関係はSM1136の主体部が本遺構を切る。発掘調査時点ではセ54-No.49号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は3.56m×1.10m、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位は長軸方向からN-31°-Wである。底面は不整形で、断面形状は短軸方向では逆台形を呈する。出土遺物は無い。

また、本遺構の東側に位置するSK317・318との位置関係を積極的に解釈すると、本遺構を西側周溝とした方形周溝墓の可能性はある。これは、周囲に位置する方形周溝墓の周溝と主体部の主軸方位の関係のみを見れば、許容範囲にあると言え、妥当性はある。しかし、現場所見や記録類に決定的な根拠を見いだせないため、可能性は残したまま本報告では単独の土坑としておく。

#### SK141 099地区 (Fig.474)

M10-84付近に位置する土坑である。北側にSM1025が、東側にSM1004が位置する。南北方向に伸びる溝状遺構に切られる。発掘調査時点では099-3157号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は3.06m×(1.34)m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位は長軸方向からN-45°-Eである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、長軸、短軸方向共に底面から丸みを帯びて立ち上がる逆台形を呈する。出土遺物は無い。本遺構は形状からは土壌の可能性はあるが、積極的な根拠が無いため土坑として扱う。

#### SK142 099地区 (Fig.474、PL.65・214)

N10-08付近に位置する土坑である。SS28の方台部と、SM1004前方部が重複する地点に位置する。発掘調査時点では099-3158号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.04m×1.56m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Wである。底面は不整楕円形を呈し、北側から西側にかけては上位にテラス状の平坦面を持つ。ただし、断面図にあるように、底面と平坦面の高低差は極僅かなものである。断面形状は、短軸方向で底面から丸みを帯びて立ち上がる逆台形で、長軸方向でも同様だが、西側に平坦面を有する。遺物は滑石製勾玉が覆土中層～上層にかけて3点出土しているが、土器は皆無である。

本遺構は平面的にはSS28の主体部であってもよいが、遺物相が合わないため、SM1004との関係を考えておきたい。

#### SK143 099地区 (Fig.475)

O9-66付近に位置する土坑である。近接する土坑は無く、単独であるが、周辺は方形周溝墓、古墳が密集しており、その隙間に位置し、遺構の重複はない。特に西側でSS31に近接する。発掘調査時点では099-3154号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は円形で、規模は1.44m×1.28m、確認面からの深さは、1.38mを測る。主軸方位は長軸方向からN-61°-Wである。底面は円形を呈する。出土遺物は無い。井戸の可能性も否めないが、確証はない。

#### SK144 099地区 (Fig.475)

P9-82付近に位置する土坑である。西側にSS73が近接する。発掘調査時点では099-3153号遺構と呼称されている。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.72m×1.20m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Eである。底面は隅丸長方形を呈する。出土遺物は無い。平面形状および規模が、土坑であるSK147に近似することから、本遺構も土坑として扱う。

#### SK145 099地区 (Fig.72)

P10-62付近に位置する土坑である。東側にSS33が近接する。発掘調査時点では099-3151号遺構と



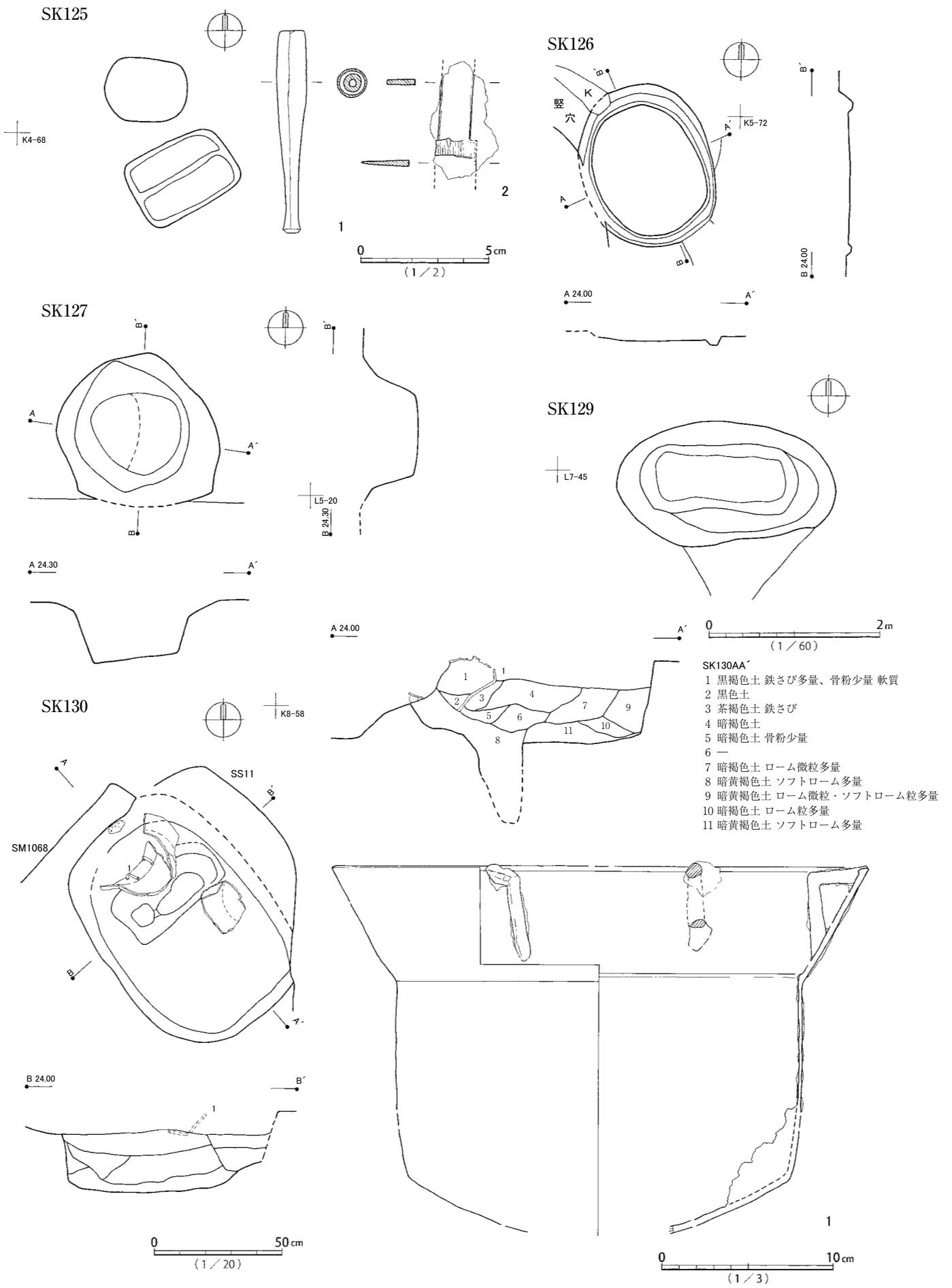


Fig.470 SK125、SK126、SK127、SK129、SK130 実測図

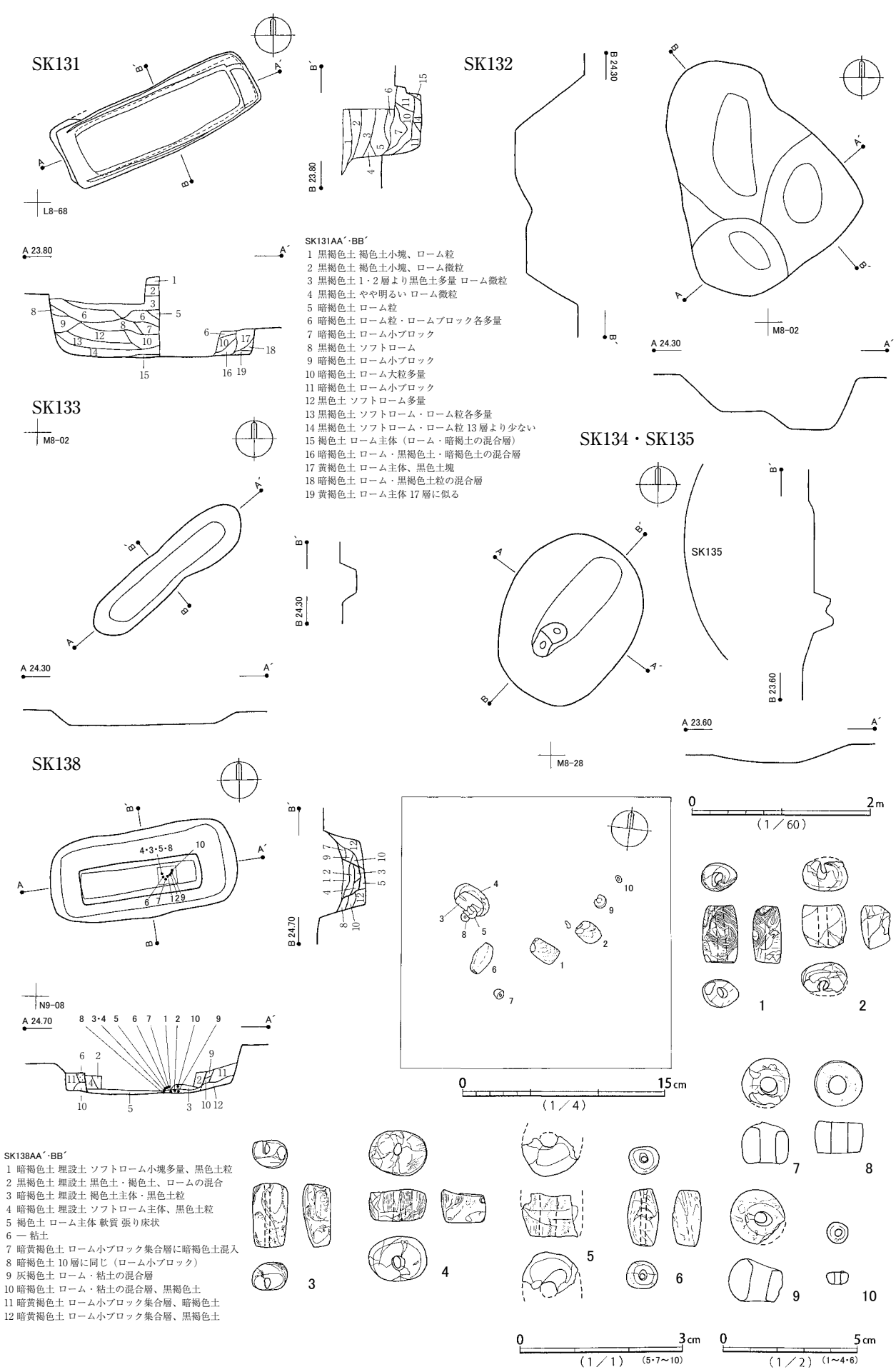
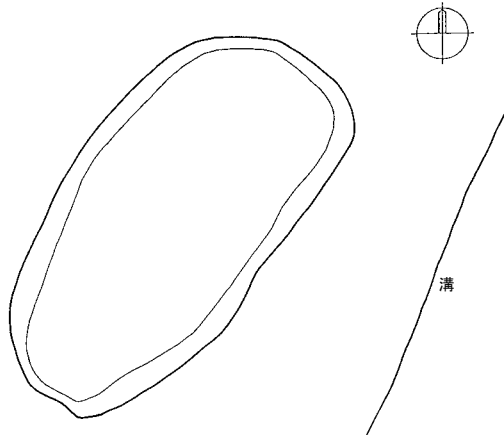


Fig.471 SK131、SK132、SK133、SK134、SK135、SK138 実測図

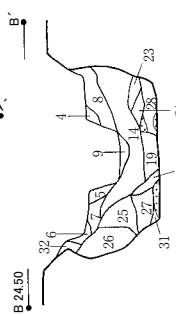
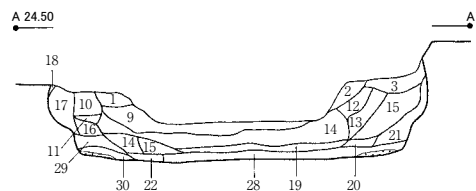
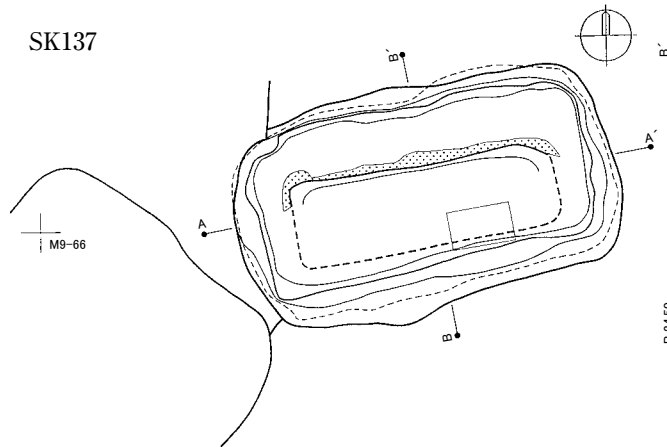
SK136

L9-84



SK137

M9-66



SK137AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック
- 2 -
- 3 -
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック
- 5 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土多量
- 6 黒色土 ローム微粒
- 7 黒褐色土 ローム大粒多量
- 8 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土多量
- 10 - ロームブロック集合層
- 11 黒褐色土
- 12 - ロームブロック集合層
- 13 -
- 14 暗褐色土 ローム大ブロック
- 15 - ローム小ブロック集合層、暗褐色土粒多量
- 16 - ロームブロック集合層
- 17 暗褐色土 黒褐色土、ローム大ブロック
- 18 -
- 19 褐色土 ローム主体、粘土粒
- 20 黒色土 ソフトローム
- 21 -
- 22 -
- 23 黒褐色土 ローム大ブロック
- 24 - ローム大ブロック集合層
- 25 - ローム大ブロック集合層
- 26 暗褐色土 ローム大ブロック少量・ローム大粒多量、黒褐色土粒多量
- 27 - ローム
- 28 明褐色土 ローム主体
- 29 - ソフトローム集合層
- 30 - ローム主体
- 31 - 褐色土塊
- 32 - ローム塊

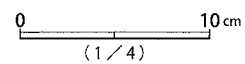
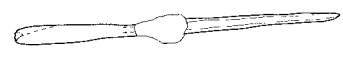
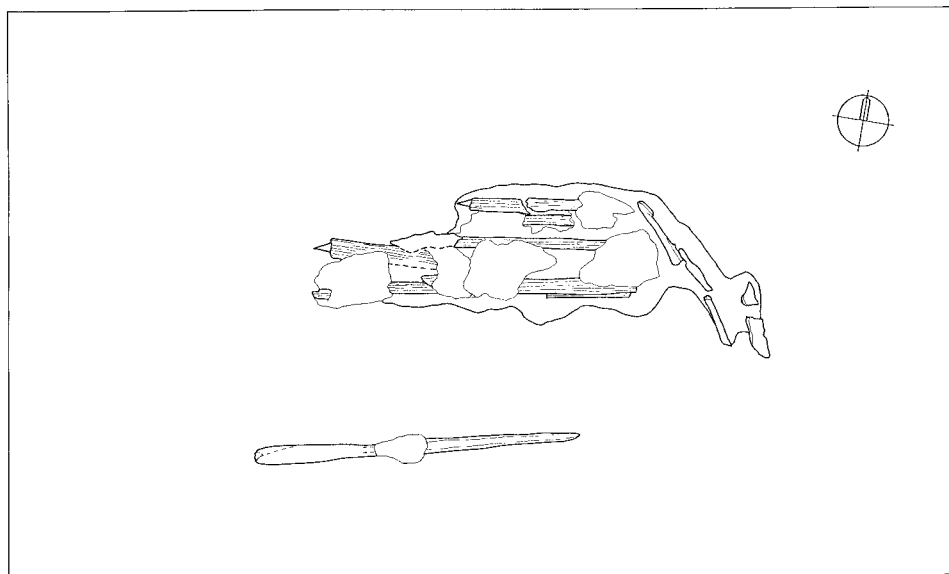
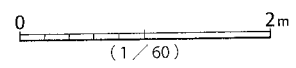


Fig.472 SK136、SK137 (1) 実測図

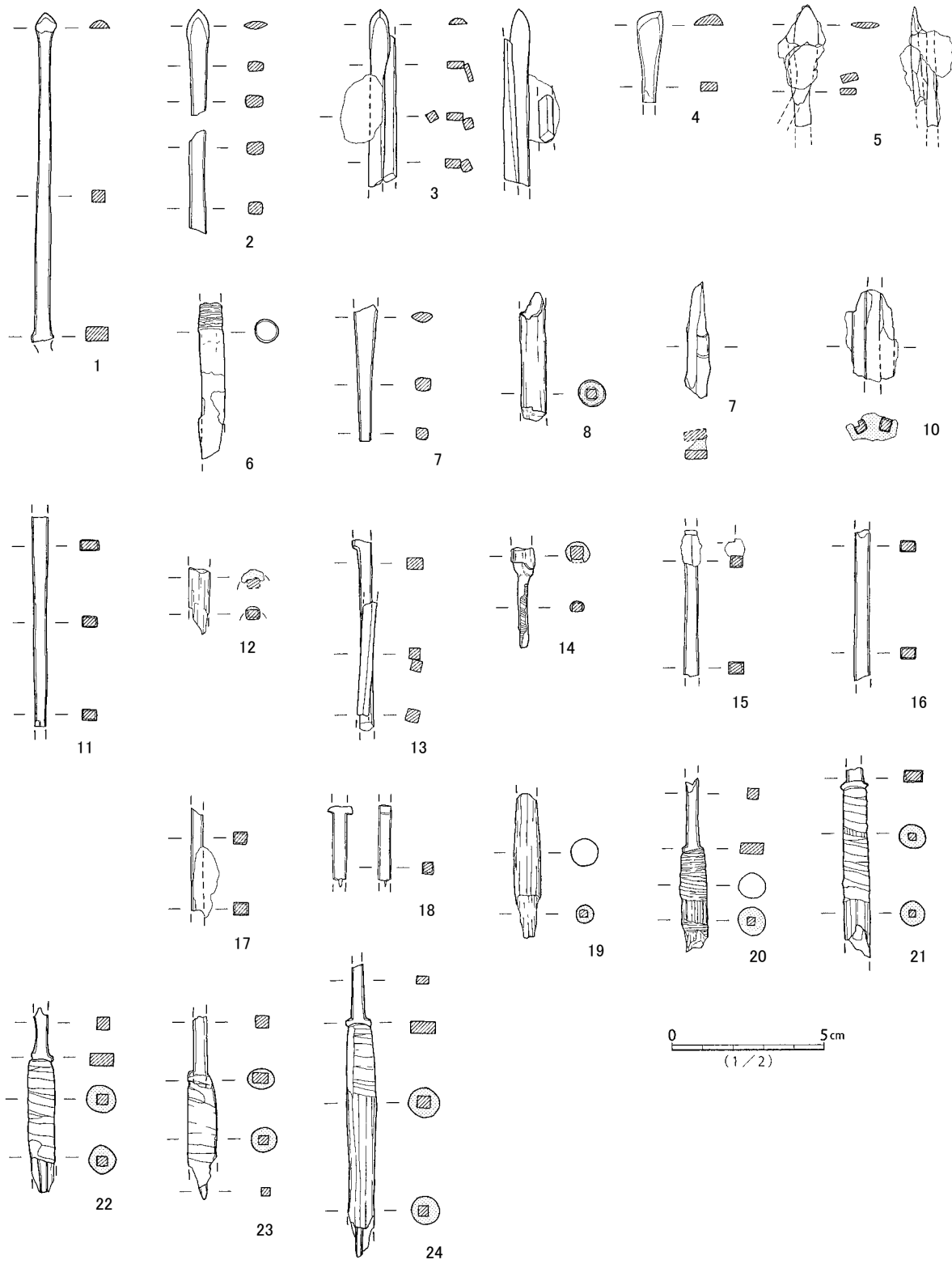


Fig.473 SK137 (2) 実測図

呼称されているが、記録類に限られるため、遺構上端線をSS33遺構図内に掲載するにとどまる。

平面形状は円形で、規模は計測不能、確認面からの深さは不明。主軸方位は計測不能である。出土遺物は無い。

#### SK146 099地区 (Fig.72)

P10-88付近に位置する土坑である。東西にSS33・38が位置し、周溝の一部が重複するものの、新旧関係は不明である。発掘調査時点では099-3155号遺構と呼称されているが、記録類に限られるため、平面プランをSS33遺構図内に掲載するにとどまる。

平面形状は不整形で、規模は2.25m×1.86m、確認面からの深さは不明。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。底面は不整形を呈するとみられる。出土遺物は無い。

#### SK147 099地区 (Fig.475、PL.65・205)

O11-16付近に位置する土坑である。周囲には古墳が密集しており、その隙間に位置する。この中では北側に位置するSM1004に近接している。発掘調査時点では099-3159号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.56m×1.30m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。底面は隅丸長方形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に、底面から丸みを帯び、内湾しながら立ち上がっている。但し、断面図は整理段階で棺底以下の掘り形底面を省いて図化している。出土遺物は耳環2点で、東側の棺底近くから出土しているため、被葬者の頭位が東であることが判る。

#### SK148 099地区 (Fig.475、PL.65・193)

N12-80付近に位置する土坑である。南東側でSS36と重複するが新旧関係は不明である。

発掘調査時点では099-3160号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.74m×1.74m、確認面からの深さは0.50mを測る。主軸方位は長軸方向からN-13°-Eである。底面は隅丸長方形で、長軸中心線上にはピット2カ所と溝3条が位置する。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈し、長軸方向は、土層図では逆台形だが、エレベーション図ではやや様相が異なる。中心線上のピットは「ハ」の字形に遺構中心方向に傾斜する。現場図面の略図では柱痕とみられる土層の堆積が図化されており、それによると、柱はピットの外側壁に密着した状況での設置が復元可能である。模式図のように2本の柱を立てた状態をa最低位とb最高位復元した。bでは掘り形底面から4.06mのところまで交叉することになる。この交叉点は、確認面からはおよそ3.47mほど上位に位置するが、この復元では短軸方向への支持力が弱い。そのため、この復元条件では土中に痕跡が残る難い別の支持部材の存在を想起させる。底面に残る溝3条は、壁からも含め0.55m～0.75mほどの間隔を持って配置されており、ばらつきがみられる。土層最下層上面は張床状と観察されているため床構造に関連する溝と考えられる。出土遺物は覆土中の出土で土師器杯である。

#### SK149 099地区 (Fig.476、PL.66)

N12-94付近に位置する土坑である。北側でSM1171方形周溝状遺構と重複する。新旧関係は不明。

発掘調査時点では099-3161号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は(2.60)m×1.16m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-38°-Eである。底面は長方形で中央に長楕円形の窪みを持つ。断面形状は、長軸・短軸方向とも底面から直角に近い角度で垂直方向に立ち上がる長方形を呈する。木棺痕が明瞭で、平面形は長方形の箱形を呈し、規模は2.09m×0.53m、確認面からの深さは0.39mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-39°-Eである。

出土遺物は無い。

#### SK150 099地区 (Fig.476、PL.66・205)

N14-24付近に位置する土壇である。東側に方墳(SW80-177、別称31号墳)が、西側には円墳を改変して前方後円墳としたSM1006が位置し、後者により近接する。西側で木痕とみられる攪乱を受けている。発掘調査時点では099-3162号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は(3.02)m×1.20m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Eである。底面は長方形で平坦且つ水平である。断面形状は、短軸方向では底面から明瞭に立ち上がる逆台形で、長軸方向では底面から丸みを持って立ち上がる。木棺痕が明瞭で、平面形は長方形の箱型で、規模は2.36m×0.58m、確認面からの深さは0.36mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-75°-Eである。木棺の周囲に粘土が検出されている。

出土遺物は耳環が2点である。耳環が東側の棺底のよりやや浮いた位置で出土しているため、被葬者の頭位が東であることが判る。

#### SK151 099地区 (Fig.476、PL.214)

O14-06付近に位置する地下式改葬墓である。東側に方墳(SW80-177、別称31号墳)が、西側には円墳を改変して前方後円墳としたSM1006が位置する。本遺構は後者に近接し、発掘調査時点では099-3168号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形の竪坑部分と方形の玄室部分で構成される。竪坑の規模は3.92m×1.78m、確認面からの深さは0.72mを測り、主軸方位は長軸方向からN-5°-Wである。底面は台形で、玄室側へ向けて僅かに幅を広げる。断面形状は、短軸方向では方形を呈し、長軸方向では階段状に平坦面が1段作られており、羨道とみられる。羨道は竪坑から玄室に至る間に位置し、0.21mほどの段差をもって玄室に至る。この部分の側壁には、玄室の閉塞に関係するとみられる、鍵型状の掘り込みが、東側に明瞭に認められるため、玄門を成していたとみられる。玄室部分は方形を呈し、規模は(1.02)m×0.96m、確認面からの深さは0.87mを測り、主軸方位は長軸方向からN-4°-Eである。玄室の天井部は、竪坑の埋没途中で崩落したとみられる。

現場所見では玄室中央部に埋葬骨とみられる骨片や骨粉が円形範囲に認められるとあることから、改葬墓と考えられる。この円形範囲内からは、石製の勾玉1点が出土している。勾玉は表面の風化が激しく、被熱しているように見える。

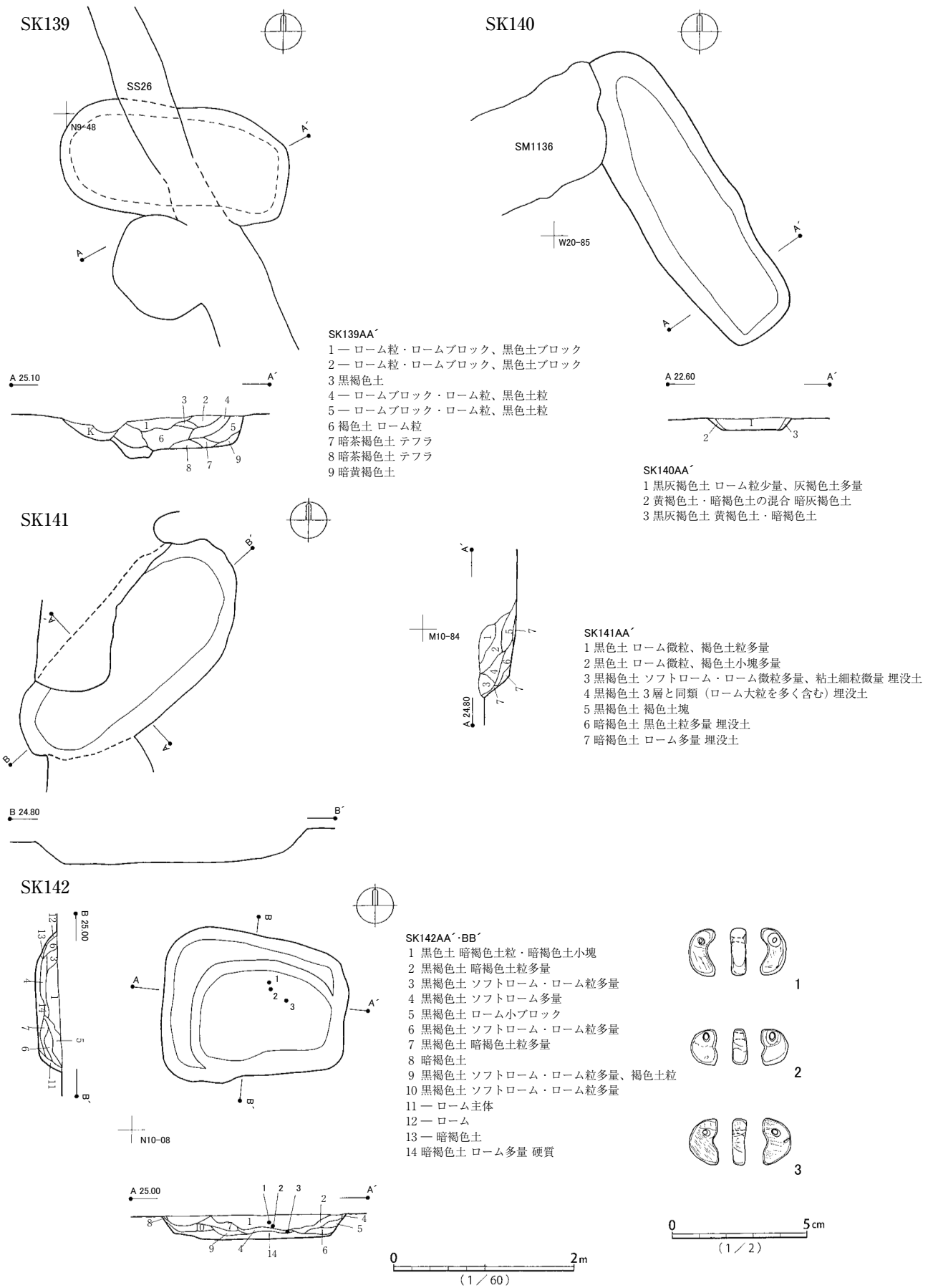


Fig.474 SK139、SK140、SK141、SK142 実測図

### SK152 099地区 (Fig.477)

O15-20付近に位置する土壌である。南側に方墳(SW80-250、別称34号墳)が近接し、北側にはSK151が位置する。南側はSW80調査区となる。発掘調査時点では099-3169号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は(3.38)m×1.44m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-55°-Eである。底面は長方形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。覆土中層以上の記録は無いが、下層の状況からは木棺痕は認められない。

出土遺物は無い。

### SK153 099地区 (Fig.477)

M20-24付近に位置する土壌である。南側にSS15が近接する。遺構南側は平面形方形の掘り込みがあり土層断面図から、本遺構が古い。本遺構は発掘調査時点では099-3076号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.94m×(1.38)m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。底面は隅丸長方形を呈し、断面形状は、底面から丸みを帯びて開きながら立ち上がる鍋底形を呈する。覆土の状況から、木棺が据えられていたと考えられるが、土層断面に見える基底部の幅は0.43 mと極端に狭い。出土遺物は無い。

### SK154 099地区 (Fig.477、PL.66)

N18-48付近に位置する土壌である。南側にSM1077が、西側にはSK155が近接するが遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3174号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.90m×2.10m、確認面からの深さは1.08mを測る。主軸方位は長軸方向からN-16°-Wである。底面は不整形だが、南側で方形の張り出しが二つ並ぶ形状を呈する。断面形状は、長軸方向では底面から不明瞭に立ち上がる鍋底形を呈し、北側で僅かな段差を有する。短軸方向では西側に傾斜した天井を有する。覆土は自然堆積で、木棺痕跡は認められない。出土遺物は無い。

### SK155 099地区 (Fig.477、PL.66)

N18-46付近に位置する側壁抉込土壌である。南東側にSM1077が、東側にSK154が近接するが遺構の重複は無い。本遺構は記録類が限られるため、エレベーション図は整理作業段階で復元している。本遺構は発掘調査時点では099-3175号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.96m×1.16m、確認面からの深さは、底面から一段上位の平場が0.84mを測る。主軸方位は長軸方向からN-12°-Wである。底面は楕円形を呈する。断面形状は、短軸方向では西側が深く東側で僅かに平坦面を有する。西側側壁は立ち上がりから上位までは内傾している。長軸方向ではフラスコ状に南北壁が内傾し、開口部でやや外側に開く。覆土は自然堆積とみられ、初期の段階から西側に向けて堆積している。木棺痕は認められないが、西側の最深部は平坦で、1.66m×0.50m、確認面からの深さは0.93mを測り、主軸方位は長軸方向からN-15°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。



### SK156 099地区 (Fig.478)

O17-80付近に位置する土坑である。東側にSK157が位置するが、土坑としては群集しない。南側には国No.251(諏訪台35号墳)が、北側にはSM1160・SM1173が位置し、本遺構はその中間点に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3173号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.05m×0.70m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-69°-Wである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。内部施設無く、覆土の状況は自然堆積である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK157 099地区 (Fig.478)

O17-86付近に位置する土坑である。西側にSK156が位置するが土坑としては群集しない。南側には国No.251(諏訪台35号墳)が、北側にはSM1160・SM1173が位置し、本遺構はその中間点に位置する。本遺構は発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。

平面形状は長楕円形で、規模は2.60m×1.20m、確認面からの深さは0.71mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Eである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。覆土の状況は自然堆積とみられるが、短軸方向では、木棺痕とも見える縦方向の分層が認められるが、判然としない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK158 099地区 (Fig.478、PL.66)

O19-40付近に位置する土坑である。東側に10mほど離れてSK159を含む土坑群が位置するが、単独で位置する。北側にSM1077、西側にSS16・SS17・SM1168が近接するが遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3070号遺構と呼称されている。

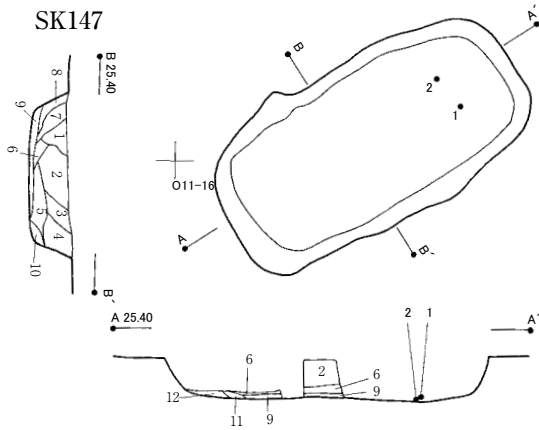
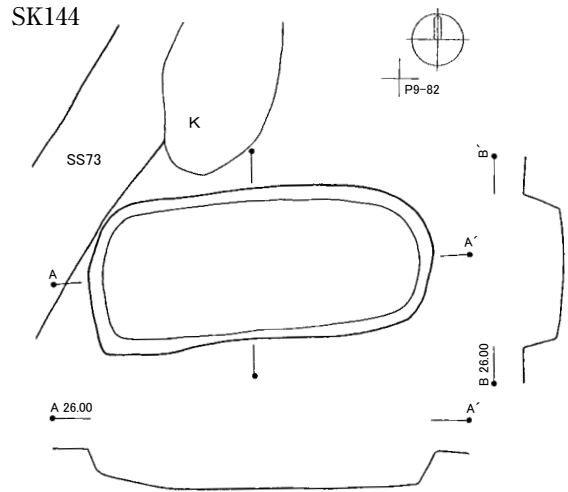
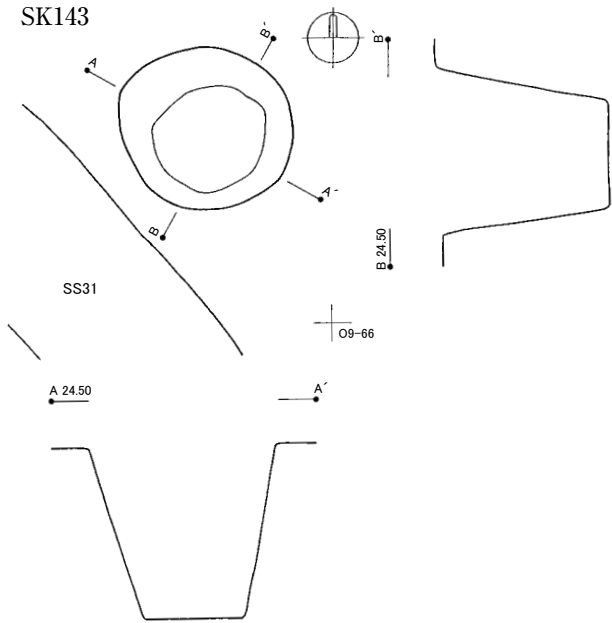
平面形状は隅丸方形で、規模は3.05m×2.10m、確認面からの深さは0.74mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は隅丸方形で、長軸に沿って浅い溝状に掘り込みが1条認められる。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。土層図が無いため、内部施設・覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

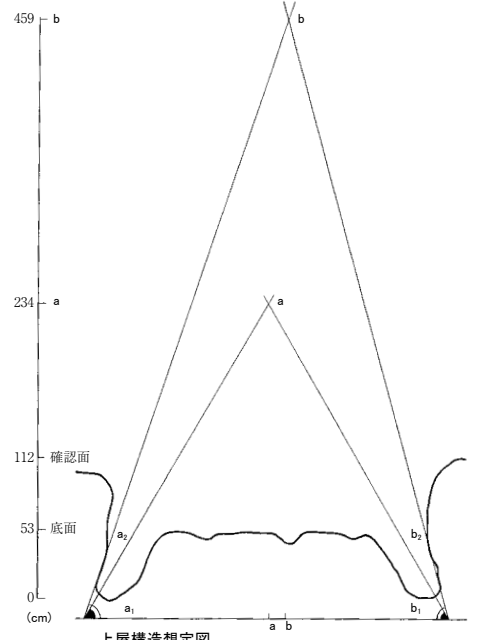
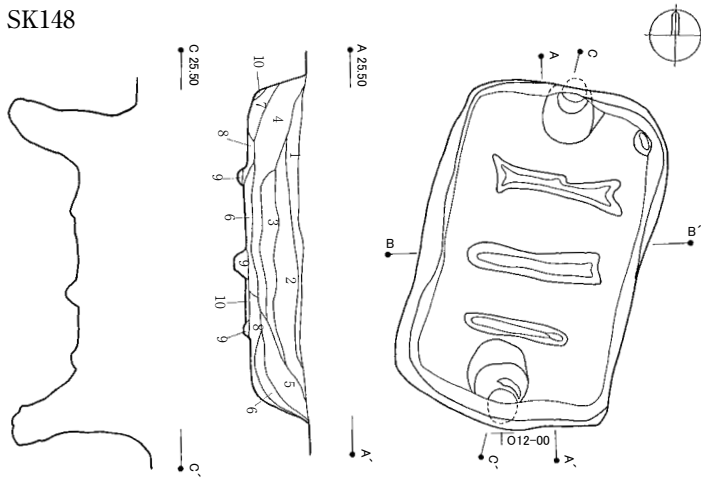
### SK159 099地区 (Fig.478、PL.66)

O19-28付近に位置する土坑である。東側にSK160～SK166が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では遺構番号が付与されていない。

平面形状は長楕円形で、規模は2.65m×1.05m、確認面からの深さは0.43mを測る。主軸方位は長軸方向からN-82°-Eである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で鍋底状に窪んでおり、側壁は上方に開きながら開口する。土層図が無いため、内部施設・覆土の状況は不明である。



- SK147AA'-BB'
- 1 黒色土 ローム微粒
  - 2 黒褐色土 ソフトローム粒・ソフトローム小塊
  - 3 黒褐色土 ソフトローム粒・ソフトローム小塊、暗褐色土粒 (少量)
  - 4 暗褐色土 黒褐色土・ロームの混合土、暗褐色土粒
  - 5 暗褐色土 黒褐色土・ロームの混合土、暗褐色土粒少量
  - 6 黒褐色土 ソフトローム粒・ソフトローム小塊、暗褐色土粒 (少量)
  - 7 黒褐色土 ソフトローム粒・ソフトローム小塊
  - 8 暗褐色土 黒褐色土・ロームの混合土、暗褐色土粒
  - 9 暗褐色土 ソフトローム・暗褐色土の混合 やや硬質
  - 10 褐色土 ソフトローム主体、暗褐色土
  - 11 -
  - 12 -
- 



- SK148AA'-BB'
- 1 黒色土 褐色土粒 軟弱
  - 2 黒褐色土 褐色土小塊多量
  - 3 黒褐色土 褐色土小塊多量、ローム粒
  - 4 暗褐色土 黒褐色土、ソフトローム多量
  - 5 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土多量 4層よりローム多量
  - 6 暗褐色土 ローム多量
  - 7 黒褐色土 黒色土、ローム・ソフトローム各多量
  - 8 褐色土 ソフトローム主体・ローム小ブロック
  - 9 暗褐色土 ロームブロック
  - 10 - ロームブロック・ソフトローム 張り床状

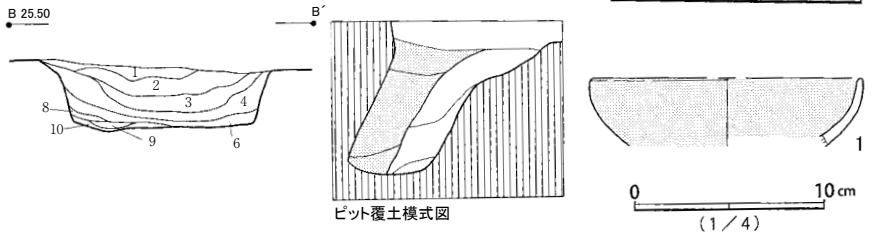


Fig.475 SK143、SK144、SK147、SK148 実測図

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK160 099地区 (Fig.478)

N20-62付近に位置する土坑である。周囲にはSK159・SK161～SK166が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3352号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形と方形部分で構成される。楕円形部分の規模は2.35m×1.35m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。方形部分は楕円形部分に対して浅く、一段上位の平坦面となっている。土層図が無いため、内部施設・覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK161 099地区 (Fig.479、PL.66)

N20-86付近に位置する土坑である。周囲にはSK159・SK160・SK162～SK166が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3350号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.40m×1.15m、確認面からの深さは0.49mを測る。主軸方位は長軸方向からN-41°-Wである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で、立ち上りの丸い逆台形を呈する。覆土の状況は自然堆積に見える。短軸方向で縦方向の分層があり、木棺痕の可能性を示すが判然としない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK162 099地区 (Fig.479、PL.67)

O20-24付近に位置する土坑である。周囲にはSK159～SK161・SK163～SK166が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3348号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.60m×(1.20)m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Wである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。土層上部の記録が無いため埋没状況は判然としない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK163 099地区 (Fig.479、PL.67)

O20-44付近に位置する土坑である。周囲にはSK159～SK162・SK164～SK166が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3347号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.55m×2.25m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-82°-Wである。底面は不整形で中央が深くなるが平坦に近い。断面形状は、長軸・短軸

方向で鍋底のように丸く窪み、側壁は丸みを帯びて立ち上り、開きながら開口する。内部施設は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK164 099地区 (Fig.480)

O20-62付近に位置する土坑である。周囲にはSK159～SK163、SK165・SK166などが位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3346号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は2.32m×1.36m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。底面は平坦だが、短軸方向で北側に傾斜する。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。土層図が無いため、内部施設・覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK165 099地区 (Fig.479)

O20-46付近に位置する土坑である。北側にSK166が近接し、SK159～SK164が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。平面形状は不整形で、規模は2.32m×1.36m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。底面は平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。内部施設は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK166 099地区 (Fig.479)

O20-26付近に位置する土坑である。南側にSK165が近接し、SK159～SK164が位置し、8基ほどの群を形成する。西側にはSM1077、東側にSM1100などの小規模古墳の間に位置する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3345B号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.05m×0.80m、確認面からの深さは0.53mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Eである。底面は楕円形で、平面図にはないが、断面図から外周を僅かに周溝状に溝がめぐりうる可能性が高い。断面形状は、長軸・短軸方向で近似形を呈し、底面が樽底状で、立ち上りはあまり開かない。内部施設は認められず、覆土の状況から自然堆積を示す。

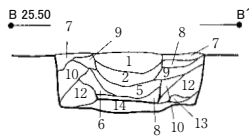
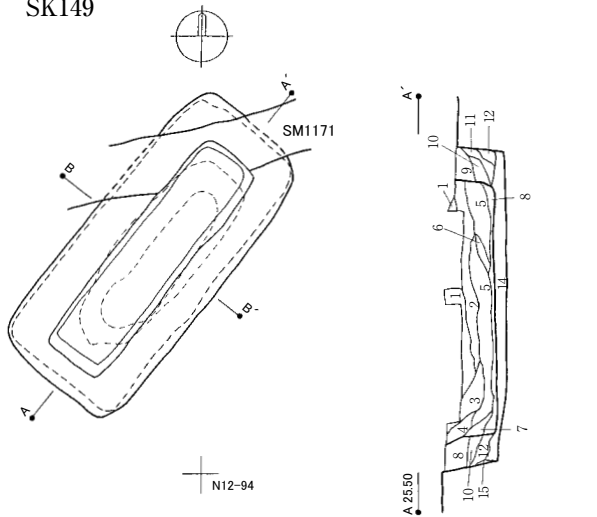
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK167 099地区 (Fig.480、PL.67)

N21-06付近に位置する土坑である。東側にSK168が近接する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壇が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3338号遺構と呼称されている。

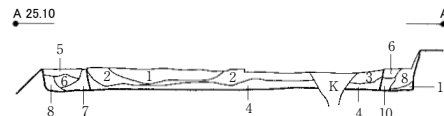
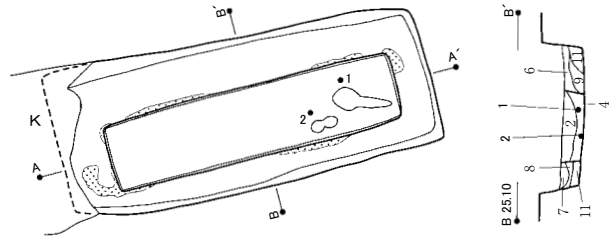
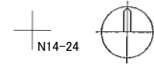
平面形状は長方形で、規模は2.86m×1.60m、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Wである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、長軸方向では逆台形を呈するが、

SK149

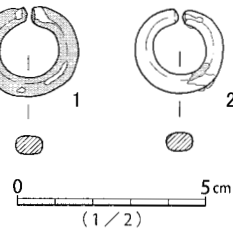


- SK149AA'・BB'
- 1 黒褐色土 ローム・ソフトローム
  - 2 黒色土 褐色土粒
  - 3 暗褐色土 黒褐色土・褐色土小塊の混合
  - 4 黒色土 褐色土粒
  - 5 暗褐色土 ローム大粒
  - 6 ソフトローム
  - 7 暗褐色土 ローム小ブロック
  - 8 暗褐色土 ローム多量 硬質
  - 9 黒色土 ローム粒 2層とは異質
  - 10 暗褐色土 ローム多量
  - 11 明褐色土 ローム主体、黒色土粒
  - 12 明褐色土 ローム主体
  - 13 明褐色土 ローム主体、黒色土粒
  - 14 黄褐色土 ローム主体 12層に比べて軟質
  - 15 ロームブロック

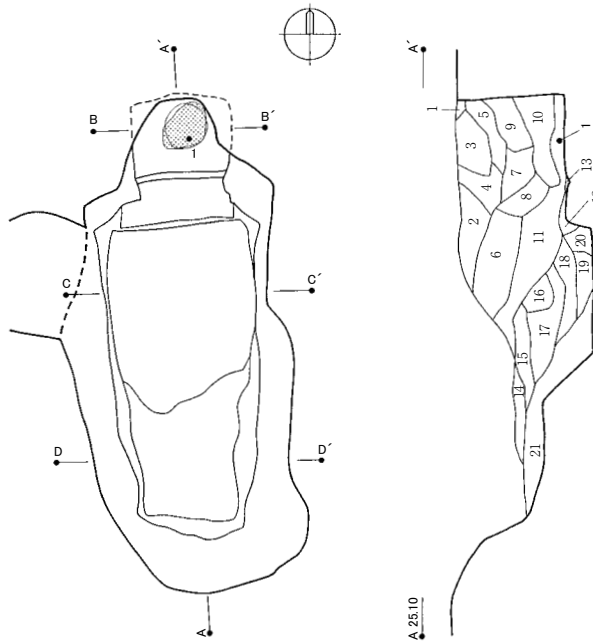
SK150



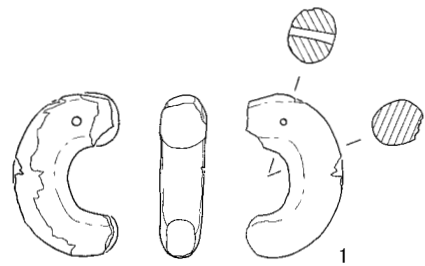
- SK150AA'・BB'
- 1 黒色土 ローム微粒 埋没土
  - 2 暗褐色土 ソフトローム 埋没土
  - 3 黒色土 暗褐色土粒多量 埋没土
  - 4 暗褐色土 黒色土粒、ローム微粒 埋没土
  - 5 暗褐色土 粘土、ローム多量 硬質 埋没土
  - 6 暗褐色土 ローム大粒多量 硬質 埋没土
  - 7 黒褐色土 粘土多量、ローム大粒多量 硬質 埋没土
  - 8 灰褐色土 粘土多量、褐色土 硬質 埋没土
  - 9 明褐色土 ローム主体、粘土微粒 硬質 埋没土
  - 10
  - 11 褐色土 ローム多量、粘土微粒 硬質 埋没土



SK151

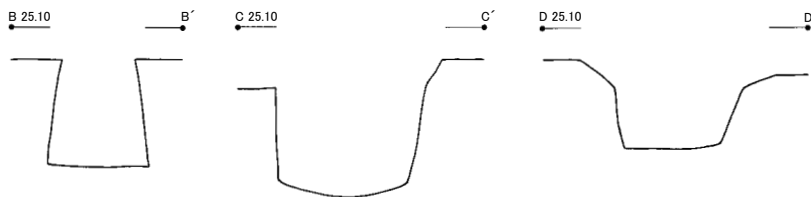


A 25.10



0 5cm (1/2)

- SK151AA'
- 1 暗褐色土 ローム粒少量 硬質 車のわだちか?
  - 2 黒褐色土 ローム粒
  - 3 暗褐色土 ソフトローム、暗褐色土 4層よりソフトローム多量
  - 4 暗褐色土 ローム、黒褐色土少量
  - 5 暗褐色土 ソフトローム・ローム少量
  - 6 黒褐色土 2層よりやや褐色味強い ローム粒
  - 7 暗褐色土 5層よりやや褐色味強い ローム粒少量
  - 8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
  - 9 暗黄褐色土 ロームブロック主体、暗褐色土 天井の落下による?
  - 10 暗褐色土 ローム粒少量 軟質
  - 11 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量
  - 12 黒褐色土 (やや黄色味) 黒褐色土主体、ローム
  - 13 暗褐色土 ローム粒少量
  - 14 黒褐色土 ローム小ブロック
  - 15 暗黄褐色土 ローム主体・ロームブロック、暗褐色土 21層よりローム密
  - 16 黒褐色土 黒褐色土主体、ロームブロック
  - 17 暗黄褐色土 ロームブロック、暗褐色土 21層より暗褐色土多量
  - 18 暗黄褐色土 暗褐色土主体、ロームブロック
  - 19 暗黄褐色土 ローム主体・ロームブロック、暗褐色土
  - 20 黒褐色土 ロームブロック少量
  - 21 暗黄褐色土 ローム主体・ロームブロック、暗褐色土



0 2m (1/60)

Fig.476 SK149、SK150、SK151 実測図

短軸方向では底面が鍋底状に丸く窪んでいる。覆土の状況は、内部施設として、木棺が据えられた可能性を示すが、平面プラン、規模は明瞭ではない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK168 099地区 (Fig.480、PL.67)

N21-28付近に位置する土坑である。西側にSK167が近接する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。

本遺構は発掘調査時点では099-3337号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は(2.76)m×2.12m、確認面からの深さは0.67mを測る。主軸方位は長軸方向からN-39°-Eである。底面は不整形で中央が深く、凹凸が激しい。断面形状は、長軸方向ではすり鉢状で、短軸方向ではやや逆台形に近い形態をとり、安定しない。内部施設は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK169 099地区 (Fig.480)

N21-66付近に位置する土坑である。西側にSK170位置する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3339号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.42m×(1.22)m、確認面からの深さは0.11mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Wである。底面は隅丸方形で平坦である。断面形状は、掘り込みが極めて浅いため、不明確だが、遺存部位は長軸・短軸方向で逆台形を呈する。内部施設認められず、覆土の状況不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK170 099地区 (Fig.480、PL.67・175)

N21-82付近に位置する土壙である。東側にSK169が位置する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3343号遺構と呼称されている。

基本となる平面形状は隅丸長方形で、西側半分に不整形のプランを持つ。規模は2.44m×1.10m、確認面からの深さは0.46mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Wである。底面は隅丸長方形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形で、長軸方向でも基本は逆台形を呈するが、西側上位で緩やかに開口する。覆土の状況からは、内部施設は明瞭ではないが、木棺が据えられた可能性を示す。

出土遺物は1が須恵器長頸壺で、遺構の中央よりやや北西寄りの覆土中層から出土している。

帰属時期は須恵器長頸壺から7世紀後葉としたい。

### SK171 099地区 (Fig.481)

O21-26付近に位置する土坑である。北側にSM1163が位置する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。発掘調査時点では099-3344号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.26m×0.98m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Eである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK172 099地区 (Fig.481)

O21-68付近に位置する土坑である。西側にSM1106が位置する。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。発掘調査時点では099-3332号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.42m×1.22m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-50°-Eである。底面は不整形を呈し、断面形状は、短軸方向では逆台形を呈するが、長軸方向では北東側向け浅くなる形状を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK173 099地区 (Fig.481、PL.67)

P21-08付近に位置する土壙である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。発掘調査時点では099-3356号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.38m×1.42m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。底面は隅丸方形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向で逆台形を呈するが、上位で外側に段を有して開口する。覆土の状況からは木棺痕は不明瞭だが、上層中央に陥没したとみられる落ち込みが認められることから埋葬施設と判断した。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK174 099地区 (Fig.481)

O22-02付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3334号遺構と呼称されている。

平面形状は円形で、規模は0.96m×0.88m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-0°である。底面は円形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

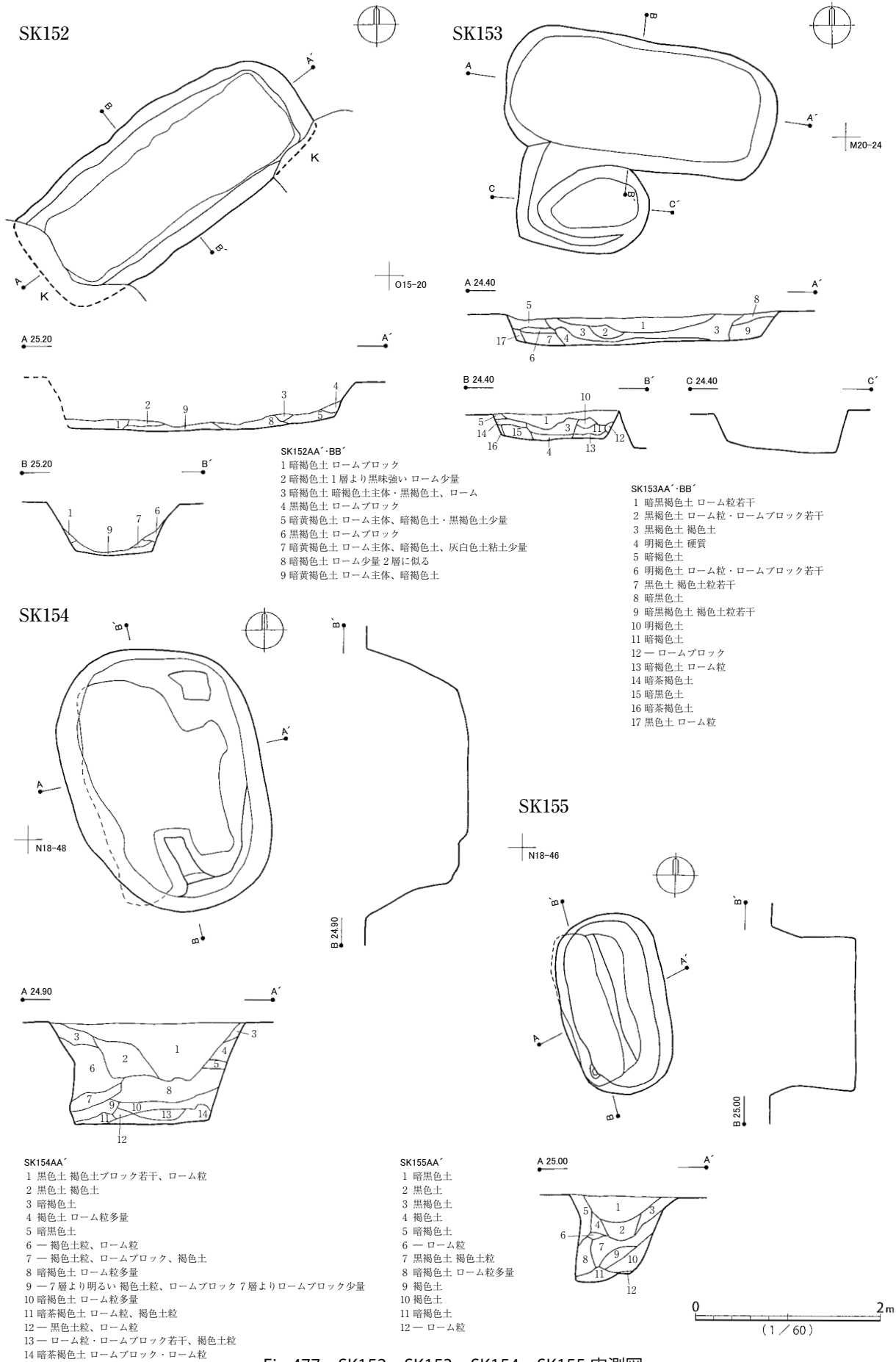
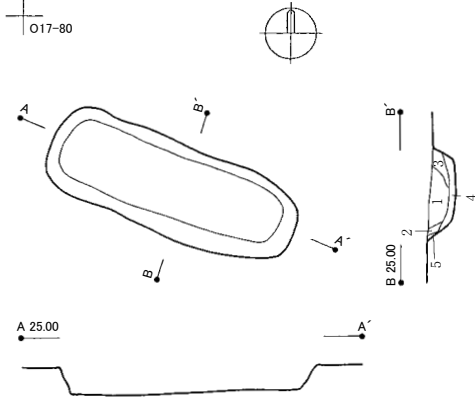


Fig.477 SK152、SK153、SK154、SK155 実測図



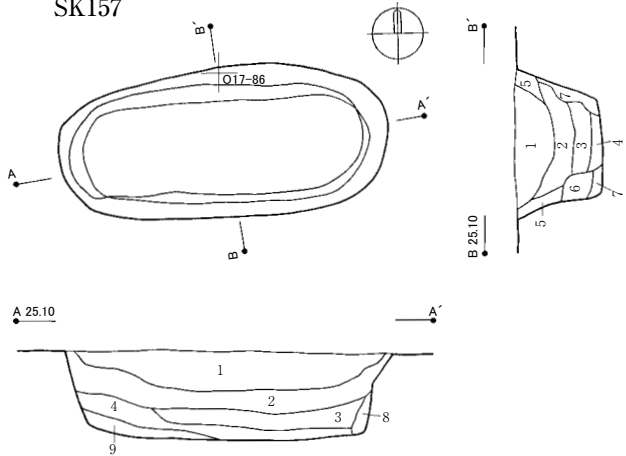
SK156



SK156BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒多量
- 2 黒褐色土 茶褐色土粒多量
- 3 暗褐色土 ローム粒多量
- 4 暗褐色土 ローム粒若干・ロームブロック、褐色土粒
- 5 暗茶褐色土

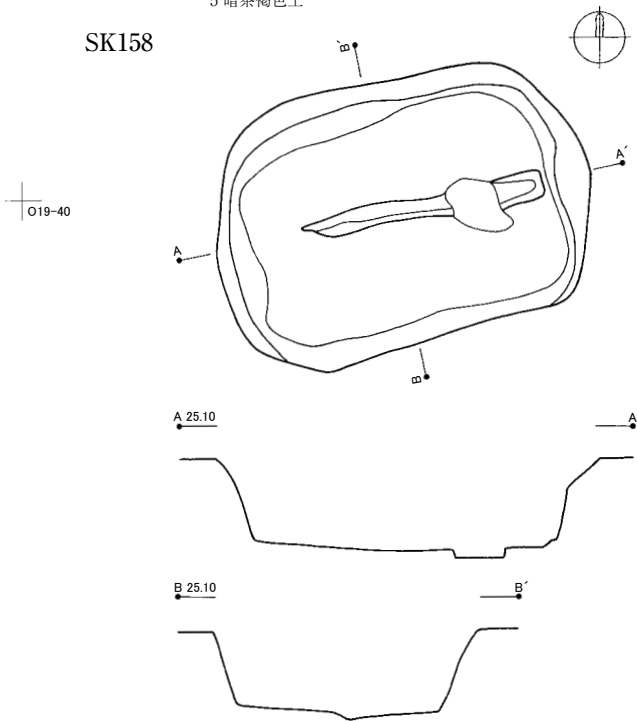
SK157



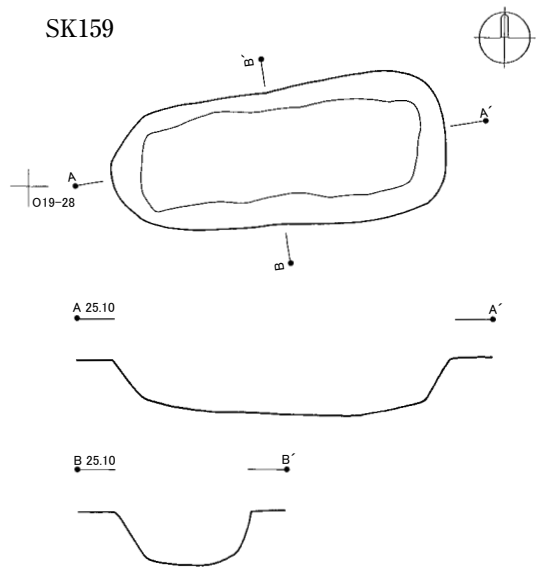
SK157AA'・BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒若干、褐色土粒
- 2 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
- 3 褐色土 ローム粒多量、褐色土粒
- 4 褐色土 ローム粒、褐色土粒
- 5 暗褐色土
- 6 褐色土
- 7 暗黒茶褐色土 ローム粒、褐色土粒、ロームブロック若干
- 8 暗茶褐色土 ローム粒
- 9 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック若干、褐色土粒

SK158



SK159



SK160

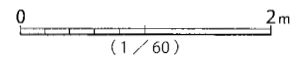
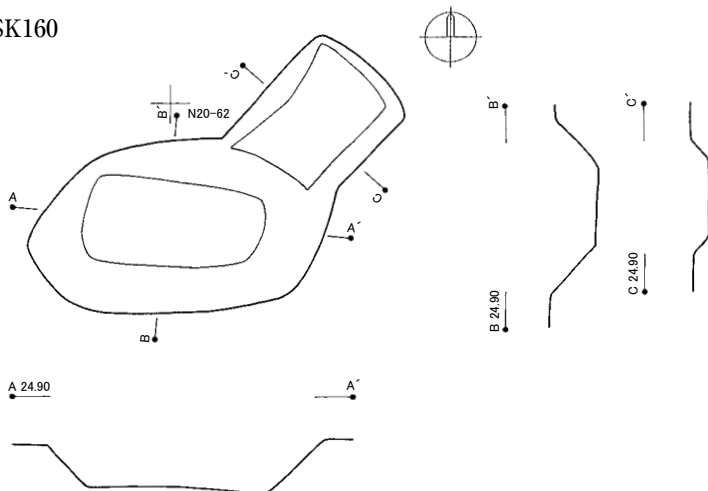


Fig.478 SK156、SK157、SK158、SK159、SK160 実測図

### SK175 099地区 (Fig.481)

O22-22付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3333号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は2.00m×1.16m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-44°-Wである。底面は不整楕円形で平坦であるが、中央付近にピットが1基認められる。断面形状は、短軸方向では北東側の立ち上がりが不明瞭だが、長軸方向では逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK176 099地区 (Fig.482)

N22-08付近に位置する土壙である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3300号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は3.08m×2.30m、確認面からの深さは1.01mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Wである。底面は方形で平坦だが、長軸方向中央付近に溝1条が位置し、その北側のみに直交する溝2条が認められる。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈するが、短軸方向では中央の溝に向けて底面がやや傾斜する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK177・SK178 099地区 (Fig.482)

N23-20付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。SK177は発掘調査時点では099-3360号遺構と呼称されているが、SK178は遺構番号を付与されていない。

SK177の平面形状は楕円形で、規模は2.36m×1.42m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-8°-Eである。底面は楕円形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SK178の平面形状は楕円形で、規模は1.12m×0.94m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-11°-Eである。底面は楕円形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈する。土層図が無いため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK179 099地区 (Fig.482、PL.68)

N23-60付近に位置する土壙である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3311号遺構と呼称さ

れている。

平面形状は隅丸方形で、規模は3.10m×1.62m、確認面からの深さは0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。底面は隅丸方形で平坦だが、溝が短軸方向に並行して4条、長軸方向にはそれと直交して1条認められる。北東隅にはピット1基が位置する。断面形状は、長軸方向・短軸方向共に逆台形を呈する。覆土の状況から明瞭な木棺痕は認められないが、陥没とれる土層が認められることから埋葬施設と判断した。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK180 099地区 (Fig.483、PL.68)

O23-22付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3312号遺構と呼称されている。

平面形状は形で、規模は(2.76)m×2.22m、確認面からの深さは0.90mを測る。主軸方位は長軸方向からN-62°-Wである。底面は長方形で中央が深く、凹凸が認められる。断面形状は、短軸方向では底面が鍋底状に丸みを帯び、側壁へは明瞭な立ち上りを見せないが、長軸方向では南西側で明瞭に立ち上がる。北東側では緩やかな階段状を呈する。土層図からは木棺痕など内部施設は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK181 099地区 (Fig.483、PL.68)

O23-62付近に位置する土壙である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3313号遺構と呼称されている。

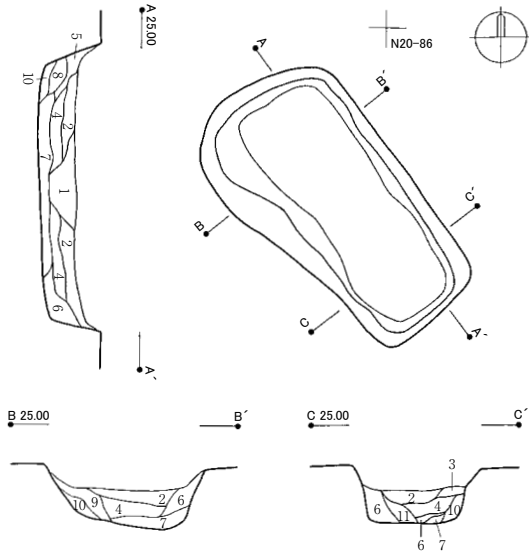
平面形状は楕円形二つで構成され、規模は2.32m×1.58m、確認面からの深さは1.29mを測る。主軸方位は長軸方向からN-14°-Wである。底面を示す最下位は狭く北側に寄って位置する。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形に近い形状を呈するが、長軸方向では全体的には逆台形に近いが、底部が複雑な形状を呈する。土層図からは、北側の記録が抜けているが、他事例から、内部施設として奥壁下位に横穴が作られていたとみられる。南側を竪坑とし、北側の横穴が玄室となっていたとみられる。玄室部分の平面形は隅丸方形に近く、規模は南北0.84m×東西1.18m、深さ1.05mを測る。主軸方位は長軸方向からN-19°-Wである。玄室から竪坑への接続部に溝が1条確認できる。玄室内の記録が無く、人骨の有無、状態も不明だが、地下式改葬墓とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK182 099地区 (Fig.483)

P22-26付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3328号遺構と呼称されている。

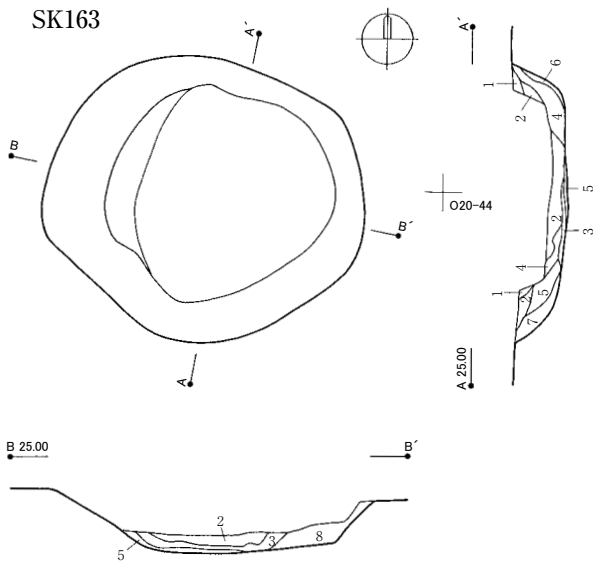
SK161



SK161AA'-BB'-CC'

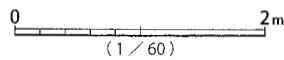
- 1 暗褐色土 ソフトローム・ローム大粒多量
- 2 黒褐色土 暗褐色土小塊 同系質土
- 3 黒褐色土 暗褐色土小塊、ローム大粒 同系質土
- 4 暗褐色土 暗褐色土粒 同系質土
- 5 黒褐色土 暗褐色土小塊 同系質土
- 6 黒褐色土 ソフトローム小塊 やや硬質
- 7 暗褐色土 黒褐色土粒多量、ローム粒 硬質 同系質土
- 8 暗褐色土 同系質土
- 9 黒褐色土 暗褐色土小塊、ローム大粒 同系質土
- 10 褐色土 ソフトローム多量、黒褐色土小塊 同系質土
- 11 暗褐色土 ローム多量・ソフトローム土粒 軟質 同系質土

SK163

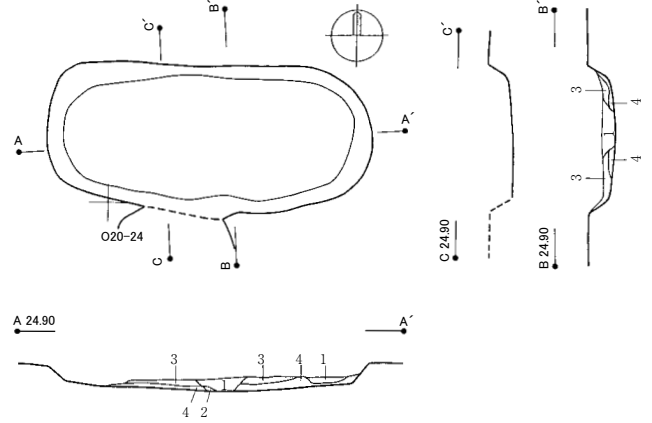


SK163AA'-BB'

- 1 黒色土 ソフトローム 軟質 1・2層同系
- 2 黒褐色土 ソフトローム粒多量、黒色土 1・2層同系
- 3 黒褐色土 ソフトローム
- 4 暗褐色土 6層に黒色土粒
- 5 暗褐色土 ソフトローム小塊多量
- 6 暗褐色土 ソフトローム小塊多量
- 7 黒褐色土 ソフトローム
- 8 黒色土 ソフトローム 軟質 1層と同系



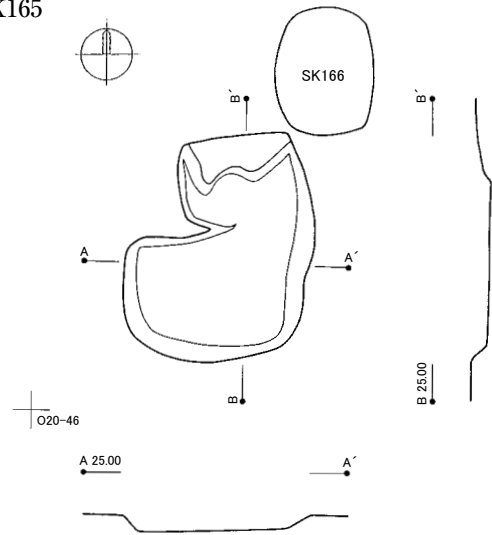
SK162



SK162AA'-BB'

- 1 黒色土 ソフトローム粒多量
- 2 黒褐色土 ソフトローム粒多量
- 3 黒褐色土 ローム粒
- 4 暗褐色土 ローム 3: 黒褐色土 1 自然層に近い

SK165



SK166

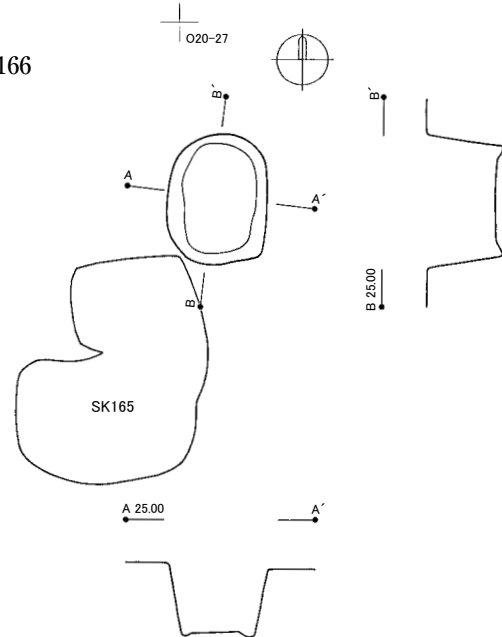


Fig.479 SK161、SK162、SK163、SK165、SK166 実測図

平面形状は楕円形で、規模は1.54m×1.08m、確認面からの深さは0.75mを測る。主軸方位は長軸方向からN-30°-Eである。底面は楕円形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向で逆台形を呈する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK183 099地区 (Fig.484、PL.68)

O24-20付近に位置する土壌である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壌が群集している。本遺構は、発掘調査時点では099-3318号遺構と呼称されている。

遺構確認面での平面形状は隅丸方形か長楕円形の間形態で、規模は(2.22)m×1.20m、確認面からの深さは0.61mを測る。主軸方位は長軸方向からN-11°-Wである。底面は長軸方向やや西寄りに形成されるが、明瞭な平坦面を持たない。また、短軸方向に溝が2条並行して西側の横穴底面まで達している。断面形状は、短軸方向では船底形を呈するが、西側側壁に横穴が作られ、横穴の底面と土壌底面との間には高まりを残す。長軸方向では逆台形を呈するが、底面は北側で僅かに高い段状を有する。

横穴の平面形長方形に近く、規模は長軸1.87m×短軸0.56m、天井から底面までは0.35mで、土壌底から0.08m上位に作られている。横穴の主軸方位は長軸方向からN-18°-Wである。

土層図からは木棺痕は認められない。覆土の状況は自然堆積にも見えるが、上層にロームブロックを含む土層が認められ、人為的な埋め戻しが想定される。形状から側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK184 099地区 (Fig.484)

O24-06付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壌が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3361号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は(2.88)m×2.44m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-11°-Eである。底面は楕円形で明瞭な平坦面を有しない。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字形で、長軸方向では逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK185 099地区 (Fig.484)

O24-44付近に位置する土坑である。南側にSM1151が位置するが、周囲は小規模な方形墳が複数存在し、その間に80m程の範囲で土坑・土壌が群集している。本遺構は調査区東側に展開する土坑群の東端に位置する。遺構の重複は無い。発掘調査時点では099-3358号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.74m×0.96m、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は隅丸方形を呈し、平坦である。北側の二隅と西側壁中央付近にピットが認められる。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈するとみられる。土層図が無

いため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK186 099地区 (Fig.484)

O24-80付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。南側にSM1151が近接する。本遺構は発掘調査時点では099-3320号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.14m×1.90m、確認面からの深さは0.63mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は楕円形を呈し平坦である。断面形状は、短軸方向では西側で内湾するものの、逆台形に近い形状を呈する。長軸方向では逆台形を呈する主坑を中心に、西側壁では段を有し、東側では逆台形の小規模な土坑が連結される。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK187 099地区 (Fig.485)

P24-40付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3322号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.80m×1.25m、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位は長軸方向からN-14°-Eである。底面は楕円形を呈し、中央部で東西側壁に達するピットが位置する。断面形状は、短軸方向では底面の広いU字形で、長軸方向では不定形である。覆土の状況からは内部施設は認められず、自然堆積とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK188 099地区 (Fig.485)

P24-52付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壙が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3321号遺構と呼称されている。

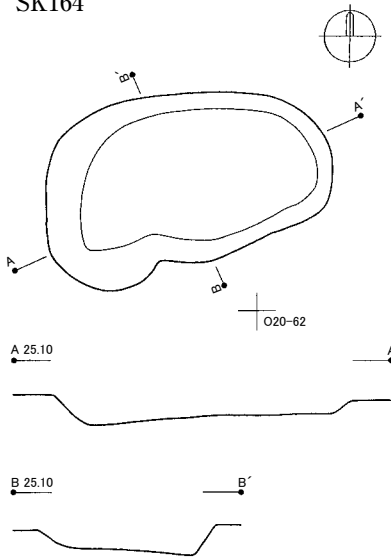
平面形状は楕円形で、規模は2.55m×1.75m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-7°-Eである。底面は北側の掘り込みにおいて楕円形を呈し、平坦である。また、南側には半月形を呈するテラス状の平坦面が認められる。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈し、長軸方向では南側にやや浅くなる段を有する。土層図からは木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

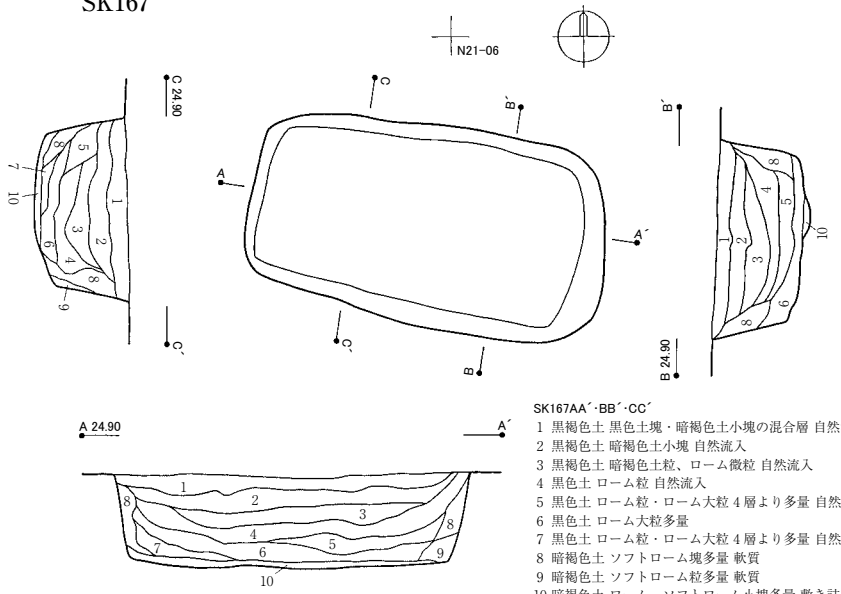
#### SK189 099地区 (Fig.485)

P23-88付近に位置する土坑である。遺構の重複は無い。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間

SK164

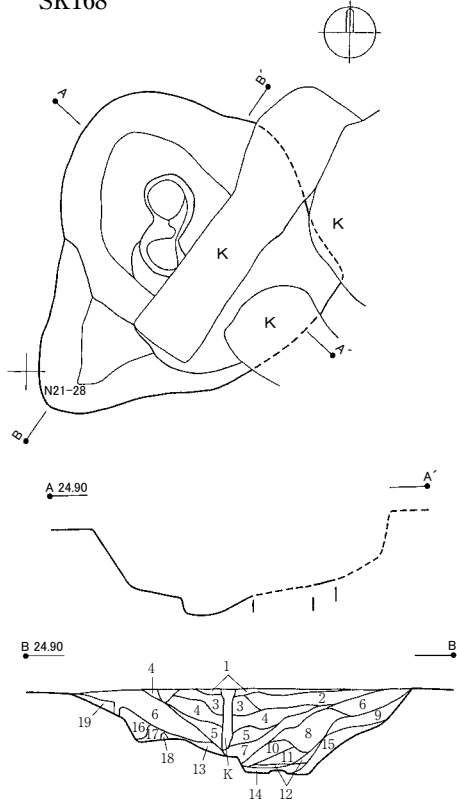


SK167

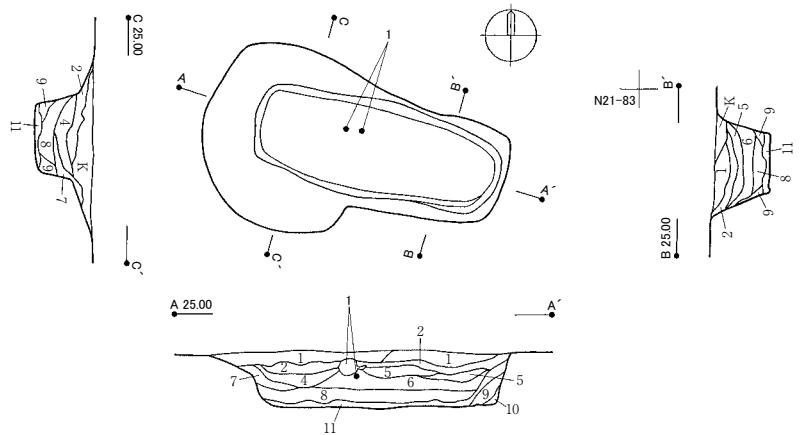


- SK167AA'-BB'-CC'
- 1 黒褐色土 黒色土塊・暗褐色土小塊の混合層 自然流入
  - 2 黒褐色土 暗褐色土小塊 自然流入
  - 3 黒褐色土 暗褐色土粒、ローム微粒 自然流入
  - 4 黒色土 ローム粒 自然流入
  - 5 黒色土 ローム粒・ローム大粒 4層より多量 自然流入
  - 6 黒色土 ローム大粒多量
  - 7 黒色土 ローム粒・ローム大粒 4層より多量 自然流入
  - 8 暗褐色土 ソフトローム塊多量 軟質
  - 9 暗褐色土 ソフトローム粒多量 軟質
  - 10 暗褐色土 ローム・ソフトローム小塊多量 敷き詰めた土でない

SK168



SK170



- SK168BB'
- 1 黒褐色土 ソフトローム多量
  - 2 褐色土 ソフトローム多量
  - 3 褐色土 ソフトローム多量 2層より硬質
  - 4 褐色土 黒褐色土粒
  - 5 褐色土 黒褐色土粒多量
  - 6 褐色土 黒褐色土粒
  - 7 暗褐色土 5層と10層の中間層
  - 8 黒褐色土 7層土多量 (7層と10層の中間)
  - 9 褐色土 黒褐色土粒多量
  - 10 黒色土 7層土粒・黒色土主体
  - 11 黒色土 7層土粒・黒色土主体 10層より硬質
  - 12 褐色土 5層系 やや硬質
  - 13 明褐色土 ソフトローム・12層土の混合層
  - 14 黄褐色土 ローム大ブロック・13層土
  - 15 明褐色土 ソフトローム・6層土の混合層
  - 16 黒褐色土・暗褐色土の混合層
  - 17 暗褐色土、ソフトローム小塊
  - 18 ソフトローム
  - 19 ソフトローム多量

- SK170AA'-BB'-CC'
- 1 黒褐色土 褐色土粒、ローム粒
  - 2 黒褐色土 ローム粒
  - 3 黒色土 ローム大粒・ローム微粒多量
  - 4 黒色土 ローム大粒・ローム微粒多量・ソフトローム多量
  - 5 黒色土 ローム大粒・ローム微粒多量・ソフトローム多量
  - 6 黒色土 ローム大粒・ローム微粒多量・ソフトローム多量
  - 7 黒褐色土 褐色土、ローム微粒
  - 8 黒褐色土 ローム小ブロック・ローム大粒
  - 9 黒褐色土 ローム大粒・ソフトローム多量
  - 10 褐色土 ローム・暗褐色土の混合層
  - 11 暗褐色土 ローム 1: ローム小ブロック大粒 1の比 軟質 人為による埋設

SK169

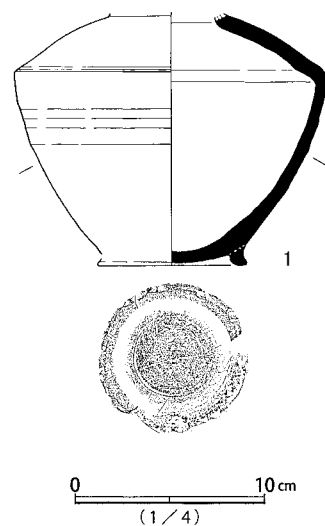
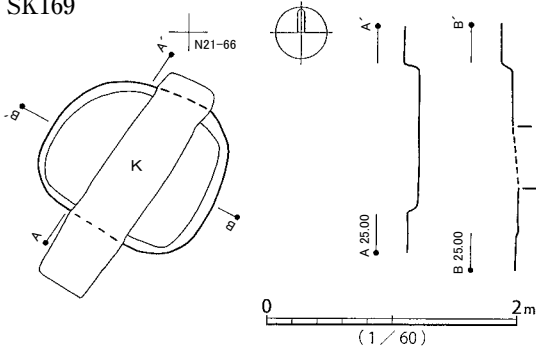


Fig.480 SK164、SK167、SK168、SK169、SK170 実測図

に80m程の範囲で土坑・土壌が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3326号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.85m×1.50m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-4°-Wである。底面は楕円形を呈し平坦である。西側にピット1基が認められる。断面形状は長軸方向・短軸方向共に逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK190 099地区 (Fig.485)

Q24-02付近に位置する土坑である。遺構の重複は無いが、南側が調査区境界であり、以南を検出していない。周囲は小規模な古墳が複数位置し、その間に80m程の範囲で土坑・土壌が群集している。本遺構は発掘調査時点では099-3325号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は計測不能×1.62m、確認面からの深さは0.20mを測る。主軸方位は長軸方向からN-3.5°-Eである。底面は隅丸方形を呈し、凹凸が激しい。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに不整形である。土層図からは木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK191 099地区 (Fig.486、PL.69)

P28-08付近に位置する土壌である。SK192・SK193と近接し、周辺には遺構が確認できず、独立した群を構成する。SK192と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点では099-3305号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.34m×0.95m、確認面からの深さは0.61mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。底面は不整形楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向で逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

人骨が1体検出されている。頭蓋骨と上腕骨の出土位置から、座位による埋葬の可能性を想定する。副葬品は認められない。

遺構の分布位置や人骨の埋葬形体状況から、本遺構は近世以降に帰属するものとみられる。

#### SK192 099地区 (Fig.486)

P28-08付近に位置する土壌である。SK191・SK193と近接し、周辺には遺構が確認できず、独立した群を構成する。SK191と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点では099-3307号遺構と呼称されている。

平面形状は形で、規模は0.95m×0.89m測り、確認面からの深さは計測不能である。主軸方位は長軸方向からN-89.5°-Eである。底面は楕円形を呈し平坦である。断面形状は、記録が無く詳細は不明。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

帰属時期は、の所産と考えられる。遺構の分布位置や近接する土壌の存在から、本遺構は近世以降に帰属するものとみられる。



### SK193 099地区 (Fig.486)

P28-08付近に位置する土壌である。SK191・SK192と近接し、周辺には遺構が確認できず、独立した群を構成する。遺構の重複は無い。本遺構は発掘調査時点では099-3306号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.05m×0.96m、確認面からの深さは0.23mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は不整形を呈し、平坦であり、南側壁に近接してピットが1基位置する。断面形状は、東西方向で逆台形を呈するが、南北方向では平坦部分の少ない不整形である。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

1体とみられる人骨が検出されているが、大きさから子供の可能性がある。検出状況から、膝を曲げた仰臥を想定する。

遺構の分布位置や人骨の埋葬形体の状況から、本遺構は近世以降に帰属するものとみられる。

### SK194 SW83地区 (Fig.487、PL.69)

S27-64付近に位置する土壌である。西側にはSM1041が近接し、北側にはやや離れてSM1120が位置する。調査範囲の東端にあたるため、群集するかは不明であるが、南側にSK195が近接する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K40号遺構と呼称されている。

遺構確認面での平面形状は隅丸方形か長楕円形の間形態で、規模は2.18m×1.16m、確認面からの深さは0.53mを測る。主軸方位は長軸方向からN-40°-Eである。底面は長楕円形を呈し明瞭な平坦面では無い。断面形状は、短軸方向では西側側壁に横穴が作られ、土壌底面よりわずかに上方に位置する。土壌底面は船底形を呈する。土層図からは木棺痕は認められず、覆土の状況からは堆積状況を復元し難い。

横穴の平面形は、長楕円形を呈し、規模は長軸2.12m×短軸(0.38)m、天井から底面までは0.23mで、土壌底面から0.05m上位に作られている。横穴の主軸方位は長軸方向からN-35°-Eである。

形状から側壁扶込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK195 SW83地区 (Fig.487、PL.69)

S27-82付近に位置する土坑である。西側にはSM1041が近接し、北側にはやや離れてSM1120が位置する。調査範囲の東端にあたるため、群集するかは不明であるが、北側にSK194が位置する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K39号遺構と呼称されている。

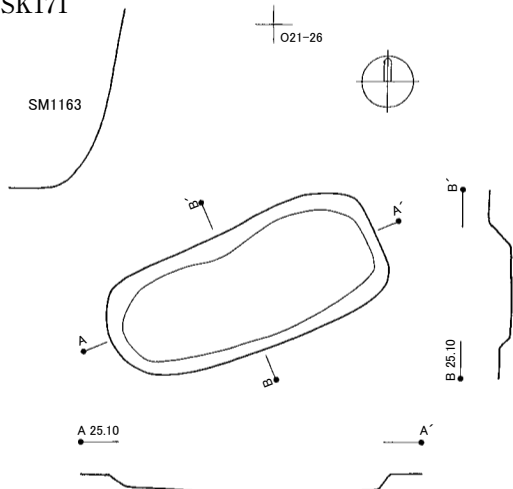
平面形状は楕円形で、規模は2.26m×1.26m、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。底面は長楕円形を呈し平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕の存在を明瞭には断じ得ない。覆土の状況からは自然堆積を想定する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

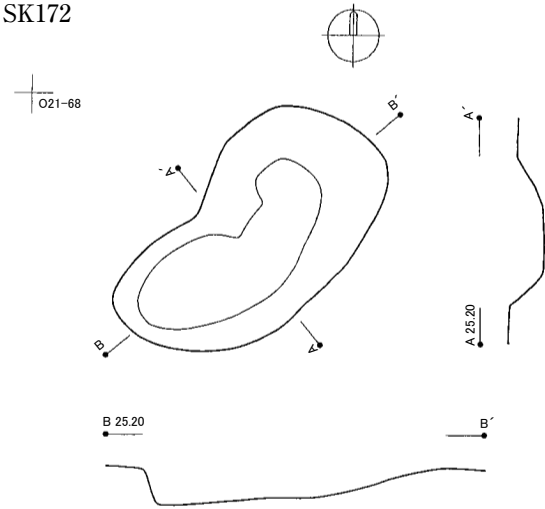
### SK196 SW83地区 (Fig.487、PL.69)

V27-04付近に位置する土壌である。調査区南東端部の南斜面で、西側にSM1082がやや離れて位置

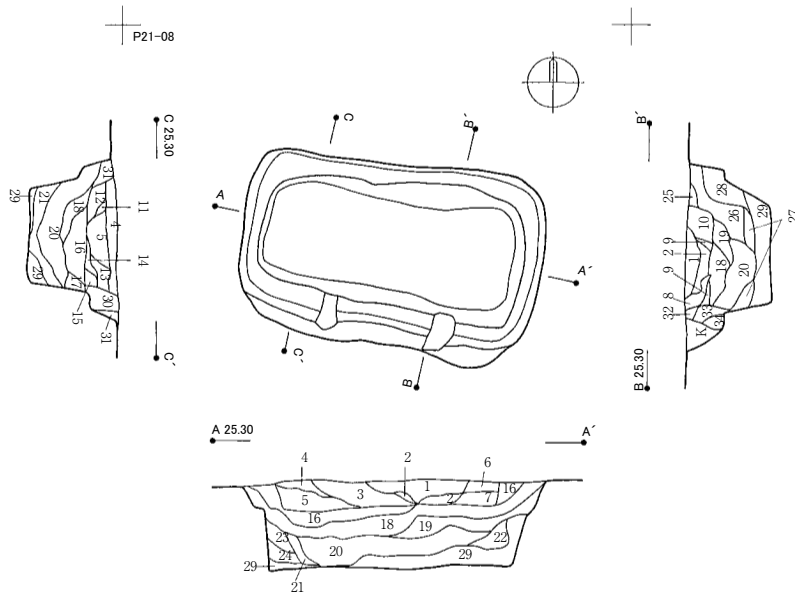
SK171



SK172



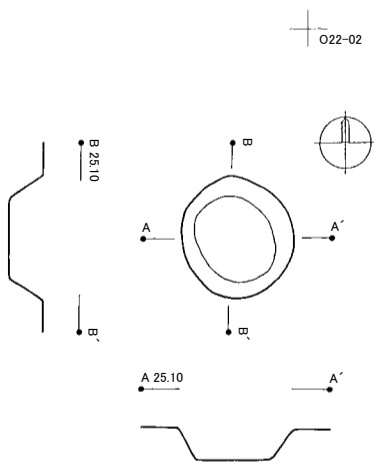
SK173



SK173AA'-BB'-CC'

- 1 黒色土 ローム大粒・微粒
- 2 暗褐色土 黒色土、ローム
- 3 暗褐色土 ローム大粒・ソフトローム小塊多量
- 4 暗褐色土 ローム粒多量
- 5 黒褐色土 ローム微粒、暗褐色土粒
- 6 暗褐色土 ローム粒多量
- 7 暗褐色土 ローム粒・ソフトローム小塊多量
- 8 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 9 黒褐色土 ローム粒
- 10 一 暗褐色土・黒褐色土・ロームの混合層
- 11 一 暗褐色土塊
- 12 暗褐色土 黒褐色土粒、ローム大粒多量
- 13 暗褐色土 ローム 5層と同じ
- 14 一 暗褐色土・黒土・ロームの混合層
- 15 黒褐色土 ローム大粒多量
- 16 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム大粒
- 17 褐色土 ローム微粒・暗褐色土の混合層 壁の崩れか？
- 18 黒褐色土 ローム小ブロック少量・ローム・ソフトローム
- 19 黒褐色土 ソフトローム
- 20 暗褐色土 黒色土粒、ローム粒・ローム大粒多量
- 21 暗褐色土 ロームブロック、黒色土多量
- 22 暗褐色土
- 23 黒色土 ローム粒少量 軟質
- 24 黒色土 ローム微粒
- 25 暗褐色土 ローム小ブロック多量
- 26 暗褐色土 ローム大粒
- 27 黒褐色土 ローム微粒
- 28 褐色土 ローム小ブロック・ローム粒・黒褐色土の混合層
- 29 暗褐色土 黒色土多量、ローム粒 硬質
- 30 黒褐色土 ローム多量
- 31 暗褐色土 ローム大粒多量
- 32 暗褐色土 軟質
- 33 暗褐色土 軟質
- 34 黄褐色土 ローム主体、暗褐色土

SK174



SK175

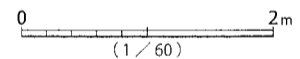
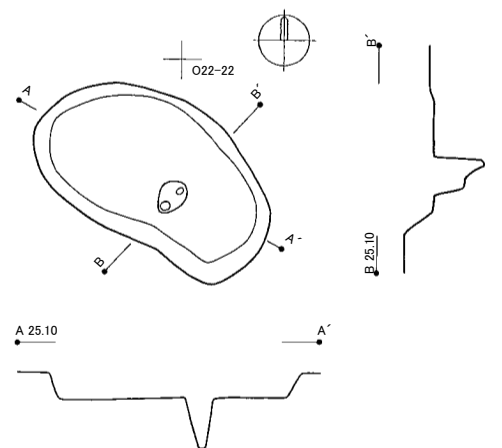
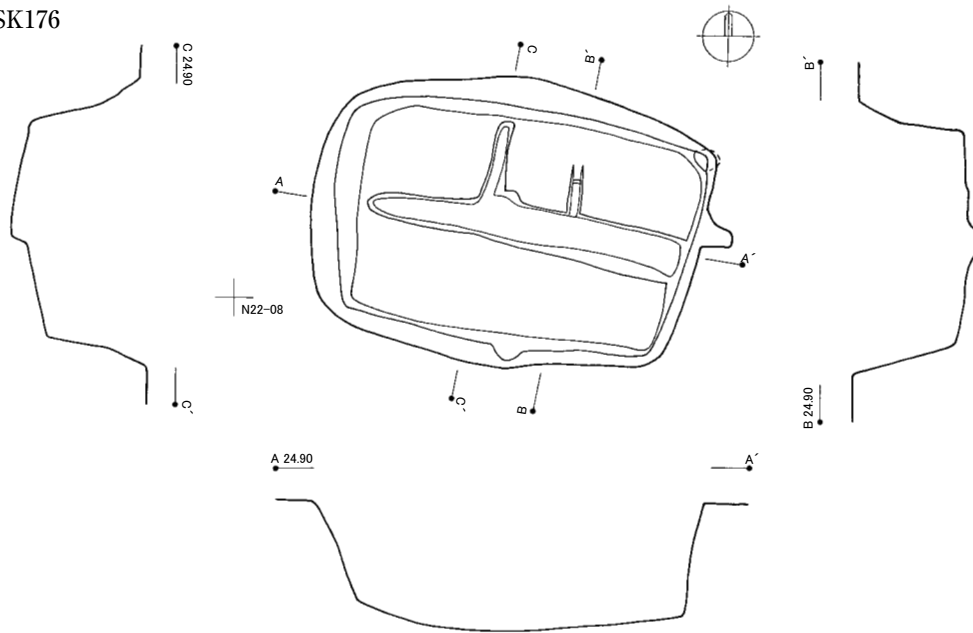
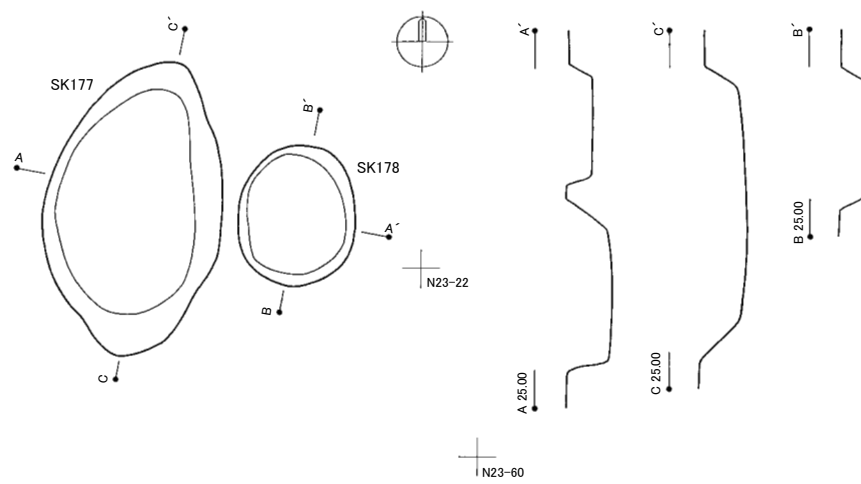


Fig.481 SK171、SK172、SK173、SK174、SK175 実測図

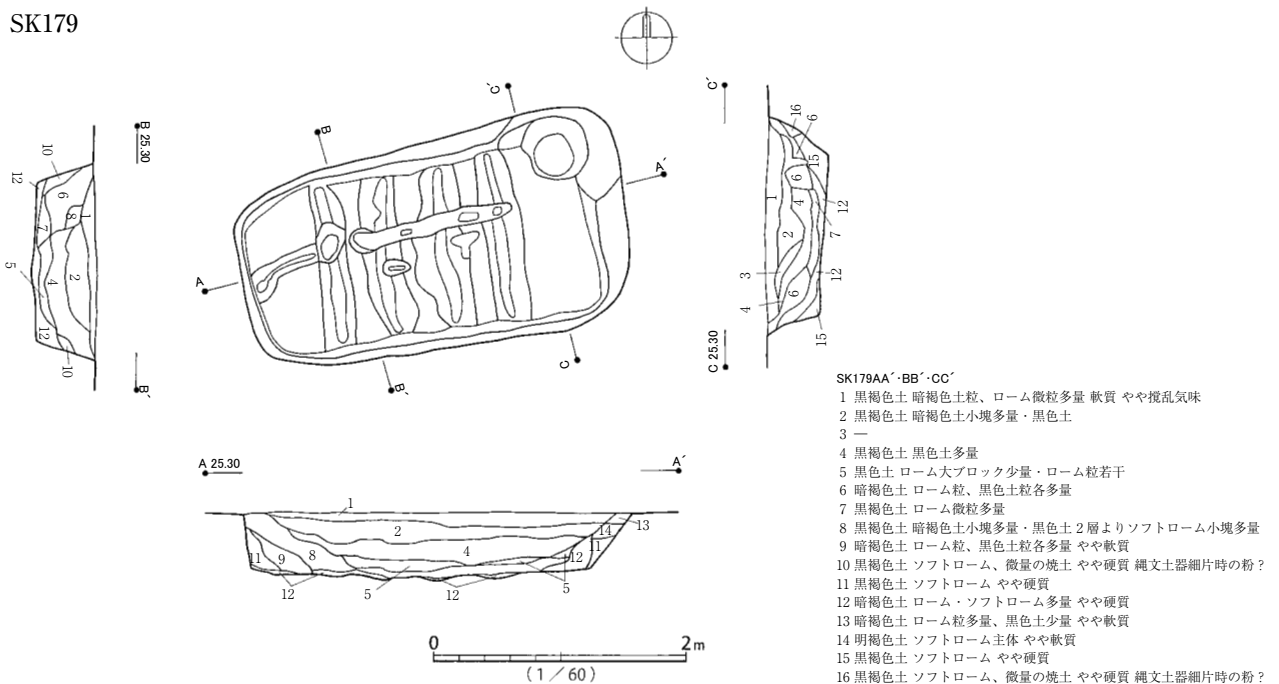
SK176



SK177・SK178



SK179



- SK179AA'・BB'・CC'
- 1 黒褐色土 暗褐色土粒、ローム微粒多量 軟質 やや攪乱気味
  - 2 黒褐色土 暗褐色土小塊多量・黒色土
  - 3 —
  - 4 黒褐色土 黒色土多量
  - 5 黒色土 ローム大ブロック少量・ローム粒若干
  - 6 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒各多量
  - 7 黒褐色土 ローム微粒多量
  - 8 黒褐色土 暗褐色土小塊多量・黒色土2層よりソフトローム小塊多量
  - 9 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒各多量 やや軟質
  - 10 黒褐色土 ソフトローム、微量の焼土 やや硬質 縄文土器細片時の粉?
  - 11 黒褐色土 ソフトローム やや硬質
  - 12 暗褐色土 ローム・ソフトローム多量 やや硬質
  - 13 暗褐色土 ローム粒多量、黒色土少量 やや軟質
  - 14 明褐色土 ソフトローム主体 やや軟質
  - 15 黒褐色土 ソフトローム やや硬質
  - 16 黒褐色土 ソフトローム、微量の焼土 やや硬質 縄文土器細片時の粉?

Fig.482 SK176、SK177、SK178、SK179 実測図

する。SK197などと5基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K38号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.46m×1.68m、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Eである。底面は不整形を呈し、南側には僅かに高い平坦面を有する。断面形状は、短軸方向では矩形をていするが、北側側壁が僅かに内傾する。長軸方向では東側に傾斜する。土層図からは、木棺痕と判断できるような状況を見て取れるが、平面図では捉えていない。ほかに、短軸方向の断面形で見た内傾する北側側壁は、東西両端部で認められ、加えて、底面南側の段を有するなどの諸要素は、側壁扶込土壇の特徴と重なる。

また、土層図は、整理初段階で共通する土層に番号を付けたため、関係性が逆転してしまう層が発生しているが、そのまま掲載している。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK197 SW83地区 (Fig.487)

V27-23付近に位置する土坑である。調査区南東端部の南斜面で、西側にSM1082がやや離れて位置する。SK196などと5基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K43号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は3.20m×0.82m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向で逆台形に近い形状を呈する。長軸方向は記録が無く不明であるが、平面図からは、西側に底面より一段高いテラス状の平坦面を有するよう見える。土層図からは木棺痕は確認できず、覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK198 SW83地区 (Fig.487、PL.69～70)

V27-51付近に位置する土壇である。調査区南東端部の南斜面で、西側にSM1082がやや離れて位置する。SK196などと5基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K37号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は長楕円形で、規模は2.32m×0.84m、確認面からの深さは0.62mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Eである。底面は長楕円形を呈するが、その位置は北側側壁に寄り、遺構上端ラインよりも北にある。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに矩形か逆台形に近いが、短軸方向で底面が北に傾斜する。北側側壁は下位において横穴状に掘り込むが、北側に傾斜しており、水平な面は限られる。土層図からは木棺痕は確認できず、覆土の状況は自然堆積を示す。

横穴状の掘り込みの平面形は長楕円形で、規模は長軸2.16m×短軸0.50m、天井から底面までは0.15mを測り、竪坑底から0.10m下位に作られている。掘り込み底部の軸方位は長軸方向からN-89°-Eである。側壁扶込土壇に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK199 SW83地区 (Fig.488、PL.70)

V26-28付近に位置する土坑である。調査区南東端部の南斜面で、北側にSM1082がやや離れて位置する。SK196などと5基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K42号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は0.90m×0.90m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Wである。底面は隅丸方形を呈し北側側壁に沿ってピットが1基位置する。断面形状は、長軸方向・短軸方向でレンズ状に近い形状を呈する。土層図は覆土の自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK200 SW83地区 (Fig.488、PL.70)

V26-47付近に位置する土坑である。調査区南東端部の南斜面で、西側にSM1176がやや離れて位置する。SK196などと5基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K36号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.10m×0.90m、確認面からの深さは0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。底面は長楕円形で呈するが、その位置は北側側壁に寄り、遺構上端ラインよりも北にある。断面形状は、短軸方向でJ字形を呈し、北側側壁は下位において横穴状に掘り込まれる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

横穴状の掘り込みの平面形は明瞭ではないが長楕円形に近い。規模は長軸(2.00)m×短軸(0.55)m、天井から底面までは0.18mを測る。側壁挟込土層に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK201 SW83地区 (Fig.488、PL.70)

T26-80付近に位置する土坑である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK202などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K29号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模4.96m×0.80m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Wである。底面は長楕円形を呈し平坦である。断面形状は短軸方向でレンズ状を呈する。規模・形状から埋葬施設とは考えにくく、区画溝に近い。覆土の状況から自然堆積とみられる。

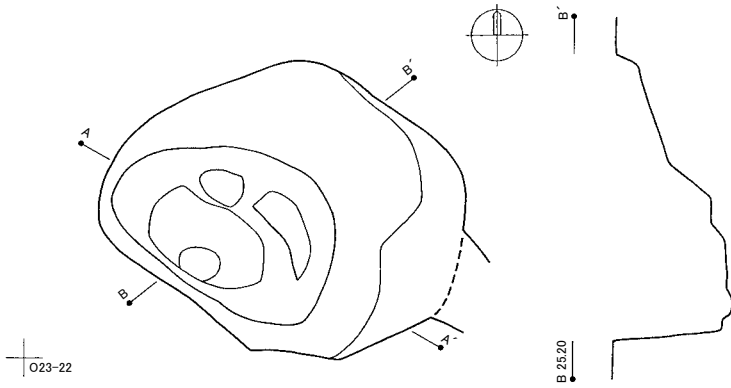
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK202 SW83地区 (Fig.488、PL.70)

U26-33付近に位置する土坑である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK201などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K30号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.65m×0.75m、確認面からの深さは0.63mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は長楕円形を呈し平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向と

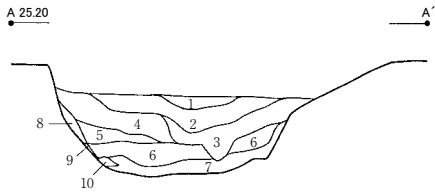
SK180



SK180AA'

- 1 黒褐色土 ローム大粒多量
- 2 黒褐色土 ローム大粒・ローム大ブロック
- 3 黒褐色土 ローム小ブロック、黒色土粒
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック・ローム粒多量
- 5 黒褐色土 ローム小ブロック、黒色土粒
- 6 黒褐色土 ローム大ブロック多量
- 7 黄褐色土 ロームブロック
- 8 暗褐色土 黒色土粒多量 1~6・9層の影響
- 9 黒色土 黒色土 硬質・緊密
- 10 黒褐色土 黒色土・ローム大粒・小ブロックの混合

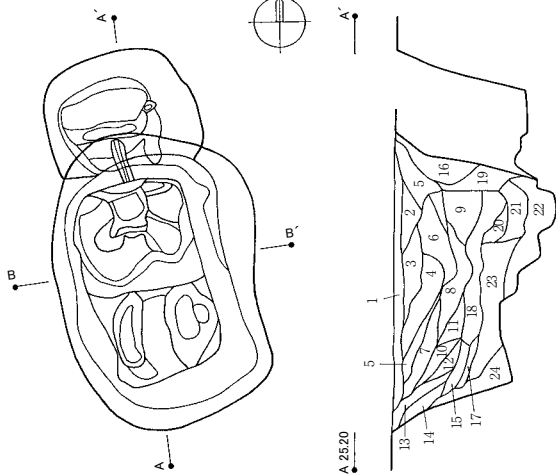
O23-22



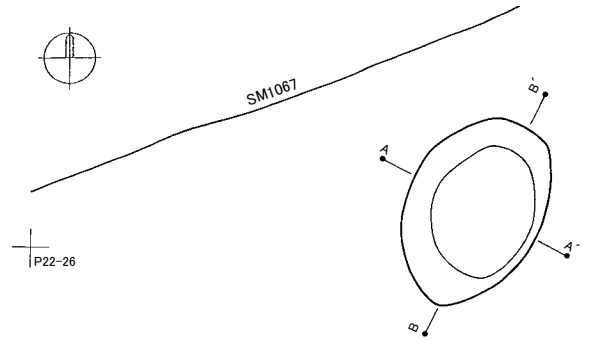
SK181AA'・BB'

- 1 黒褐色土 ローム小ブロック少量・ローム小ブロック粒、暗褐色土小塊
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土粒多量 3層と同じ
- 3 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土小塊
- 4 黒色土 ローム大粒・ローム粒・ソフトローム小塊
- 5 黒褐色土 ローム大粒多量
- 6 黒褐色土 ローム中ブロック・ローム粒多量
- 7 黒色土 ローム微粒
- 8 黒色土 ローム微粒多量
- 9 黒褐色土 ローム大粒・ローム微粒 極めて緊密
- 10 黒色土 ローム微粒 7層より少量 7層と同じ
- 11 黒褐色土 ローム大粒多量、黒色土多量
- 12 黒色土 ローム微粒多量 8層より少量 硬度 8層と同じ
- 13 黒褐色土 暗褐色土、ソフトローム各多量
- 14 暗褐色土 暗褐色土、ソフトローム各多量 ソフトローム 3: 黒褐色土 1 の比 13層と同じ
- 15 黒褐色土 暗褐色土、ソフトローム・ローム大粒各多量
- 16 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土粒多量 3層と同じ
- 17 黒褐色土 暗褐色土小塊多量
- 18 黒褐色土 ローム大粒多量、黒色土少量
- 19 黒色土 黒色土 軟質
- 20 黒褐色土 ローム大粒多量、黒色土少量 硬度 18層と同じ
- 21 暗褐色土 ローム小ブロック多量
- 22 黒褐色土 ローム小ブロック多量
- 23 黒褐色土 黒色土にローム大ブロック・小ブロック
- 24 暗褐色土 暗褐色土、ソフトローム各多量 ソフトローム 3: 黒褐色土 1 の比 14層と同じ

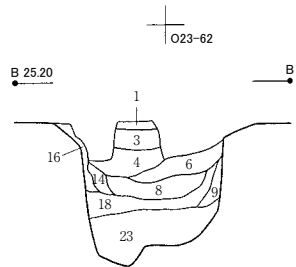
SK181



SK182



P22-26



O23-62

B 25.20

A 25.50

B 25.50

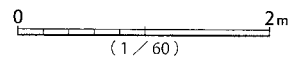


Fig.483 SK180、SK181、SK182 実測図

もに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕の痕跡は認められない。土層は自然堆積を示すが、覆土にはロームブロックが主体的に確認でき、人為的な埋め戻しが想定される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK203 SW83地区 (Fig.488、PL.71)

U25-28付近に位置する土壌である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK202などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K34号遺構と呼称されている。

確認面での平面形状は楕円形で、規模は2.55m×1.50m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。底面は不整形を呈する。断面形状は、短軸方向では逆台形に近い形状を呈し、北側側壁が下位において横穴状を呈し、横穴の底面は、土壌底面と同位か僅かに下位に位置する。長軸方向では逆台形を呈し、底面が僅かに窪む。土層図からは木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

横穴状の掘り込みは、平面形が不整形を呈し、規模は長軸(2.25)m×短軸(0.75)m、天井から底面までは0.36mで、底面は土壌底面から最大で0.11m下位に作られている。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。側壁挟込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK204 SW83地区 (Fig.489、PL.71)

U25-35付近に位置する土壌である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK202などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K32号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.20m×0.85m、確認面からの深さは0.49mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに明瞭な逆台形を呈する。土層図から木棺痕が明瞭に確認できる。木棺の平面形は長方形を復元し、規模は長軸(1.55)m×短軸(0.50)m、深さ0.42mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK205 SW83地区 (Fig.489、PL.71)

U25-58付近に位置する土壌である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK202などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K31号遺構と呼称されている。

確認面での平面形状は隅丸方形で、規模は2.10m×1.15m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は不整形を呈し緩やかに窪む。東側に掘り込みが存在する。断面形状は、短軸方向では矩形に近い形状を呈し、北側側壁の下位において横穴状に掘り込みが存在する。長軸方向では逆台形に近いが、底面は不規則な凹凸を有する。土層図からは木棺痕は確

認できないが、横穴状の掘り込み部分に第一埋没土が認められる特徴的な層序を示す。覆土の状況から、人為的な埋め戻しを想定する。

横穴状の掘り込みは、平面形が長楕円形を呈し、規模は長軸(2.25)m×短軸(0.70)m、天井から底面までは0.48mで、底面は、土壇底面から0.20m下位に作られている。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。

側壁抉込土壇に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK206 SW83地区 (Fig.489、PL.71)

V25-07付近に位置する土壇である。調査区南東部の南斜面で、北側でSM1041、東側でSM1082、西側でSM1107・SM1076、南側でSM1189などに囲まれて位置する。SK202などと6基ほどの群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K33号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.80m×1.50m、確認面からの深さは0.62mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Eである。底面は不整形で、断面形状は、短軸方向でJ字形を呈し、長軸方向ではレンズ状もしくは丸みを帯びた逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は認められない。覆土の状況には、上層においてレンズ状に堆積する特徴を見せる。

横穴状の掘り込みの平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸(2.45)m×短軸(0.73)m、天井から底面までは0.42mで、底面は、土壇底から0.15m下位に作られている。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。

側壁抉込土壇に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK207 SW83地区 (Fig.489、PL.72)

V25-20付近に位置する土壇である。調査区の南東側にある南斜面に位置し、周囲にはSM1058、SM1076、SM1059、SM1119が占地する。周囲に土壇・土坑は無く、単独で存在する。発掘調査時点ではSW83-K35号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.30m×1.10m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-66°-Eである。底面は長方形を呈し、断面形状は、長軸方向・短軸方向で逆台形を呈する。土層図からは木棺痕が明瞭に確認できる。平面形は方形を呈するとみられ、規模は長軸(1.70)m×短軸(0.75)m、深さ0.36mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-66°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

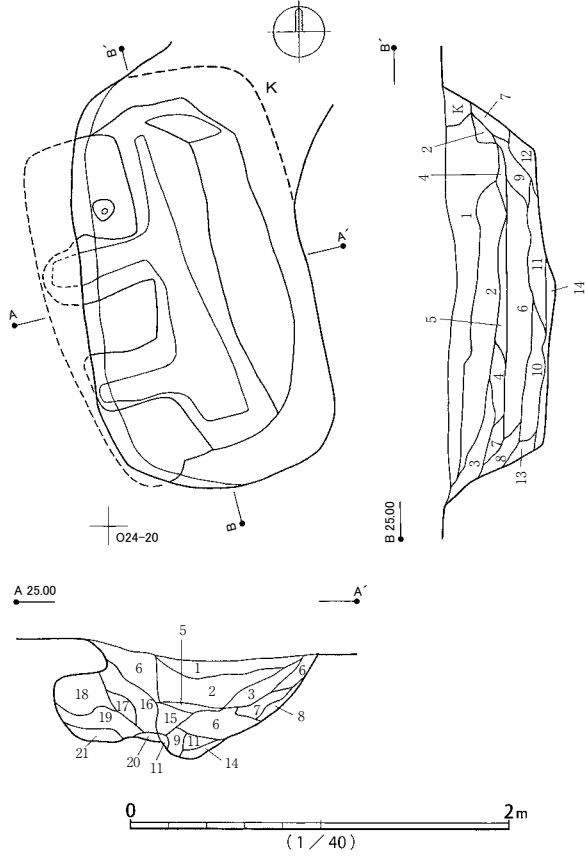
#### SK208 SW83地区 (Fig.490、PL.72)

T23-08付近に位置する土壇である。調査範囲の南東部に位置し、周囲には国No.174(諏訪台28号墳)、国No.256(諏訪台40号墳)、SM175・SM1066・SM1012・SM1062が位置する。土壇としては西側にやや離れてSK209が位置する。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K11号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.08m×1.08m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸

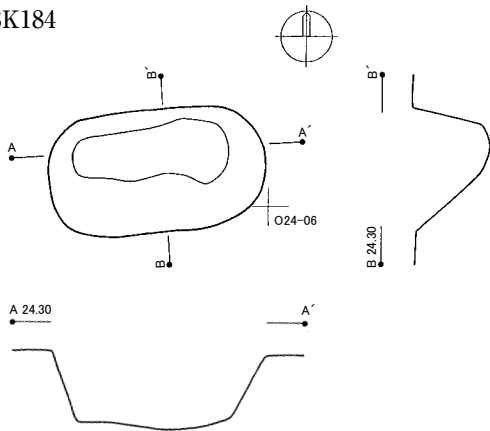


SK183

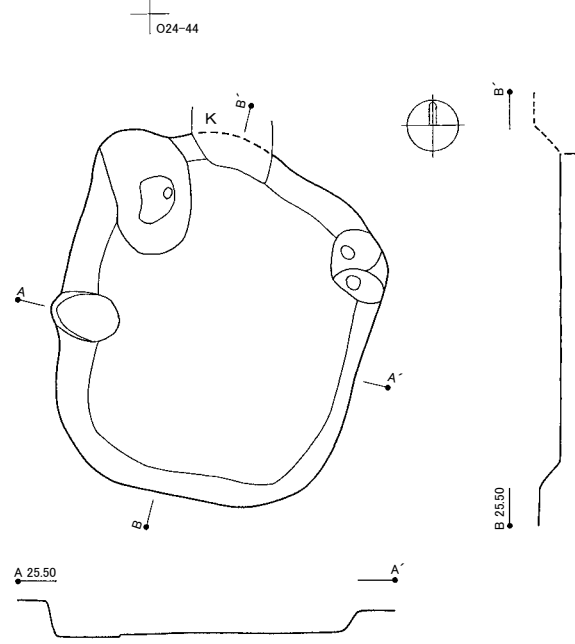


- SK183AA'-BB'
- 1 黒褐色土 軟質褐色土小塊多量
  - 2 黒褐色土 軟質褐色土小塊多量 1層より黒褐色土多量
  - 3 黒褐色土 軟質黒褐色土にローム微粒
  - 4 黒褐色土 軟質黒褐色土にローム微粒 3層よりローム粒やや多量
  - 5 黒色土 軟質黒褐色土にローム微粒、黒色土多量・暗褐色土粒多量
  - 6 暗褐色土 ローム大粒・小ブロック多量 硬質
  - 7 暗褐色土 ソフトローム小塊・ローム粒 硬質
  - 8 暗褐色土 ローム多量 硬質 半築状埋設土
  - 9 黒褐色土 褐色土小塊、ローム小ブロック
  - 10 暗褐色土 ローム大粒・小ブロック多量
  - 11 暗褐色土 ローム大粒・小ブロック多量、黒褐色土粒多量
  - 12 一黒褐色土・暗褐色土の混合層にローム小ブロック
  - 13 黒褐色土 ロームブロック 軟質
  - 14 黒褐色土 ロームブロック 硬質
  - 15 黒褐色土 褐色土小塊
  - 16 暗褐色土 ソフトローム多量 やや硬質
  - 17 褐色土 ソフトローム 3：暗褐色土 1の比 やや硬質
  - 18 暗褐色土 ソフトローム主体 16層よりローム多量 やや硬質
  - 19 褐色土 黒色土粒 ソフトローム 3：暗褐色土 1の比 やや硬質
  - 20 褐色土 ソフトローム 3：暗褐色土 1の比 やや硬質
  - 21 褐色土 黒色土多量 ソフトローム 3：暗褐色土 1の比 やや硬質

SK184



SK185



SK186

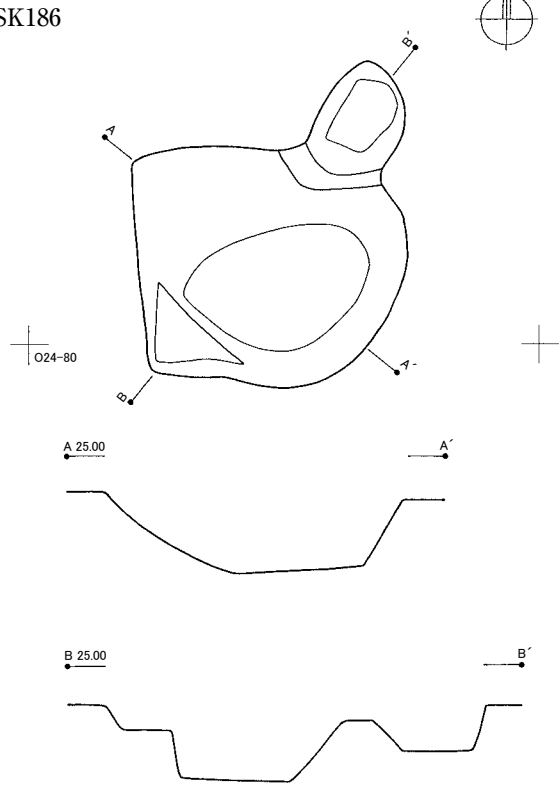


Fig.484 SK183、SK184、SK185、SK186 実測図

方向からN-11°-Wである。底面は長方形を呈し、断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに矩形を呈する。土層図から木棺痕が明瞭に認められるが、幅が極めて狭い特徴を有する。平面形は、規模は長軸1.64m×短軸0.46m、深さ0.66mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-11°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK209 SW83地区 (Fig.490、PL.72)

T23-00付近に位置する土壌である。調査範囲の南東部に位置し、周囲には国No.174(諏訪台28号墳)、国No.256(諏訪台40号墳)、SM175・SM1066・SM1012・SM1062が位置する。土壌としては東側にやや離れてSK208が位置する。発掘調査時点ではSW83-1201号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は3.68m×1.76m、確認面からの深さは0.90mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Wである。底面は長方形で中央に長軸と直交する溝が1条認められる。断面形状は、短軸方向では矩形あるいは逆台形を呈し、長軸方向では矩形に近い形状を呈するが、東側では段状を呈して開口する。土層図からは木棺痕跡は不明瞭な部分があるが、陥没が認められ、空間があったことは想定できる。木棺の平面形は長方形を呈する。特徴的な形態としては、木棺側板とみられる周囲にピット状の痕跡があり、それは各隅と長辺に各3箇所、短辺に各1箇所が認められることが挙げられる。木棺痕の規模は長軸2.45m×短軸1.20m、深さ0.93mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-82°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK210 SW83地区 (Fig.490、PL.72)

V22-50付近に位置する土壌である。調査区境界に位置し、SD11と重複し、周囲にはSM1087、SM1008が位置する。周囲には土壌・土坑が認められるが、主軸方位が異なる。単独で存在するが、古墳の主体部である可能性を残す。本遺構は発掘調査時点ではSW83-K44号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.50m×1.18m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Eである。底面は長方形を呈し平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに矩形を呈する。平面図・土層図から木棺痕が明瞭に確認できる。平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.02m×短軸0.78m、深さ0.40mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-75°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK211 SW83地区 (Fig.491)

位置不明の土坑である。現場原図には「SW50-37?」とあるが、その番号の遺構は有天井土壌の図面があるため、これとは別遺構とみられる。形状からSW80のK41(国No.256)主体部の可能性があるが、根拠が薄いため、単独土坑として扱っておく

平面形状は長方形で、規模は1.65m×0.59m、確認面からの深さは0.18mを測る。主軸方位はN-90°である。底面は長方形を呈し平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK212 セ28地区 (Fig.491)

セ28地区の南西端、T4-25付近に位置する土坑である。SD27と重複し、SM1190と近接するが、新旧関係は不明である。

本遺構は発掘調査時点では遺構番号が付与されず、SD27の一部として扱われている。周囲に平面プランが似る土壌・土坑が散見されるため、整理段階で新番号を付与した。

平面形状は隅丸長方形で、規模は(2.88)m×1.00m、確認面からの深さはmを測る。主軸方位は長軸方向からN-37°-Wである。底面は長楕円形を呈するが、記録類に限られるため、詳細は不明である。木棺痕が検出されていない。

遺物の出土は無い。

帰属時期は、不明であるが、SM1190に近い時期を想定しておく。

### SK213 セ28地区 (Fig.491、PL.73)

S5-53付近に位置する土壌である。SS102方台部に位置し、SD26と重複する。SS102の主体部の可能性があるが、記録類が乏しいため単独土壌として報告しておく。SM9、SD26との新旧関係は不確定である。なお、本遺構は調査段階でセ28-063・072と遺構番号が二つ付与されていたため、整理段階で統合している。

平面形状は長楕円形で、規模は2.88m×1.30m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-36°-Wである。底面は長楕円形か不整形を呈し、断面形状は、短軸方向で逆台形もしくは底面からやや内湾気味に開口する形状を呈する。内部には木棺痕が検出されており、平面形は長方形で、規模は2.30m×1.95m、深さmを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-38°-Wである。平面図と断面図が整合しないが、そのまま掲載している。

遺物の出土は無い。帰属時期は、不明である。

### SK214 セ28地区 (Fig.491、PL.73)

S6-50付近に位置する土壌である。北側でSS103の周溝に近接して位置する。新旧関係は不明。本遺構は発掘調査時点ではセ28-070号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.82m×1.16m、確認面からの深さは0.65mを測る。主軸方位は長軸方向からN-49°-Wである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、長・短軸方向とも逆台形で、何れも中央部が僅かに高くなるが、ほぼ平坦な形状を呈する。内部には木棺痕が検出されており、平面形は長方形、規模は2.26m×0.68m、深さ0.65mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-50°-Wである。遺物の出土は無い。

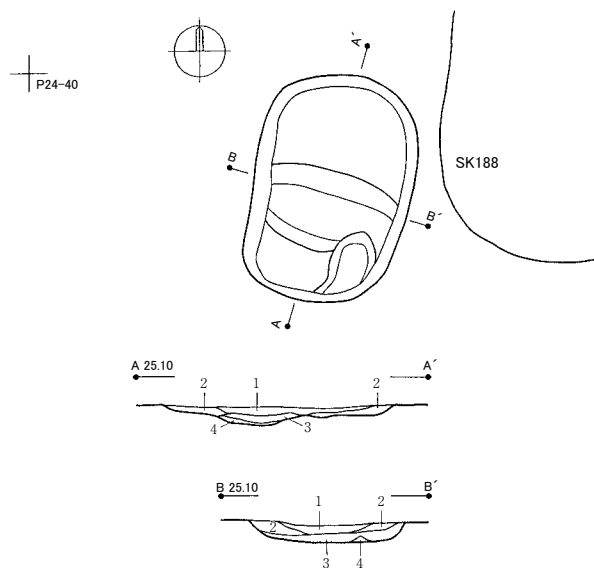
帰属時期は、その位置や主軸方位からSS103との関係を考えたいが、決定的なものではない。

### SK215 セ28地区 (Fig.492、PL.73)

S7-60付近に位置する側壁抉込土壌である。周囲にSS103、19が近接するが、本遺構との重複は無い。発掘調査時点ではセ28-328号遺構と呼称されている。

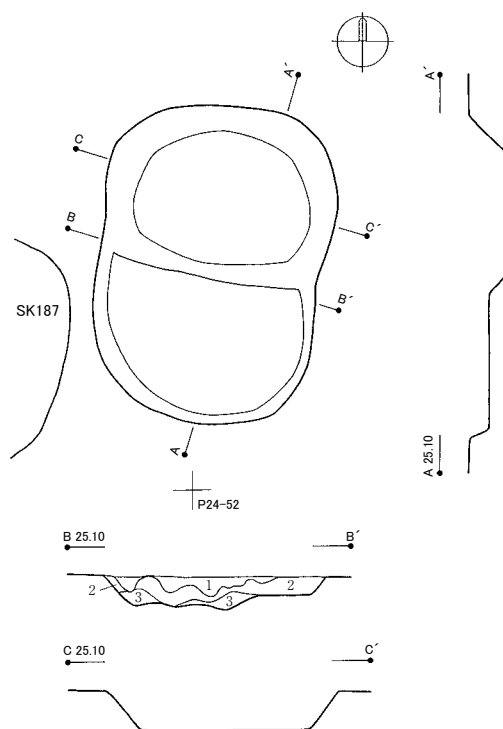
平面形状は不整形で、規模は1.70m×1.44m、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は長軸

SK187



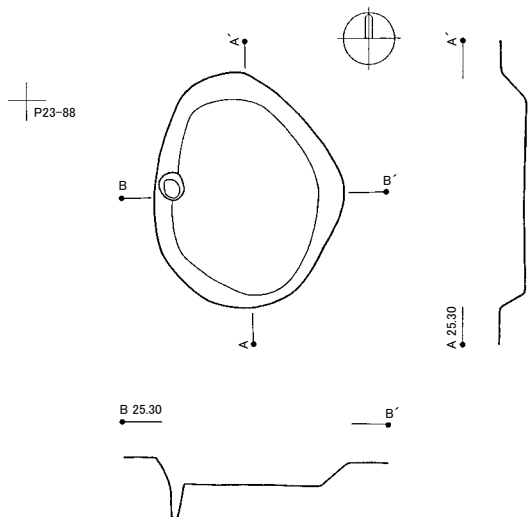
- SK187AA'-BB'
- 1 黒色土 ローム大粒多量
  - 2 黒褐色土 ローム大粒多量
  - 3 暗褐色土 ソフトローム多量
  - 4 黄褐色土 ハードローム小ブロック多量

SK188

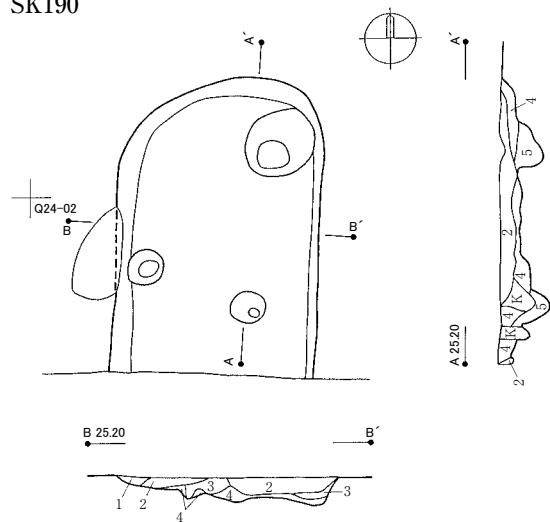


- SK188BB'
- 1 黒褐色土 ローム粒
  - 2 褐色土 ローム 3:1 層 1 の比
  - 3 褐色土 ロームブロック

SK189



SK190



- SK190AA'-BB'
- 1 黒色土 軟質
  - 2 黒褐色土 ソフトローム粒
  - 3 暗赤褐色土 全体に薄い焼土
  - 4 暗褐色土 ローム 3:2 層 1 の比
  - 5 暗褐色土 ローム大粒多量・小ブロック少量

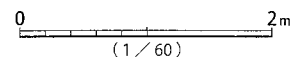


Fig.485 SK187、SK188、SK189、SK190 実測図

方向からN-51°-Wである。底面は不整長方形を呈する。断面形状は、短軸方向で左右非対称となり、底面からは北東側で側壁を僅かに掘り込み、南西側は底面から一段高い平坦面を経て外側に反りながら開口する。木棺痕は認められない。覆土の状況は、棺腐食後にあるような沈み込みが認められるが、明瞭ではない。出土遺物は無いため、帰属時期は確定できないが、遺構の主軸方向が周溝に沿うこと、底面が北側に位置することから、SM1014以後を想定しておく。

#### SK216 セ28地区 (Fig.492、PL.73)

R7-52付近に位置する土壌である。周囲はSS103・110・111が、南側にはSK217～219が位置する。遺構の重複が無いため新旧関係は不明である。

本遺構は発掘調査時点ではセ28-065号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.60m×1.26m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Wである。底面は隅丸長方形を呈する。断面形状は、短軸方向では底面が鍋底形に僅かに中央が窪み、壁面に向かって浅くなり、大きく開きながら開口する。長軸方向はほぼ平坦だが、西側で僅か上位に平坦面を持つ。木棺痕は、幅広であるため、それとして良いか判断に迷うが、平面図、土層からはそのように見える。平面形は、規模は長軸1.60m×短軸0.78m、深さ0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Wである。

出土遺物が無いため帰属時期は不明である。

本遺構に近い周囲は、周辺の密集する墳墓の中にあつて、遺構密度が低くなっており、また、南側に位置するSK217～219の主軸方向の関係性をみると、想定ではあるが、遺構を主体部とした周溝内土坑との位置関係にも見えることから、時期の近い遺構群である可能性を指摘できる。

#### SK217 セ28地区 (Fig.492、PL.73)

R7-82付近に位置する土坑である。南側にSK219が並行して隣接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28-346号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.32m×0.60m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-59°-Eである。底面は長方形を呈し、断面形状は、長軸、短軸方向ともやや丸みを持った逆台形で、確認面からの掘り込みは極めて浅い。木棺痕は認められない。覆土は自然堆積とみられる。出土遺物は無いため帰属時期は不明である。周辺遺構密度と遺構の主軸方向から、SK216・218・219は時期の近い遺構の可能性はあるが、詳細図が無いため検証不能。

#### SK218 セ28地区 (Fig.492、PL.73)

S7-00付近に位置する土壌・土坑である。SS103とSS111の中間に位置し、SK217・219の西側に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28-345号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.12m×0.98m、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は長楕円形で。断面形状は、長軸方向では逆台形だが、短軸方向では漏斗状を呈する。覆土が、棺腐食による落ち込みを示すが、木棺痕は不明瞭である。出土遺物は無いため帰属時期は不明だが、周辺遺構密度と遺構の主軸方向から、SK216・217・219は時期の近い遺構

の可能性があるが、詳細図が無いため検証不能である。

#### SK219 セ28地区 (Fig.492、PL.74)

R7-83付近に位置する土壌である。北側にはSK217が近接、南側ではSS111と重複し、現場所見から新旧関係はSS111に対し本遺構が新しい。本遺構は発掘調査時点ではセ28-066号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長楕円形で、長軸に対し、やや西側に曲がった形状を呈する。規模は3.24m×1.22m、確認面からの深さは0.37mを測る。主軸方位は長軸方向からN-60°-Eである。底面は不整長楕円形を呈する。断面形状は、長軸、短軸方向共に逆台形で、長軸方向の北側で、やや底面が深くなる。木棺痕が明瞭で、棺底周辺には粘土が充填されており、棺の固定に使われたと考えられる。木棺痕の平面形は不整長方形で、規模は長軸2.38m×短軸0.60m、深さ0.37mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-61°-Eである。

出土遺物は無い。帰属時期は、先述のとおりSS111周溝覆土を明瞭に掘り込んでいることを上限とし、周辺の土壌との関係から期を想定する。

#### SK220 セ28地区 (Fig.493、PL.74)

T8-51付近に位置する土壌である。SS108、SK221と重複し、各遺構の土層から、本遺構はSS108に対し新しく、SK221に対し古いことが判る。

本遺構は発掘調査時点ではセ28-074号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は3.10m×1.45m、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。底面は長方形を呈し、不整形円形と方形のピットが認められる。断面形状は、長軸方向では平坦な底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がるが、短軸方向では南側は明瞭に立ち上がっている。中央に木棺痕が検出されており、平面形は長方形、規模は長軸2.20m×短軸0.70m、深さ0.24mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-79°-Wである。

出土遺物は無い。帰属時期は、他遺構との位置関係、主軸方位等により関係性を求めたいが、困難である。

#### SK221 セ28地区 (Fig.493、PL.74)

T8-50付近に位置する土壌である。SS108、SK220と重複し、各遺構の土層から、本遺構はいずれの遺構よりも新しいことが判る。

本遺構は発掘調査時点ではセ28-223号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は1.35m×1.05m、確認面からの深さは0.90mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は方形で、凹凸が激しい。方形坑を竪坑とすると、その北側側壁を掘り込み長方体の玄室を作っている。断面形状は、玄室のある軸を主軸とすると、長軸、短軸方向で底面からの立ち上がりが丸い方形を呈する。玄室は底面から僅かに上がった位置に作られ、中央部に人骨が粉状で堆積していた。埋納容器は見つかっていない。有機質の容器か、直接玄室内に入れられたものであろう。骨粉状であったことから、火葬骨を埋納したとみられる。玄室の規模は、長軸0.45m×

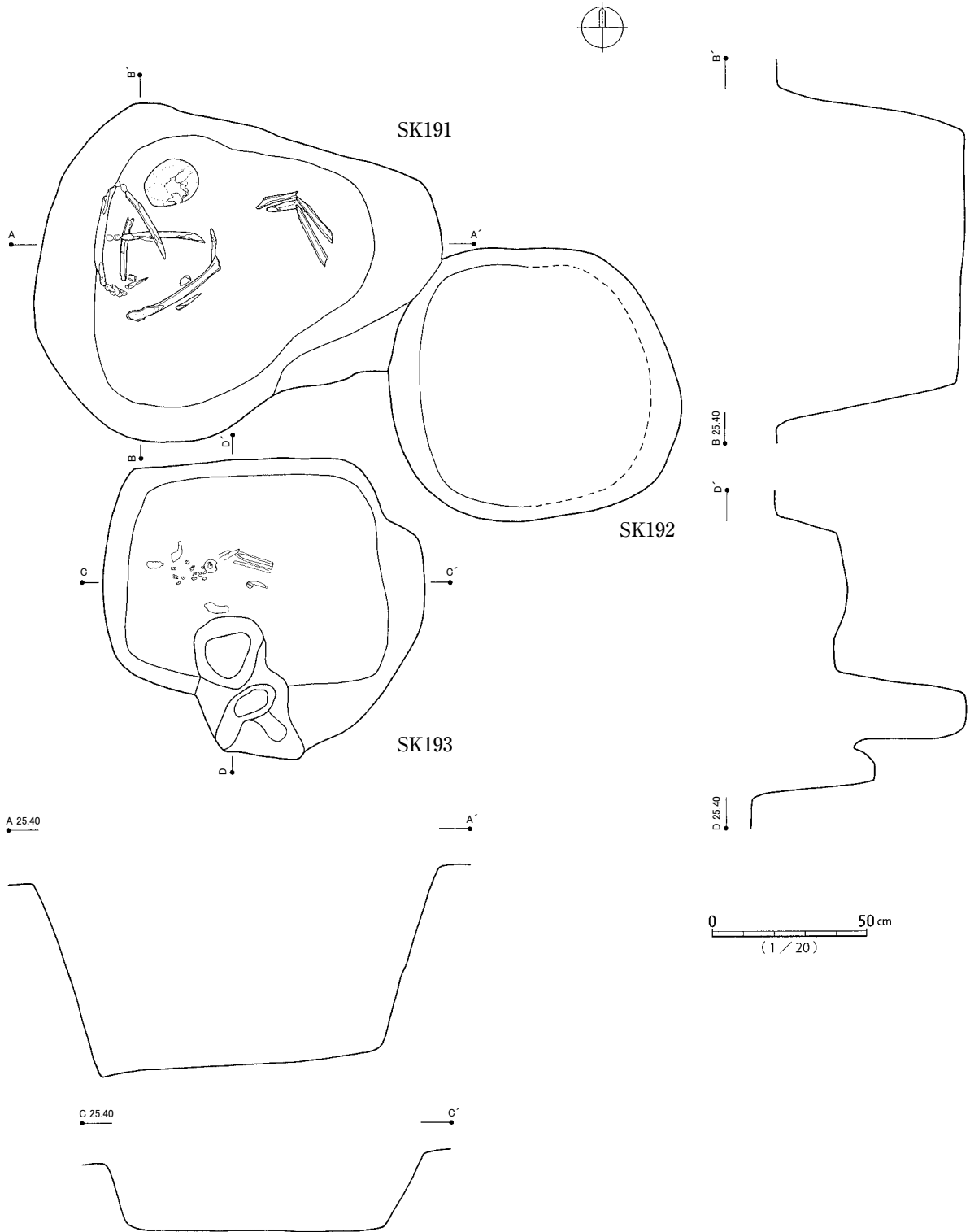
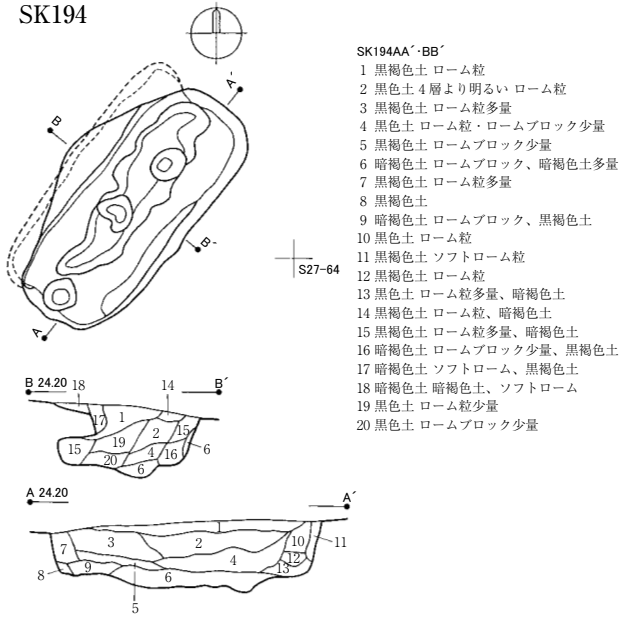
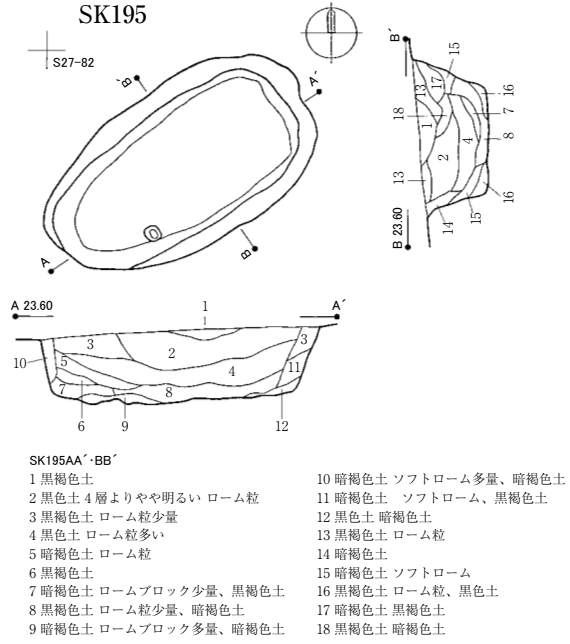


Fig.486 SK191、SK192、SK193 実測図

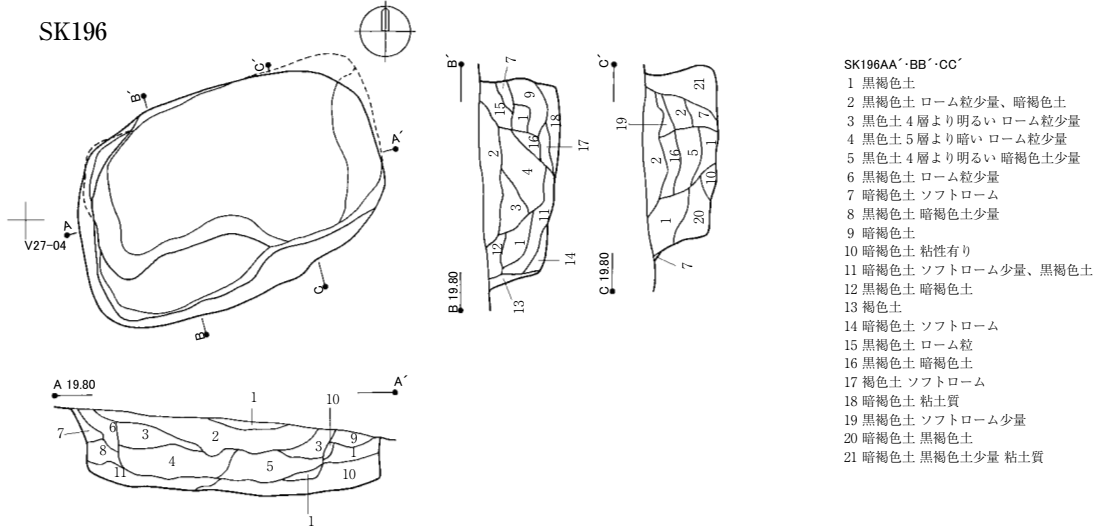
SK194



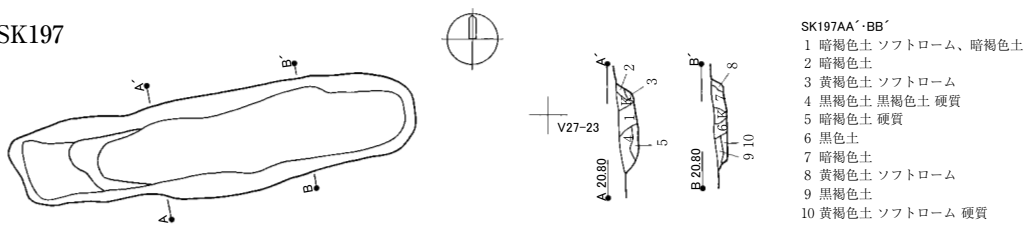
SK195



SK196



SK197



SK198

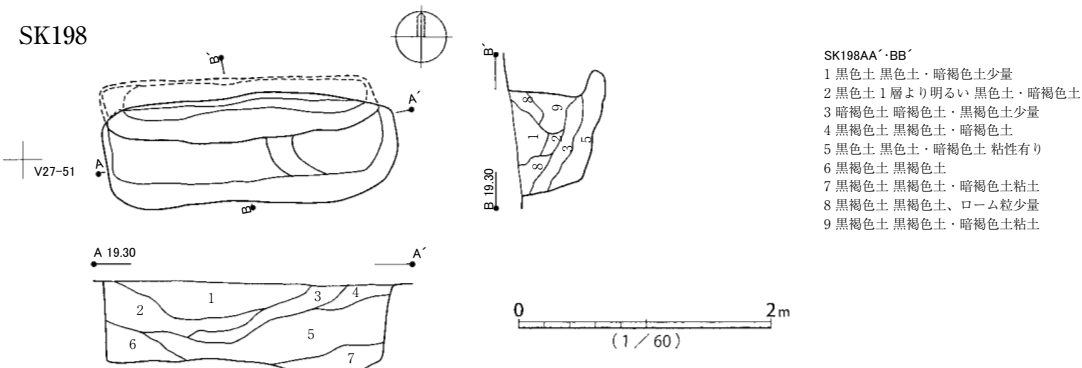


Fig.487 SK194、SK195、SK196、SK197、SK198 実測図



短軸0.60m、天井から底面までは0.27mで、竪坑底から0.07m上位に作られている。玄室の主軸方位は長軸方向からN-18°-Wである。竪坑は、ロームブロックが各層に認められることから人為的な埋戻しが考えられる。

#### SK222 セ28地区 (Fig.494、PL.74~75)

T8-72付近に位置する土壌である。SS108にと重複する。記録類では新旧関係は判断されないが、類例から本遺構が新しい。発掘調査時点ではセ28-224号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.30m×0.64m、確認面からの深さは0.74mを測る。主軸方位は長軸方向からN-1°-Eである。底面は不整形で平坦面は極めて狭い。断面形状は、長軸方向で底面から南へ、狭い平坦面を3段~4段上がって遺構確認面に至る。北側へは底面からやや上方で奥壁を掘り込んで玄室を作り出している。ただし、底面と天井部は傾斜する。奥壁はほぼ垂直で遺構確認面に至る。短軸方向ではほぼ方形の竪坑となっている。玄室の平面形は奥壁がやや丸みを帯びた方形で、規模は長軸0.34m×短軸0.32m、開口部の高さは0.58mを測る。長軸方向からN-1°-Wである。玄室内からは小骨片および骨粉が検出されているが、検出レベルは玄室の中位の窪み内に認められる。玄室掘削後、有効面積が最大となるところまで埋め戻して埋納している状況が伺える。骨粉である状況から、埋納されたのは火葬骨であるとみられる。出土遺物は無い。

#### SK223 セ28地区 (Fig.494、PL.75)

S8-95付近に位置する土壌である。北側でSS112周溝と重複する。付近にはSK224が位置する。記録類が限られるため詳細は不明だが、断面図からはSS112に対し、本遺構が新しいとみられる。

発掘調査時点ではセ28-076号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は2.80m×1.04m、確認面からの深さは1.11mを測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Eである。底面は不整長方形を呈する。断面形状は、長軸、短軸方向共に底面がレンズ状に僅かに窪んだ逆台形を呈し、側壁は明確に立ち上がり、直線的にやや開きながら開口する。木棺痕は認められない。覆土は上位よりロームブロックが含まれており、人為的な埋戻しを示す。出土遺物は無いため、帰属時期は、明確にし得ないが、近接するSK224に規模、形態が近いことから、ここでは6世紀末~7世紀初頭としておく。

#### SK224 セ28地区 (Fig.494、PL.75・175・205・216)

T8-05付近に位置する土壌である。南東側でSM1028と重複し、北側にSK223が近接する。断面図からSM1028に対し本遺構は新しい。発掘調査時点ではセ28-111号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は2.52m×0.91m、確認面からの深さは0.78mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Eである。底面は長方形を呈し、中央やや北側寄りに小ピットが1か所認められる。断面形状は、長軸、短軸方向共に底面がレンズ状に僅かに窪んだ逆台形を呈し、側壁は明確に立ち上がり、直線的にやや開きながら開口する。規模が一回り小ぶりだが、SK223に形状が似る。木棺痕は不明瞭であるが、短軸方向の断面に縦に分層された層がその痕跡とみられる。覆土は上層にロームブロックが含まれ人為的な埋戻しを示す。

出土遺物は、1が須恵器フラスコ形長頸壺で、遺構底面より0.84m上方で出土している。2・3は金銅製耳環で、底面直上、東よりから出土している。4・5は耳環下側に密着して出土した木片で、棺底材とみられる。

帰属時期は、須恵器フラスコ形長頸壺から6世紀末～7世紀初頭の所産と考えられる。

#### SK225 セ28地区 (Fig.495)

S9-80付近に位置する土壌である。SS112東側周溝内に位置する。南側にSK226・227が近接する。本遺構とSS112との新旧関係は、記録類に限られるため不明瞭である。

発掘調査点では358号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は1.90m×0.55m、周溝底面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-34°-Eである。底面は不整長方形を呈し、断面形状は、長軸、短軸方向共に底面がレンズ状に僅かに窪み、側壁は僅かに開きながら直線的に開口する。木棺痕は認められない。覆土は堆積状況のみ見れば自然堆積のようにも見えるが、上層にロームブロックを含むため、ここでは人為的な埋戻しを想定する。

木棺痕は検出されていない。出土遺物は無い。

#### SK226 セ28地区 (Fig.495、PL.75)

S9-80付近に位置する土壌である。SS112とSS1028の間に位置し、SK225・227に近接する。

発掘調査時点でセ28-075号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は2.70m×1.35m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-75°-Eである。底面は不整長楕円形で平坦。断面形状は、長軸方向で底面がレンズ状に僅かに窪み、側壁は外傾しながら直線的に開口する。短軸方向では底面から上方両脇に一段テラス状の平坦面を持つ。中央北寄りに木棺痕が認められ、平面形は、規模は長軸1.95m×短軸0.60m、深さ0.45mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-75°-Eである。

出土遺物は無い。

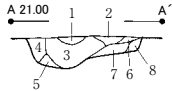
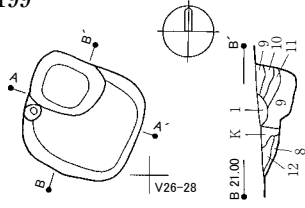
#### SK227 セ28地区 (Fig.495)

T9-00付近に位置する土壌ある。SM1028・1127の間に位置する。周囲にはSK228が近接する。記録類に限られるため、詳細は不明。エレベーション図は整理段階で作成している。本遺構は発掘調査時点ではセ28-068号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、円形のピット規模は2.05m×0.90m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は長方形で、北西側で一段方形に低くなり、北西端で円形のピットが1基認められる。断面形状は、長軸・短軸方向で逆台形を呈する。木棺痕は認められない。

出土遺物は無いが、グリッド取り上げ遺物中に琥珀製棗玉が1点出土しており、本遺構かSK228に帰属する可能性がある。

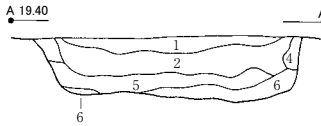
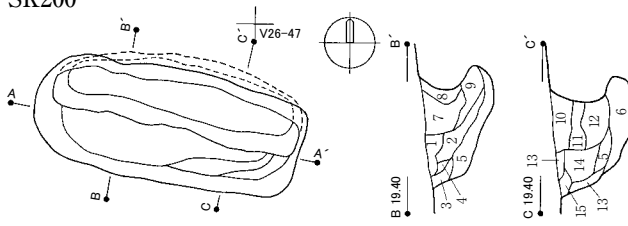
SK199



SK199AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ソフトローム
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土 ソフトローム粒
- 4 暗褐色土 ソフトローム
- 5 黄褐色土 ソフトローム
- 6 暗褐色土 ソフトローム、暗褐色土
- 7 黄褐色土 ソフトローム多量、暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 黒褐色土
- 10 黒褐色土 ソフトローム、黒褐色土多量
- 11 黒褐色土 黒褐色土・暗褐色土
- 12 黄褐色土 ソフトローム

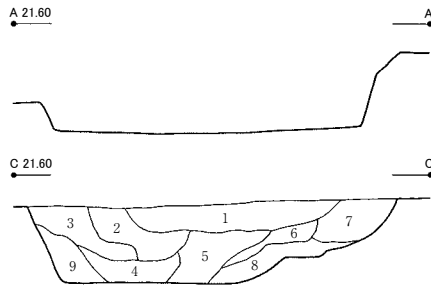
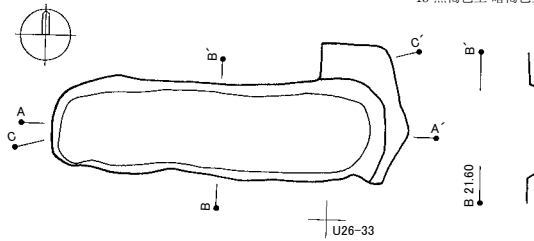
SK200



SK200AA'-BB'-CC'

- 1 黒褐色土 暗褐色土 斑点状
- 2 黒色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ソフトローム
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 6層より明るい暗褐色土
- 6 黒褐色土 粘性有り
- 7 黒色土 暗褐色土少量
- 8 黒褐色土 ソフトローム
- 9 黒褐色土 ローム粒
- 10 黒褐色土 暗褐色土
- 11 黒色土 暗褐色土
- 12 黒色土
- 13 黒褐色土
- 14 黒色土 ローム粒少量
- 15 黒褐色土 暗褐色土

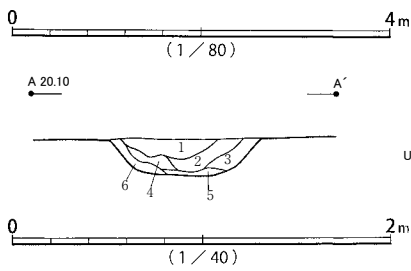
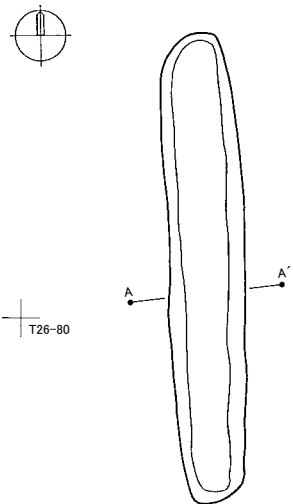
SK202



SK202CG'

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒、焼土
- 3 黒色土 ローム粒
- 4 黒色土 焼土、ローム粒・ロームブロック
- 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 6 暗褐色土 ロームブロック
- 7 暗褐色土 ロームブロック
- 8 暗褐色土 ローム粒、黒色土
- 9 暗褐色土 ロームブロック、焼土

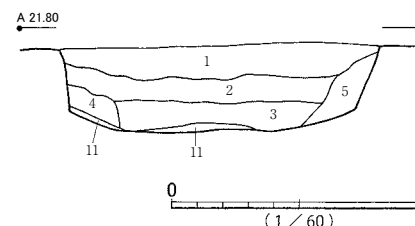
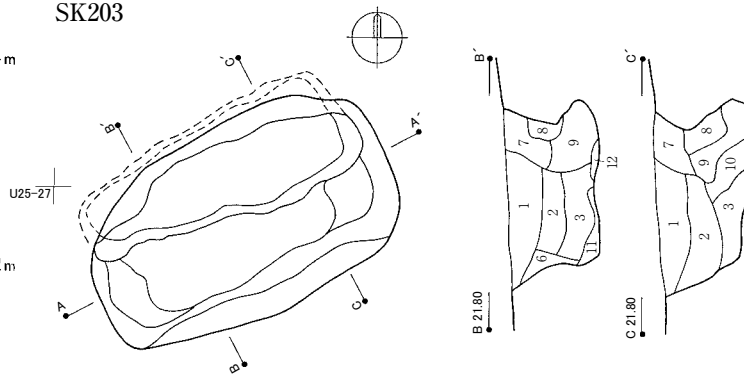
SK201



SK201AA'

- 1 黒色土
- 2 黒色土 ローム粒
- 3 黒褐色土
- 4 黒褐色土 暗褐色土
- 5 暗褐色土 ソフトローム
- 6 暗褐色土

SK203



SK203AA'-BB'-CC'

- 1 黒色土 ローム粒
- 2 黒色土 ローム粒少量
- 3 黒褐色土 暗褐色土、ローム粒
- 4 黒褐色土 ソフトローム・ローム粒多量
- 5 黒褐色土 暗褐色土、ローム粒多量
- 6 暗褐色土 黒褐色土、ローム粒
- 7 黒褐色土 暗褐色土
- 8 褐色土 ロームブロック 天崩落土
- 9 暗褐色土 黒褐色土、ローム粒
- 10 黒褐色土 ロームブロック
- 11 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 12 明褐色土 ロームブロック

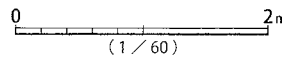


Fig.488 SK199、SK200、SK201、SK202、SK203 実測図

### SK228 セ28地区 (Fig.495)

T9-02付近に位置する土坑である。SM1028・1127の間に位置する。周囲にはSK227が近接する。記録類が限られるため、詳細は不明。エレベーション図は整理段階で作成している。本遺構は発掘調査時点ではセ28-069号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.05m×0.85m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-53°-Wである。底面は不整形で平坦面を持たない。断面形状は、短軸方向では南側に傾斜しており、長軸方向では中央最深部に向けてなだらかに傾斜している。木棺痕は認められない。出土遺物は無いが、グリッド取り上げ遺物中に琥珀製棗玉が1点出土しており、本遺構かSK227に帰属する可能性があるが、遺構形状からは、本遺構が埋葬施設である可能性は低いと判断する。

### SK229 セ28地区 (Fig.495)

T9-00付近に位置する土坑である。SM1028・1127の間に位置する。周囲にはSK226～228が位置する。発掘調査時点ではセ28-359号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は1.85m×0.60m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は長楕円形を呈する。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈する。木棺痕は認められない。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK230 セ28地区 (Fig.496、PL.75)

T9-50付近に位置する土坑である。西側にSM1028が、南側にSD17が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28-229号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.25m×1.20m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-70°-Wである。底面は楕円形を呈し、断面形状は長軸・短軸方向共に逆台形を呈し、長軸方向では壁面が僅かに外側に反る。木棺痕は認められない。覆土の状況は資然堆積を示すとみられる。遺物は1縄文土器で、覆土一括でとりあげられているが、遺構の時期を示すものは不明。帰属時期は不明である。

### SK231 セ28地区 (Fig.496、PL.76・175)

T8-86付近に位置する土坑である。SM1028墳丘裾に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28-114号遺構と呼称されている。

平面形状は円形で、規模は0.48m×0.40m、確認面からの深さは0.10mを測る。主軸方位は長軸方向からN-89°-Eである。底面は楕円形を呈し、断面形状は、逆台形を呈するが、SM1028の墳丘傾斜方向に底面も傾いている。出土遺物は、ほぼ中央に1の猿投窯産の短頸壺とみられる須恵器が据えられ、その上に、2の口縁部を下にした非ロクロ土師器杯が被せられ、蓋をして蔵骨器として機能したとみられる。帰属時期は、8世紀後半の所産と考えられる。

### SK232 セ28地区 (Fig.496、PL.76)

U9-23付近に位置する土坑である。遺構の希薄な南斜面に位置する。発掘調査時点ではセ28-248号

遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.28m×0.90m、確認面からの深さは0.69mを測る。主軸方位は長軸方向からN-25°-Wである。底面は不整形だが平坦面を持たない。断面形状は、長軸方向では、最深部が北側奥壁を挟った玄室にあり、そこから南側に4段ほどの水平ではない平坦面を有して上方へ傾斜する。短軸方向では玄室入口は三角形を呈し、上位で外側に開きながら開口する。玄室内は方形を呈するが、内部の記録類に限られるため詳細は不明。類例から火葬骨を埋納したとみられるが、容器の使用は不明。出土遺物は無い。

#### SK233 セ28地区 (Fig.496、PL.76)

U9-37付近に位置する土坑である。SS118陸橋部に位置する。発掘調査時点ではセ28-247号遺構と呼称されている。

平面形状は円形で、規模は1.45m×1.20m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Eである。底面は円形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈する。覆土の状況は自然堆積とみられる。

土器の出土の記録があるが、実測遺物として採用されていない。

#### SK234 セ28地区 (Fig.496)

R8-55付近に位置する土坑である。SM1060・1089の間に位置し、SS66・67が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28-374A号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.45m×0.95m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-32°-Eである。底面は長楕円形を基本とするが、小ピットが複数掘り込まれている。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈するが、長軸方向では北側端寄りに最深部が位置し、南側に向かってなだらかに上がってゆく。木棺痕は認められず、覆土は自然堆積を示す。出土遺物は無く、帰属時期は判断が難しい。主軸方向が、SS66・67の周溝の傾きに近似することから、この時期の遺構としておく。

#### SK235 セ28地区 (Fig.497)

R8-57付近に位置する土坑である。SM1060周溝内に位置する。発掘調査時点ではセ28-374B号遺構と呼称されている。記録類に限られるため詳細は不明である。

平面形状は不整形で、規模は1.04m×0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-11°-Wである。底面は不整形を呈する。木棺痕は認められない。

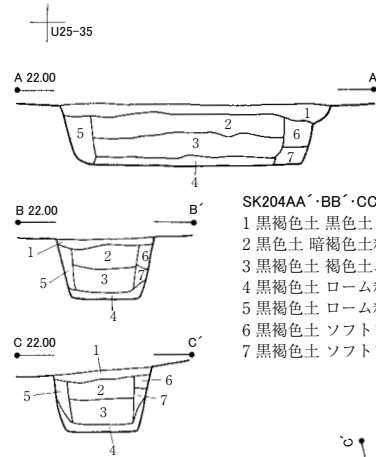
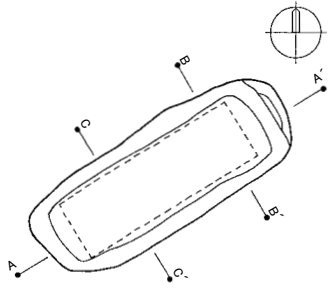
出土遺物は無く、SM1060との関係も不明確であるため、帰属時期は不明である。

#### SK236 セ28地区 (Fig.497)

Q8-33付近に位置する土坑である。SS75と重複するが、新旧関係を示す記録は無い。発掘調査時点では遺構番号を付与されず、SS75と一体で扱われていたが、整理段階で別遺構と判断した。

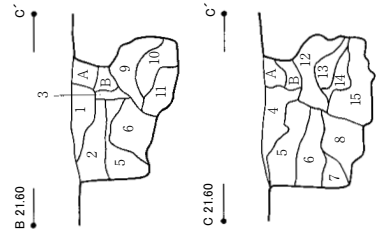
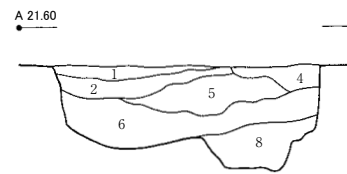
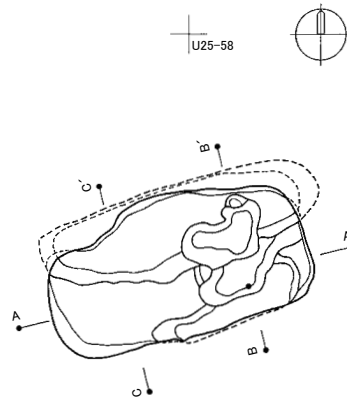
平面形状は長楕円形で、規模は1.94m×0.64m、確認面からの深さは0.26mを測る。主軸方位は長

SK204



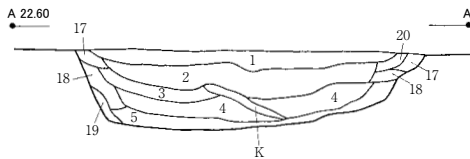
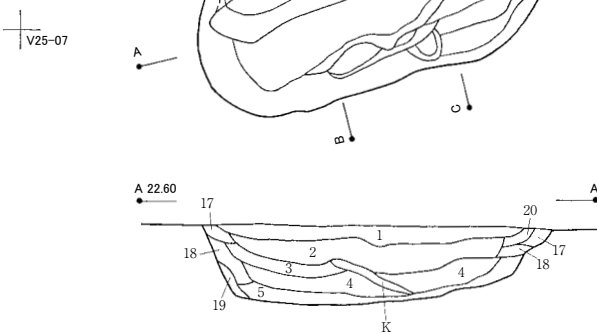
- SK204AA'·BB'·CC'**
- 1 黒褐色土 黒色土・暗褐色土
  - 2 黒色土 暗褐色土粒
  - 3 黒褐色土 褐色土、ローム粒
  - 4 黒褐色土 ローム粒
  - 5 黒褐色土 ローム粒
  - 6 黒褐色土 ソフトローム
  - 7 黒褐色土 ソフトローム

SK205

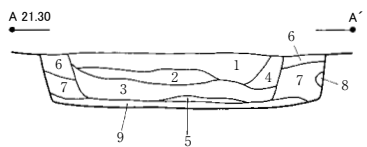
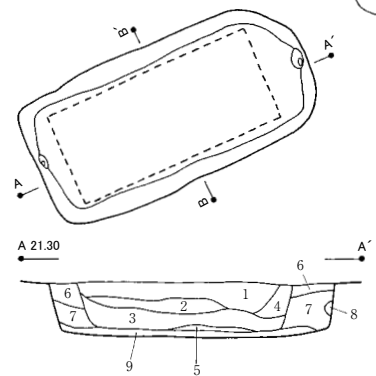


- SK205AA'·BB'·CC'**
- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒
  - 2 ーロームブロック多量、暗褐色土
  - 3 黒褐色土 ローム
  - 4 黒褐色土 ロームブロック
  - 5 ーロームブロック多量、黒褐色土
  - 6 ーロームブロック、暗褐色土
  - 7 ーロームブロック、黒褐色土
  - 8 ーロームブロック多量、暗褐色土
  - 9 黒色土 暗褐色土、ローム
  - 10 ーソフトローム
  - 11 ーロームブロック 軟質
  - 12 暗褐色土 ソフトローム粒若干
  - 13 ーソフトローム
  - 14 暗褐色土 ソフトローム
  - 15 ーソフトローム・ロームブロック

SK206



- SK206AA'·BB'·CC'**
- 1 黒褐色土
  - 2 黒色土
  - 3 黒色土 ローム粒
  - 4 黒褐色土 ローム粒
  - 5 暗褐色土 ロームブロック少量、黒褐色土
  - 6 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土
  - 7 黒色土
  - 8 黒色土 ローム小型ブロック
  - 9 暗褐色土 壁崩壊土
  - 10 暗褐色土 ローム粒多量
  - 11 暗褐色土 ロームブロック
  - 12 暗褐色土 ロームブロック少量
  - 13 黒色土 ロームブロック
  - 14 暗褐色土
  - 15 黒褐色土 ロームブロック少量、暗褐色土
  - 16 褐色土 ロームブロック
  - 17 黒褐色土 ローム粒
  - 18 黒褐色土 ローム小型ブロック
  - 19 暗褐色土 ロームブロック
  - 20 黒褐色土 ローム粒



- SK207AA'·BB'**
- 1 黒色土 ローム粒少量
  - 2 黒色土 軟質
  - 3 黒褐色土 ローム粒
  - 4 黒褐色土 ローム粒
  - 5 暗褐色土 ローム粒
  - 6 黒褐色土 ローム粒
  - 7 黒褐色土 ローム粒
  - 8 明褐色土 ロームブロック
  - 9 明褐色土 ローム粒
  - 10 黒褐色土 黒色土、ローム粒

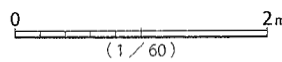
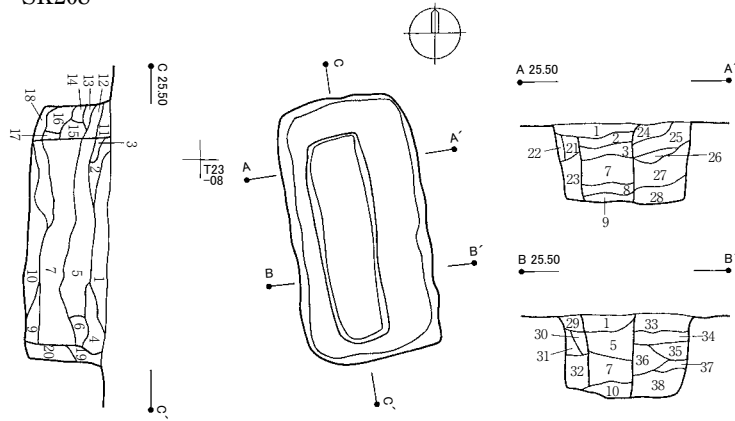


Fig.489 SK204、SK205、SK206、SK207 実測図

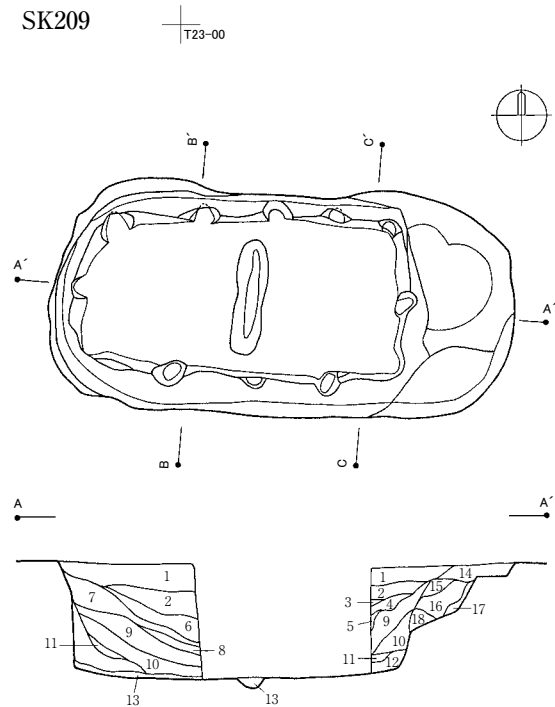
SK208



SK208AA'·BB'·CC'

- 1 黒色土 ロームブロック・ローム粒
- 2 黒色土 ローム粒若干
- 3 黒褐色土 ローム粒
- 4 ー ロームブロック
- 5 黒褐色土 ローム粒
- 6 ー
- 7 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 暗褐色土 ロームブロック
- 10 暗褐色土
- 11 暗褐色土 ロームブロック多量
- 12 黒色土
- 13 ー ロームブロック
- 14 黒褐色土 ローム粒
- 15 黒色土 ローム粒若干
- 16 暗褐色土 ソフトローム
- 17 黒褐色土 ローム粒
- 18 ー ソフトローム・ローム粒
- 19 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 20 暗褐色土 ソフトローム・ロームブロック
- 21 黒褐色土 ローム粒多量
- 22 暗褐色土 ローム粒
- 23 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 24 暗褐色土 ロームブロック
- 25 暗褐色土 ローム粒
- 26 暗褐色土 ロームブロック
- 27 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 28 暗褐色土 ローム粒若干
- 29 黒褐色土 ローム粒
- 30 ー ロームブロック多量、黒褐色土
- 31 暗褐色土 ローム粒
- 32 暗褐色土 ソフトローム
- 33 暗褐色土 ローム、黒色土
- 34 ー ロームブロック、黒褐色土・暗褐色土
- 35 暗褐色土 ローム若干・ロームブロック
- 36 黒褐色土 ローム粒少量
- 37 黒褐色土
- 38 黒褐色土 ロームブロック

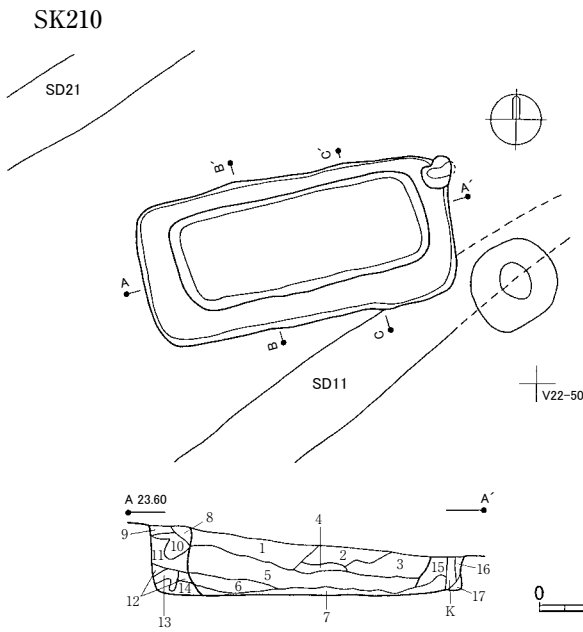
SK209



SK209AA'·BB'·CC'

- 1 黒色土 褐色土斑点状
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土 褐色土斑点状、ローム粒
- 4 黒色土 ローム少量
- 5 黒褐色土 褐色土塊若干、ローム粒
- 6 黒色土 ローム少量
- 7 黒褐色土 褐色土斑点状、ローム粒やや多量
- 8 黒褐色土 褐色土斑点状、ローム粒多量
- 9 黒褐色土 ローム粒
- 10 暗褐色土 ローム粒多量
- 11 黒色土 ローム粒
- 12 褐色土 ロームブロック多量
- 13 ー ローム、黒褐色土少量
- 14 黒褐色土 ローム粒
- 15 暗褐色土
- 16 褐色土
- 17 ー ローム、褐色土
- 18 褐色土 ローム粒多量

SK210

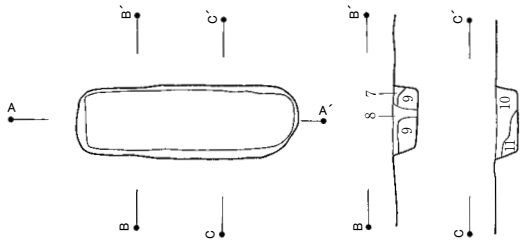


SK210AA'·BB'·CC'

- 1 黒褐色土 ローム微粒
- 2 暗褐色土 ローム粒
- 3 暗褐色土・黒褐色土の混合 暗褐色が多いローム粒
- 4 ー 暗褐色土、ローム粒 暗褐色土多い
- 5 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒
- 6 ー ローム粒、黒褐色土 黒褐色土多い
- 7 ー 暗褐色土、ソフトローム 暗褐色土多い 硬質
- 8 黒色土 ソフトローム
- 9 ー 黒褐色土、ソフトローム
- 10 黒褐色土 ローム粒
- 11 暗褐色土・黒褐色土の混合 黒褐色が多いソフトローム
- 12 ー 黒褐色土、ソフトローム
- 13 黒褐色土 黒褐色土、ソフトローム
- 14 ー 暗褐色土、ソフトローム
- 15 黒褐色土 ローム粒
- 16 暗褐色土 ローム粒
- 17 黄褐色土 ローム粒
- 18 暗褐色土・黒褐色土の混合 黒褐色土多い ローム微粒
- 19 黒褐色土 ローム粒
- 20 ー ソフトローム、暗褐色土 暗褐色土多い
- 21 ー ソフトローム、褐色土
- 22 黒褐色土・暗褐色土の混合 黒褐色が多い 黒褐色土・暗褐色土 黒褐色土多い
- 23 ー ソフトローム、黒褐色土 黒褐色土多い
- 24 黒褐色土・暗褐色土の混合 暗褐色が多いローム粒
- 25 ー ソフトローム、暗褐色土 暗褐色土多い
- 26 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒多い
- 27 ー 暗褐色土、ソフトローム 暗褐色土多い 硬質
- 28 ー ローム、暗褐色土 ローム多い
- 29 ー ローム、暗褐色土
- 30 ー 黒褐色土・暗褐色土、ローム
- 31 ー 黒色土、ローム 黒色土多い
- 32 ー ローム、黒褐色土 ローム多い

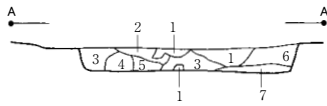
Fig.490 SK208、SK209、SK210 実測図

SK211

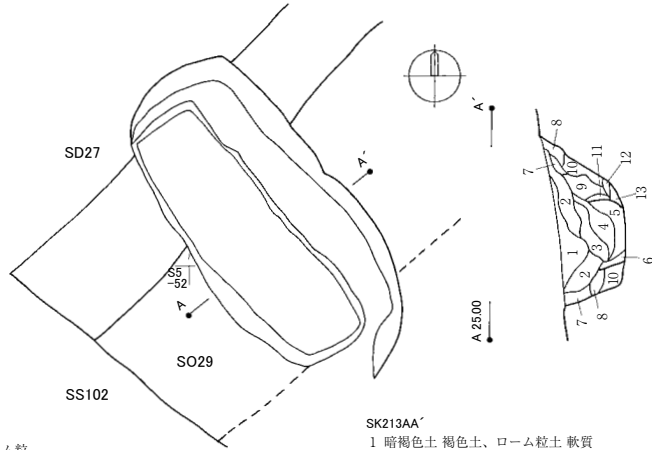


SK211AA'-BB'-CC'

- 1 暗褐色土
- 2 黒色土 黒色土、ローム
- 3 黒褐色土 ローム微粒
- 4 黒色土
- 5 暗褐色土 ローム微粒
- 6 暗褐色土 ロームブロック
- 7 黒褐色土
- 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒
- 9 黒色土 ロームブロック・ローム粒
- 10 暗褐色土 ローム粒多量
- 11 黒褐色土 ローム粒多量



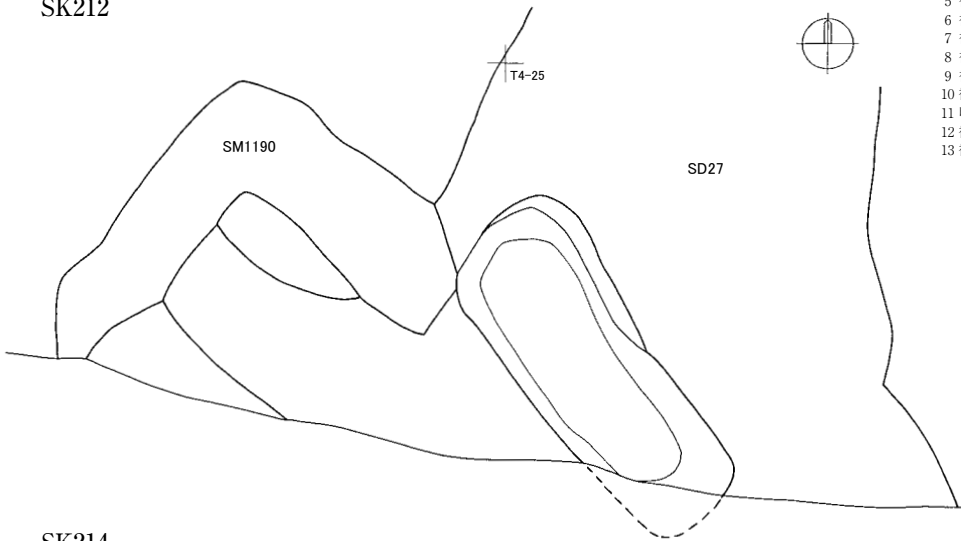
SK213



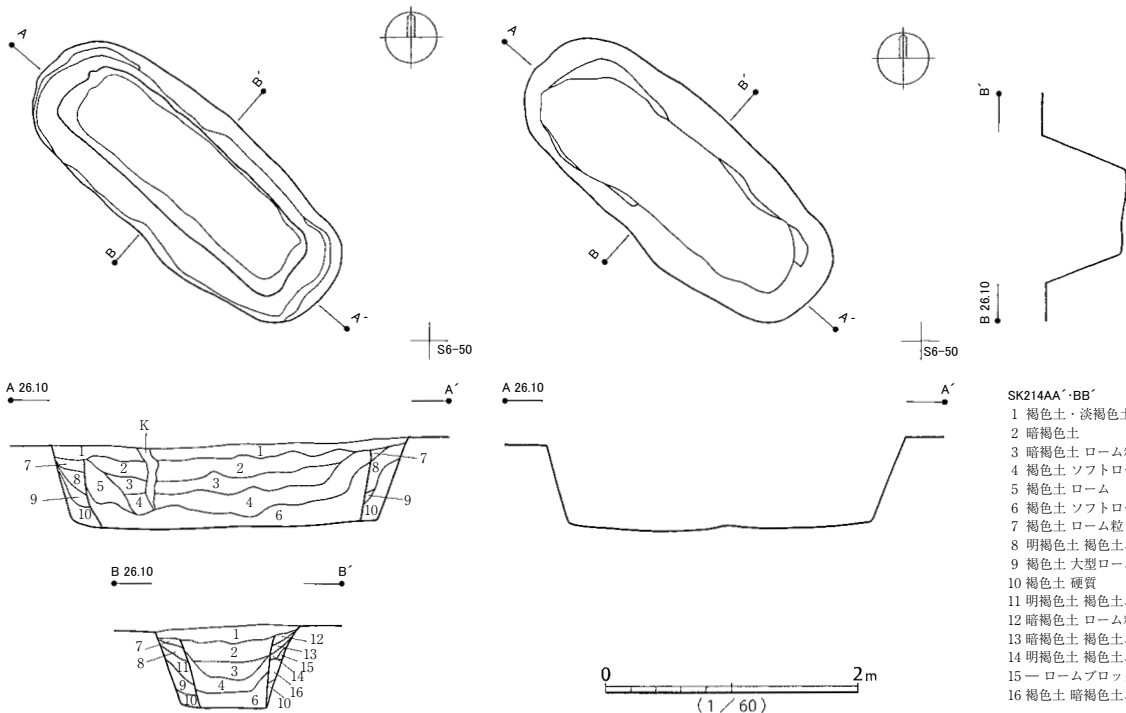
SK213AA'

- 1 暗褐色土 褐色土、ローム粒土 軟質
- 2 褐色土 ローム粒、暗褐色土 軟質
- 3 暗褐色土 やや硬質
- 4 暗褐色土 斑点状褐色土
- 5 褐色土 斑点状暗褐色土ブロック・斑点状褐色土
- 6 褐色土 7層より暗いソフトローム粒
- 7 褐色土 軟質
- 8 褐色土 ソフトローム若干
- 9 褐色土 暗褐色土 軟質 カクランか?
- 10 褐色土 ソフトローム 軟質
- 11 明褐色土 褐色土、ソフトローム カクランか?
- 12 褐色土 軟質
- 13 褐色土 ソフトローム若干

SK212



SK214



SK214AA'-BB'

- 1 褐色土・淡褐色土の混合
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒若干
- 4 褐色土 ソフトローム
- 5 褐色土 ローム
- 6 褐色土 ソフトローム多量
- 7 褐色土 ローム粒
- 8 明褐色土 褐色土、ローム少量
- 9 褐色土 大型ロームブロック
- 10 褐色土 硬質
- 11 明褐色土 褐色土、ローム
- 12 暗褐色土 ローム粒
- 13 暗褐色土 褐色土、ローム
- 14 明褐色土 褐色土、ロームブロック
- 15 ロームブロック
- 16 褐色土 暗褐色土、ローム粒

Fig.491 SK211、SK212、SK213、SK214 実測図



軸方向からN-80°-Wである。底面は長楕円形を呈する。木棺痕は認められない。出土遺物は無いため  
帰属時期の判断は難しい。

#### SK237 セ28地区 (Fig.497、PL.76)

R9-00付近に位置する土坑である。SM1060マウンド内に位置し、SS70南側周溝に重複する。新旧  
関係は土層図から、SS70に対しては新しいが、SM1060に対しては資料に乏しい。発掘調査時点では  
セ28-297A号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は3.08m×1.40m、確認面からの深さは0.25mを測る。主軸方位は  
長軸方向からN-70°-Eである。底面は不整長方形を呈するが、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台  
形を呈する。木棺痕は不明瞭で、短軸方向の土層に認められるが、平面プランでは捕捉しておらず、  
また断定的な現場所見も見られない。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK238 セ28地区 (Fig.497、PL.76)

R9-20付近に位置する土坑である。SM1060マウンド内に位置し、SS67西側周溝に近接する。新旧  
関係を示す記録は無い。発掘調査時点ではセ28-  
298A号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.20m×1.04m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸  
方向からN-83°-Eである。底面は楕円形を呈する。断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈し、  
底面は僅かに鍋底状に窪む。木棺痕は認められず、覆土も自然堆積のように見える。出土遺物は無く、  
帰属時期は不明である。

#### SK239 セ28地区 (Fig.497)

R9-23付近に位置する土坑である。SM1060マウンド内に位置し、SS67北側周溝と重複する。新旧  
関係は、土層図から、本遺構がSS67周溝を明瞭に掘り込んでいることから、SS67に対して新しい。  
しかし、SM1060との関係を示す資料は無い。本遺構は発掘調査時点では遺構番号が付与されてい  
なかったため、整理段階で単独の遺構として取り扱った。

平面形状は楕円形で、規模は2.24m×0.66m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸  
方向からN-82°-Eである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、やや丸みをおびた逆台形を呈する。  
木棺痕は認められない。覆土の状況は自然堆積に見える。出土遺物は無く、帰属時期の判断は難しい。

#### SK240 セ28地区 (Fig.497)

Q9-88付近に位置する土坑である。SS69方台部に位置する。発掘調査時点ではセ28-403号遺構と  
呼称されている。SS69に対する新旧関係は記録類に限られ判断が難しい。特にSS69主体部の平面プ  
ランが楕円形を呈するため、これに近い時期である可能性を否定し難い。しかしながら、根拠に乏し  
いため、ここでは現場の判断を優先して別遺構として扱う。なお、エレベーション図は整理段階で作  
図している。

平面形状は楕円形で、規模は1.84m×0.80m、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位は長軸

方向からN-65°-Wである。底面は楕円形を呈する。断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈するが、確認面から底面まで極めて浅い。木棺痕は認められない。覆土は自然堆積とみられる。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK241 セ28地区 (Fig.497)

R9-07付近に位置する土坑である。SS64・68・69の間に位置する。発掘調査時点ではセ28-404号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.24m×0.76m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-10°-Eである。底面は楕円形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形に近いが、底面からの立ち上がりが緩い。確認面から底面まで極めて浅く、木棺痕は認められない。覆土は自然堆積とみられる。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK242 セ28地区 (Fig.498)

R9-07付近に位置する土坑である。SS64・68・69の間に位置し、SM1034周溝に隣接する。

発掘調査時点ではセ28-405号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は1.68m×0.68m、確認面からの深さは0.08mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は不整楕円形を呈し、中央部にピットが位置する。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字型で、長軸方向では逆台形に近く、中央部がピットにより窪むが、確認面から底面まで極めて浅い。木棺痕は認められない。覆土は自然堆積とみられる。出土遺物は無く、帰属時期は不明。

#### SK243 セ28地区 (Fig.498)

R10-02付近に位置する土坑である。SS64方台部に位置する。発掘調査時点ではセ28-408号遺構と呼称されている。SS64に対する関係は記録類が限られ判断が難しい。ここでは現場段階の判断を優先して別遺構として扱う。

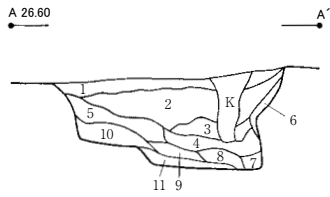
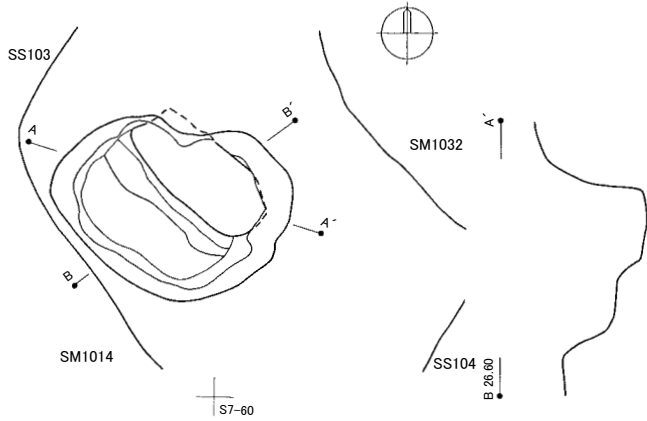
平面形状は不整楕円形で、規模は1.24m×計測不能、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は楕円形を呈し、断面形状は、短軸方向では逆台形を呈し、長軸方向では底面より方法に平坦面を一段有する。覆土の状況は自然堆積である。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK244 セ28地区 (Fig.498)

R10-20付近に位置する土坑である。SS64方台部に位置する。SM1154北側周溝に近接し、SM1034周溝と重複するが、新旧関係は記録類が限られ判断し難い。ここでは現場段階の判断を優先して単独遺構として扱う。発掘調査時点ではセ28-412号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

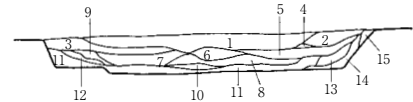
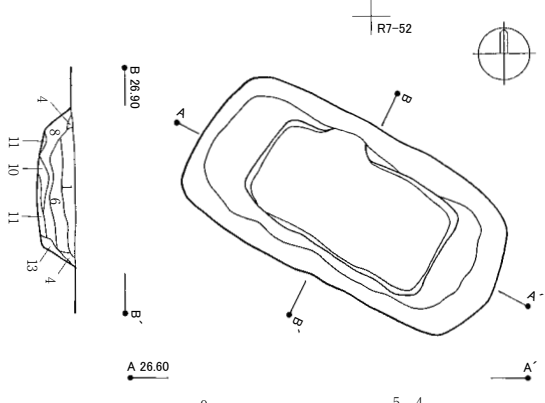
平面形状は長楕円形で、規模は2.08m×0.84m、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位は長軸方向からN-82°-Eである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈す

SK215



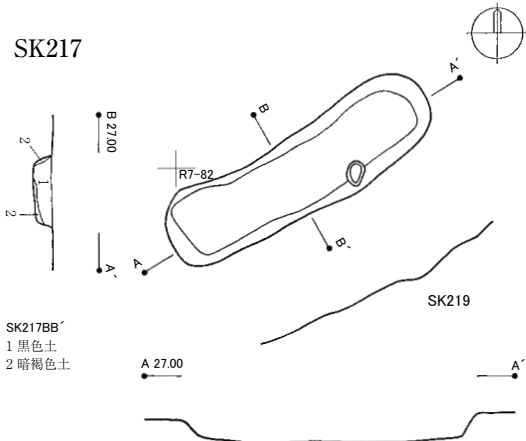
- SK215AA' -BB'
- 1 黒褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 - ロームブロック
  - 4 褐色土 ローム粒 硬質
  - 5 暗褐色土 ローム粒
  - 6 -
  - 7 褐色土 ロームブロック
  - 8 暗茶褐色土 ロームブロック少量
  - 9 暗茶色土
  - 10 -
  - 11 暗褐色土 硬質

SK216



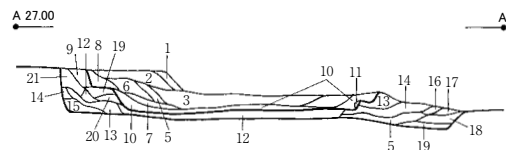
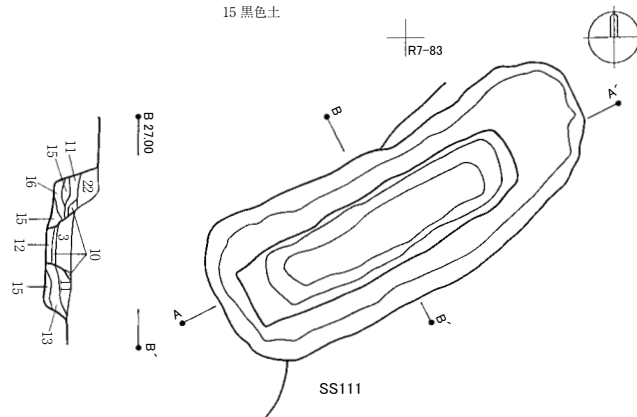
- SK216AA' -BB'
- 1 暗褐色土・褐色土の混合 斑点状土
  - 2 暗褐色土
  - 3 褐色土 ローム粒
  - 4 - ロームブロック
  - 5 褐色土 ローム粒
  - 6 -
  - 7 暗褐色土 褐色土、ローム粒
  - 8 黒色土
  - 9 暗褐色土
  - 10 黒色土 少し明るい
  - 11 - ソフトローム、褐色土
  - 12 暗褐色土 ロームブロック
  - 13 暗褐色土 ロームブロック
  - 14 - ソフトローム 二次堆積
  - 15 黒色土

SK217



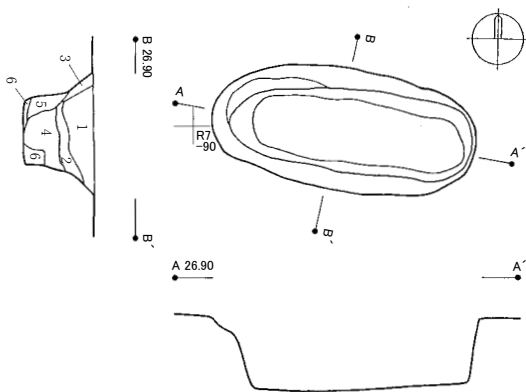
- SK217BB'
- 1 黒色土
  - 2 暗褐色土

SK219



- SK219AA' -BB'
- 1 褐色土
  - 2 暗褐色土 褐色土若干
  - 3 暗褐色土・褐色土の混合
  - 4 黒褐色土・褐色土の混合 ローム粒多量
  - 5 - ロームブロック
  - 6 黒褐色土・褐色土の混合 ローム粒多量
  - 7 暗褐色土・明褐色土の混合
  - 8 黒色土
  - 9 明褐色土 褐色土、ソフトローム
  - 10 - 白色土粘土 硬質
  - 11 黒色土 焼土化ロームブロック若干
  - 12 - 白色土粘土
  - 13 暗褐色土 やや明るい ローム粒、粘土まばら
  - 14 暗褐色土 ローム粒
  - 15 - ロームブロック
  - 16 暗褐色土 ローム粒
  - 17 暗褐色土 やや明るい ローム粒
  - 18 褐色土 ロームブロック
  - 19 黒褐色土 ローム粒
  - 20 暗褐色土 粘土粒
  - 21 明褐色土・褐色土の混合 ソフトローム・ロームブロック
  - 22 -

SK218



- SK218BB'
- 1 黒色土 褐色土ブロック若干
  - 2 暗黒褐色土
  - 3 暗茶褐色土
  - 4 黒褐色土 やや明るい
  - 5 黒褐色土
  - 6 暗褐色土 ローム粒

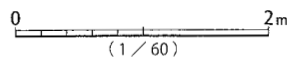


Fig.492 SK215、SK216、SK217、SK218、SK219 実測図

るが、底面からの立ち上がりは緩い。出土遺物は無く、帰属時期は不明。

#### SK245 セ28地区 (Fig.498)

R10-22付近に位置する土坑である。SS64方台部に位置し、SM1154北側周溝に近接する。

記録類に限られるため、新旧・帰属関係は判断し難い。ここでは現場段階の判断を優先して単独遺構として扱う。発掘調査時点ではセ28-411号遺構と呼称されている。

平面形状は円形で、規模は1.04m×1.00m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Wである。底面は円形で、ピットが北側側壁付近に位置する。断面形状は、逆台形に近いが、底面からの立ちあたりは緩い。また、中央部に窪みが記録されているが、平面図上では確認できない。覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK246 セ28地区 (Fig.498)

R10-51付近に位置する土坑である。SM1154南側周溝に重複して位置する。南側にはSK247が隣接する。新旧関係は、断面図を見る限りSM1154に先行することは無い。

発掘調査時点ではセ28-426号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は楕円形で、規模は2.18m×1.60m、確認面からの深さは0.29mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Wである。底面は楕円形を呈し、断面形状は、短軸方向では逆台形に近いが、底面からの立ち上がりは緩い。木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

SM1154への帰属の可能性は否定できないが、判断材料に乏しい。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK247 セ28地区 (Fig.498、PL.76~77)

R10-73付近に位置する土坑である。SS64・114間に位置する。発掘調査時点ではセ28-077号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.56m×1.04m、確認面からの深さは0.53mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は長方形を呈し、断面形状は、短軸方向では逆台形に近いが、底面からの立ち上がりは丸みを帯びる。長軸方向は西側で底面から直線的に立ち上がるが、東側では上位でテラス状の平坦面を開口する。木棺痕が検出されており、平面形は、規模は長軸2.16m×短軸0.84m、深さ0.53mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-89.5°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK248 セ28地区 (Fig.499)

S9-05付近に位置する土坑である。SM1003後円部下、SS65・66・113・114の中間に位置し、南側にSK249が近接するが、記録類に限られ詳細は不明である。発掘調査時点では、SK249とともにセ28-220号遺構と呼称されているが、整理段階で別遺構として分離している。

平面形状は長方形で、規模は1.60m×0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Wである。

小口両側に粘土がまとまって検出されており、木棺の固定に使用された可能性が高い。出土遺物は無いが、遺構検出面が底面に限られたため、副葬品を伴っていた可能性は残る。帰属時期は、不明だが、SM1003との関連性が考えられる。

#### SK249 セ28地区 (Fig.499、PL.77・175・193)

S9-05付近に位置する土坑である。SM1003後円部下、SS65・66・113・114の中間に位置し、北側にSK248が近接するが、記録類が限られ詳細は不明である。発掘調査時点では、SK248とともにセ28-220号遺構と呼称されているが、整理段階で別遺構として分離している。

平面形状は長方形で、規模は1.48m×1.00mを測る。主軸方位は長軸方向からN-54°-Eである。

出土遺物は、1が壺、2が椀型土器、3が鉢、4が壺である。1・2は宮ノ台式で本遺構の時期を示すとみられる。1は頸部のくびれが緩く、胴部最大径が胴部中位にあるが、張り出しが弱い。ヘラミガキを基調として胴部上位と中位に斜縄文帯をめぐらせ、その間に斜縄文を縦走させる。

#### SK250 セ28地区 (Fig.172)

S9-36付近に位置する土坑である。SS113北側周溝に接して位置する。発掘調査時点では遺構番号は付与されていないが、別遺構として扱った。記録類が限られるため詳細は不明である。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.32m×0.64m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Wである。底面は隅丸長方形を呈し、断面形状は短軸方向で逆台形を呈する。木棺痕は認められず、覆土の状況は自然堆積を示す。

SS113との関係については、別遺構との判断をしたが、SS113北側周溝の不自然な形状を見ると、本遺構はSS113の周溝内土坑として報告するべきものかもしれない。

出土遺物は無いが、帰属時期は、SS113に近い期の所産と考えられる。

#### SK251 セ28地区 (Fig.499)

S12-00付近に位置する土坑である。SS57・59・61の遺構間に位置する。発掘調査時点では遺構番号が付与されていなかったため整理段階で番号を付与している。また、記録類が限られるため、詳細は不明である。

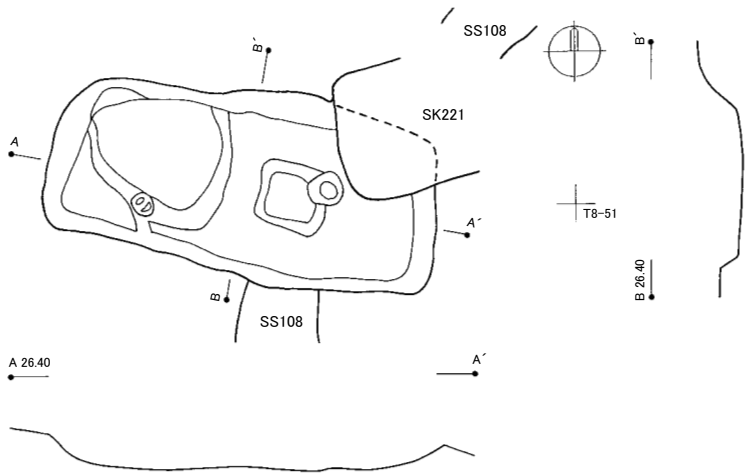
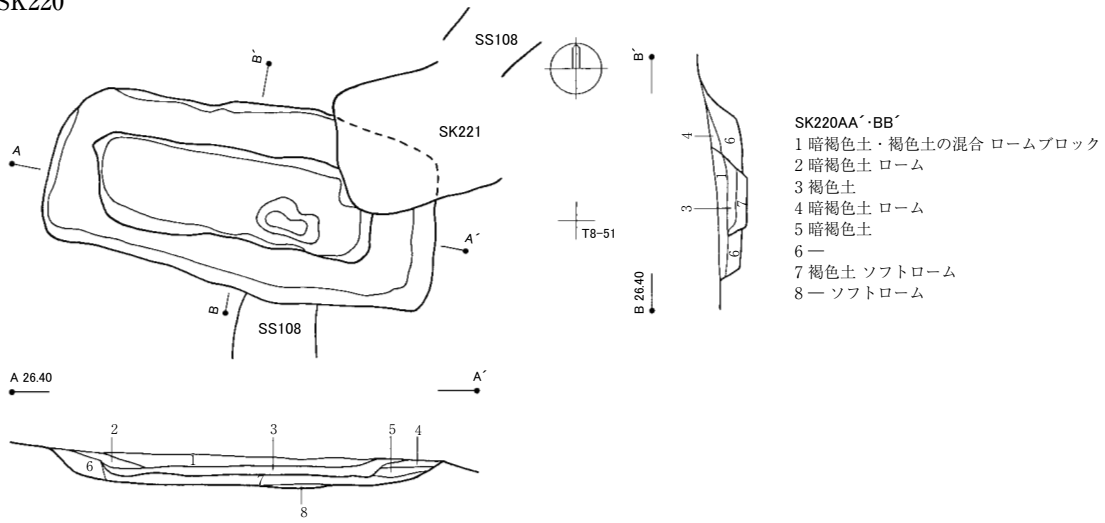
平面形状は隅丸方形で、規模は2.56m×1.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-84°-Eである。底面は隅丸方形を呈する。木棺痕は認められない。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK252 セ28地区 (Fig.499、PL.77)

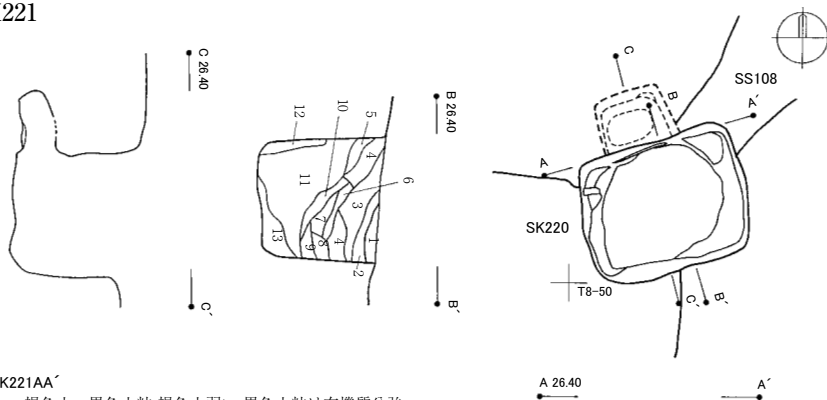
T12-27付近に位置する土坑である。SS56方台部に位置し、SM1135に近接する。発掘調査時点ではセ28-191号遺構と呼称されている。エレベーションは整理作業段階で作図している。

平面形状は長方形を基調とした不整形で、規模は1.80m×1.32m、確認面からの深さは0.70mを測る。主軸方位は長軸方向からN-8°-Wである。底面は半楕円形で、竪坑奥壁に寄る。南側上方に平坦面を形成する。断面形状は、長軸方向では、底面から僅かに上方で奥壁を掘り込んで玄室が位置する。

SK220



SK221



SK221AA'

1 褐色土・黒色土粒 褐色土弱い 黒色土粒は有機質分強

SK221BB'

- 1 褐色土 ロームブロック
- 2 褐色土 暗褐色土粒、ロームブロック
- 3 暗褐色土 黒褐色土、ローム粒・ロームブロック
- 4 暗褐色土 黒褐色土多量、ロームブロック
- 5 暗褐色土 黒褐色土多量、ロームブロック
- 6 褐色土 暗褐色土、ロームブロック
- 7 暗褐色土 黒色土粒・褐色土多量、ロームブロック
- 8 黒褐色土 ローム粒
- 9 暗褐色土 黒褐色土粒、ローム多量
- 10 淡褐色土 やや暗い ロームブロック多量
- 11 淡褐色土 ロームブロック多量
- 12 ロームブロック 軟弱
- 13 淡褐色土 ロームブロック 11層より大きい 11層より硬質

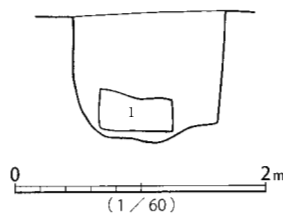
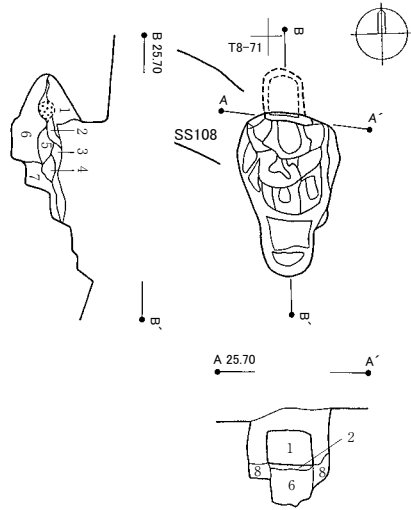


Fig.493 SK220、SK221 実測図

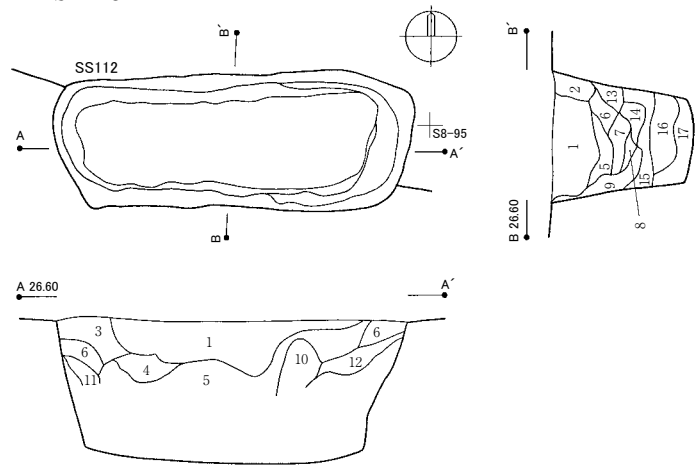
SK222



SK222AA'-BB'

- 1 黒色土 褐色土粒、ローム少量 有機質強
- 2 黒褐色土 ソフトローム多量 軟質
- 3 褐色土 暗褐色土、ロームブロック若干 硬質
- 4 暗褐色土 軟質
- 5 褐色土 ロームブロック
- 6 褐色土 やや暗い ロームブロック多量
- 7 明褐色土 ローム 硬質
- 8 淡褐色土 ローム粒 軟質

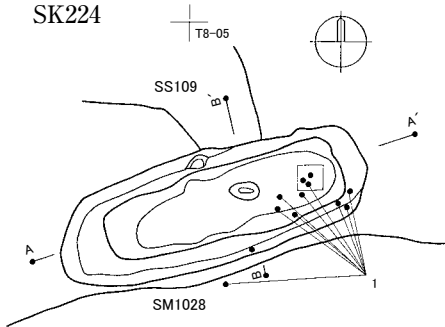
SK223



SK223AA'-BB'

- 1 暗褐色土・茶褐色土の混合 黒褐色土、ロームブロック少量・ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量
- 3 茶褐色土 ロームブロック
- 4 暗褐色土 ロームブロック
- 5 黒褐色土・茶褐色土の混合 ローム粒多量・ロームブロック多量
- 6 明褐色土・暗褐色土の混合 ロームブロック多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量・ローム粒多量
- 8 暗褐色土 ロームブロック少量
- 9 暗褐色土 やや明るい ロームブロック
- 10 茶褐色土 やや濃い ロームブロック
- 11 黒褐色土 ローム粒
- 12 明褐色土 ロームブロック多量
- 13 褐色土 ロームブロック
- 14 褐色土 ロームブロック(大)
- 15 - ローム多量
- 16 - ロームブロック 集合層
- 17 褐色土 ロームブロック 集合層

SK224



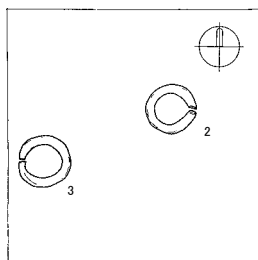
SK224BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 2 暗褐色土 ローム粒
- 3 暗褐色土 1層より黒い ローム粒多量
- 4 暗褐色土 1層に近い 明褐色土、ローム
- 5 暗褐色土 ローム少量 硬質
- 6 暗黄褐色土 暗褐色土、ロームブロック
- 7 黒褐色土 褐色土
- 8 暗褐色土 明褐色土、ローム粒多量 硬質
- 9 黒褐色土 褐色土塊 硬質 有機性が強い
- 10 暗褐色土

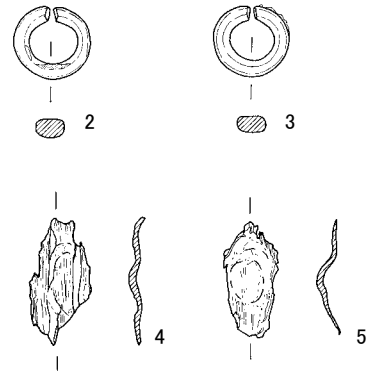
B 26.70

A 26.70

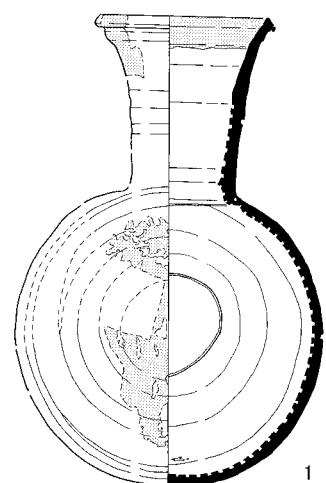
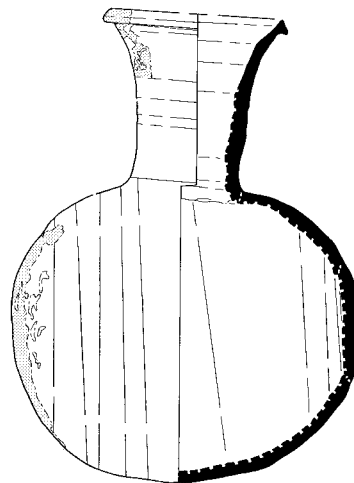
0 2m (1/60)



0 10cm (1/3)



0 5cm (1/2)



0 15cm (1/4)

Fig.494 SK222、SK223、SK224 実測図

玄室底面は水平である。底面から南側は階段状となっている。短軸方向では底面と側壁の変換点が緩い鍋底形を呈する。玄室は平面形が入口側に狭い台形もしくは方形を呈し、水平に作られた底面中央には奥壁へ向けて溝状の掘り込みが認められ、その周辺には人骨の骨粉が検出されている。玄室の規模と骨粉の状況を考えると、骨は火葬骨である可能性を示す。玄室の規模は0.60m×0.56m、天井から底面までは0.27mで、竪坑底から0.05m上位に作られている。主軸方位は長軸方向からN-7°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK253 セ28地区 (Fig.500、PL.77)

R13-75付近に位置する土壌である。SS53、SM1149の遺構間に位置する。発掘調査時点ではセ28-187号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.75m×1.05m、確認面からの深さは0.43mを測る。主軸方位は長軸方向からN-15°-Wである。底面は長方形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈する。木棺痕は土層図では捕捉しているが、平面形状の記録が無い。規模は計測不能、深さ0.38mを測る。木棺の主軸方位は計測不能である。

出土遺物は無く、帰属時期は判断し難い。

#### SK254 セ28地区 (Fig.500、PL.77)

R14-50付近に位置する土壌である。SS47南側陸橋部に位置し、一部周溝と重複する。周辺にはSM1149・1164が位置する。発掘調査時点ではセ28-155号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は3.20m×1.55m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Eである。底面は隅丸長方形を呈し、断面形状は、長軸方向では逆台形を、短軸方向では底面が丸く、レンズ状を呈する。木棺痕が検出されており、平面形は、規模は長軸2.55m×短軸0.80m、深さ0.48mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK255 セ28地区 (Fig.500)

Q11-50付近に位置する土壌である。SS38南側隅に重複する。発掘調査時点ではセ28-032号遺構と呼称されている。SS38に対する新旧関係は、土層上、周溝との切り合いが判断できないため、確定的な資料は無い。

平面形状は長方形で、規模は2.75m×1.20m、確認面からの深さは0.87mを測る。主軸方位は長軸方向からN-5°-Wである。底面は長方形を呈し、断面形状は、短軸方向逆台形を呈する。木棺痕は短軸方向の土層に明瞭に認められるが、平面プランの記録は無い。棺底幅0.54mを測る。出土遺物は無く、帰属時期は判断し難いが、SS38を弥生時代中期後半とすると、それ以降であることは疑いないところである。本遺跡内には周溝隅や、陸橋部に土壌・土坑が位置する例が見受けられるが、何れも遺物を伴わず、時期の判別が不能である。周囲に古墳時代後期古墳が所在する本遺構では、どちらかの時期に近い時期である可能性を判断することが妥当と思われる。



#### SK256 セ28地区 (Fig.499、PL.77)

Q11-33付近に位置する土坑である。SS39西側周溝に重複して位置する。発掘調査時点ではセ28-033b(SS39の旧No)号遺構と呼称されているが、周溝墓には帰属しないものと判断した。

平面形状は長方形で、規模は2.44m×1.16mを測る。主軸方位は長軸方向からN-63°-Eである。木棺痕は認められない。

出土遺物は無く帰属時期は不明であるが、隣接のSK255に平面プラン、規模が近く、木棺を据えた土壌である可能性がある。

#### SK257 セ28地区 (Fig.501、PL.78)

Q12-30付近に位置する土坑である。SS39・40、SM1029の遺構間に位置し、発掘調査時点ではセ28-194号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は長楕円形で、規模は2.28m×0.92m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈する。短軸方向土層より、木棺が据えられた可能性がある。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK258 セ28地区 (Fig.501)

Q12-03付近に位置する土坑である。SM1029周溝に近接して位置し、発掘調査時点ではセ28-195号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は長楕円形で、規模は1.64m×0.44m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-17°-Eである。底面は長楕円形を呈し、断面形状は、短軸方向で逆台形、長軸方向では底面からの立ち上がりが緩くなっている。木棺痕は認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は、明確にし得ないが、主軸方向がSM1029周溝に沿っていることから、SM1029に近い時期を想定しておく。

#### SK259 セ28地区 (Fig.501)

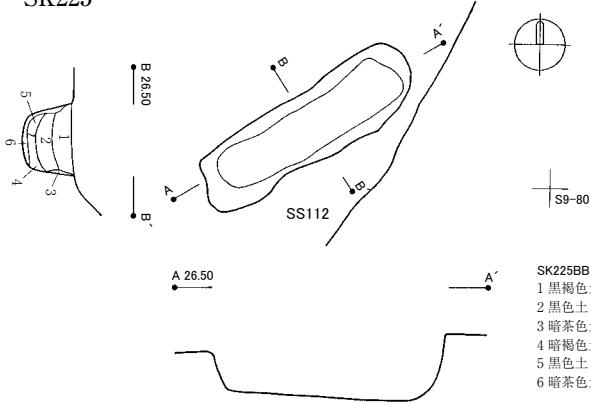
Q14-03付近に位置する土坑である。SS45方台部、SM1015墳丘内に位置し、発掘調査時点ではセ28-192号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.28m×0.64m、確認面からの深さは0.07mを測る。遺構検出面から底面までが極端に浅いため、遺構の上位は失われたものとみられる。主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。底面は長楕円形を呈する。断面形状は、長軸・短軸方向共に逆台形を呈する。底面はほぼ平坦に見えるが、立ち上がりが緩い傾向が看取される。木棺痕は認められない。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK260 セ28地区 (Fig.501、PL.205)

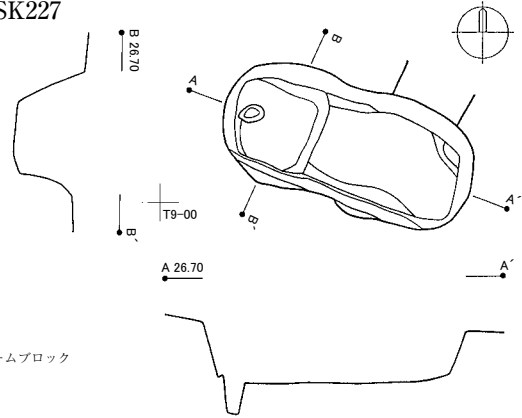
P15-80付近に位置する土壌である。周囲にはSM1015・1093、SW80-250号墳・259号墳(詳細不明)が位置するものの、距離があり、単独土壌である可能性が高い。発掘調査時点では160号遺構と呼称

SK225

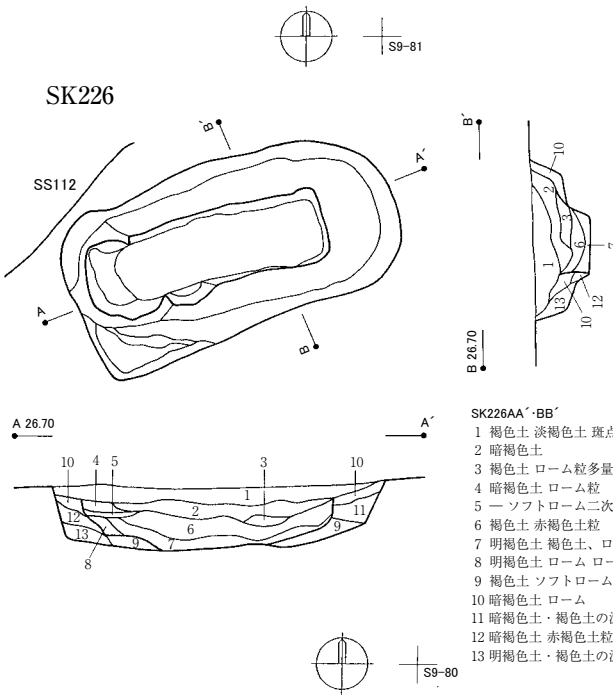


- SK225BB'  
 1 黒褐色土 褐色土粒多量  
 2 黒色土 ローム粒多量  
 3 暗茶色土 ローム粒  
 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック  
 5 黒色土  
 6 暗茶色土

SK227

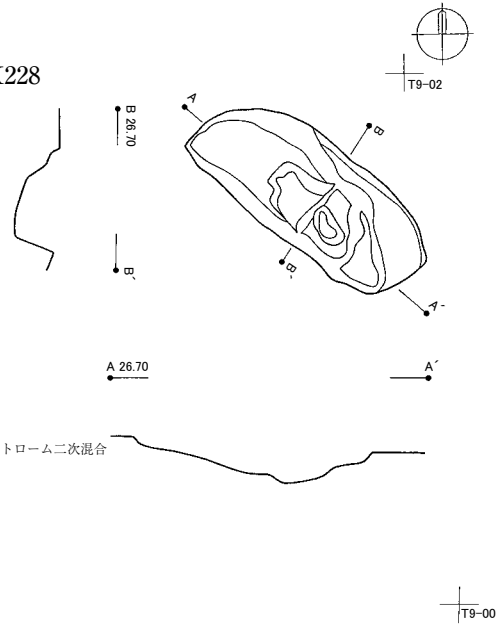


SK226

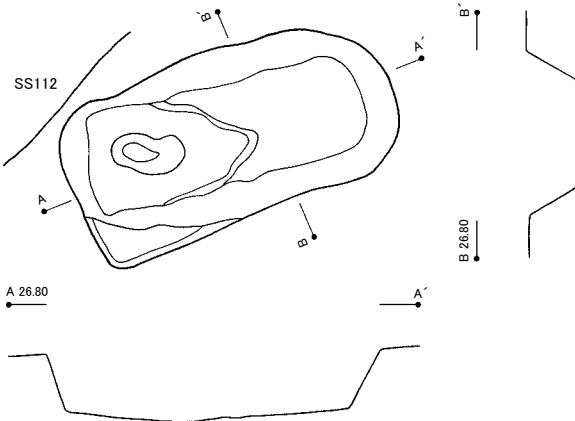


- SK226AA'-BB'  
 1 褐色土 淡褐色土 斑点状  
 2 暗褐色土  
 3 褐色土 ローム粒多量・ソフトローム ソフトローム二次混合  
 4 暗褐色土 ローム粒  
 5 ソフトローム二次堆積土  
 6 褐色土 赤褐色土粒  
 7 明褐色土 褐色土、ローム  
 8 明褐色土 ローム ローム二次混合土  
 9 褐色土 ソフトローム  
 10 暗褐色土 ローム  
 11 暗褐色土・褐色土の混合 ローム土若干  
 12 暗褐色土 赤褐色土粒、ローム  
 13 明褐色土・褐色土の混合 ローム土

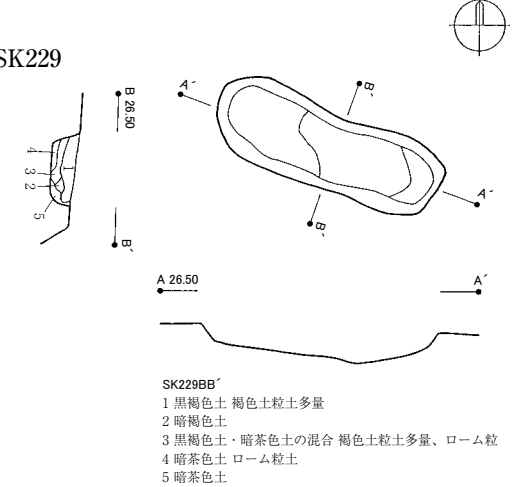
SK228



SK229



SK229



- SK229BB'  
 1 黒褐色土 褐色土粒多量  
 2 暗褐色土  
 3 黒褐色土・暗茶色土の混合 褐色土粒多量、ローム粒  
 4 暗褐色土 ローム粒土  
 5 暗茶色土

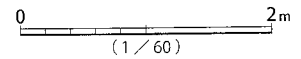


Fig.495 SK225、SK226、SK227、SK228、SK229 実測図

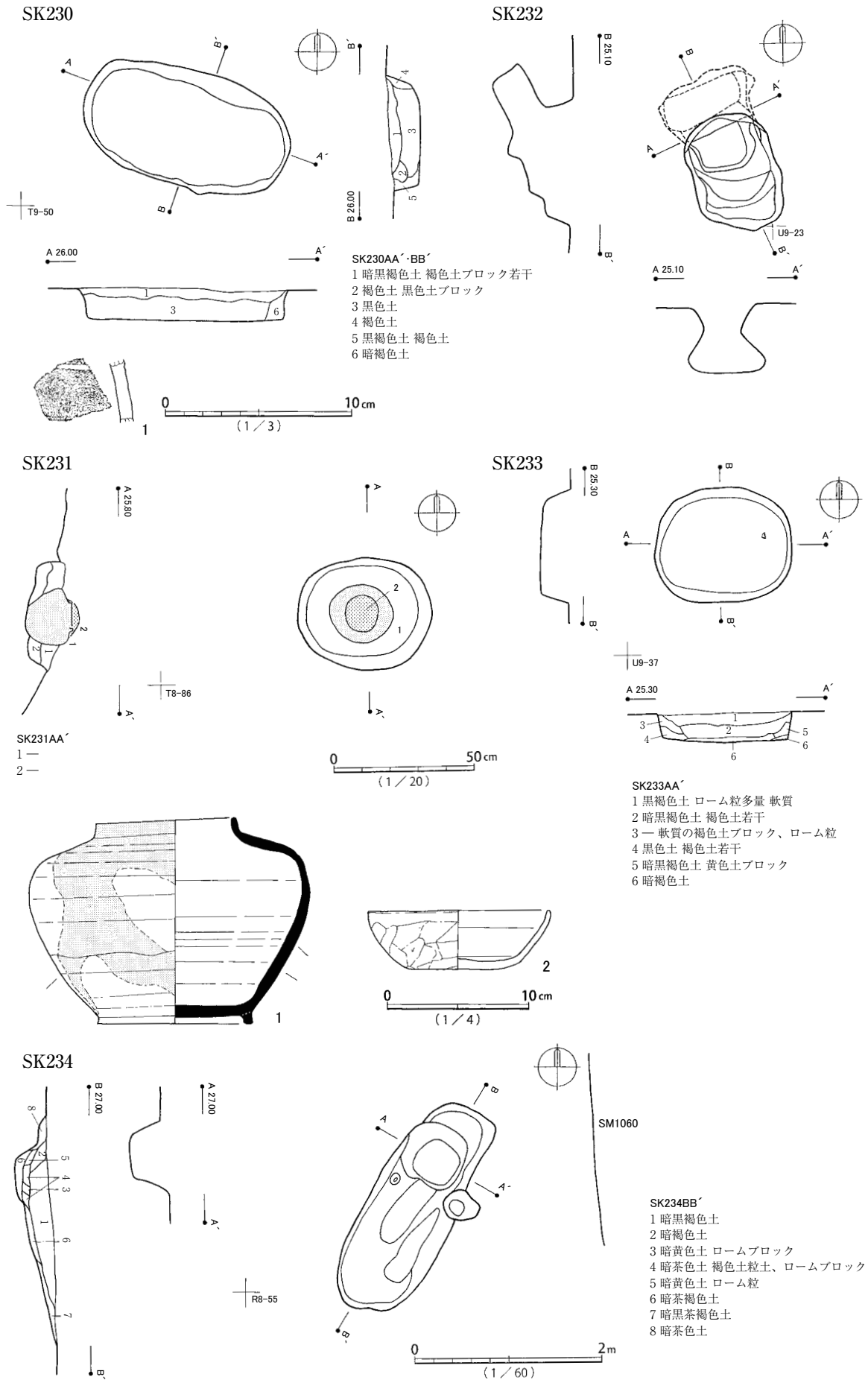


Fig.496 SK230、SK231、SK232、SK233、SK234 実測図

されている。

平面形状は長方形であるが、東側で攪乱を受けている。遺構規模は2.96m×1.16m、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位は長軸方向からN-84°-Wである。底面は長方形を呈し、断面形状は、土壌掘形の図面が記録されていないため、木棺内の土層のみを図示している。木棺痕の平面形は長方形で、規模は長軸計測不能×短軸0.65m、深さ0.17mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-84°-Wである。

出土遺物は、1が鉄製刀子で、関付近で変形している。出土位置は不明。2は金銅製耳環で棺底付近からの出土であるが、1点のみである。攪乱による散逸が考えられる。

#### SK261 セ28地区 (Fig.501、PL.78)

R15-24付近に位置する土壌である。SM1093・1180の遺構間に位置し、SS48西側周溝と重複する。新旧関係はSS48周溝を明瞭に掘り込んでおり、明瞭に本遺構が新しい。

発掘調査時点ではセ28-158号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.60m×1.12m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Eである。底面は長方形であるが、片側小口が丸くなる。

出土遺物は無く、帰属時期は判断し難い。

#### SK262 セ28神社裏地区 (Fig.502)

L5-28付近に位置する土坑である。調査区境界にかかるため、西側は未検出である。北側にSK263が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1016号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は不整形で、規模は短軸方向で1.70m、確認面からの深さは0.28mを測る。主軸方位は長軸方向からN-53°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、短軸方向で逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK263 セ28神社裏地区 (Fig.502)

L5-48付近に位置する土坑である。南側にSK264が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1014号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.75m×1.35m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸方向かN-25°-Eである。底面は楕円形で中央にピットが1基認められる。断面形状は、短軸方向ではすり鉢状で、長軸方向ではレンズ状を呈する。土層図が無いため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。遺構の形状から縄文時代の遺構である可能性を残す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK264 セ28神社裏地区 (Fig.502、PL.78)

L6-40付近に位置する土坑である。北側にSK263が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社

裏-1013号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は3.50m×1.85m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにレンズ状を呈する。土層図から木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK265 セ28神社裏地区 (Fig.502)

L6-60付近に位置する土坑である。西側にSK323が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1031号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は不整形で、規模は1.95m×1.85m、確認面からの深さは0.82mを測る。主軸方位は長軸方向からN-1.5°-Eである。底面は不整形で、断面形状は逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK266 セ28神社裏地区 (Fig.503)

L6-82付近に位置する土坑である。北側にSK265が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1032号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は不整形で、規模は1.95m×1.52m、確認面からの深さは0.67mを測る。主軸方位は長軸方向からN-37°-Wである。底面は不整形で平坦面が狭い。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに不整形で、中央付近にピット状の落ち込みが認められる。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK267 セ28神社裏地区 (Fig.137・139)

M6-26付近に位置する土坑である。SS97後方部東側周溝内に位置し、周溝底を掘り込んでいる。整理作業段階で単独の遺構とした過程があったため、単独の遺構番号を付しているが、古墳に帰属すると判断したため、詳細はSS97に記載している。

#### SK268 セ28神社裏地区 (Fig.503)

M7-40付近に位置する土坑である。西側にSK269が位置し、東側にSS19が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1028号遺構と呼称されている。

平面形状は円形で、規模は0.85m×0.74m、確認面からの深さは0.51mを測る。主軸方位は長軸方向からN-40°-Wである。底部は平坦面を持たない。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにV字形に近い形状を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

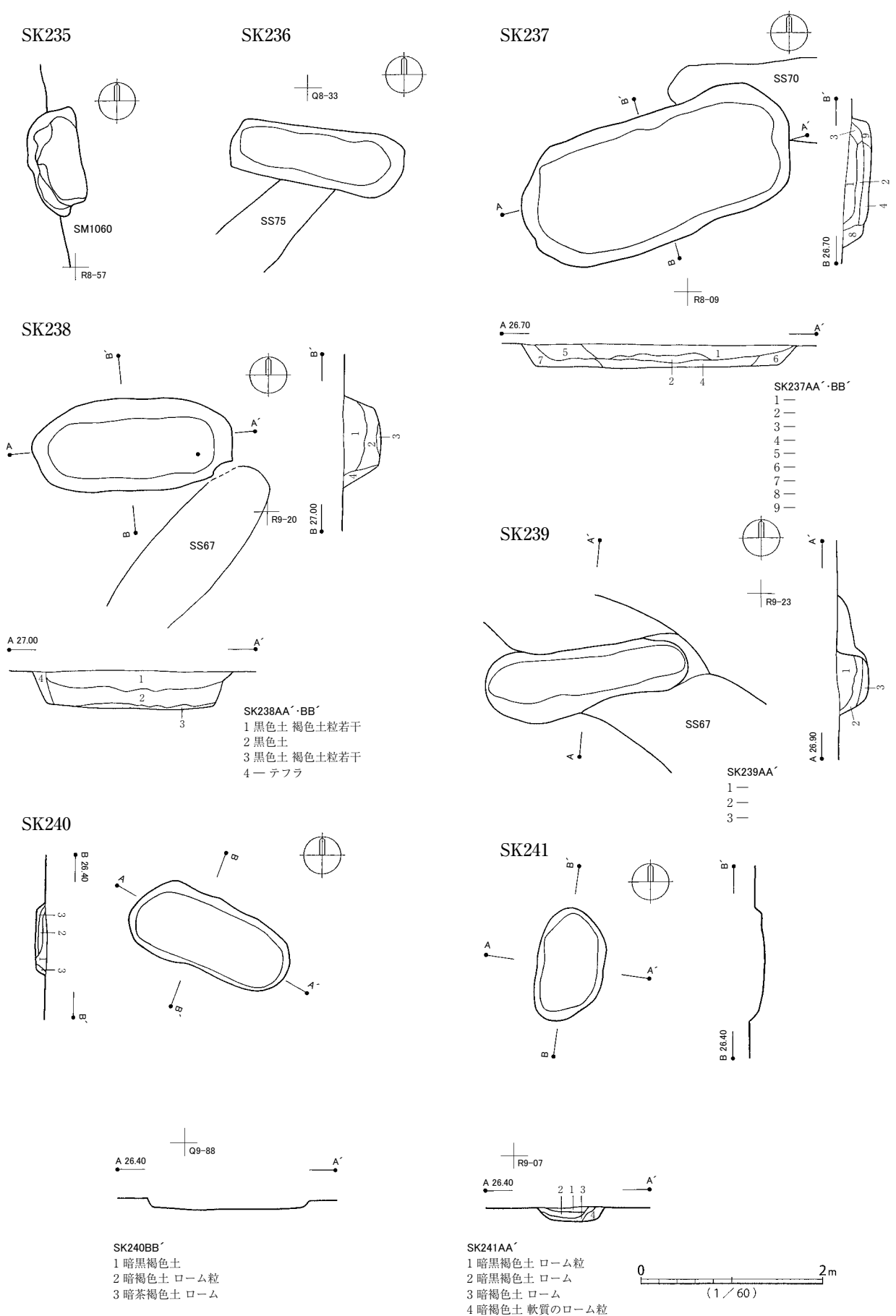


Fig.497 SK235、SK236、SK237、SK238、SK239、SK240、SK241 実測図

#### SK269 セ28神社裏地区 (Fig.503)

M6-48付近に位置する土坑である。東側にSK268が位置し、SS19が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1029号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.16m×0.93m、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-50°-Wである。底部は平坦面を持たない。断面形状は、長軸方向で不整形、短軸方向ではV字形に近い形状を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK270 セ28神社裏地区 (Fig.503)

M7-60付近に位置する土坑である。西側にSS19が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1030号遺構と呼称されている。なお、エレベーション図は整理作業段階で作図している。

平面形状は不整形で、規模は2.66m×1.28m、確認面からの深さは0.34mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、短軸方向ではレンズ状を、長軸方向では逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK271 セ28神社裏地区 (Fig.503、PL.78)

N7-00付近に位置する土坑である。南側にSS21が、北側にSS19が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1035号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は3.12m×1.55m、確認面からの深さは0.70mを測る。主軸方位は長軸方向からN-51°-Eである。底面は長方形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形状を呈する。土層図からは木棺痕は明瞭には確認できないが、平面図上に平面形が長方形の木棺痕のような記録が認められる。規模は長軸2.62m×短軸0.85mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK272 セ28神社裏地区 (Fig.504)

N7-02付近に位置する土坑である。南側にSS21が、北側にSS19が位置する。西側にはSK271が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1011号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.25m×1.22m、確認面からの深さは0.83mを測る。主軸方位は長軸方向からN-52°-Eである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈するが、側壁はやや内湾して開口する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK273 セ28神社裏地区 (Fig.504)

N7-22付近に位置する土坑である。SS21北西側周溝と重複する。新旧関係は土層断面からSS21に対し本遺構が新しいとみられる。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1001号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.25m×1.00m、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は長軸方向からN-12.5°-Wである。底面は楕円形で、平坦面は僅かである。断面形状は、南北方向ではV字形で、東西方向では逆台形に近い形状を呈するが、側壁は外反して開口する。覆土の状況から自然堆積とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK274 セ28神社裏地区 (Fig.504)

N7-26付近に位置する土坑である。調査区境界に位置するため、東側は検出していない。SS21方台部にあるが、主体部の可能性は低い。西側にやや離れてSK273が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1006A号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は0.90mを測る。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK275 セ28神社裏地区 (Fig.504)

N7-88付近に位置する土坑である。北側にSS21が近接し、東側でSK276と接する。SK276との新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1009号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.10m×0.80m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は長軸方向からN-15°-Wである。底面は不整形で平坦面は少ない。断面形状は、短軸方向では不整形だが、長軸方向では矩形もしくは逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明であるが、SK276に関連した遺構の可能性はある。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK276 セ28神社裏地区 (Fig.504、PL.78)

N7-88付近に位置する土坑である。北側にSS21が近接し、西側でSK275と接する。SK275との新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1010号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は(2.50)m×2.10m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-58°-Eである。底面は楕円形で短軸方向の側壁付近にピットが一对位置する。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。遺構の形状から、縄文時代の小竪穴状遺構の可能性はある。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

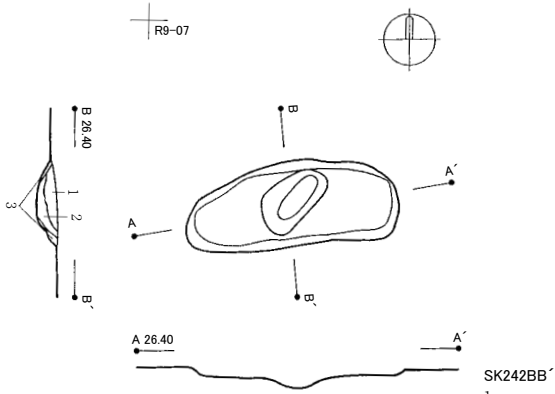
#### SK277 セ28神社裏地区 (Fig.504)

O8-00付近に位置する土坑である。東側にSS22が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ28神社裏-1020号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.00m×0.95m、確認面からの深さは0.17mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形



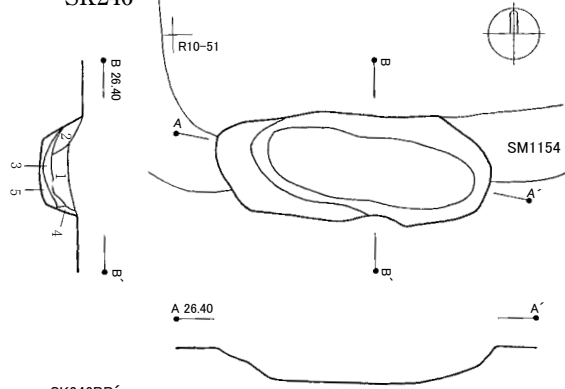
SK242



SK242BB'

- 1 —
- 2 —
- 3 —

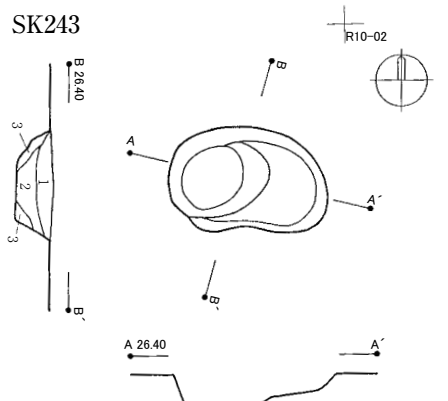
SK246



SK246BB'

- 1 黒色土
- 2 暗黒褐色土
- 3 暗黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 ローム多量

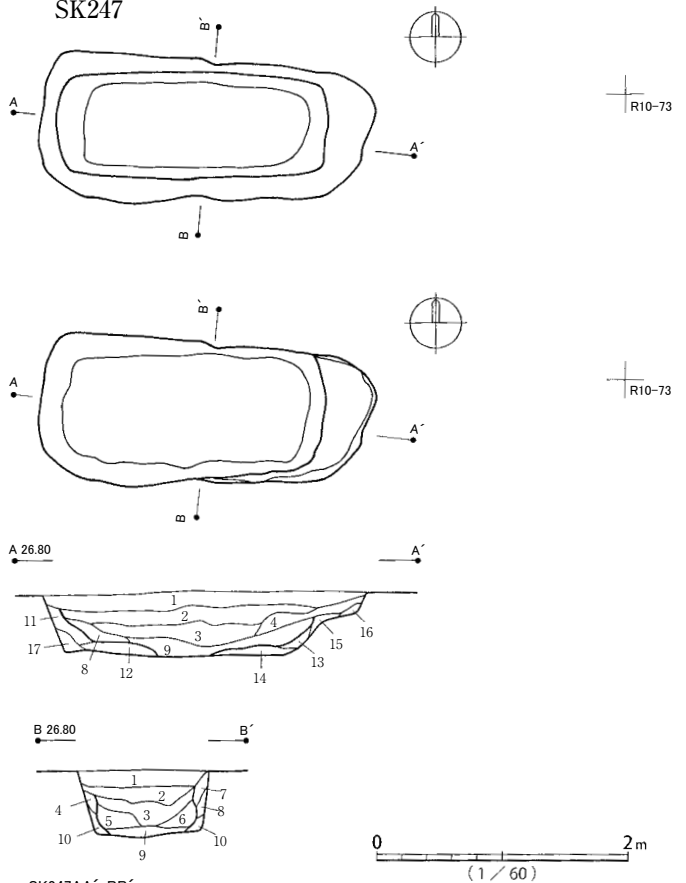
SK243



SK243BB'

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 ローム粒多量・ローム
- 3 暗黄色土

SK247

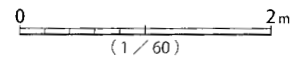


A 26.80

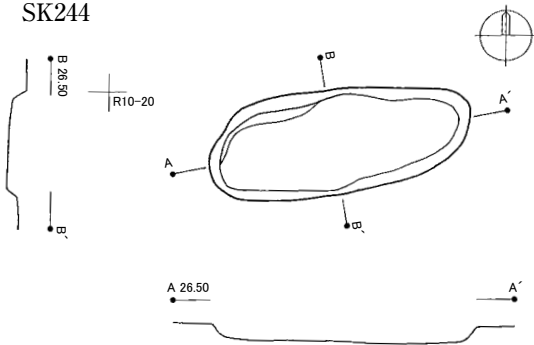
B 26.80

SK247AA'・BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒 1層より少ない
- 3 黒褐色土・褐色土の混合 ローム粒
- 4 黒褐色土
- 5 —
- 6 褐色土 ローム粒多量
- 7 暗褐色土 ローム粒 やや硬質
- 8 暗褐色土 やや硬質
- 9 暗褐色土・褐色土の混合 ローム粒若干
- 10 暗褐色土 ローム粒多量・ロームブロック若干 硬質
- 11 暗褐色土 弱粘性
- 12 褐色土 ローム 弱粘性
- 13 暗褐色土
- 14 ソフトローム 二次堆積土
- 15 暗褐色土 硬質
- 16 黄褐色土 下層遺構覆土
- 17 褐色土 ロームブロック

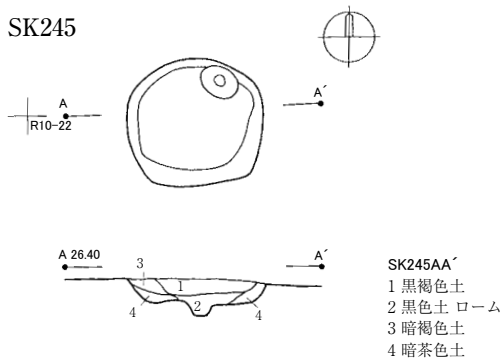


SK244



A 26.50

SK245



A 26.40

SK245AA'

- 1 黒褐色土
- 2 黒色土 ローム
- 3 暗褐色土
- 4 暗茶色土

Fig.498 SK242、SK243、SK244、SK245、SK246、SK247 実測図

を呈する。土層図が無いため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK278 セ54地区 (Fig.505、PL.78～79・175・193)

S14-39付近に位置する土坑である。北側にSM1177が、東側にSM1159が位置し、南側にはSK279が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.41号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は0.43m×0.36m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-44°-Wである。底面の形状は不明で、断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図から、最下層上層に食い込んで土師器甕が据えられている。

出土遺物は1～3が土師器甕形土器で、1は土壙中正位で据えられた状態で出土している。内容物については記録が無い。

帰属時期は、不確定だが9世紀代の所産と考えられる。

#### SK279 セ54地区 (Fig.505、PL.78～79・193)

S14-49付近に位置する土坑である。北側にSM1177が、東側にSM1159が位置し、北側にはSK278が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.42号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は(0.48)m×0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-39°-Eである。底面に関する記録が無く、詳細は不明である。

出土遺物は1・2が土師器甕形土器で、覆土中からの出土である。帰属時期は9世紀代としておく。

#### SK280 セ54地区 (Fig.505、PL.79)

S16-50付近に位置する土壙である。北側SS48が、南側にSS50が近接する。東側にやや離れてSK281が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.108号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.06m×1.06m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-82°-Eである。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕が明瞭である。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.30m×短軸0.52m、深さ0.24mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-82°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明であるが、位置関係・形状・などからSS50に近い時期も考えられる。

#### SK281 セ54地区 (Fig.506、PL.79)

R16-52付近に位置する土壙である。南側にSS50が近接する。西側にやや離れてSK280が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.107号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は1.80m×1.10m、確認面からの深さは0.50mを測る。主軸方位は長軸方向からN-58°-Eである。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向、短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕が明瞭である。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.30m×短軸0.62m、深さ0.42mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-58°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明であるが、位置関係・形状などからSS50に近い時期も考えられる。

#### SK282 セ54地区 (Fig.506、PL.79～80)

Q19-70付近に位置する土壌である。北側SM1052が、南側にSM1105が近接する。SK283が近接して位置する。遺構番号のない溝状遺構と重複するが、土層図から本遺構が古い。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.88号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.30m×0.95m、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図から木棺痕が明瞭に確認できるが、平面図上は記録が無いいため平面形は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK283 セ54地区 (Fig.506、PL.80)

Q19-53付近に位置する土壌である。西側でSM1052と重複する。土層図からは、本遺構に対しSM1052が新しい。西側にSK282が近接して位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.87号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.90m×1.40m、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕が明瞭に確認できるが、平面図上は記録が無いいため平面形は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK284 セ54地区 (Fig.506、PL.80)

Q20-90付近に位置する土壌である。南側に位置するSM1098に近接する。東側にはSK285が位置する。

本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.91号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は1.40m×0.75m、確認面からの深さは0.55mを測る。主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。底面は不整形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁下位に横穴状の掘り込みが認められる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは、木棺痕は認められない。

横穴状の掘り込みの平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.00m×短軸0.35m、天井から底面までは0.30mで、土壌底面から0.18m下位に作られている。横穴状の掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。側壁扶込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK285 セ54地区 (Fig.506、PL.80)

Q20-90付近に位置する土坑である。南側に位置するSM1098に近接する。西側にSK284が位置する。

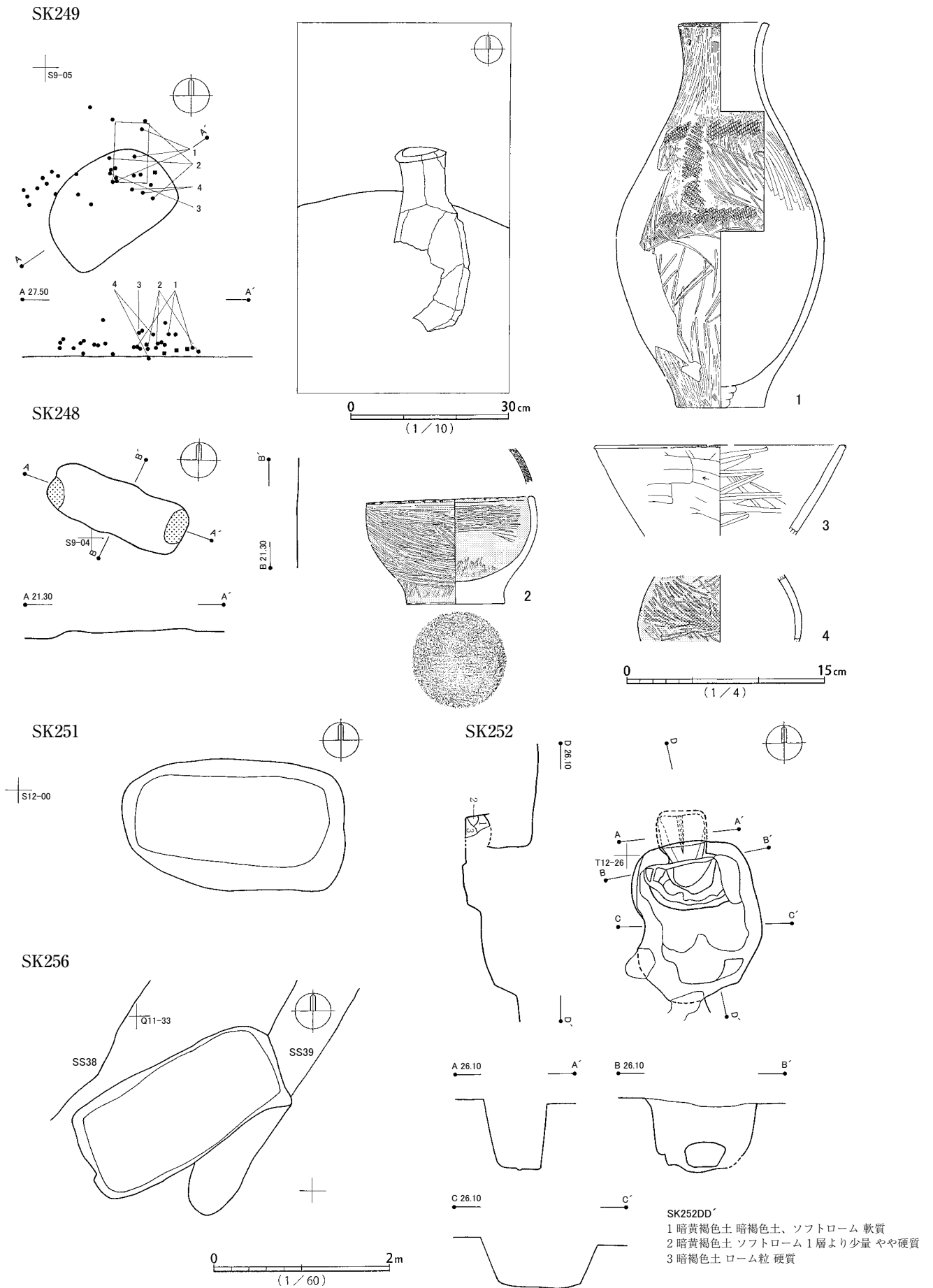


Fig.499 SK248、SK249、SK251、SK252、SK256 実測図

本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.90号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は1.25m×0.60m、確認面からの深さは0.46mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Eである。底面は方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK286 セ54地区 (Fig.507、PL.80～81)**

S20-20付近に位置する土壌である。SK287など、4基で構成される一群を形成する。北側にSM1132・SM1114・SM1113が、南側にSM1071・SM1043が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.96号遺構と呼称されている。

確認面での平面形状は長方形で、規模は2.08m×0.88m、確認面からの深さは0.56mを測る。主軸方位は長軸方向からN-76°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁の下位を横穴状に掘り込んでいる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは、木棺痕は認められないが、陥没したようにレンズ型の堆積が認められるため、当初空隙が生じていた可能性を示す。

横穴状の掘り込みの平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸2.12m×短軸0.66m、天井から底面までは0.25mで、底面は、土壌底面から0.09m下位に作られている。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK287 セ54地区 (Fig.507、PL.81)**

S20-30付近に位置する土壌である。SK286など、4基で構成される一群を形成する。北側にSM1132・SM1114・SM1113が、南側にSM1071・SM1043が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.97号遺構と呼称されている。

確認面での平面形状は不整楕円形で、規模は1.08m×計測不能、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。底面は楕円形を呈する。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにU字形を呈し、短軸方向では北側側壁下位で、横穴状の掘り込みが認められる。土層図からは木棺痕は認められない。横穴状の掘り込みの平面形は、楕円形で、規模は記録類が限られ計測できない。側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK288 セ54地区 (Fig.507、PL.81～82)**

S20-40付近に位置する土壌である。SK287など、4基で構成される一群を形成する。北側にSM1132・SM1114・SM1113が、南側にSM1071・SM1043が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.98号遺構と呼称されている。

確認面での平面形状は楕円形で、規模は2.10m×1.00m、確認面からの深さは0.70mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Wである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向では

J字形を呈し、北側側壁下位において、横穴状の掘り込みが認められる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図から木棺痕は認められない。覆土の状況は自然堆積とも見えるが北側下位に空隙があったとも考えられる。

横穴状の掘り込みの平面形は楕円形で、規模は長軸1.70m×短軸0.46m、天井から底面までは0.21mで、底面は、土壌底面から0.05m上位に作られている。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。側壁挟込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK289 セ54地区 (Fig.507、PL.82)

S20-40付近に位置する土坑である。SK287など、4基で構成される一群を形成する。北側にSM1132・SM1114・SM1113が、南側にSM1071・SM1043が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.99号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は0.84m×0.66m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは内部施設の有無はうかがい知れない。覆土の状況から自然堆積とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK290 セ54地区 (Fig.507、PL.82)

T19-23付近に位置する土坑である。SK292など、4基で構成される一群を形成する。SM1071・SM1081・SM1094が群を囲むように位置する。北側からは攪乱を受けている。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.177号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.42m×(1.06)m、確認面からの深さは0.60mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに矩形を呈し、長軸方向では底面中央に僅かな掘り込みを伴う。平面図・土層図からは木棺痕を明瞭に確認でき、中央付近の掘り込みはロームブロック混じりの黒褐色土で充填されてから木棺が据えられていることが判る。また、木棺の平面形は長方形で、規模は長軸2.00m×短軸(0.60)m、深さ0.30mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-89°-Wである。

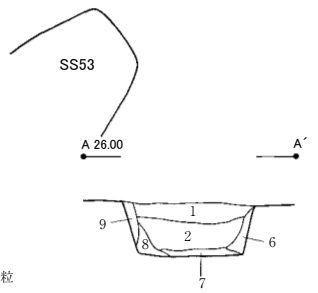
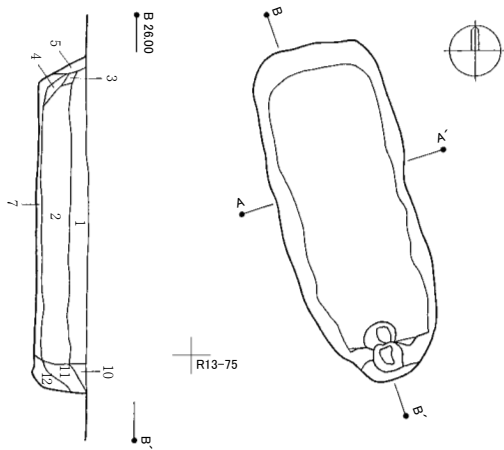
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK291 セ54地区 (Fig.508、PL.82)

T19-33付近に位置する土坑である。SK292など、4基で構成される一群を形成する。SM1071・SM1081・SM1094が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.128号遺構と呼称されている。

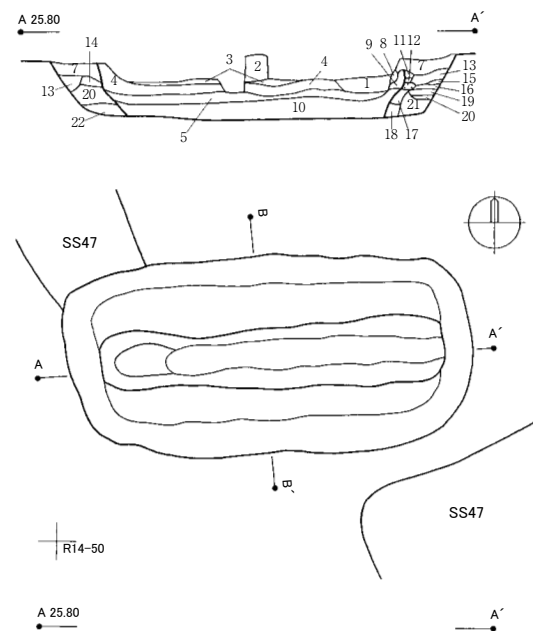
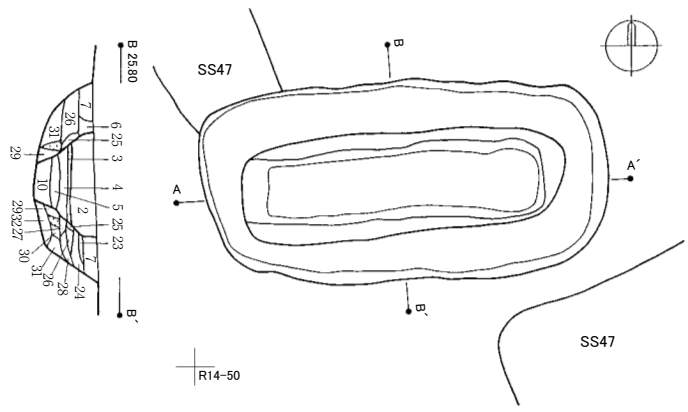
平面形状は長楕円形で、規模は2.06m×0.64m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-62°-Wである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は明瞭ではない。

SK253

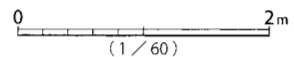


- SK253AA'-BB'
- 1 暗黒褐色土 褐色土、ローム粒
  - 2 黒色土
  - 3 -
  - 4 黒褐色土 暗茶色土、ローム粒・ロームブロック
  - 5 暗茶色土 褐色土
  - 6 暗黒褐色土 褐色土若干
  - 7 - 暗褐色土・暗茶色土の混合 褐色土ブロック、ローム粒・ロームブロック
  - 8 暗黒褐色土 褐色土若干
  - 9 暗褐色土 褐色土ブロック
  - 10 -
  - 11 黒褐色土 明茶色土ブロック若干
  - 12 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック若干

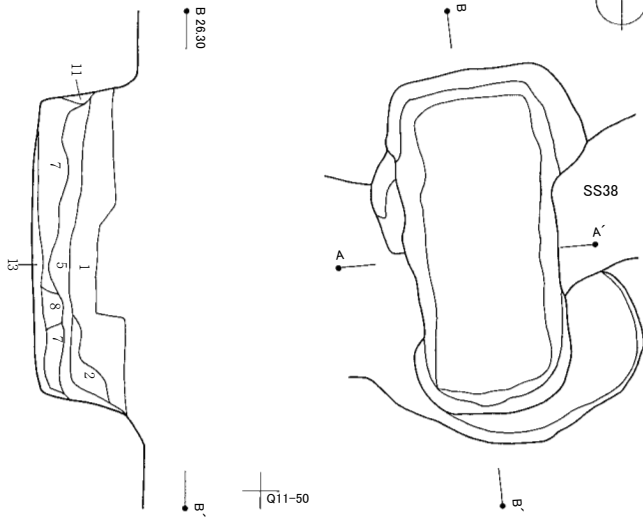
SK254



- SK254AA'-BB'
- 1 -
  - 2 黒褐色土 白色土粘土粒若干、ローム粒
  - 3 黒褐色土 白色土粘土粒若干、ローム粒 2層よりやや硬質
  - 4 -
  - 5 -
  - 6 -
  - 7 -
  - 8 -
  - 9 -
  - 10 -
  - 11 -
  - 12 -
  - 13 -
  - 14 -
  - 15 -
  - 16 -
  - 17 -
  - 18 -
  - 19 -
  - 20 -
  - 21 -
  - 22 暗褐色土
  - 23 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒
  - 24 黒褐色土 23層より多量 ロームブロック・ローム粒
  - 25 黒褐色土 白色土粘土粒若干、ローム粒・ロームブロック
  - 26 - ロームブロック・ローム粒
  - 27 黒褐色土 白色土粘土粒
  - 28 黒褐色土 硬質
  - 29 -
  - 30 -
  - 31 -
  - 32 -



SK255



- SK255AA'-BB'
- 1 黒色土 ローム粒多量、黒褐色土ブロック若干
  - 2 暗黒色土 ローム粒
  - 3 褐色土 ローム粒
  - 4 黒色土 やや明るいローム粒多量、黒褐色土ブロック若干
  - 5 暗黒色土 ローム粒・ロームブロック、褐色土粒多量
  - 6 黒色土 やや明るいローム粒
  - 7 黒色土 ローム粒
  - 8 暗黒色土 ローム粒・ロームブロック、褐色土粒多量
  - 9 黒色土 ローム粒多量
  - 10 褐色土 ローム粒・ロームブロック若干
  - 11 -
  - 12 褐色土 ローム粒土、黒色土少量 硬質
  - 13 褐色土 ローム粒土 硬質

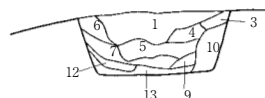


Fig.500 SK253、SK254、SK255 実測図

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK292 セ54地区 (Fig.508、PL.83)

T19-53付近に位置する土壙である。SK291など、4基で構成される一群を形成する。SM1071・SM1081・SM1094が群を囲むように位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.52号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は長方形で、規模は2.48m×1.04m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-26°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではU字形に近い形状を呈し、北西側側壁を挟り込んでいる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは、陥没を示すレンズ状の落ち込みが認められ、空隙が存在した可能性が考えられる。木棺痕は認められない。側壁挟込土壙に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK293 セ54地区 (Fig.508、PL.83)

T19-80付近に位置する土壙である。SK291など、4基で構成される一群を形成する。SM1071・SM1081・SM1094が群を囲むように位置する。発掘調査時点ではセ54-No.54号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は楕円形で、規模は2.06m×1.40m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-78°-Eである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向で逆台形を呈し、北側側壁下位を横穴状に掘り込んでいる。長軸方向ではレンズ状を呈する。土層図からは、陥没を示すレンズ状の落ち込みが認められ、北側底面に空隙が存在した可能性が考えられる。横穴状の掘り込みの平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸2.24m×短軸0.76m、天井から底面までは0.27mを測り、底面は土壙底面から0.05m下位に作られている。木棺の主軸方位は長軸方向からN-81°-Eである。側壁挟込土壙に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK294 セ54地区 (Fig.508、PL.83)

U18-03付近に位置する土壙である。SK295など、4基で構成される一群を形成する。SM1183・SM1094・SM1184が群を囲むように位置する。また、南西側のSM1155を含めた範囲では、他にSK298・SK299などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.58号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は方形で、規模は2.08m×1.46m、確認面からの深さは0.33mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Wである。底面は不整長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁下位において横穴状の掘り込みが認められる。長軸方向では矩形もしくは逆台形を呈する。土層図からは、陥没を示すレンズ状の落ち込みが認められ、北側底面に空隙が存在した可能性が考えられる。また、現場所見では、全体的に人為的な埋土である可能性が指摘されている。横穴状の掘り込みの平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.86m×短軸0.62m、天井から底面までは0.30mを測る。底面は土壙底面から0.06m下位に作られており、その間には区画するように溝1



条が走り、また、底面中央付近においても、主軸と直交方向に、2条の溝が並走する。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。側壁挟込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK295 セ54地区 (Fig.509、PL.84)

U18-22付近に位置する土坑である。SK296など、4基で構成される一群を形成する。SM1183・SM1094・SM1184が群を囲むように位置する。また、南西側のSM1155を含めた範囲では、他にSK298・SK299などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.61号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.14m×0.96m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK296 セ54地区 (Fig.509、PL.84)

U18-30付近に位置する土坑である。SK295など、4基で構成される一群を形成する。SM1183・SM1094・SM1184が群を囲むように位置する。また、南西側のSM1155を含めた範囲では、他にSK298・SK299などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.62a号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.44m×1.24m、確認面からの深さは0.47mを測る。主軸方位は長軸方向からN-85°-Wである。底面は隅丸方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形もしくは矩形を呈する。土層図から木棺痕が認められるが、平面図では記録されていない。規模は長軸2.05m×短軸0.87m、深さ0.46mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK297 セ54地区 (Fig.509)

U17-47付近に位置する土坑である。SK295など、4基で構成される一群を形成する。SM1183・SM1094・SM1184が群を囲むように位置する。また、南西側のSM1155を含めた範囲では、他にSK298・SK299などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.68号遺構と呼称されている。

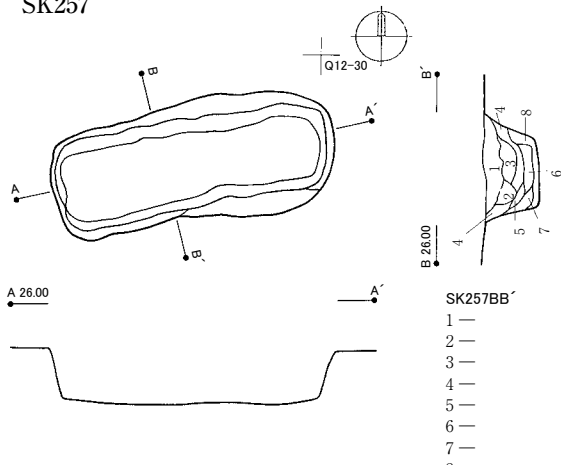
平面形状は不整楕円形で、規模は1.72m×0.84m、確認面からの深さは0.27mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は不整形で、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈する。土層図からは木棺痕は認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

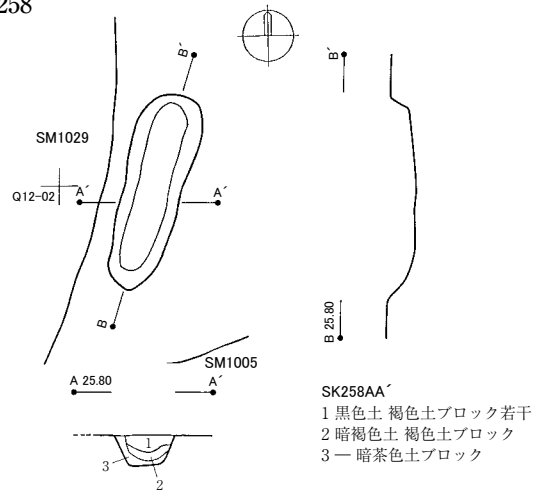
#### SK298 セ54地区 (Fig.509、PL.84)

U17-20付近に位置する土坑である。SK295など、4基で構成される一群をSM1183・SM1094・

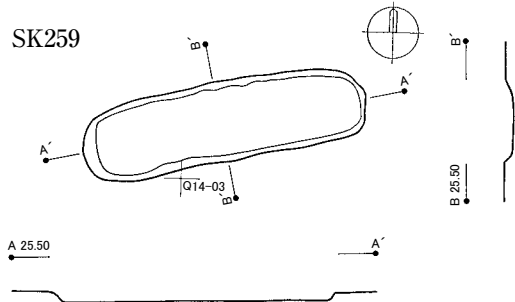
SK257



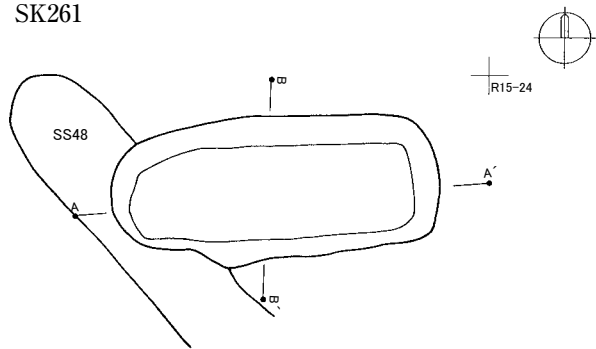
SK258



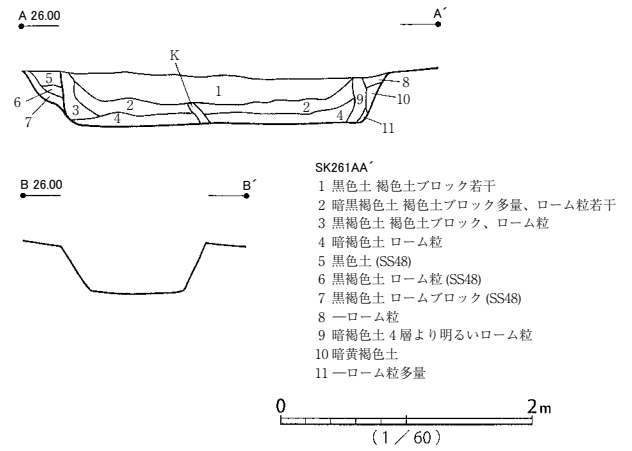
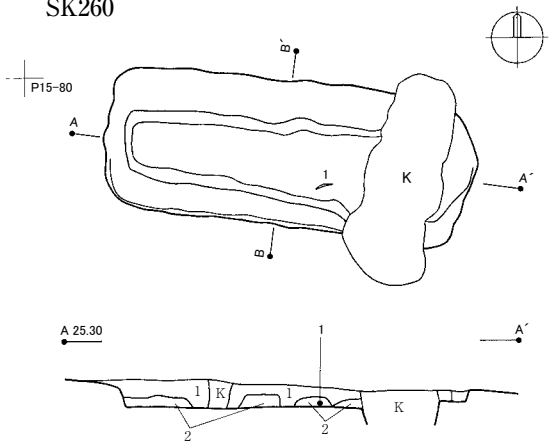
SK259



SK261



SK260



SK260AA'・BB'

- 1 暗黒褐色土 ローム粒若干
- 2 暗褐色土 褐色土、ローム粒
- 3 暗茶褐色土 ローム粒

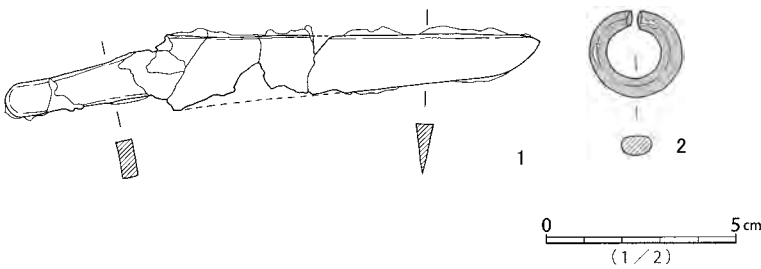
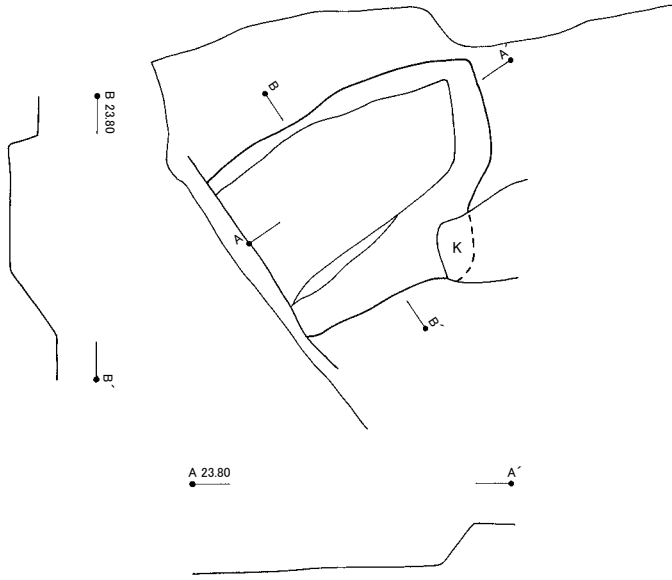
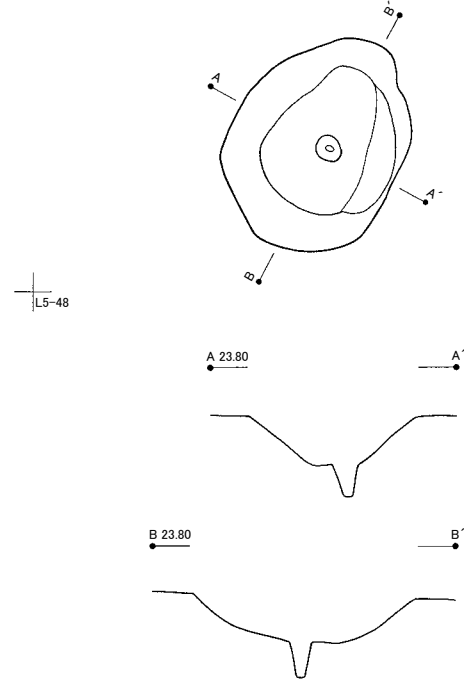


Fig.501 SK257、SK258、SK259、SK260、SK261 実測図

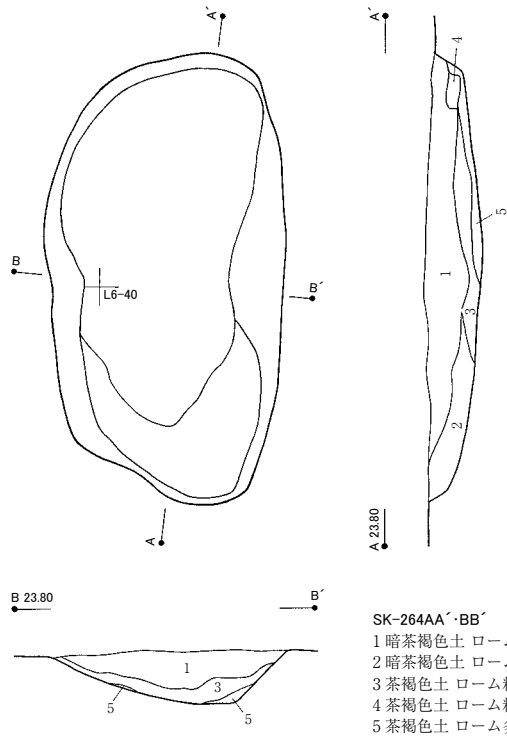
SK262



SK263



SK264



- SK-264AA'-BB'
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量やや硬質
  - 2 暗茶褐色土 ローム粒多量硬質
  - 3 茶褐色土 ローム粒多量
  - 4 茶褐色土 ローム粒多量
  - 5 茶褐色土 ローム多量・ローム粒多量

SK265

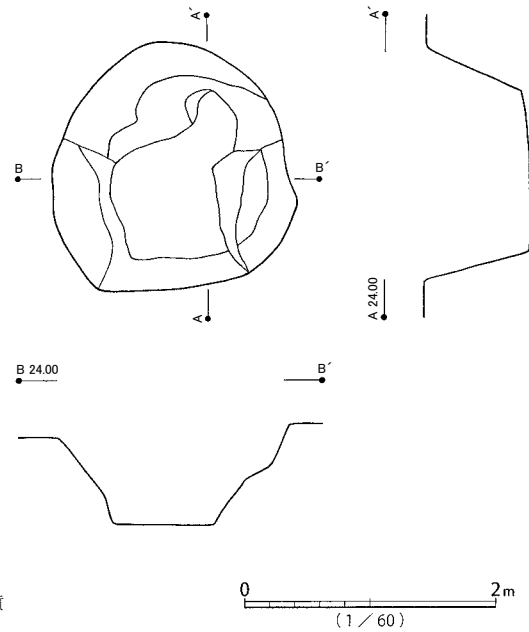
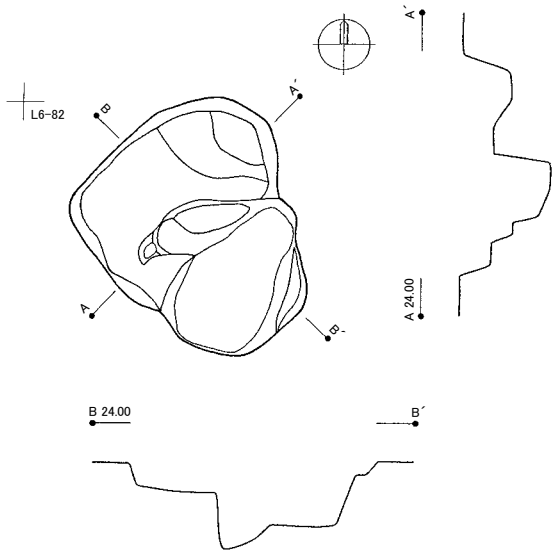
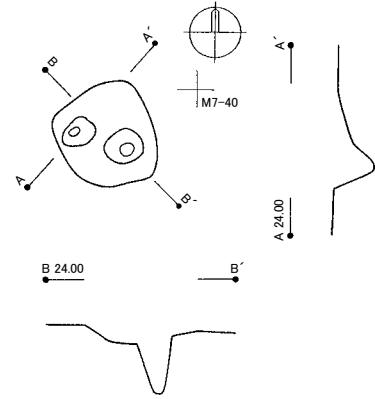


Fig.502 SK262、SK263、SK264、SK265 実測図

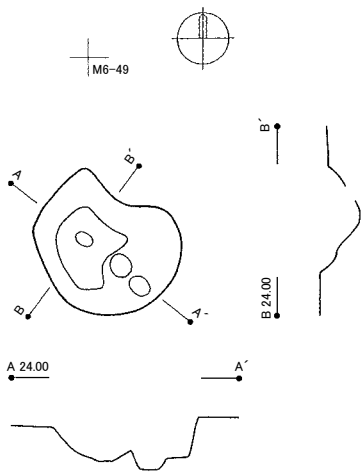
SK266



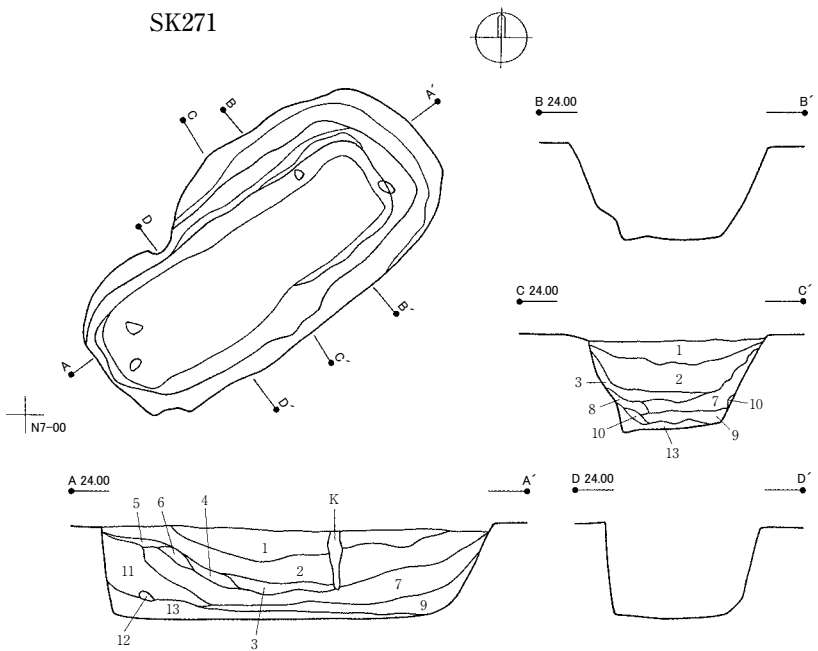
SK268



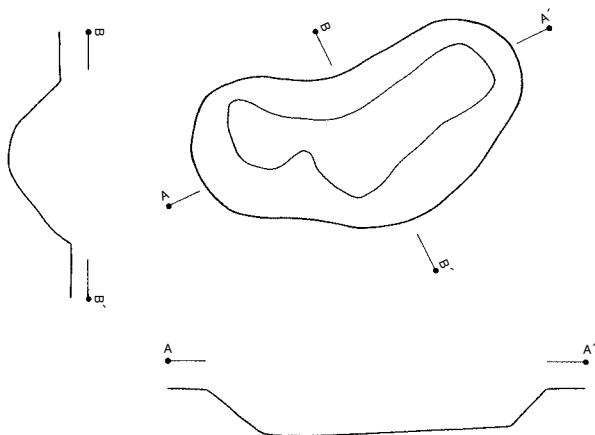
SK269



SK271



SK270



SK-271AA'-CC'

- 1 灰褐色土 2層より硬質 粘性若干有
- 2 黒褐色土 軟質 粘性若干有
- 3 暗褐色土 ローム粒 若干軟質
- 4 明褐色土 ローム粒子密集 2層より硬質無
- 5 灰茶褐色土 13層より硬質 粘性若干有
- 6 褐色土 2層より硬質 粘性有
- 7 暗褐色土 ローム粒 軟質 粘性 2層より有
- 8 褐色土 ローム粒多量 粘性やや硬質
- 9 褐色土 粘土粒 粘性若干有
- 10 黒色土
- 11 暗褐色土 ロームブロック若干
- 12 粘土塊
- 13 茶褐色土 ソフトローム粒子多量 軟質 粘性有

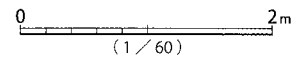


Fig.503 SK266、SK268、SK269、SK270、SK271 実測

SM1184が囲むように位置しているが、南西側のSM1155を含めた範囲では、他に本遺構やSK299などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.134号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.54m×(1.52)m、確認面からの深さは0.70mを測る。主軸方位は長軸方向からN-7°-Eである。底面は長方形を呈し平坦である。断面形状は、短軸方向では矩形を呈し、西側側壁上位にステップ状の段を有する。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは、木棺痕は認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK299 セ54地区 (Fig.509、PL.84～85)**

V18-00付近に位置する地下式改葬墓である。SK295など、4基で構成される一群を、SM1183・SM1094・SM1184が囲むように位置しているが、南西側のSM1155を含めた範囲では、他にSK298・本遺構などを内包し、より広域な群ともみなせる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.73号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は砲弾形で、規模は2.56m×1.04m、確認面からの深さは1.23mを測る。主軸方位は長軸方向からN-2°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、短軸方向では逆台形を呈する。長軸方向では、底面から南へは外反しながら開口し、北側へは仕切り状の突起を経て平坦面を設けた後、その上位に北側側壁を玄室とみられる横穴が掘り込まれている。横穴は、閉塞板は遺存していないが、はめ込んだとみられる痕跡が、側壁に観察されている。横穴底面には、骨粉が分布する範囲が認められる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK300 セ54地区 (Fig.510、PL.85)**

T20-80付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1081マウンド内に位置する。北側にはSM1071が位置するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ4-No.185号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.20m×0.85m、確認面からの深さは0.55mを測る。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。底面は不整楕円形で、断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにU字形を呈する。土層図は自然堆積を示さないが、埋葬施設とは断定できない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK301 セ54地区 (Fig.510、PL.85)**

U20-07付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、北側にSM1043、東側にSM1048が位置し、南側にSM1064が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.171号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.65m×0.92m、確認面からの深さは0.40mを測る。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向とも

に逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕を明瞭に確認できる。平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.30m×短軸0.40m、深さ0.40mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK302 セ54地区 (Fig.510、PL.85)

U20-50付近に位置する土壙である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、北側にSM1081、南側にSM1165が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.126号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.70m×0.52m、確認面からの深さは0.12mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。また、各隅（北西隅を除く）と各辺にはピットがあり、何らかの構造体を支えた柱のような機能を果たしたとみられる。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は明確には認められない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK303 セ54地区 (Fig.510、PL.86)

U20-37付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、北側にSM1043、東側にSM1048が位置し、南側でSM1064が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.135号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.65m×1.75m、確認面からの深さは0.57mを測る。主軸方位は長軸方向からN-75°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにレンズ状を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK304 セ54地区 (Fig.510、PL.86)

U21-73付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1064が西側で重複する。新旧関係は不明である。SM1048・SM1087・SM1088がやや距離をあけて位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.137号遺構と呼称されている。

平面形状は長方系で、規模は計測不能×0.90m、確認面からの深さは0.50mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Wである。底面は長方形で、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。

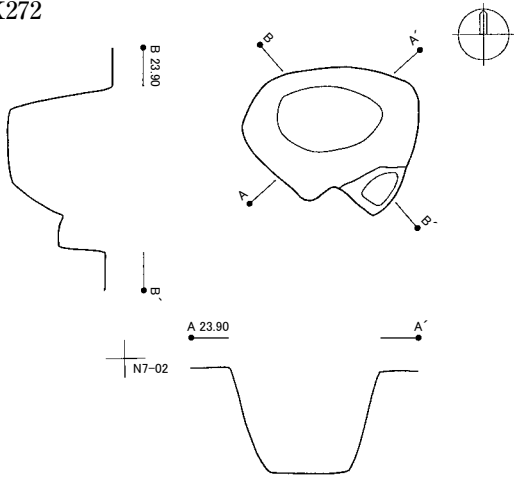
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK305 セ54地区 (Fig.511、PL.86)

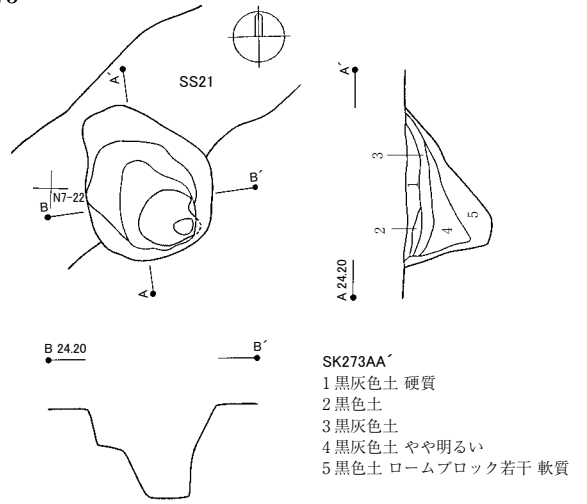
V21-70付近に位置する土壙である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、周囲にSM1064・SM1088・SM1116が近接する。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.148号遺構と呼称されている。

平面形状は不整円形で、規模は(1.52)m×(1.34)m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-51°-Eである。底面は不整円形を呈し平坦である。断面形状は、南北軸方向で逆台形に近い形状を呈し、東西方向では北西側壁面下位に横穴状の掘り込みが認められた。掘り込みの平面

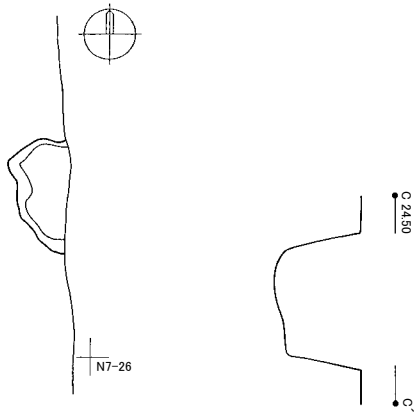
SK272



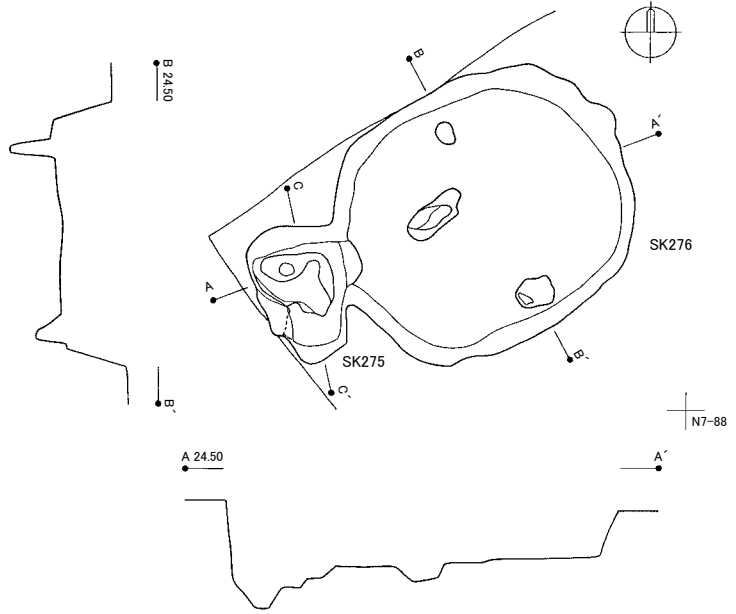
SK273



SK274



SK275・SK276



SK277

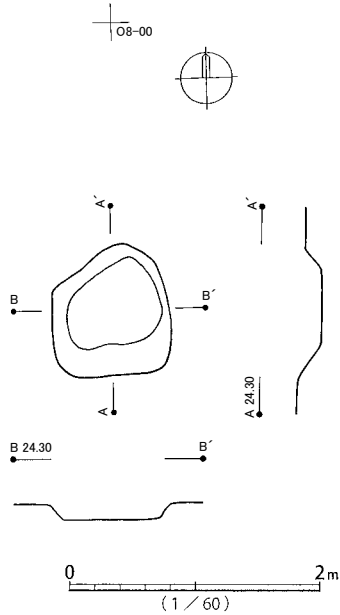


Fig.504 SK272、SK273、SK274、SK275、SK276、SK277 実測図

形は楕円形を呈し、規模は長軸1.09m×短軸0.68m、天井から底面までは0.42mで、底面は土壌底面から0.05m下位に作られている。木棺の主軸方位は長軸方向からN-69°-Eである。側壁挟込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK306 セ54地区 (Fig.511、PL.86)**

V20-38付近に位置する土壌である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1013に近接し、SM1116と重複する。新旧関係は不明である。SK305などと5基の構成で一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.143号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は(2.95)m×1.19m、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕が明瞭である。木棺痕の平面形は、規模は長軸(2.15)m×短軸0.57m

、深さ0.39mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-62°-Eである。掘り方では、底面主軸方向に溝1条が認められる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK307 セ54地区 (Fig.511、PL.86)**

V20-55付近に位置する土壌である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1116・1013に近接する。SK305などと5基の構成で一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.141号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は楕円形で、規模は2.00m×0.92m、確認面からの深さは0.39mを測る。主軸方位は長軸方向からN-72°-Eである。底面は不整形で平坦とみられる。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁下位に横穴状の掘り込みが認められる。長軸方向ではレンズ状に近い形状を呈する。土層図からは陥没とみられるレンズ状の落ち込みが認められ、下層に空隙があったことを示すとみられる。掘り込みの平面形は、規模は長軸1.75m×短軸0.75m、天井から底面までは0.21mで、底面は、竪坑底面から0.03m下位に作られている。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-70°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK308 セ54地区 (Fig.511、PL.86)**

V20-55付近に位置する土壌である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1116・1013に近接する。SK305などと共に5基の構成で一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.142号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.21m×1.10m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-56°-Eである。底面は長方形で平坦である。断面形は、短軸方向では矩形に近い逆台形を呈し、長軸方向では逆台形を呈する。平面図・断面図から木棺痕が明瞭に認められる。木棺痕の平面



形は長方形を呈し、規模は長軸1.65m×短軸0.57m深さ0.30mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-56°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK309 セ54地区 (Fig.512、PL.86)

V20-53付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1116・1013に近接する。SK305などと5基の構成で一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.140号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は2.90m×1.25m、確認面からの深さは0.80mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Eである。底面は不整楕円形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向では逆台形を呈す。土層図からは明瞭な木棺痕は認められない。

#### SK310 セ54地区 (Fig.511、PL.87)

V19-75付近に位置する土坑である。周辺は調査区南東側の南傾斜地で、SM1085・SM1013に近接し、近接した土壇・土坑は無く、単独で位置する。発掘調査時点ではセ54-No.131号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.10m×0.85m、確認面からの深さは1.14mを測る。主軸方位は長軸方向からN-80°-Eである。底面は不整形で、平坦である。断面形状は、短軸方向では砲弾形を呈し、長軸方向では矩形に近いが、西側にステップ状の平坦面が認められる。遺物は無く、帰属時期は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK311 セ54地区 (Fig.512)

W21-20付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK311などと共に12基で構成される一群を形成している。M1096と重複するが、新旧関係は不明である。

本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.169号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は(1.65)m×(0.85)mを測る。主軸方位は長軸方向からN-52.5°-Eである。底面は不整形で、凹凸が激しい。断面形状は、東西方向ではV字形と矩形を呈し、南北方向でも同様である。土層図が無いいため内部施設の有無、覆土の状況は不明である。

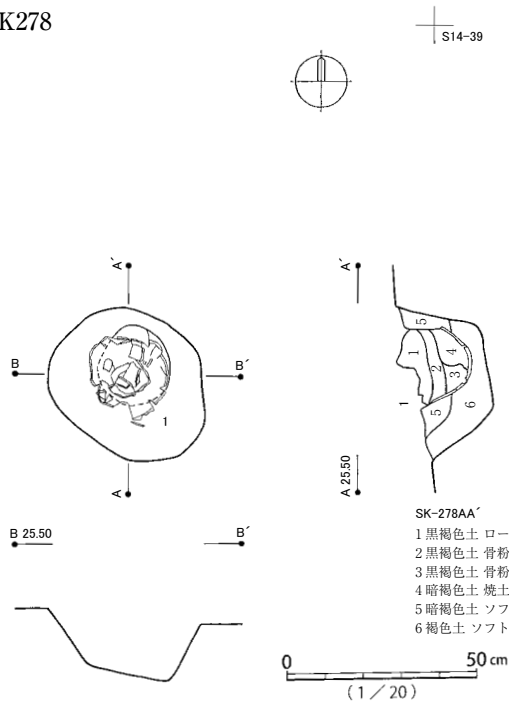
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK312 セ54地区 (Fig.512、PL.87)

W21-30付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.161号遺構と呼称されている。

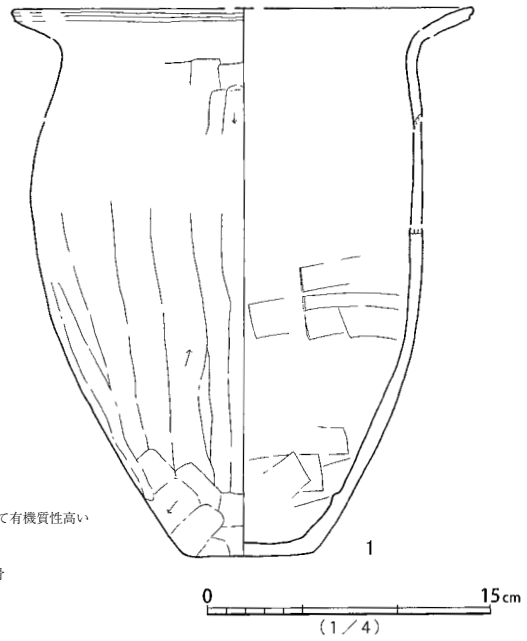
平面形状は隅丸方形で、規模は1.30m×1.00m、確認面からの深さは0.22mを測る。主軸方位は長

SK278

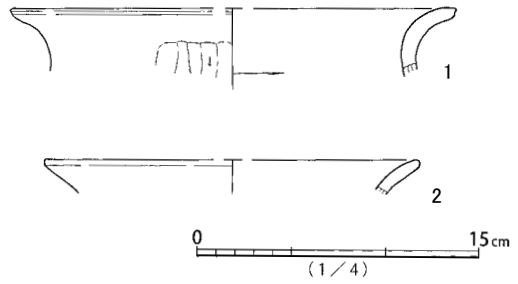
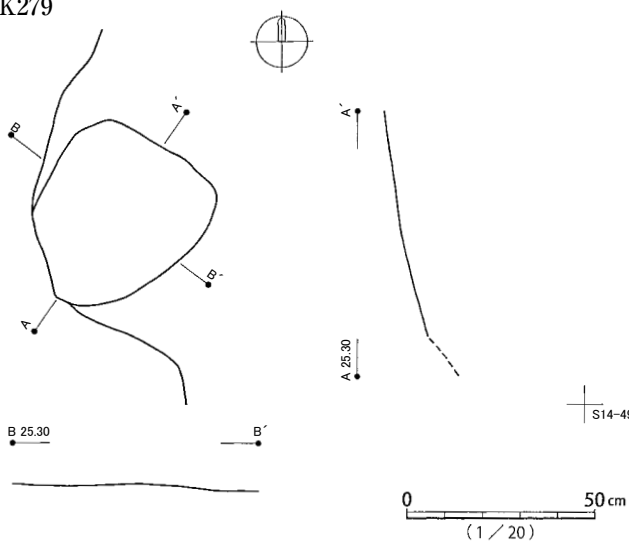


SK-278AA'

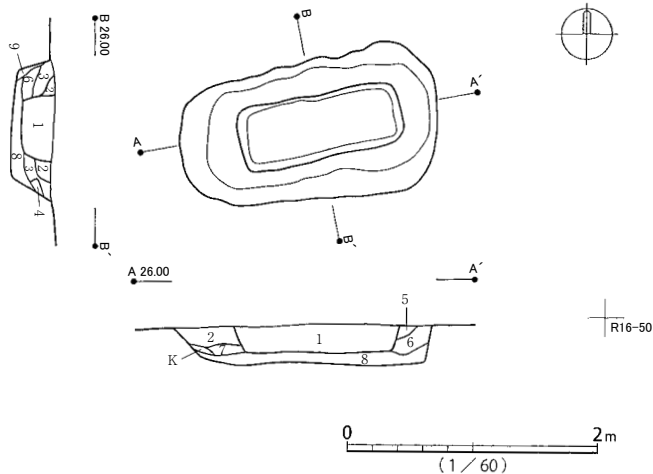
- 1 黒褐色土 ローム等極少量、蔵骨器 極めて有機質性高い
- 2 黒褐色土 骨粉若干 有機質強い
- 3 黒褐色土 骨粉多量 最も有機質性強い
- 4 暗褐色土 焼土粒若干、骨粉多量、火葬骨
- 5 暗褐色土 ソフトローム
- 6 褐色土 ソフトローム粒多量 軟質



SK279



SK280



SK-280AA'-BB'

- 1-
- 2 暗褐色土 ローム粒多量
- 3 黒褐色土 ローム粒若干 2層より多い 有機質
- 4 -ローム粒ブロック
- 5 暗褐色土 黒に近いローム粒ほとんど含まず
- 6 暗褐色土 ローム粒若干 3層より多い 有機質強い
- 7 暗褐色土 ロームブロック
- 8 -ローム粒・ロームブロック多量
- 9 褐色土 ローム多量

Fig.505 SK278、SK279、SK280 実測図

軸方向からN-56°-Eである。底面は隅丸方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK313 セ54地区 (Fig.512、PL.87)

W20-53付近に位置する土壙である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。SS77と重複し、新旧関係は本遺構が新しい。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.149号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.25m×0.98m、確認面からの深さは0.69mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、本来J字形を呈するものとみられる。長軸方向ではエレベーションのラインは、すべて有天井部分とみられる。土層図からは、木棺痕は認められない。側壁扶込土壙に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK314 セ54地区 (Fig.512、PL.87)

W20-73付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。SM1136と重複し、新旧関係は本遺構が古いとみられる。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.158号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は1.70m×1.00m、確認面からの深さは0.24mを測る。主軸方位は長軸方向からN-86°-Eである。底面は方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は不明瞭である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK315 セ54地区 (Fig.513、PL.87)

W20-55付近に位置する土壙である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.159号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.05m×0.80m、確認面からの深さは0.63mを測る。主軸方位は長軸方向からN-63°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図から木棺痕は明瞭には確認できない。覆土の状況は自然堆積とも見えるが、ここでは人為的な埋め戻しを想定する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK316 セ54地区 (Fig.513、PL.87)

W20-57付近に位置する土壙である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.160号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.25m×0.75m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-45°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈するが、短軸方向では北西側側壁下位を抉るように掘り込んでいる。土層図からは木棺痕は確認できない。側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK317 セ54地区 (Fig.513、PL.87～88)**

W20-77付近に位置する土壌である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.155号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.98m×1.45m、確認面からの深さは0.30mを測る。主軸方位は長軸方向からN-64°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕は明瞭である。木棺痕の平面形は、長方形を呈し、規模は長軸2.55m×短軸0.70m、深さ0.30mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-64°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK318 セ54地区 (Fig.513、PL.88)**

W20-97付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.156号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は計測不能×1.20m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は不整楕円形を呈し、平坦である。長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は明瞭には確認できない。覆土の状況では自然堆積を想定する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

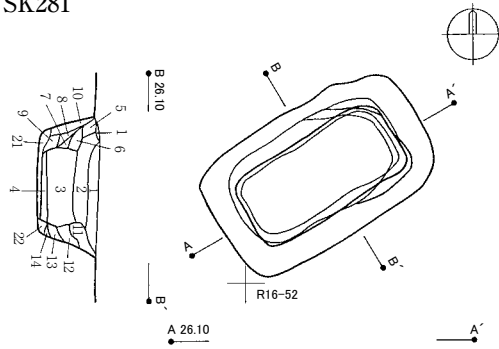
#### **SK319 セ54地区 (Fig.513、PL.88)**

W20-80付近に位置する土壌である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基でされる一群形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.151号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は楕円形で、規模は2.10m×1.25m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Eである。底面は不整形で、平坦である。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁下位において横穴状の掘り込みが認められる。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積に近い。横穴状の掘り込みの平面形は、不整楕円形で、規模は長軸2.10m×短軸0.75m、天井から底面までは0.25mで、底面から土壌底面から0.05m下位に作られている。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

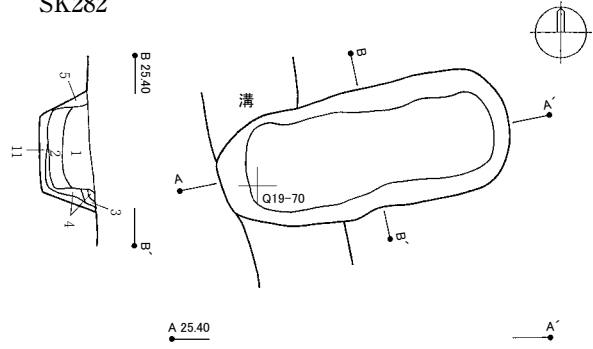
SK281



SK281AA'-BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒若干 やや砂質
- 2 暗褐色土 ローム粒多量 やや有機質性強い
- 3 黒褐色土 ローム粒少量 有機性強い
- 4 暗褐色土 ロームブロック多量 有機性強い
- 5 褐色土 ローム粒 やや多い
- 6 暗褐色土 ローム多量
- 7 黒褐色土 有機質土
- 8 褐色土 ソフトローム多量
- 9 黒褐色土 有機質土
- 10 褐色土 ロームブロック少量
- 11 黒褐色土 ローム粒若干
- 12 暗褐色土 ややローム多い
- 13 暗褐色土 ローム多量
- 14 褐色土 ロームブロック
- 15 暗褐色土 ローム粒 1層より多い
- 16 暗褐色土 ローム粒多量
- 17 暗褐色土 ロームブロック若干 有機質土
- 18 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 19 黒褐色土 ロームブロック1点含む 有機性強い
- 20 暗褐色土
- 21 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量
- 22 褐色土

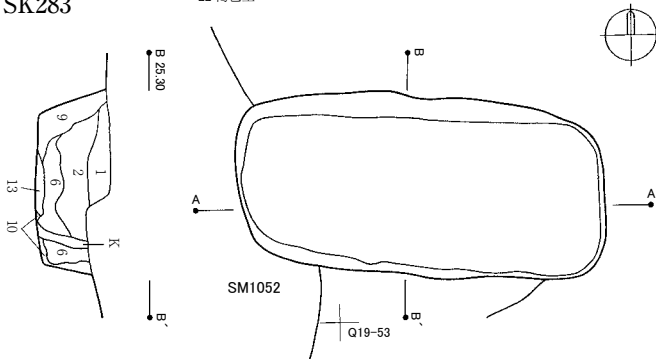
SK282



SK-282AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒極少量
- 2 黒褐色土 ローム粒少量・暗褐色土少量
- 3 暗褐色土 黒褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土 硬質
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色
- 6 黒褐色土 ローム粒少量・暗褐色土
- 7 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土
- 8 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 9 黒褐色土 2層よりやや色味強い
- 10 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
- 11 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土

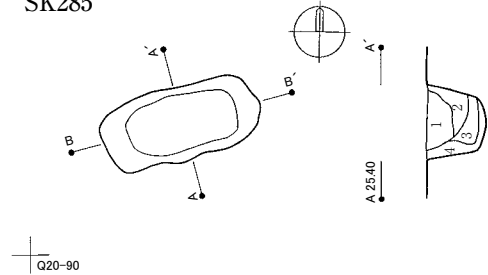
SK283



SK283AA'-BB'

- 1 暗灰褐色土 灰褐色土
- 2 黒灰褐色土 ローム粒少量
- 3 黒灰褐色土 ローム粒
- 4 -ローム粒 やや多量
- 5 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 6 黒褐色土 ローム粒少量
- 7 暗灰褐色土 ローム粒、黒褐色土
- 8 -ローム粒 やや多量
- 9 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗灰褐色
- 10 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒少量
- 11 黄褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒・ロームブロック、黒褐色土やや硬質
- 12 暗褐色土 ロームブロック やや硬質
- 13 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土

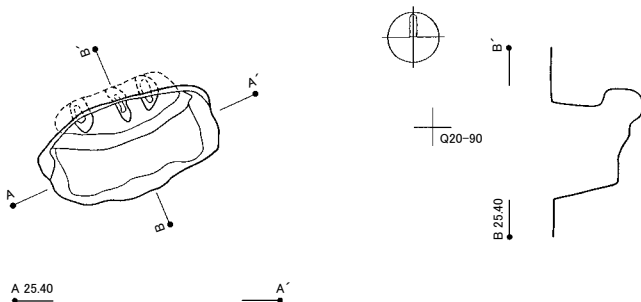
SK285



SK285AA'

- 1 黒褐色土 ローム粒、灰褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗褐色土
- 3 黒褐色土 ローム粒少量、暗褐色土
- 4 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土

SK284



SK284AA'

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、灰褐色土
- 2 黒灰褐色土 ローム粒少量、暗褐色土・黒褐色土
- 3 黒灰褐色土 ローム粒、暗褐色土・黄褐色土

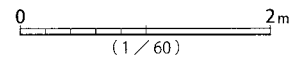
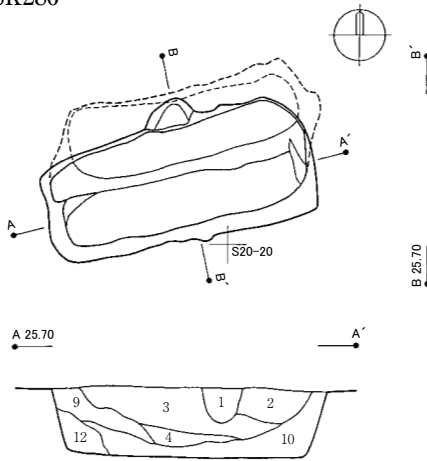


Fig.506 SK281、SK282、SK283、SK284、SK285 実測図

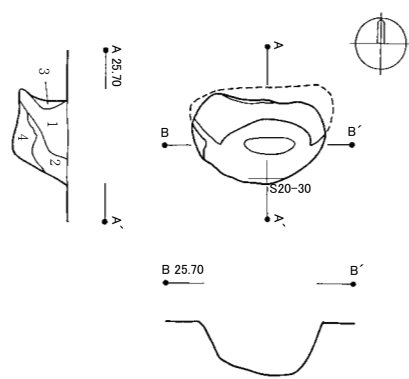
SK286



SK286AA'-BB'

- 1 黒灰褐色土 灰褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、灰褐色土
- 3 黒褐色土 ローム粒少量
- 4 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土・灰褐色土 軟質
- 6 暗褐色土・黒褐色土の混合 黄褐色土
- 7 暗褐色土 黄褐色土・黒褐色土 硬質
- 8 暗褐色土・黄褐色土の混合
- 9 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒 ローム粒3層より多い
- 10 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
- 11 黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土の混合ローム粒
- 12 黄褐色土 黒褐色土・暗褐色土硬質

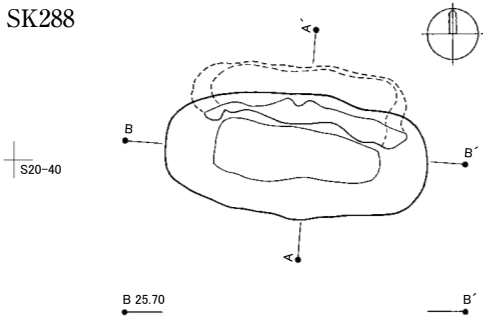
SK287



SK287AA'

- 1 黒灰褐色ローム粒
- 2 黒褐色ローム粒、暗褐色土
- 3 暗褐色黒褐色土少量・黄褐色土
- 4 暗褐色・黄褐色の混合

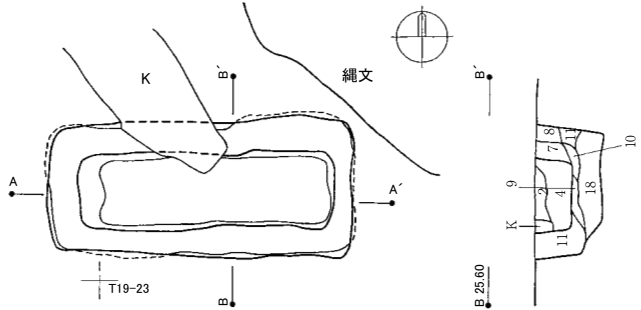
SK288



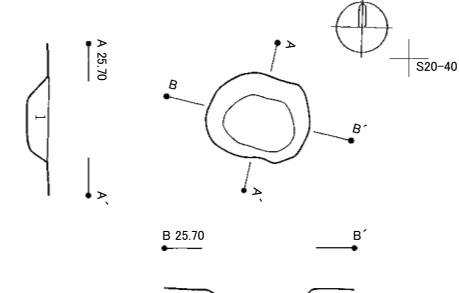
SK288AA'

- 1 黒褐色土 やや灰褐色気味 ローム粒少量
- 2 暗褐色土・黒褐色土の混合 黒褐色やや多いローム粒
- 3 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土1層より多い
- 4 黄褐色土 暗褐色土
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土
- 6 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土2層より少ない
- 7 黄褐色土 ローム粒、暗褐色土・黒褐色土

SK290



SK289

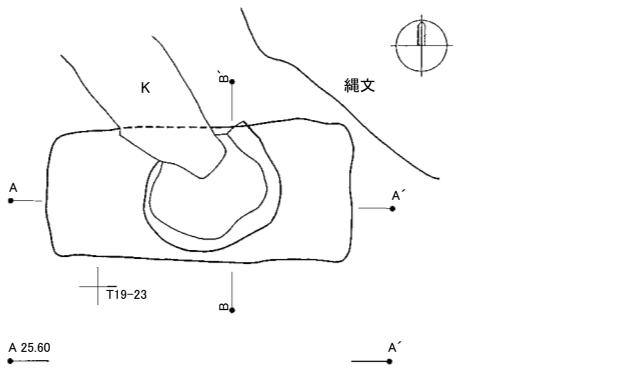


SK-289AA'

- 1 黒灰褐色ローム粒少量

SK290AA'-BB'

- 1 暗灰褐色土 ローム粒
- 2 黒灰褐色土 ローム粒少量、暗褐色土
- 3 黒褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒
- 4 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 5層より黒っぽいローム粒、黒褐色土
- 5 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土
- 6 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・暗褐色土
- 7 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土少量
- 8 暗褐色土 ローム粒(小)、黄褐色土・黒褐色土11層より黄褐色土とローム少量、粒小
- 9 黄褐色土 土少量、暗褐色土硬質
- 10 暗褐色土 ローム粒少量、黄褐色土・黒褐色土 やや軟質
- 11 暗褐色土 ローム粒(大・小)ブロック、黒褐色土・黄褐色土やや硬質
- 12 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土やや軟質
- 13 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土少量
- 14 一黒褐色土・暗褐色土、ローム粒多量・ロームブロック 硬質
- 15 黄褐色土 暗褐色土 軟質
- 16 暗褐色土 暗灰褐色土・黒褐色土、ローム粒
- 17 一ローム粒、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土16層より粒大
- 18 一黒褐色土少量・暗褐色土・黄褐色土、ロームブロック



A 25.60

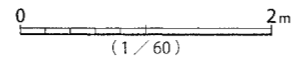
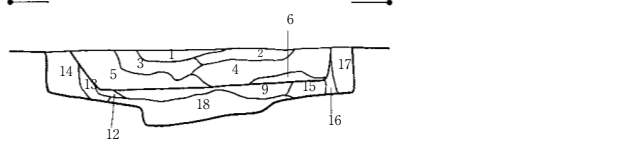


Fig.507 SK286、SK287、SK288、SK289、SK290 実測図

### SK320 セ54地区 (Fig.514、PL.88)

X20-00付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。SM1137、SK321と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.150号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は(2.44)m×1.40m、確認面からの深さは0.36mを測る。主軸方位は長軸方向からN-54°-Eである。底面は方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は明瞭には確認できない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK321 セ54地区 (Fig.514、PL.88)

X20-00付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基で構成される一群を形成している。SK320と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.152号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は2.22m×(1.30)m、確認面からの深さは0.42mを測る。主軸方位は長軸方向からN-41°-Eである。底面は不整形で平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形に近い形状を呈するとみられる。土層図からは、木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積とは異なる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK322 セ54地区 (Fig.513)

X20-05付近に位置する土坑である。調査区南端の南斜面で、SM1136周辺に位置する。周辺にはSK312など12基でされる一群形成している。本遺構は発掘調査時点ではセ54-No.154号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は1.40m×0.75m、確認面からの深さは0.21mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Eである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにレンズ状を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況も自然堆積とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK323 セ72地区 (Fig.514、PL.88)

L6-70付近に位置する土坑である。調査区東端に位置する。SS97が南側に近接し、東側にSK265が位置する。周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-026号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は1.74m×0.64m、確認面からの深さは0.09mを測る。主軸方位は長軸方向からN-87°-Eである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともにレンズ状を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の様子は自然堆積を示す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK324 セ72地区 (Fig.514、PL.88・175)

L5-75付近に位置する土壙である。調査区東端に位置する。南側にSS97、東側にSK323が位置する。周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-012号遺構と呼称されている。

平面形状は不整楕円形で、規模は2.08m×1.08m、確認面からの深さは0.31mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Eである。底面は不整長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではレンズ状を呈し、長軸方向では逆台形に近い形状を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積を示す。

側壁挟込土壙に分類したが、確定的では無い。

出土遺物は1が土師器杯で、覆土中より出土している。

### SK325 セ72地区 (Fig.514、PL.88)

L5-62付近に位置する土壙である。調査区東側に位置する。南側にSS97が位置し、周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-017号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.44m×0.90m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-5°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕は明瞭に確認できる。木棺痕の平面形は、規模は長軸2.00m×短軸0.44m

、深さ0.35mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-5°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK326 セ72地区 (Fig.514、PL.88～89)

L4-77付近に位置する土壙である。調査区東側に位置し、周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-019号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は1.60m×0.84m、確認面からの深さは0.14mを測る。主軸方位は長軸方向からN-30°-Eである。底面は隅丸方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図からは木棺痕が明瞭に確認できる。木棺痕の周囲には粘土が充填されている。小口の形状から、組合式木棺とみられる。木棺痕の平面形は方形で、規模は長軸0.88m×短軸0.32m、深さ0.14mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-34°-Eである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

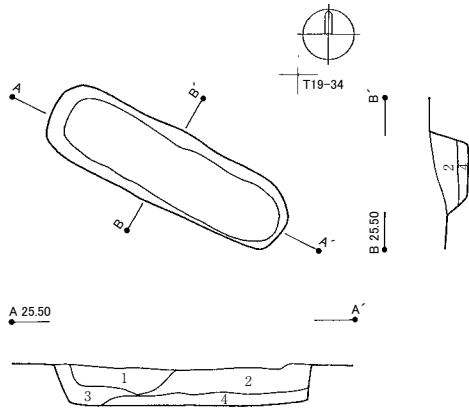
### SK327 セ72地区 (Fig.515、PL.89・175・205)

L4-53付近に位置する土壙である。調査区東側に位置し、周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-025号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形もしくは隅丸方形で、規模は2.20m×1.05m、確認面からの深さは0.26mを測る。主軸方位は長軸方向からN-83°-Eである。底面は楕円形もしくは隅丸方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況



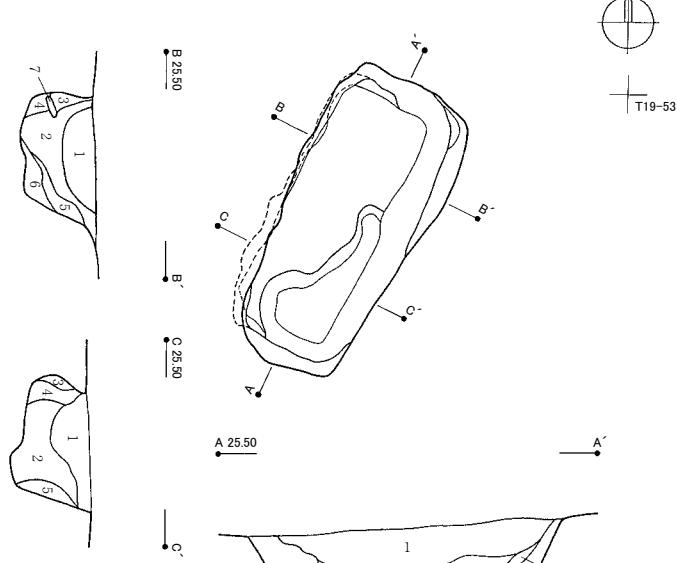
SK291



SK291AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 2 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土硬質
- 4 暗褐色土・黄褐色土の混合 黄褐色土 硬質

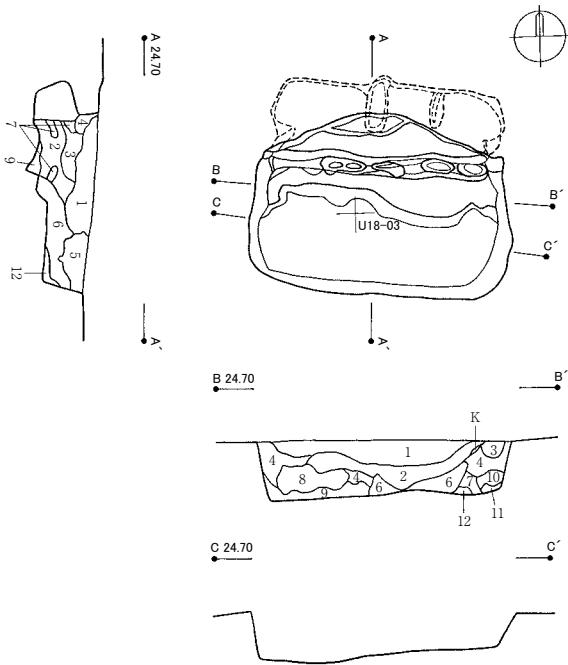
SK292



SK292AA'-BB'-CC'

- 1 黒褐色土 ローム粒極少量 黒色土の有機質土
- 2 黒褐色土 1層に近い ローム粒若干・ロームブロック
- 3 暗褐色土 ローム粒少量 有機質やや弱い
- 4 極暗褐色土 ローム 3層より多い
- 5 暗褐色土 ローム 霜降り状 土のしまりややある
- 6 褐色土 ロームブロック多量
- 7 ソフトロームブロック

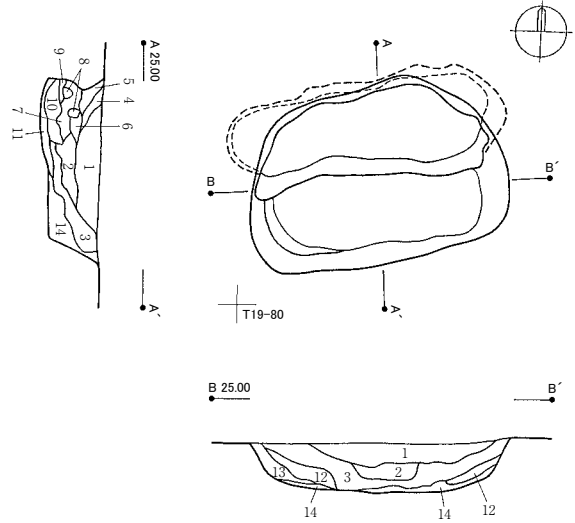
SK293



SK294AA'-BB'

- 1 黒色土 ローム粒 霜降り状有機質土
- 2 黒色土 ローム粒・ロームブロック斑に含む有機質土
- 3 黒色土 ローム粒等極少量 有機質土
- 4 黒色土 ローム粒少量 有機質土
- 5 暗褐色土 ローム・ロームブロック多量 有機質土
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックだけの層 軟質
- 7 暗褐色土 ローム粒多量 やや軟質
- 8 暗褐色土 5層よりローム粒多量 軟質
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量 有機質の割合強い
- 10 暗褐色土 ロームブロックのみ 軟質
- 11 暗褐色土 ロームブロック少量 有機質の割合強い
- 12 暗褐色土 ロームブロックのみ 軟質

SK293



SK293AA'-BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒少量 有機質性強い
- 2 黒褐色土 ローム粒やや多量 1層より有機質性強い
- 3 暗褐色土 ローム粒多量 黒色土の有機質土
- 4 暗褐色土 ローム多量 ソフトロームの量 4~9層の順に多い やや強い
- 5 暗褐色土 ローム多量 ソフトロームの量 4~9層の順に多い やや強い
- 6 暗褐色土 ローム多量 ソフトロームの量 4~9層の順に多い やや強い
- 7 暗褐色土 ローム多量 ソフトロームの量 4~9層の順に多い やや強い
- 8 ロームブロック
- 9 暗褐色土 ローム多量 ソフトロームの量 4~9層の順に多い やや強い
- 10 ソフトロームブロック 有機質性強い
- 11 黒褐色土 ハードロームブロック多量 有機質性強い
- 12 暗褐色土 3層より明るい ややローム粒多い 有機質性強い
- 13 暗褐色土 12層より黒色土強い ローム粒少量
- 14 褐色土 汚れたローム粒・ロームブロック多量

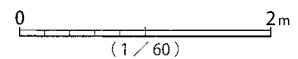


Fig.508 SK291、SK292、SK293、SK294 実測図

は自然堆積のように見えるが、遺構確認面からの深さが浅いことや、遺物の出土レベルが覆土最上層より上位のものが含まれることから、覆土下位部分の検出、つまり遺構範囲が上方に伸びていた可能性が高い。

遺物は、1が土師器壺形土器で、器表を入念なヘラミガキで仕上げているが、器壁は厚く、作りは鈍い。底部は木葉痕が付き、器形も特殊である。2が土師器甕形土器、3～6が鉄鏝である。

帰属時期は、断定できないが、土器と鉄鏝から、7世紀中葉頃の所産としておく。

#### SK328 セ72地区 (Fig.515、PL.89)

L4-75付近に位置する土坑である。調査区東側に位置し、周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。遺構中央を攪乱されている。本遺構は発掘調査時点ではセ72-018号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は2.62m×1.23m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位は長軸方向からN-56°-Wである。底面は長楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図からは木棺痕を確認できない。覆土の状況は自然堆積のように見える。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK329 セ72地区 (Fig.516、PL.89・214)

L4-85付近に位置する土坑である。調査区の東側に位置し、周辺はSK323など8基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-020号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は1.27m×0.45m、確認面からの深さは0.13mを測る。主軸方位は長軸方向からN-68°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではレンズ状を呈する。土層図からは木棺痕を確認できない。覆土の状況は自然堆積にも見えるが、遺構確認面からの深さが浅いことや、遺物の出土レベルが覆土最上層より上位に集中していることから、覆土下位部分の検出、つまり遺構範囲が上方に伸びていた可能性が高い。また、遺構規模も埋葬施設としては小さいことから、未成人の埋葬か、埋葬施設とは別の性格を持った遺構である可能性も想定される。

遺物の出土位置は、土坑西側の中央付近に集中している。遺物は、1～5が勾玉、6～19が丸玉である。勾玉は3が滑石製であるほかは、蛇紋岩製である。丸玉は、7・11・12が滑石製で、それ以外が蛇紋岩製である。

帰属時期は、断定はできないが、古墳時代後期としておく。

#### SK330 セ72地区 (Fig.516、PL.89～90)

M4-35付近に位置する土坑である。調査区東側に位置し、周辺はSK323など9基で構成された一群を形成する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-024号遺構と呼称されている。

確認面における平面形状は楕円形で、規模は2.05m×1.03m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-63.5°-Wである。底面は不整形で、平坦である。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、北側側壁下位を横穴状に掘り込んでいる。土層図から木棺痕を確認できない。覆土の状況は下位に空隙があったことを想定できる。横穴状掘り込みの平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.82m×短軸0.70m、天井から底面までは0.33mで、底面は土坑底面より0.05m下位に作られてい

る。掘り込みの主軸方位は長軸方向からN-68.5°-Wである。側壁抉込土壌に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK331 セ72地区 (Fig.517~520、PL.11・90・205・214・216)

M4-50付近に位置する土壌である。南側には主軸方向を同じくしてSK332が近接する。また、両遺構はSS84方台部中央に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-033号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.82m×1.29m、確認面からの深さは0.35mを測る。主軸方位は長軸方向からN-49°-Wである。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。平面図・土層図から木棺痕が確認できる。周囲には粘土が検出されていることから、木棺の固定に使用されたとみられる。木棺痕の平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.07m×短軸0.72m、深さ0.35mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-49°-Wである。1点ではあるが、釘とみられる鉄製品が出土していることから、木棺には釘が打たれていた可能性がある。

遺物の出土位置は中央より東半分に偏り、特に被葬者頭部付近とみられる部位に大量の玉類が集中する。

遺物は、1が釘とみられる棒状鉄製品。2~9が琥珀製棗玉、10~14が蛇紋岩製の丸玉、15~317がガラス小玉、318が白歯である。なお、ガラス小玉の30は原図に二か所ポイントが示されており、どちらが誤りか判断出来ない。そのため両方図示している。

遺構周囲にはSS84として方形周溝墓周溝がめぐっている。SS84では出土遺物として宮ノ台式の土器が出土しているが、遺構の時期を示すとは捉えていない。また、周溝の平面形のみでの時期決定も危険であると考えことから、SS84周溝が本遺構とSK332に伴う可能性を残しておく。

帰属時期は、玉類の組成で違和感が残るが、SK332との関係から、諏訪台8期の所産と考えられる。

### SK332 セ72地区 (Fig.520~521、PL.90~91・205)

M3-78付近に位置する土壌である。北側には主軸方向を同じくしてSK331が近接する。また、両遺構はSS84方台部中央に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-032号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は2.56m×1.08m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位は長軸方向からN-53°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。断面図から木棺痕が確認できるが、平面図には記録が無い。覆土の状況では、木棺を固定する際に粘土は使用されていない。木棺痕の平面形は長方形を推定する。木棺の主軸方位は計測不能である。

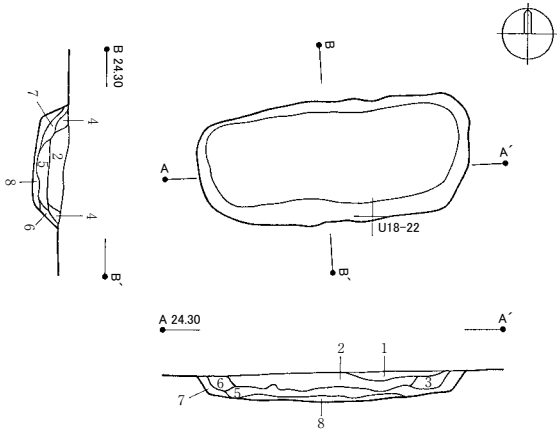
遺物の出土位置は、遺構の西寄りに鉄鏃の集中がみられるが、それ以外は散在的である。SK331を考慮すると、被葬者は東側を頭位とし、足元に副葬品を置いたものとみられる。

遺物は、1~16が鉄鏃、17は刀子である。

遺構周囲にはSS84として方形周溝墓周溝がめぐっている。SS84では出土遺物として宮ノ台式の土器が出土しているが、遺構の時期を示すとは捉えていない。また、周溝の平面形のみでの時期決定も危険であると考えことから、SS84周溝が本遺構に伴う可能性を残しておく。

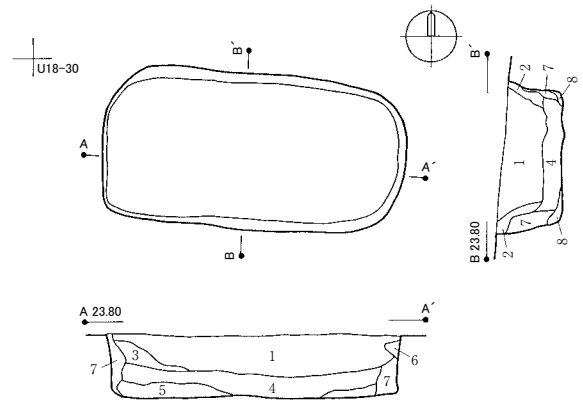
帰属時期は、鉄鏃の組成から諏訪台8期の所産と考えられる。

SK295



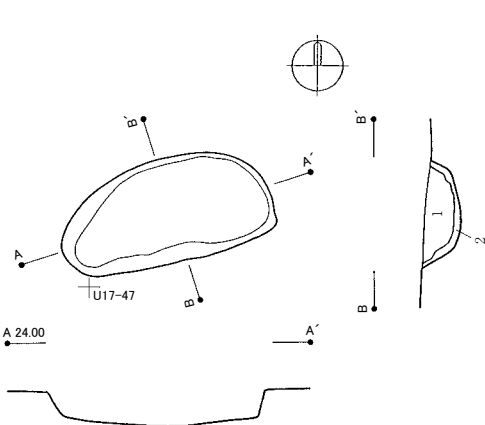
- SK-295AA'-BB'
- 1 黒褐色土 ローム粒少量 やや硬質 有機質性最も強い
  - 2 黒褐色土 ローム粒 1層より若干多い
  - 3 暗褐色土 やや有機質性が強い 6層と2層の中間層
  - 4 黒褐色土 黒色土強い ローム粒極少
  - 5 暗褐色土 ローム土と有機質 50% ずつ
  - 6 暗褐色土 ローム粒やや多量
  - 7 暗褐色土 5層より多いソフトロームブロック少量・ローム粒
  - 8 褐色土 やや硬質 よこれたローム主体

SK296



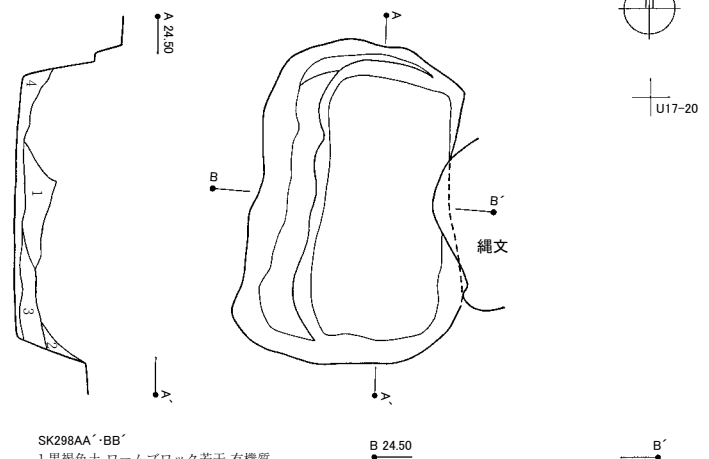
- SK-296AA'-BB'
- 1 黒褐色土 ローム粒若干 有機質性強い
  - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック やや軟質 有機質性強い
  - 3 黒褐色土 1層に似る ほとんどなし 1-4層で最も有機質性強い
  - 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック 1層よりやや多い やや硬質 有機質性強い
  - 5 暗褐色土 ローム粒多量 やや軟質 ソフトロームの影響強い
  - 6 褐色土 ソフトロームブロック ソフトロームの影響強い
  - 7 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック 5層より多い 軟質 ソフトロームの影響強い
  - 8 褐色土 ソフトロームブロック ソフトロームの影響強い

SK297



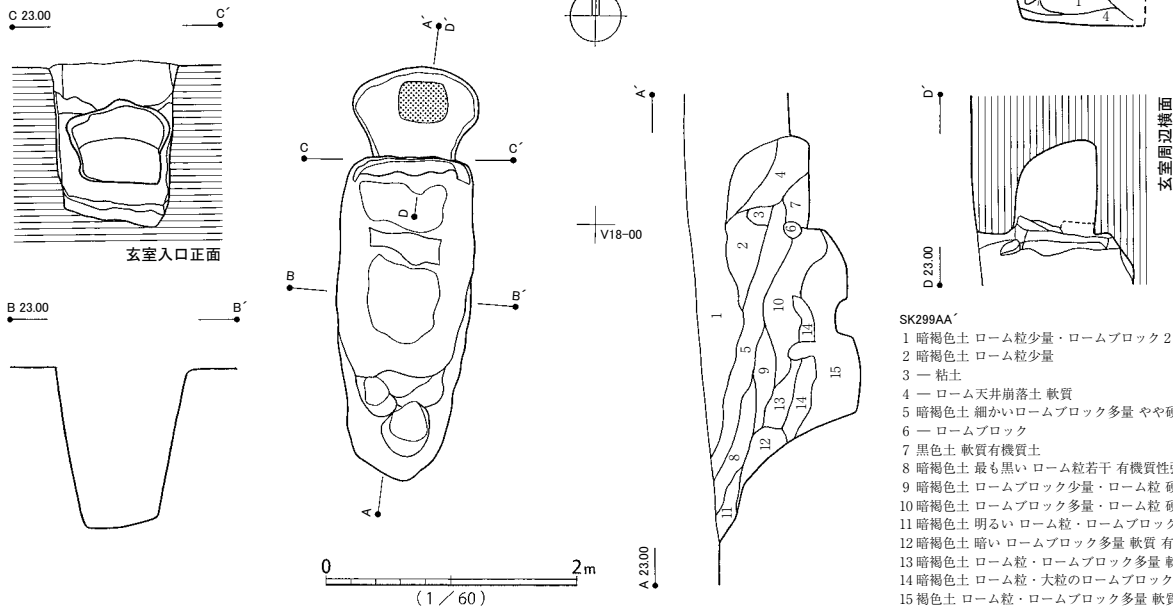
- SK297BB'
- 1 暗褐色土 黒色に近い ローム粒多量 やや硬質
  - 2 暗褐色土 ソフトローム粒多量

SK298



- SK298AA'-BB'
- 1 黒褐色土 ロームブロック若干 有機質
  - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 軟質
  - 3 暗褐色土 ローム粒多量 やや有機質
  - 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量 やや軟質

SK299



- SK299AA'
- 1 暗褐色土 ローム粒少量・ロームブロック 2-3個 やや硬質
  - 2 暗褐色土 ローム粒少量
  - 3 粘土
  - 4 ローム天井崩落土 軟質
  - 5 暗褐色土 細かいロームブロック多量 やや硬質
  - 6 ロームブロック
  - 7 黒色土 軟質有機質土
  - 8 暗褐色土 最も黒い ローム粒若干 有機質性強い
  - 9 暗褐色土 ロームブロック少量・ローム粒 硬質 最もしりある
  - 10 暗褐色土 ロームブロック多量・ローム粒 硬質 最もしりある
  - 11 暗褐色土 明るいローム粒・ロームブロック 60%
  - 12 暗褐色土 暗いロームブロック多量 軟質 有機質土多量
  - 13 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 軟質 有機質土
  - 14 暗褐色土 ローム粒・大粒のロームブロック 軟質有機質土
  - 15 褐色土 ローム粒・ロームブロック多量 軟質

Fig.509 SK295、SK296、SK297、SK298、SK299 実測図

### SK333 セ72地区 (Fig.516、PL.91)

M3-55付近に位置する土坑である。SS88、SS84間に位置する、SS89と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ72-079号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形で、規模は1.83m×0.75m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位は長軸方向からN-73°-Wである。底面は楕円形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向ではU字型で、長軸方向ではレンズ状を呈するとみられる。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積を想定する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK334 セ72地区 (Fig.521、PL.91)

M2-07付近に位置する土坑である。調査区西端部、SS93の周溝に接する方台部内に位置する。周囲に同様な土坑は認められず、単独で位置している。本遺構は発掘調査時点ではセ72-041号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.52m×1.08m、確認面からの深さは0.49mを測る。主軸方位は長軸方向からN-28°-Eである。底面は長楕円形で平坦である。断面形状は、短軸方向では底面の狭いU字型に近い形状を呈し、長軸方向では逆台形に近い形状を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。覆土の状況は自然堆積とみられる。

本遺構は単独の遺構番号により調査されており、周辺の方形周溝墓との関連性を示す記録が確認できないため、単独の土坑として報告するが、SS93、SS88に関連する土壌である可能性は残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK335 セ72地区 (Fig.521、PL.91)

N2-07付近に位置する土坑である。調査区西端部に位置し、北側でSS89と重複する。新旧関係は本遺構に対しSS89が新しいように見えるが、断定はできない。本遺構は発掘調査時点ではセ72-076号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形を復元でき、検出時の規模は2.64m×1.30m、確認面からの深さは0.52mを測る。主軸方位は長軸方向からN-7°-Eである。底面は不整楕円形を呈し、平坦であるが、中央付近に長軸方向に対し直交方向に溝1条が設けられている。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図は、木棺痕とみられる層序を示すが、3層が特徴的な堆積状況を示し、断定的では無い。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK336 セ72地区 (Fig.521)

N2-28付近に位置する土坑である。調査区西端に位置し、遺構の南半分以上が保存地区に位置する。北側にSS89が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ72-075B号遺構と呼称されている。

平面形状は楕円形とみられ、深さは0.38mを測る。主軸方位は計測不能である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK337 セ73地区 (Fig.521)

P2-47付近に位置する土坑である。調査区西端部のSM1075、SS101の間に位置する。遺構の北側半分は保存地区内に位置する。

本遺構は発掘調査時点ではセ73-042号遺構と呼称されている。

平面形は楕円形を復元するが、規模は計測不能、主軸方位は計測不能である。底面は凹凸があり、平坦面は少ない。断面形状は、長軸方向で北西側に下がるが両端部に向け浅くなる形状を呈する。土層図からは木棺痕は認められない。覆土の状況は自然堆積とみられる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK338 セ73地区 (Fig.521、PL.175～176・193)

P2-91付近に位置する土坑である。調査区西側のSS101前方部周溝内に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ73-006号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は1.56m×0.76m、確認面からの深さは0.07mを測る。主軸方位は長軸方向からN-10°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、検出した遺構深度が極めて浅いが、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈するとしておく。土層図からは木棺痕は確認できない。

遺物は、1～4がカワラケで、ミコミ部分にナデが認められる。

帰属時期は、中世後期の所産と考えられる。

### SK339 セ73地区 (Fig.522、PL.91)

Q2-77付近に位置する土坑である。調査区西側の、SS101前方後方墳南側周溝内に造られた、奈良・平安時代とみられる竪穴建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は発掘調査時点ではセ73-010号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は2.16m×1.06m、確認面からの深さは0.15mを測る。主軸方位は長軸方向からN-33°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、短軸方向では、遺存状態が悪く明瞭ではないが、長軸方向では逆台形を呈する。土層図から木棺痕は確認できない。覆土の状況も単層であるため、自然堆積か判断できない。

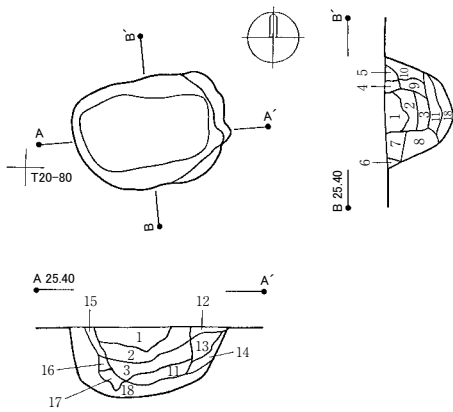
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SK340 セ73地区 (Fig.522、PL.91)

Q2-95付近に位置する土坑である。調査区西側の、SS101前方後方墳前方部南側周溝内に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ73-009号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸長方形で、規模は(2.88)m×1.48m、確認面からの深さは0.85mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。底面は隅丸長方形を呈し、平坦である。断面形状は、上下二段になっており、下段は長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈し、上段は、短軸方向で北側の段が不明瞭になるものの、長軸方向では明瞭に段を有して外傾しながら開口する。土層図からは、陥没痕とみられる層が把握できるが、木棺痕は確認できない。下段上端の形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.20m×短軸0.84mを測る。主軸方位は長軸方向からN-88°-Wである。

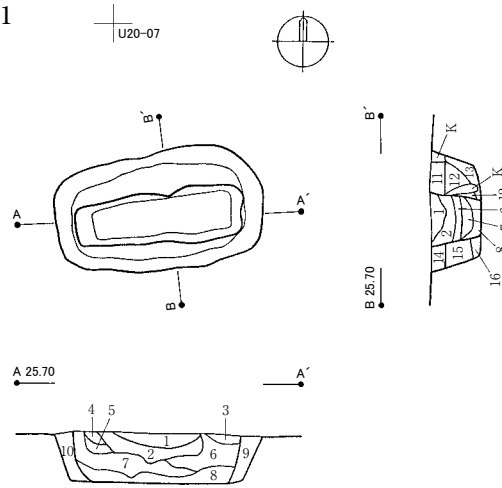
SK300



SK300AA'·BB'

- 1 暗灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土・暗褐色土 軟質
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・暗褐色土 軟質
- 3 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土・黄褐色土
- 4 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗黄褐色土
- 5 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土少量硬質
- 6 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土・暗灰褐色土
- 7 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土・黄褐色土
- 8 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土
- 9 暗褐色土 4層より暗いローム粒、暗灰褐色土・黄褐色土
- 10 暗褐色土・黄褐色土の混合 やや硬質
- 11 黄褐色土 暗褐色土 14層より軟質
- 12 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック、黒褐色土・暗褐色土やや硬質
- 13 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土
- 14 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒 硬質
- 15 暗灰褐色土 ローム粒、黒褐色土・暗褐色土 軟質
- 16 暗褐色土 ローム粒、暗灰褐色土・黄褐色土 軟質
- 17 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土 硬質
- 18 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土 やや硬質

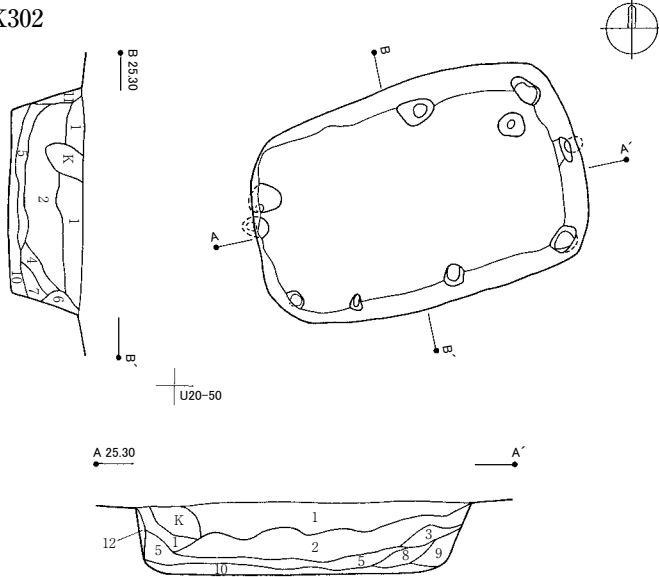
SK301



SK301AA'·BB'

- 1 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 2 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土
- 3 暗灰褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土 4層より黄褐色土多量
- 4 暗褐色土・黄褐色土の混合 暗灰褐色土
- 5 暗褐色土・暗灰褐色土の混合ローム粒
- 6 暗灰褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土・暗褐色土
- 7 暗褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土
- 8 暗褐色土 黄褐色土やや硬質
- 9 黄褐色土 ローム粒、黒褐色土・暗褐色土
- 10 黄褐色土 ローム粒、黒褐色土・暗褐色土 9層より黒褐色土やや多量
- 11 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土
- 12 暗褐色土・黄褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土
- 13 暗褐色土・黄灰褐色土の混合 黒褐色土
- 14 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土少量
- 15 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土・黄褐色土
- 16 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土

SK302



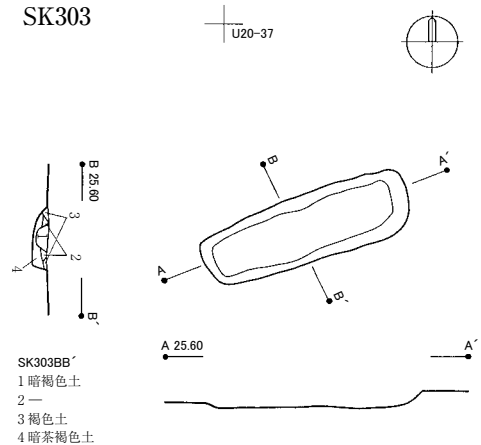
SK-302AA'·BB'

- 1 黒色土 暗黒褐色土ブロック多量
- 2 黒色土 暗黒褐色土ブロック若干、ローム粒少量
- 3 黒色土 ローム粒多量、暗黒褐色土ブロック若干
- 4 黒色土 ローム粒やや多量
- 5 黒色土
- 6 暗茶褐色土 ローム粒
- 7 黒褐色土 ローム粒多量、褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 ローム粒多量
- 10 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック、褐色土
- 11 褐色土 ローム粒多量
- 12 褐色土 11層より暗いローム粒多量

SK-304AA'·BB'

- 1 暗灰褐色土 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土 ローム粒
- 3 暗灰褐色土
- 4 暗灰褐色土 ローム粒
- 5 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土
- 6 一ロームブロック、黒褐色土少量・暗褐色土・黄褐色土 8層より暗褐色土多い
- 7 暗褐色土・黄褐色土・暗灰褐色土の混合 ローム粒少量
- 8 一ロームブロック、黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土
- 9 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土少量・黄褐色土

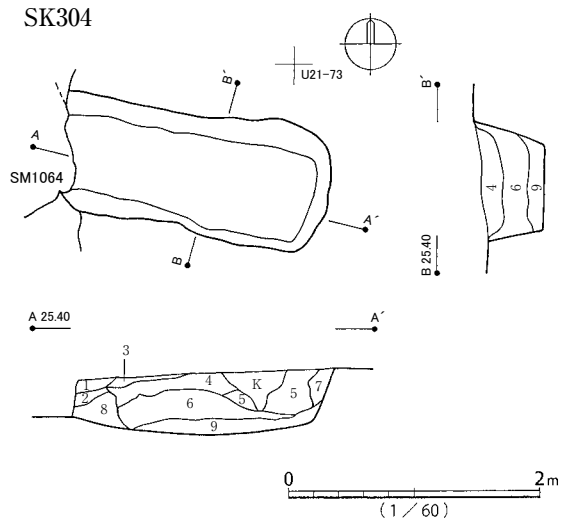
SK303



SK303BB'

- 1 暗褐色土
- 2 一
- 3 褐色土
- 4 暗茶褐色土

SK304



SM1064

Fig.510 SK300、SK301、SK302、SK303、SK304 実測図

本遺構は単独の遺構番号により調査されており、SS101前方後方墳との関連性を示す記録が確認できないため、単独の土壙として報告するが、SS101に関連する土壙である可能性は残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK341 セ73地区 (Fig.522、PL.91～92)**

R3-28付近に位置する土壙である。調査区西側の、SS101前方後方墳後方部南側周溝内に位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ73-008号遺構と呼称されている。

平面形状は隅丸方形で、規模は3.12m×(1.68)m、確認面からの深さは0.70mを測る。主軸方位は長軸方向からN-90°である。底面は長方形を呈し、平坦である。上下二段になっており、下段は長軸方向・短軸方向ともに矩形を呈し、上段は、確認面から浅いため、明瞭ではないが外傾しながら開口するとみられる。

土層図からは、木棺痕は確認できないが、覆土の状況は陥没痕とみられる層位を明瞭に示している。下段上端の平面形は長方形を呈し、規模は長軸2.16m×短軸1.00mを測る。木棺の主軸方位は長軸方向からN-89°-Eである。

本遺構は単独の遺構番号により調査されており、SS101前方後方墳との関連性を示す記録が確認できないため、単独の土壙として報告するが、関連性を否定するものではないことから、SS101に伴う土壙である可能性が残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### **SK342 セ73地区 (Fig.522、PL.92・205)**

R4-12付近に位置する土坑である。調査区東側のSM1011前方後方墳後方部北側周溝と重複する。遺構の北側部分は保存地区内に位置するとみられる。本遺構は調査時点ではセ73-027号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は計測不能、確認面からの深さは0.72mを測る。主軸方位は計測不能である。底面は不整形で、平坦面は少ない。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに側壁が内湾しながら開口する形体を採る。土層図は無いため、木棺痕は確認できない。

出土遺物は1が鉄鏃で、底面直上より出土している。

#### **SK343 セ73地区 (Fig.522、PL.92)**

R3-53付近に位置する土壙である。調査区南側の南西斜面、SD28に近接して位置する。遺構の北側が未調査範囲に含まれ、全体を検出していない。本遺構は発掘調査時点ではセ73-012号遺構と呼称されている。

平面形状は方形で、規模は2.36m、確認面からの深さは0.66mを測る。主軸方位は、検出した遺構の規模から、これを長軸方向とし、N-59°-Wを測る。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向で矩形を呈する。土層図の3層のあり方から、これを木棺痕と想定しているが、断定的では無い。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。



#### SK344 セ73地区 (Fig.523、PL.92)

S5-13付近に位置する土壌である。調査区東端の南西斜面に、SS102周溝と重複して位置する。新旧関係は、断面図上では本遺構に対してSS102が新しいと見えるが、断定できない。本遺構西側にはSK345・SK346が、南側にはSK213が近接し、何れもSS102周溝と重複した位置に造られている。北側には保存地区が広がる。本遺構は発掘調査時点ではセ73-022号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は1.78m×0.82m、確認面からの深さは0.45mを測る。主軸方位は長軸方向からN-39°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。長軸方向の土層図から木棺痕を確認できるが、短軸方向では判然としない。そのため平面形、規模等は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK345 セ73地区 (Fig.523、PL.93)

S5-13付近に位置する土壌である。調査区東端の南西斜面に、SS102周溝と重複して位置する。新旧関係は、断面図上では本遺構に対してSS102が新しいと見えるが、断定できない。本遺構西側にはSK346が、南側にはSK213が、北側にはSK344が近接し、何れもSS102周溝と重複した位置に造られている。北側には保存地区が広がる。本遺構は発掘調査時点ではセ73-023号遺構と呼称されている。

平面形状は長方形で、規模は1.70m×0.83m、確認面からの深さは0.54mを測る。主軸方位は長軸方向からN-77°-Eである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈する。土層図から、木棺痕が確認できるが、平面形は復元できない。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK346 セ73地区 (Fig.523、PL.93)

S5-40付近に位置する土壌である。調査区東端の南西斜面に、SS102周溝と重複して位置する。新旧関係は、断面図上では本遺構に対してSS102が新しいと見えるが、断定できない。本遺構東側にはSK344・SK345が、南側にはSK213が近接し、何れもSS102周溝と重複した位置に造られている。本遺構は発掘調査時点ではセ73-019号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形であるが、方形を基調とする。規模は2.64m×1.42m、確認面からの深さは0.96mを測る。主軸方位は長軸方向からN-33°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦である。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに逆台形を呈するが、長軸方向では、その上位で屈曲し、外傾しながら開口する。木棺痕は明瞭ではなく、判断に迷う。長軸方向の13・15層を根拠にこの範囲を木棺痕としておく。

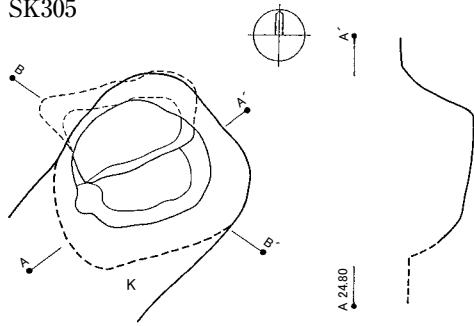
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK347 099地区 (Fig.523)

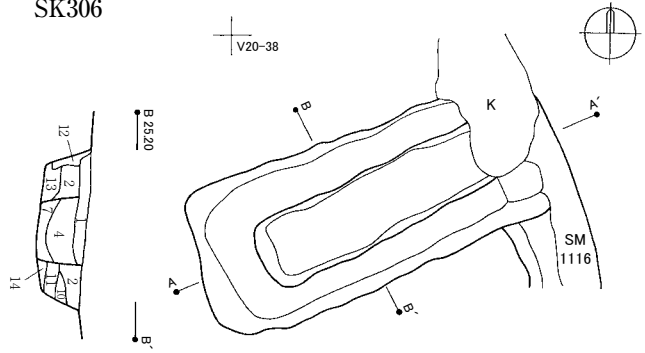
位置不明の土壌である。本遺構は発掘調査時点では099-3167号遺構と呼称されている。

平面形状は長楕円形で、規模は2.54m×1.32m、確認面からの深さは0.48mを測る。主軸方位は長軸方向からN-58°-Eである。底面は不整楕円形を呈し、平坦であるが、長軸に沿って、等間隔を意識したとみられるピットが4基配されている。断面形状は、短軸方向ではJ字形を呈し、南側側壁下位に

SK305



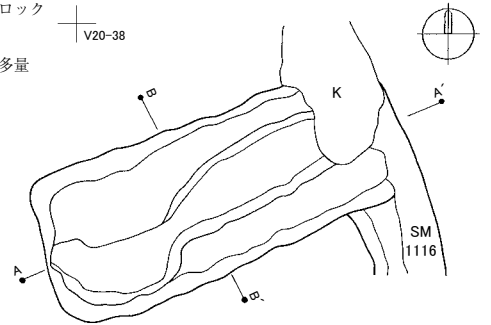
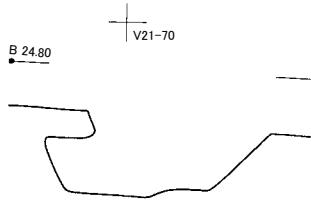
SK306



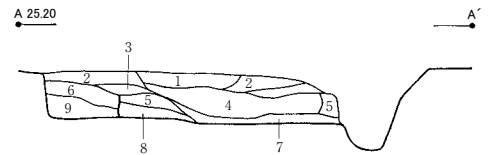
SK306AA'-BB'

- 1 暗褐色土 小ロームブロック
- 2 暗黒褐色土
- 3 -
- 4 暗黒褐色土 ローム粒多量
- 5 黒褐色土
- 6 黒色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土 黒色土
- 10 褐色土
- 11 暗黒褐色土
- 12 茶褐色土
- 13 黒色土
- 14 褐色土 硬質

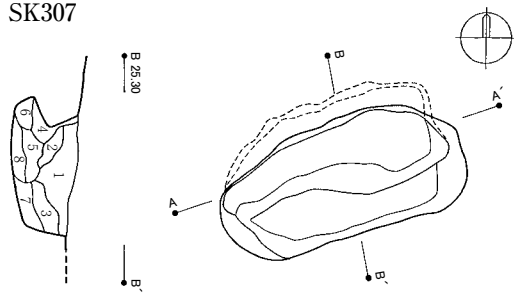
B 24.80



A 25.20



SK307

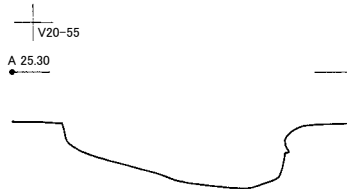


SK307BB'

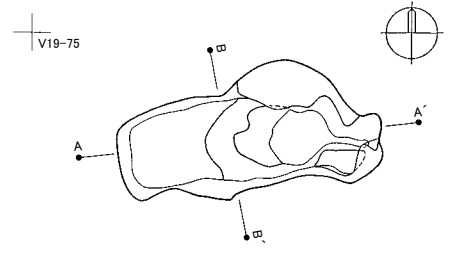
- 1 暗黒色土
- 2 暗黒褐色土
- 3 黒褐色土 ローム粒多量
- 4 黒褐色土
- 5 -
- 6 暗褐色土
- 7 黒褐色土 ローム粒
- 8 暗褐色

V20-55

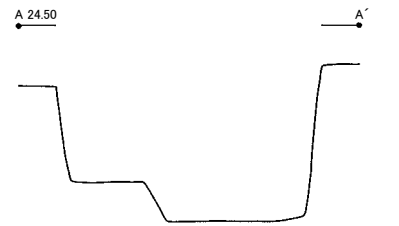
A 25.30



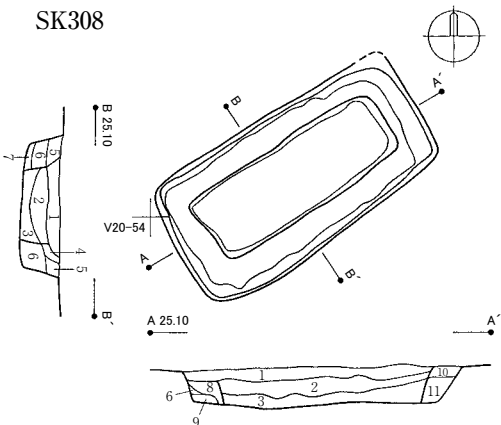
SK310



A 24.50



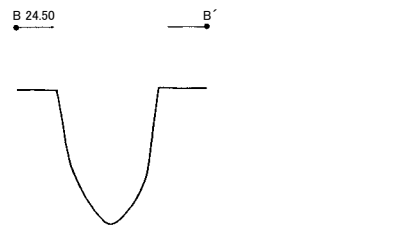
SK308



SK308AA'-BB'

- 1 暗黒褐色土
- 2 暗黒褐色土 ローム粒少量
- 3 暗黒褐色土 褐色土
- 4 暗茶色土 ローム粒
- 5 暗褐色土
- 6 黒色土
- 7 -ロームブロック
- 8 暗褐色土 ローム粒・小ロームブロック
- 9 暗茶色土 ローム土
- 10 暗黒褐色土 ローム粒多量
- 11 暗茶褐色小ロームブロック

B 24.50



0 2m  
(1/60)

Fig.511 SK305、SK306、SK307、SK308、SK310 実測図

において横穴状の掘り込みが認められる。長軸方向では逆台形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。横穴状の掘り込みは、平面形が不整楕円形で、土壇底面とは未分化の状態である、規模は長軸2.47m×短軸0.90m、天井から底面までは0.25mで、底面は土壇底面から0.05m下位に作られている。木棺の主軸方位は長軸方向からN-63°-Eである。側壁抉込土壇に分類される。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK348 099地区 (Fig.523)

位置不明の土壇である。本遺構は発掘調査時点では099-3177号遺構と呼称されている。

平面形状は不整長方形で、規模は2.22m×2.07m、確認面からの深さは0.87mを測る。主軸方位は長軸方向からN-40°-Eである。底面は不整長方形を呈し、平坦であるが、底面北西側に長軸方向に走る僅かな段差が認められ、その北西側は、平面形長方形を呈し、規模は長軸2.30m×短軸1.03m、深さ1.05mを測り、テラス状を示す。主軸方位は長軸方向からN-41°-Eである。断面形状は、長軸方向・短軸方向ともに矩形を呈する。土層図からは木棺痕は確認できない。側壁抉込土壇に分類したが、確定的では無い。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK349 セ28地区 (Fig.527、PL.205)

Q18-20付近に位置する土坑である。北側にSD12が位置する。本遺構は発掘調査時点ではセ73-005号遺構と呼称されている。

平面形状は不整形で、規模は1.20m×0.86m、主軸方位は長軸方向からN-61°-Eである。記録類が限られ、詳細は不明である。SD12の平面図に上端のみ掲載のため個別図面は無い。鎌とみられる鉄製品1点の出土が認められる。遺物は所在不明。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SK350 099地区 (Fig.523)

K8-86付近に位置する土壇である。調査区北西部において、SS11方台部に位置する。本遺構は発掘調査時点では099-4036(SS-11)の主体部として扱われていたが、現場図面に「単独遺構、終末期？」の記載があり、また、近接するSM1026(円墳)の周溝のあり方が、本遺構の主軸方位との関連性の強さがあると判断したことから、単独の土壇として扱うこととした。

平面形状は長方形で、規模は2.23m×1.00m、確認面からの深さは0.32mを測る。主軸方位は長軸方向からN-66°-Wである。底面は長方形を呈し、平坦であるが、底面南側に長軸方向に走る僅かな段差が認められ、その北側は、平面形が長方形を呈し、規模は長軸2.18m×短軸0.74m、深さmを測る。主軸方位は長軸方向からN-66°-Wである。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

## 2 溝

### SD1 064地区 (Fig.524)

G5-53付近の南西斜面に位置する溝跡である。平面形状はL字形を呈し、規模は全長6.40m×幅1.6mを測る。平坦面を造成するための区画溝とみられる。

帰属時期は、SD2・SD3に近い時期が考えられる。

### SD2 064地区 (Fig.524)

G5-88付近の南西斜面に位置する溝跡である。平面形状は、L字形を呈し、規模は全長11.68m×幅0.96mを測る。平坦面を造成するための区画溝とみられる。

帰属時期は、SD1・SD3に近い時期が考えられる。

### SD3 064地区 (Fig.524)

G4-85付近の南西斜面に位置する溝跡である。平面形状は、L字形を呈し、規模は全長10.40m×幅1.28mを測る。平坦面を造成するための区画溝とみられる。

遺物は1が常滑片口鉢Ⅱ類8型式であり、覆土中より出土している。

帰属時期は、14世紀後半の所産と考えられる。

### SD4 064地区 (Fig.525)

F5-88付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、東西方向に伸びる。規模は全長20.60m×幅1.00mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SD5 064地区 (Fig.525)

F7-55付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、南北方向に伸びる。規模は全長18.50m×幅1.82mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SD6 064地区 (Fig.525)

F7-75付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、南北方向に伸びる。規模は全長12.60m×幅0.72mを測る。

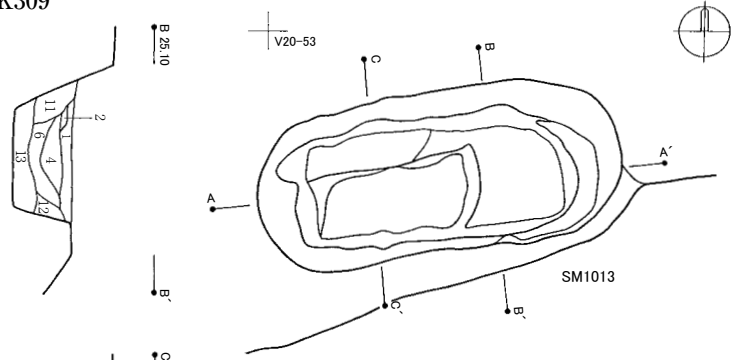
出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SD7 064地区 (Fig.525)

F6-80付近に位置する溝跡である。平面形状は、SM1057墳丘内に位置し、主体部と重複する。規模は全長3.04m×幅0.88mを測る。

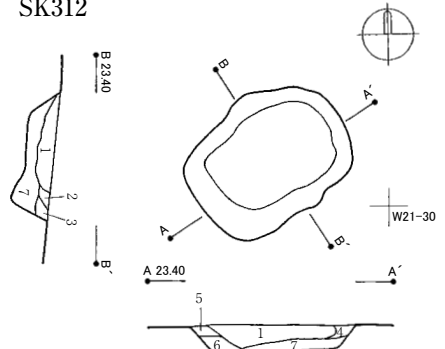
本遺構は全体図作成時に他周辺図面と不整合が生じたため、平面図のグリッドを補正して作図している。

SK309



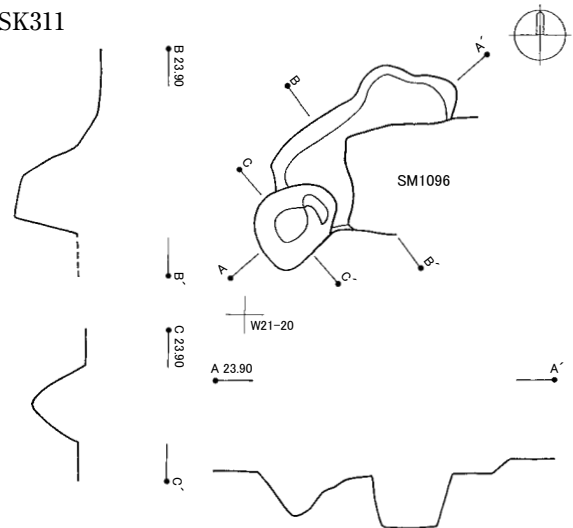
- SK309AA'-BB'-CC'
- 1 暗褐色土 ローム粒多量、褐色土
  - 2 暗茶色土
  - 3 黒色土 ローム粒多量
  - 4 暗茶色土 ローム粒多量、褐色土
  - 5 暗褐色土
  - 6 暗褐色土 ローム粒多量 硬質
  - 7 褐色土 ローム粒多量 軟質
  - 8 暗褐色土 ローム粒多量・小ロームブロック軟質
  - 9 - ローム粒軟質
  - 10 暗黒褐色土 ローム粒・小ロームブロック
  - 11 暗褐色土 ローム粒多量・小ロームブロック 軟質
  - 12 暗褐色土
  - 13 暗茶褐色土 ローム粒・大ロームブロック

SK312

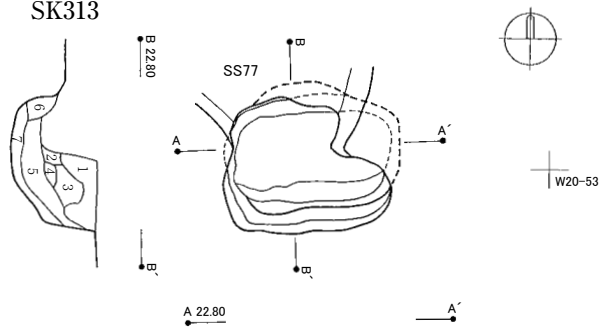


- SK312AA'-BB'
- 1 黒褐色土 やや灰色 軟質
  - 2 黒褐色土 黄褐色土
  - 3 暗褐色土 黒褐色土・黄褐色土
  - 4 黒褐色土
  - 5 暗褐色土・黒褐色土の混合 黄褐色土 少量
  - 6 暗褐色土 黒褐色土・黄褐色土
  - 7 黄褐色土 暗褐色土

SK311

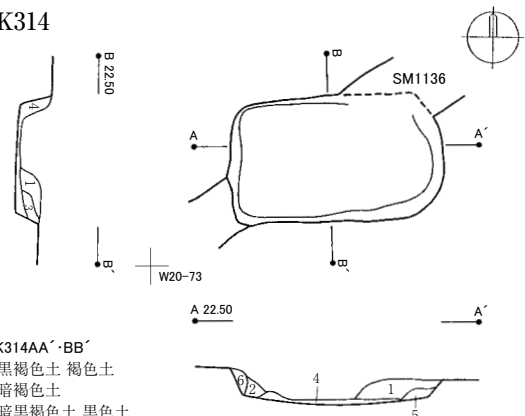


SK313



- SK313BB'
- 1 暗黒褐色土 ローム粒・ロームブロック、褐色土粒・黒色土ブロック
  - 2 黒色土 ロームブロック
  - 3 褐色土 ロームブロック多量
  - 4 黒色土 ロームブロック
  - 5 褐色土 ロームブロック、暗黒褐色土ブロック
  - 6 褐色土 ローム粒多量、ロームブロック若干
  - 7 褐色土 ロームブロック

SK314



- SK314AA'-BB'
- 1 黒褐色土 褐色土
  - 2 暗褐色土
  - 3 暗黒褐色土 黒色土
  - 4 褐色土
  - 5 暗黒褐色土 黒色土
  - 6 暗黒褐色土

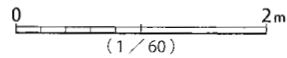


Fig.512 SK309、SK311、SK312、SK313、SK314 実測図

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD8 099地区 (Fig.526)

K4-48付近に位置する溝跡である。遺構は北側の調査区外及び。平面形状は北側に屈折、或は湾曲する可能性が高く、周溝墓や古墳周溝である可能性が残る。規模は全長(6.40)m×幅1.20mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD9 099地区 (Fig.526)

L5-04付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、規模は全長4.24m×幅0.81mを測る。方形周溝墓周溝の可能性もある。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD10 099地区 (Fig.526)

M10-84付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的だが、SM1004を避けるように僅かに湾曲する。規模は全長10.56m×幅1.04mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD11 SW83地区 (Fig.527)

V22-50付近に位置する溝跡である。平面形状は、南西から北東方向に直線的に伸び、SD21と平行だが、屈曲し、北へ伸びる。規模は全長17.40m×幅0.60mを測る。SM1008前方後方墳の増築、もしくは増築後に関連した遺構である可能性が残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD12 セ28地区 (Fig.527)

R17-00付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で東西方向に伸びる。東側はSW80・81地区となり、延伸するか不明である。南北方向に伸びるSD14と接続する。規模は全長20.00m×1.22mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD13 セ28地区 (Fig.527)

R17-00付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で東西方向に伸びる。東側はSW80・81地区となり、延伸するか不明である。西側はSS50付近で記録が無く、延伸するか断絶するか不明である。南北方向に伸びるSD14・SD15と接続する。規模は全長52.00m×1.00mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD14 セ28地区 (Fig.527)

R17-00付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、南北方向に伸びる。北端でSD12と、

南側でSD13と接続する。規模は全長53.20m×幅1.10mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD15 セ28地区 (Fig.527)

R16-00付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、南北方向に伸びる。南端でSD13に接続する。北側は099地区との調査区境界付近で記録が無くなる。規模は全長32.60m×幅0.73mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD16 セ28地区 (Fig.528)

S9-07付近に位置する溝跡である。SM1003後円部墳丘下に位置する。平面形状は直線的で、規模は全長7.60m×幅0.95mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD17 セ28地区 (Fig. 528)

T9-50付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、規模は全長1.65m×0.58mを測る。方形周溝墓の周溝である可能性が残る。

#### SD18 セ28地区 (Fig.529)

S8-09付近に位置する溝跡である。SM1003前方部墳丘下に位置する。平面形状は、規模は全長8.56m×幅1.18mを測る。現場段階では方形周溝墓として扱われていたが、平面プランが成立しないため溝とした。しかし、方形周溝墓の周溝である可能性は残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD19 セ54地区 (Fig. 528)

S18-77付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で規模は全長4.00m×幅0.64mを測る。方形周溝墓の可能性が高いが、平面プランが成立しないため溝としている。しかし方形周溝墓の周溝である可能性は残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD20 セ54地区 (Fig.529)

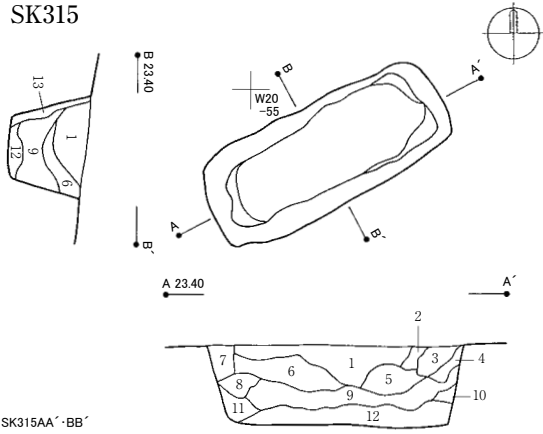
X20-00付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で規模は全長4.30m×0.83mを測る。平面プランが成立しないため溝としている。しかし方形周溝墓の周溝である可能性は残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD21 セ54地区 (Fig.530)

W21-00付近に位置する溝跡である。南東斜面に位置し、平面形状はL字形を呈する。西側は斜面に直交方向に伸び、直角に屈折して等高線と平行に南東方向に伸びる。規模は全長32.80m×幅0.64m

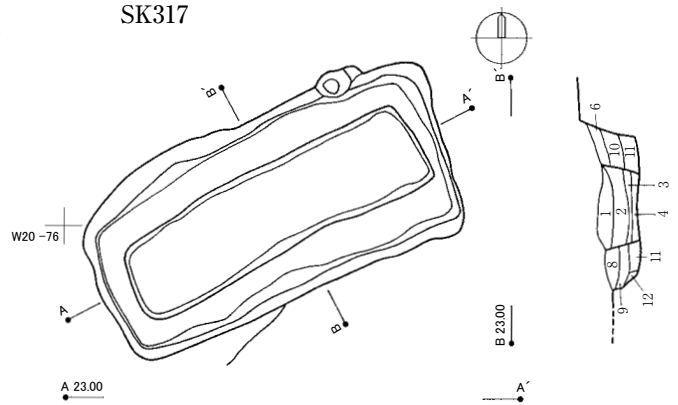
SK315



SK315AA'-BB'

- 1 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック、黒色土
- 2 褐色土
- 3 暗茶褐色土 黒褐色土若干
- 4 茶褐色土 ローム土 硬質
- 5 褐色土 ローム小ブロック
- 6 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
- 7 暗黄色土 ローム粒・ロームブロック
- 8 暗茶色土 ローム粒・ローム小ブロック 軟質
- 9 暗褐色土 ローム小ブロック
- 10 暗茶色土 軟質
- 11 暗茶色土 ローム粒・ロームブロック 軟質
- 12 暗茶色土 褐色土、ローム土 やや硬質
- 13 暗茶色

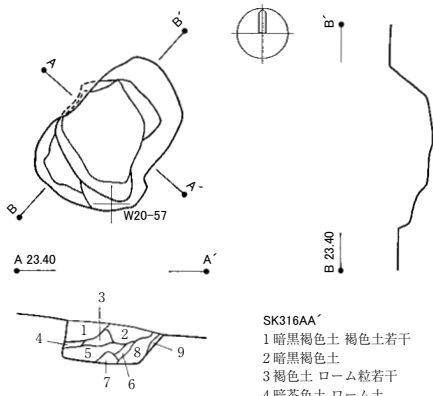
SK317



SK317AA'-BB'

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 暗褐色土
- 3 暗黒褐色土
- 4 褐色土
- 5 - ローム粒
- 6 褐色土 ローム粒
- 7 暗褐色土
- 8 暗黒褐色土 褐色土・黒色土、ロームブロック
- 9 暗黒褐色土 黒色土、ロームブロック
- 10 黒色土 ローム粒・ロームブロック
- 11 暗褐色土
- 12 暗茶色土 硬質

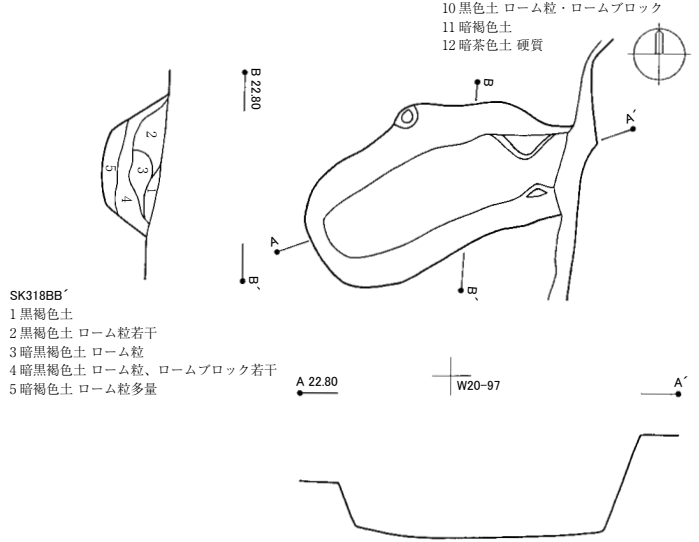
SK316



SK316AA'

- 1 暗黒褐色土 褐色土若干
- 2 暗黒褐色土
- 3 褐色土 ローム粒若干
- 4 暗茶色土 ローム土
- 5 暗褐色土
- 6 褐色土
- 7 暗茶色土
- 8 黒褐色土
- 9 暗茶色土 ローム土

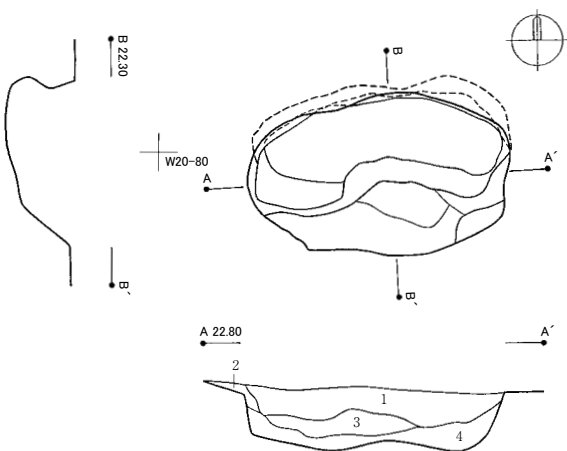
SK318



SK318BB'

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒若干
- 3 暗黒褐色土 ローム粒
- 4 暗黒褐色土 ローム粒、ロームブロック若干
- 5 暗褐色土 ローム粒多量

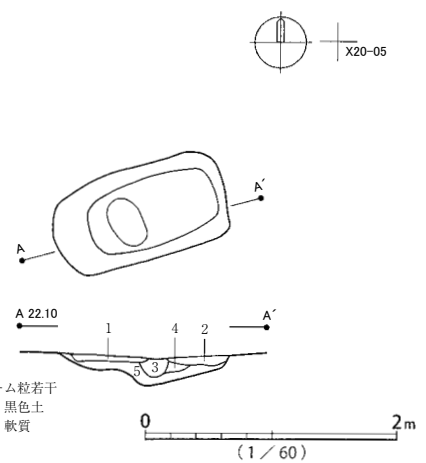
SK319



SK319AA'

- 1 黒褐色土 ローム粒若干
- 2 暗茶色土
- 3 暗茶褐色土 黒褐色土若干
- 4 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック

SK322



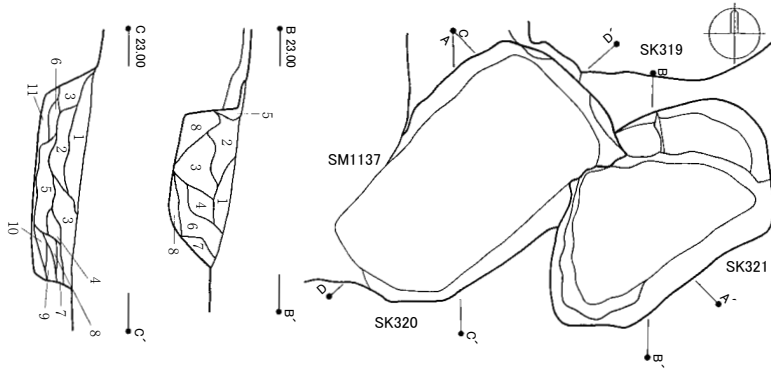
SK322AA'

- 1 黒色土 ローム粒若干
- 2 暗茶褐色土 黒色土
- 3 暗茶褐色土 軟質
- 4 黄茶色土
- 5 黄色土

Fig.513 SK315、SK316、SK317、SK318、SK319、SK322 実測図



SK320・SK321

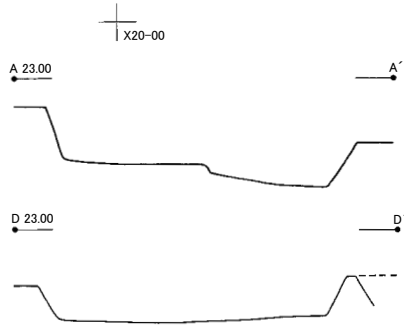


SK320・321BB'

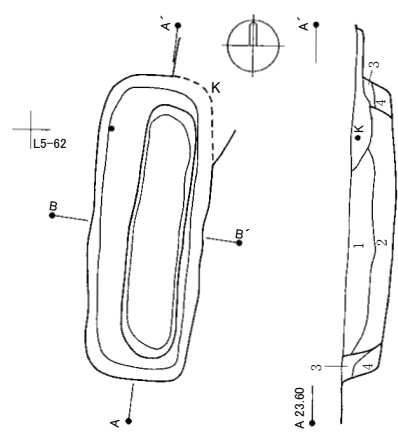
- 1 —
- 2 —
- 3 —
- 4 —
- 5 —
- 6 —
- 7 —
- 8 —

SK320・321CC'

- 1 —
- 2 —
- 3 —
- 4 —
- 5 —
- 6 —
- 7 —
- 8 —
- 9 —
- 10 —
- 11 —



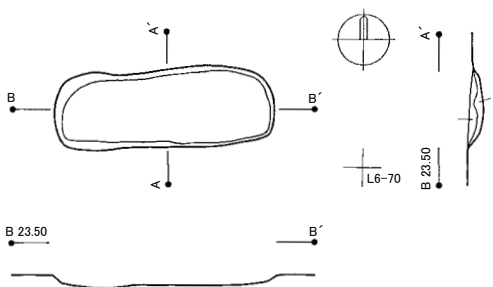
SK325



SK325AA'・BB'

- 1 黒色土 ローム粒やや多量・ブロック状のソフトローム
- 2 黒褐色土 ローム粒やや多量
- 3 黒褐色土 ローム粒やや多量・ソフトローム少量
- 4 暗褐色土
- 5 黒褐色土 ローム粒少量
- 6 黄褐色土 ソフトローム主体、黒色土少量
- 7 黄褐色土 ソフトローム主体、黒色土少量
- 8 暗黄褐色土 ソフトローム多量、黒色土多量
- 9 黒褐色土 ソフトローム多量
- 10 暗褐色土 ソフトロームやや多量
- 11 黄褐色土 ソフトローム主体

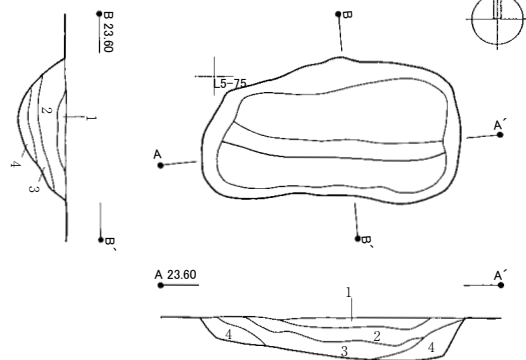
SK323



SK323AA'

- 1 黒色土 ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム小ブロック少量

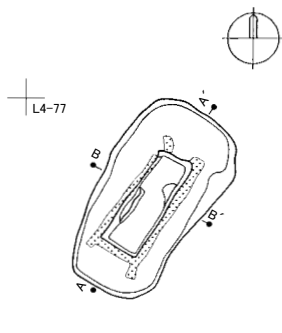
SK324



SK324AA'・BB'

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土 ローム粒少量
- 3 黒褐色土 ローム粒やや多量
- 4 暗褐色土 ローム粒多量・ソフトロームやや多量

SK326



SK326AA'・BB'

- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ソフトローム少量・ローム粒少量、粘土少量
- 3 明褐色土 ソフトローム多量、粘土多量
- 4 黄褐色土 ソフトローム主体
- 5 灰白色土 粘土
- 6 黒褐色土 ソフトローム少量
- 7 黒褐色土 ソフトローム少量、粘土少量
- 8 黄褐色土 ソフトローム
- 9 黒色土
- 10 粘土層

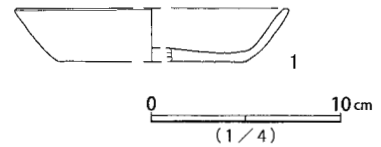
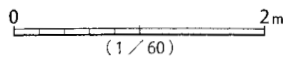


Fig.514 SK320、SK321、SK323、SK324、SK325、K326 実測図

を測る。位置関係から、SM1008前方後方墳の増築、もしくは増築後に関連した遺構である可能性が残る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD22 セ72地区 (Fig. 530)

L5-65付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、規模は全長10.40m×幅1.90mを測る。整理作業中番で、SD9と共に周溝墓を構成する可能性を考え、周溝墓としていたが、決め手に欠けるため、溝とした。しかし方形周溝墓としての可能性は残る

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD23 セ72地区 (Fig. 530)

M2-52付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、規模は全長7.10m×1.25mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD24 セ72地区 (Fig. 530)

M2-25付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、規模は全長6.14m×1.70mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD25 セ72地区 (Fig. 530)

N2-32付近に位置する溝跡である。平面形状は、湾曲するとみられ、規模は全長7.50m×2.60mを測る。周溝墓または古墳の周溝である可能性を残す。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD26 セ72地区 (Fig. 530)

N2-05付近に位置する溝跡である。平面形状は、直線的で、規模は全長4.56m×幅1.20mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD27 セ73地区 (Fig.531)

S5-50付近の南西斜面に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、斜面に対し直交方向に伸びる。直交方向に接続するSD28とは、機能した時期が極めて近いことが想定される。台地下へつながる道とみられる。規模は全長32.60m×2.40mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

#### SD28 セ73地区 (Fig. 532)

R2-00付近の南西斜面に位置する溝跡である。平面形状は、規模は全長90.00m×2.53mを測る。

出土遺物は無いが、現場所見に従い中近世の遺構としたい。

### SD29 セ73地区 (Fig. 531)

S5-50付近に位置する溝跡である。SD27に沿って斜面に直交方向に伸びるが、下方では途中から等高線に並行方向に向きを転じ、SD28に平行するとみられる。規模は全長19.30m×(1.00) mを測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

### SD30 セ73地区 (Fig.352)

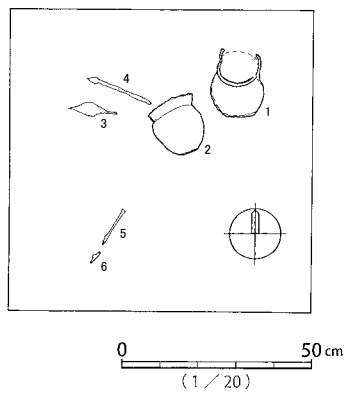
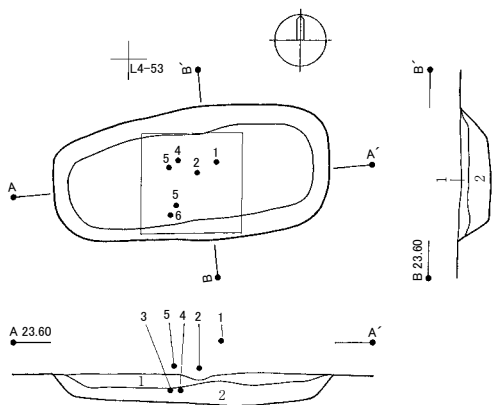
P2-00付近に位置する溝跡である。平面形状は直線的で、規模は全長7.15m×幅1.62mを測る。平面図のみの記録であるため詳細は不明だが、遺構下端が安定して平行であることから、企画性の強さが見いだせる。隣接するSM1075との位置関係が問題となるが、方墳

### SD31 064地区 (Fig.352)

H7-30付近に位置する溝跡である。平面形状は、丸みを帯びるが、L字形を基調とするとみられ、SD1～SD3のいずれかに伴って、斜面上の平場を形成する溝であった可能性がある。規模は全長4.50m×0.82mを測る。

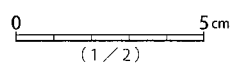
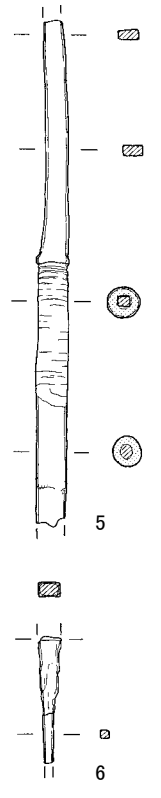
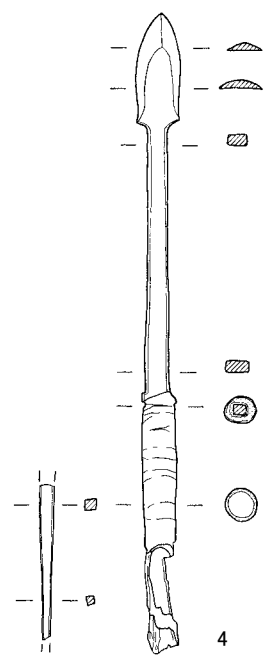
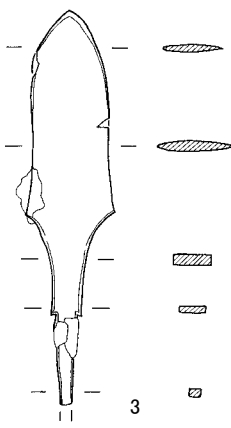
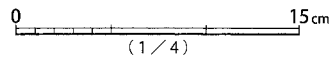
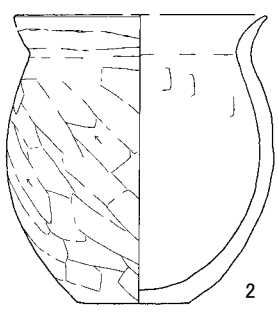
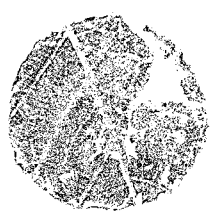
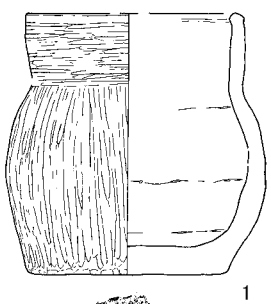
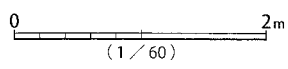
出土遺物は無く、帰属時期は不明であるが、SD3の時期周辺を想定する。

SK327

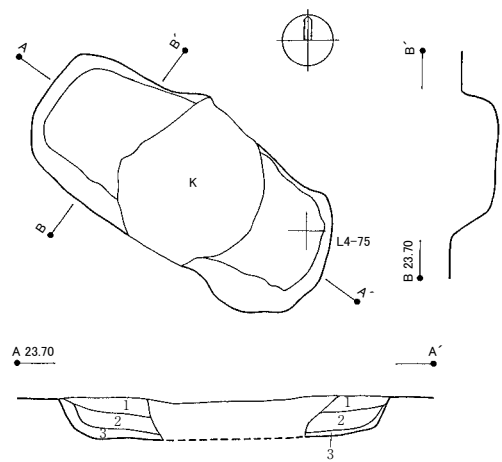


SK327AA'

- 1 黒褐色土 ローム粒極少量
- 2 暗褐色土 ソフトローム・ローム粒少量



SK328



SK328AA'

- 1 黒色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒やや多量・ソフトローム少量

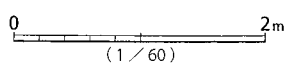


Fig.515 SK327、SK328 実測図

### 3 その他の遺構

#### SX1 064地区 (Fig.453)

F4-88付近に位置する台地整形痕である。南西へ下る斜面の傾斜変換点付近を、8.50m×3.00mの規模で、最大1.20mの深さを掘り込んで平坦面を造成している。平坦面は丸みを帯びる方形を呈する。本遺構の造成目的は、埋没過程ではSK34が残されているものの、台地整形面から間層を挟んでの掘り込みではあるが、SK35（地下式墳）がほぼ中央に位置することから、SK35にあるとみられる。

本遺構の他にも台地整形痕が064地区には3か所認められる（SD1～SD3、SD31）。いずれも平坦面から南斜面への傾斜変換点に位置し、SX1とは異なり方形の土壇を伴うとみられる。

#### SX2 064地区 (PL.94)

F4-97付近に位置する集石遺構である。図面類は皆無であるが、写真が撮影されているため、正確な規模・時期など詳細は不明であるが、ここで触れておく。位置は、調査区全体図と航空写真の照合によって、調査区の西側、西斜面の上位に位置することまでは解っている。周辺には西側にSK33が近接し、東側にはSM1017が位置する。おそらく、本遺構はSM1017の周溝内、もしくは墳丘法面に造られているとみられる。石はそのほとんどが、こぶし大の円礫と、破面のあるより大きな石で構成されているとみられ、斜面に沿って積まれたと思われる。

遺構の時期・性格については推測の域を出ないが、周辺斜面に位置する遺構が中世期のもので占められることから、本遺構の時期もそこに帰属するものと考えてよいであろう。性格については、セ28地区の遺構外出土遺物で多字一経石（遺構外の遺構と遺物：石製品15 (Fig.543)）とみられる円礫が出土していることから、古墳を利用した経塚に関連する遺構を推定しておく。

出土遺物は円礫が確認できず、他に本遺構から出土した遺物も皆無である。

#### SX3 セ28地区 (Fig.352)

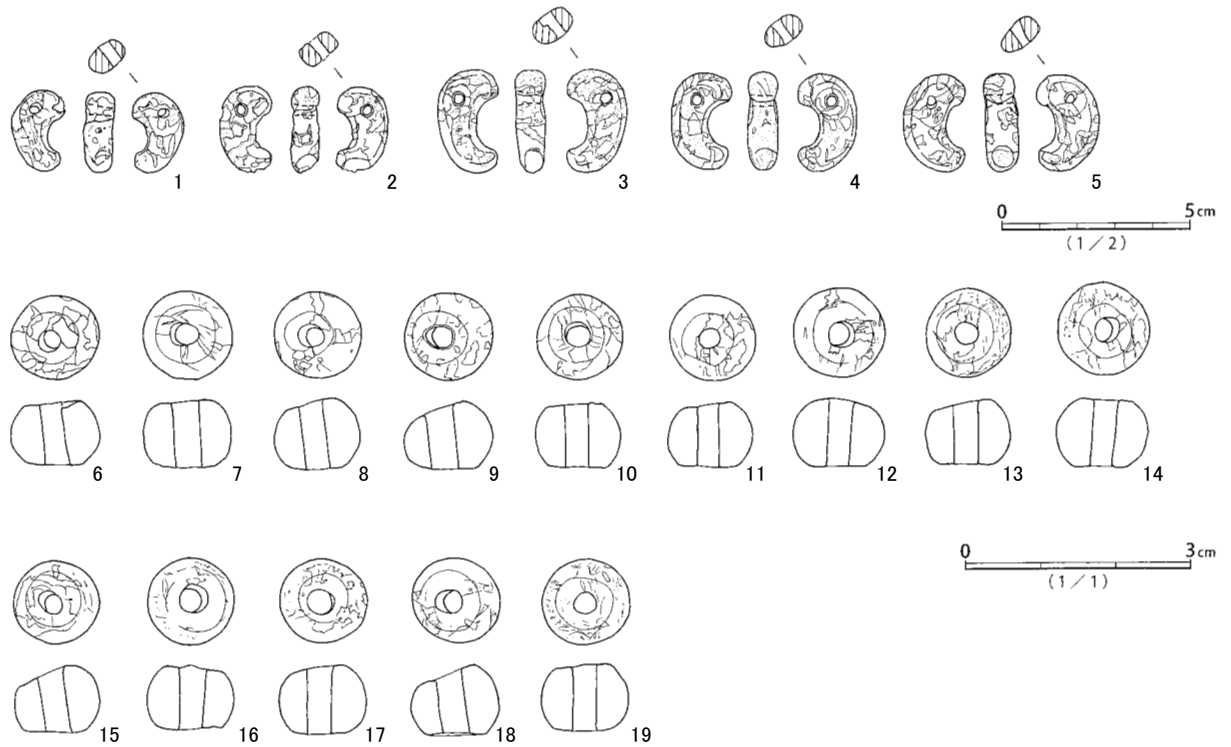
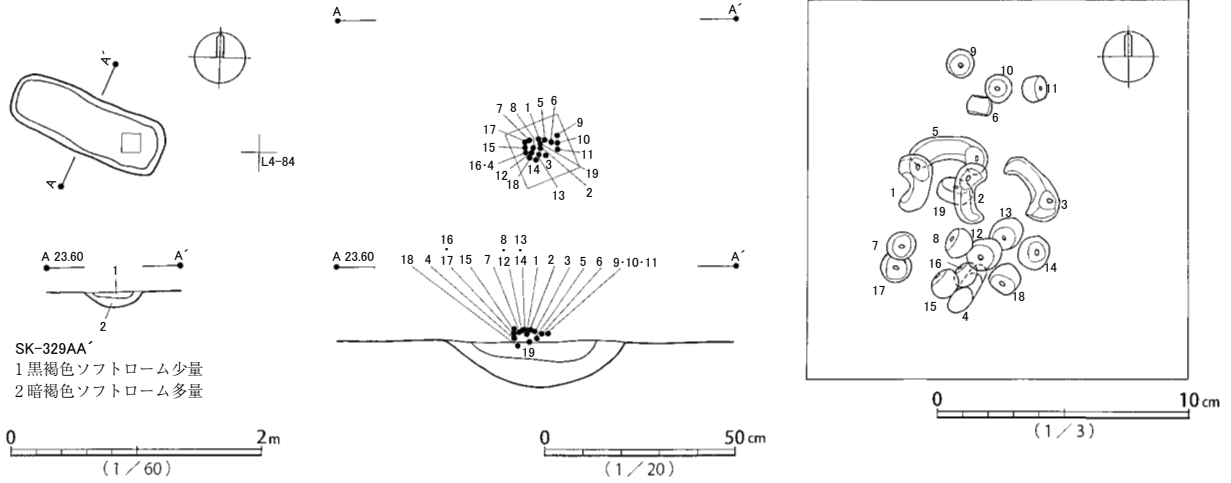
H7-30付近に位置する方形区画墓である。南東斜面の上位に位置し、周辺にはSS118が位置し、本遺構との間には、谷状地形の傾斜変換点付近をめぐる溝状遺構が存在する。平面形状は、隅丸方形で、南側周溝が検出されていない。平面プランから、いわゆる方形区画墓の可能性が高く、本来SMで扱うべき遺構である。記録類が限られるため、詳細は不明である。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

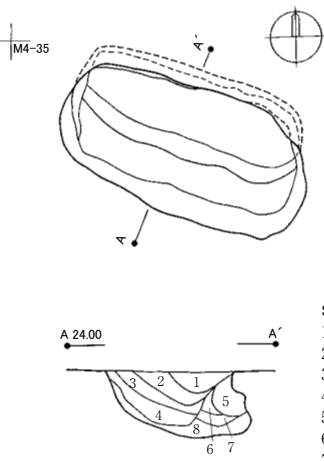
#### 099地区ピット群 (Fig.533)

099地区東側調査区においては、記録類の精度が他と異なり、遺構番号の付与されていないピット状の掘り込みが数多く記録されている。調査担当者への聞き取りにより、建物跡として復元可能な遺構が存在する可能性は低いとのコメントがあったことから、ここでは一括で扱うこととした。

SK329



SK330



- SK330AA'  
 1 黒色土  
 2 黒色土 ローム粒少量  
 3 黒褐色土 ローム粒少量  
 4 黒褐色土 ローム粒多量  
 5 黒褐色土 ソフトロームやや多量  
 6 黒褐色土 ローム粒少量  
 7 黒褐色土 ソフトローム少量  
 8 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量

SK331

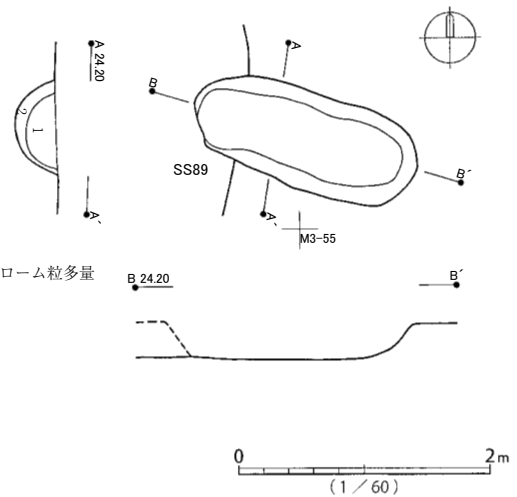
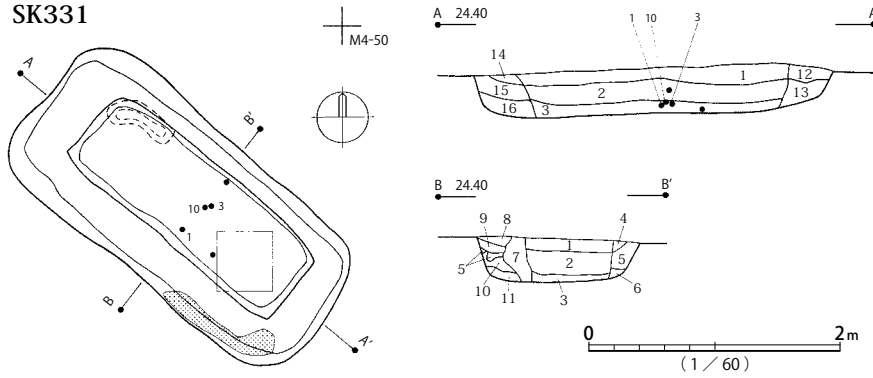


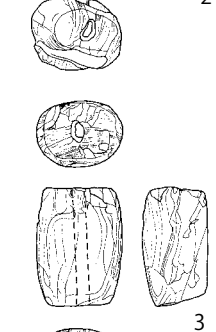
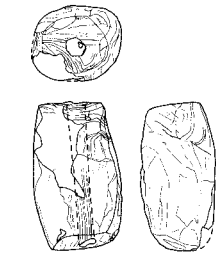
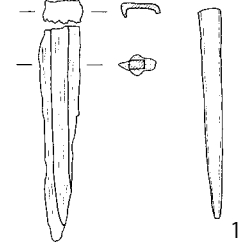
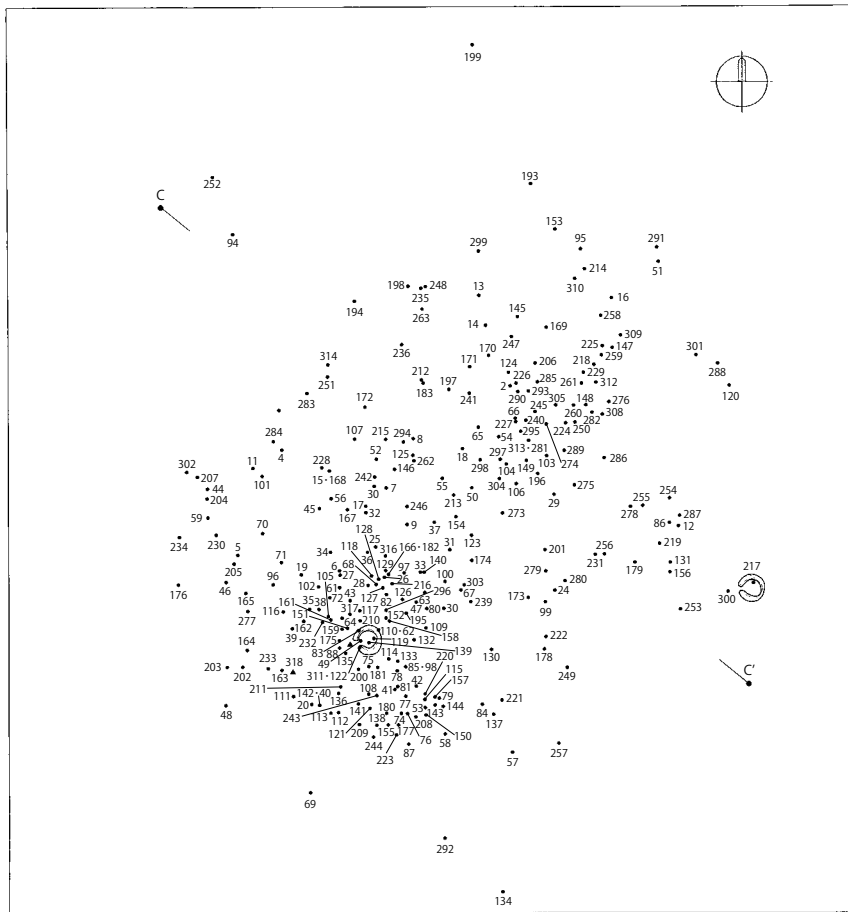
Fig.516 SK329、SK330、SK333 実測図

SK331

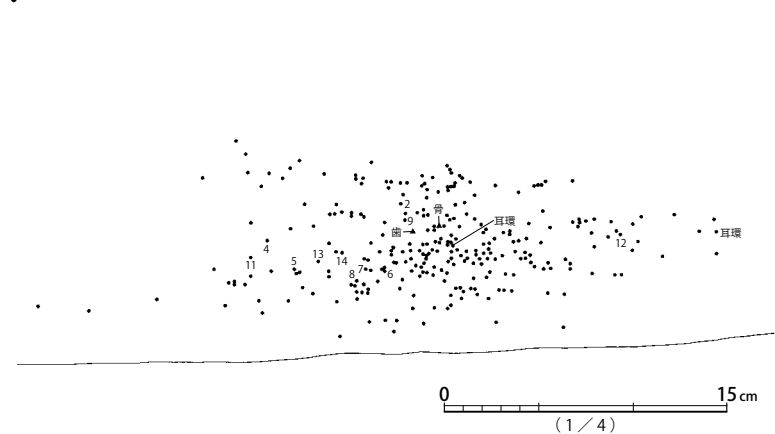


SK331AA'・BB'

- 1 暗褐色土ソフトローム少量・ローム粒多量
- 2 暗褐色土ソフトロームやや少量・ローム粒やや多量
- 3 明褐色土ソフトローム主体・ローム粒多量
- 4 黒褐色土白色土粘土少量
- 5 黒褐色土ローム粒
- 6 黒褐色土ソフトローム
- 7 黒褐色土ソフトローム多量・ローム粒多量
- 8 黒褐色土ローム粒やや多量
- 9 白色土粘土主体・ローム粒少量
- 10 白色土粘土多量、黒色土、ローム粒少量
- 11 黒褐色土ローム粒・ローム小ブロック少量
- 12 黒褐色土ローム粒少量
- 13 黒褐色土ローム粒少量、白色土粘土極少量
- 14 黒褐色土ソフトローム少量
- 15 暗褐色土ソフトロームやや多量
- 16 暗褐色土ソフトローム少量・ローム粒少量



C 23.90



0 5cm  
(1/2)

Fig.517 SK331 遺物 (1)・遺物出土詳細実測図

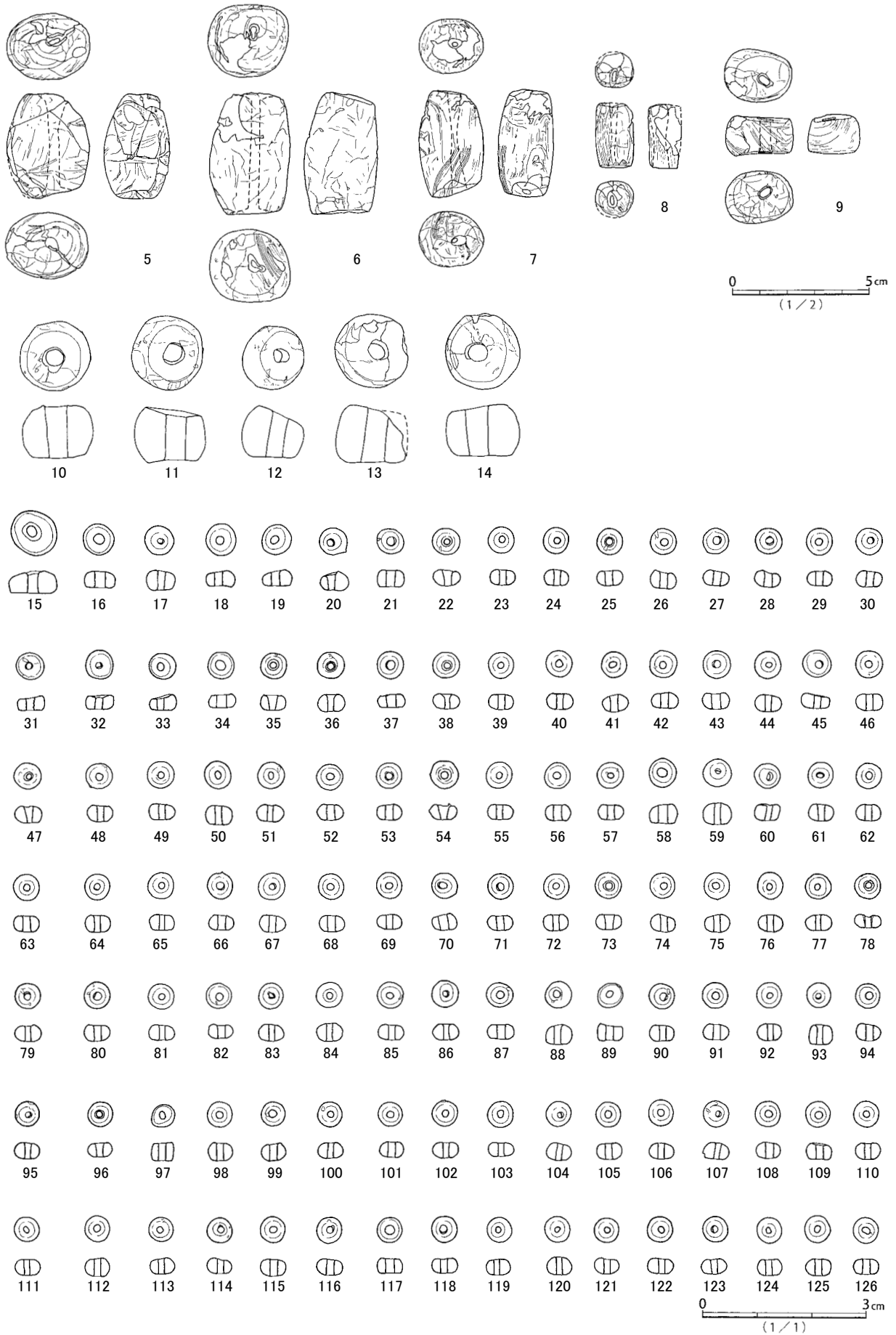
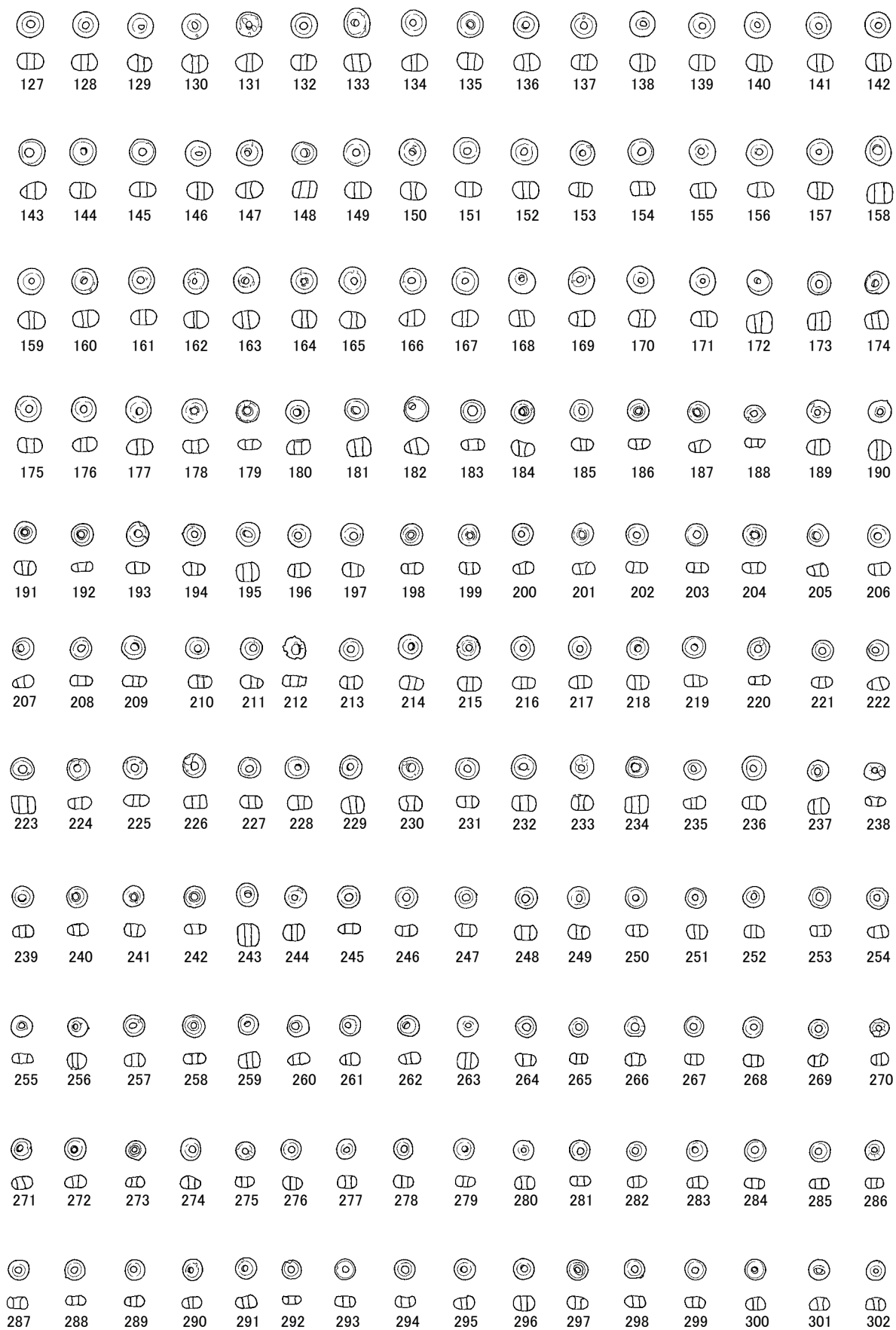


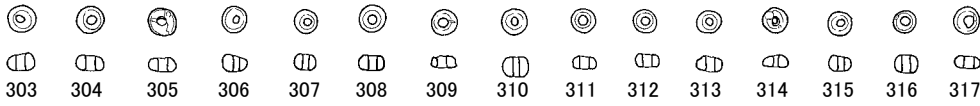
Fig.518 SK331(2) 実測図



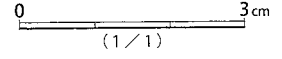


0 3cm  
(1/1)

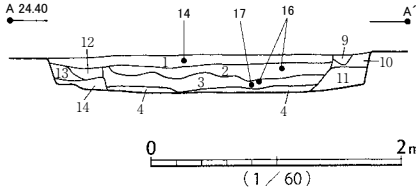
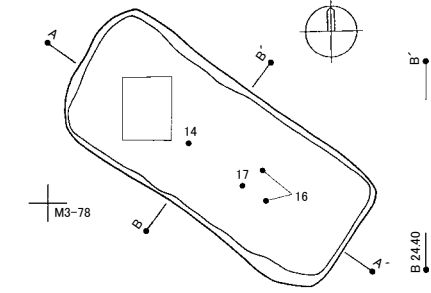
Fig.519 SK331(3) 実測図



318



SK332



- SK-332AA'-BB'
- 1 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量(ソフトロームとローム粒の混合)
  - 2 暗褐色土 ソフトロームやや多量・ローム粒やや多量
  - 3 黒褐色土 ソフトローム少量・ローム粒少量
  - 4 明褐色土 ソフトローム多量・ローム粒少量
  - 5 黒褐色土 ローム粒やや多量
  - 6 黒褐色土 ソフトロームやや多量
  - 7 黒褐色土 ローム粒少量
  - 8 暗褐色土 ソフトローム少量・ローム粒少量
  - 9 暗褐色土 ソフトローム少量
  - 10 暗褐色土 ソフトロームやや多量・ローム粒やや多量 少し硬質
  - 11 明褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量
  - 12 黒褐色土 ローム粒多量
  - 13 黒褐色土 ローム粒少量 少し硬質
  - 14 黒褐色土 ソフトローム多量・ローム粒多量

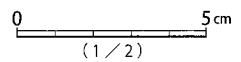
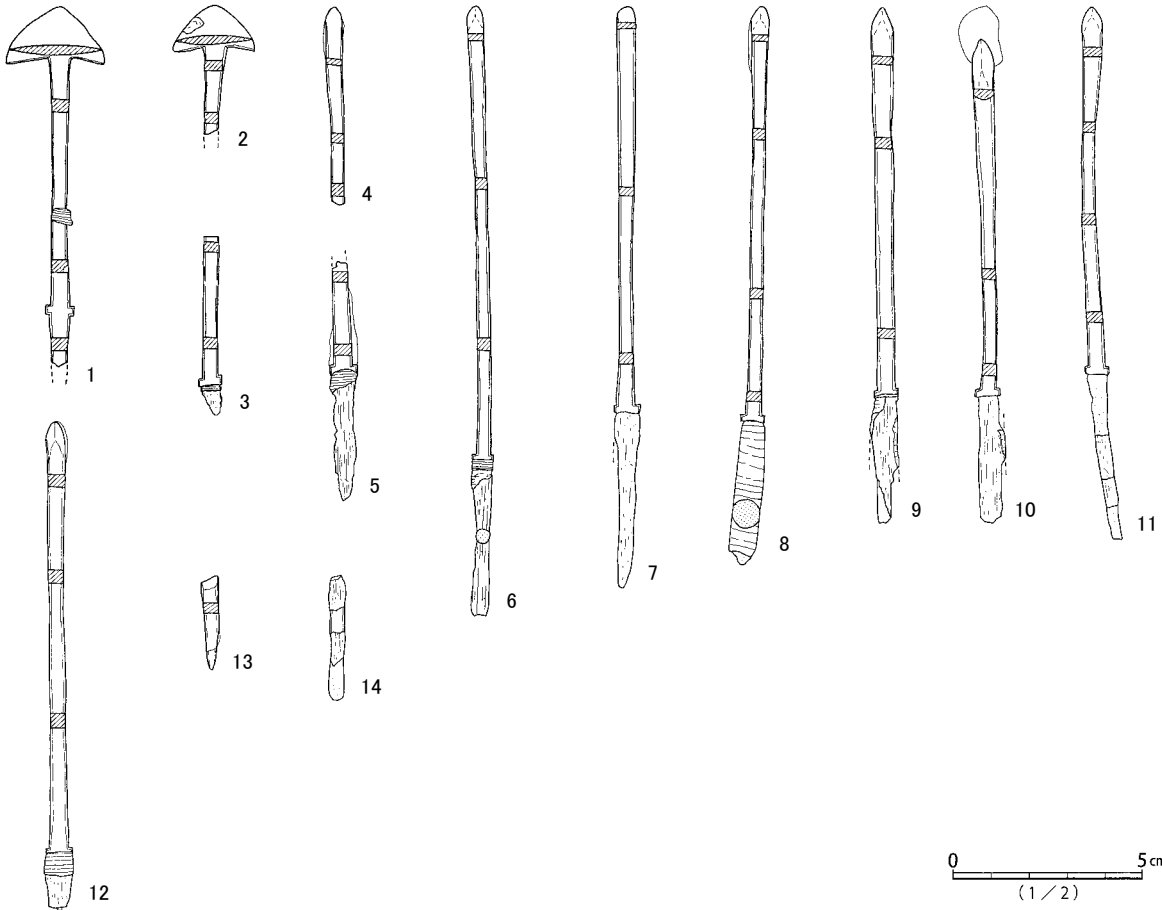
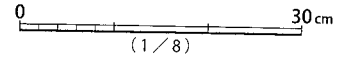
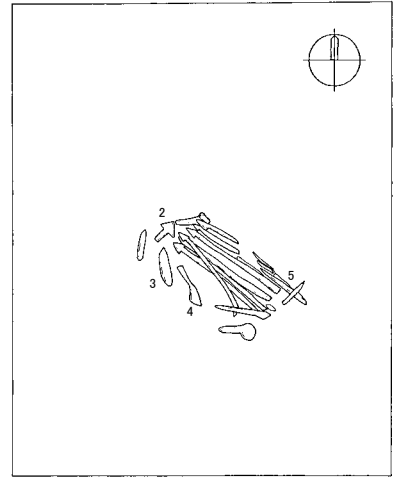


Fig.520 SK331(4)、SK332(1) 実測図

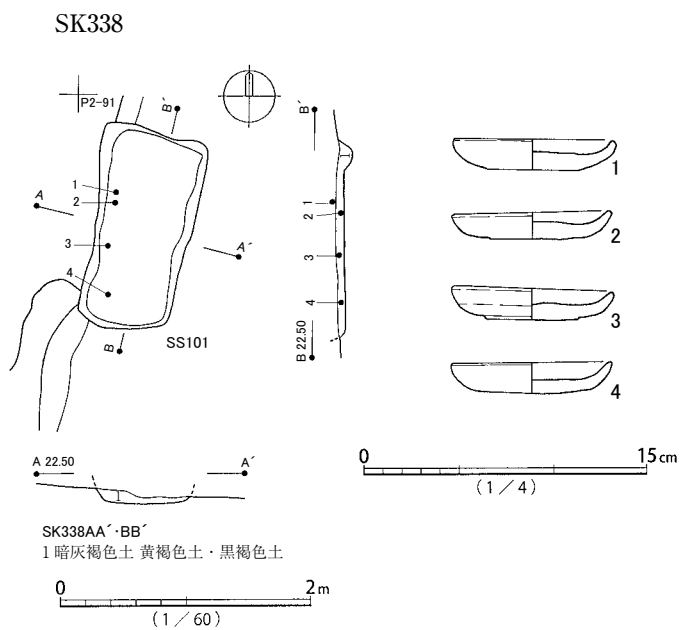
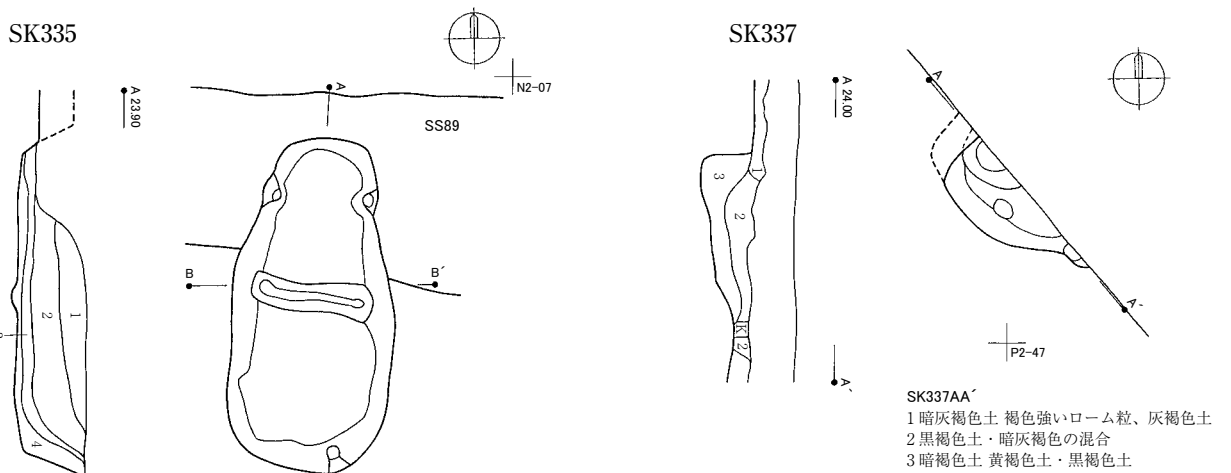
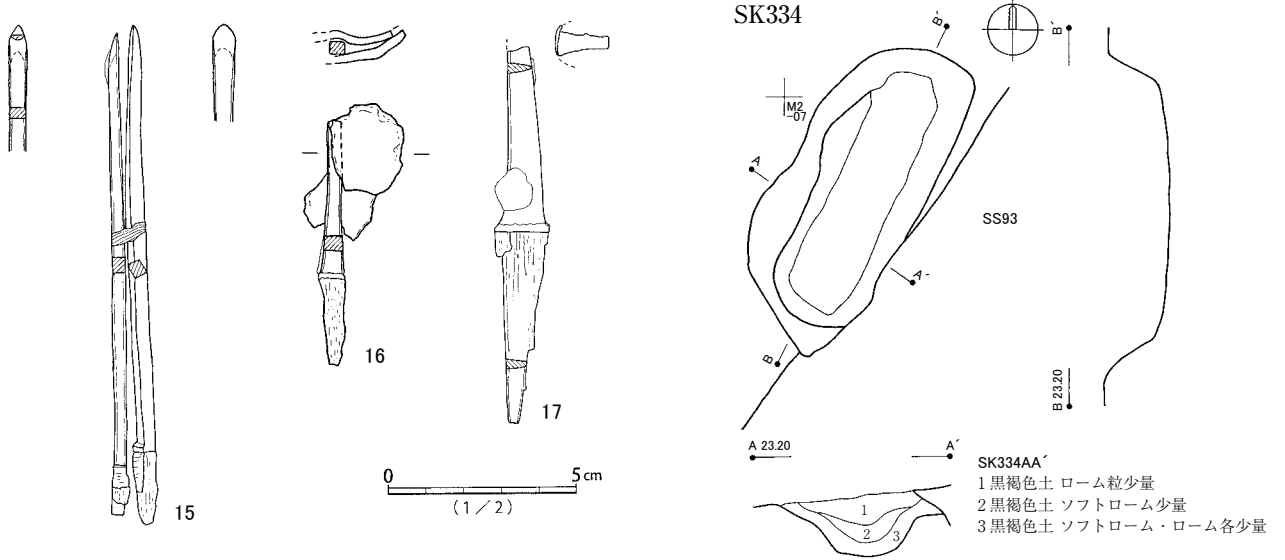
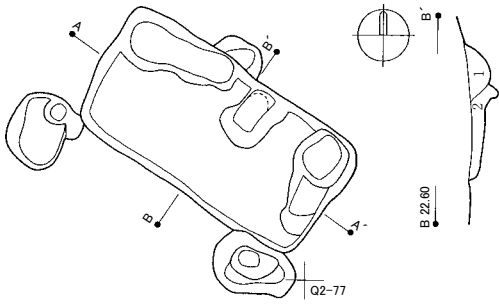


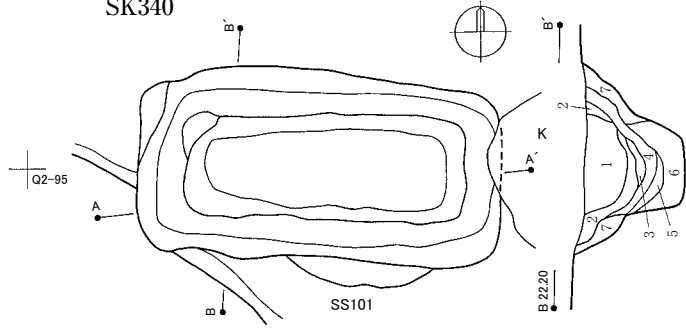
Fig.521 SK332(2)、SK334、SK335、SK336、SK337、SK338 実測図

SK339



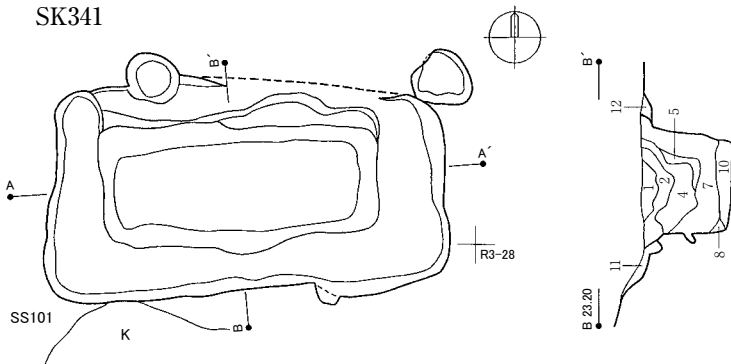
SK339AA'-BB'  
 1 灰褐色土 ローム大粒多量  
 2 灰褐色土 ローム粒、暗灰褐色土

SK340



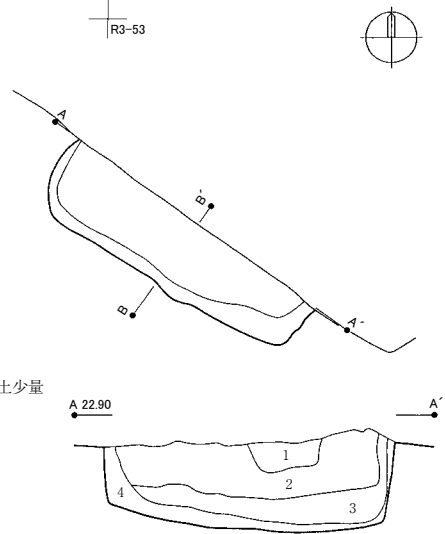
SK340AA'-BB'  
 1 暗灰褐色土 ローム粒少量  
 2 暗灰褐色土 ローム粒、暗褐色土 1層よりローム粒多量  
 3 ローム粒、黒褐色土・暗灰褐色土  
 4 暗黄褐色土 ローム粒、暗灰褐色土  
 5 暗灰褐色土 黄褐色土・黒褐色土、ローム粒  
 6 暗黄褐色土  
 7 黄褐色土・暗黄褐色土の混合

SK341



SK341AA'-BB'  
 1 黒褐色土 ローム小粒少量  
 2 暗黄褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒  
 3 黒褐色土・暗褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土  
 4 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土少量  
 5 ローム粒、暗褐色土・暗黄褐色土・黒褐色土  
 6 暗褐色土・暗黄褐色土の混合 ローム粒、黒褐色土少量  
 7 暗黄褐色土 ロームブロック  
 8 ロームブロック、黄褐色土多量 軟質  
 9 ロームブロック 7層より少量  
 10 暗黄褐色土 黄褐色土粒 硬質  
 11 黄褐色土 暗褐色土  
 12  
 13 暗褐色土・黄褐色土の混合  
 14

SK343



SK342

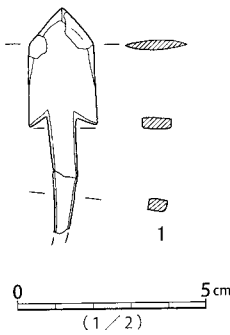
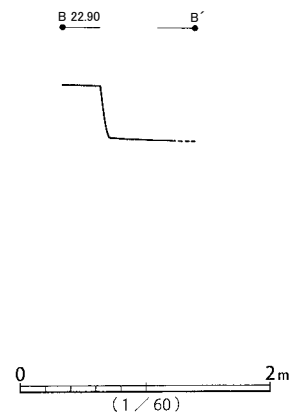
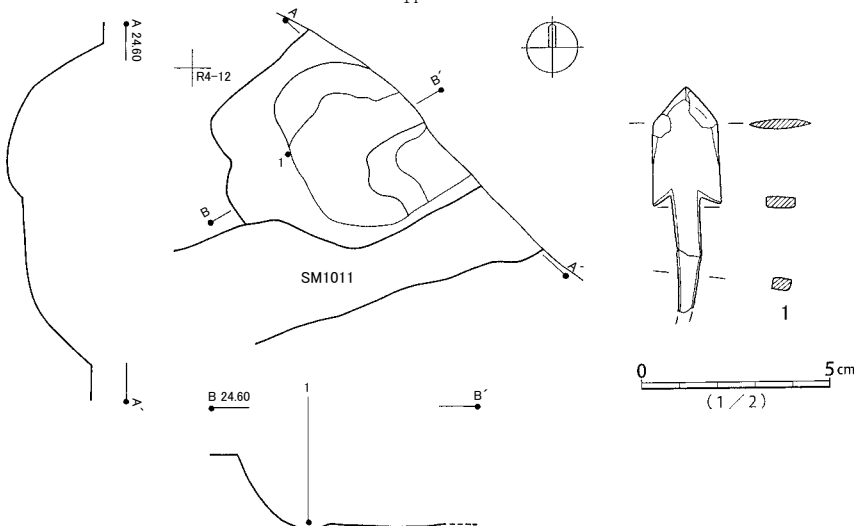
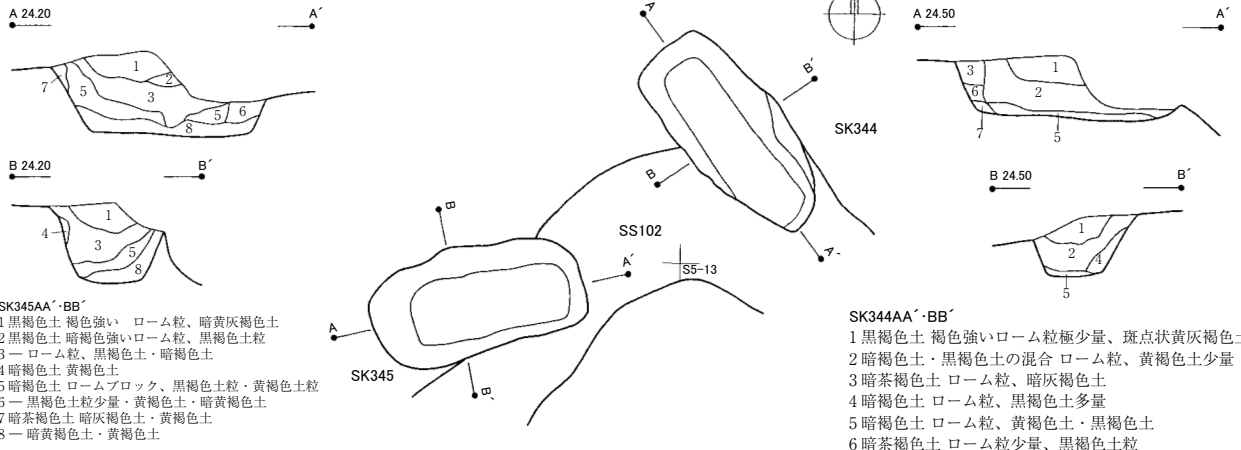


Fig.522 SK339、SK340、SK341、SK342、SK343 実測図

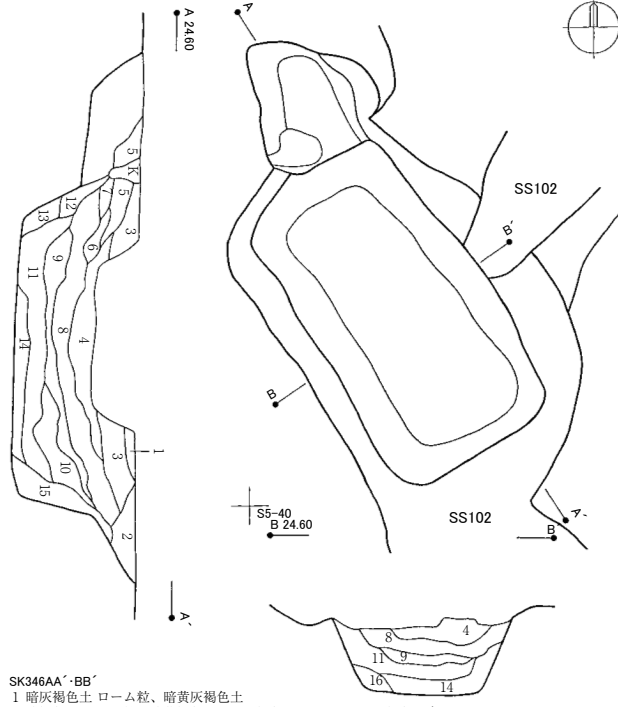
SK344・SK345



- SK345AA'・BB'
- 1 黒褐色土 褐色強い ローム粒、暗黄灰褐色土
  - 2 黒褐色土 暗褐色強いローム粒、黒褐色土粒
  - 3 - ローム粒、黒褐色土・暗褐色土
  - 4 暗褐色土 黄褐色土
  - 5 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色土粒・黄褐色土粒
  - 6 - 黒褐色土粒少量・黄褐色土・暗黄褐色土
  - 7 暗茶褐色土 暗灰褐色土・黄褐色土
  - 8 - 暗黄褐色土・黄褐色土

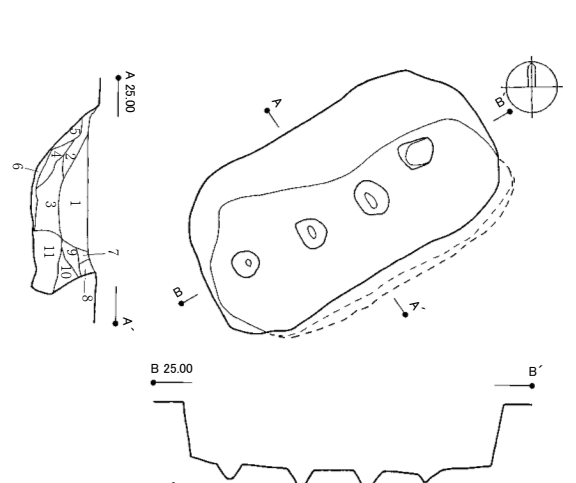
- SK344AA'・BB'
- 1 黒褐色土 褐色強いローム粒極少量、斑点状黄灰褐色土
  - 2 暗褐色土・黒褐色土の混合 ローム粒、黄褐色土少量
  - 3 暗茶褐色土 ローム粒、暗灰褐色土
  - 4 暗褐色土 ローム粒、黒褐色土多量
  - 5 暗褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒褐色土
  - 6 暗茶褐色土 ローム粒少量、黒褐色土粒
  - 7 暗褐色土・黄褐色土の混合 黒褐色土粒少量

SK346



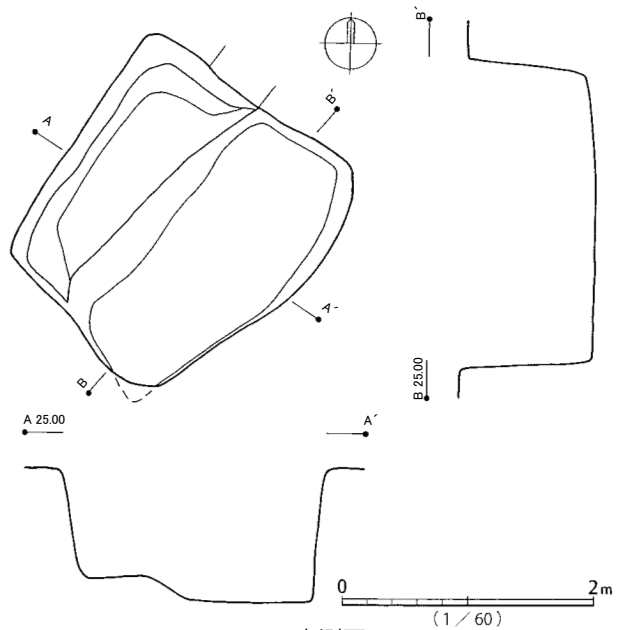
- SK346AA'・BB'
- 1 暗灰褐色土 ローム粒、暗黄灰褐色土
  - 2 暗褐色土 ローム粒、暗黄褐色土・黒灰褐色土 1層より黒灰褐色土多量
  - 3 暗褐色土 ローム粒、暗黄褐色土・黒灰褐色土
  - 4 黒灰褐色土 ローム粒少量、斑点状黄灰褐色土
  - 5 暗黄灰褐色土 ローム粒少量、暗黄褐色土・暗灰褐色土
  - 6 暗灰褐色土 ローム粒、暗黄灰褐色土
  - 7 暗黄灰褐色土 暗灰褐色土・黄褐色土
  - 8 黒灰褐色土 ローム粒、黄褐色土・暗黄灰褐色土
  - 9 暗黄灰褐色土 ローム粒、黄褐色土・黒灰褐色土
  - 10 暗黄灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土 11層より暗黄灰褐色土多量
  - 11 暗黄灰褐色土 ローム粒、黒灰褐色土槽内?
  - 12 暗褐色土 暗灰褐色土・暗黄褐色土
  - 13 黄褐色土・暗黄灰褐色土の混合 暗灰褐色土、粘土墓曠?
  - 14 暗黄灰褐色土 黄褐色土・暗褐色土、粘土
  - 15 黄褐色土・暗黄褐色土の混合 暗灰褐色土少量墓曠?
  - 16 - 黄褐色土少量 11層よりやや黒灰褐色土多量

SK347

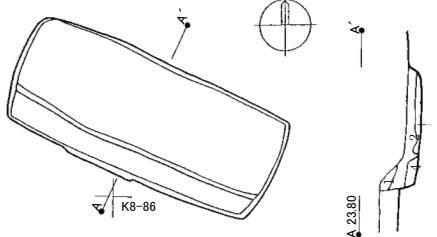


- SK347AA'
- 1 黒褐色土 ローム粒斑状
  - 2 黒褐色土 ローム粒1とはほぼ同一 斑やや顕著
  - 3 黒褐色土 ローム粒1より多量 斑顕著
  - 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック
  - 5 暗黄褐色土 ローム主体、黒褐色土壁のくずれか?
  - 6 暗黄褐色土 ローム主体・ロームブロック、暗褐色土
  - 7 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土少量
  - 8 暗褐色土 地山か?
  - 9 暗褐色土 ローム粒少量わずかに斑状
  - 10 暗褐色土 ソフトローム多量・ローム粒少量天井落下による?
  - 11 暗黄褐色土 ローム主体・ソフトローム、暗褐色土天井落下による?

SK348



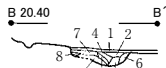
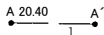
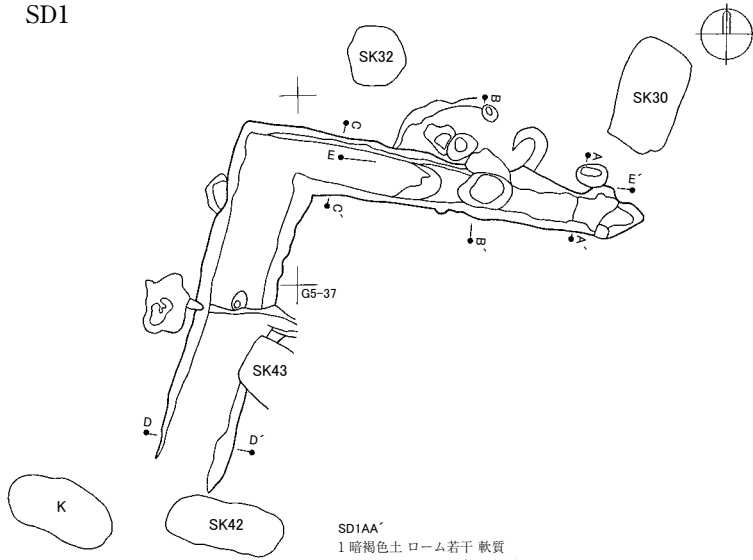
SK350



- SK350AA'
- 1 黒褐色土 褐色土粒、ロームブロック少量
  - 2 黒褐色土 ソフトロームブロック少量
  - 3 暗褐色土 ソフトローム少量 硬質
  - 4 暗褐色土 黒色土、ローム 硬質

Fig.523 SK344、SK345、SK346、SK347、SK348、SK350 実測図

SD1



SD1AA'

- 1 暗褐色土 ローム若干 軟質
- 2 黄褐色土 ローム粒多量 軟質

SD1BB'

- 1 暗褐色土 ローム粒 EE'の1と同層
- 2 黒色土 暗褐色土、ローム粒
- 3 暗褐色土 ローム粒、黒色土 軟質
- 4 黒色土
- 5 暗褐色土 ロームブロック、黒色土粒
- 6 黄色土 ロームブロック・ローム粒、暗褐色土
- 7 暗褐色土 1層より黒い EE'の3と同層
- 8 暗褐色土 7層より黒い
- 9 ローム小ブロック、暗褐色土・黒色土若干 軟質 EE'の4と同層

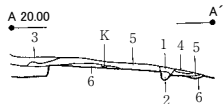
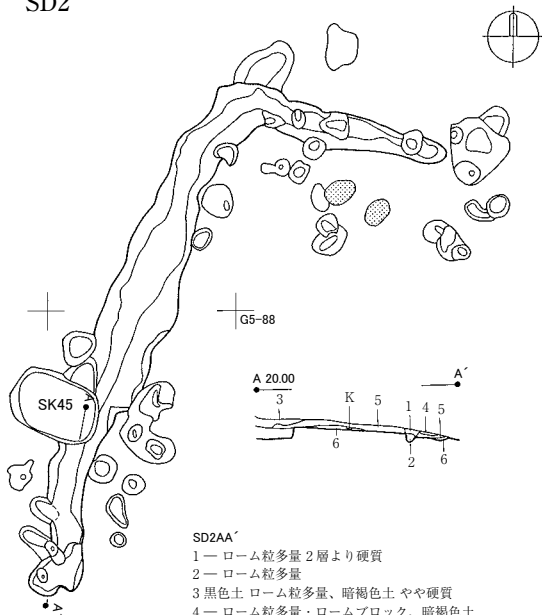
SD1CC'

- 1 暗褐色土 ローム粒若干 やや硬質 EE'の22と同層
- 2 黒色土 暗褐色土、ローム粒 硬質 EE'の23と同層
- 3 黒色土 ロームブロック・ローム粒多量 硬質 EE'の24と同層
- 4 黄色土 ローム粒、黒色土粒 硬質
- 5 ローム粒 硬質 EE'の31と同層

SD1DD'

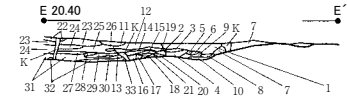
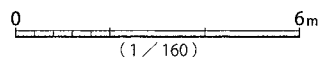
- 1 黒色土 ローム粒、暗褐色土 硬質
- 2 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒 軟質
- 3 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土ブロック やや硬質
- 4 暗褐色土 ローム粒多量

SD2



SD2AA'

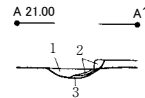
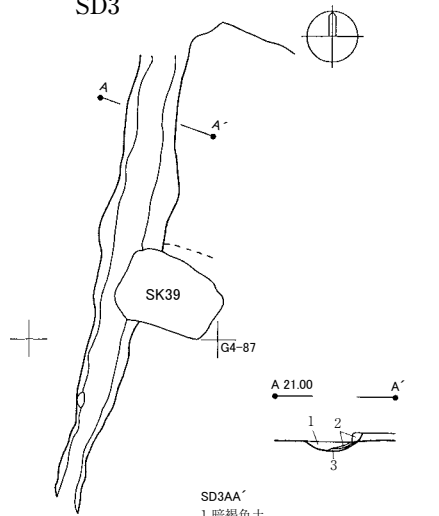
- 1 ローム粒多量 2層より硬質
- 2 ローム粒多量
- 3 黒色土 ローム粒多量、暗褐色土 やや硬質
- 4 ローム粒多量・ロームブロック、暗褐色土
- 5 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒 硬質
- 6 ローム粒多量



SD1EE'

- 1 暗褐色土 ローム粒 BB'の1と同層
- 2 ローム粒、暗褐色土
- 3 暗褐色土 1層より黒い BB'の7と同層
- 4 ローム小ブロック、暗褐色土・黒色土 若干軟質 BB'の9と同層
- 5 ローム小ブロック、暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 ローム粒多量、暗褐色土
- 8 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒
- 9 ローム多量、暗褐色土若干
- 10 ローム多量 やや軟質
- 11 暗褐色土 ローム粒若干 軟質
- 12 黄褐色土 ローム粒多量、黒色土粒若干 軟質
- 13 暗褐色土 ローム粒 やや軟質
- 14 黒褐色土 黒色土粒多量、ローム粒 硬質
- 15 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒、暗褐色土 硬質
- 16 黒色土 ローム粒 硬質
- 17 暗褐色土 軟質
- 18 ローム粒多量、暗褐色土 軟質
- 19 暗褐色土 ローム粒、黒色土粒
- 20 ローム粒多量 19層より硬質
- 21 暗褐色土 ローム粒多量 軟質
- 22 暗褐色土 ローム粒若干 やや硬質 CC'の1と同層
- 23 黒色土 暗褐色土、ローム粒 硬質 CC'の2と同層
- 24 黒色土 ロームブロック・ローム粒多量 硬質 CC'の3と同層
- 25 黒色土 ロームブロック多量・ローム粒多量 軟質
- 26 黒色土 ローム粒 硬質
- 27
- 28 ローム粒、黒色土粒 硬質
- 29 ローム粒、黒色土粒多量 軟質
- 30 ローム粒多量、黒色土粒若干 やや硬質
- 31 ローム粒 硬質 CC'の5と同層
- 32 黒褐色土 ローム粒、暗褐色土粒・黒色土粒多量
- 33 黒色土 ローム粒

SD3



SD3AA'

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色土 ローム粒若干
- 3 ローム粒多量

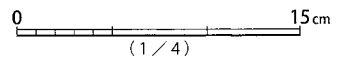
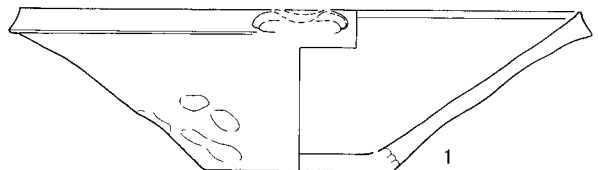
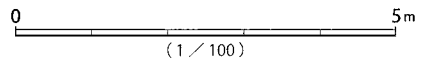


Fig.524 SD1、SD2、SD3 実測図

SD4

SD5・SD6

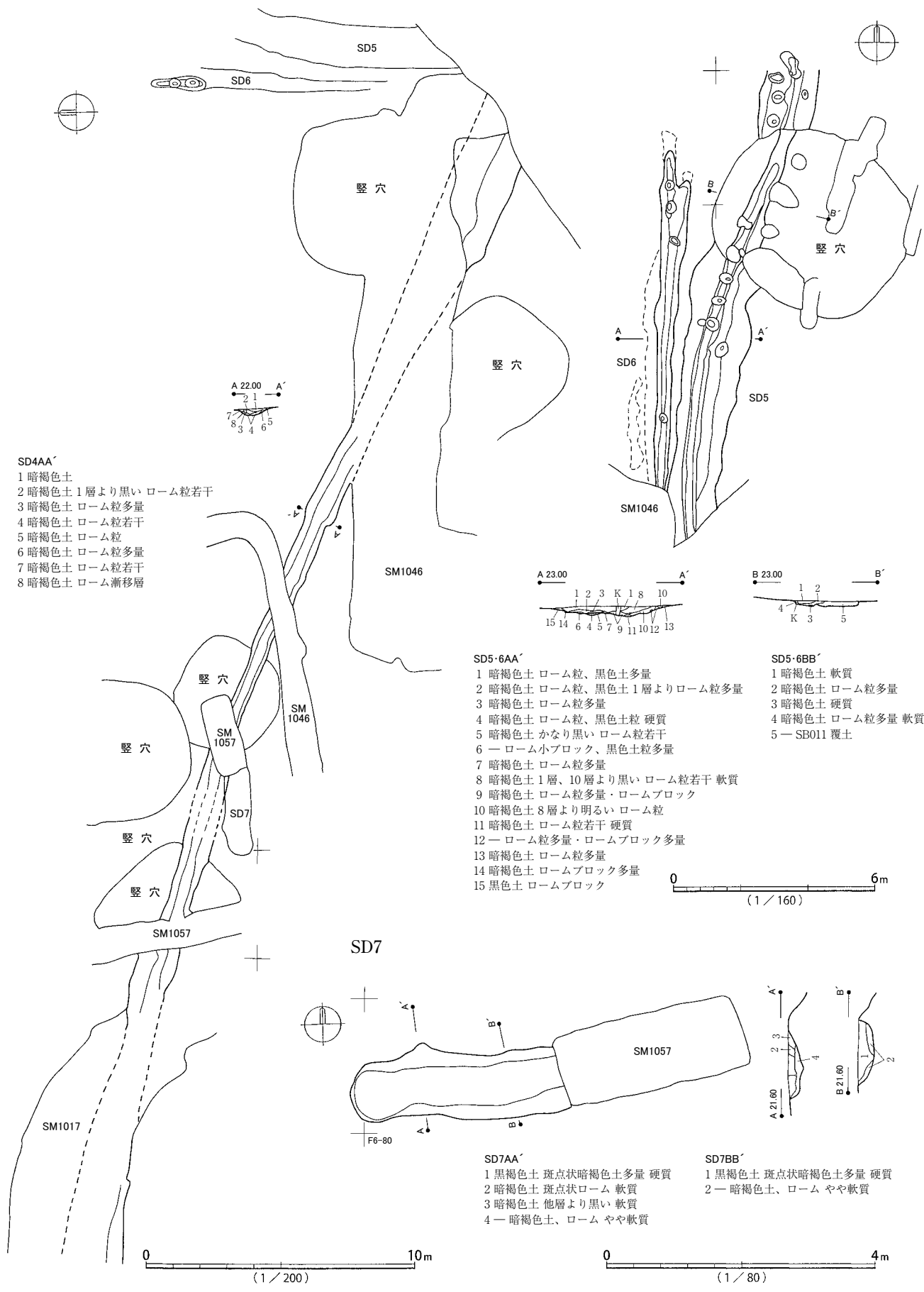


Fig.525 SD4、SD5、SD6、SD7 実測図

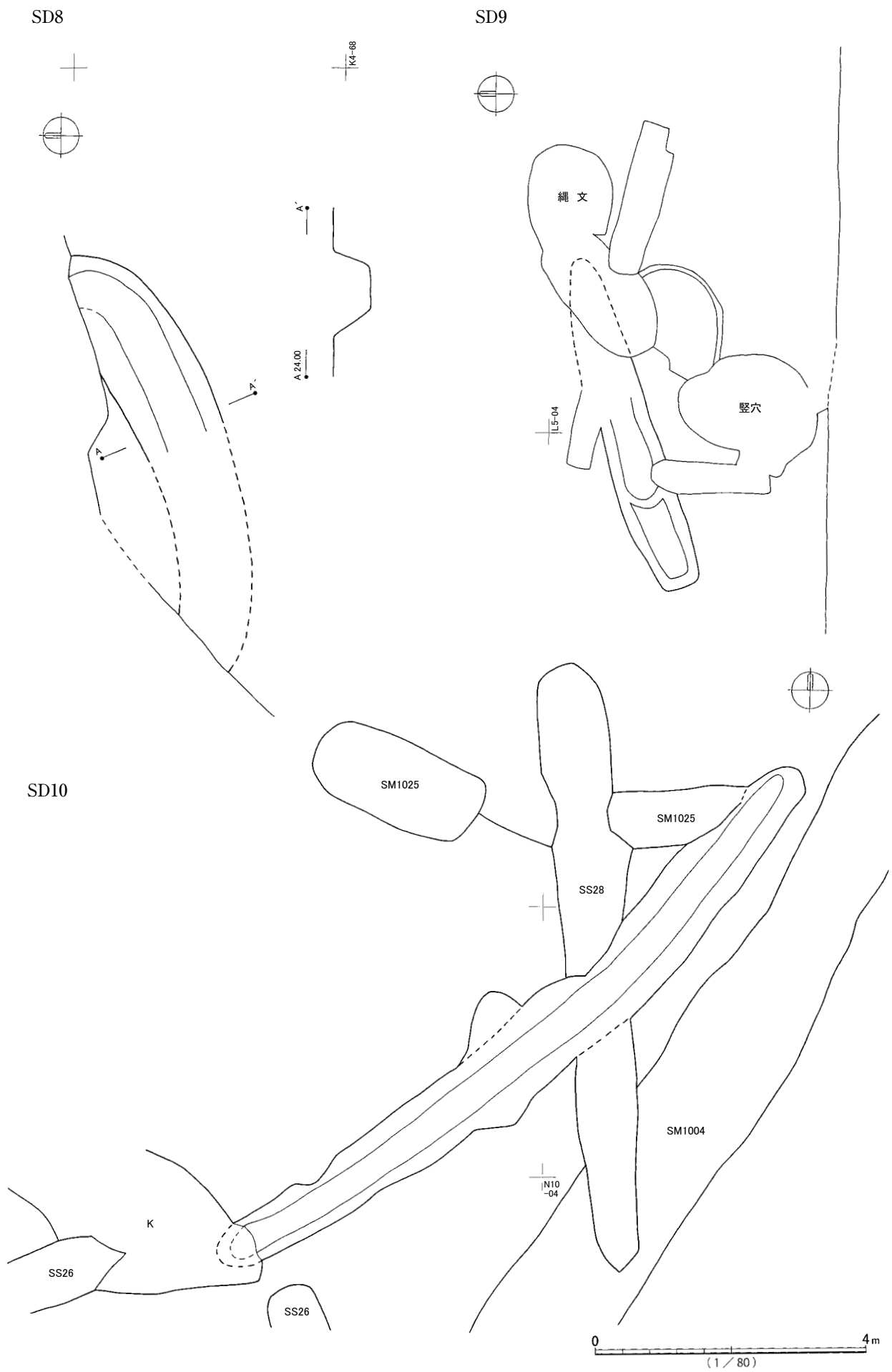


Fig.526 SD8、SD9、SD10 実測図



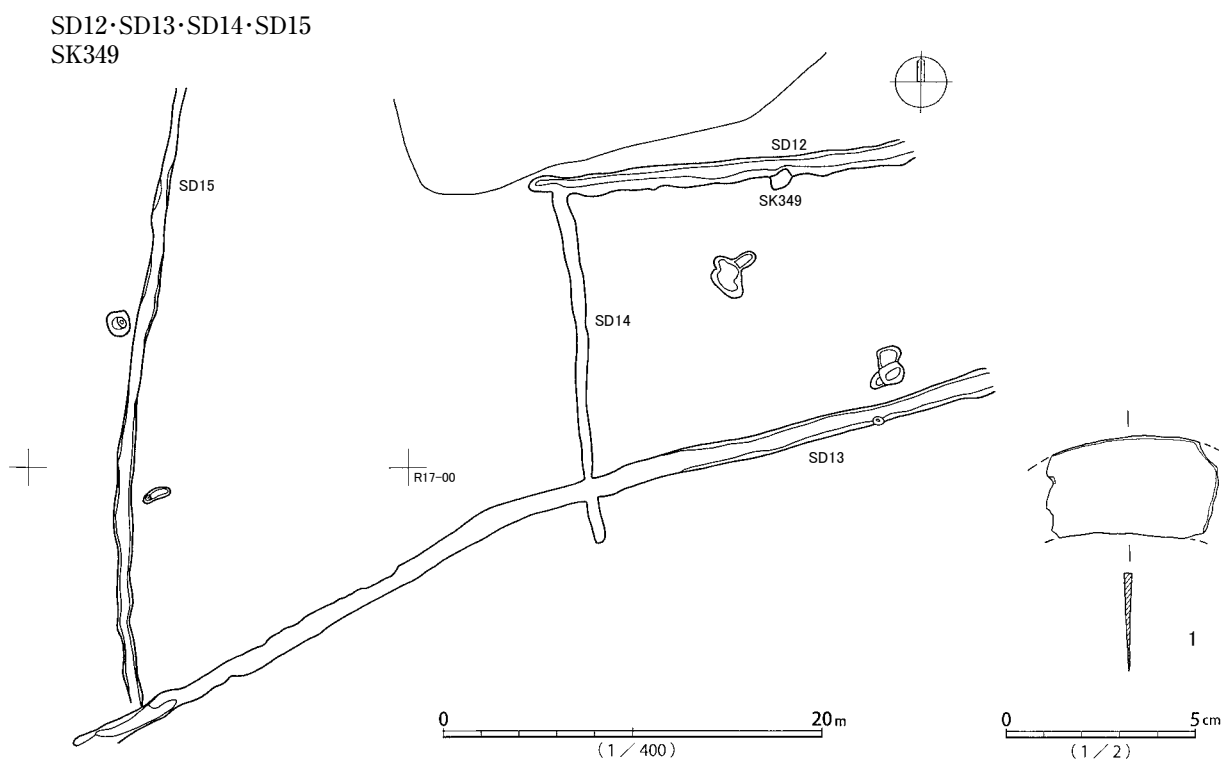
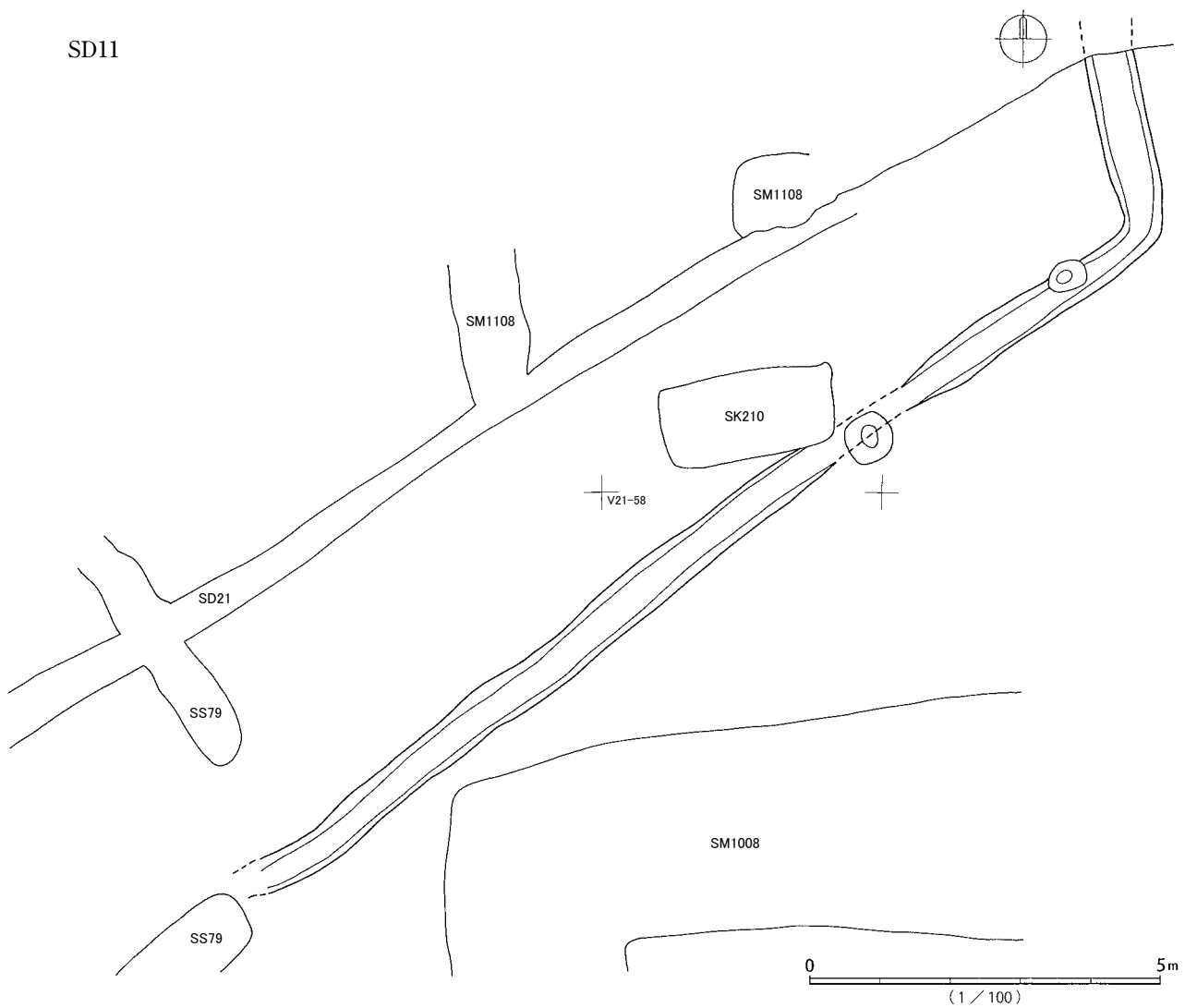
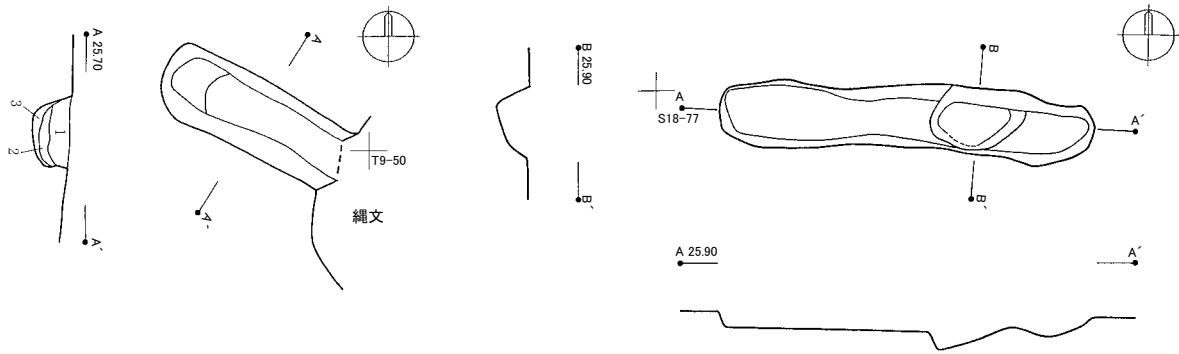
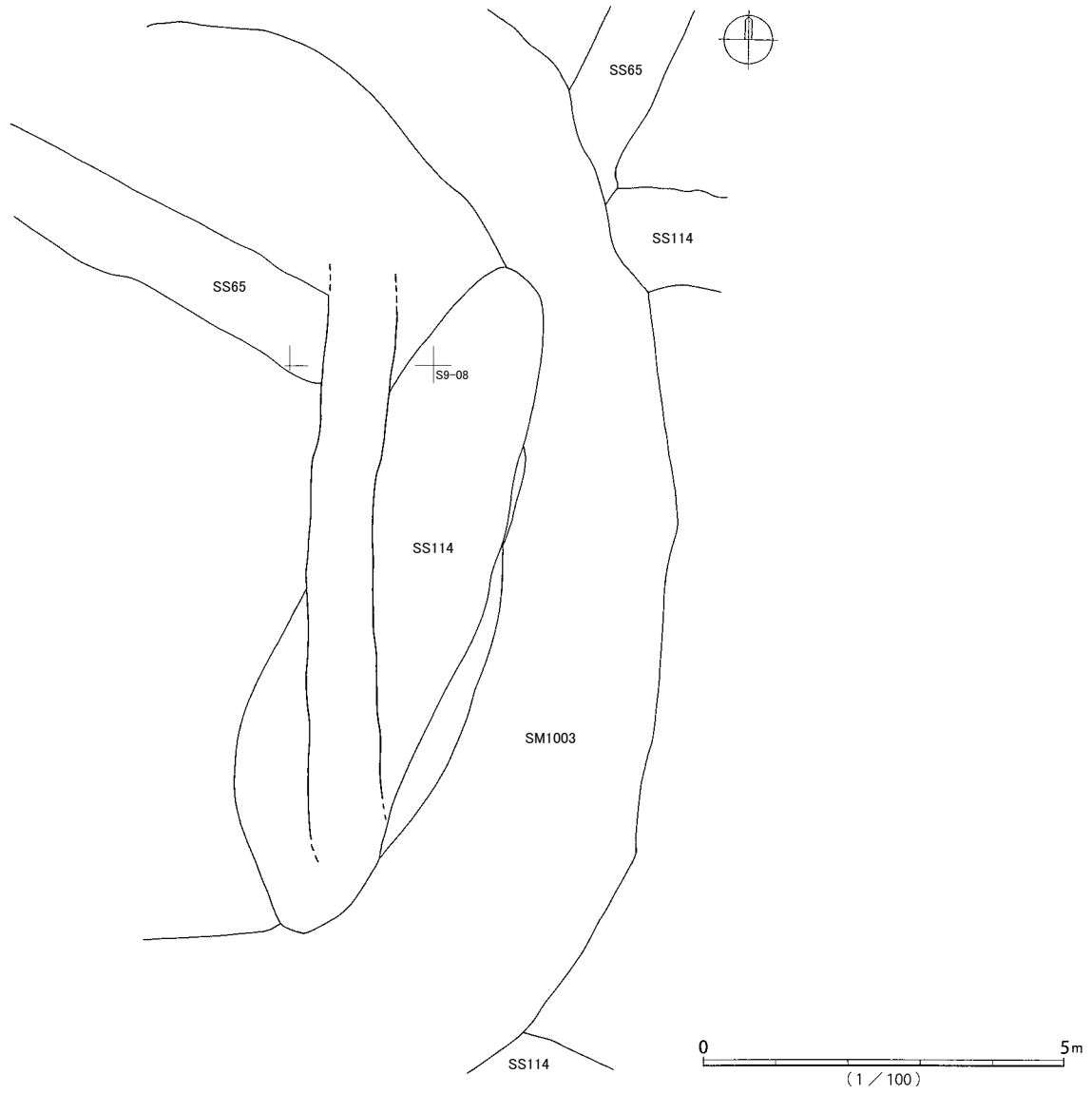


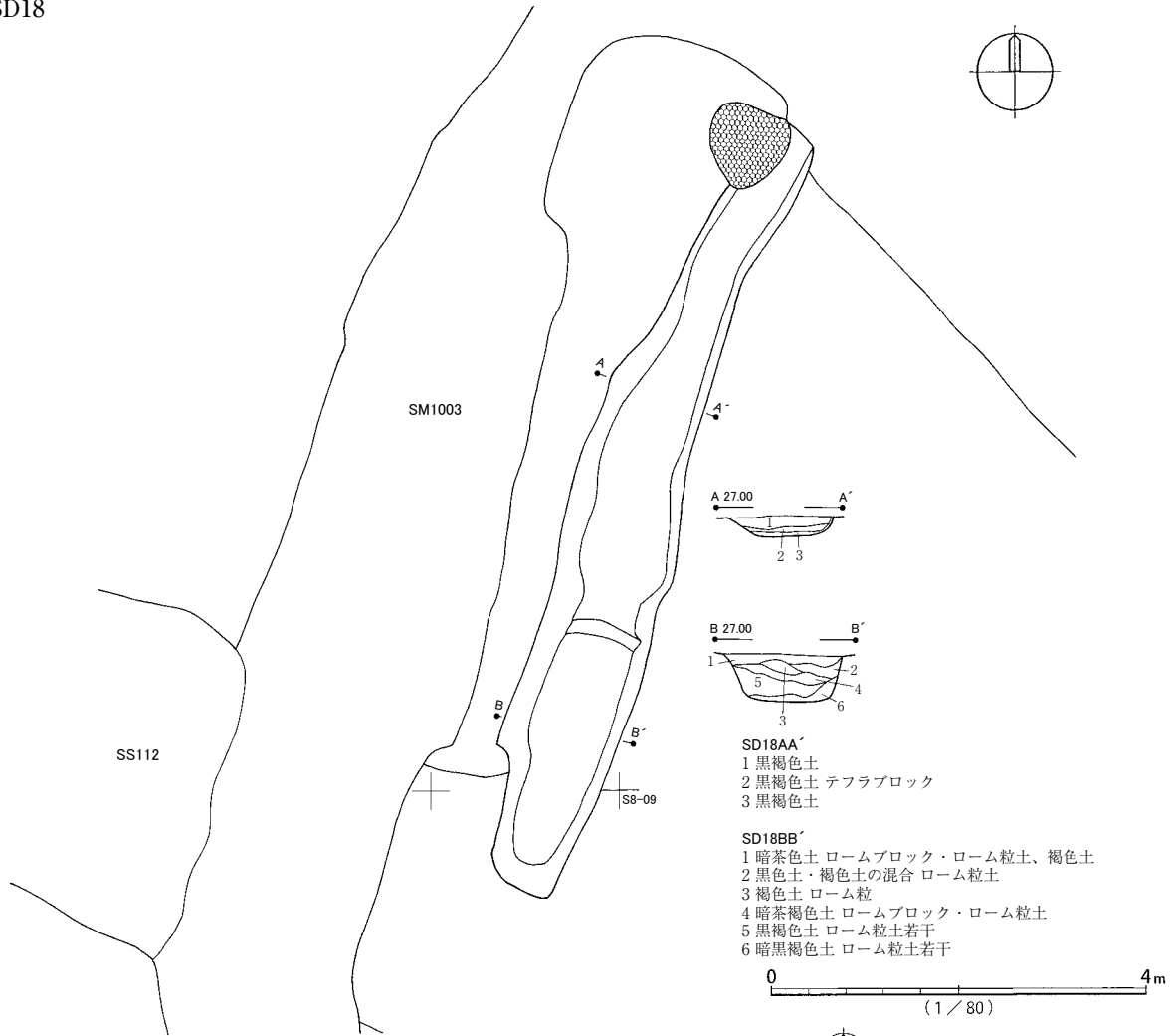
Fig.527 SD11、SD12、SD13、SD14、SD15、SK349 実測図



- SD17AA<sup>1</sup>
- 1 暗黒色土
  - 2 暗黒褐色土 ローム粒多量
  - 3 暗褐色土 褐色土、ローム粒多量

Fig.528 SD16、SD17、SD19 実測図

SD18



SD20

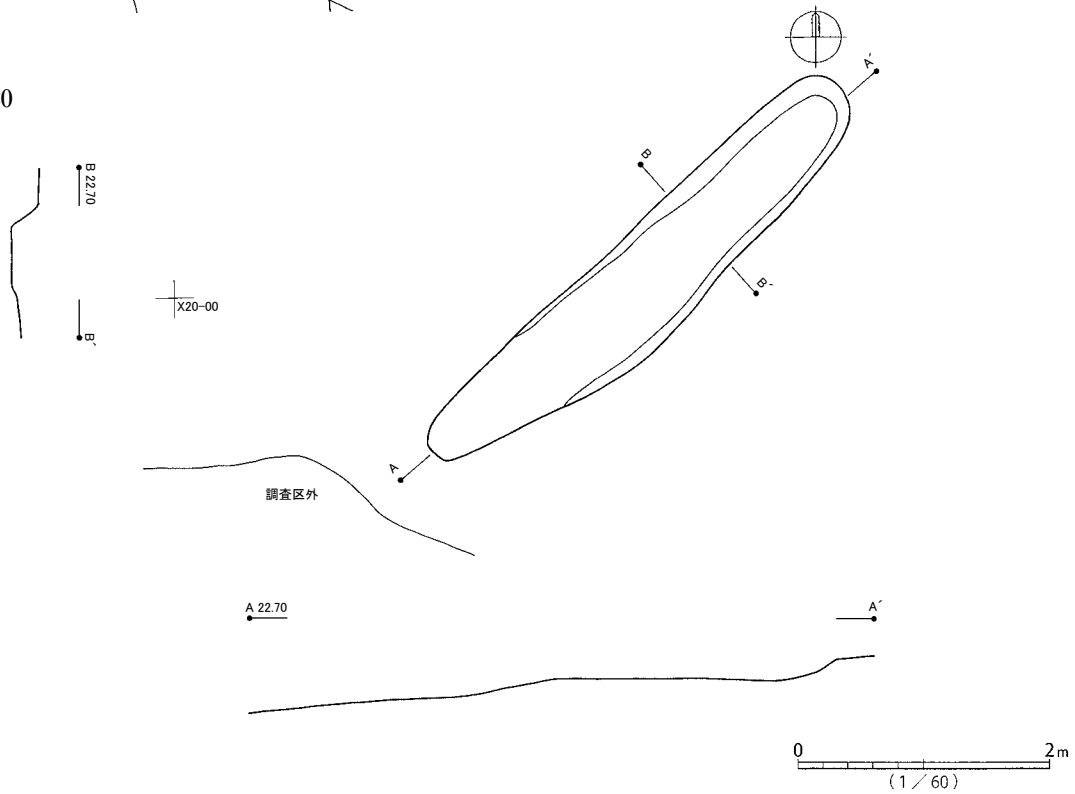
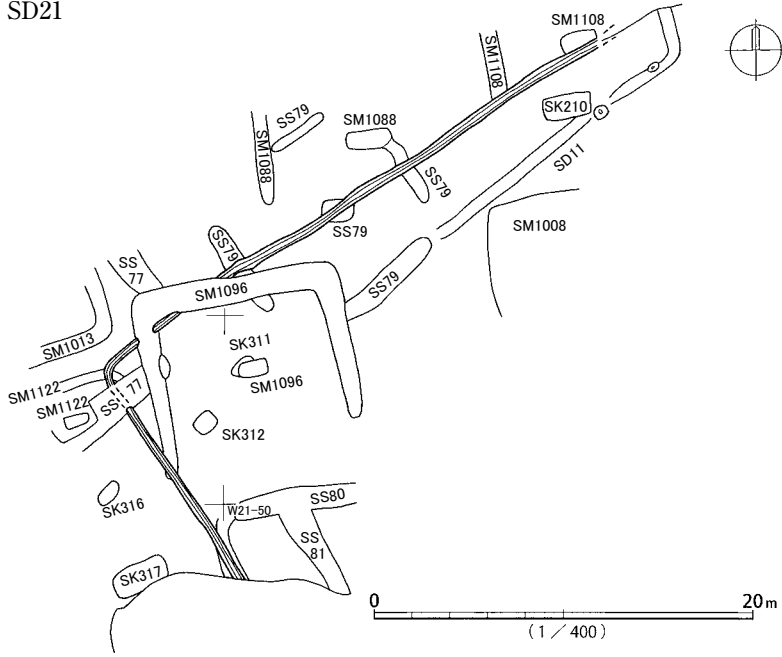
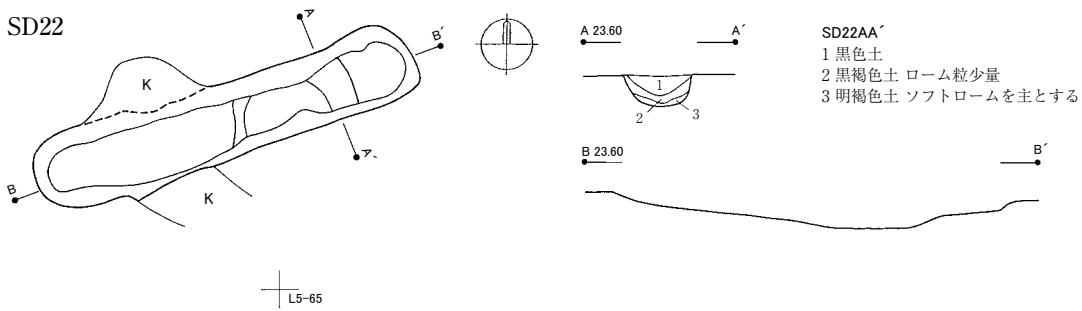


Fig.529 SD18、SD20 実測図

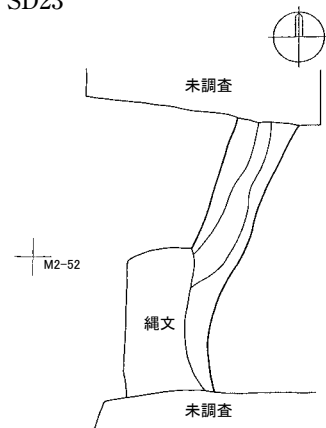
SD21



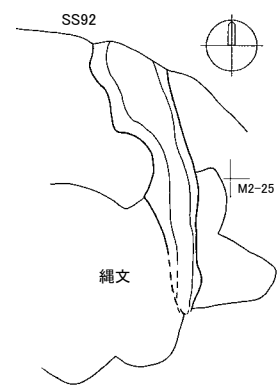
SD22



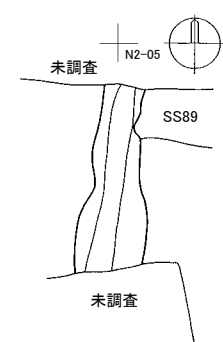
SD23



SD24



SD26



SD25

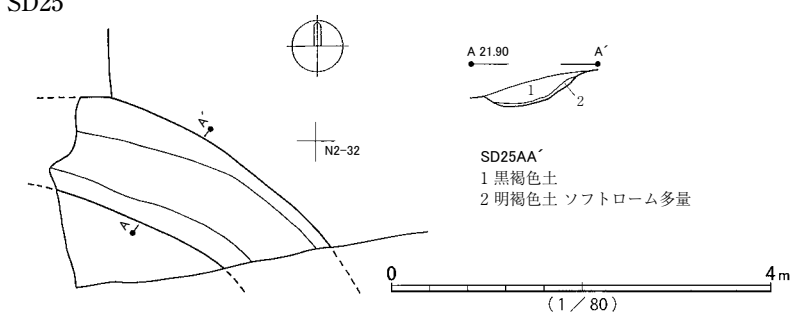
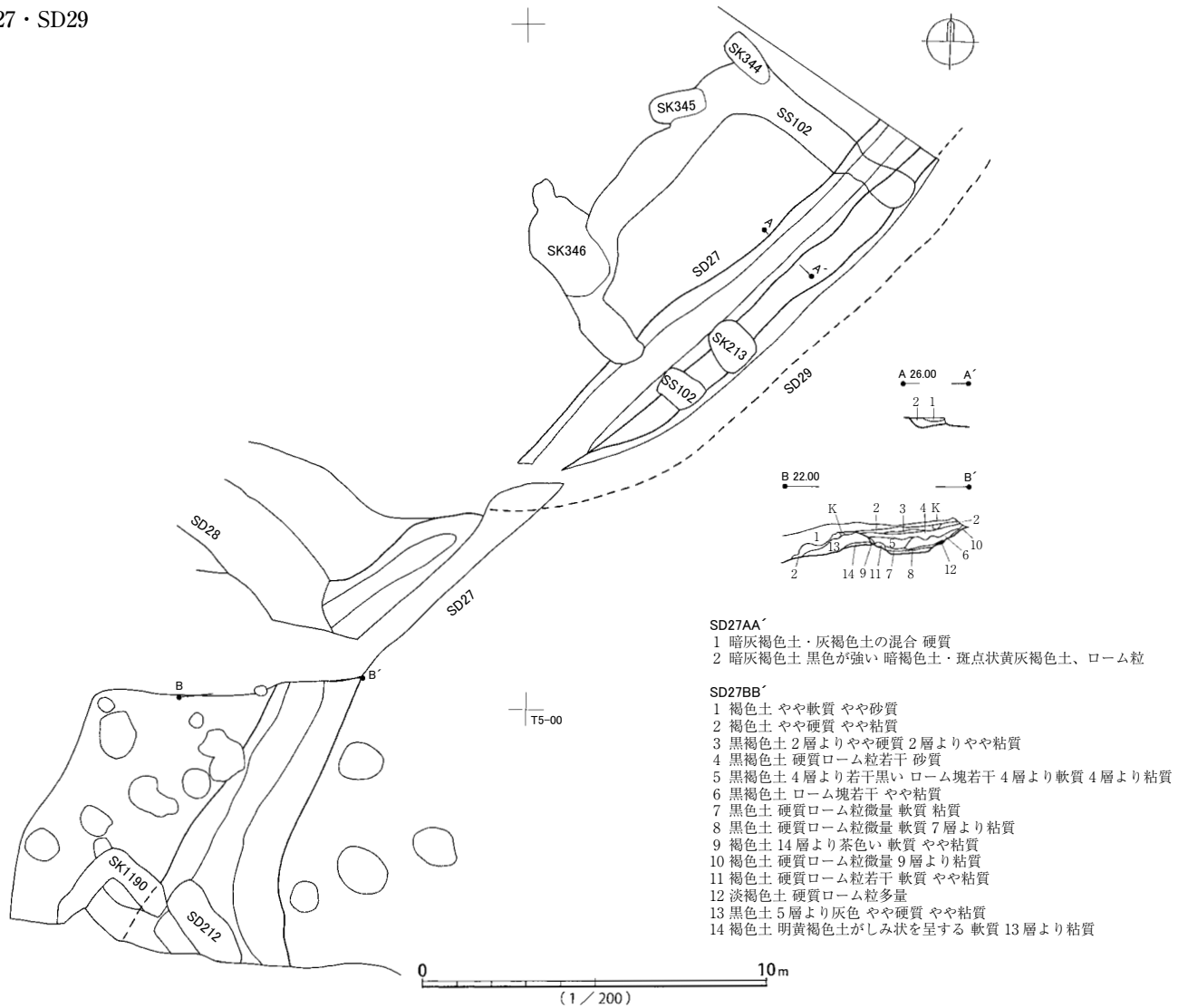


Fig.530 SD21、SD22、SD23、SD24、SD25、SD26 実測図

SD27・SD29



SD31

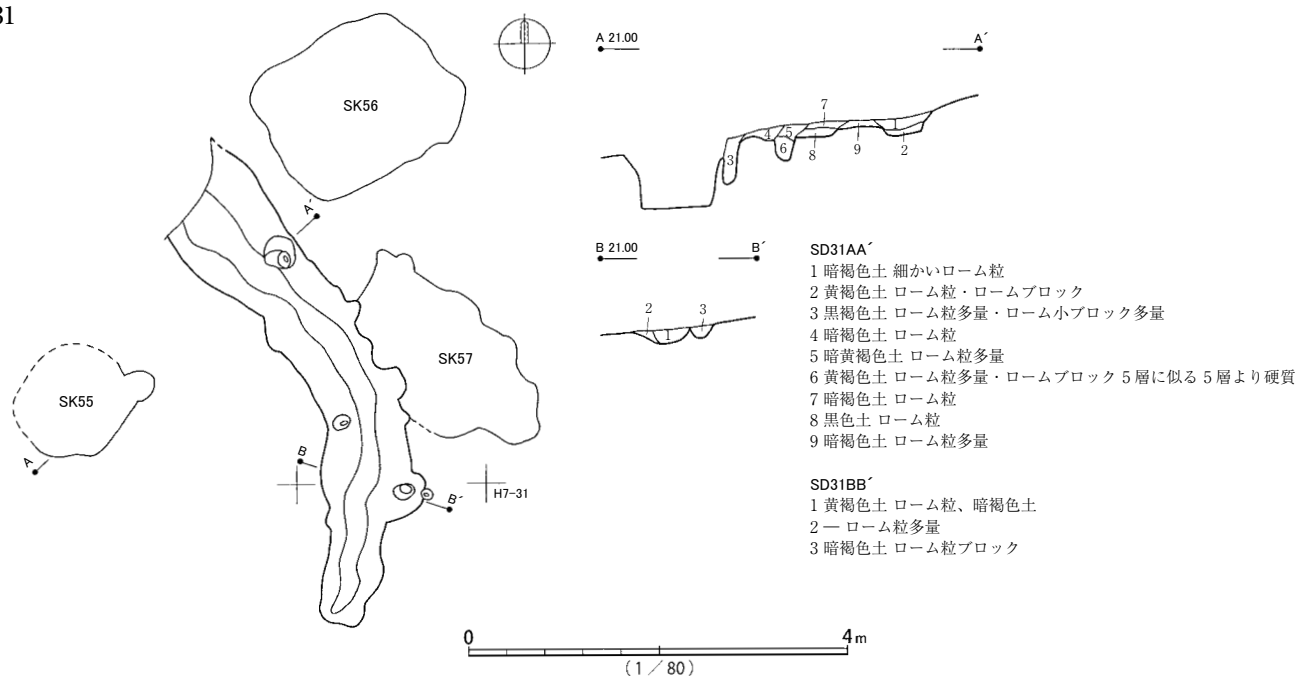


Fig.531 SD27、SD29、SD31 実測図

SD28

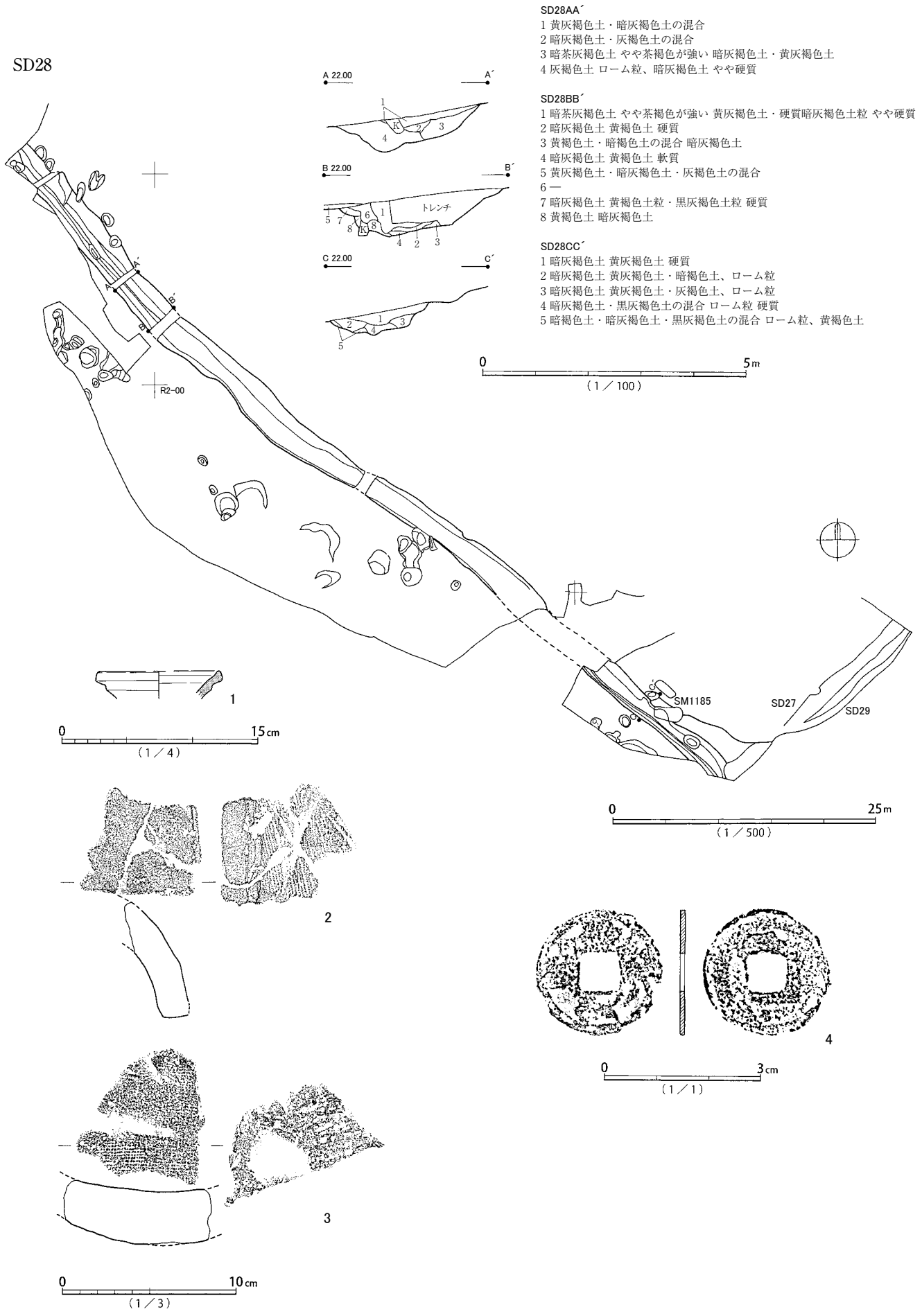


Fig.532 SD28 実測図

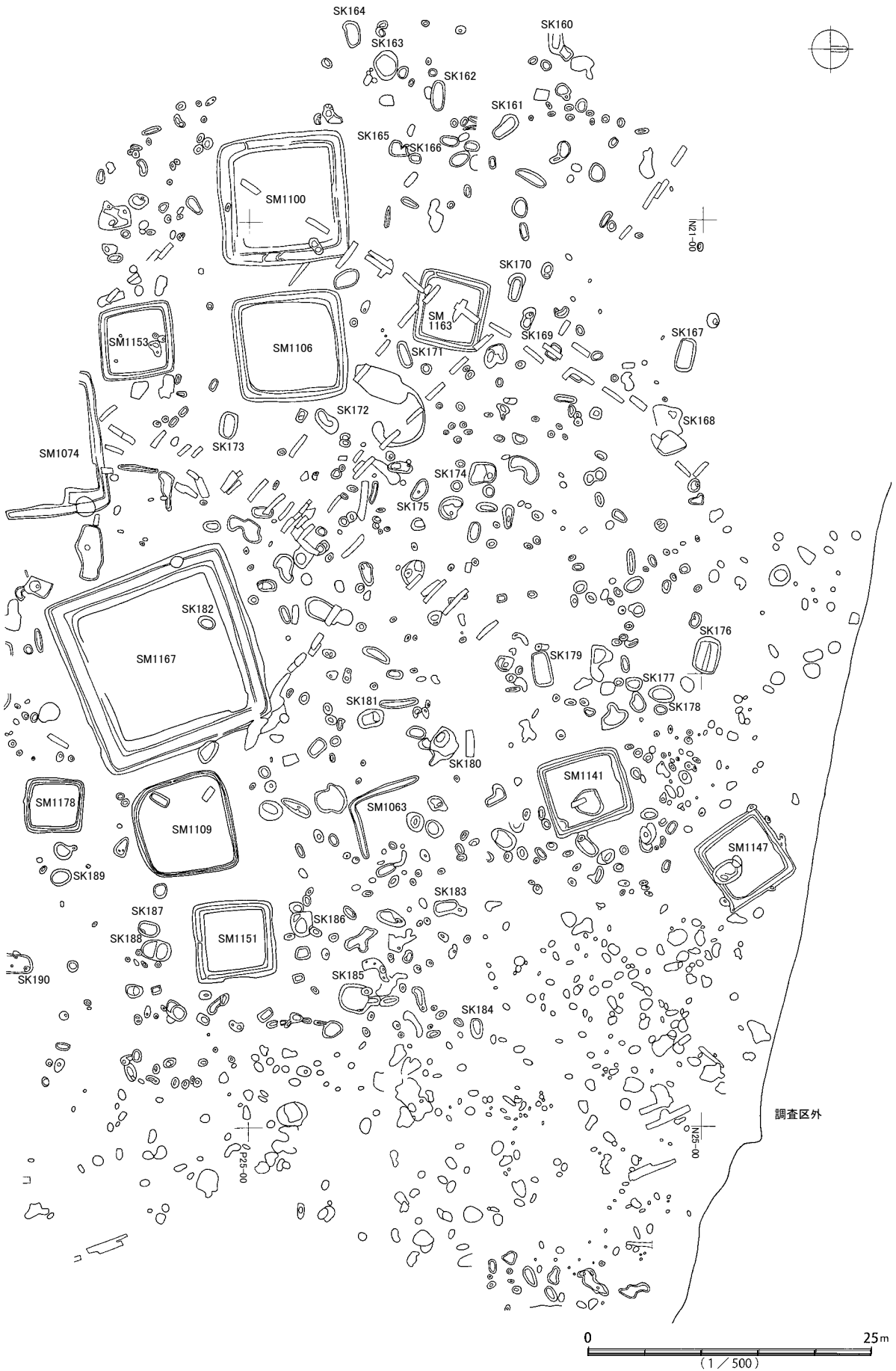


Fig.533 099 地区ピット群遺構実測図

## 4 遺構外の遺物

### 土器 (Fig.534~540, PL. 176~179, 193~194, Tab.6)

13地区の遺構外出土土器については、Tab.6 (DVDに収録) を参照されたい。ここでは特徴的な遺物について部分的に触れておく。土器は、1~10、112~124、159、175がTJ地区、11~42、125~130が099地区、43~45、161~163、179がSW83地区、46・47、169・170がセ54地区、48~108、153~158、180がセ72地区、131~134が064地区、135~152、164~168、176~178がセ28地区、171~174がセ73地区の出土である。

TJ地区は集落に伴うのか、終末期~前期の土器が主体となる。グリッド間での接合可能な個体が複数あり、集落の遺構に帰属する可能性がある。

セ72地区は特に宮ノ台式期の土器が主体となる。本地区と099地区には宮ノ台式期の竪穴建物の存在が公表されている。また、調査区内には古墳時代後期の墳墓は認められない(土壌は存在する)が、154~156の透かしを持つ高坏など、周辺に本期の遺構がある可能性は高い。セ28では、平安時代の灰釉陶器や、平瓦などが散見され、これは、谷部をめぐる台地南端部に形成される掘立柱建物跡を伴う竪穴建物跡群に伴うとみられ、古墳群の終焉に関連する遺構群である可能性は高い。

47は、鉢形の器形や、底部に木葉痕を残すなど在地の土器とは異なる特徴を有する。また、外面の体部下位に靨痕が認められる。118の壺形土器は頸部と胴部の接合部に突帯がめぐり、胴部上位には櫛描波状文を円形の竹筒刺突で区画するなど、庄内式系譜の影響を受ける土器である。

### 中世陶磁器 (Fig.541, PL.179, Tab.7)

中世陶磁器類は064地区南側から集中して出土しているほか、099地区などにも散見される。

### 土製品 (Fig.542, PL.215・216, Tab.8)

土製品は集落のそれと比較して感覚的ではあるが、数量が少ない。土玉、紡錘車の紡輪、転用砥石や硯、土錘などがある。特徴的なものとして、1の舟形土製品が挙げられる。集落内でも舟形土製品とされる土器が2点認められているが、2点とも底部が平坦で、木製品に認められる槽に近い。しかし、この舟形土製品は底部が長軸・短軸方向共に曲面で構成されており、形状が明らかに異なる。

### 石製品 (Fig.543, PL.215, Tab.9)

石製品は、砥石が主体となり、有孔円盤や、分銅形石製品である。また、セ28地区からは、多字一経石とみられる経石がグリッドの一括取り上げで出土している。

### 金属製品 (Fig.544~553, PL.206~209, Tab.10)

金属製品では、1・2が銅製の指輪、3が銅釧であろうか。他には刀子などの工具以外、鉄製の釘が多く、ほかに把手なども含め棺に伴うとみられるものが主体となる。37は鉄鍋の脚部とみられる。SK130-1の鉄鍋か、不明のTJ地区出土とされる鉄鍋と同個体の可能性がある。鉄滓は、小型の椀型滓を含むが天神台遺跡の集落である北側調査区ではない、セ28地区の出土であるため、奈良・平安時代以降のものであろうか。銭は寛永通宝が主体となる。墳丘表土からの採集品が多い。



玉類 (Fig.553、PL.215、Tab.11)

1は土製勾玉、2・3ガラス小玉、4管玉、5が土錘であろうか。

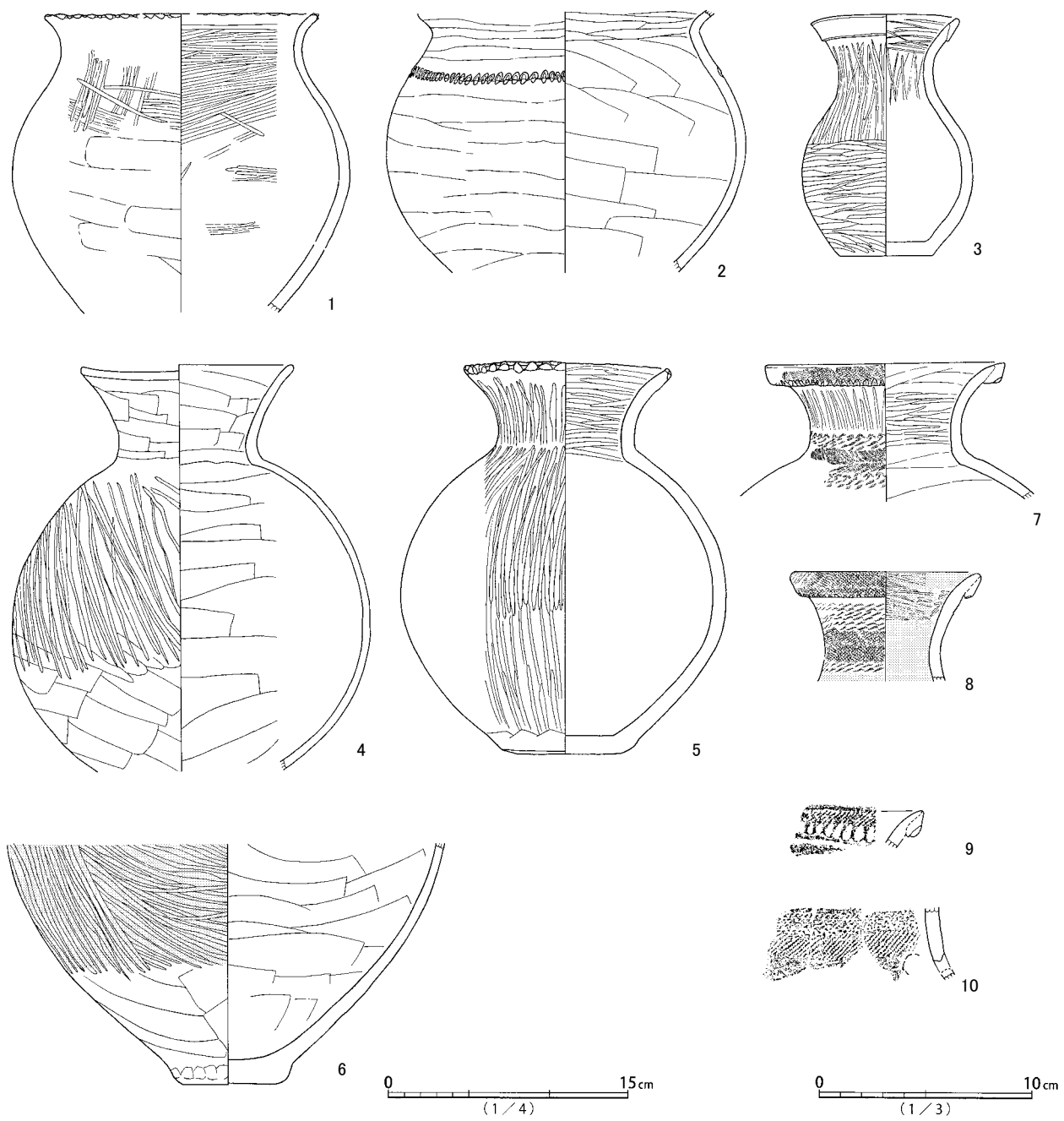


Fig.534 遺構外遺物 土器 (1) 実測図

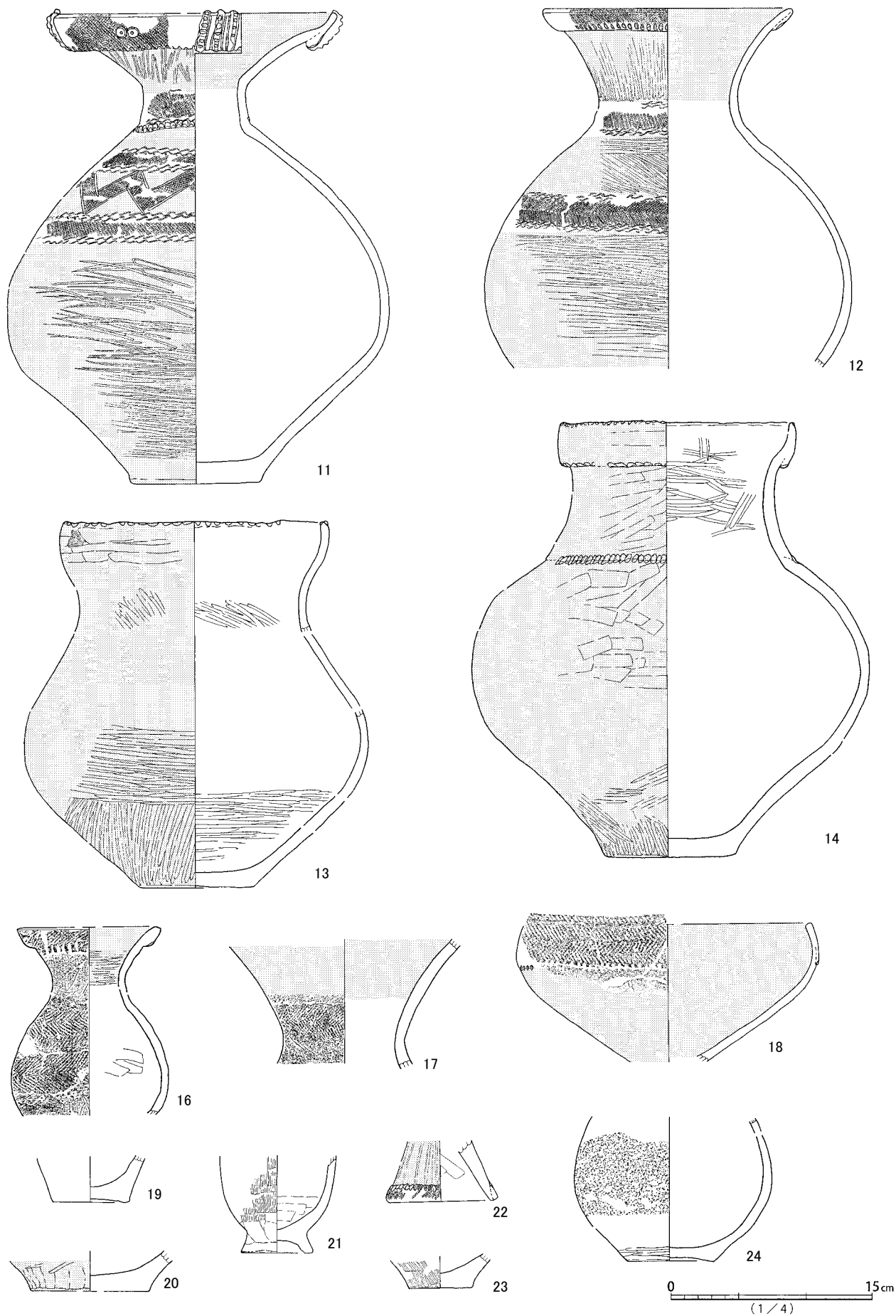


Fig.535 遺構外遺物 土器(2) 実測図

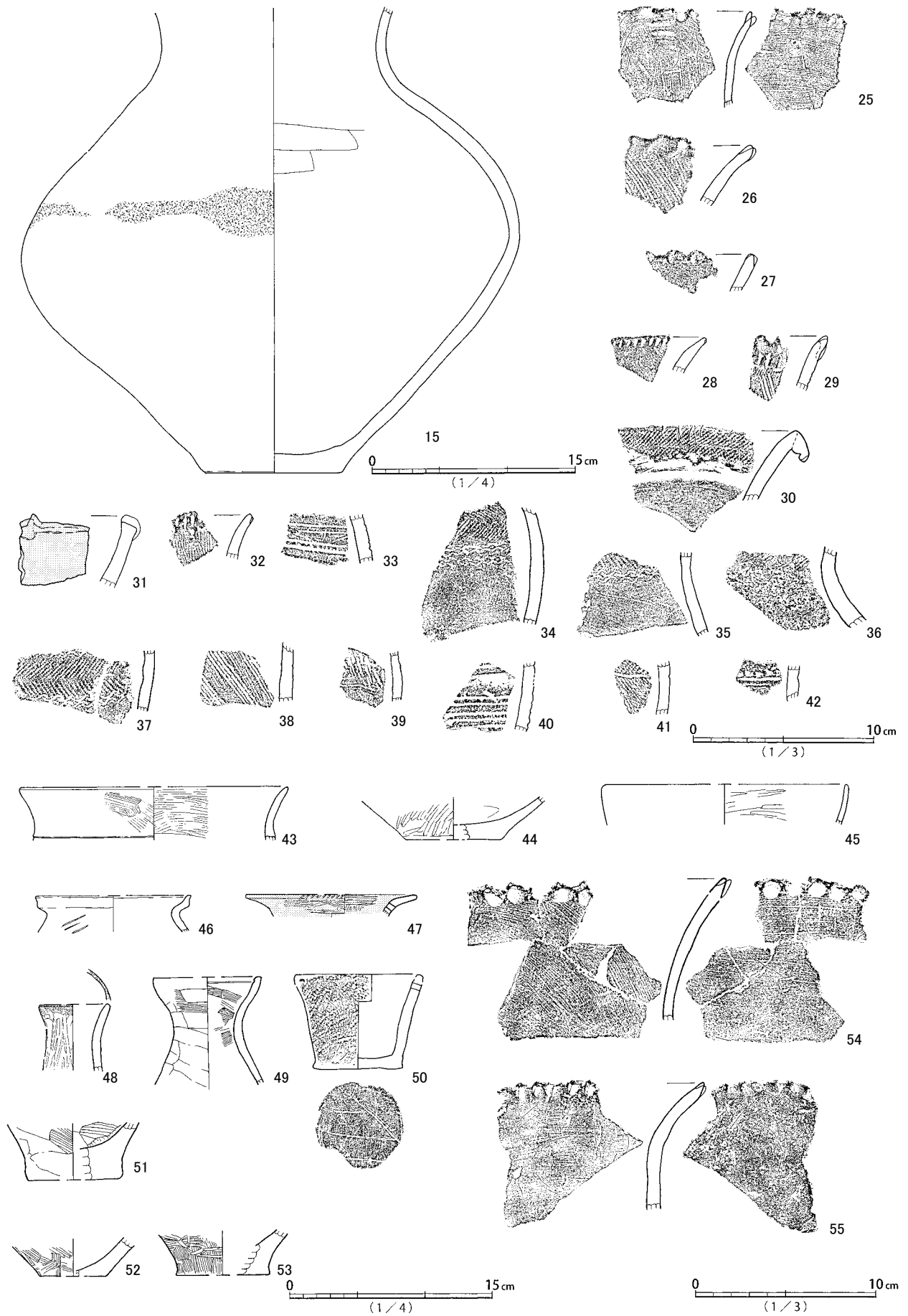


Fig.536 遺構外遺物 土器(3) 実測図

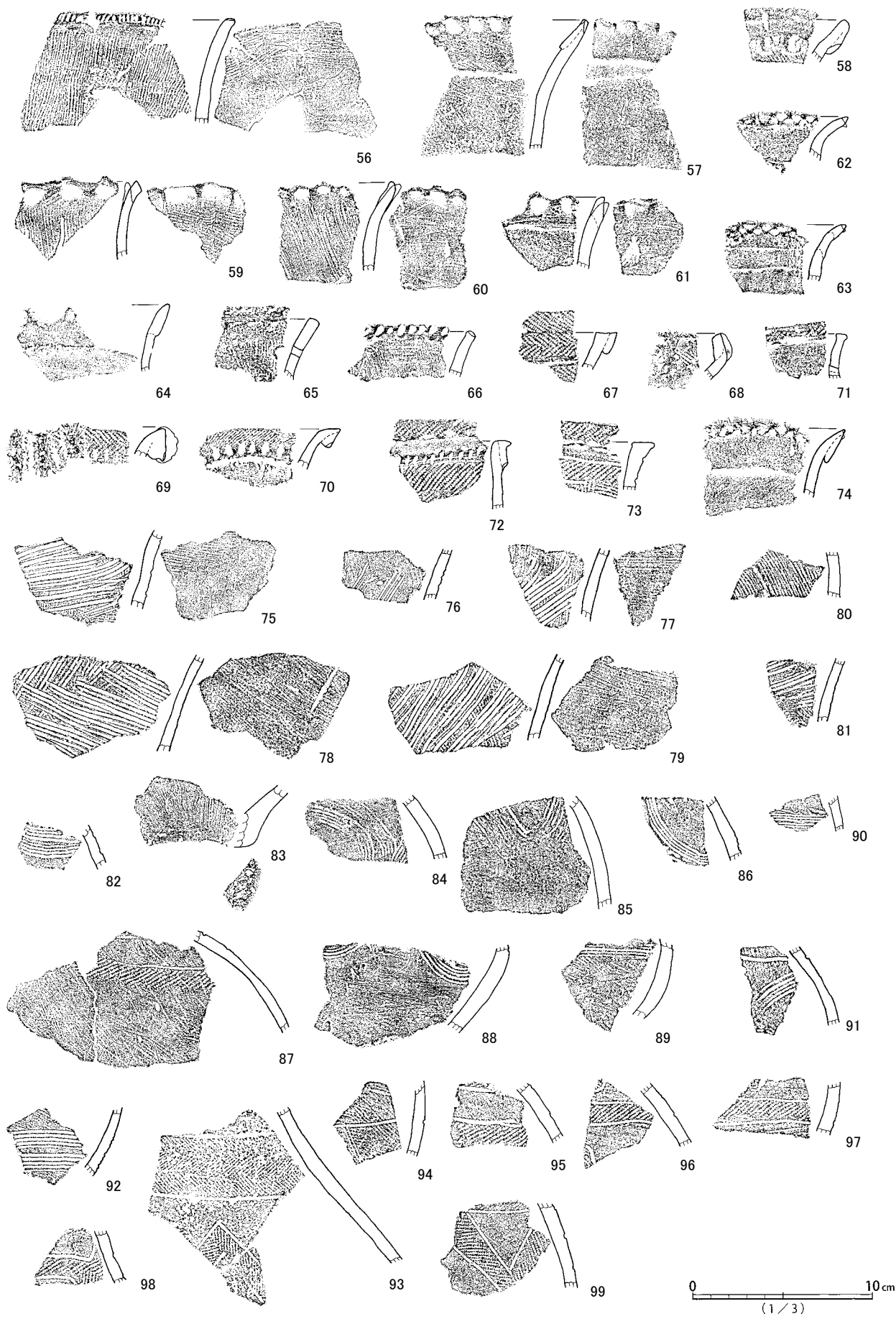


Fig.537 遺構外遺物 土器(4) 実測図

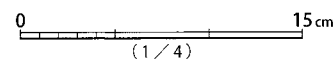
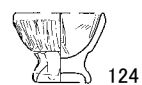
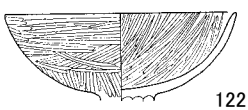
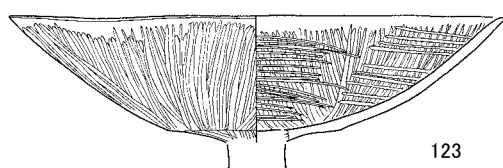
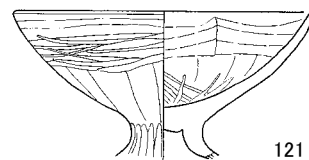
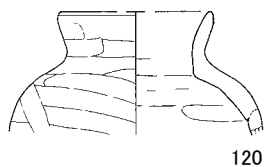
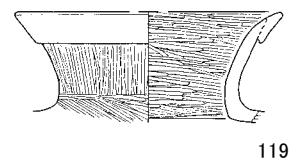
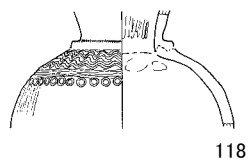
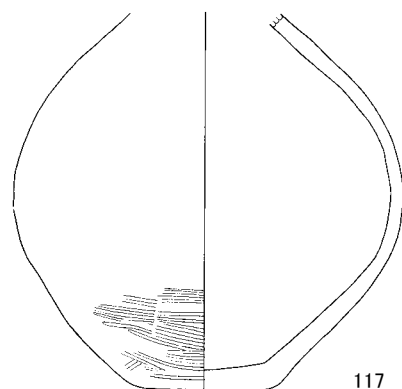
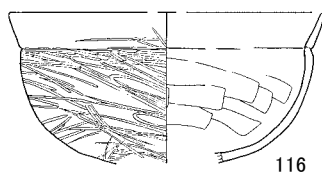
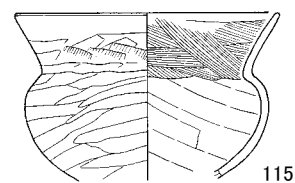
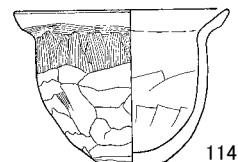
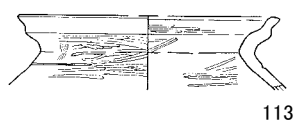
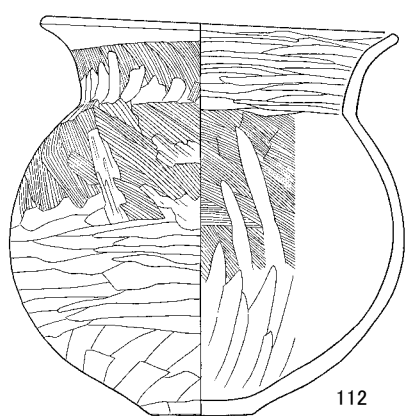
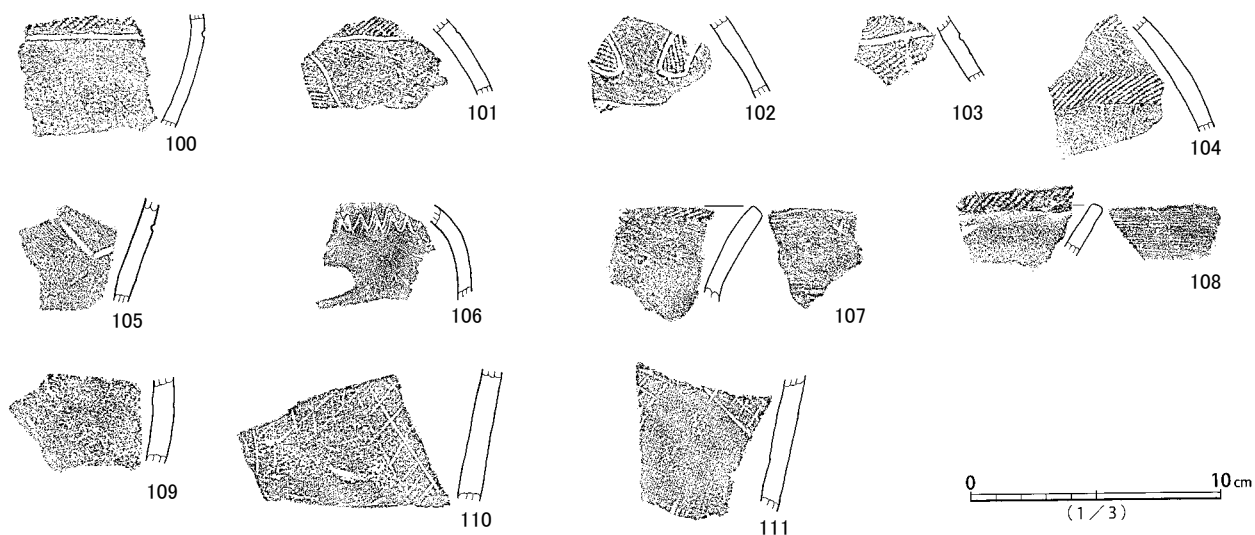


Fig.538 遺構外遺物 土器 (5) 実測図

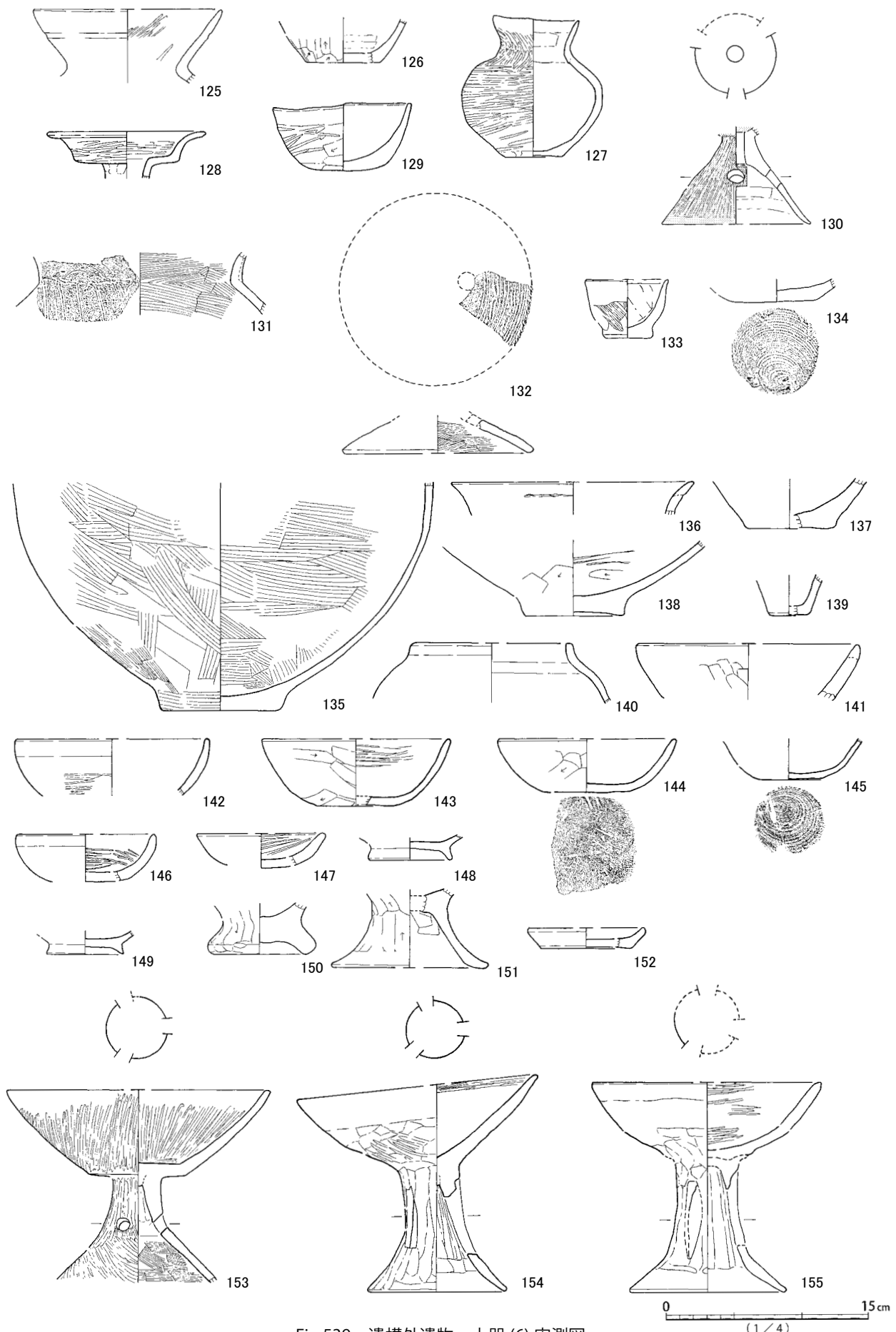


Fig.539 遺構外遺物 土器(6) 実測図

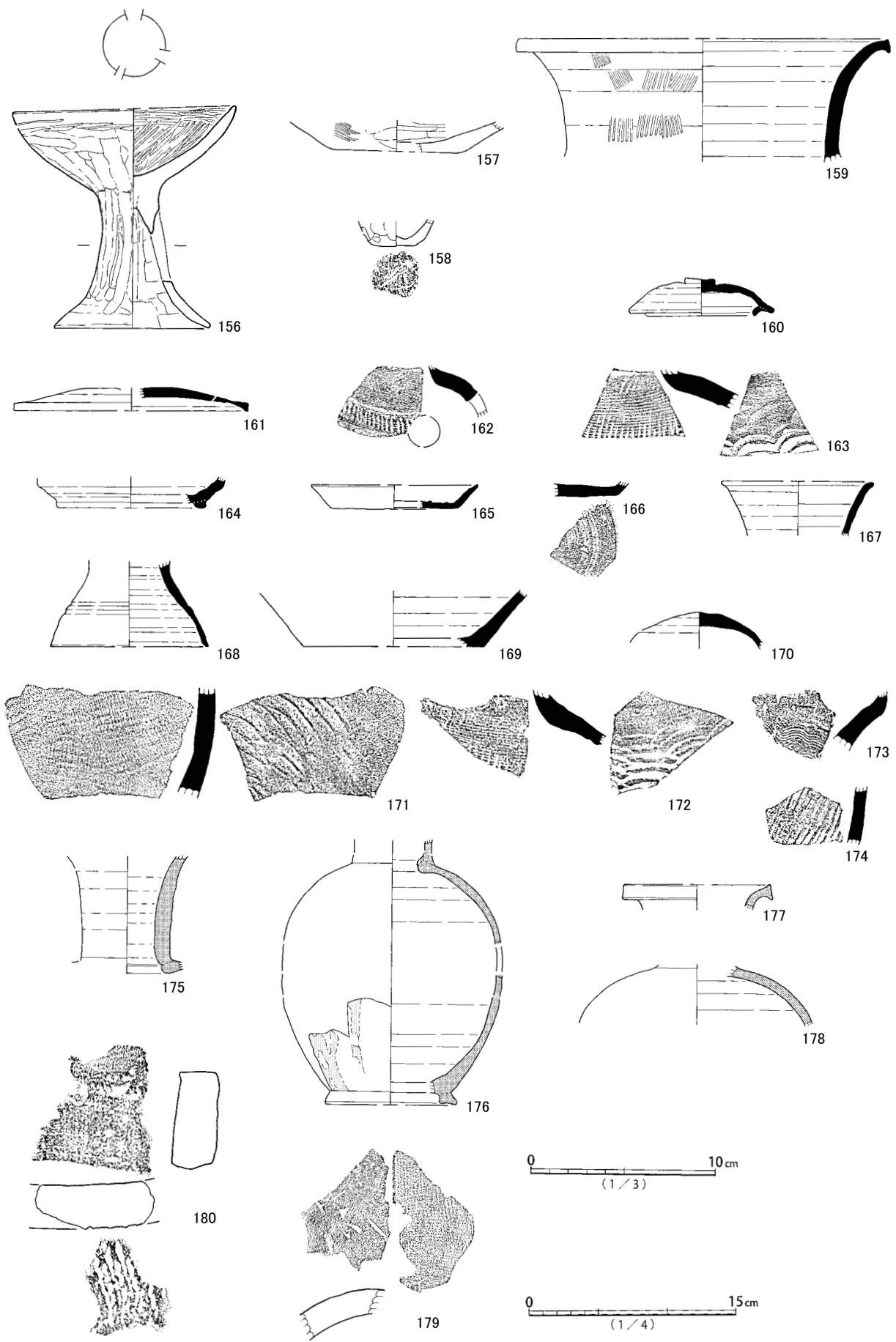


Fig.540 遺構外遺物 土器(7) 実測図



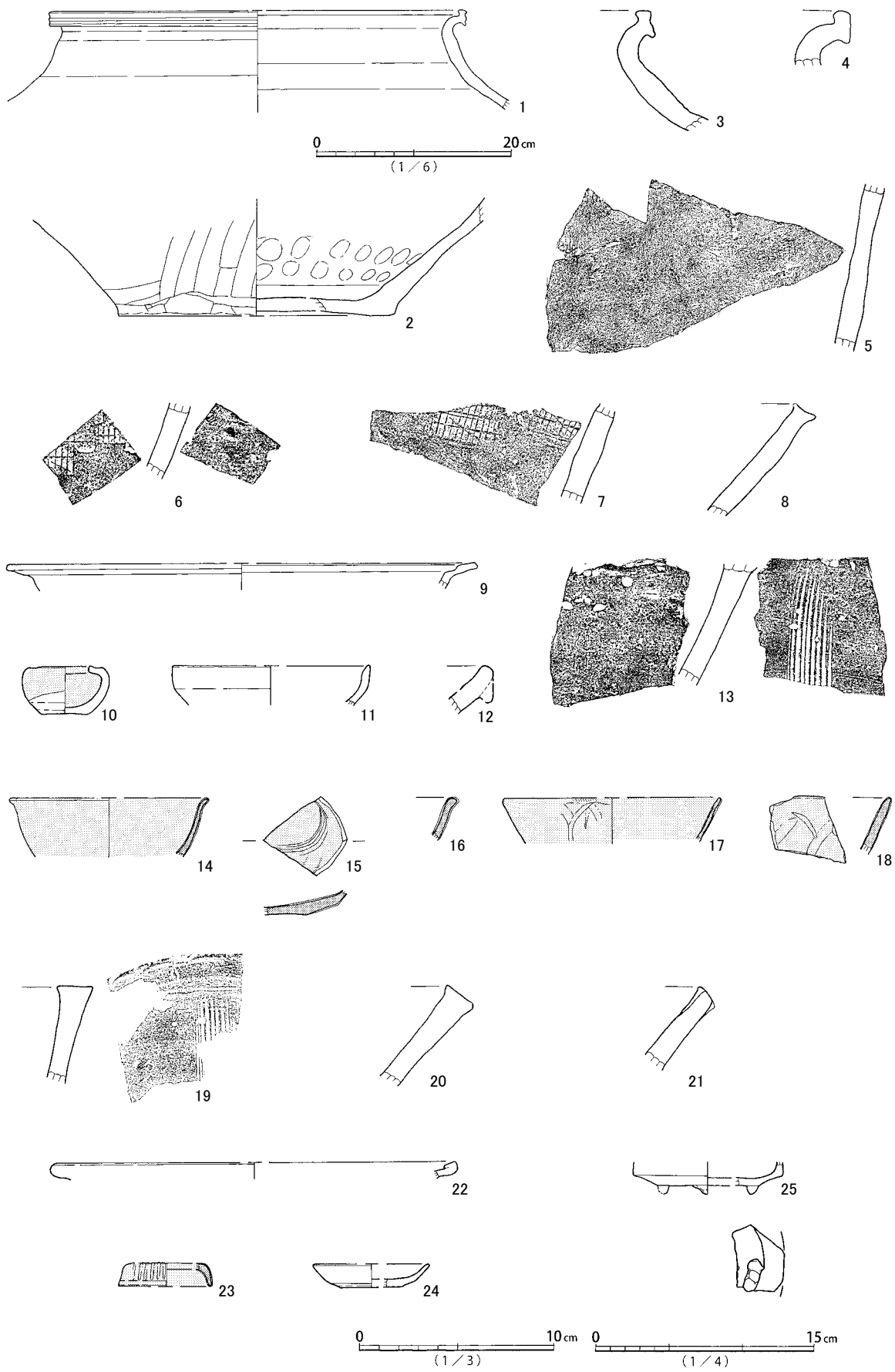


Fig.541 遺構外遺物 中世陶器実測図

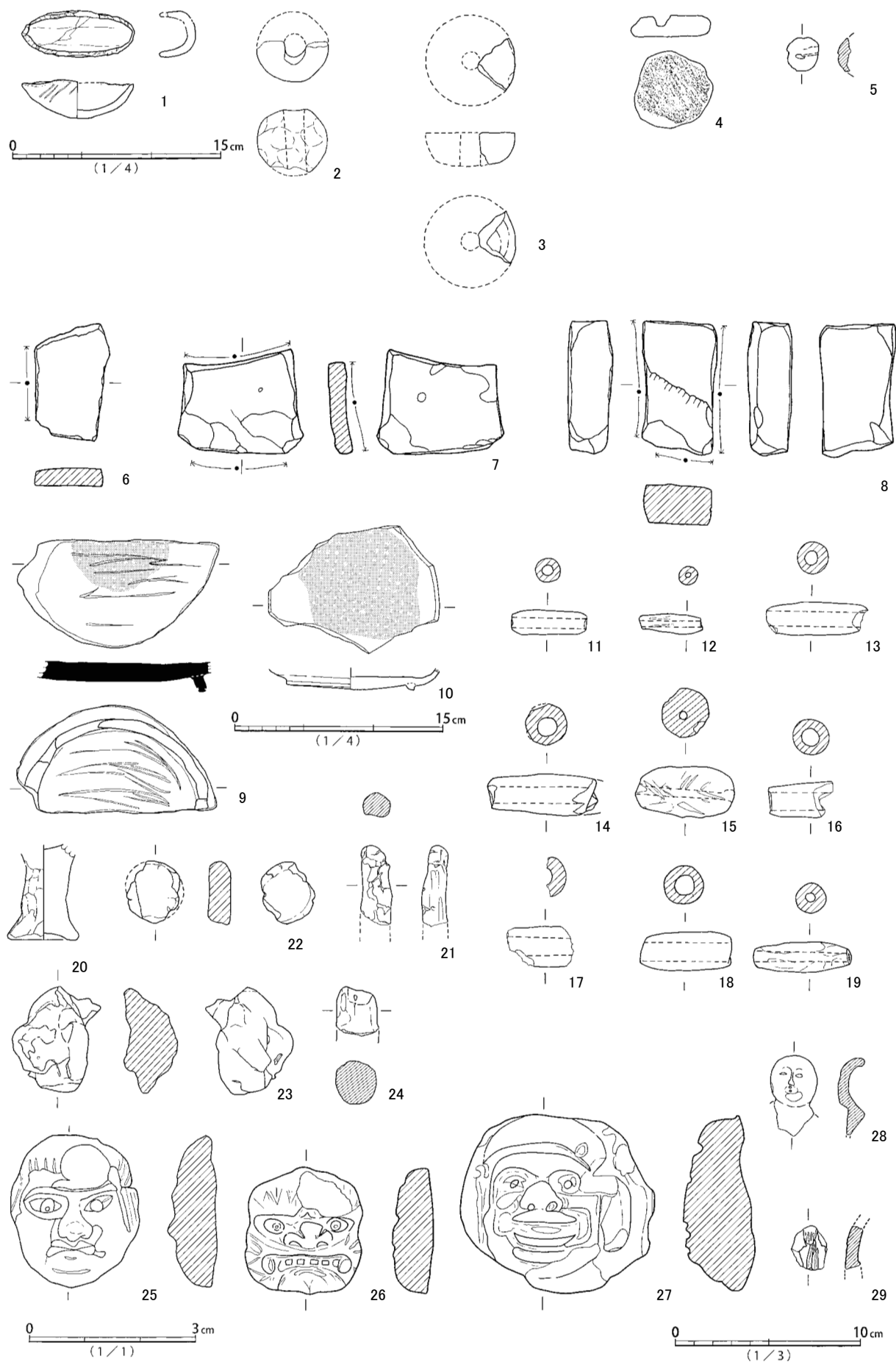


Fig.542 遺構外遺物 土製品実測図

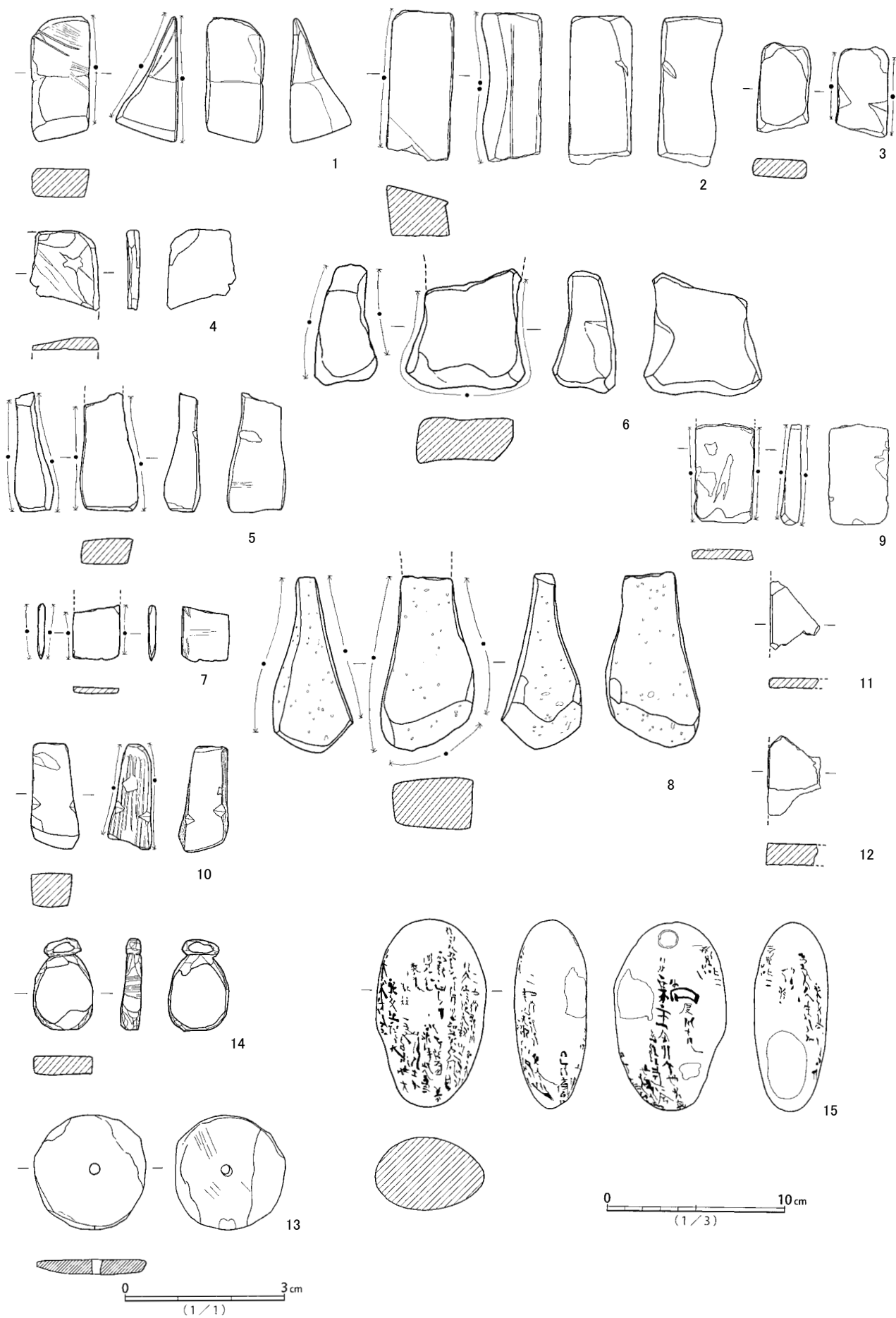


Fig.543 遺構外遺物 石製品実測図

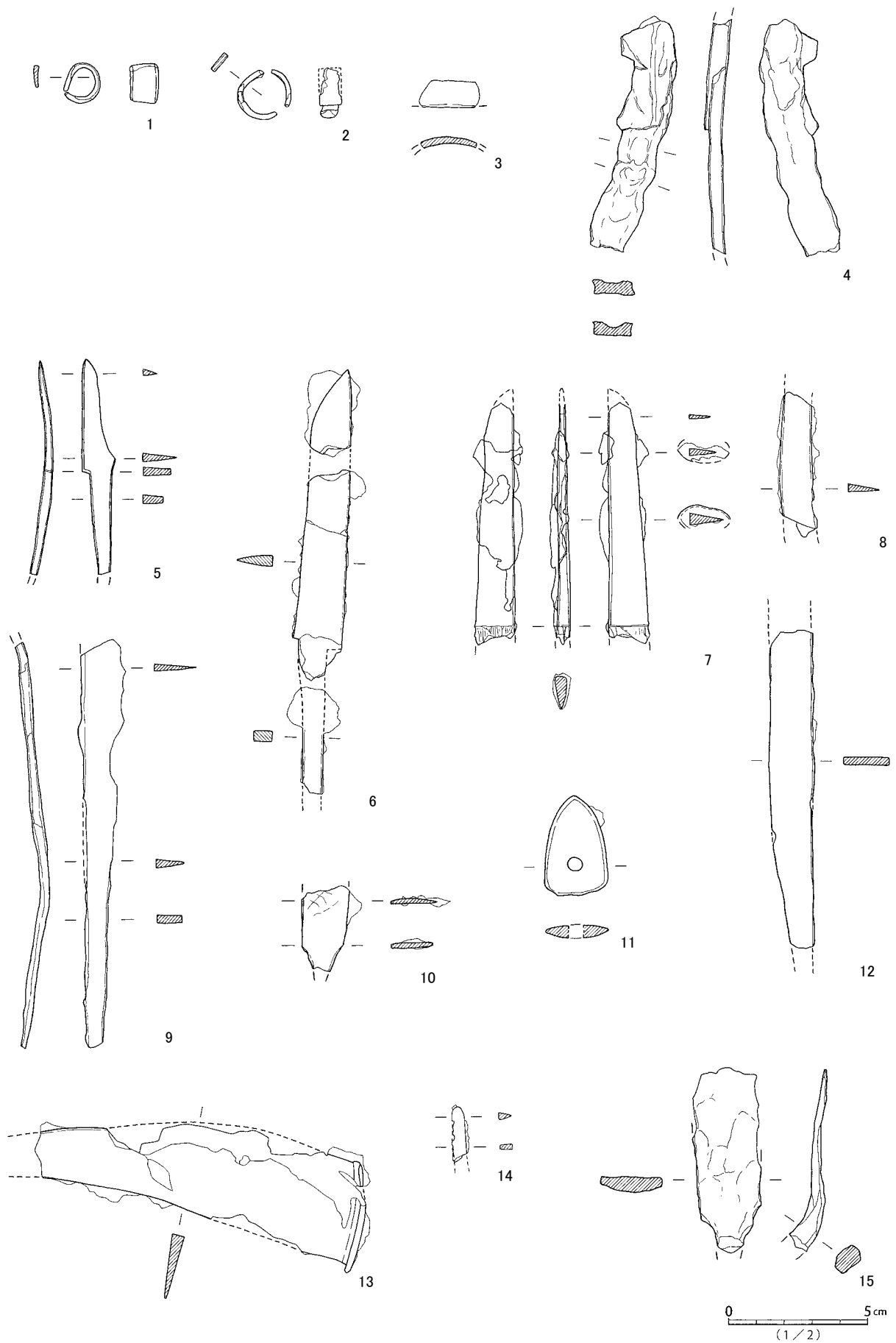


Fig.544 遺構外遺物 金属器等 (1) 実測図

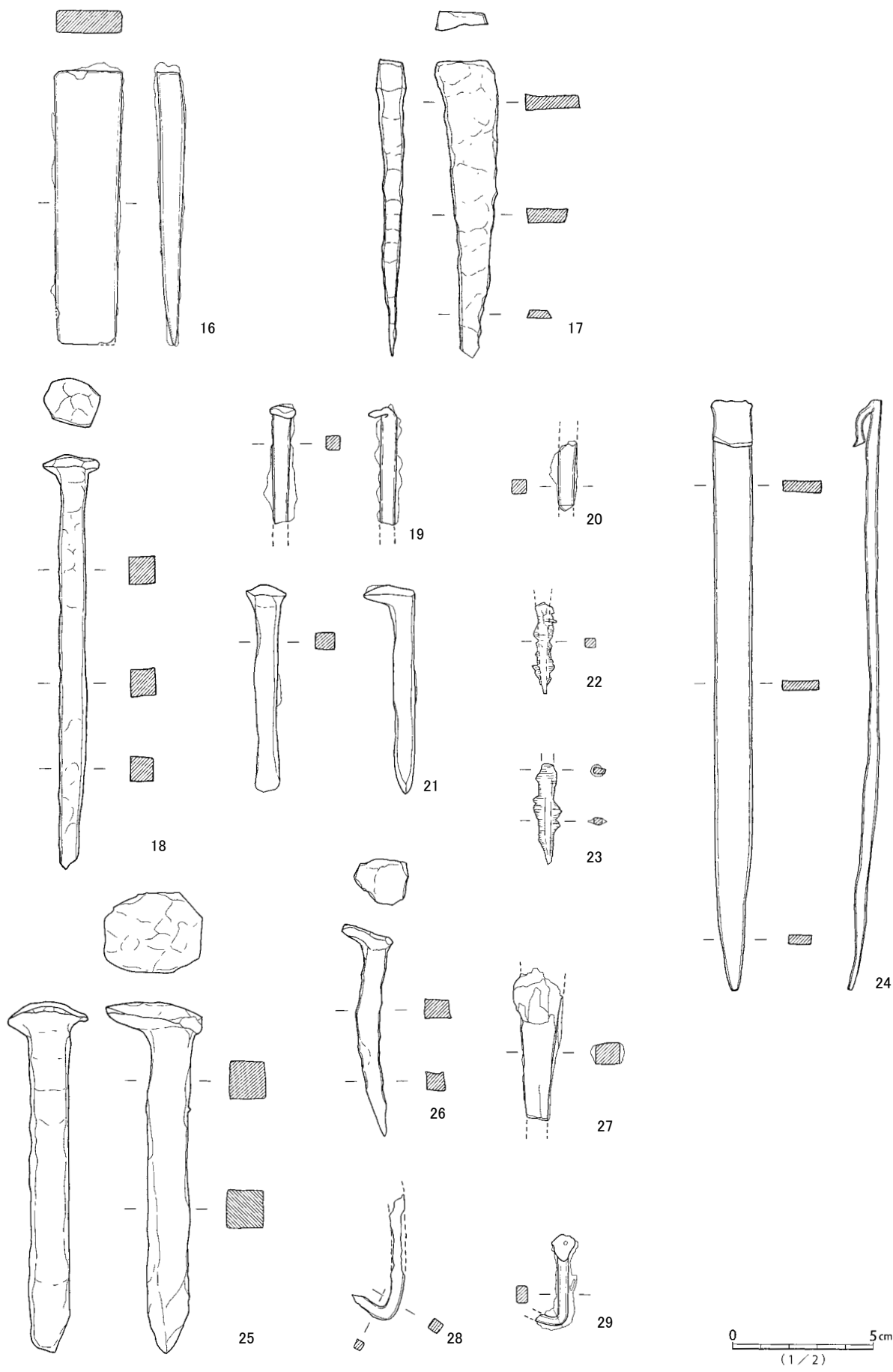


Fig.545 遺構外遺物 金属器等 (2) 実測図

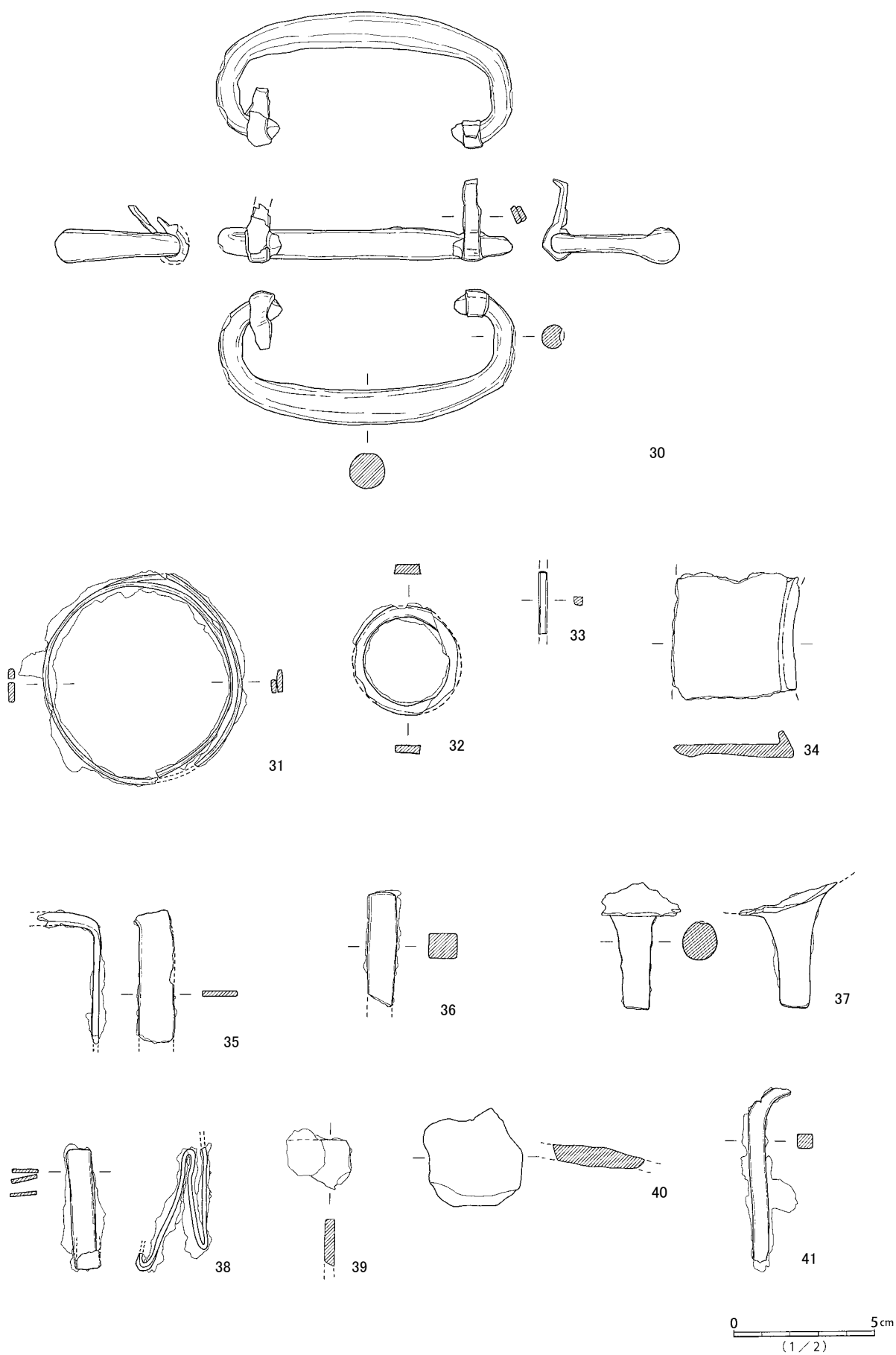
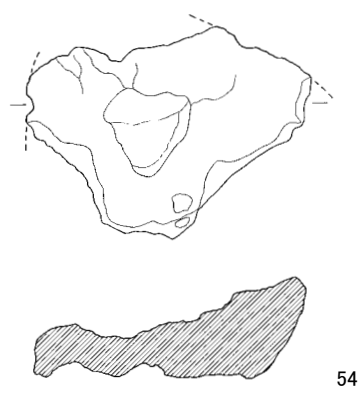
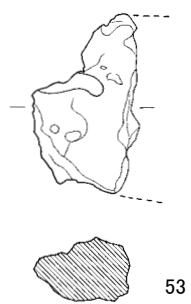
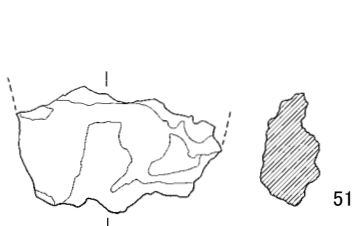
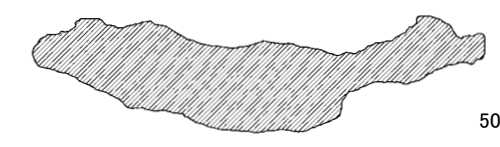
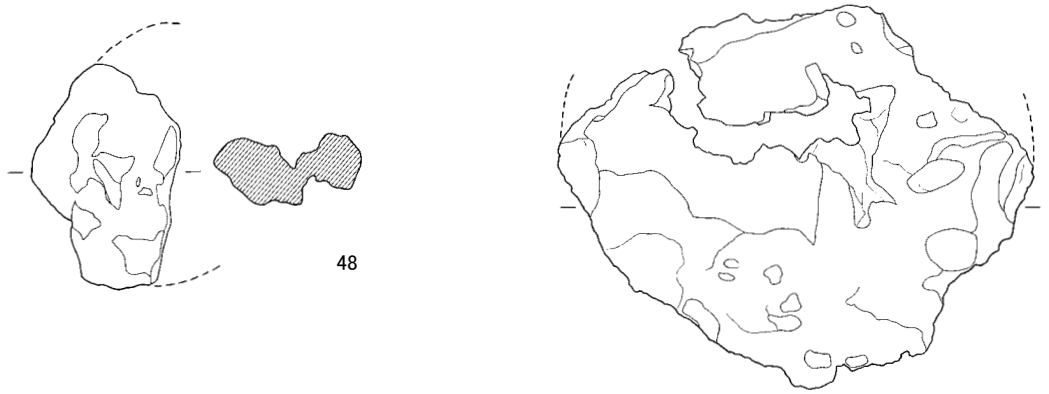
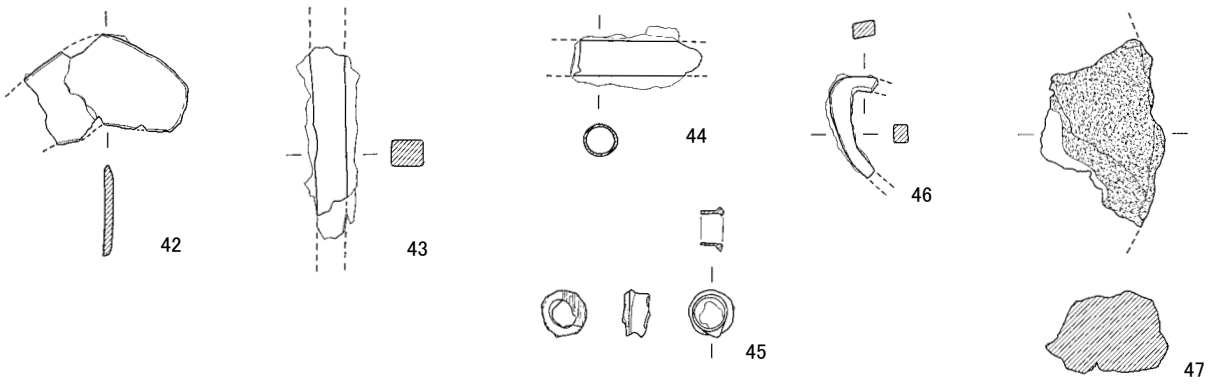


Fig.546 遺構外遺物 金属器等 (3) 実測図



0 5cm  
(1/2)

Fig.547 遺構外遺物 金属器等 (4) 実測図

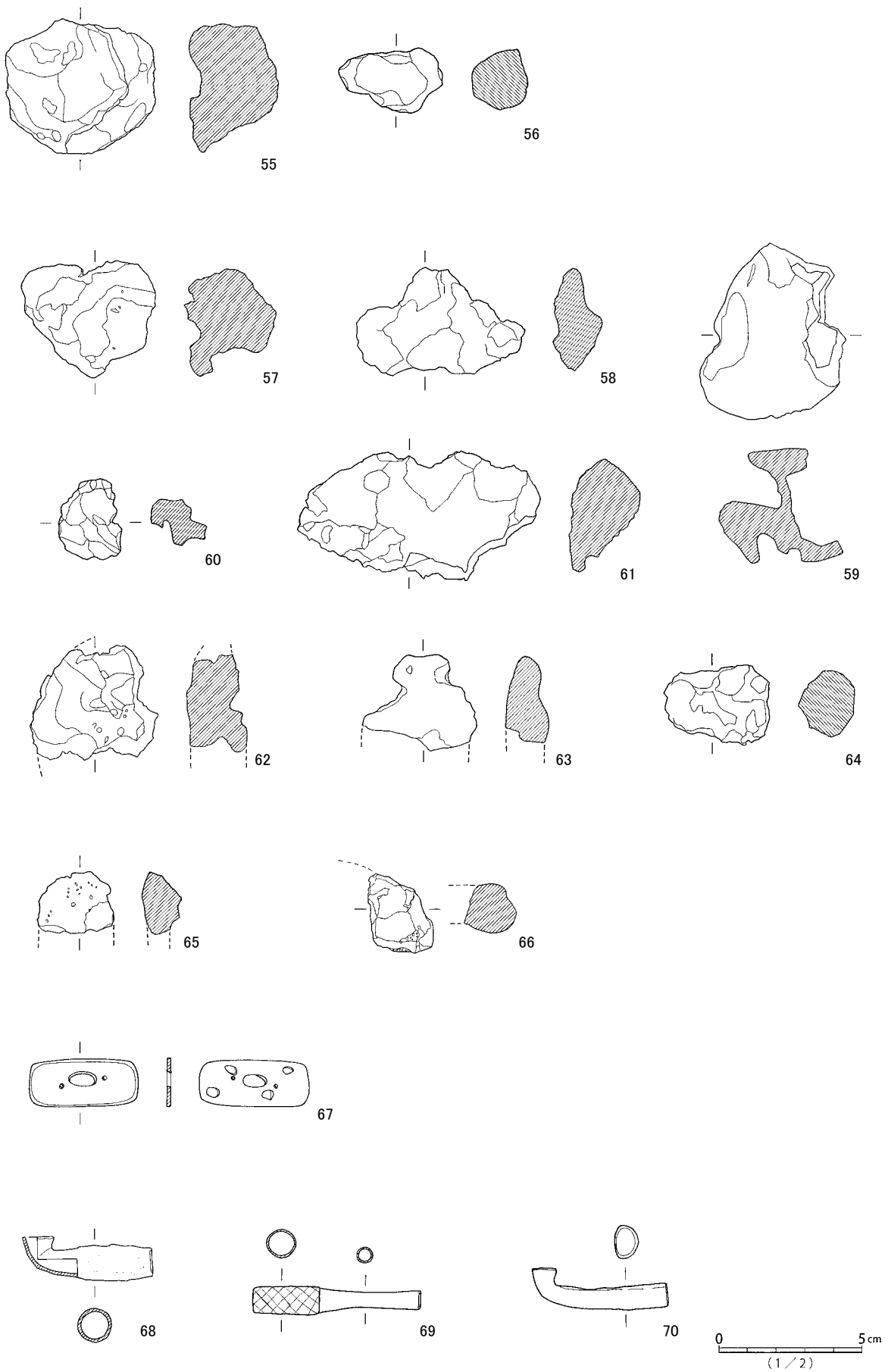


Fig.548 遺構外遺物 金属器等 (5) 実測図



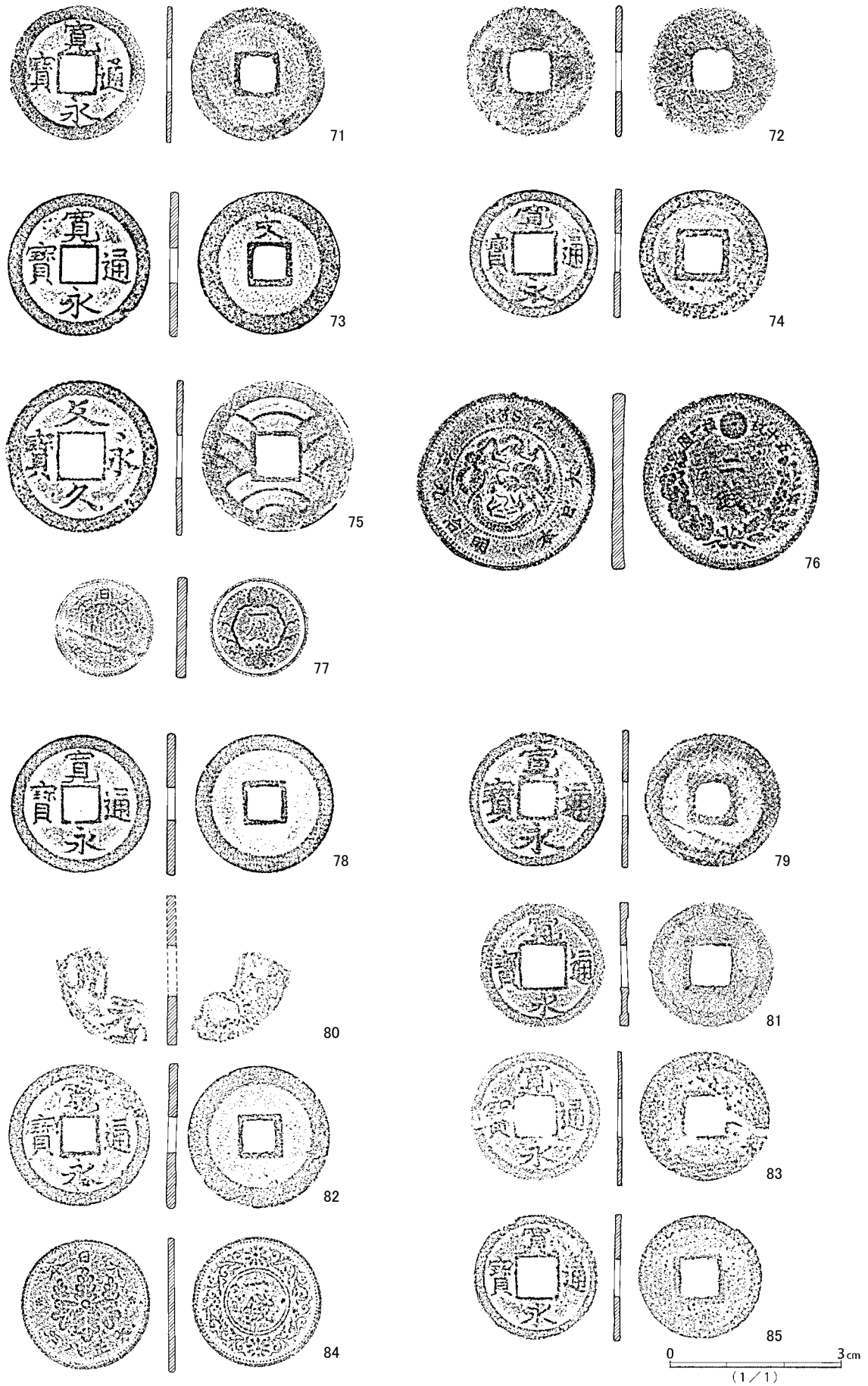


Fig.549 遺構外遺物 金属器等 (6) 実測図

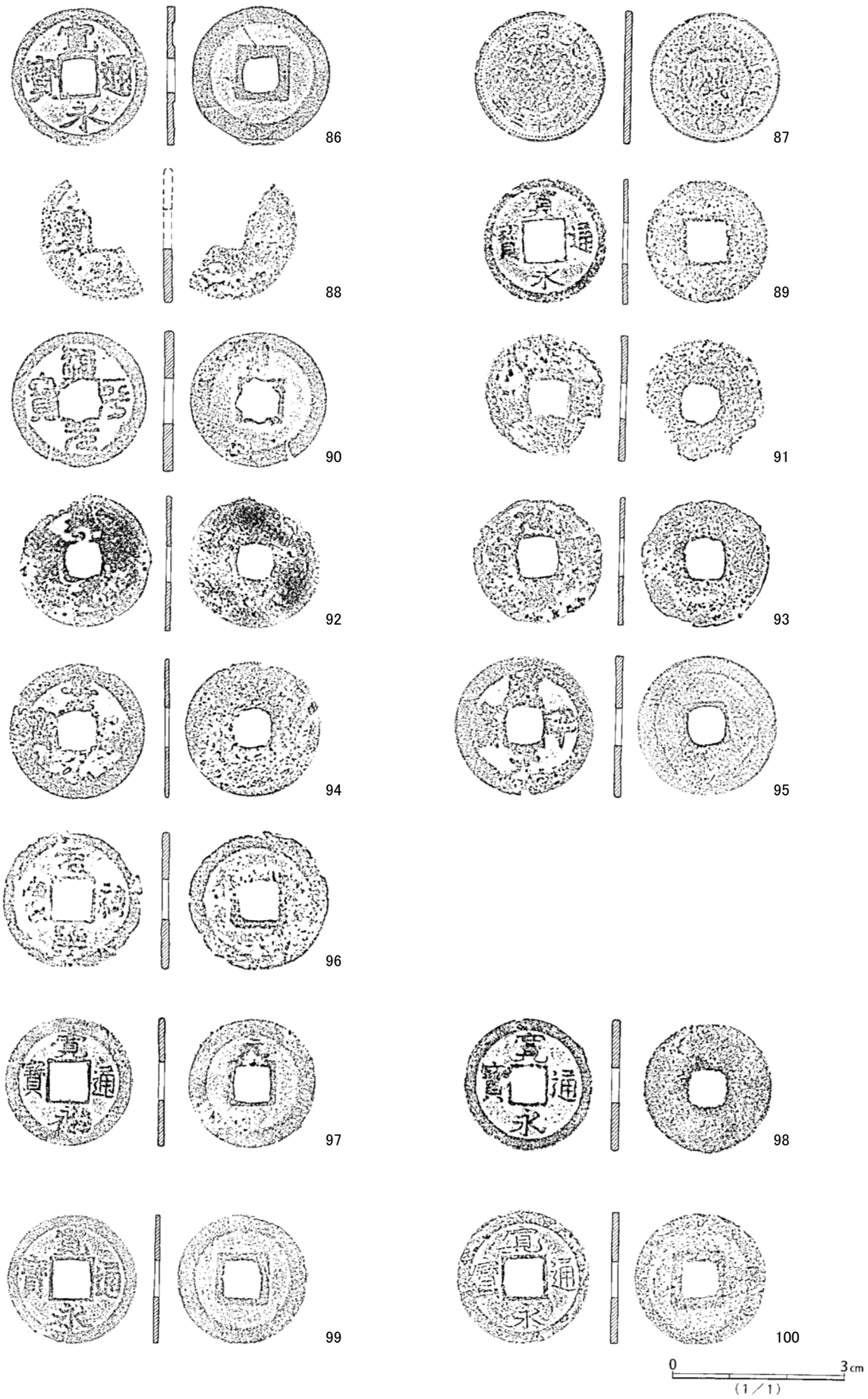


Fig.550 遺構外遺物 金属器等 (7) 実測図

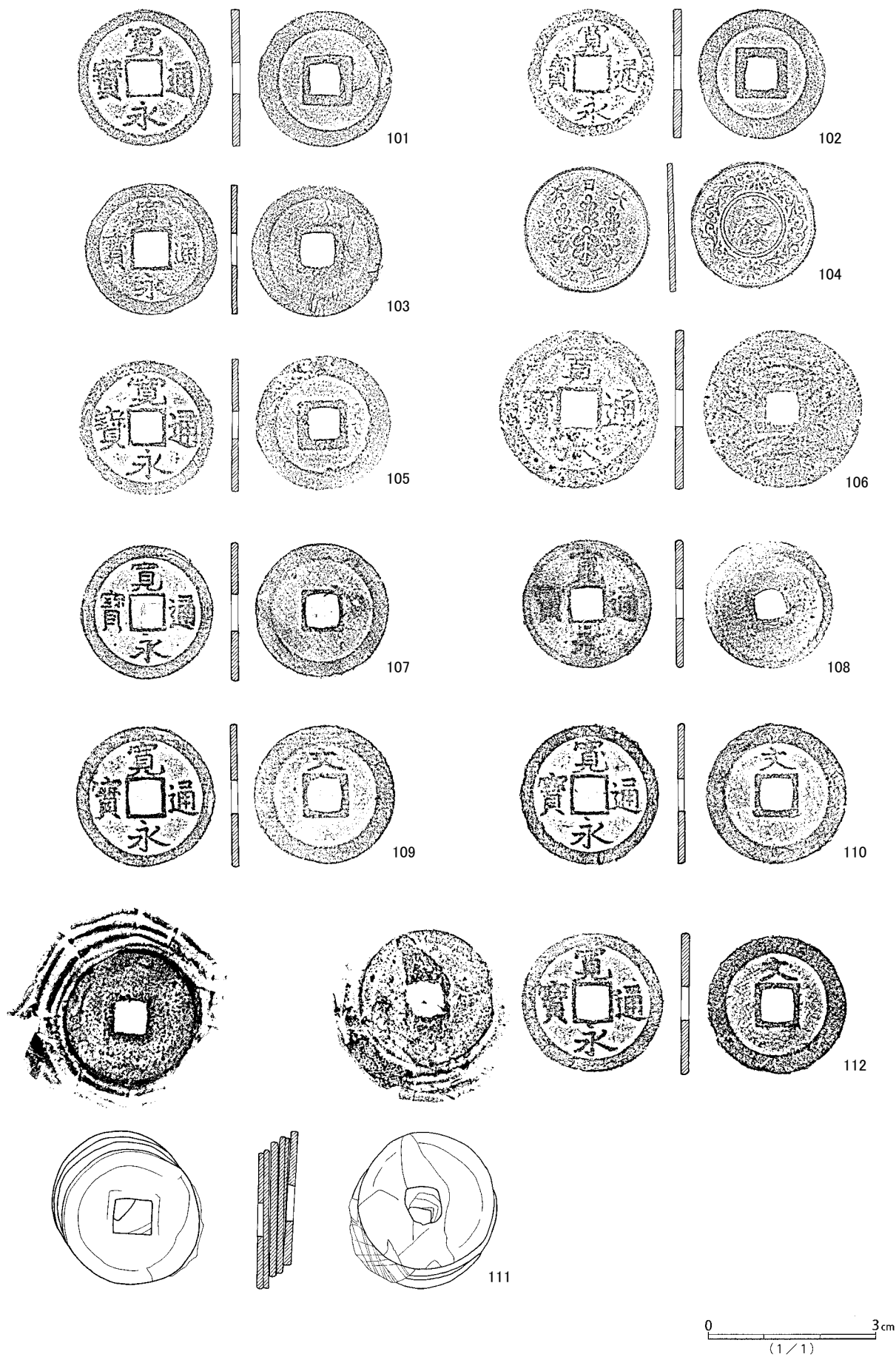


Fig.551 遺構外遺物 金属器等 (8) 実測図

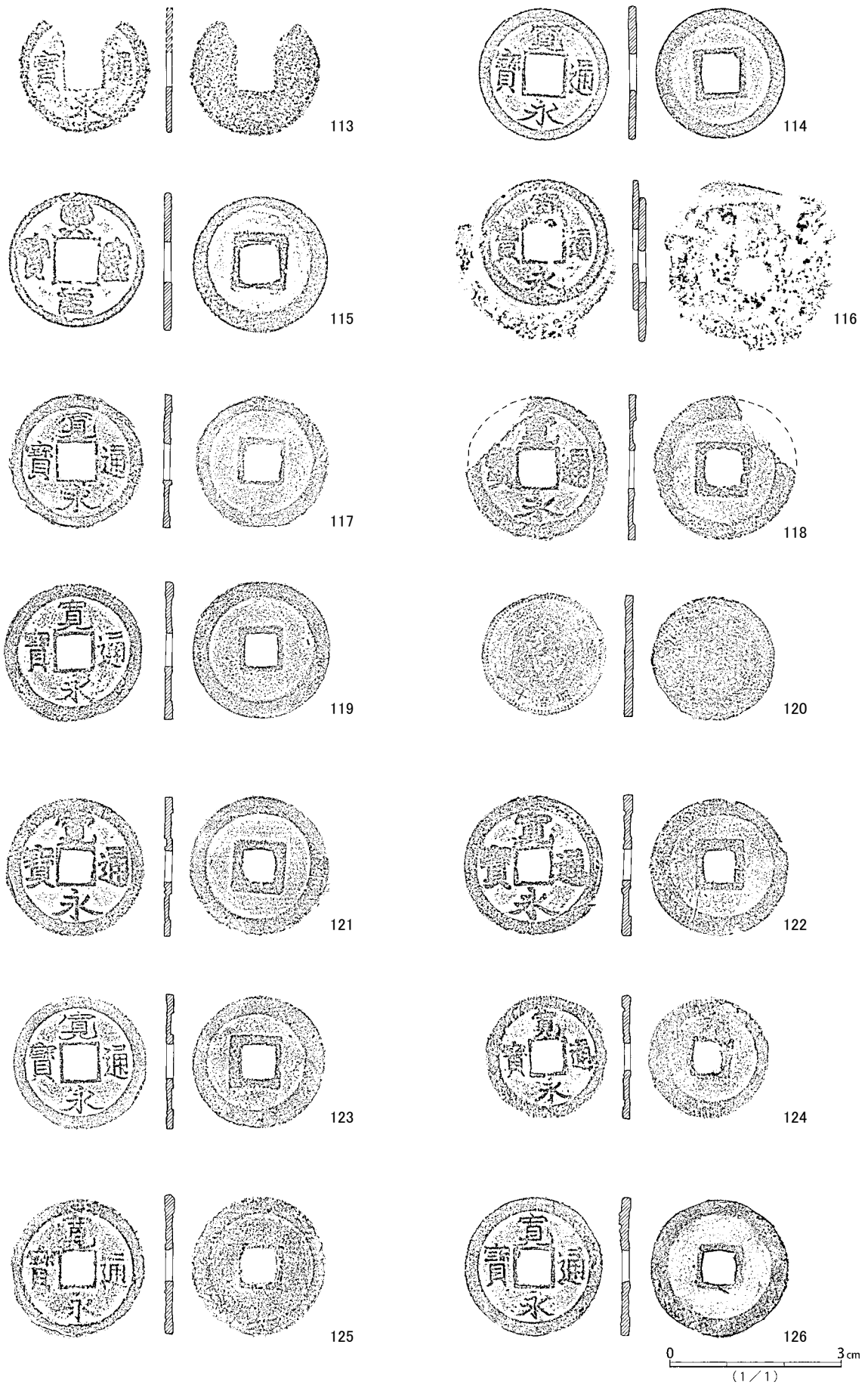


Fig.552 遺構外遺物 金属器等 (9) 実測図

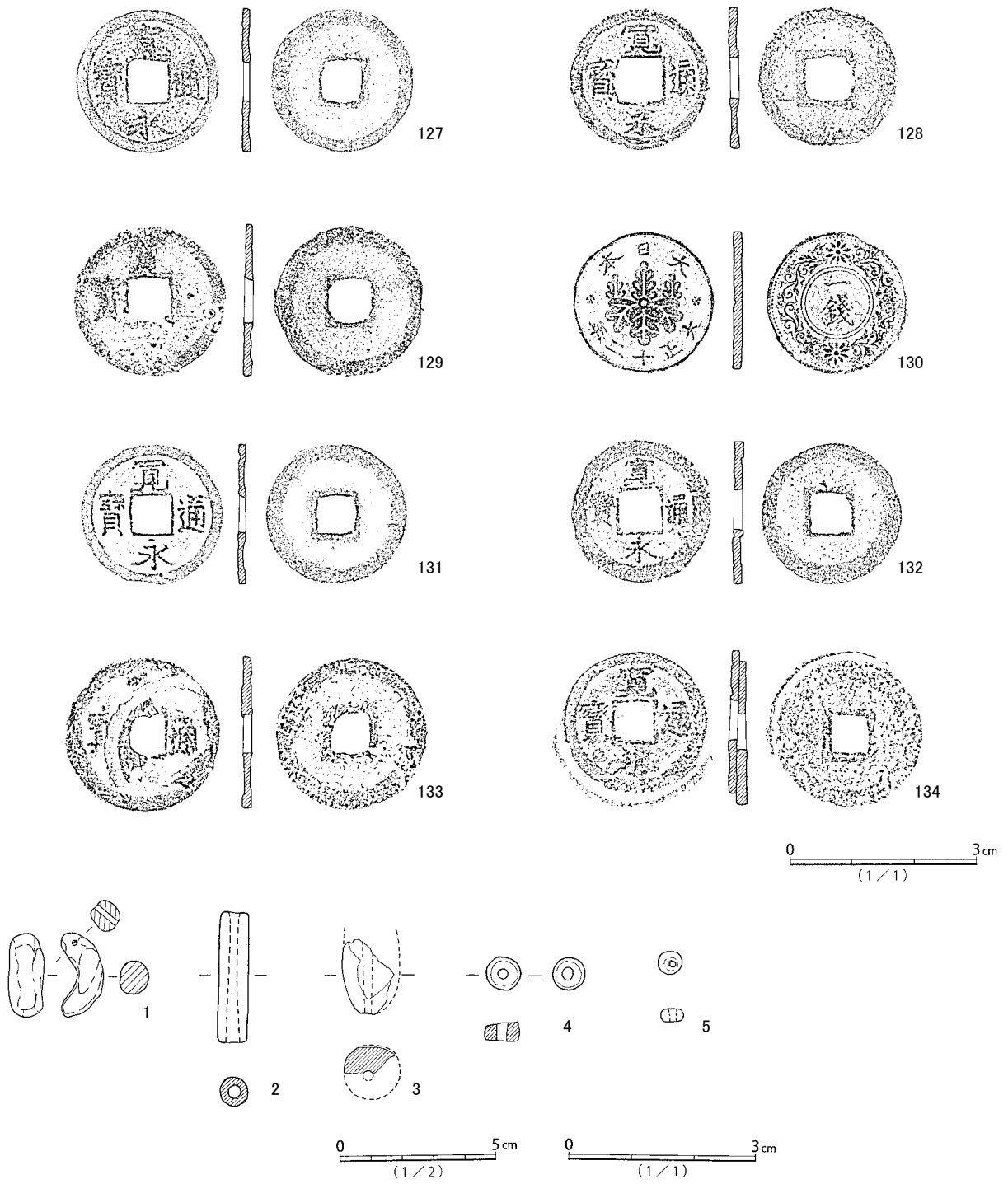


Fig.553 遺構外遺物 金属器等 (10)、玉類実測図

## 5 SW80地区 8号墳出土の遺物

### 概要

SW80地区8号墳とは、国No.154（諏訪台8号墳）を指す。

SW80地区の遺構・遺物については、他のSW74地区・SW81地区と共に、一部のもの以外は記録類が無く、内容は概報に寄るしかない状況にある。その中でも8号墳に関しては、記録類が極めて限られており、知り得るのは概報で公表された遺構実測図と二重口縁壺である。これらから、8号墳は古墳時代前期前葉に位置づけられる直径28mの円墳であるとの見方が定着している。しかし、その出土位置など詳細は不明である。

今回、整理作業の終盤で遺物の所在が判明し、急ぎよ報告することとなったが、図面類が皆無である状況下において、出土位置については、土器にある注記を頼りにするしかなく、また、それが古墳の何処を示すのかも確証が持てない。そこで、ここで扱う遺物については、周溝内の覆土一括で取り上げられたものと判断し、実測図を掲載することとする。また、一部に同じSW80地区で調査した国No.178（諏訪台32号墳）や、国No.256（諏訪台40号墳）、国No.177（諏訪台31号墳）、諏訪台37号墳、他に、SW81地区の国No.257（諏訪台41号墳）などの遺物も混在していたため、8号墳と同じく出土位置未定のままここで報告する。

### 土器 (Fig.554、PL.193)

1～42で、集落範囲に近いことから、4期以上に分けられる。

### 石製品 (Fig.555、PL.215)

1は剣形の石製模造品である。国No.177（諏訪台31号墳）出土である。石製模造品は、古墳群全体で、グリッド一括取り上げの有孔円盤（遺構外石製品13）を含み2例しか出土していない。

### 金属製品 (Fig.555～557、PL.205・206)

1は鉄鏃で、諏訪台37号墳の出土、2鉄鏃で、国No.256（諏訪台40号墳）の出土である。3は国No.178（諏訪台32号墳）、4はSW81地区の国No.257（諏訪台41号墳）出土で、5～24は8号墳出土である。

### その他 (Fig.557、PL.216)

骨の1・2は人骨とみられ、注記は「SW80-8 154-0120 1-1」とあり、周溝一括としたそれとは異なるものであるが、主体部であるのか不明。上腕骨とみられる。

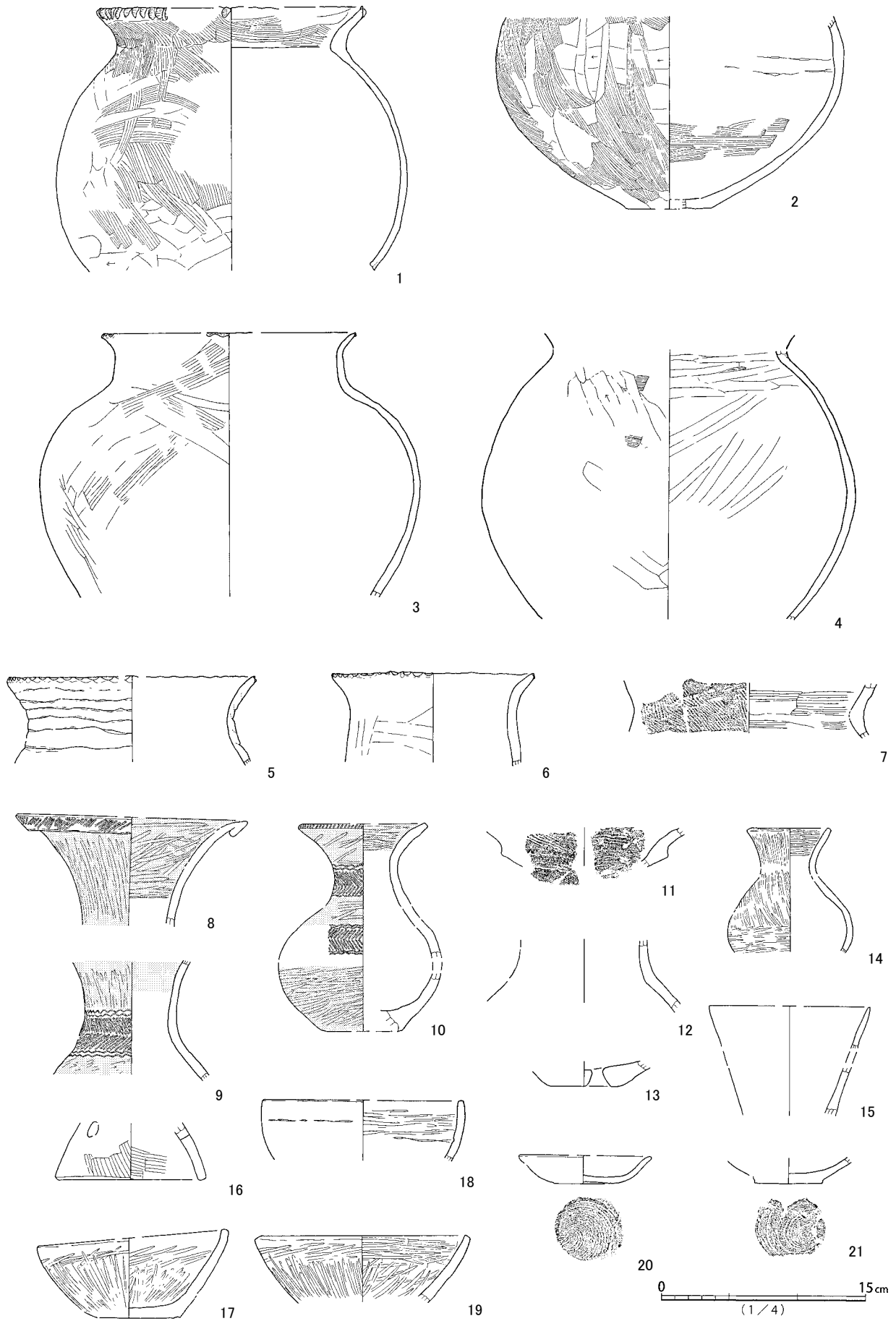


Fig.554 SW80 地区遺物(1) 実測図

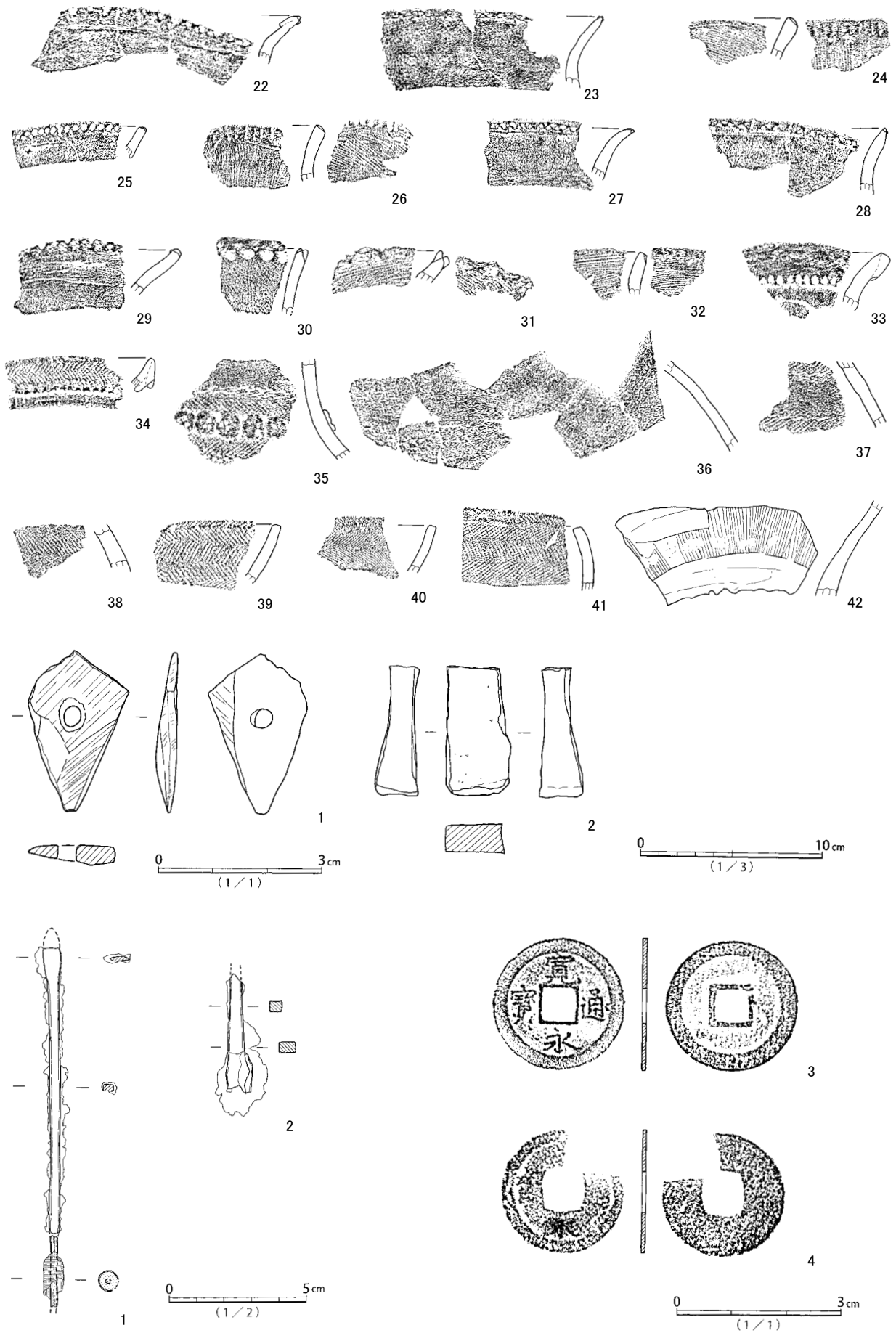


Fig.555 SW80 地区遺物 (2) 実測図



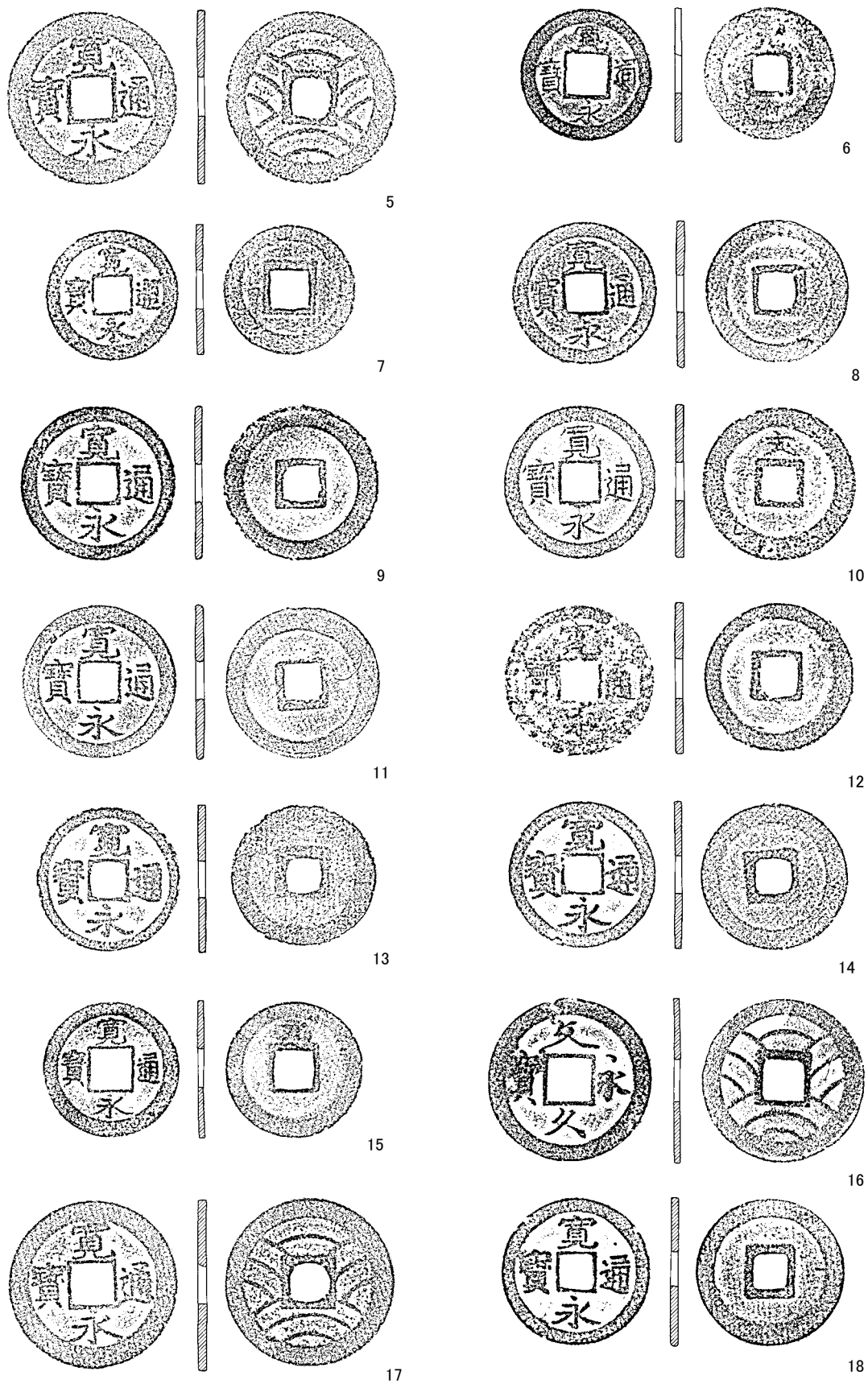


Fig.556 SW80 地区遺物 (3) 実測図

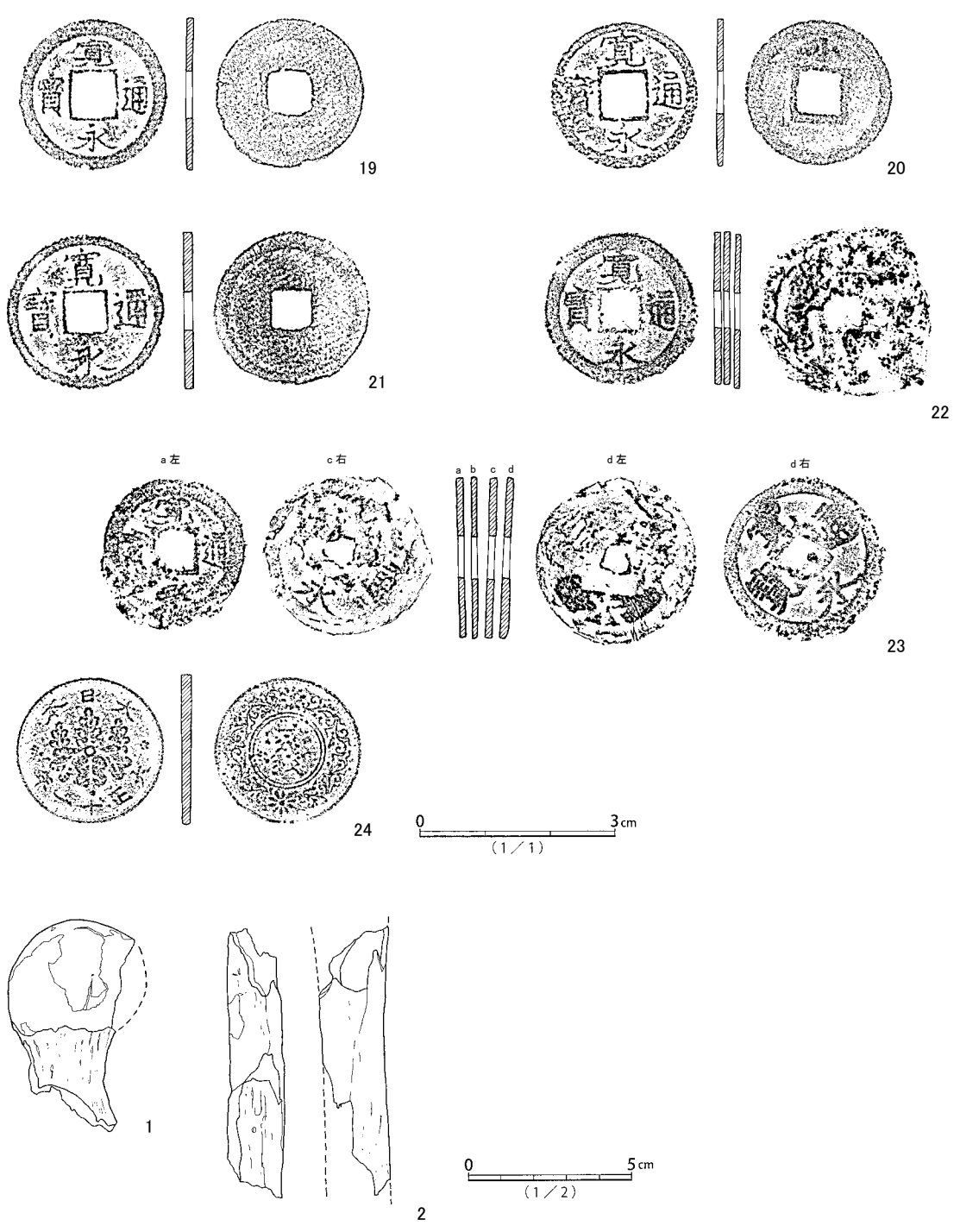


Fig.557 SW80 地区遺物(4) 実測図

## 6 諏訪台古墳群墳丘出土の縄文遺物

### 土器

#### 1. はじめに

諏訪台古墳群の調査では、古墳や方形周溝墓などの下層から多量の縄文時代遺物が出土している。これらは古墳盛土内・周溝内・旧表土内などから見つかっており、原位置をとどめているとみられるものがある一方、溝などの掘削や墳丘の築造によって移動・集積しているものも多いと思われる。古墳群調査では、これら下層に伴う遺物群は、ほとんどが各遺構の一括扱いで取り上げられている。したがって、個々の遺物の出土状況等の情報はほとんどなく、同時期遺物群の分布状況もおおまかにしかわからないものが多い。しかし本来は、下層にあった縄文時代の集落跡に帰属するものであったとみられるので、「天神台遺跡Ⅰ」で報告した縄文時代の遺構や遺物包含層中出土資料と合わせることで、資料的不備はある程度補えるものとする。本来は、遺物包含層として取り上げられた総量にして2,620kgの土器とともに報告すべきものであったが、この時点ではまだ上層遺構の整理が進んでおらず、遺構番号の付け替えも未了であったため、今回の扱いとなった。

古墳群下層からは、064・099・セ72・セ73・セ28・セ54・SW80・SW81・SW83地区に所在した255箇所古墳等から、総重量にして約1,720kgの縄文土器が出土した。整理作業では、これら全てを遺構ごとに分類・集計した。データは膨大なものとなったため、報告ではTab.19として付録のDVD内に収録した。各遺構を代表する遺物を抽出すると、これらは149箇所分に及んだが、このうち各地区を代表する比較的規模の大きな古墳等から出土した57箇所分の資料について扱うことにした（Fig.558）。以下に図示した資料はおよそ900点あり、各地区の様相は概ねとらえることができる。とみられる。

#### 2. 各地区の様相

Tab.17に、各地区を代表する古墳等から出土した縄文土器の内訳を示した。また参考として、天神台遺跡の包含層中土器の内訳をTab.18に示した（「天神台遺跡Ⅰ」報告書の第44表を一部改変）。なお、個々の遺物の属性については、Tab.20として付録のDVD内に収録した。

##### 064地区

064区は、遺跡の北西端部に位置し、早期とみられる2軒を含む5軒の竪穴住居跡、炉穴や陥し穴など17基の遺構が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを50mとし、ここに1A～3Cまで8区画が設定され遺物が採集された。この内部は5m単位の小グリッドに区分された。この調査区で、包含層中の遺物が採集されているのは小グリッド208箇所分である。総量にして約113kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器48.4%・羽状縄文系関山式32.9%・沈線文系0.8%などとなる。

064区では、8基の古墳等から総量にして約77kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器47.2%・羽状縄文系関山式37.3%・晩期末1.8%などとなる。このうち、調査区南半にあるSM1024・SM1017・SM1057の出土資料を掲載した（Fig.559・560）。1～6は、沈線文系土器の口縁部および胴部、7は尖底となる底部破片である。8～21は、条痕文系土器の口縁部および胴部、22は尖底となる底部破片である。23～27、29・30は、羽状縄文系・花積下層式土器の口縁部および胴部、28はや



Fig.558 縄文土器出土遺構

Tab.17 諏訪上古群 下層縄文土器集計表

調査区	旧古墳地	新古墳地	総系文系		総系文系(備文)		次級文系		条系文系		条系文系(東海系)		花積下層		間山		黒沢		木島		浮島・津波		附録																			
			点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)	点数	重量(%)																
064	150	SM	1024	938	9,024	6	66	0.8	0.0	0.0	544	4,796	56.4	1	13	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	332	3,377	39.0	0.0	0.0	1	9	0.1	7	44	0.5										
064	151	SM	1017	2,478	33,457	20	253	0.9	0.0	2	316	1,1	1,317	16,420	55.7	8	128	0.4	4	44	0.2	0.0	9	341	1.2	984	10,461	35.5	33	554	1.9	0.0	1	34	0.0							
064	260	SM	1077	2,261	23,140	0	0	0.0	2	26	0.1	826	10,111	48.7	4	64	0.3	1	11	0.4	0.0	0.0	2	38	0.1	1,001	10,178	49.0	2	93	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0							
064	小計		6,649	77,205	27	330	0.4	0	0.0	13	542	3,646	47.2	14	227	0.3	5	55	0.1	0	0.0	0.0	11	389	0.5	2,590	26,934	37.3	35	647	0.8	0	0.0	2	43	0.1	11	100	0.1			
099	3156		482	6,223	2	35	0.4	0.0	0.0	444	7,372	93.4	1	23	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	12	376	4.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	3159		1,215	24,037	0.0	0.0	0.0	0.0	1,207	23,817	89.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0					
099	4003	SS	985	848	7,431	0.0	0.0	0.0	2	30	0.4	641	5,979	86.6	4	100	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1	17	0.2	60	779	11.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0					
099	4022	SM	1009	519	5,702	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1,712	29,477	98.5	7	100	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	4050	SM	1023	471	9,361	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10	230	4.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0					
099	4060	SM	1010	330	6,065	2	30	0.5	0.0	0.0	396	8,470	92.3	1	15	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	4061	SM	1019	534	10,204	0.0	0.0	0.0	0.0	282	5,927	59.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	4065	SS	99	739	12,083	0.0	0.0	0.0	0.0	85	1,414	11.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	4076	SM	1051	441	20,550	0.0	0.0	0.0	0.0	6	183	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	4108	SM	1067	101	1,086	1	25	3.0	0.0	0.0	12	87	10.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				
099	小計		10,473	217,176	11	211	1	2	30	0.0	4,132	142,712	65.7	42	978	0.5	2	32	0.0	1	43	0.0	5	52	0.0	5	31.78	59,513	27.4	2	33	0.0	2	30	0.0	61	94.1	0.4	8	194	0.4	
428	025	SM	1005	439	8,482	0.0	0.0	0.0	0.0	52	1,106	13.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
428	029	SM	1001	1,309	22,209	16	268	1.3	0.0	993	17,823	83.6	2	158	0.2	1	71	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	037	SM	1060	4,329	74,939	74	1,093	1.4	0.0	0.0	4,078	70,888	94.8	2	158	0.2	1	71	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	038	SM	1007	9,740	182,760	120	1,837	0.9	5	154	0.1	0.0	8,464	164,123	92.3	3	143	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	039	SM	1003	8,600	141,115	78	999	0.7	0.0	0.0	8,073	133,158	97.1	12	397	0.3	9	578	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	043	SS	112	3,271	69,259	134	1,872	2.9	0.0	0.0	2,811	52,811	92.4	7	401	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	044	SM	1069	4,831	72,972	122	1,502	2.1	0.0	0.0	4,351	67,878	95.2	9	203	0.3	1	31	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	045	SM	1028	1,174	18,785	44	386	2.1	0.0	0.0	1,069	17,253	93.5	1	40	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
428	047	SS	104	1,677	27,610	34	491	1.9	0.0	0.0	1,129	19,578	78.9	1	59	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
428	048	SS	103	3,783	61,151	20	315	0.5	0.0	0.0	3,398	55,305	92.8	5	140	0.2	8	384	0.6	4	102	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
428	061	SS	110	1,129	19,153	44	721	3.8	0.0	0.0	1,056	17,856	94.4	1	50	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
428	小計		46,902	800,829	800	10,735	1.3	7	200	0.0	40,222	685,933	86.9	58	2,076	0.3	19	1,064	0.1	12	245	0.0	7	85	0.0	7	187	0.0	2,659	53,073	6.6	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
454	15	SM	1042	3,757	63,732	237	3,555	5.8	449	9,327	15.1	0.0	195	3,251	5.3	3	59	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
454	39	SS	50	63	938	7	89	10.7	0.0	0.0	2	17	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			
454	小計		61,699	90,959	399	5,787	6.4	536	10,932	120	0	0	440	7,446	8.2	9	249	0.3	0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
472	008	SS	88	1,277	23,767	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1,257	23,359	99.3	10	277	1.2	0	0	0.0	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
472	小計		3,088	59,864	0	0	0.0	0	0.0	0.0	3,001	51,731	59.9	19	472	0.6	0	0	0.0	4	61	0.1	2	38	0.1	2	38	0.1	32	437	0.8	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0	0.0	0	0
473	001	SS	101	1,120	16,359	0	0	0.0	0.0	0.0	842	12,945	7																													



や上げ底となる底部破片である。31～50は、羽状縄文系・関山式土器の口縁部および胴部破片である。51～56は、羽状縄文系・黒浜式土器の口縁部破片である。57は浮島・興津式、58は五領ヶ台式とみられる。59～83は、晩期末に位置づけられるとみられる土器群である。浮線文、条痕文、撚糸文などが施されるものである。

#### 099地区

099区は、遺跡の北半部を占める広域な地区で、その中央部を中心に縄文時代前期の竪穴住居跡17軒、炉穴・集石など早期を主とした遺構38基が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを40mとし、ここにHC～QHまで47区画が設定され遺物が採集された。KH・LHについては遺物は採集されていないので、遺物の採集されている大グリッドはこのうち45区画となる。大グリッド内部は4m単位の小グリッドに区分された。この調査区で、包含層中の遺物が採集されているのは小グリッド1,600箇所分である。総量にして約557kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器60.4%・羽状縄文系関山式28.0%・加曾利B式3.0%・浮島・興津式1.0%などとなる。

099区では、106基の古墳等から総量にして約217kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器65.7%・羽状縄文系関山式27.4%・加曾利B式1.9%・浮島・興津式0.4%などとなる。このうち、調査区の東西に広く分布するSS95・SM1009・SM1002・SM1023・SM1010・SM1019・SS99・SM1051・SM1067など11基の遺構の出土資料を掲載した(Fig.561～567)。1・2は、撚糸文系土器の口縁部および胴部、3は沈線文系土器の口縁部、4～54は条痕文系土器の口縁部および胴部・底部の破片である。このうち33は、口径推定269mmを測る深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部に縦位のキザミを付し、以下内外面に横位・斜位の条痕文が見られる。48～52は、横位に連続する楕円刺突文や独特な横位の隆帯が見られる土器破片で、胎土には小礫を多く含む。器厚も比較的薄い。東海地方東部の土器とみられる。55・56は羽状縄文系・花積下層式、57～122は羽状縄文系・関山式の口縁部および胴部・底部の破片である。このうち107～114は、片口部をもつ深鉢形土器である。123は、東海地方木島式の胴部破片である。器厚は薄く、斜位の細線文を有し、縦位に特徴的な大型の鱗状の貼り付けが見られる。124～131は、浮島・興津式、132・133は諸磯式とみられる口縁部および胴部破片である。134・135は横位に複数列の撚糸側面圧痕文が見られるもので、前期末から中期初頭の所産と思われる。136～138は波頂部をもつ無文の深鉢形土器、139は横位隆帯をもつ土器で、時期は不詳。140～143は称名寺式、144は堀之内2式、145～166は加曾利B式および曾谷式の口縁部および胴部破片で、このうち153～166は紐線文や条線文の見られる粗製土器である。

#### セ72地区・セ73地区

セ72区は、遺跡西側の小区画で、早期の竪穴住居跡2軒、炉穴や土坑など早期を主とした遺構46基が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを20mとし、ここに1A～2Cまで10区画が設定され遺物が採集された。この内部は10m単位の小グリッドA～Dに4区分された。この調査区で、包含層中の遺物が採集されているのは小グリッド25箇所分である。総量にして約404kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器94.6%・羽状縄文系関山式0.7%などとなる。

セ72区では、19基の古墳等から総量にして約52kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器98.0%・羽状縄文系関山式0.8%などとなる。このうち、調査区やや西よりの地点に位置するSS88の出土資料を掲載した(Fig.568・569)。

セ73区は、遺跡西側の小区画で、保存区域を挟んでセ72地区の南側に位置する。早期の竪穴住居跡2軒、炉穴や土坑など早期を主とした遺構16基が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを20mとし、ここにA1～E5まで11区画が設定され遺物が採集された。D5については遺物が採集されていないので、遺物の採集されている大グリッドはこのうち10区画である。総量にして約69kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器97.5%・羽状縄文系関山式0.5%などとなる。

セ73区では、4基の古墳等から総量にして約18kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器78.9%・羽状縄文系関山式10.1%などとなる。このうち、調査区中央に位置するSS101の出土資料を掲載した (Fig. 568・569)。

1は沈線文系土器の胴部破片である。2～20は条痕文系土器の口縁部および胴部破片である。21は羽状縄文系・花積下層式、22は関山式である。23～25は、紐線文をもつ加曾利B式の深鉢形土器の口縁部および胴部破片である。

### セ28地区

セ28区は、遺跡南半部を占める広域な地区で、その中央部を中心に縄文時代早期・前期の竪穴住居跡15軒、炉穴・土坑など早期を主とした遺構163基が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを20mとし、ここにB6～L11まで71区画が設定され遺物が採集された。F12・F14～17・G18・H19・L11については遺物が採集されていないので、遺物の採集されている大グリッドはこのうち64区画である。総量にして約1,403kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器85.2%・羽状縄文系関山式8.1%・捺糸文系1.4%などとなる。

セ28区では、45基の古墳等から総量にして約800kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器86.9%・羽状縄文系関山式6.6%・捺糸文系1.3%・加曾利B式0.8%などとなる。このうち、調査区西半部から中央部に位置するSM1005・SM1001・SM1060・SM1007・SM1003・SS112・SM1089・SM1028・SS104・SS103・SS110・SS53など12基の遺構の出土資料を掲載した (Fig.570～584)。1～37は、捺糸文系土器の口縁部および胴部破片である。38・39は、胎土中に粗い小砂礫を含み、器面調整の段階でこれらが移動したことによって特徴的な擦痕を残す無文土器の口縁部破片である。40～185は条痕文系土器の口縁部および胴部破片、186～200は底部破片である。底部は平底となるものが多いが、199・200のように尖底のものも見られる。鶉ヶ島台式、茅山下層・上層式を主とするが、早期末段階の土器も散見される。40のように、これらより古い野島式はごくわずかである。173～185は、横位に連続する楕円刺突文が見られる土器破片で、胎土には小礫を多く含む。器厚も比較的薄い。東海地方東部の土器であろうか。201～204は羽状縄文系・花積下層式、205～229は関山式である。このうち205は、胴部から底部にかけての一部を欠くものの、器形をほぼ復元できる優品である。口径253mm・器高264mm・底径(推定)48mmを測る深鉢形土器で、4単位の波頂部をもつ。口縁部文様帯は、梯子状文・円形貼付文からなり、以下にループ文・コンパス文が交互に配される。波頂部はくびれを持つ山形となり、4つの波頂部間には小さな山形の貼付文が付される。230～243は浮島・興津式、244～252は諸磯式の口縁部および胴部破片である。253・254は、横位に複数列の捺糸側面圧痕文が見られるもので、前期末から中期初頭の所産と思われる。255～257は時期不詳土器の口縁部および胴部破片である。258・259は加曾利E式の口縁部および胴部破片である。260～266は称名寺式、267～270は堀之内1式、271～275は堀之内2式の口縁部および胴部破片である。



276～314は、加曾利B式および曾谷式の口縁部および胴部破片で、このうち284～302は紐線文や条線文、粗い縄文の見られる粗製深鉢形土器である。315～317は安行式、318～323は晩期安行式の口縁部破片である。

#### セ54地区

セ54区は、遺跡南半部を占める地区で、縄文時代前期を主とする竪穴住居跡16軒、炉穴・土坑など早期を主とした遺構63基が検出されている。また、遺物包含層は、大グリッドを20mとし、ここにG19～M22まで46区画が設定され遺物が採集された。F19・F20・H15・I22・J16・J22・L17・N21については遺物が採集されていないので、遺物の採集されている大グリッドはこのうち37区画である。総量にして約65kgの土器が出土しており、内訳は、羽状縄文系関山式40.3%・条痕文系土器12.3%・燃糸文系7.6%などとなる。

セ54区では、35基の古墳等から総量にして約90kgの土器が出土している。その内訳は、羽状縄文系関山式60.5%・条痕文系土器8.2%・燃糸文系6.4%・加曾利B式1.9%・浮島・興津式1.6%・諸磯式1.3%などとなる。このうち、調査区西側に位置するSM1042・SS50など2基の遺構の出土資料を掲載した (Fig.585・586)。1～6は、燃糸文系土器の口縁部および胴部破片である。7～16は、胎土中に粗い小砂礫を含み、器面調整の段階でこれらが移動したことによって特徴的な擦痕を残す無文土器の口縁部および胴部破片である。17は、やや丸底となる底部破片である。18・19は沈線文系土器、20は条痕文系土器の口縁部である。21は、羽状縄文系・花積下層式の底部、22～46は関山式の口縁部および胴部、47～49はその底部破片である。50～63は浮島・興津式、64～68は諸磯式の口縁部および胴部破片である。69～74は時期不詳であるが、前期後葉の所産であろうか。75～82は加曾利B式の口縁部および胴部破片で、このうち79～82は紐線文や条線文を有する粗製土器である。

#### SW83地区

SW83区は、遺跡南東部を占める地区であるが、縄文時代の遺構分布状況は明確でない。

遺物包含層は、大グリッドを40mとし、ここにMH～PKまで18区画が設定され遺物が採集された。QH・PI・NJ・QJ・QKについては遺物が採集されていないので、遺物の採集されている大グリッドはこのうち13区画となる。大グリッド内部は5m単位の小グリッドに区分された。この調査区で、包含層中の遺物が採集されているのは小グリッド68箇所分である。総量にして約9kgの土器が出土しており、内訳は、条痕文系土器34.9%・加曾利B式ほか21.6%・羽状縄文系関山式8.0%・燃糸文系3.0%・浮島・興津式1.8%・諸磯式1.4%などとなる。

SW83区では、22基の古墳等から総量にして約14kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器23.2%・燃糸文系13.0%・加曾利B式9.8%・諸磯式5.7%・羽状縄文系関山式5.4%・浮島・興津式2.8%などとなる。このうち、調査区のほぼ全域に広がるSM1008・SM1041など19基の遺構の出土資料を掲載した (Fig.587～589)。1～11は、燃糸文系土器の口縁部および胴部破片である。12～25は、条痕文系土器の口縁部および胴部破片である。26～33は、羽状縄文系・関山式の口縁部および胴部破片である。34～43は浮島・興津式、44～55は諸磯式の口縁部および胴部破片である。56～60は時期不詳であるが、前期後葉の所産であろうか。61は加曾利E式の胴部破片である。62は称名寺式、63～70は堀之内1式、71は堀之内2式、72～103は加曾利B式および曾谷式の口縁部および胴部破片で、紐線文や条線文を有する粗製土器が多くみられる。104・105は安行式、106～113は晩期安行式の

口縁部および胴部破片である。

## SW80・81地区

SW80・81区は、099地区・SW83地区内に島状に存在した調査区で、縄文時代の遺構分布状況は明確でなく、遺物包含層の状況も定かでない。

SW80・81区では、16基の古墳等から総量にして約451kgの土器が出土している。その内訳は、条痕文系土器63.4%・羽状縄文系関山式24.6%・加曾利B式1.5%・諸磯式0.7%・浮島・興津式0.5%などとなる。このうち、国No.154・国No.155・国No.174・SM1045・国No.177・国No.178・国No.252・国No.253など8基の遺構の出土資料を掲載した（Fig.590～600）。

1・2は撚糸文系土器、3～7は沈線文系土器の口縁部および胴部破片である。8は尖底となる底部の破片である。9～45は条痕文系土器の口縁部および胴部、46～49は尖底・丸底・平底の底部破片である。鶉ヶ島台式、茅山下層・上層式を主とする。このうち10は推定口径369・残存器高202mmを測る深鉢形土器、18は推定口径290・残存器高205mmを測る深鉢形土器である。50・51は前期初頭のもの、52は羽状縄文系・花積下層式の口縁部である。53～88は羽状縄文系・関山式の口縁部および胴部破片、89～91は底部破片である。このうち55は片口をもつ深鉢形土器の破片、75は推定口径182・残存器高140mmを測る片口をもつ深鉢形土器である。74は推定口径412・残存器高194mm・胴部最小径332mmを測る大型の深鉢形土器である。くびれを持つ山形の波頂部を4つもつ。口縁部文様帯は、肥厚した隆帯上に連続するキザミを付す特徴的なもので、以下にコンパス文・ループ文が連続して配される。81は推定口径210・残存器高113mmを測る深鉢形土器、83は推定口径260・残存器高111mmを測る深鉢形土器、85は推定口径91・器高193mm・底径48mmを測る細身の深鉢形土器である。92・93は、器厚が極めて薄く、特徴的な細線文をもつ土器で、東海地方木島式の胴部破片とみられる。94は、口唇部に斜位のキザミを付し、以下に横位幅広の爪形文を配する口縁部がやや波状となる土器で、胎土中には小砂礫を多く含む。北白川下層式であろうか。95～102は浮島・興津式、103～107は諸磯式の口縁部および胴部破片である。このうち103は、残存器高101mm・推定底径178mm・胴部最大径343mmを測る鉢形土器である。文様の特徴となるキザミを付した浮線文の隆起は顕著でない。108は、残存器高128mm・推定底径180mmを測る土器で、胎土中には多量の小砂礫を含む。時期は不詳であるが、前期末～中期初頭あたりの所産であろうか。3列の結束縄文が見られる。109・110は称名寺式、111～126は加曾利B式の口縁部および胴部破片で、このうち116は釣手土器の頂部装飾部、117～126紐線文や条線文を有す粗製土器である。127は曾谷式の瓢形土器口縁部破片である。128～130は安行式、131は杵状文をもつ晩期安行式粗製深鉢形土器の口縁部である。

## 2. 時期別土器の様相と分布状況

Fig.601～609に、「天神台遺跡Ⅰ」で掲載した縄文時代の遺物包含層中から出土した各時期の土器分布図を再録した。今回扱った古墳等の上層遺構出土資料中には、この分布図の空白地帯を埋めるものもあり（とくにSW80・81・SW83区）、併せて扱うことで本来の遺物分布のあり方をとらえることができると思われる。

### 撚糸文系土器

早期前葉の撚糸文系土器は、口唇部が肥厚しこの部分や内面の一部にも施文する井草式を主体とし

た土器群がセ28・セ54など調査区の南部を中心とした箇所にある程度まとまってみられた。これは遺物包含層や遺構出土遺物でも同じように見られた傾向であり、この地区には捺糸文系土器を伴う遺構が本来は存在していた可能性がある。

#### 捺糸文系土器（無文）

前述の捺糸文系土器が検出される区域と重なるように、胎土に粗い砂礫を含み、器面調整の段階でこれらが移動したことによって特徴的な擦痕を残す無紋土器の一群が出土している。とくにセ54地区ではかなりまとまって出土している。

#### 沈線文系土器

早期中葉の沈線文系土器は遺跡全体としては散在的なあり方であったが、一部遺跡の北西部・西部、064区・セ72区ではある程度の量の遺物がまとまって検出されている。

#### 条痕文系土器

早期後葉の条痕文系土器は、遺跡のほぼ全域から出土しているが、その出土量には粗密が認められる。出土密度が高いのは、遺跡の西側から南側、セ72区・セ73区・セ28区そして099区で、今回は遺物包含層・遺構の報告の際空白地帯となっていた099区中のS W80・81地区にもこの時期の遺物分布が濃密にあることがわかった。条痕文系土器は、鶴ヶ島台式・茅山下層式・茅山上層式が主体であるが、早期末に位置づけられるもの、さらに上ノ山式・入海式など東海系の特徴的な土器も散見された。

#### 羽状縄文系土器

前期前葉の羽状縄文系土器は、遺跡のほぼ全域から出土しているが、その出土量には粗密が認められる。出土密度が高いのは、遺跡の南側から中央部・東側、セ28区・セ54区そして099区の東側部分であり、今回は遺物包含層・遺構の報告の際空白地帯となっていた099区中のS W80・81地区にもこの時期の遺物分布が濃密にあることがわかった。羽状縄文系土器は、ほぼ関山式に限定されるが、まれに花積下層式や黒浜式なども混在して出土している。

#### 浮島・興津式

前期後葉の浮島・興津式土器は、遺跡全体としては散在的なあり方であったが、一部遺跡の南部・東部、セ28区・099区・セ54区、そして今回は遺物包含層・遺構の報告の際空白地帯となっていた099区中のS W80・81地区にもこの時期の遺物分布が顕著であることがわかった。出土量はある程度まとまりをもっているため、あるいは未検出の竪穴住居跡や土坑等の遺構があった可能性もあろう。

#### 諸磯式

前期後葉の諸磯式土器は、遺跡全体としては散在的なあり方であったが、前述の浮島・興津式土器と同様に一部遺跡の南部・東部、セ28区・099区・セ54区、そして今回は遺物包含層・遺構の報告の際空白地帯となっていた099区中のS W80・81地区にもこの時期の遺物分布が顕著であることがわかった。諸磯式土器は、a～c式までが確認されている。

#### 加曾利B式・曾谷式

天神台遺跡では、前期後葉以降の時期の遺物は概して著しく希薄となる。中期では後葉の加曾利E式、後期では前葉の称名寺式や堀之内1・2式がわずかにみられるものの、その分布を図示できるほどではない。その後、後期中葉から後葉、加曾利B式・曾谷式にかけやや出土量が増える。この時期

の土器は、遺跡全体としては散在的なあり方であったが、一部遺跡の南部・西部・東部、セ28区・099区・セ54区・SW83区、そして今回は遺物包含層・遺構の報告の際空白地帯となっていた099区中のSW80・81地区にも遺物分布が顕著であることがわかった。ただし、いわゆる精製土器の出土は少なく、紐線文や条線文をもつ粗製土器の出土が目立つ。遺跡内には、未検出の竪穴住居跡や土坑等の遺構があった可能性もあろう。この後、後期後葉の安行式、そして晩期までの土器が見みられるものの、数量的にはわずかである。ただし、晩期終末とみられる浮線文や条痕文・撚糸文が施される土器群が、今回遺跡北西部の064区でややまとまって見られることがわかった。部分的にこれを伴う遺構等があった可能性もあろう。

### 縄文土製品 (Fig.600)

1は挾状耳飾で、SM1056から出土している。半分を欠損する。側面には1条の沈線がめぐり、その周囲に小粘土粒を貼つけたような表現が認められる。

2は蓋状の土製品で、(TJ地区164号遺構)から出土している。把手部を欠損する。蓋部は椀状を呈し、表面はヘラミガキが施されている。

3は蓋状の土製品で、SK345から出土している。蓋部は円盤状を呈し、縁辺に1対となる環状の把手が作り出されている。表面はヘラナデ。

### 石器(Fig.610～635)

232は不明石製品である。あやや緑色を帯びた滑石製で、研磨による整形とみられる擦痕が表裏面で確認できる。平面形は両端部が三角形を呈し、大きさ、頂点の内角が異なる。頂点から広がる2辺は何れも中膨らみで、中央部の2辺は逆に外反りとなっている。断面形は扁平ではなく、縦横断面とも紡錘形もしくはレンズ状を呈し、端部が両刃の刃物のように仕上げられている。穿孔は4か所で何れも両側から穿たれている。頂点が鈍角な端部側に3か所、鋭角な端部側に1か所が位置する。このことから紐で固定された装飾品である可能性が高い。

233は滑石製の挾状耳飾りで、半分を欠損している。

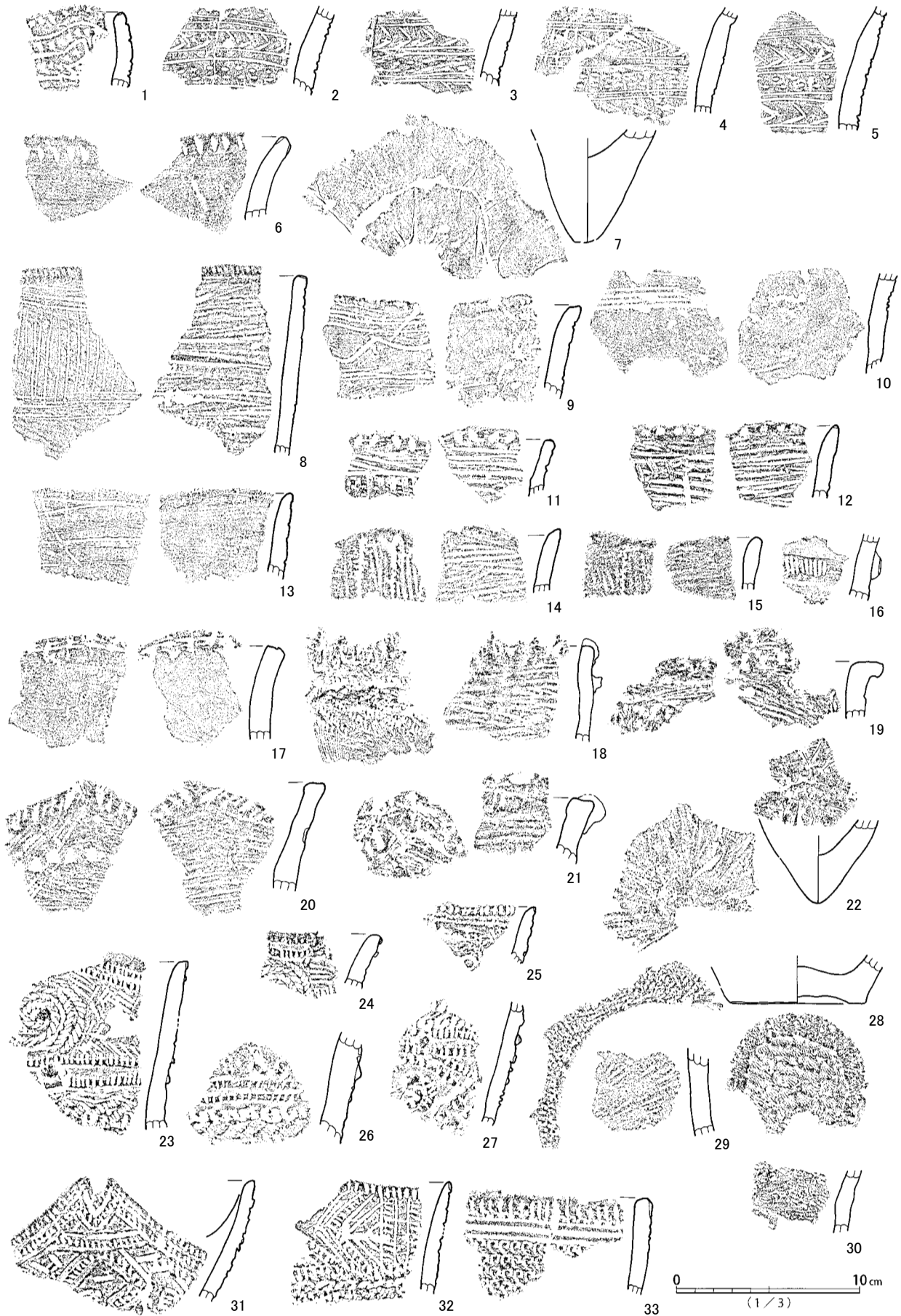


Fig.559 縄文土器 (1) 実測図

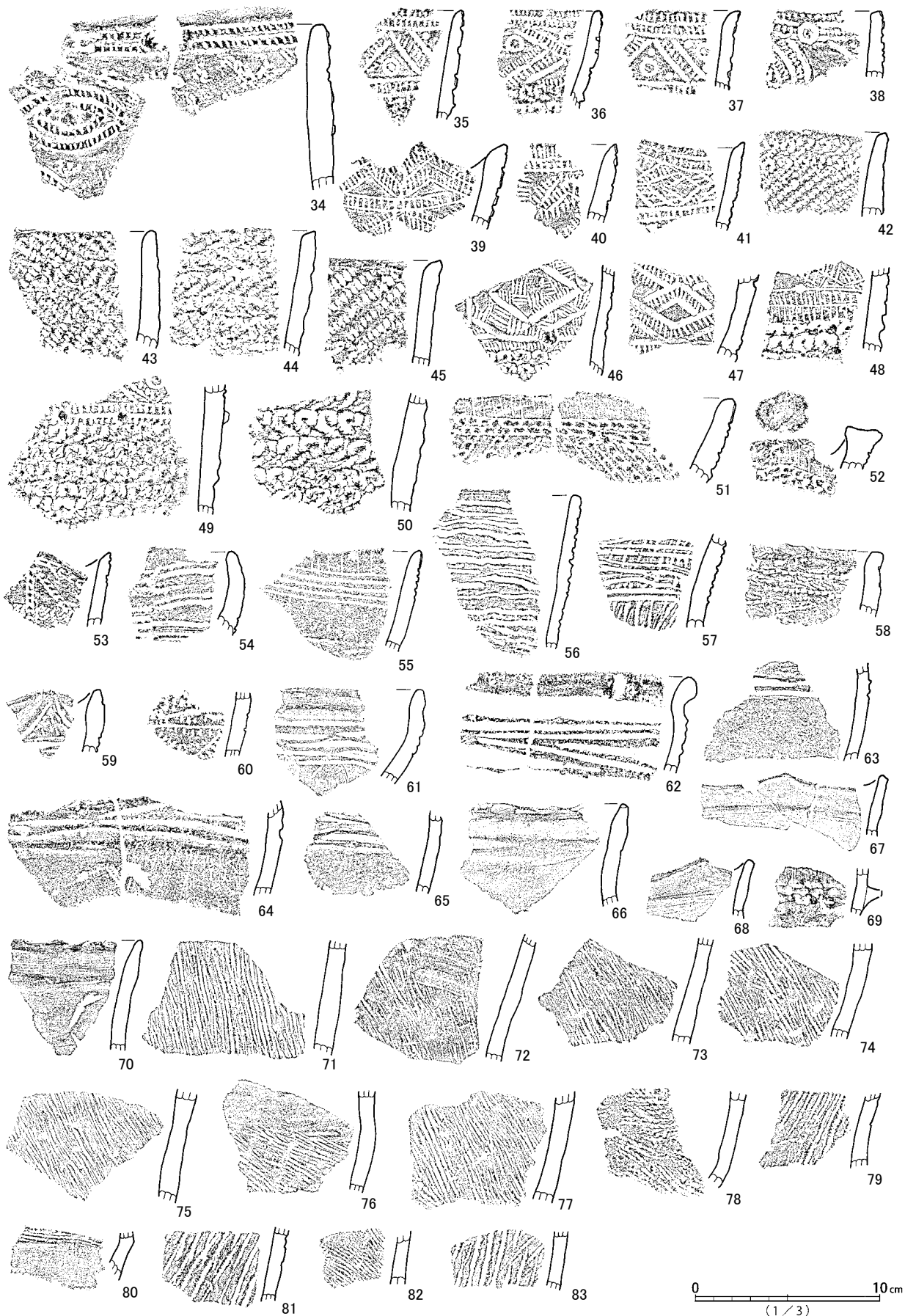


Fig.560 縄文土器 (2) 実測図

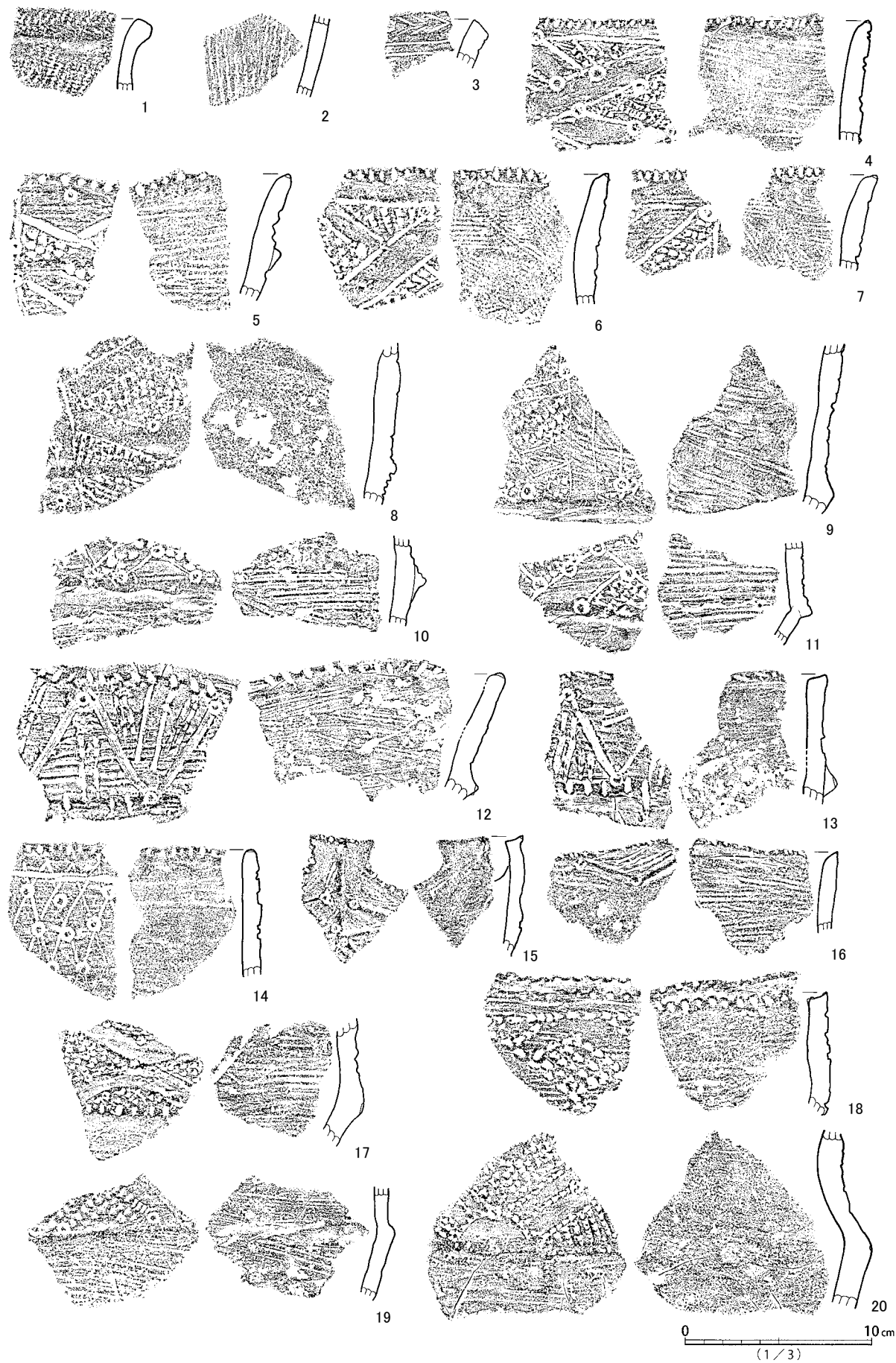


Fig.561 縄文土器 (3) 実測図

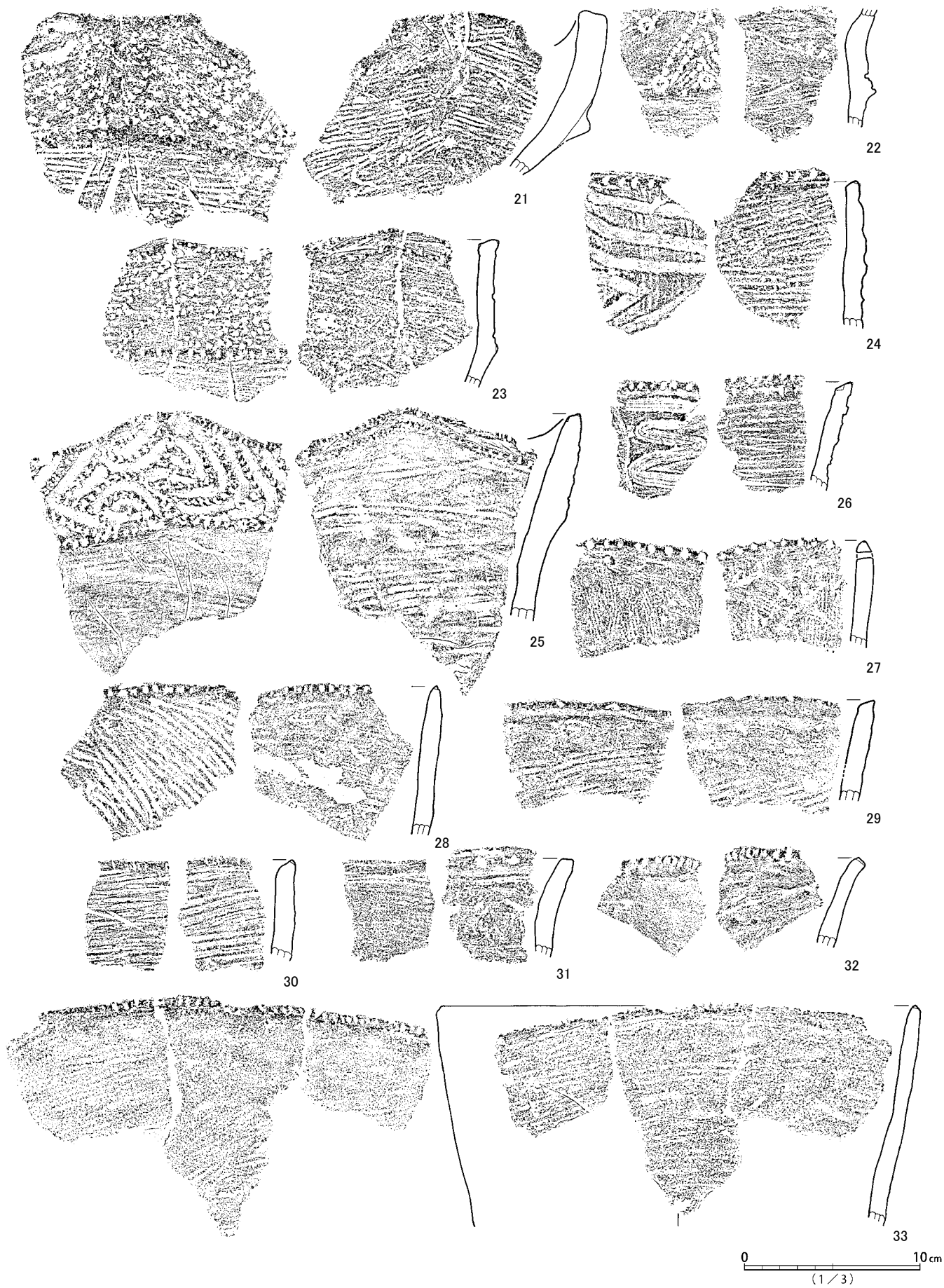


Fig.562 縄文土器 (4) 実測図



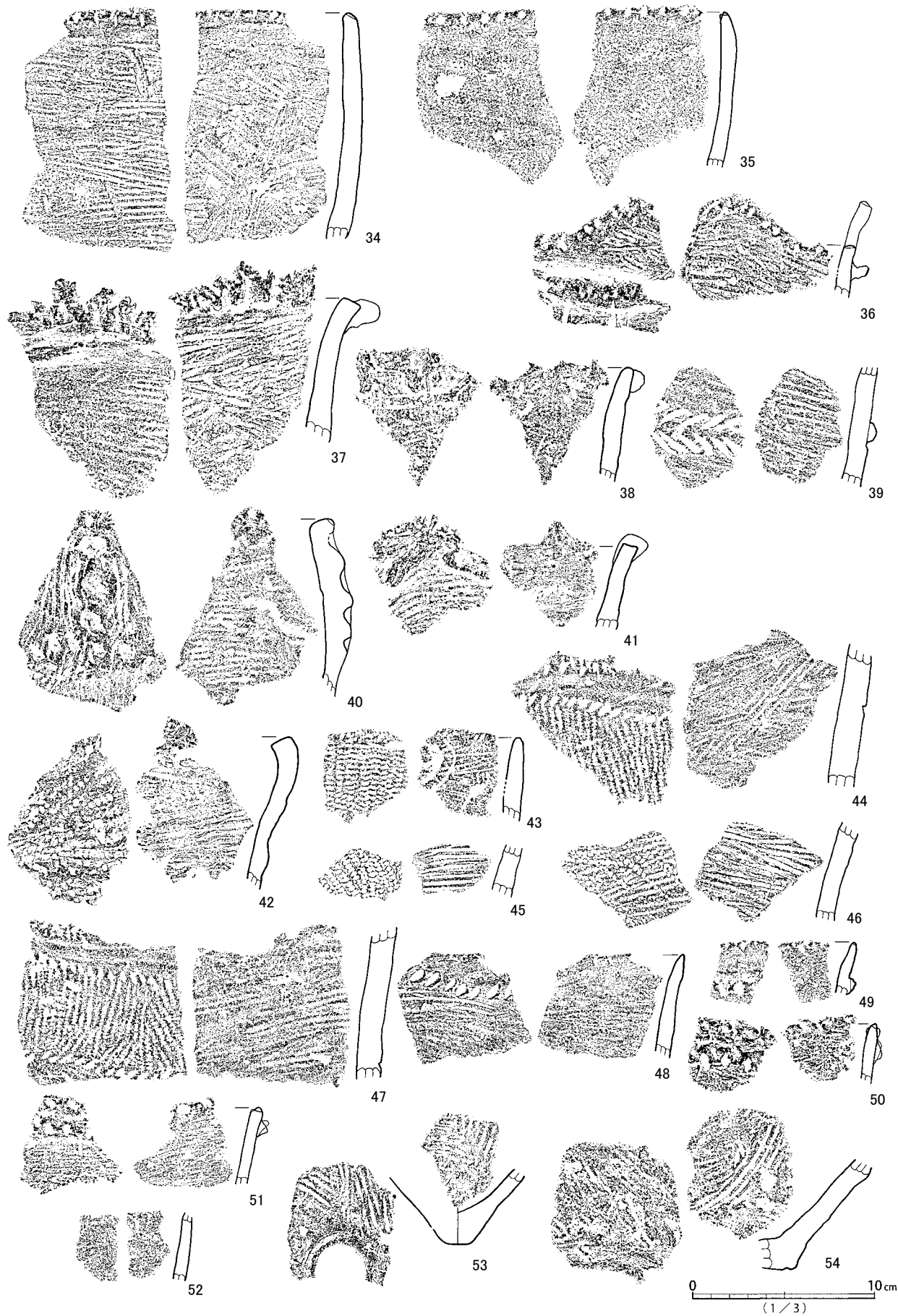


Fig.563 縄文土器 (5) 実測図

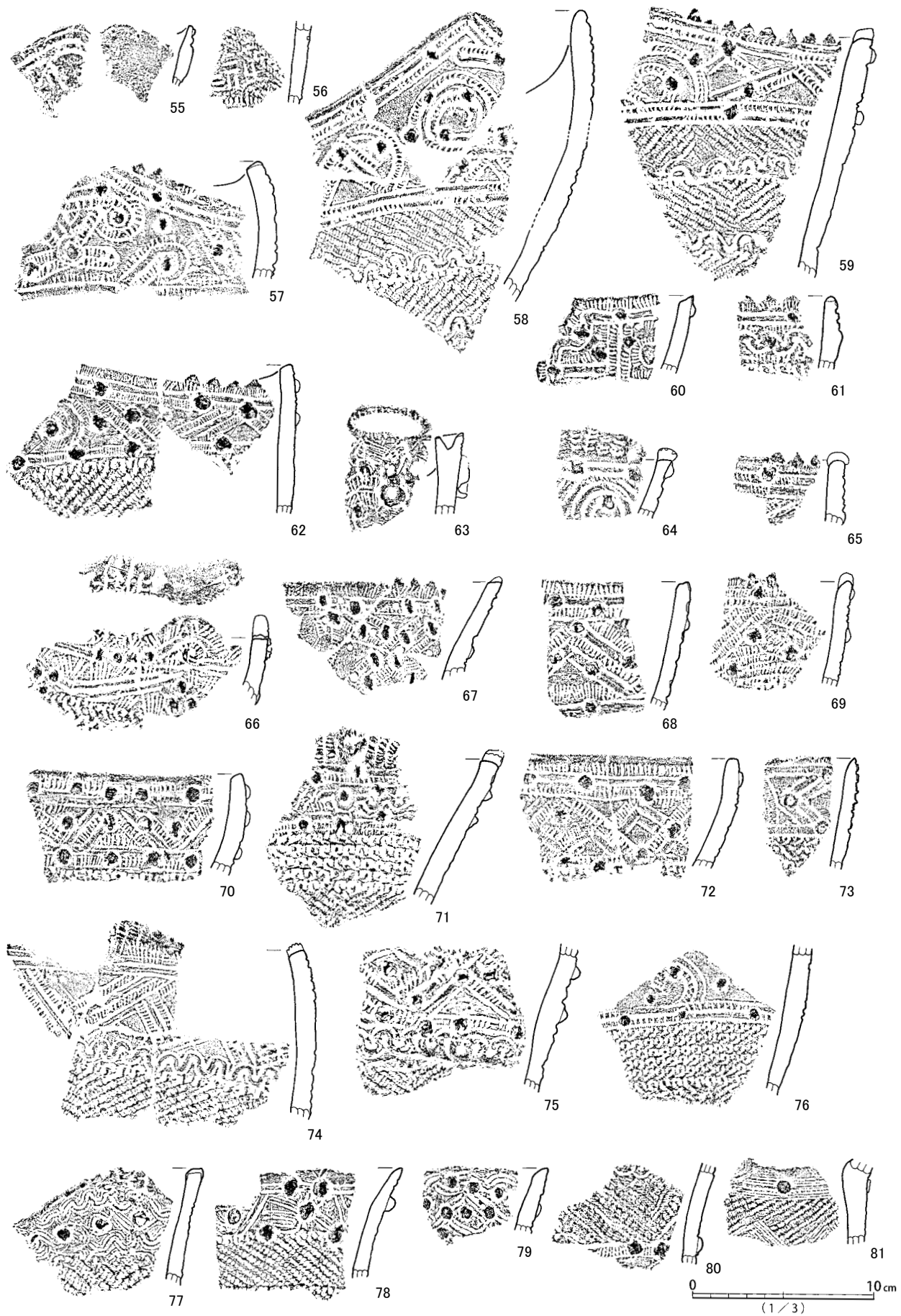


Fig.564 縄文土器 (6) 実測図

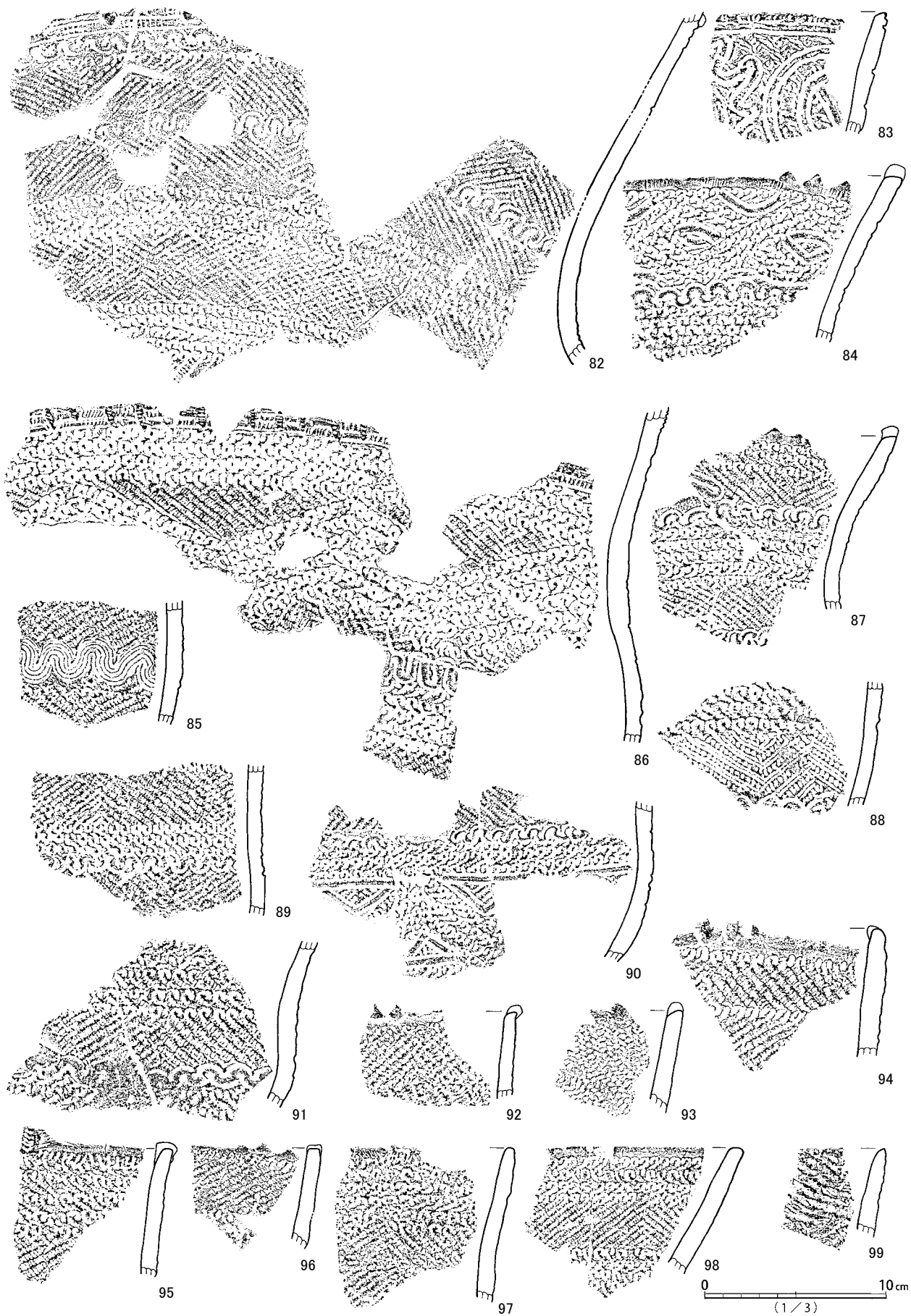


Fig.565 縄文土器 (7) 実測図

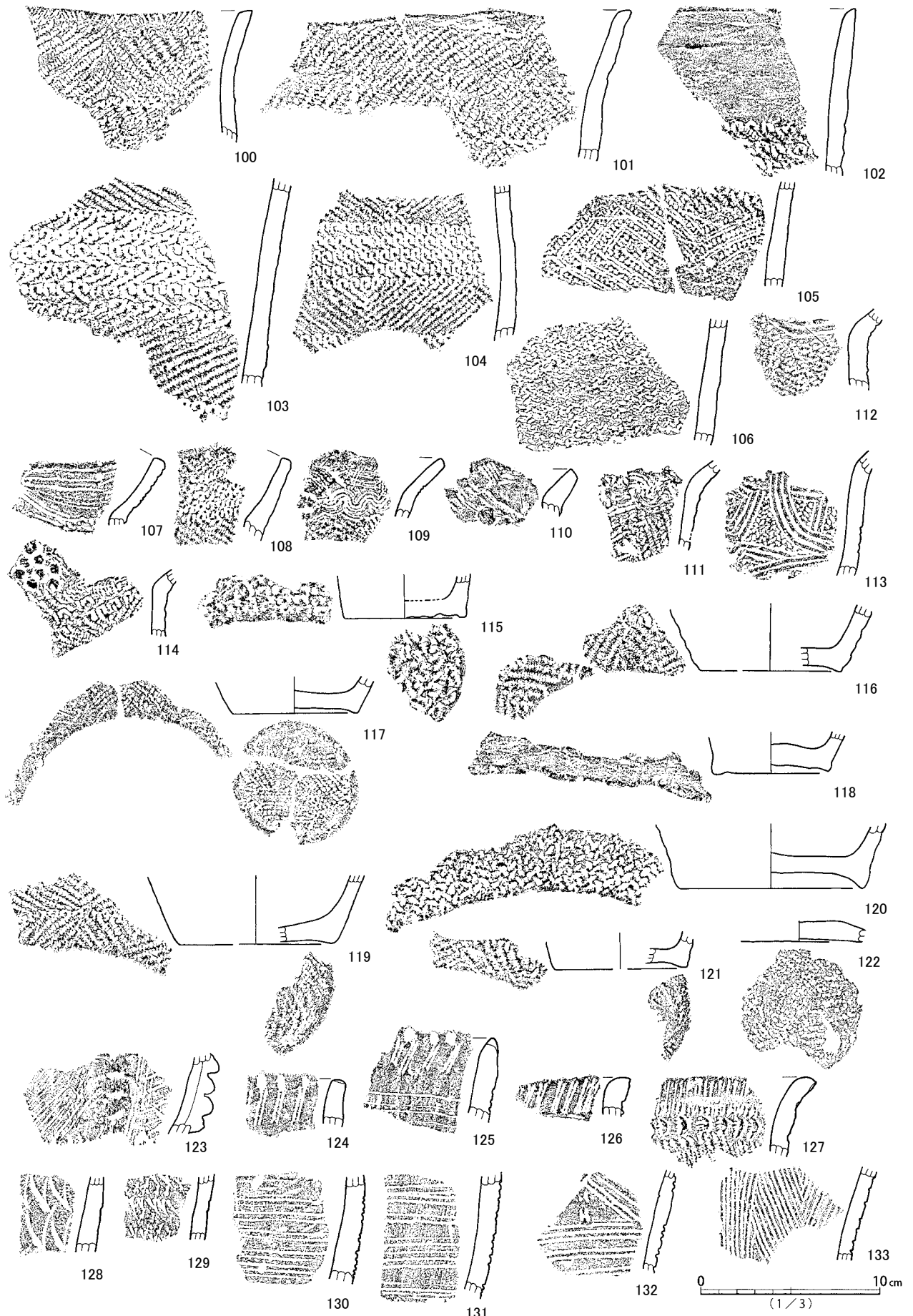


Fig.566 縄文土器 (8) 実測図

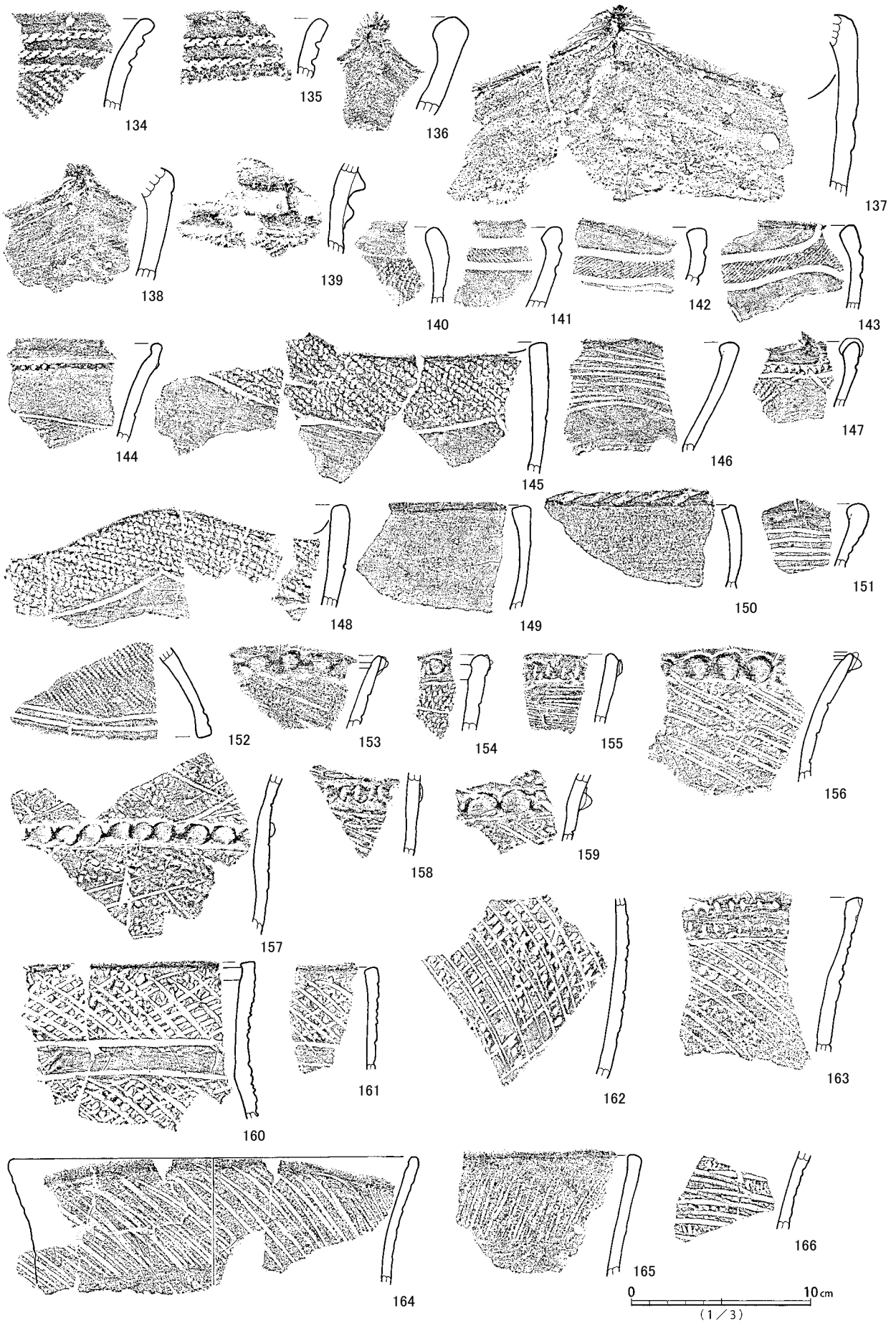


Fig.567 縄文土器(9)実測図

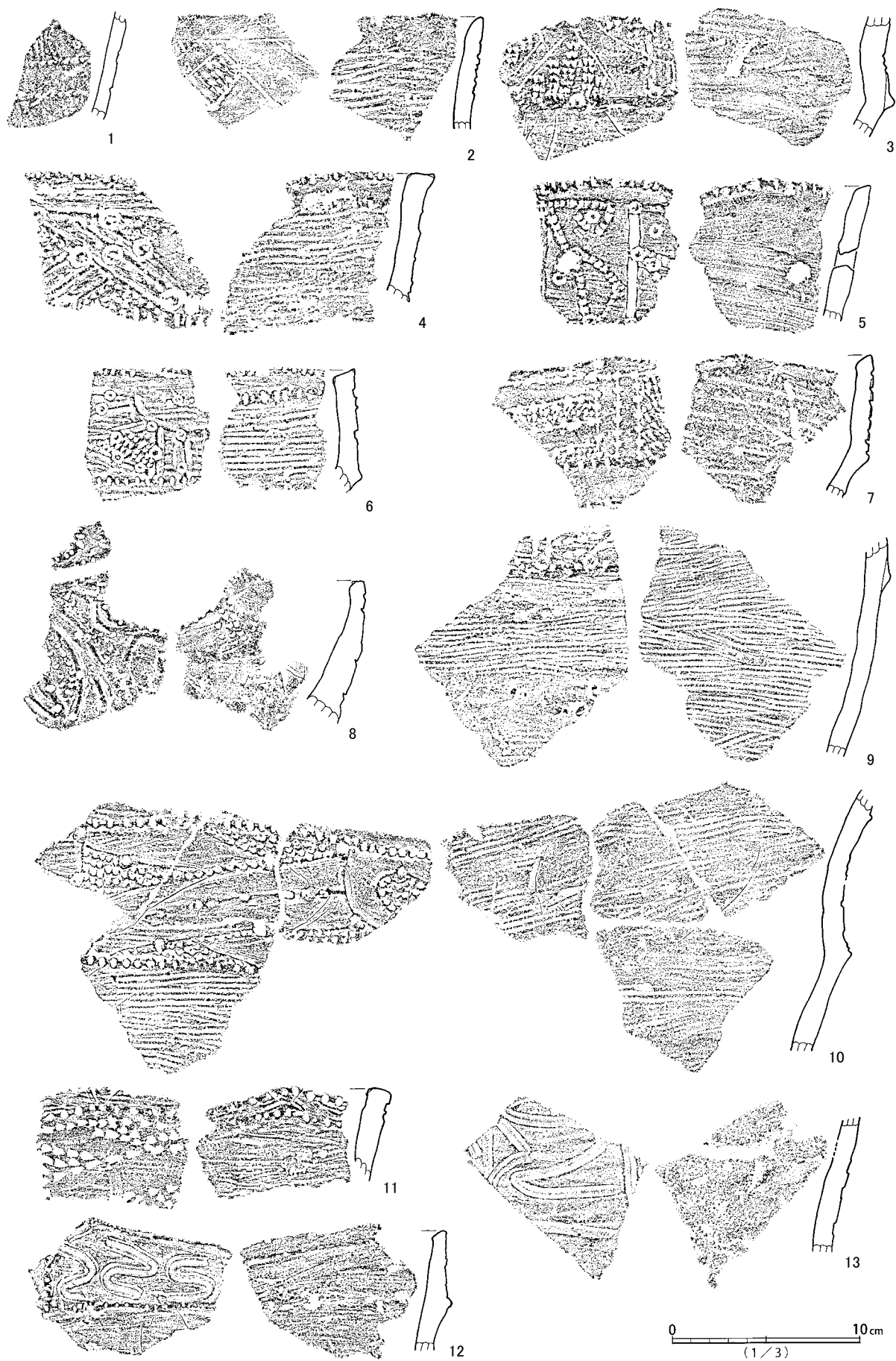


Fig.568 縄文土器 (10) 実測図

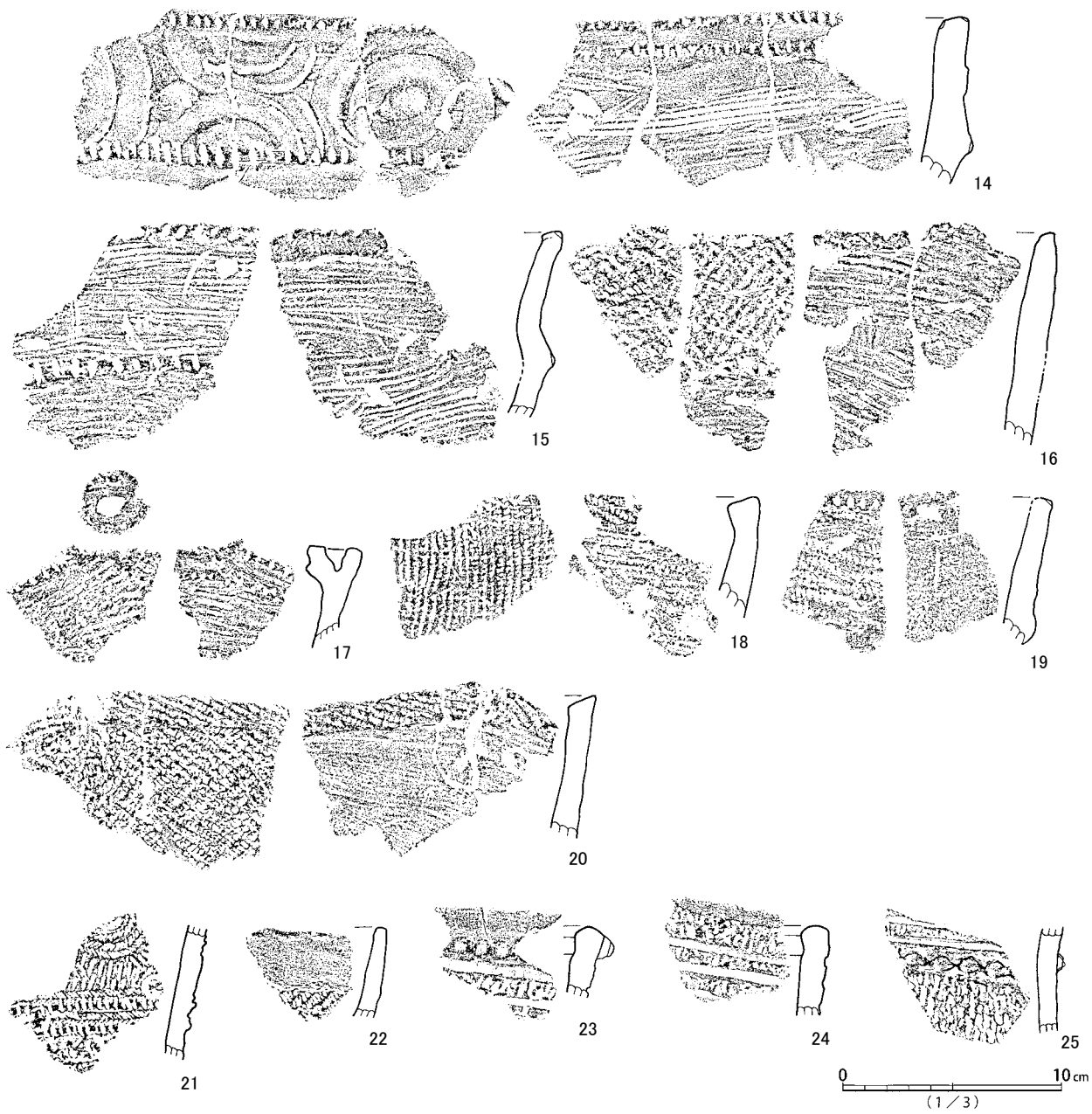


Fig.569 縄文土器 (11) 実測図



Fig.570 縄文土器 (12) 実測図



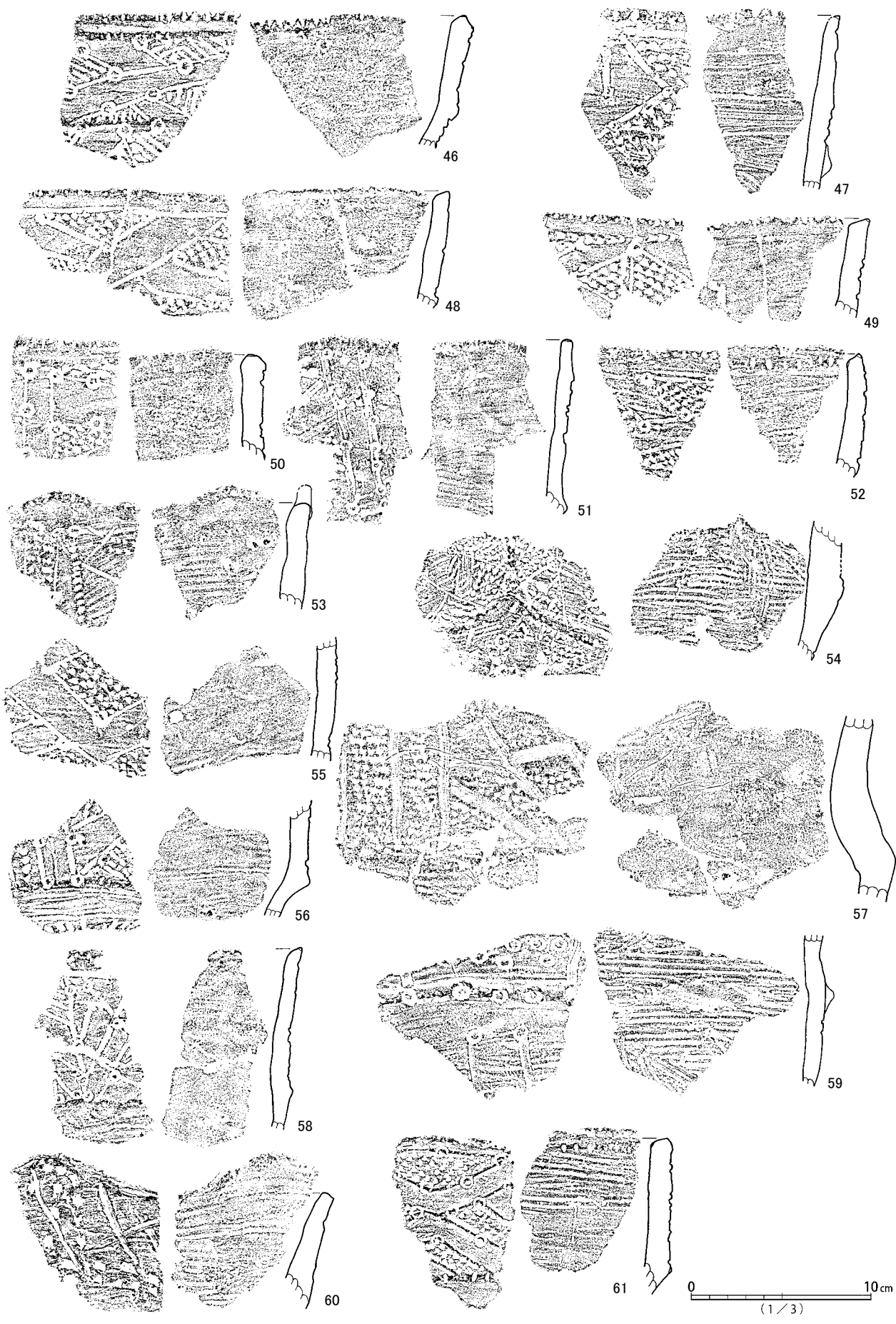


Fig.571 縄文土器 (13) 実測図

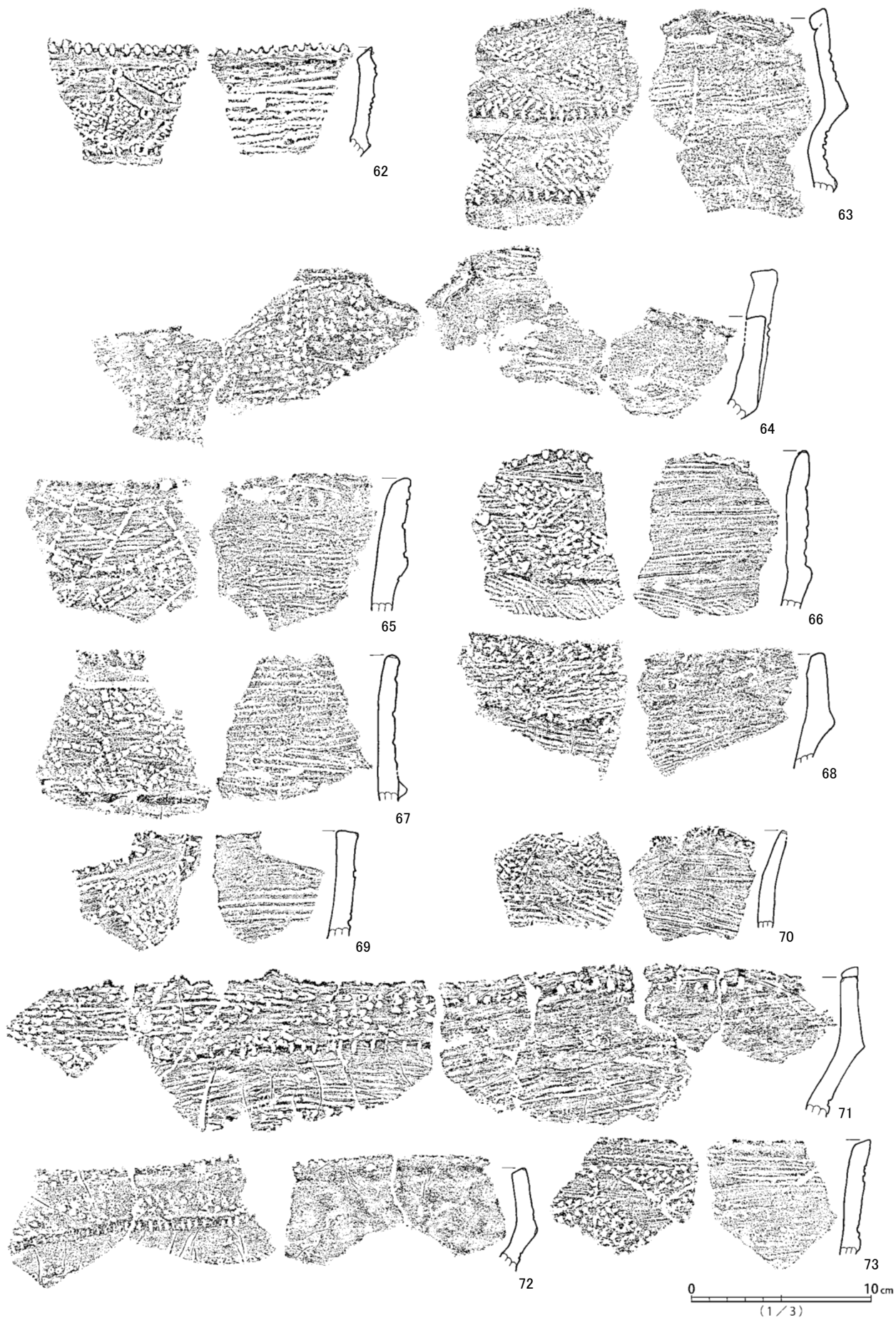


Fig.572 縄文土器 (14) 実測図

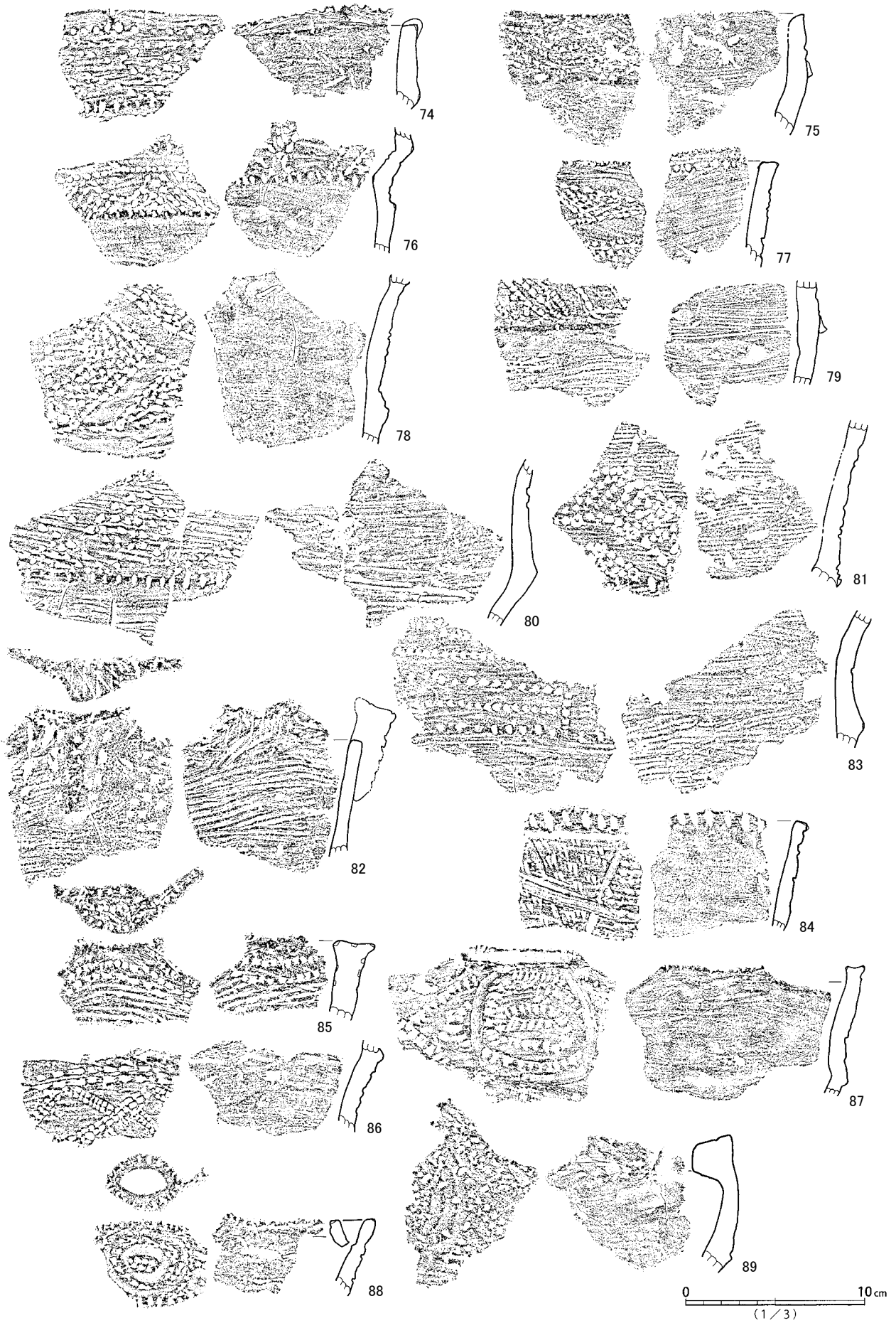


Fig.573 縄文土器 (15) 実測図

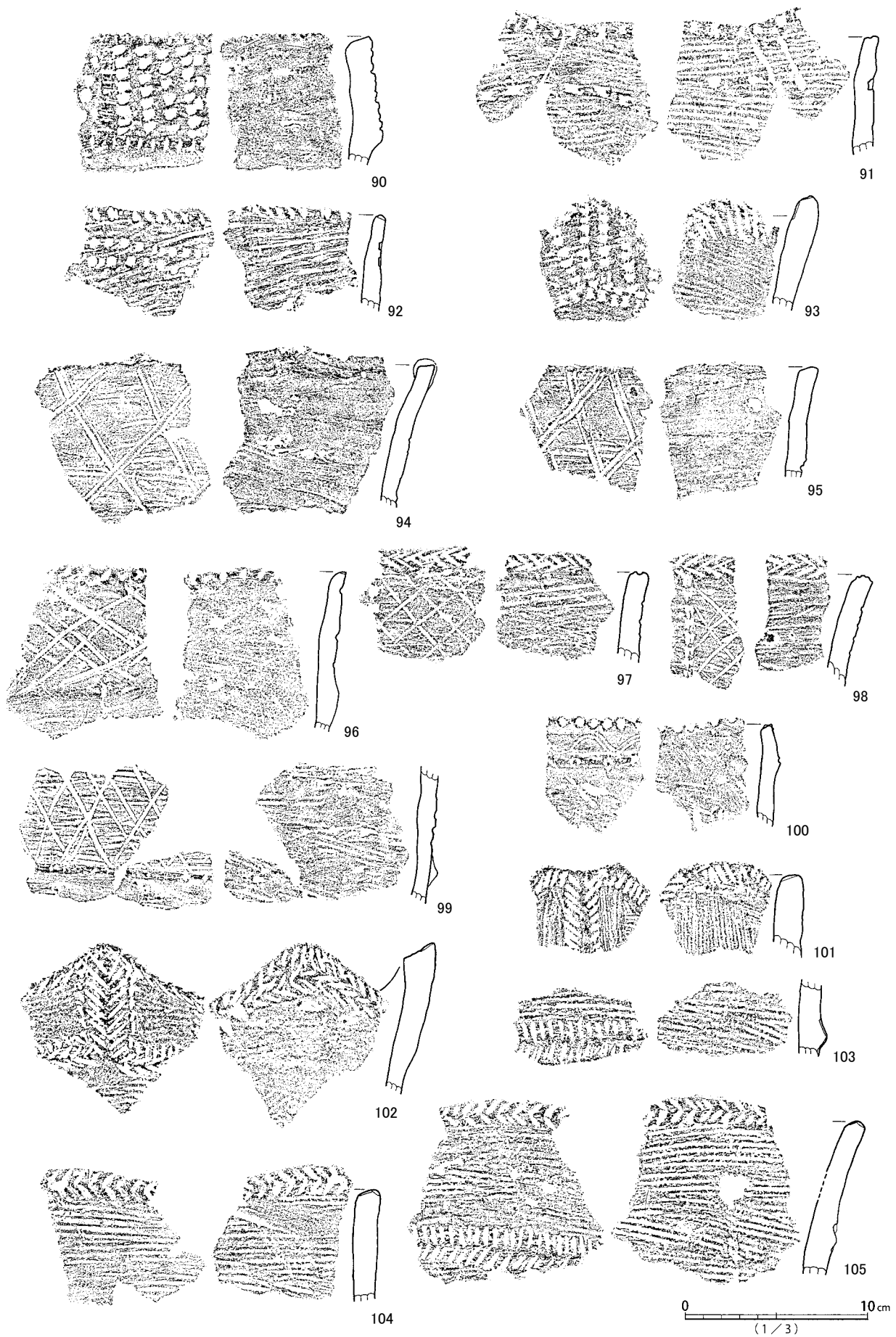


Fig.574 縄文土器 (16) 実測図

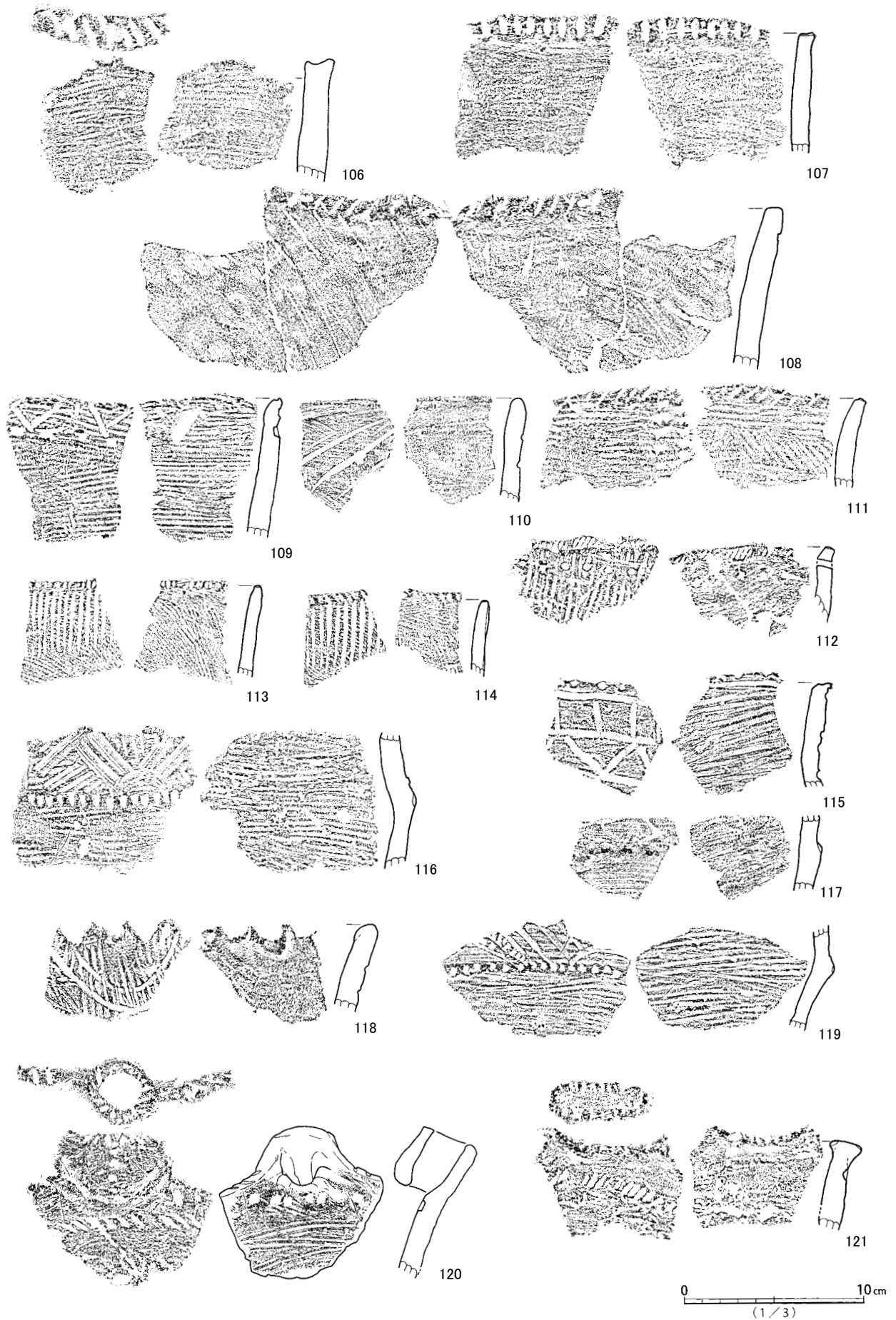


Fig.575 繩文土器 (17) 実測図

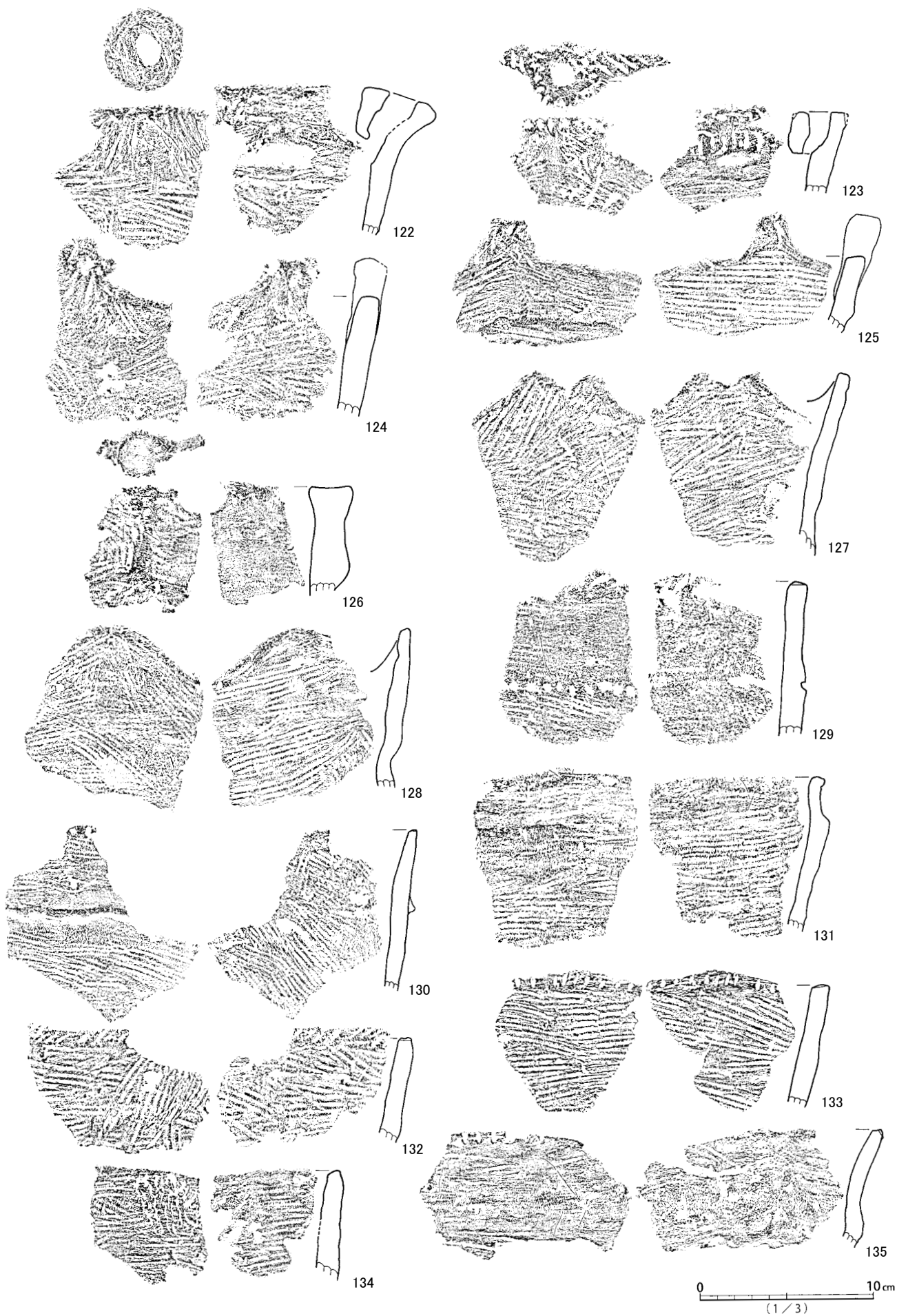


Fig.576 縄文土器 (18) 実測図

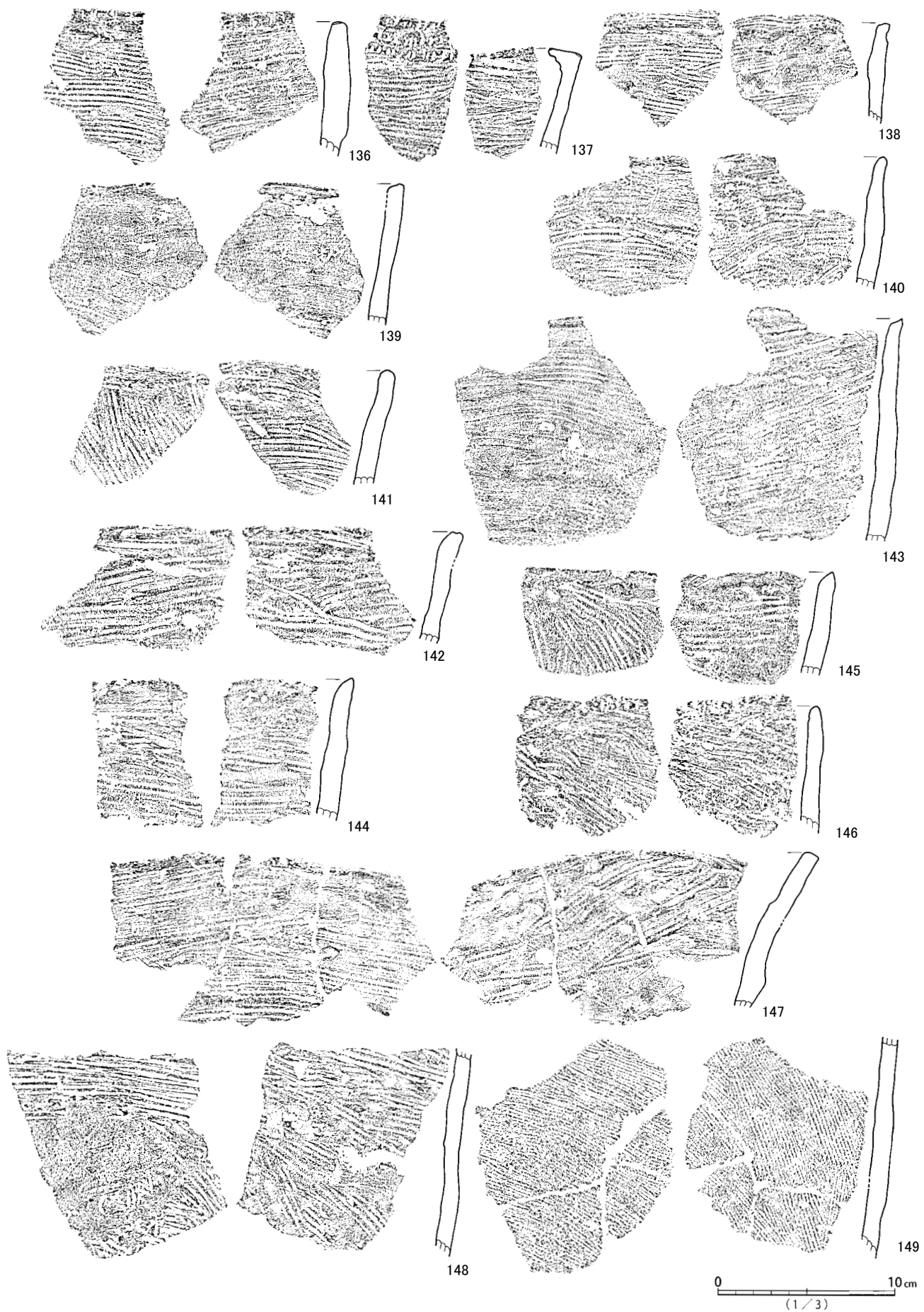


Fig.577 縄文土器 (19) 実測図

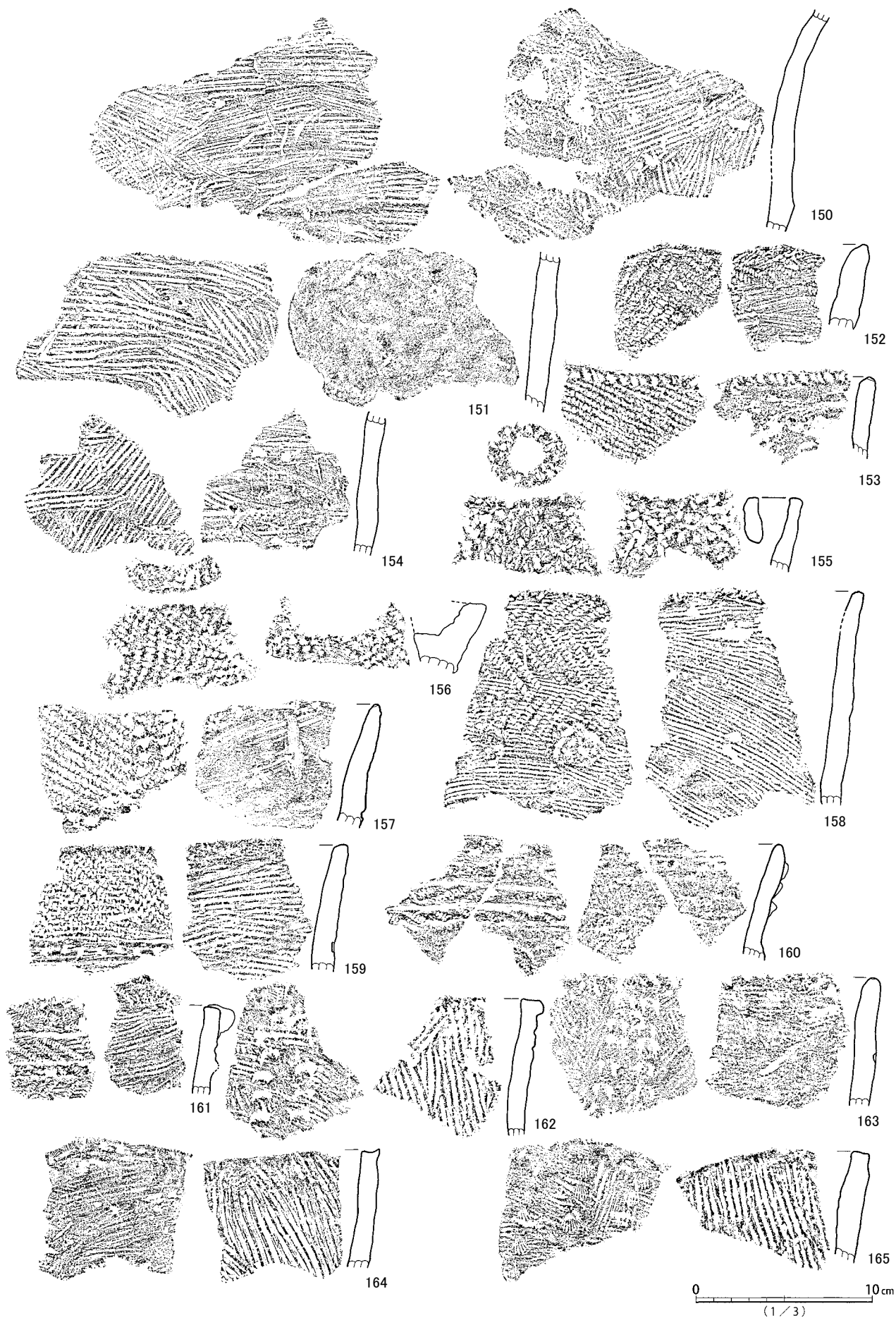


Fig.578 縄文土器 (20) 実測図



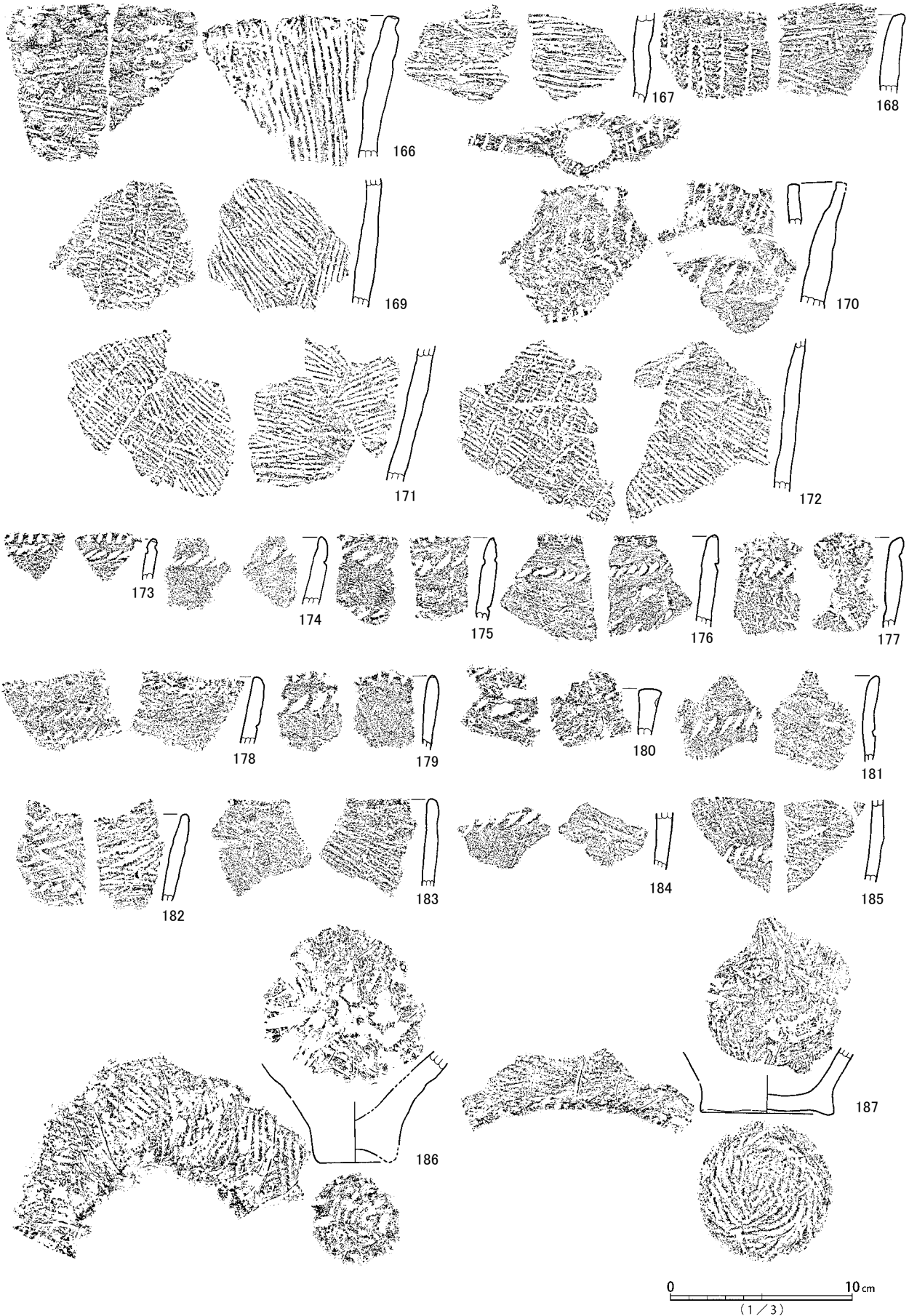


Fig.579 縄文土器 (21) 実測図

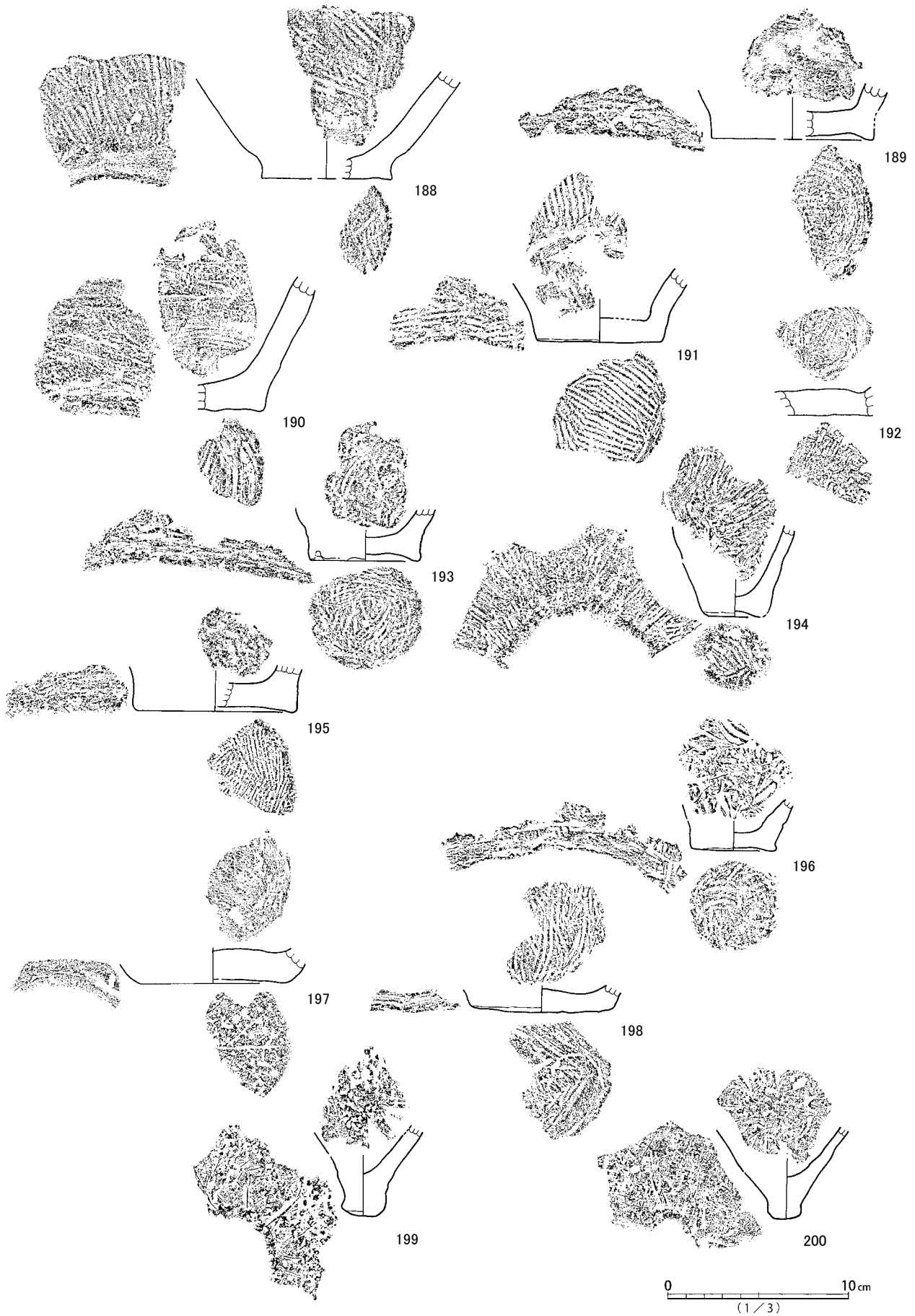


Fig.580 縄文土器 (22) 実測図

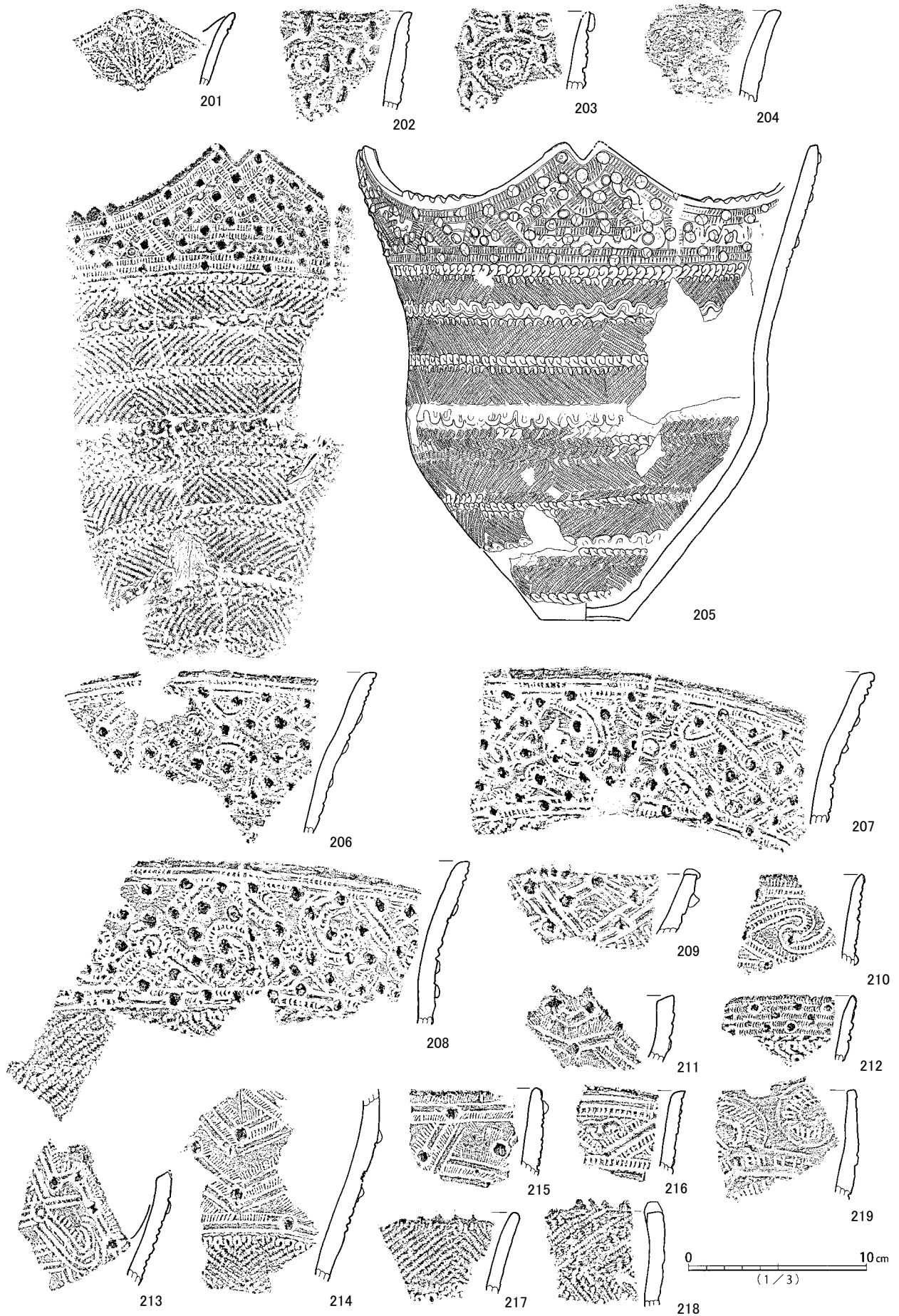


Fig.581 縄文土器 (23) 実測図

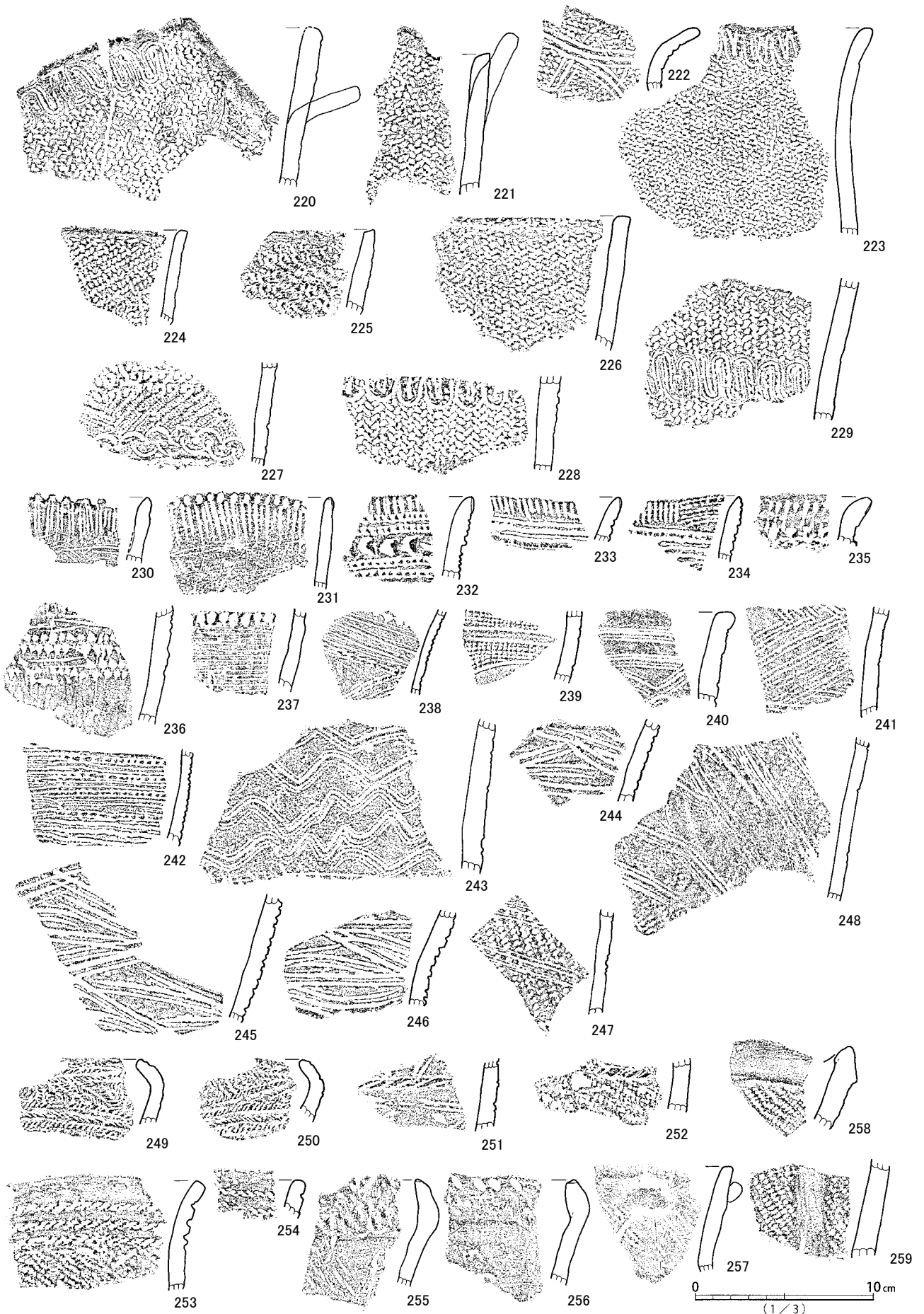


Fig.582 縄文土器 (24) 実測図

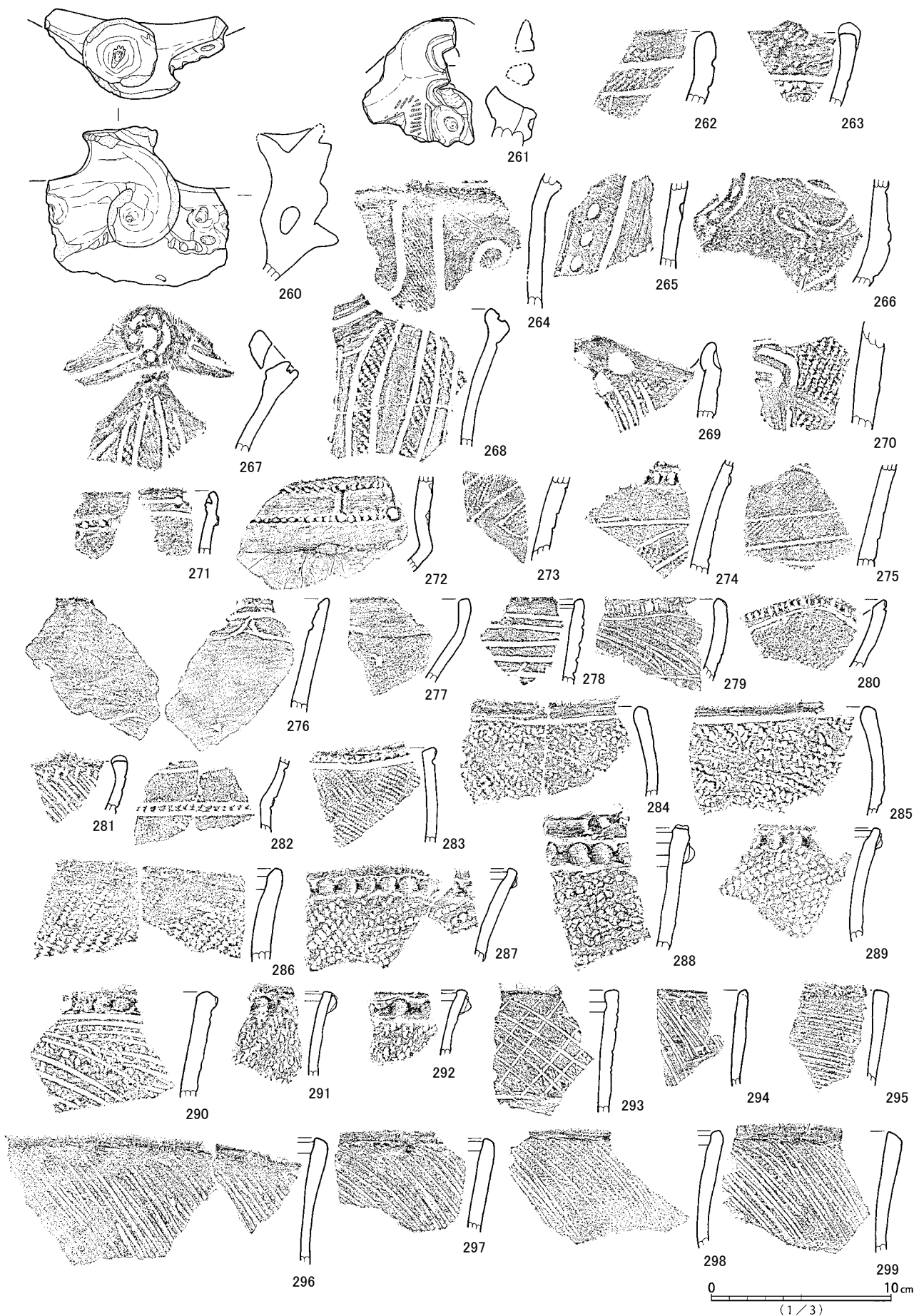


Fig.583 縄文土器 (25) 実測図

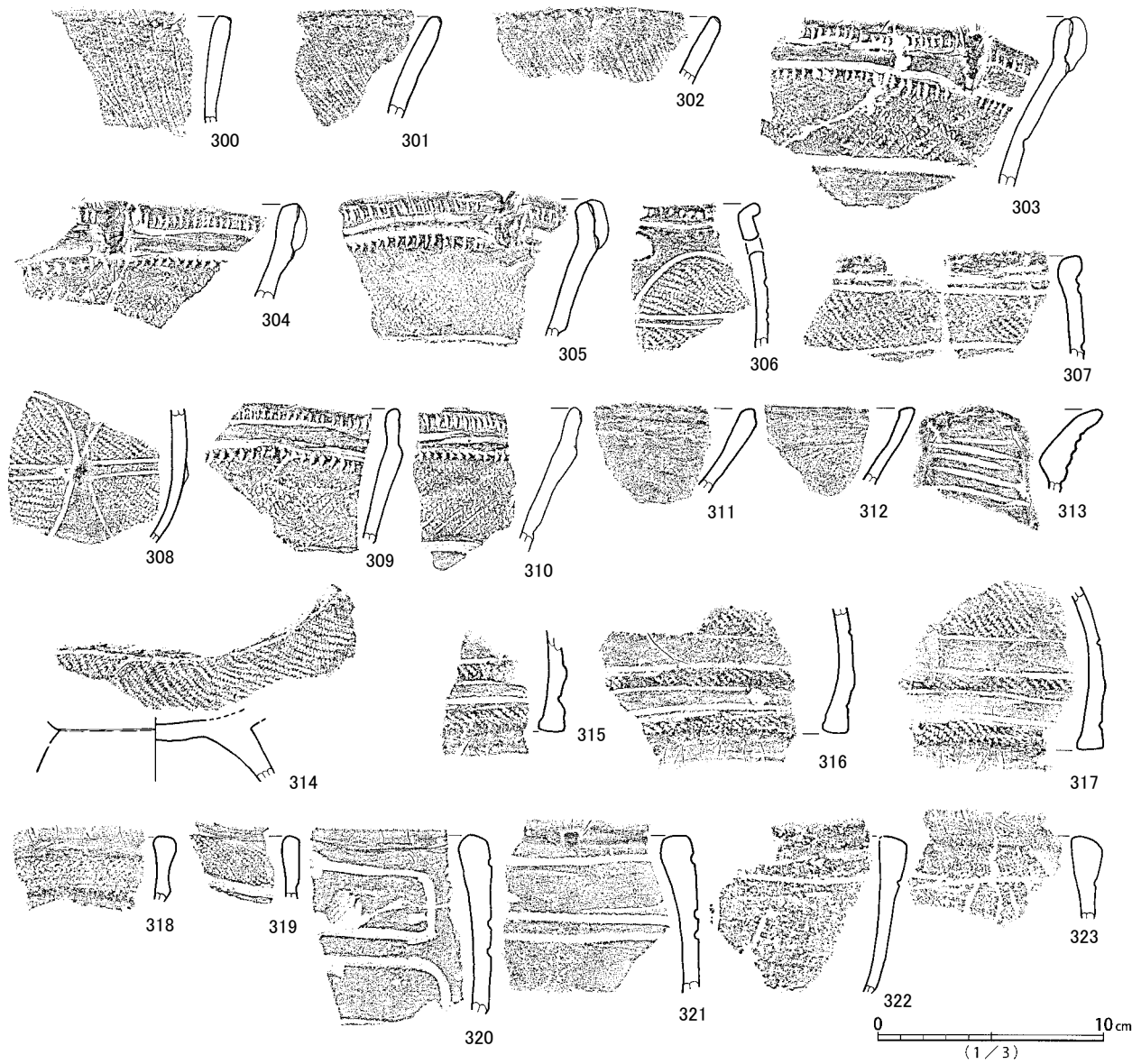


Fig.584 縄文土器 (26) 実測図

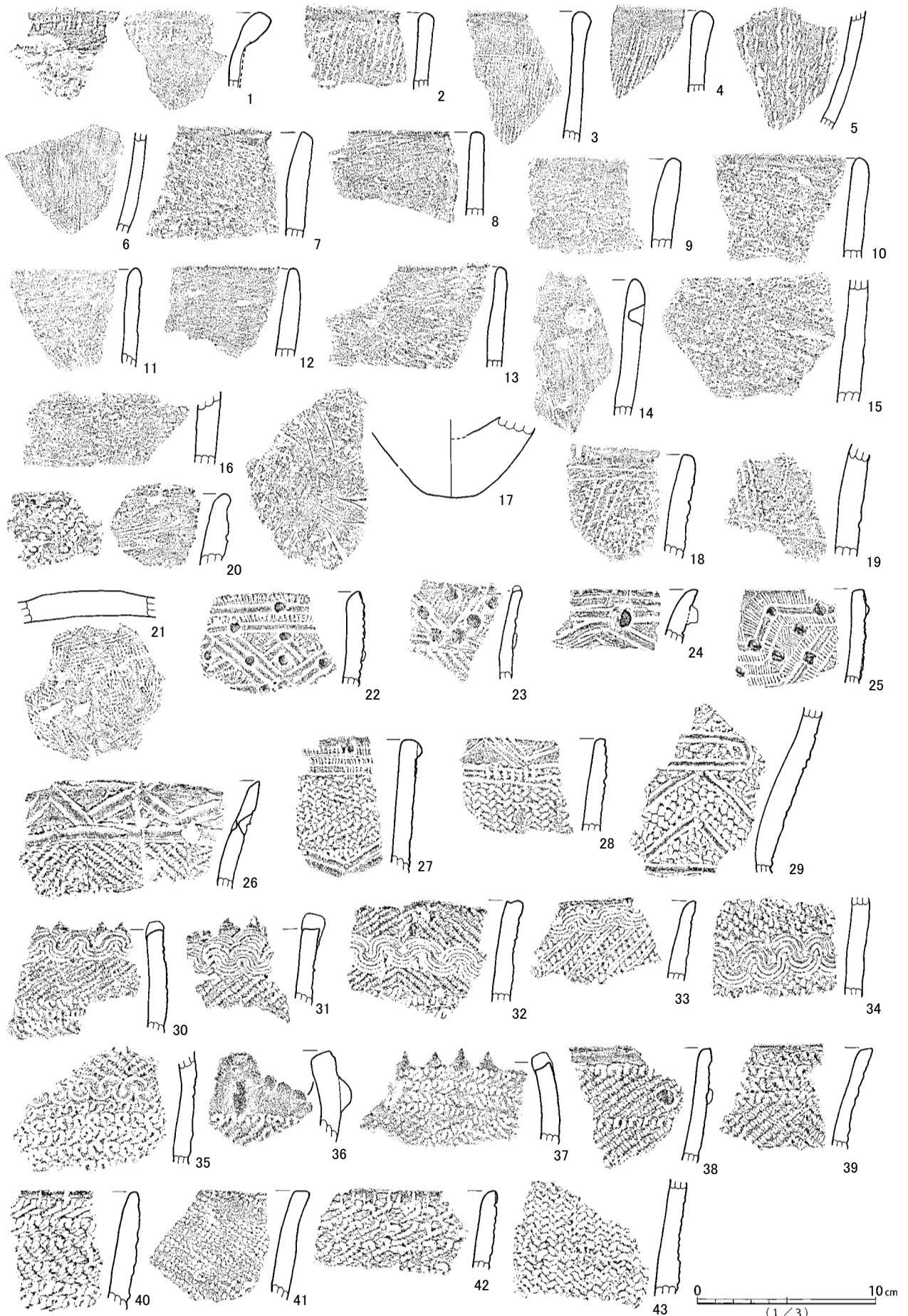


Fig.585 縄文土器 (27) 実測図

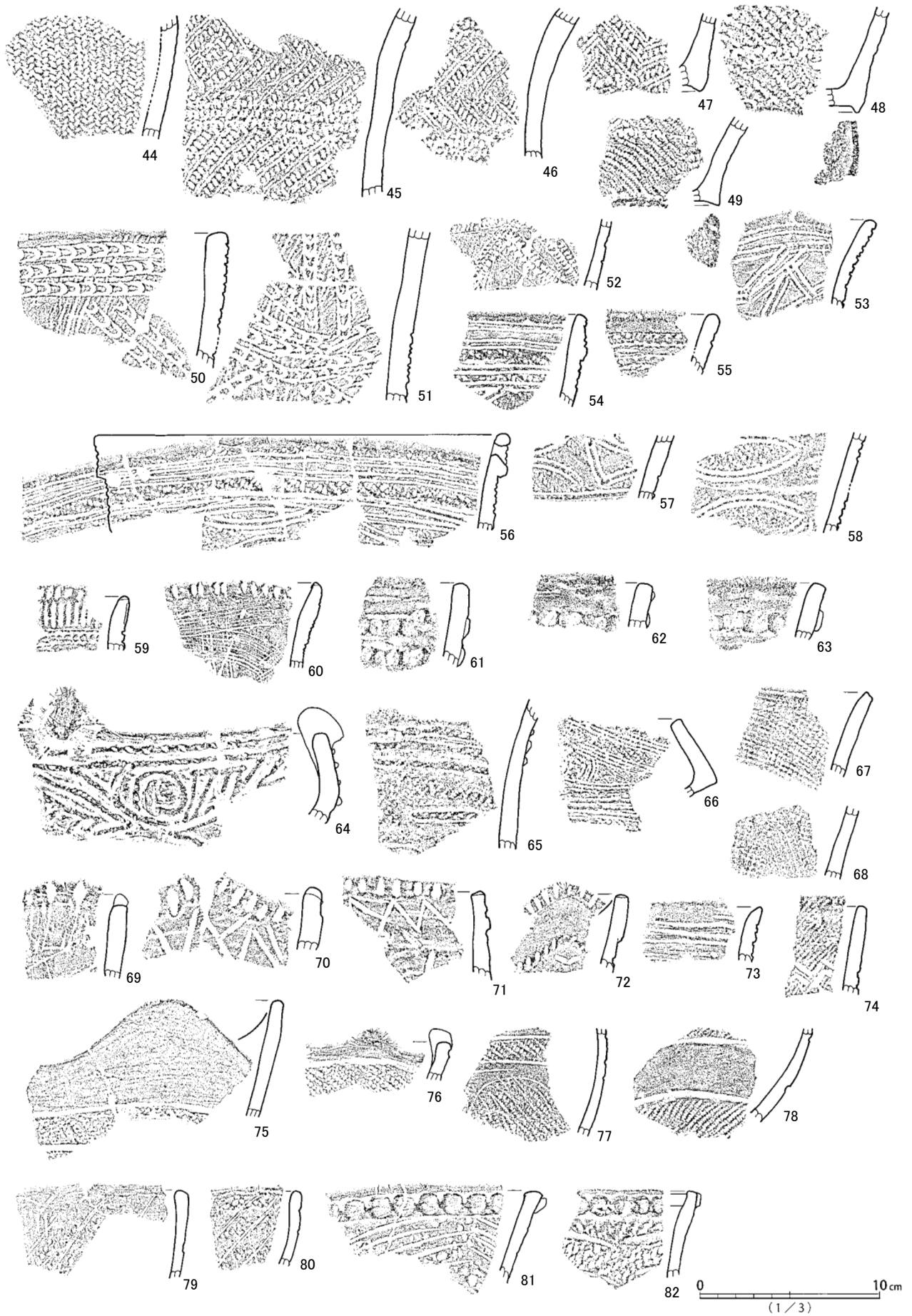


Fig.586 縄文土器 (28) 実測図



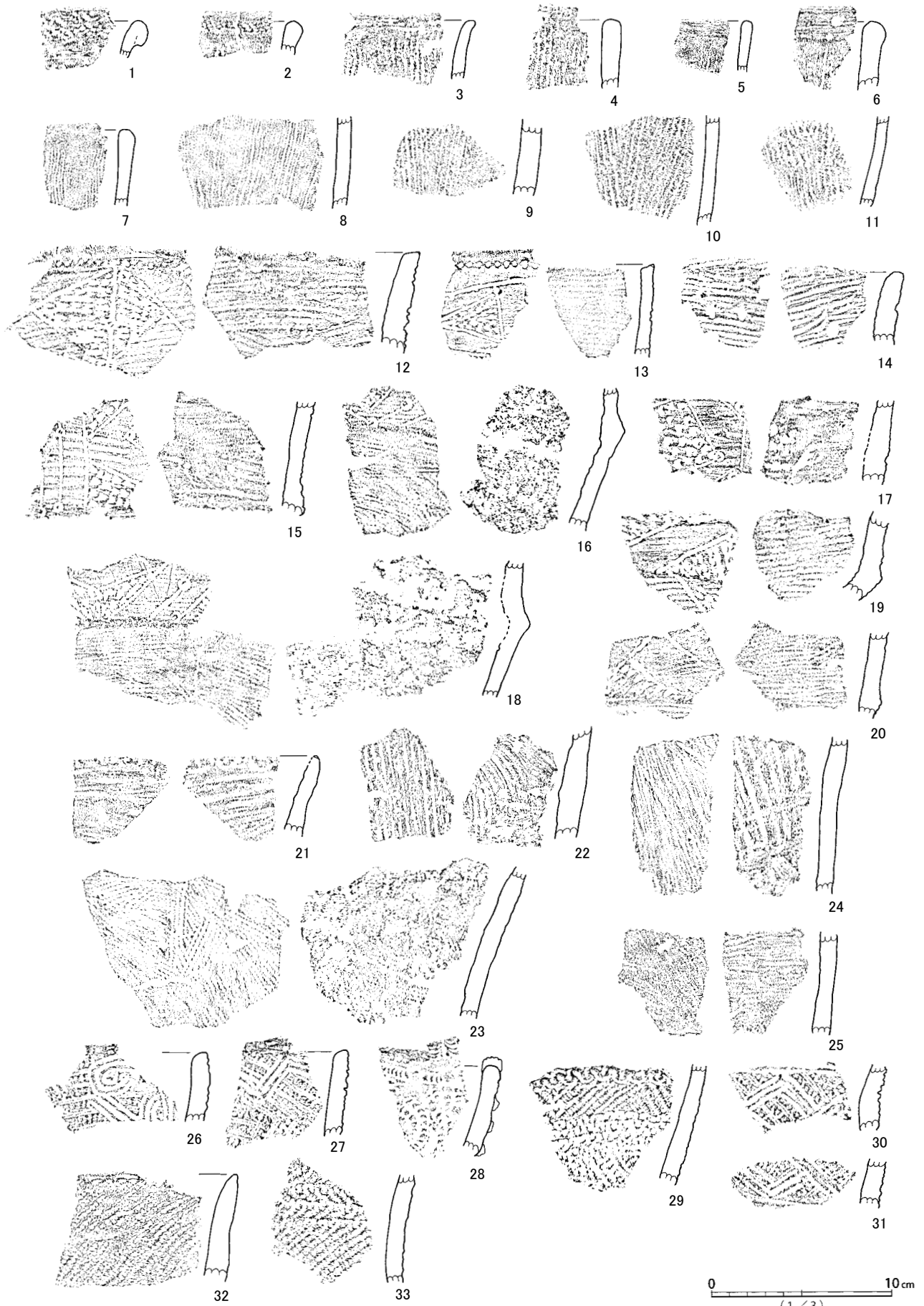


Fig.587 縄文土器 (29) 実測図

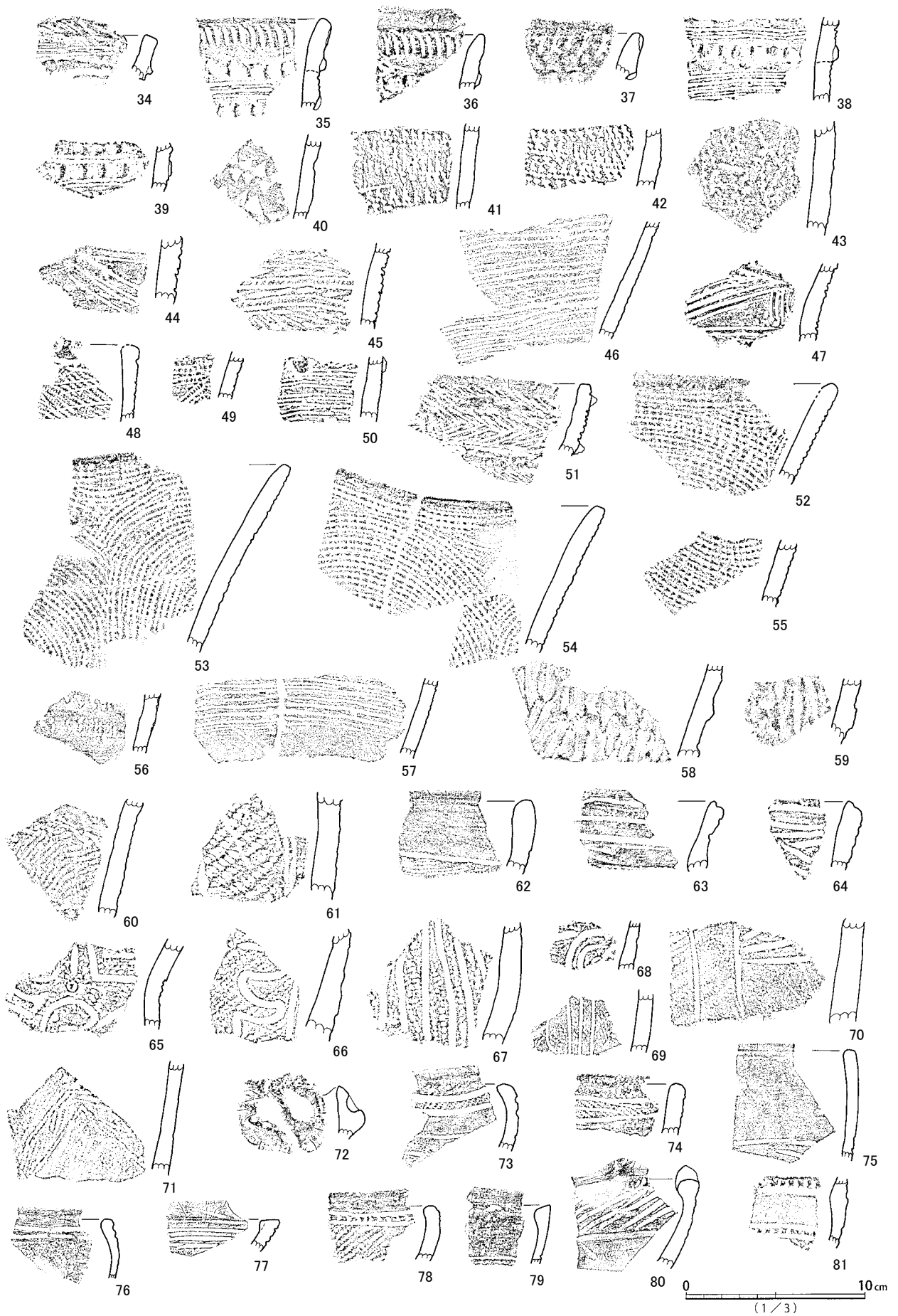


Fig.588 縄文土器 (30) 実測図

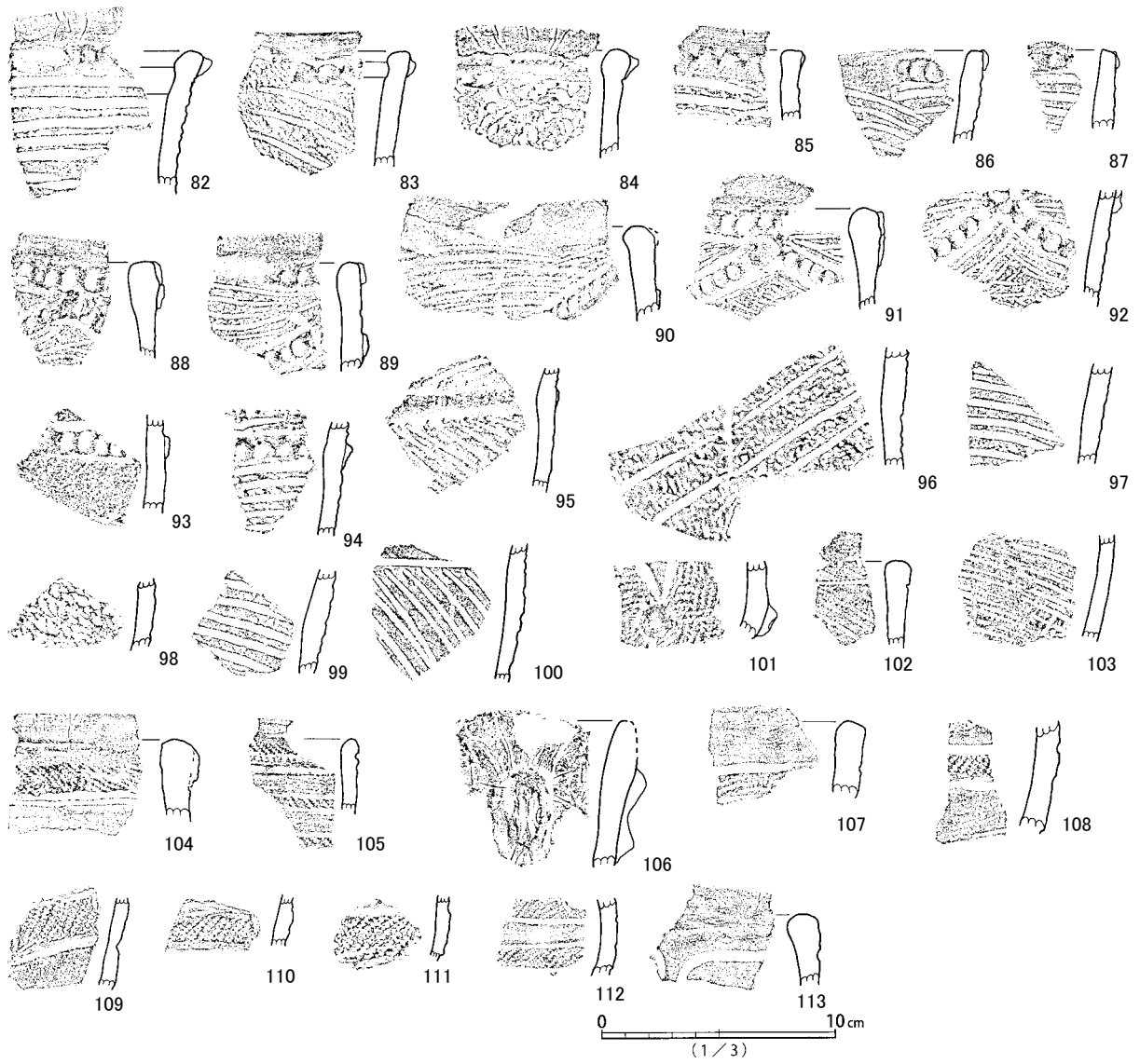


Fig.589 縄文土器 (31) 実測図

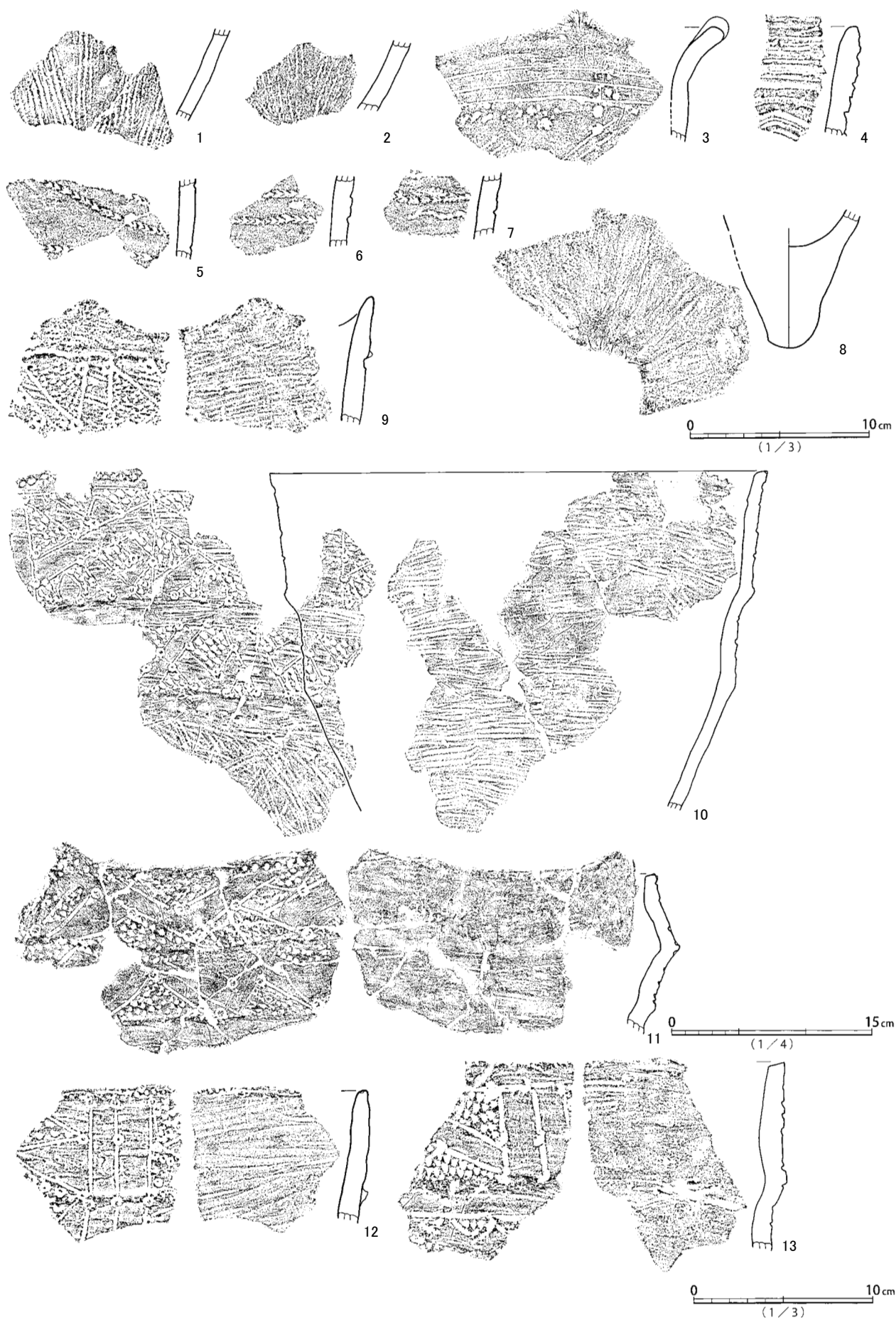


Fig.590 縄文土器 (32) 実測図



Fig.591 縄文土器 (33) 実測図

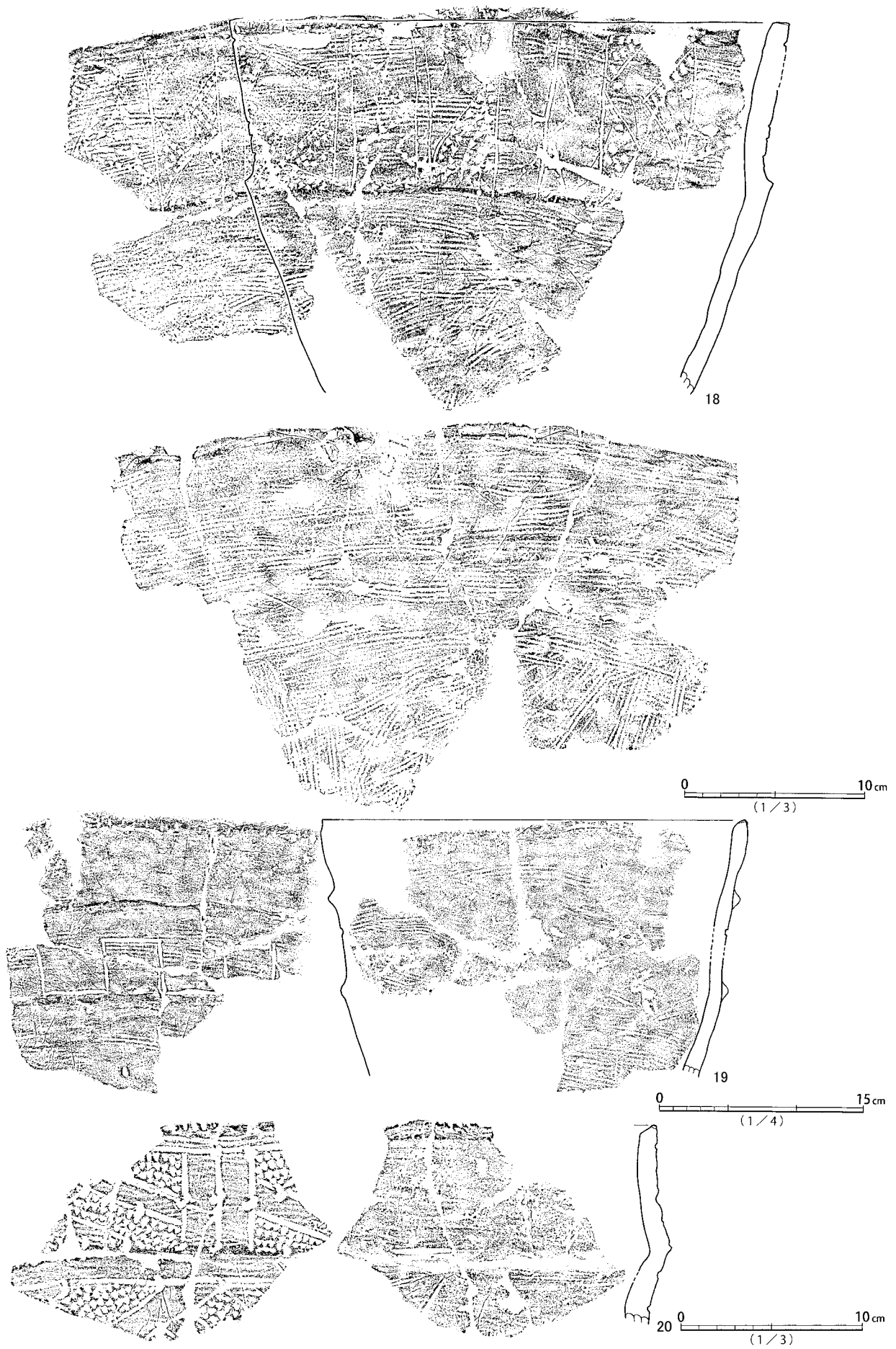


Fig.592 縄文土器 (34) 実測図



Fig.593 縄文土器 (35) 実測図

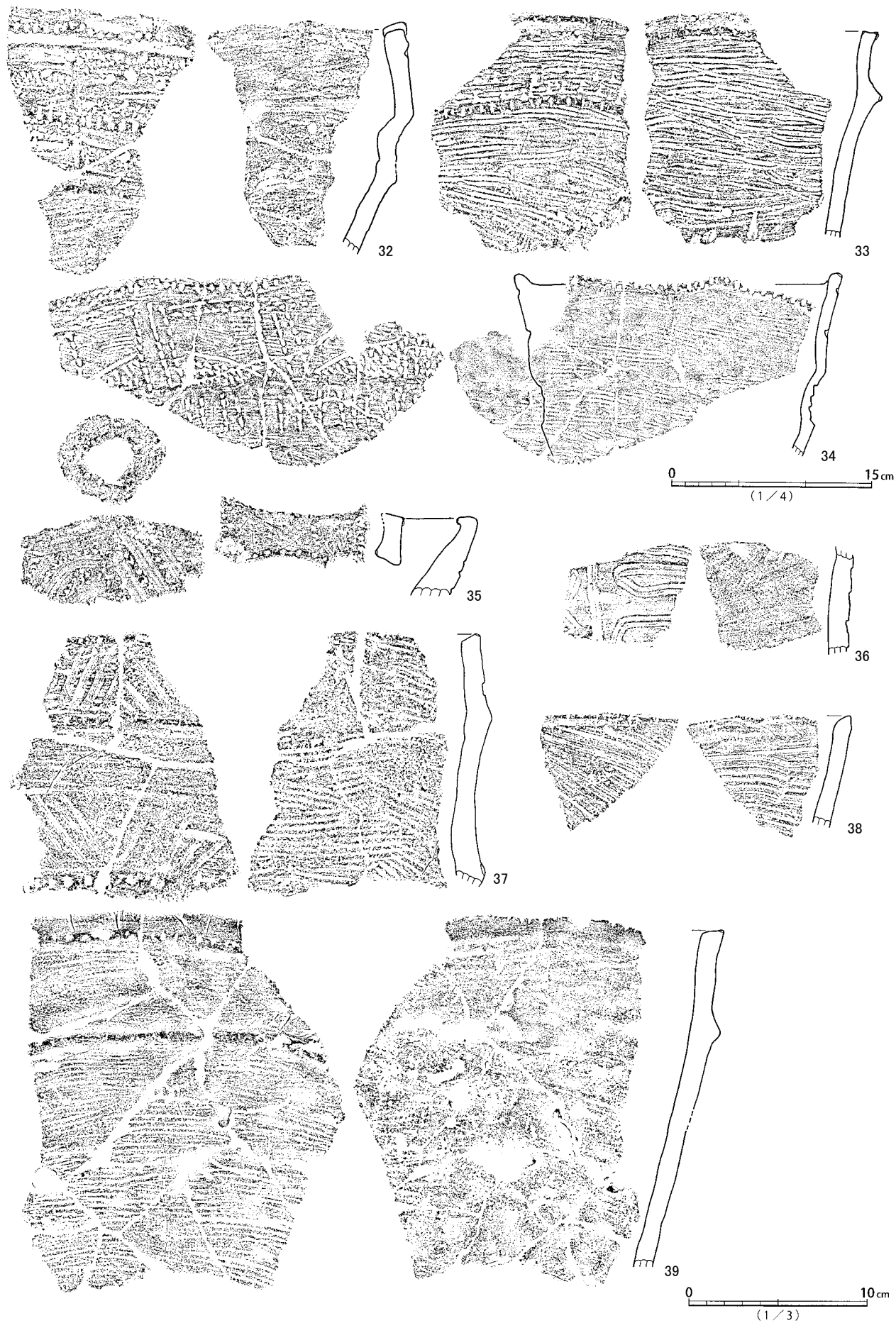


Fig.594 縄文土器 (36) 実測図



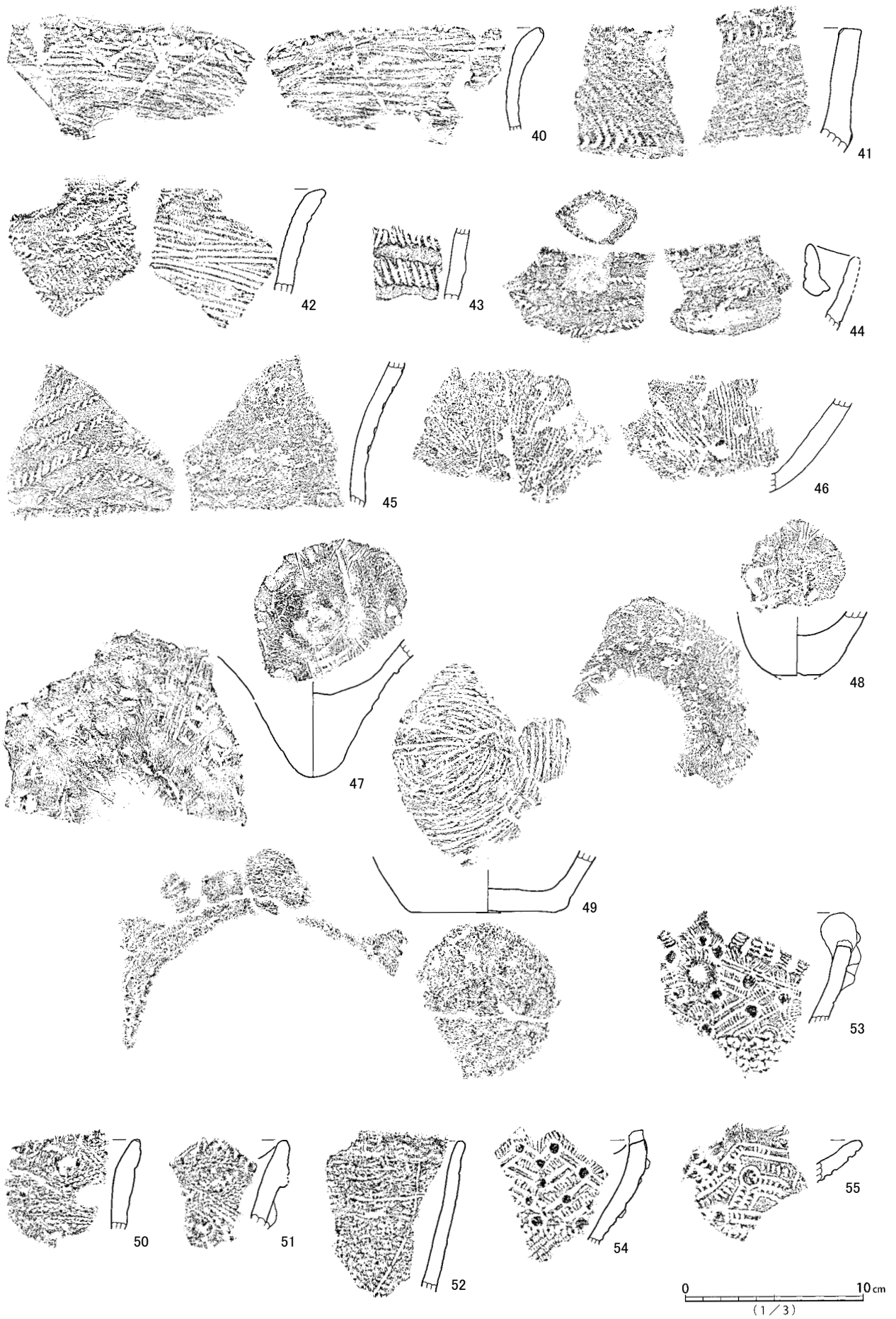


Fig.595 縄文土器 (37) 実測図

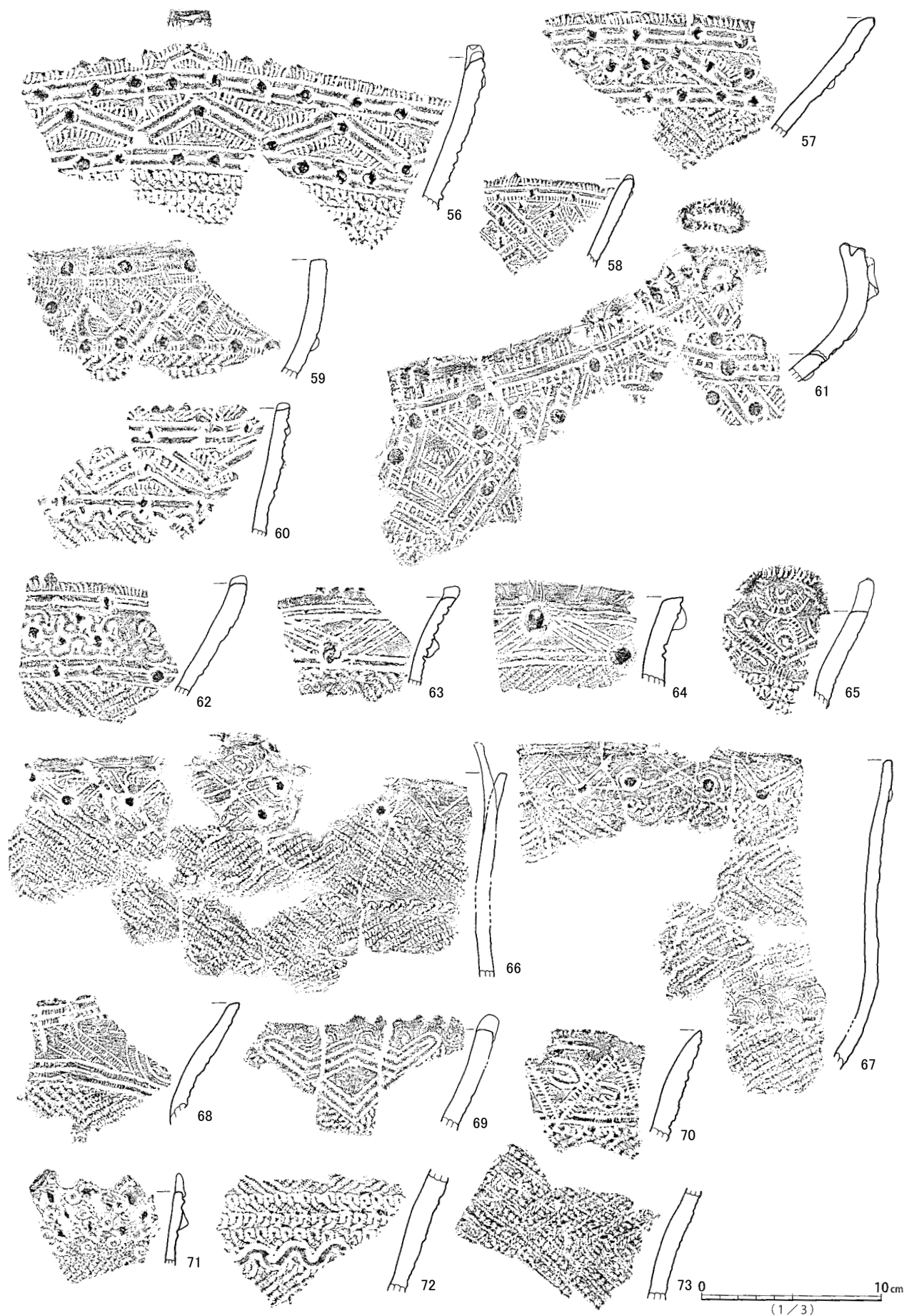


Fig.596 縄文土器 (38) 実測図

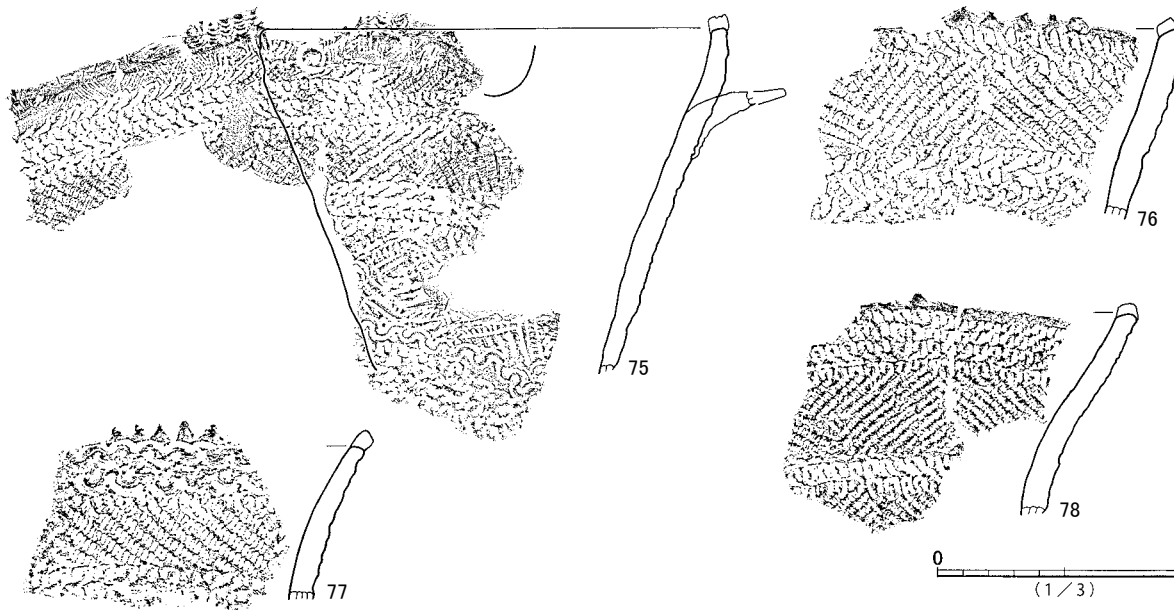
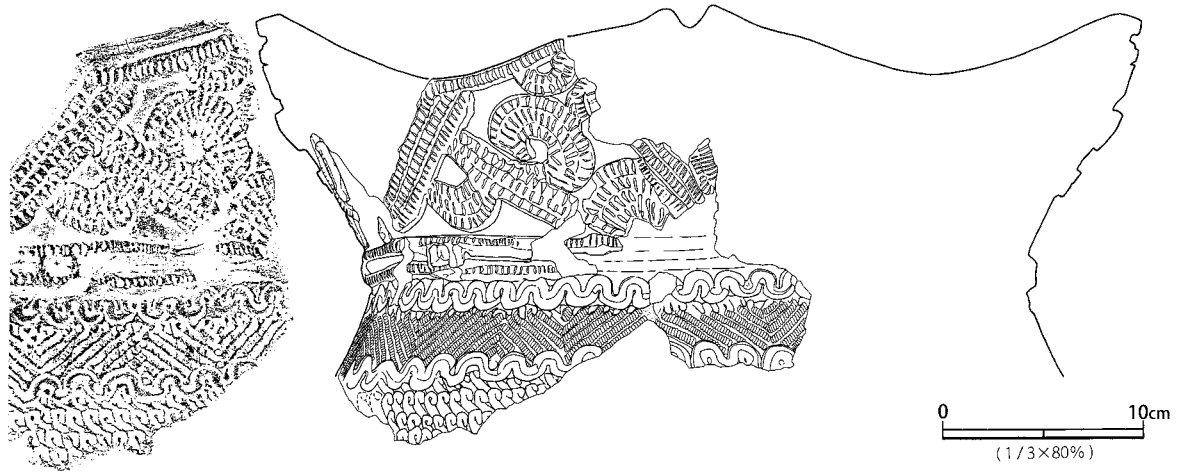
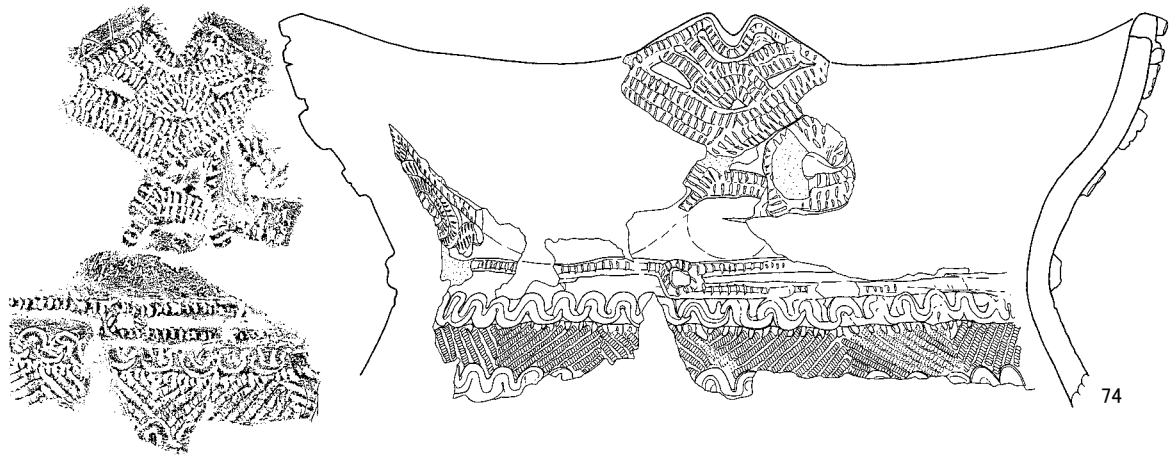


Fig.597 縄文土器 (39) 実測図

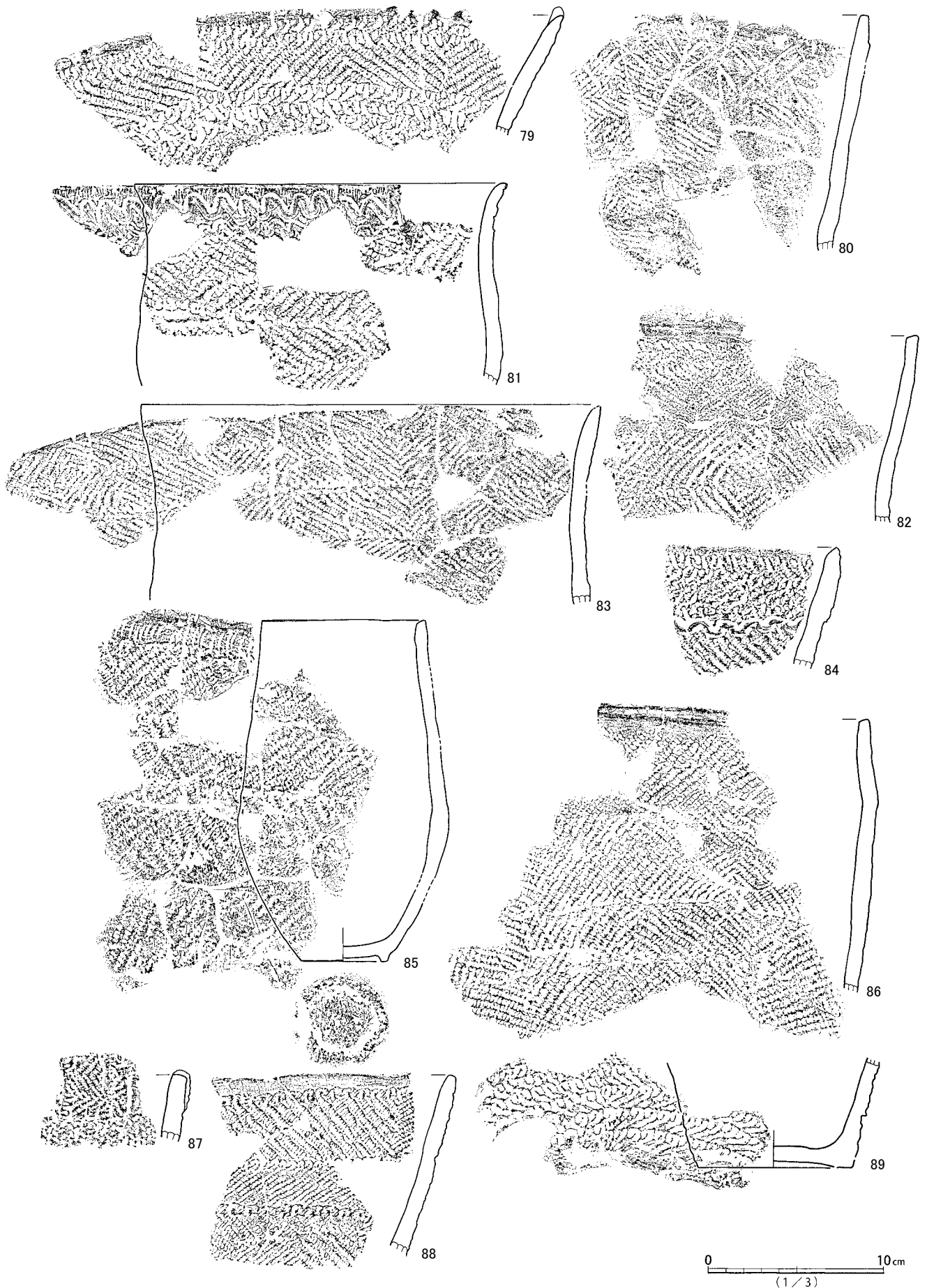


Fig.598 縄文土器 (40) 実測図

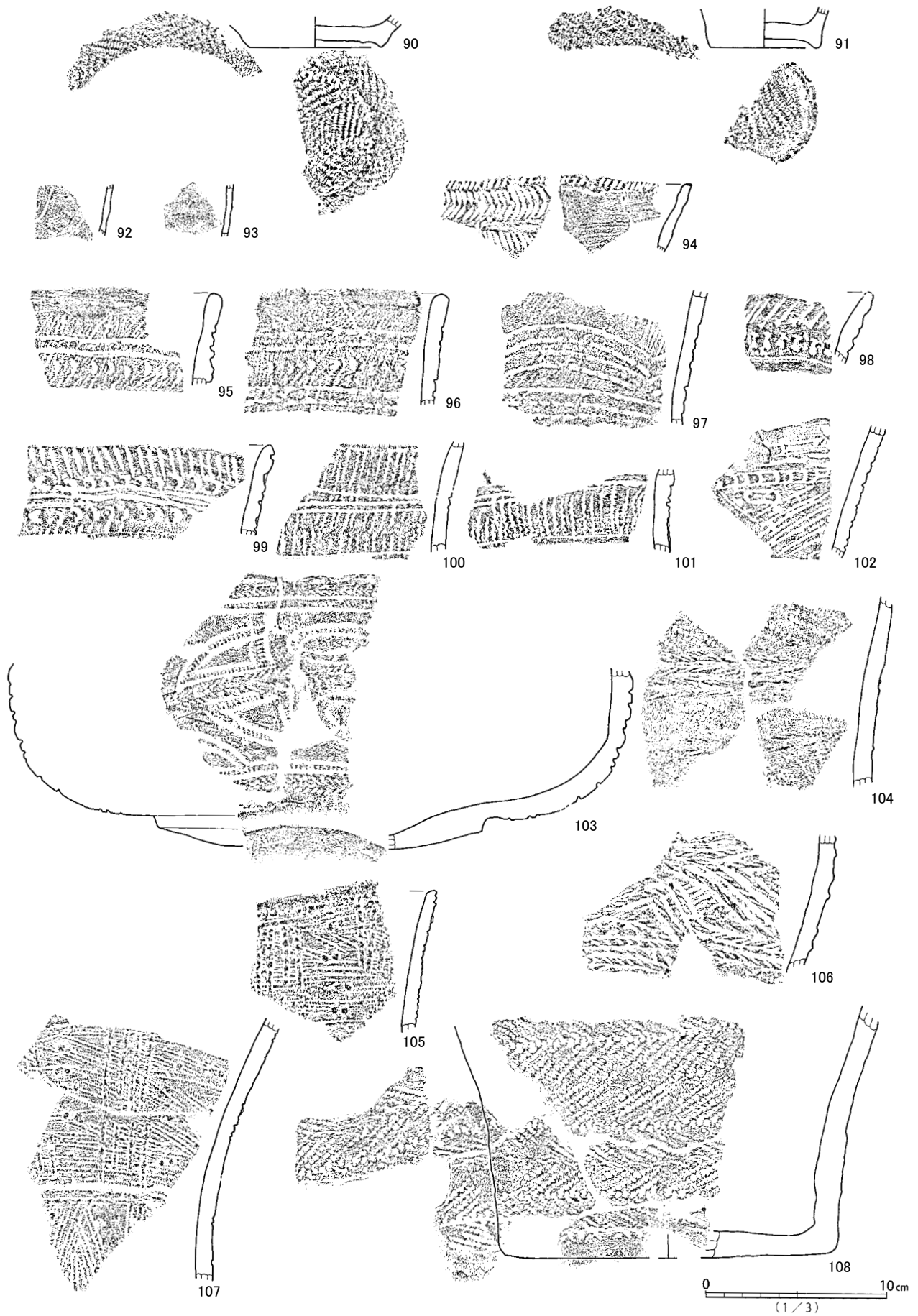


Fig.599 縄文土器 (41) 実測図

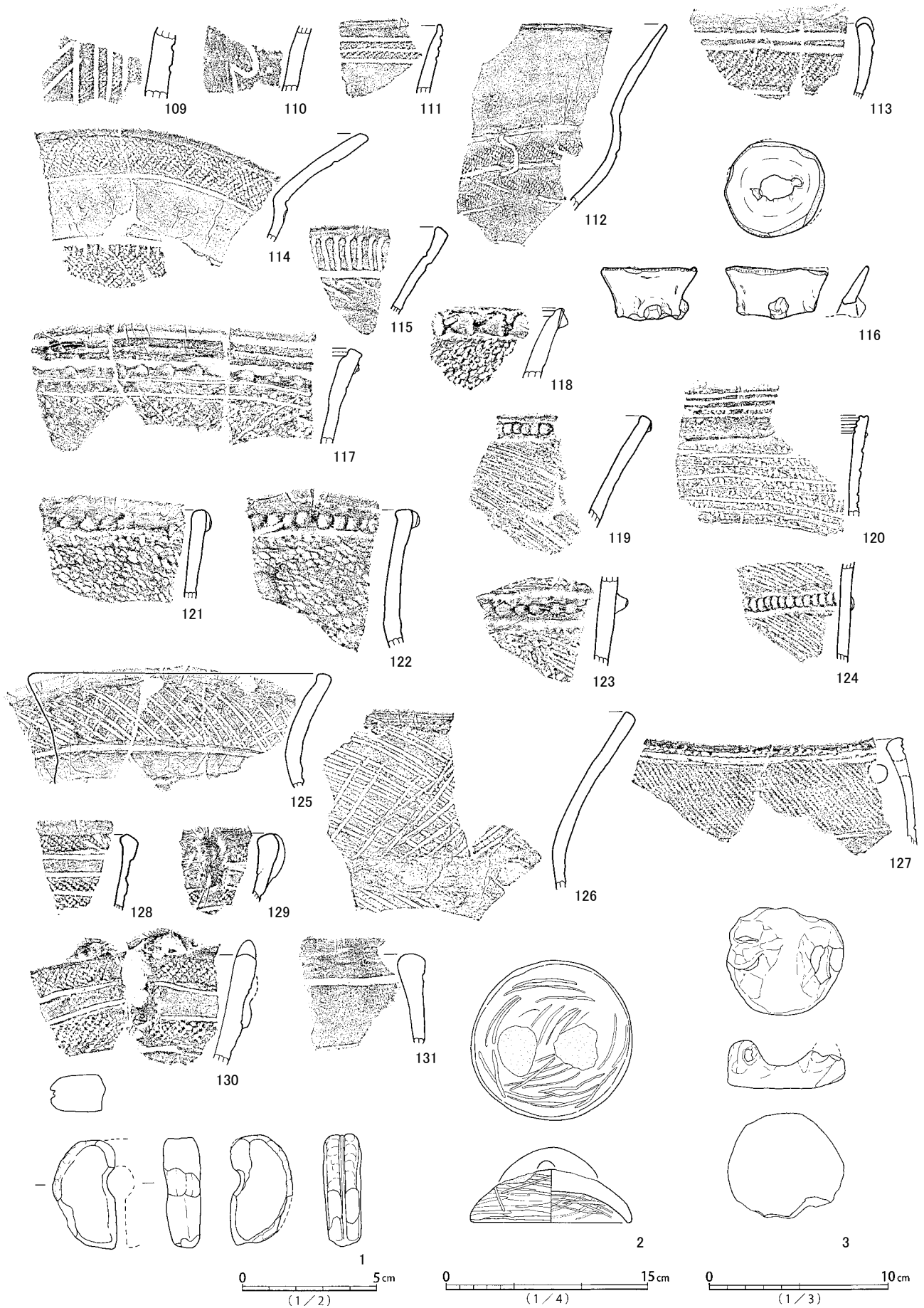


Fig.600 縄文土器 (42)、土製品実測図



Fig.601 包含層出土土器の分布 1( 撚糸文系 )



Fig.602 包含層出土土器の分布 2( 撚糸文系・無文 )

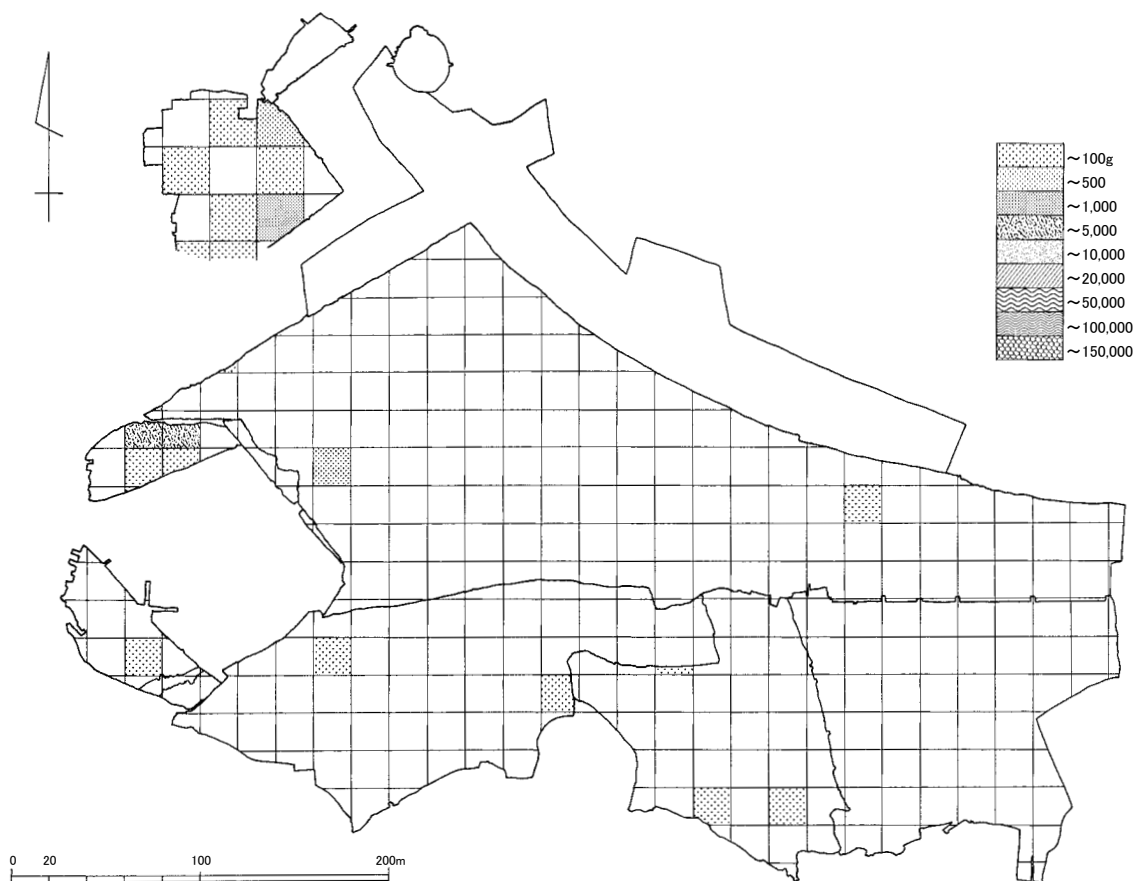


Fig.603 包含層出土土器の分布 3(沈線文系)



Fig.604 包含層出土土器の分布 4(条痕文系)





Fig.605 包含層出土土器の分布 5(羽状縄文系)



Fig.606 包含層出土土器の分布 6(浮島・興津式)



Fig.607 包含層出土土器の分布 7( 諸磯式 )



Fig.608 包含層出土土器の分布 8( 加曾利 B 式・曾谷式 )



Fig.609 包含層出土礫の分布

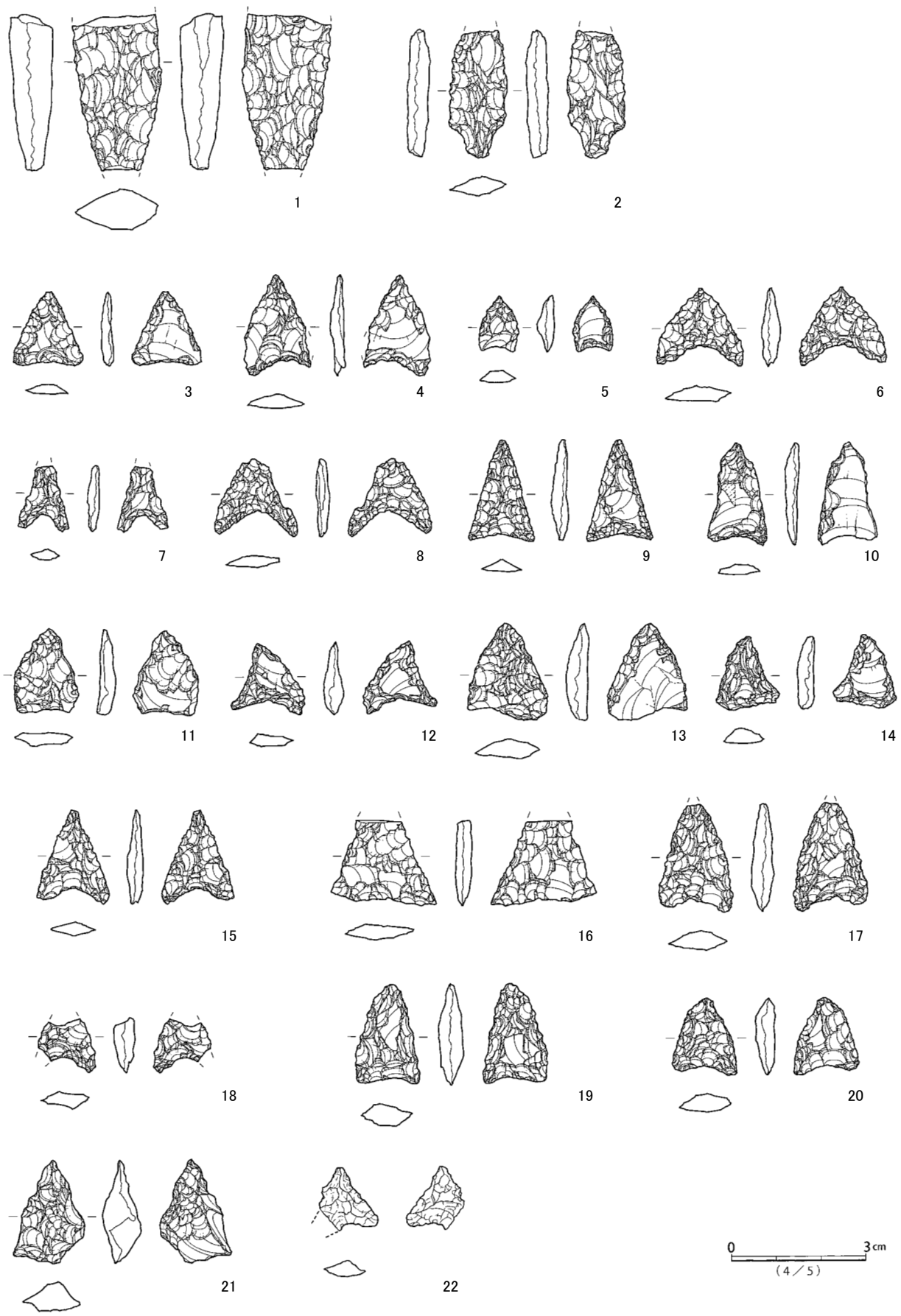
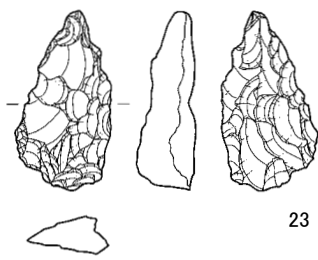
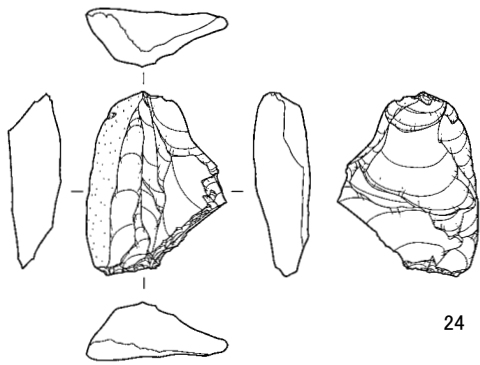


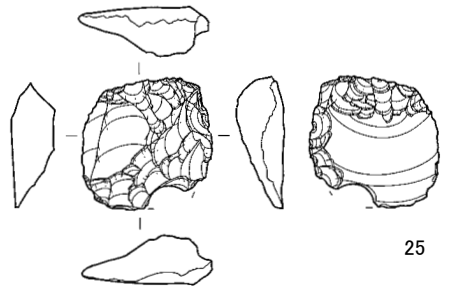
Fig.610 縄文石製品 (1) 実測図



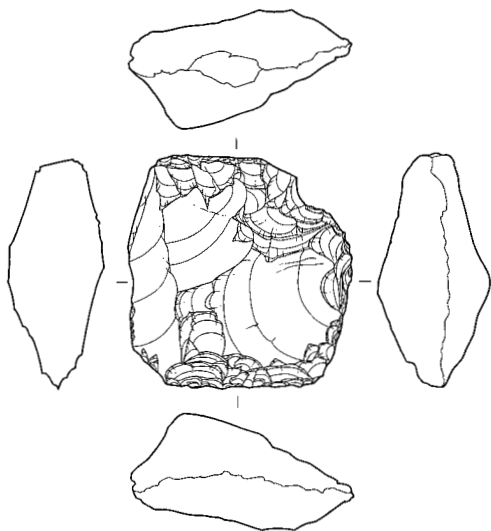
23



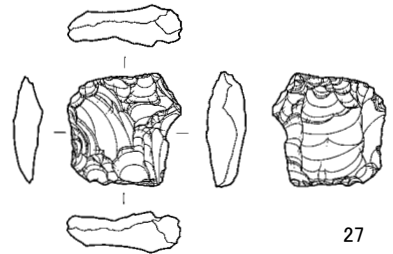
24



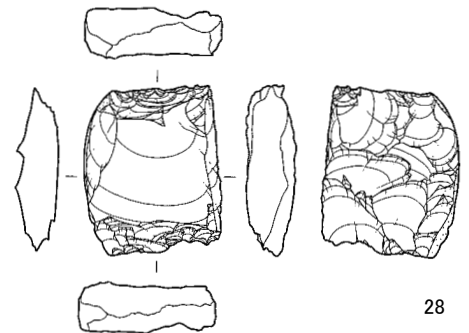
25



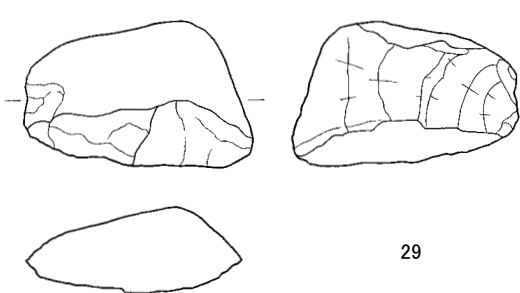
26



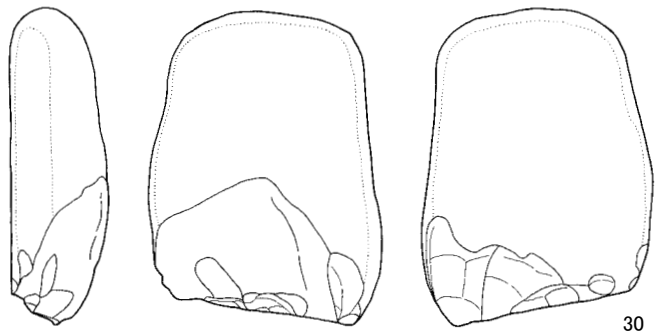
27



28



29



30

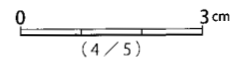


Fig.611 縄文石製品 (2) 実測図

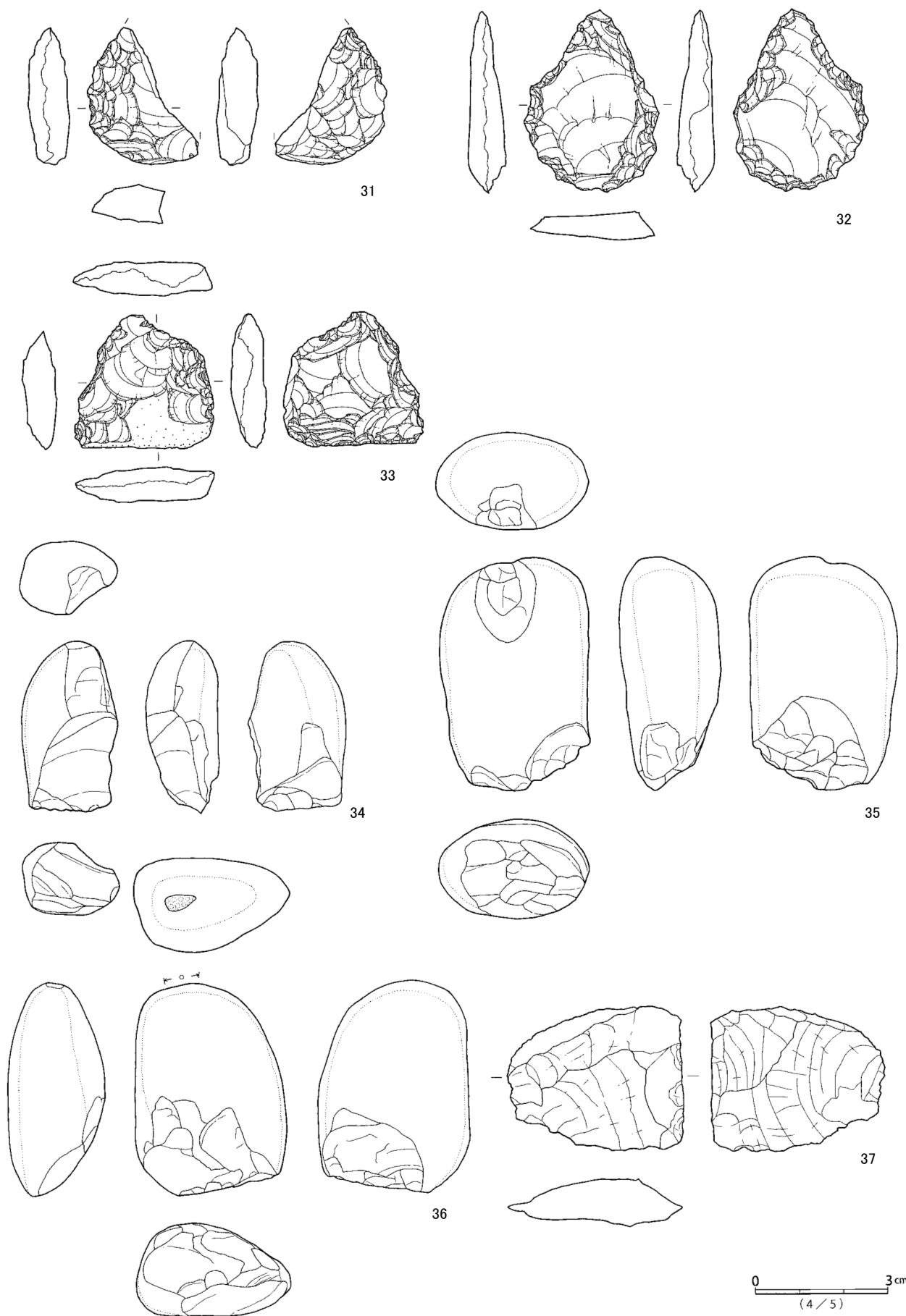


Fig.612 縄文石製品 (3) 実測図

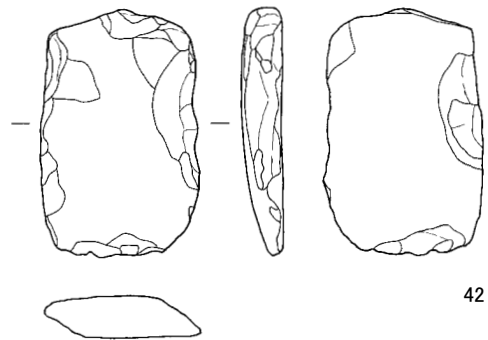
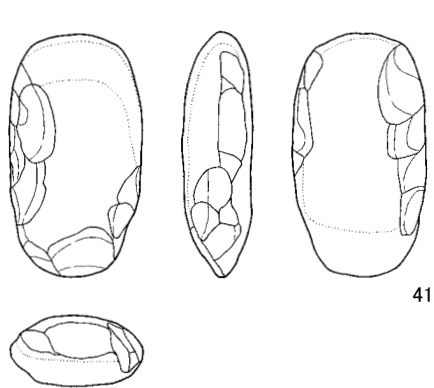
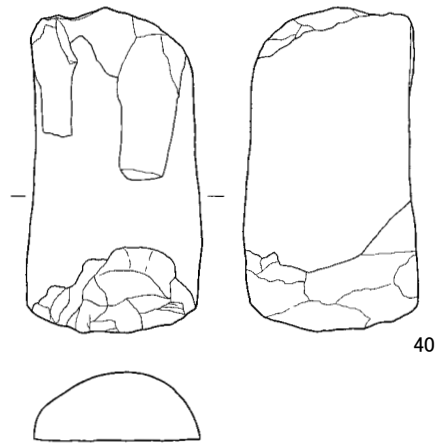
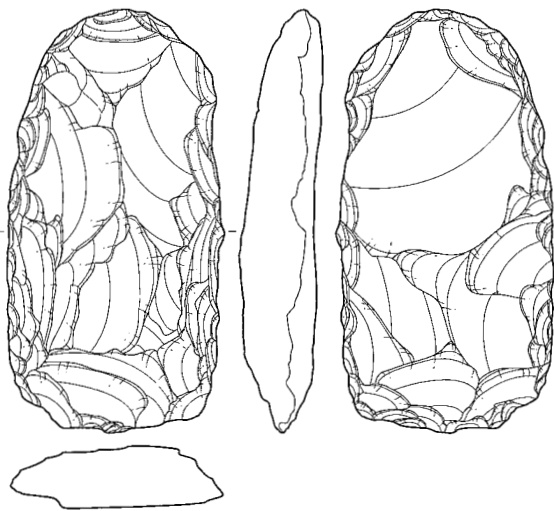
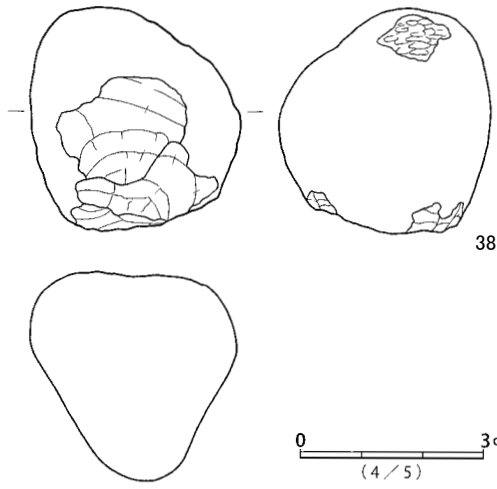


Fig.613 縄文石製品 (4) 実測図



Fig.614 縄文石製品 (5) 実測図



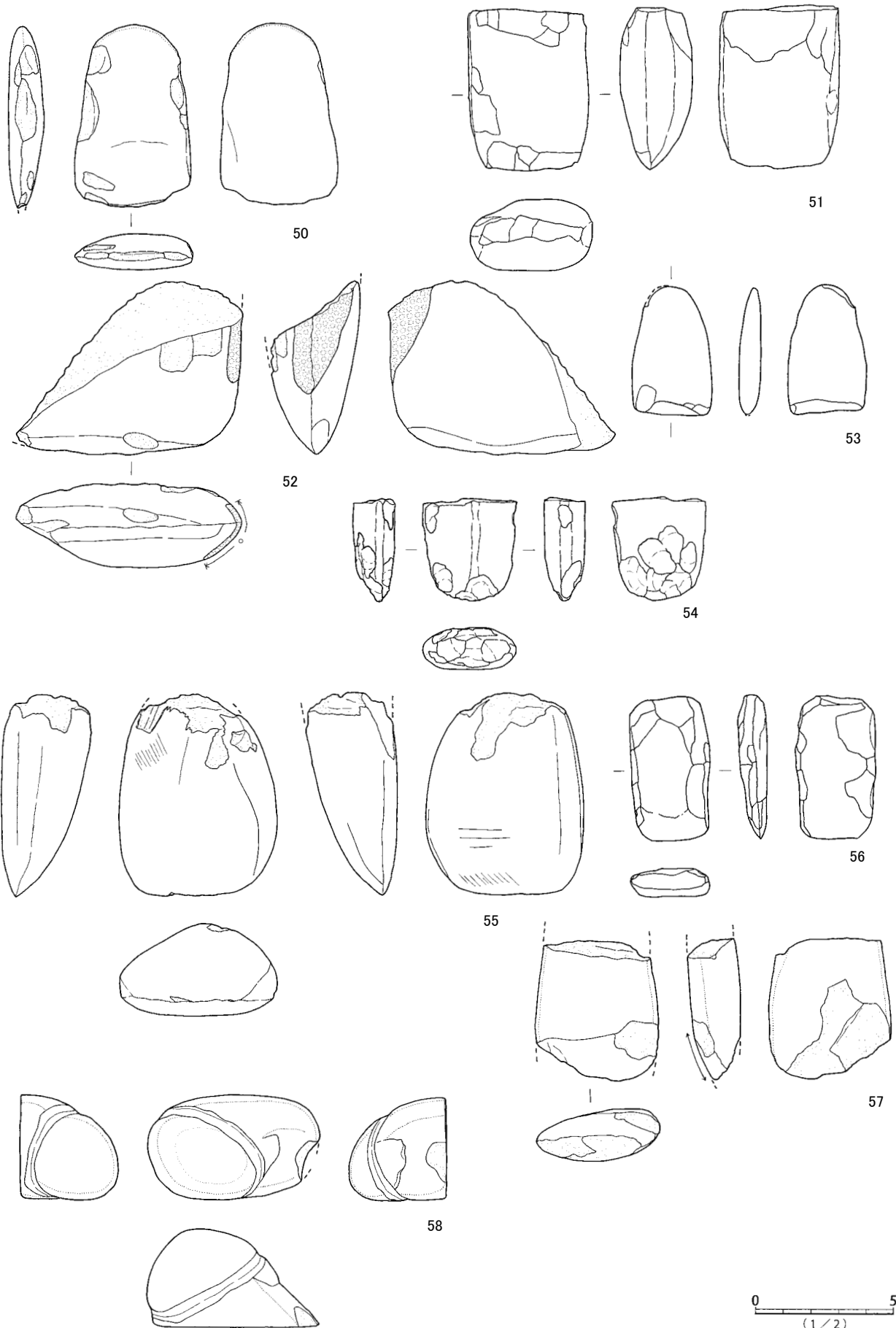


Fig.615 縄文石製品 (6) 実測図



Fig.616 縄文石製品(7)実測図

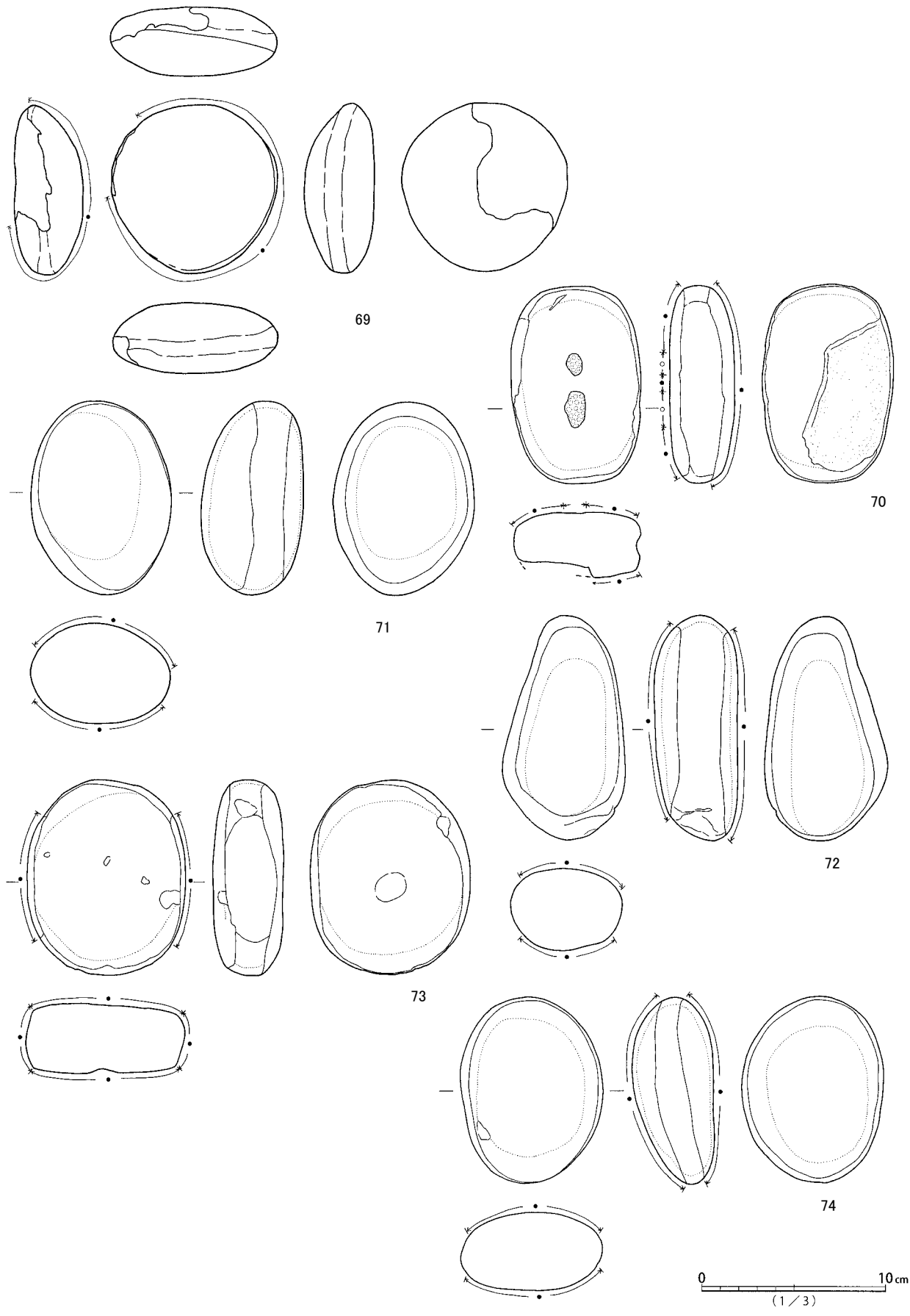


Fig.617 縄文石製品 (8) 実測図

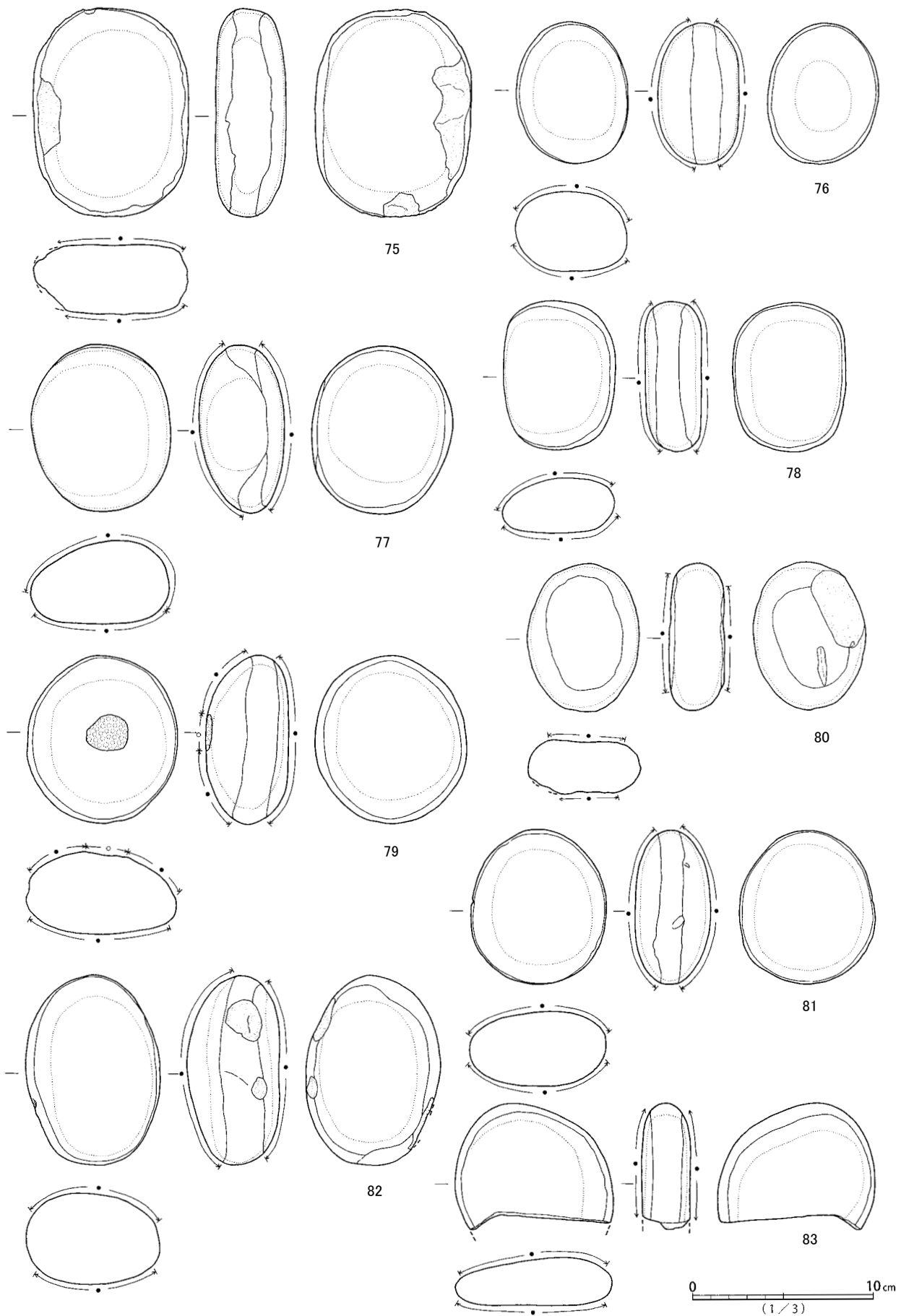


Fig.618 縄文石製品 (9) 実測図

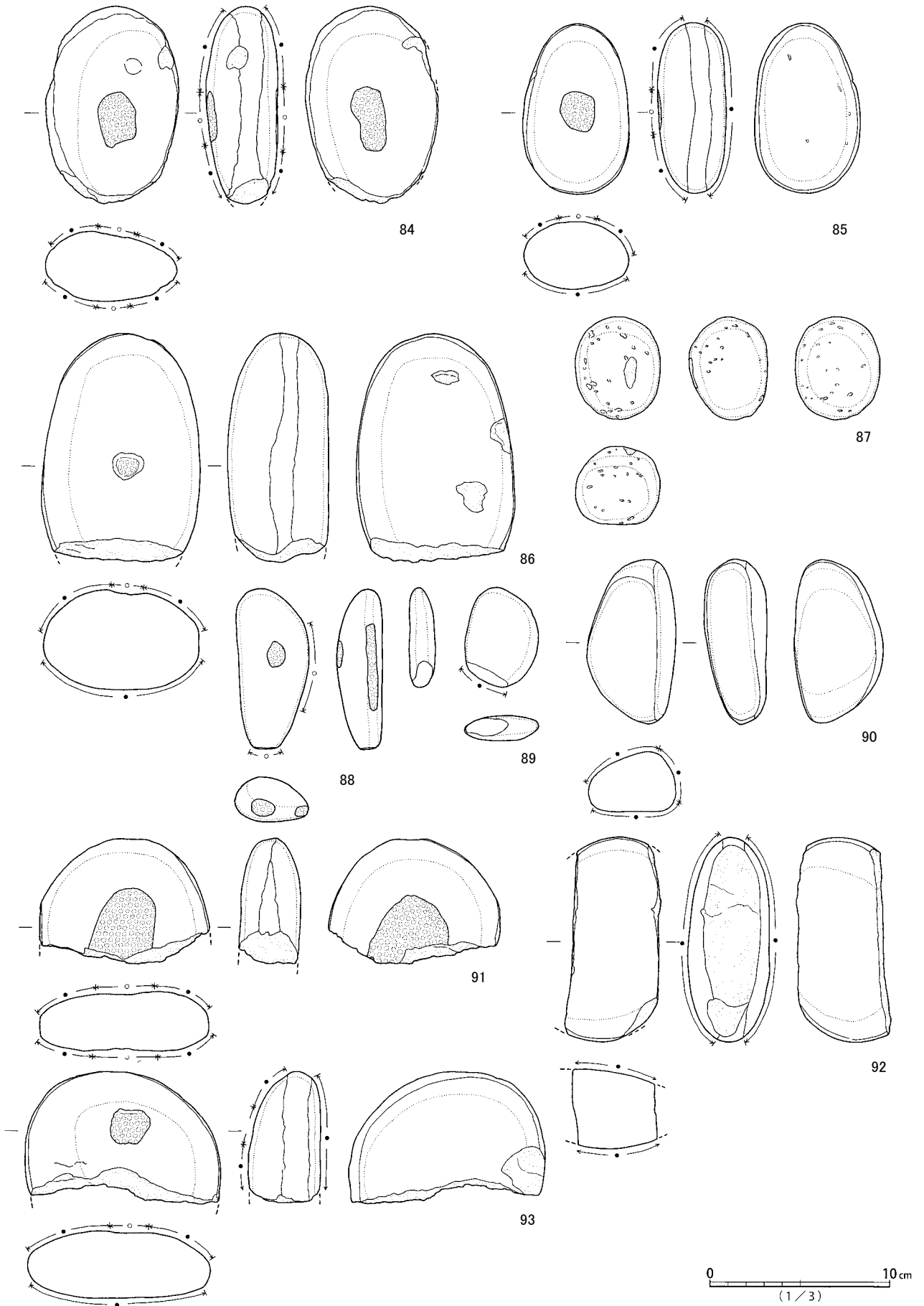


Fig.619 縄文石製品 (10) 実測図

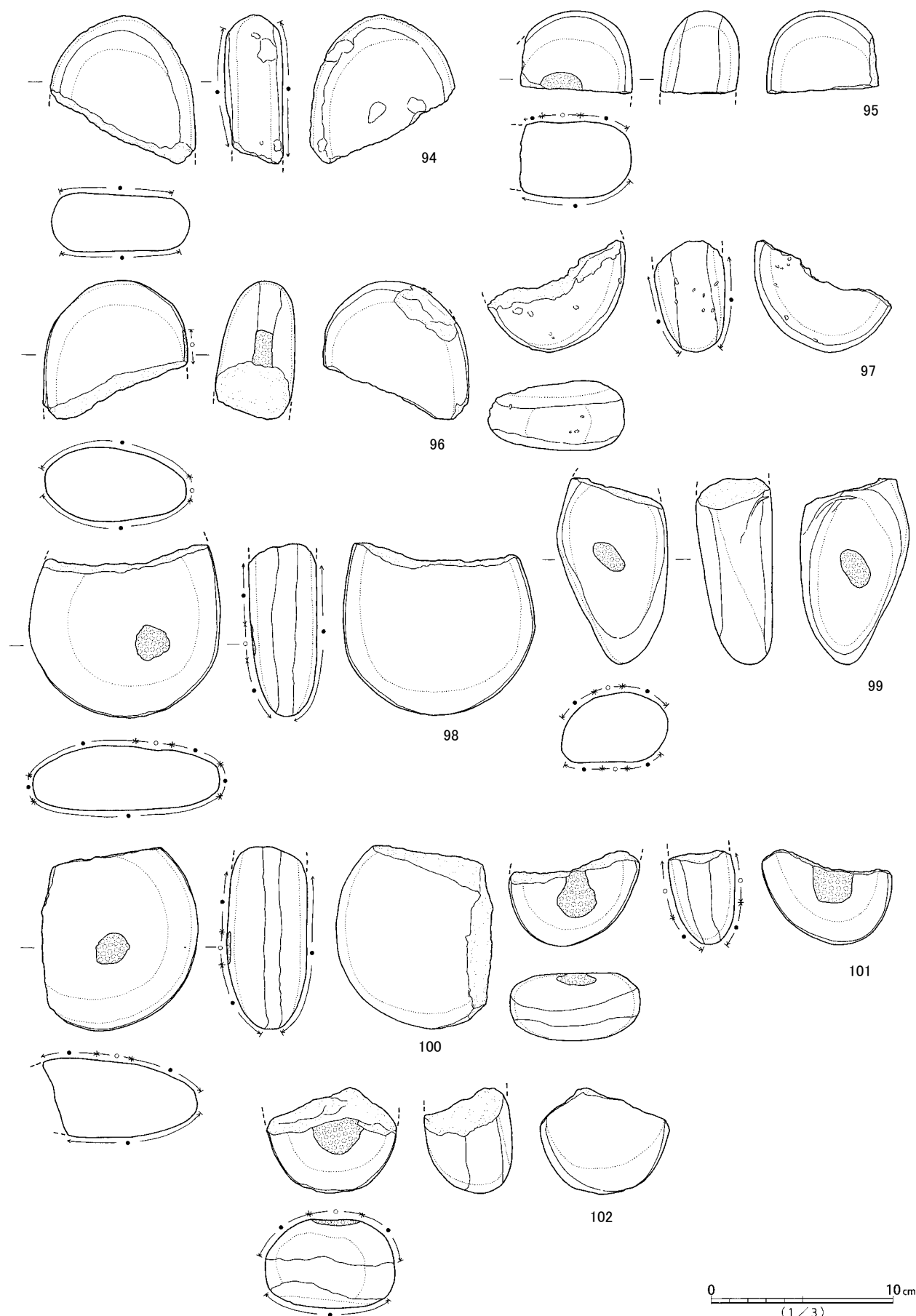


Fig.620 縄文石製品(11)実測図

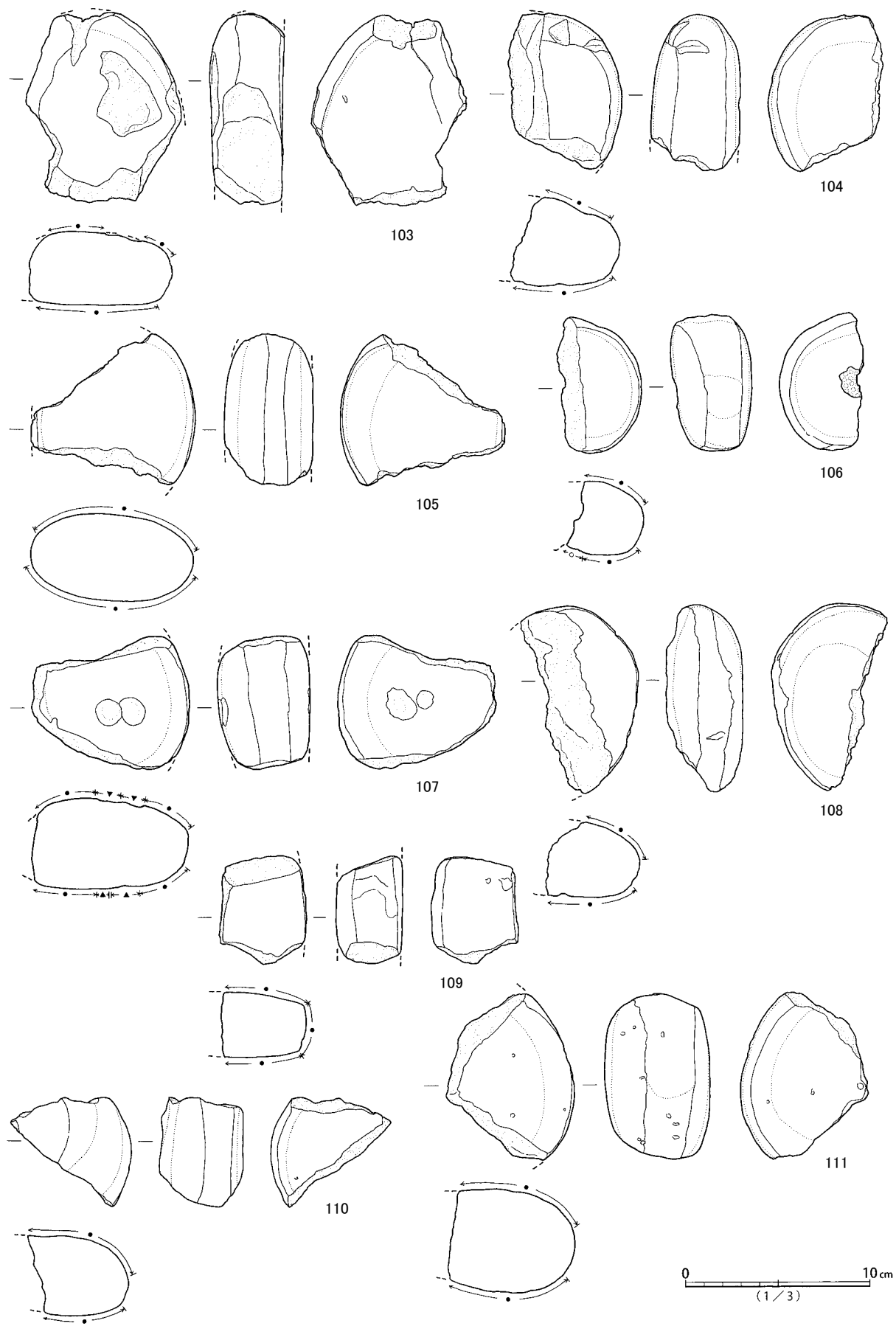


Fig.621 縄文石製品(12)実測図

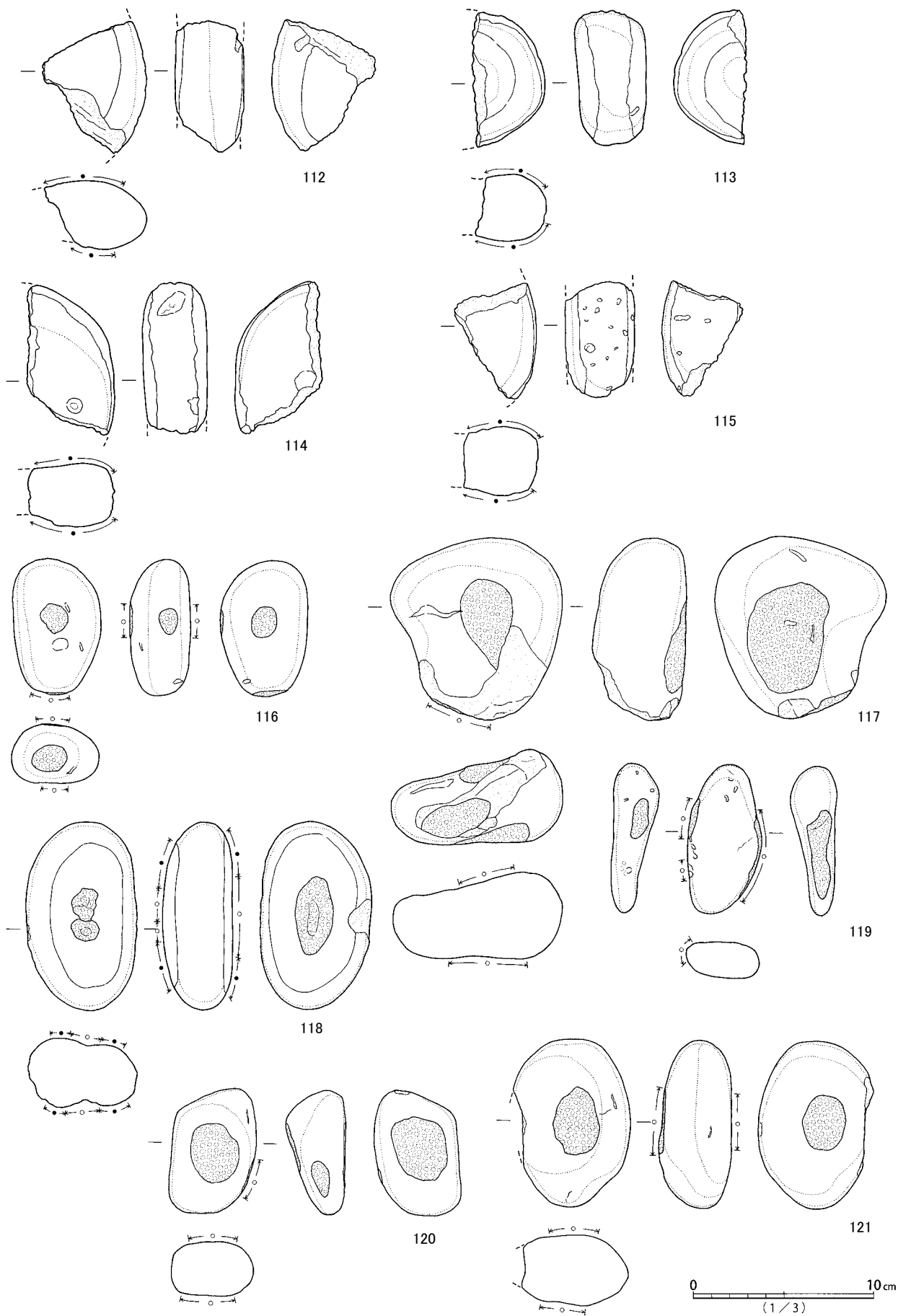


Fig.622 縄文石製品 (13) 実測図



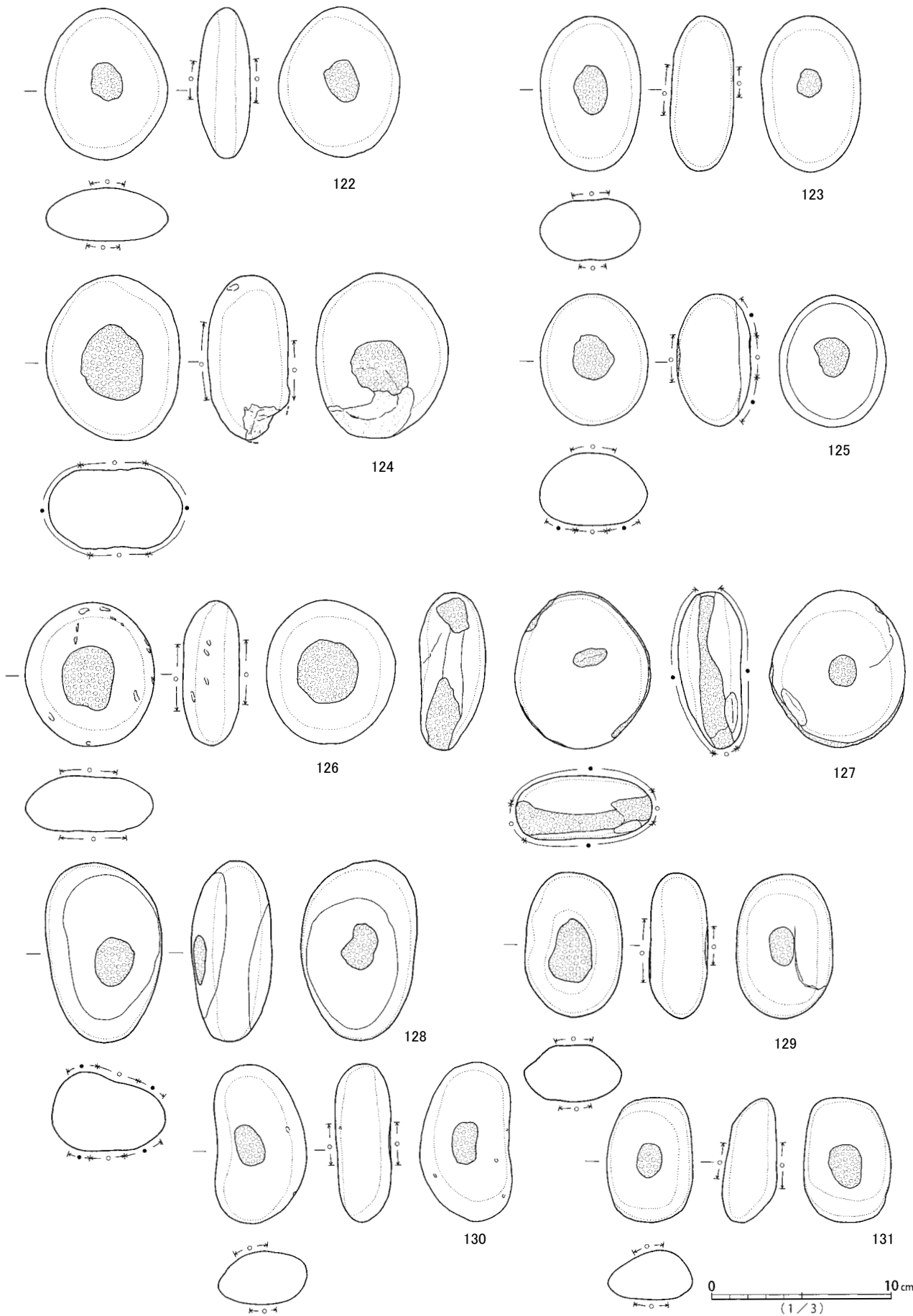


Fig.623 縄文石製品 (14) 実測図

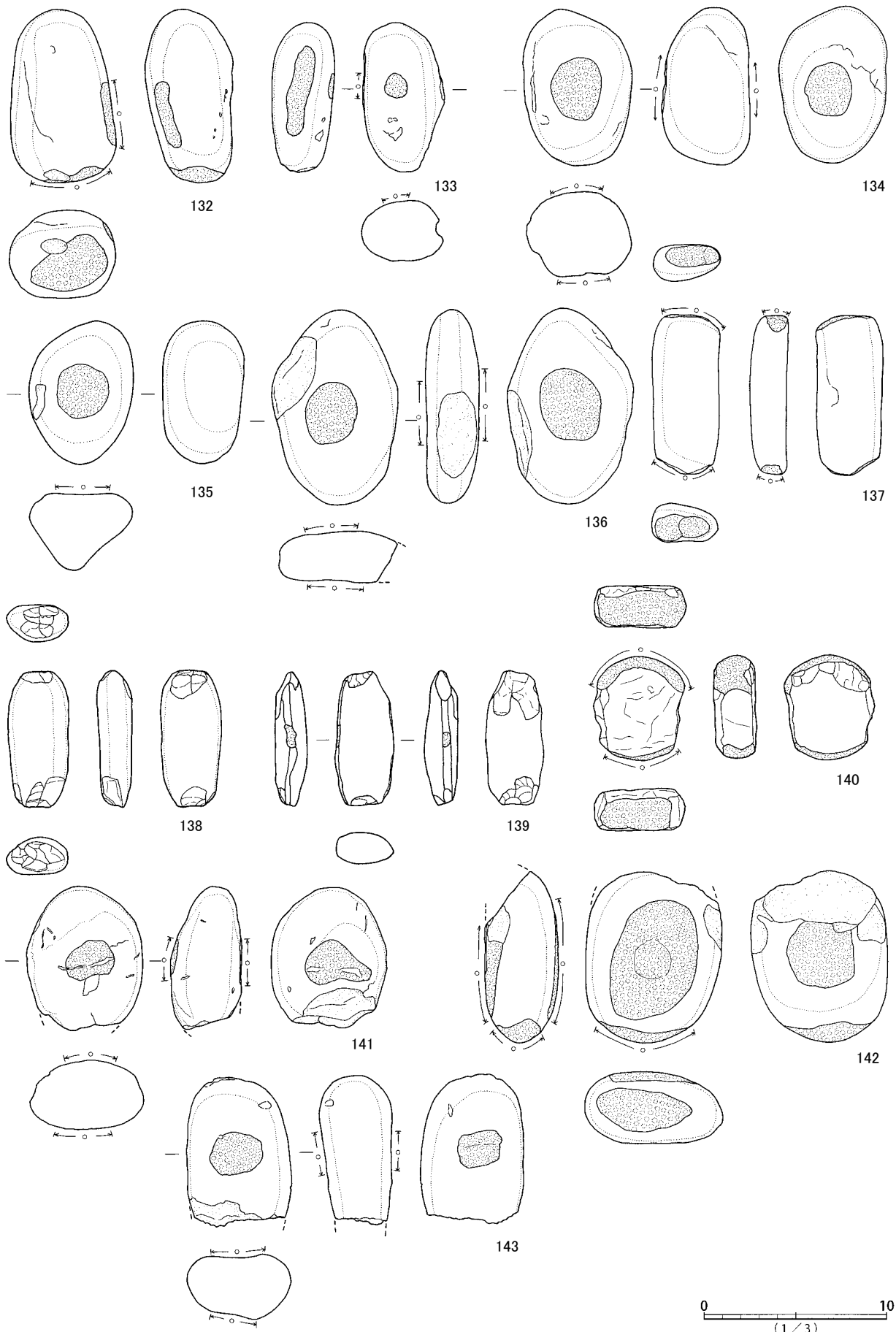
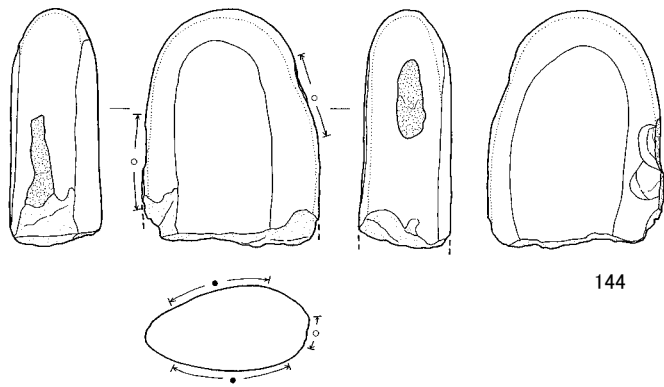
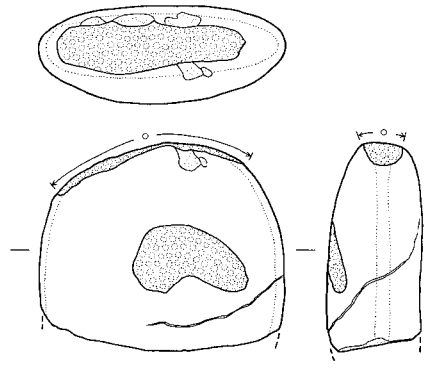


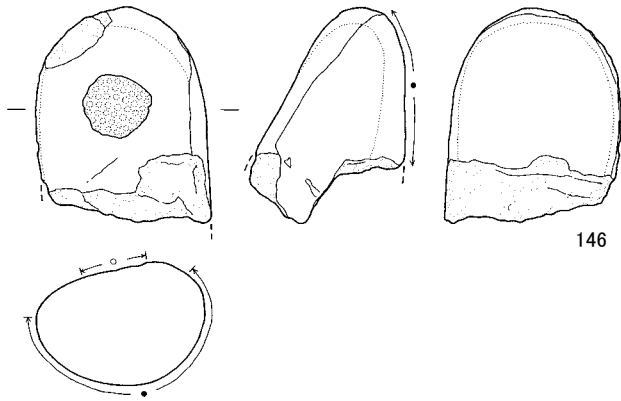
Fig.624 縄文石製品 (15) 実測図



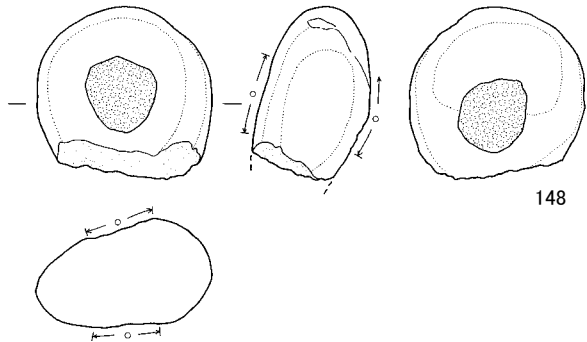
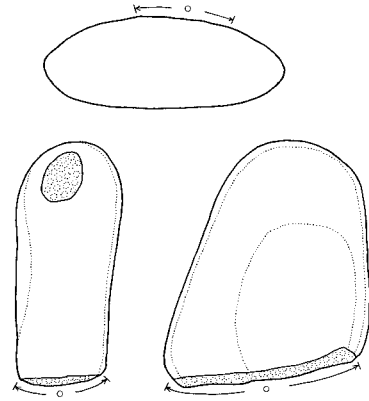
144



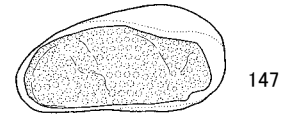
145



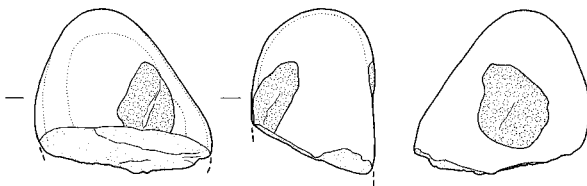
146



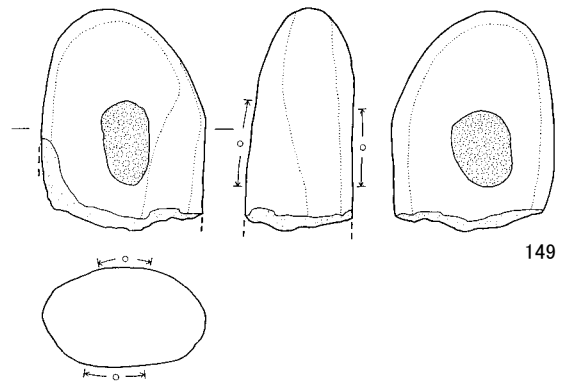
148



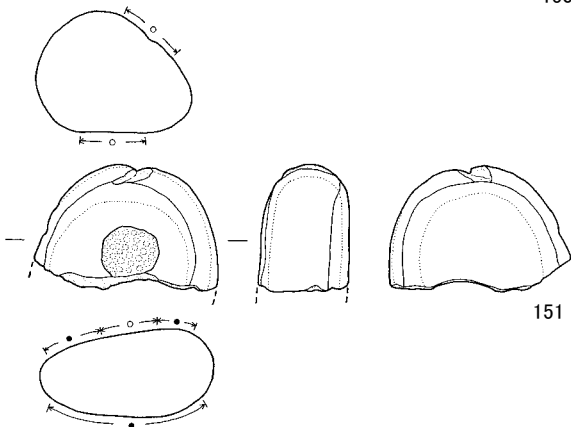
149



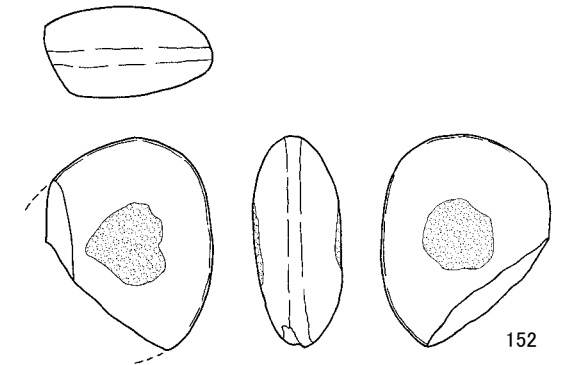
150



149



151



152

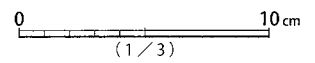


Fig.625 縄文石製品 (16) 実測図

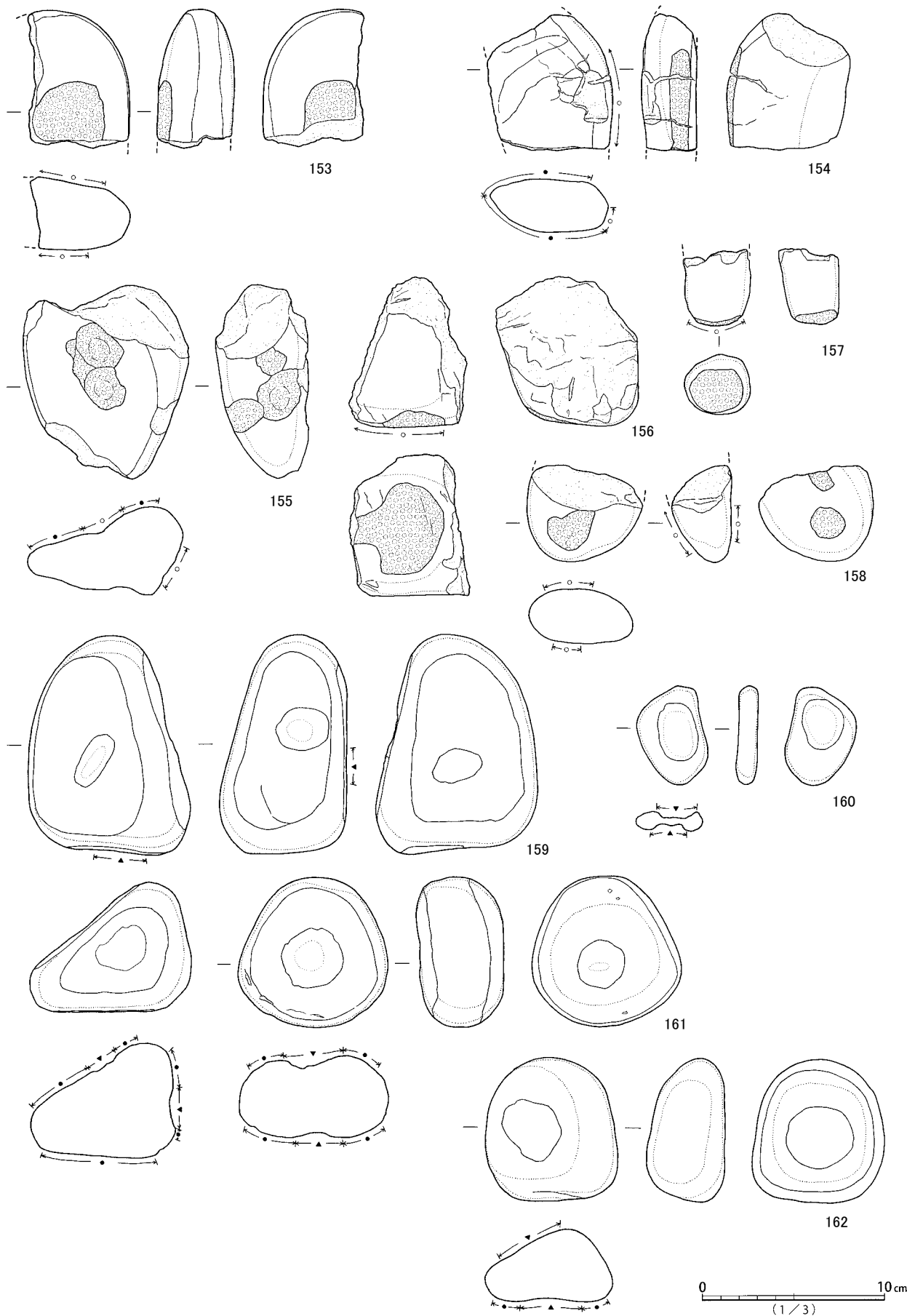


Fig.626 縄文石製品 (17) 実測図



Fig.627 縄文石製品 (18) 実測図

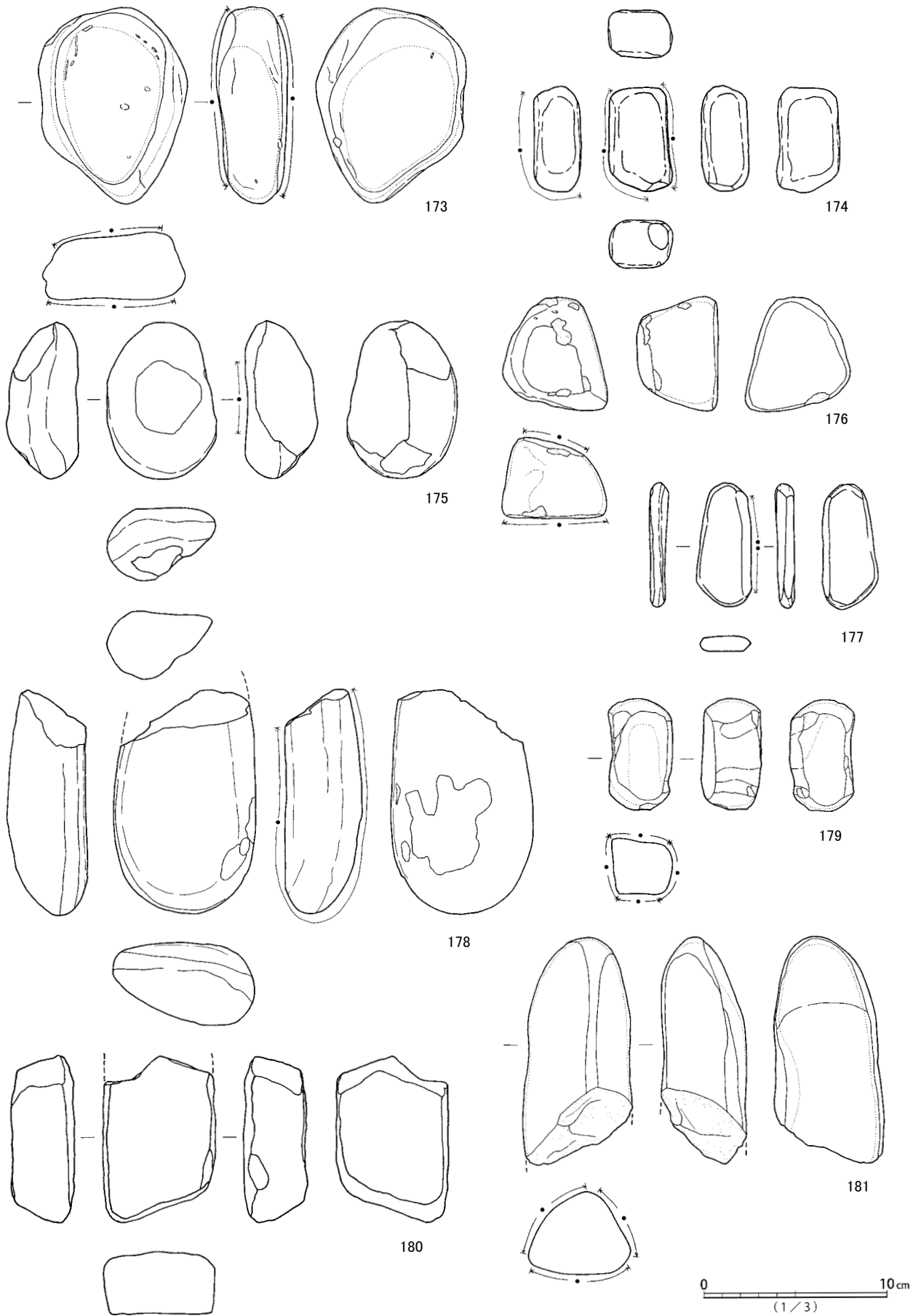


Fig.628 縄文石製品(19)実測図



Fig.629 縄文石製品 (20) 実測図

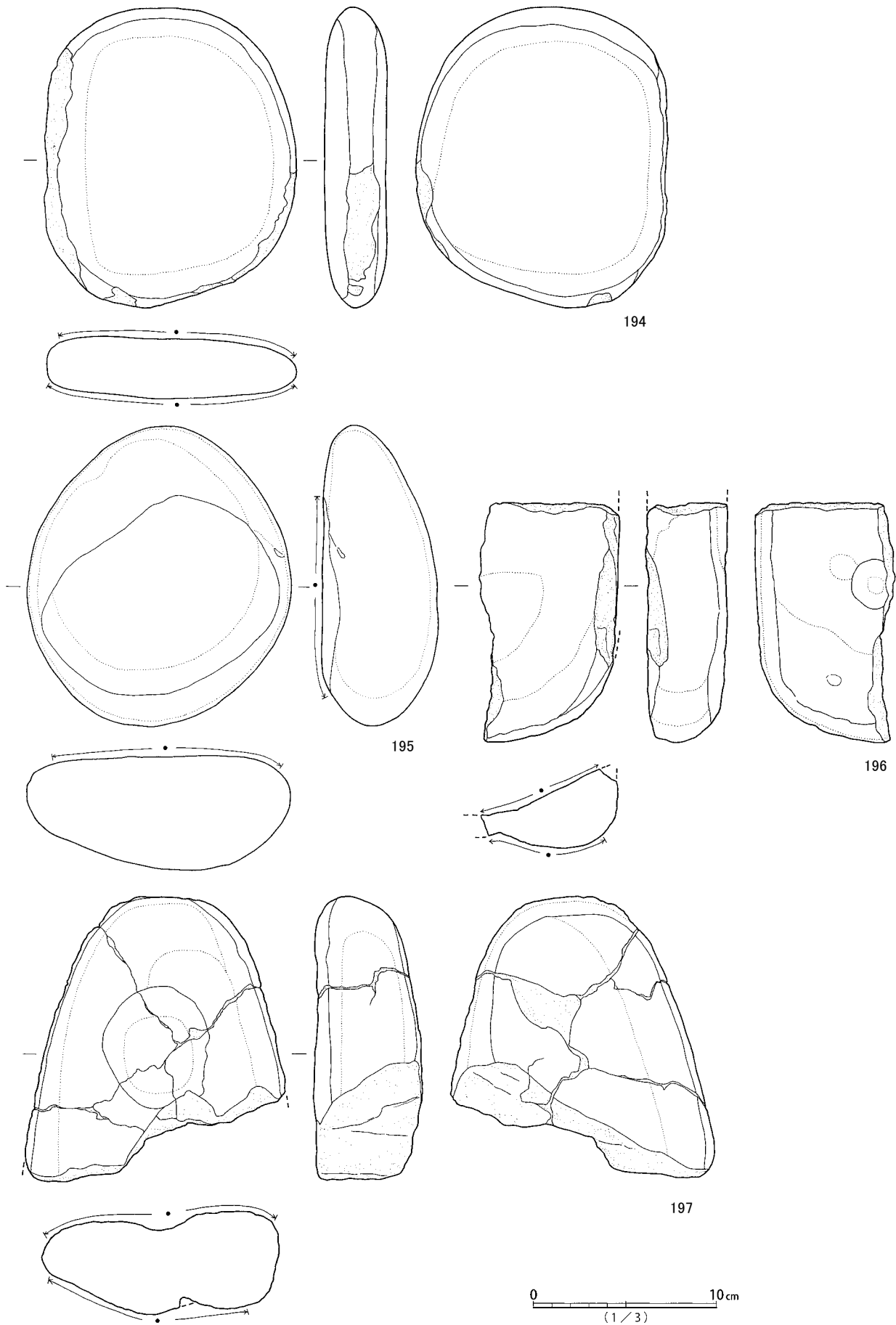


Fig.630 縄文石製品 (21) 実測図



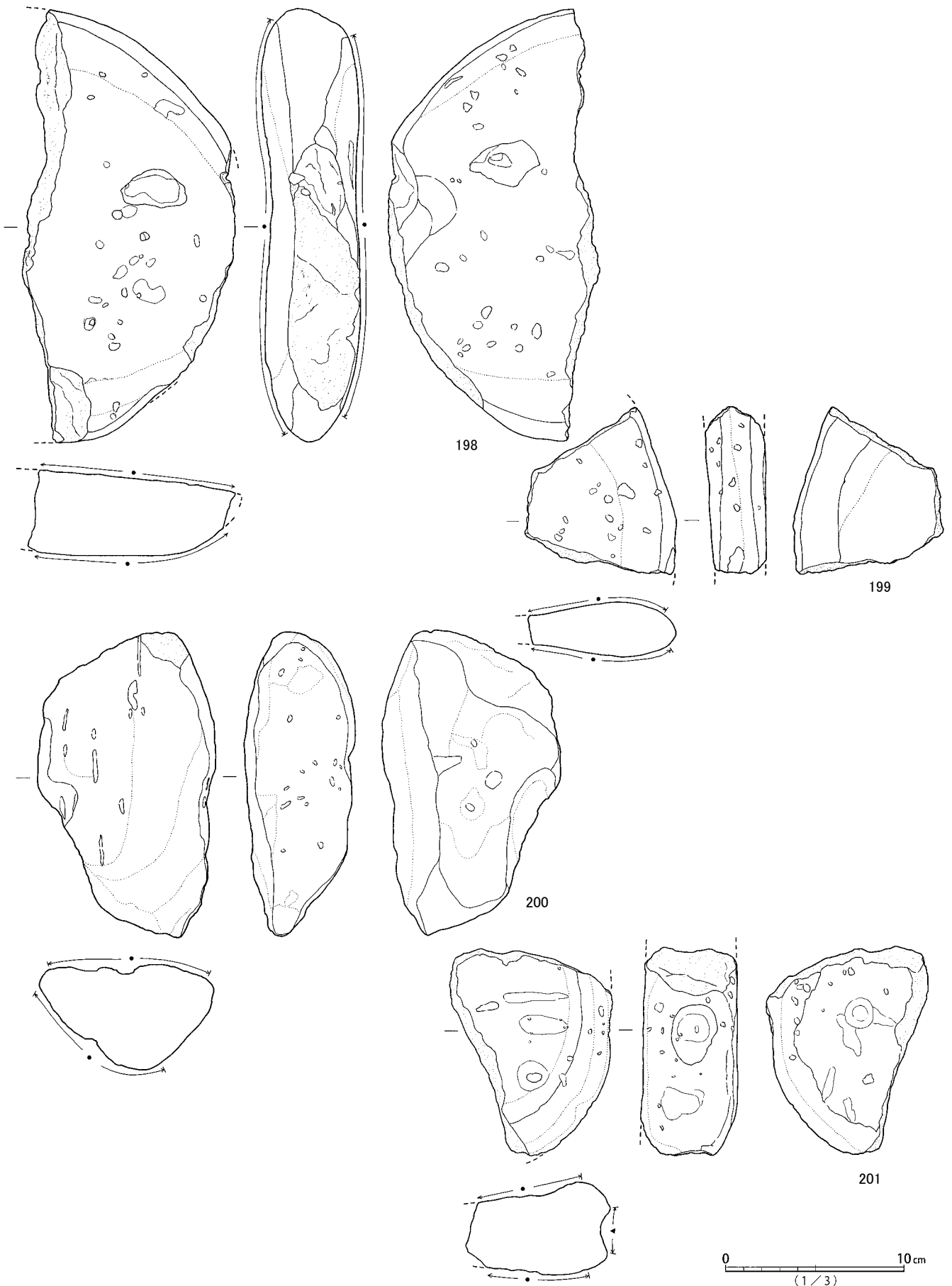


Fig.631 縄文石製品 (22) 実測図

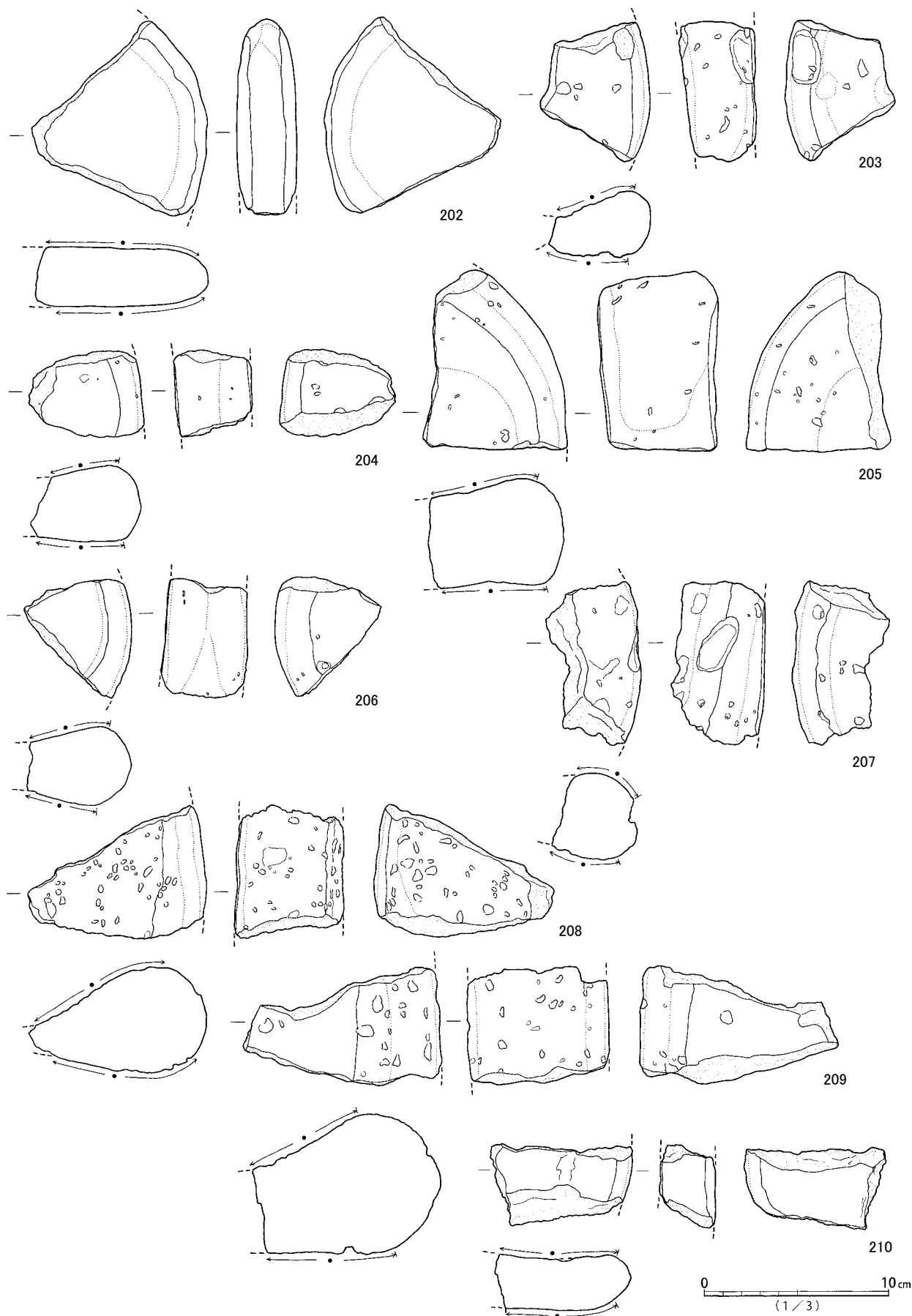


Fig.632 縄文石製品 (23) 実測図

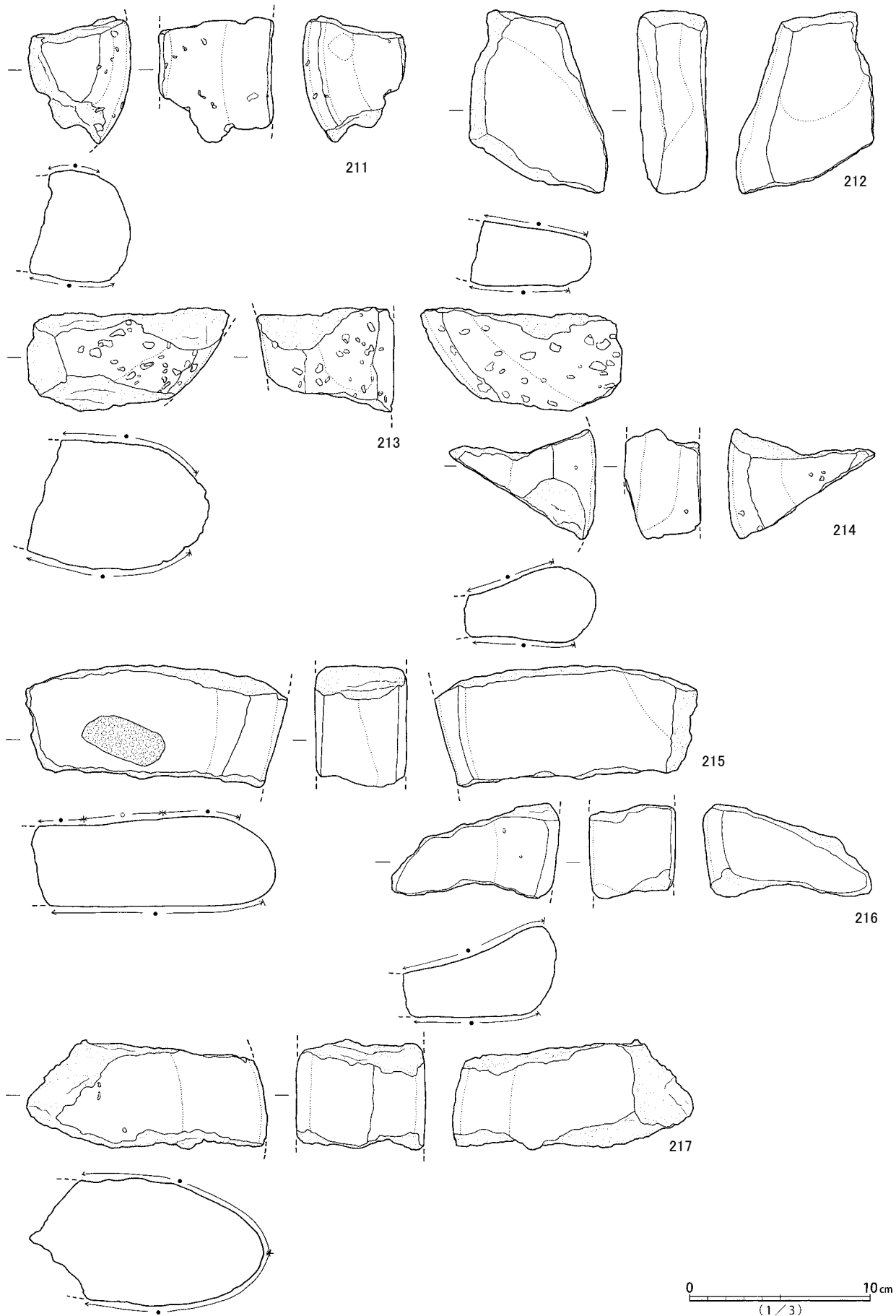


Fig.633 縄文石製品 (24) 実測図

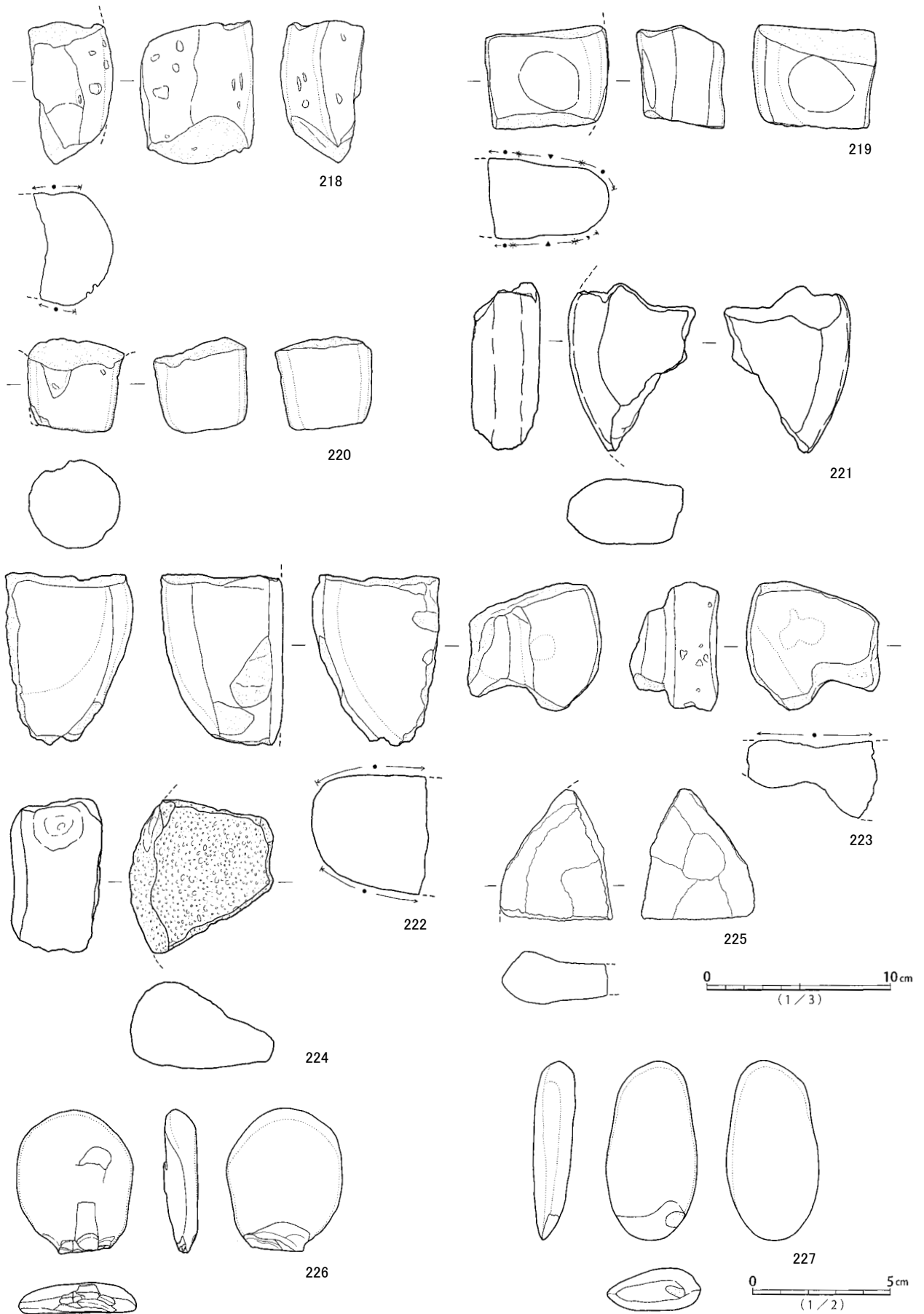
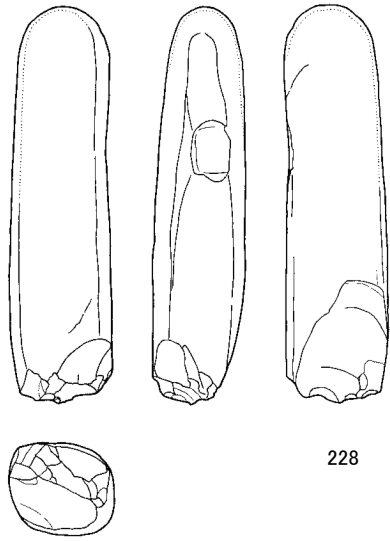
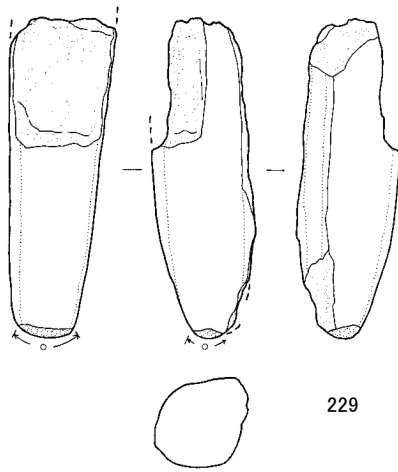


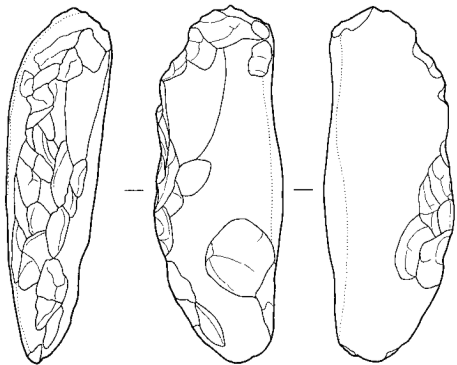
Fig.634 縄文石製品 (25) 実測図



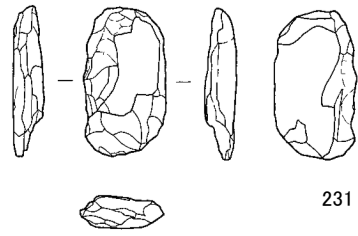
228



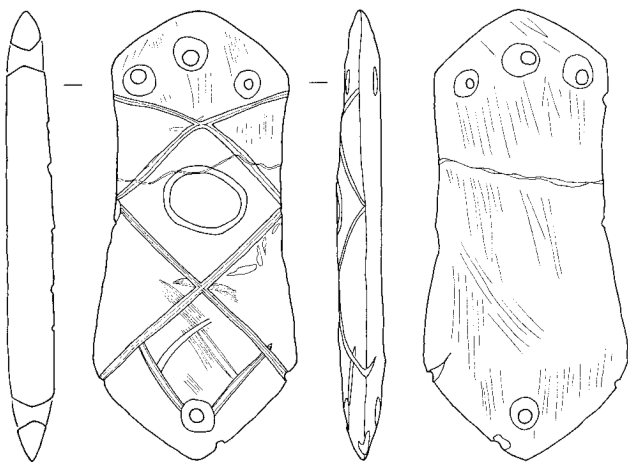
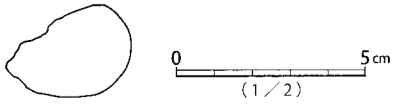
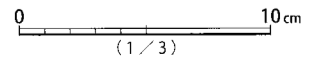
229



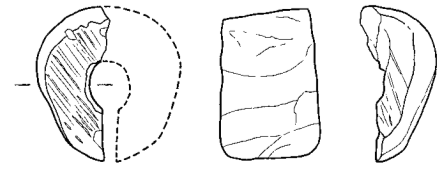
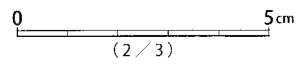
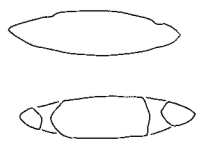
230



231



232



233

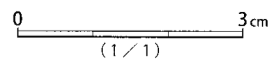


Fig.635 縄文石製品 (26) 実測図

## 第3章 分析

### 第1節 諏訪台古墳群出土土師器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

千葉県市原市に所在する諏訪台古墳群は、養老川右岸に広がる市原台地の西端部台地平坦面上に位置する。これまでの発掘調査により、古墳時代前期から終末期までに至る多数の古墳が確認されている。本報告では、古墳時代前期の方墳とされる古墳の周溝から出土した土師器を対象として、その材質(胎土)の特性を明らかにし、土師器の生産と使用に関わる資料を作成する。

#### 1. 試料

試料は、諏訪台古墳群に属する遺構No.043(SS112)とされた方墳の周溝から出土した土師器片9点である。試料には、委託資料No.(以下資料No.とする)1～9までが付されている。各試料の器種は、資料No.1と2が二重口縁壺、資料No.3が直口縁壺、資料No.4が壺、資料No.5が甕、資料No.6と7が高杯、資料No.8が器台、資料No.9が大型壺とされている。各試料の詳細については、表1に一覧として示す。

本分析では、9点全点を薄片作製観察の対象とし、資料No.1～4、6、7の計6点を蛍光X線分析の対象とする。

表1. 試料一覧

委託資料No.(仮)	遺構時期	遺構種類	地区	遺構No.	遺物No.	出土位置	時期	種別	名称	遺存度	薄片	蛍光X線
1	前期古墳	方墳	セ28	043	1	002・003・004・021・022・023・024・027・026・東溝・043東周溝内、044下層、セ28-043	前期	土師器	二重口縁壺(A)	胴部1/2欠損	○	○
2	前期古墳	方墳	セ28	043	3	010・011北溝・012北溝	前期	土師器	二重口縁壺(C)	復元(一部欠損)	○	○
3	前期古墳	方墳	セ28	043	7	セ28-043-005・009・006・007・008・010・015、セ28-044	前期	土師器	直口縁壺(A・赤彩)	部分欠損	○	○
4	前期古墳	方墳	セ28	043	10	037・038	前期	土師器	壺(A)	部分欠損	○	○
5	前期古墳	方墳	セ28	043	13	1015・1016・1017	前期	土師器	甕(A)	上半・部分欠損	○	
6	前期古墳	方墳	セ28	043	15	012・013・017・東溝	前期	土師器	高杯(A・赤彩)	復元・僅かに欠損	○	○
7	前期古墳	方墳	セ28	043	16	020・030	前期	土師器	高杯(B・赤彩)	復元・部分欠損	○	○
8	前期古墳	方墳	セ28	043	23	001	前期	土師器	器台(赤彩)	復元・口縁僅かに欠損	○	
9	前期古墳	方墳	セ28	043	42	西溝 セ28 043-9、10 セ28 H-9-44、39一括 セ28 1-9-1、02、5、一括 セ28 1-8-04 セ28 H-8-18一括 セ28 1-9-? セ28 1-9-11一括	前期	土師器	大廓 大型壺	上半と底部	○	

## 2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は切片による薄片作製が主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、胎土中における砂粒の量や、その粒径組成、砂を構成する鉱物片、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。ただし、胎土中に含まれる砂粒の量自体が少なければ、その情報量も少なくなる。一方、蛍光X線分析は、砂分の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができる。今回の分析では基礎資料の作成という目的から、薄片作製観察と蛍光X線分析を併用する。以下に各分析方法を述べる。

### (1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

ここでは薄片観察結果を松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

### (2) 蛍光X線分析

リガク製波長分散型蛍光X線分析装置(ZSX Primus III+)を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO<sub>2</sub>、TiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MnO、MgO、CaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の主要10元素およびRb、Sr、Y、Zr、Baの微量5元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料(JA-1、JA-2、JA-3、JB-1a、JB-2、JB-3、JCh-1、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-2、JG-3、JGb-1、JGb-2、JH-1、JLk-1、JR-1、JR-2、JR-3、JSd-1、JSd-2、JSd-3、JSI-1、JSI-2、JSy-1)を用いた。

#### 1) 装置

株式会社リガク製 走査型蛍光X線分析装置 ZSX Primus III+(FP定量法アプリケーション)

#### 2) 試料作製

機械乾燥(110℃)した試料を、振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で粉碎・混合し、ガラスビードを表2の条件で作製した。

表2. ガラスビード作製条件

溶融装置	自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビードサンプラー(3491A1)
溶剤及び希釈率	融剤(Spectroflux 100B)5.000g:試料0.500g
剥離剤	LiI(溶融中1回投入)
溶融温度	1200℃(約7分)

### 3)測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置を用い、表3、表4の条件で測定を実施した。

表3. 蛍光X線装置条件

ターゲット	Rh
管電圧(KV)	50
管電流(mA)	50
試料マスク	30mmφ
試料スピン	ON
ダイアフラム	30mmφ
測定雰囲気	真空

表4. 蛍光X線定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO <sub>2</sub>	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO <sub>2</sub>	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na <sub>2</sub> O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K <sub>2</sub> O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

### 3. 結果

#### (1)薄片作製観察

観察結果を表5・6、図1～3に示す。以下に、鉱物・岩石組成、粒径組成、碎屑物・基質・孔隙の順に各試料の特徴を述べる。

#### 1) 鉱物・岩石組成

資料No.9以外の8点は、ほぼ同様の組成を示す。砂粒の主体は、石英と斜長石の鉱物片であり、両者間では石英の方がやや多い。他に斜方輝石、単斜輝石、角閃石などの鉱物片を微量または少量含み、チャート、泥岩、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、多結晶石英などの岩石片も微量または少量含まれる。鉱物片および岩石片以外の碎屑物としては、少量の酸化鉄結核と微量の海綿骨針などの微化石類が含まれる。

資料No.9の砂粒の主体は、斜長石の鉱物片と凝灰岩の岩石片である。他に石英と不透明鉱物の鉱物片、軽石、流紋岩・デイサイト、安山岩、変質岩、珪化岩などの岩石片をそれぞれ少量ずつ含み、



火山ガラスも、発泡した軽石型と平板状のバブル型を呈する形態のものが微量含まれる。

## 2)粒径組成

モードとなる粒径とその次に割合の高い粒径とが、試料によって異なっている。粗い傾向の組成から並べると以下ようになる。

粗粒砂をモードとする:資料No.9

中粒砂と細粒砂が同程度でモードを構成する:資料No.3

細粒砂をモードとし、次いで中粒砂が多い:資料No.1、2

細粒砂をモードとし、次いで極細粒砂が多い:資料No.4、5、7

細粒砂と極細粒砂が同程度でモードを構成する:資料No.6

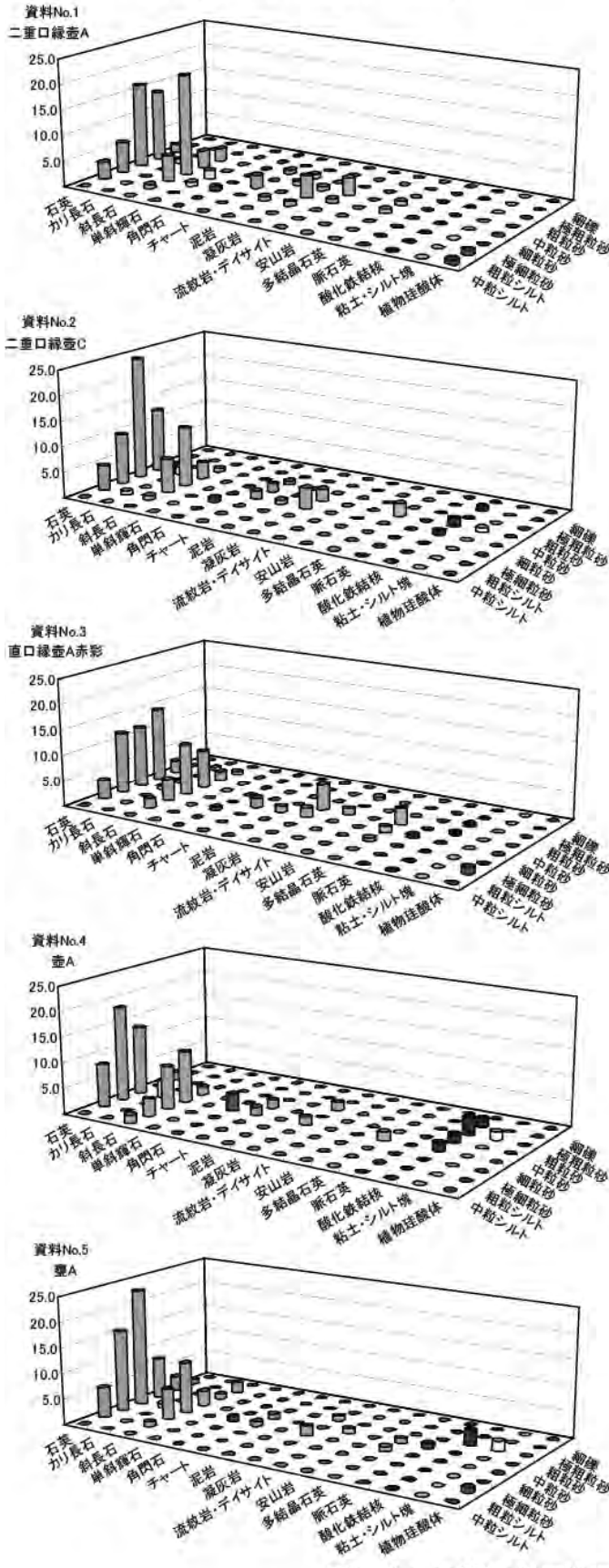
極細粒砂をモードとする:資料No.8



表6. 薄片観察結果(2)

委託資料No.	遺物No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																			合計										
			鉱物片									岩石片						その他														
			石英	トリデイマイイト	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	泥岩	砂岩	軽石	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	酸化鉄結核	海綿骨針	粘土・シルト塊	植物珪酸体	
6	15	細礫																												0		
		極粗粒砂																													0	
		粗粒砂																								1					1	
		中粒砂	2			3						1		1		1															8	
		細粒砂	13		1	3					1		1	1				1			2										23	
		極細粒砂	13		1	5						2								2											23	
		粗粒シルト	3			1	3																								7	
		中粒シルト																														0
		基質																											331			
		孔隙																											2			
備考	基質は褐色粘土鉱物、セリサイト、酸化鉄などによって埋められ、褐色を示す。緑簾石、海綿骨針、植物珪酸体あり。																															
7	16	細礫																												0		
		極粗粒砂																													0	
		粗粒砂	1																					1							2	
		中粒砂	8			2						2			1				3						1						17	
		細粒砂	21		2	8						1		3	1				1												37	
		極細粒砂	13			6						1																			20	
		粗粒シルト	5			2																							1		8	
		中粒シルト																														0
		基質																											289			
		孔隙																											10			
備考	基質は褐色粘土鉱物、セリサイト、酸化鉄などによって埋められ、褐色を示す。酸化角閃石、緑簾石、海綿骨針あり。変質岩は酸化鉄化した風化岩。																															
8	23	細礫																												0		
		極粗粒砂																													0	
		粗粒砂	2																							2					4	
		中粒砂	6		1	5									2				1				2								17	
		細粒砂	14		5	8							3	1																	33	
		極細粒砂	19	1	3	11							2																		36	
		粗粒シルト	9			2																									12	
		中粒シルト	1																												1	
		基質																											512			
		孔隙																											4			
備考	基質は褐色粘土鉱物、セリサイト、酸化鉄などによって埋められ、褐色を示す。緑簾石、ジルコン、海綿骨針、植物珪酸体あり。																															
9	42	細礫																												0		
		極粗粒砂				2								6	24			4							1						37	
		粗粒砂	2			16									20	2	7						4	4							55	
		中粒砂	1			9								3				22	3	1			2	3	1	1					46	
		細粒砂	2			11								3				4	1		1			1	4		3				30	
		極細粒砂				4																		3							7	
		粗粒シルト				1																									1	
		中粒シルト																														0
		基質																											482			
		孔隙																											27			
備考	基質は軽石、凝灰岩の破片とみられるガラス質物質によって埋められる。火山ガラスは軽石型およびBW型で、軽石型ものは軽石と同様に弱い脱ガラス化がみられる。変質岩は、凝灰岩、軽石などを原岩とする風化岩。																															

各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



胎土中の砂の粒度組成

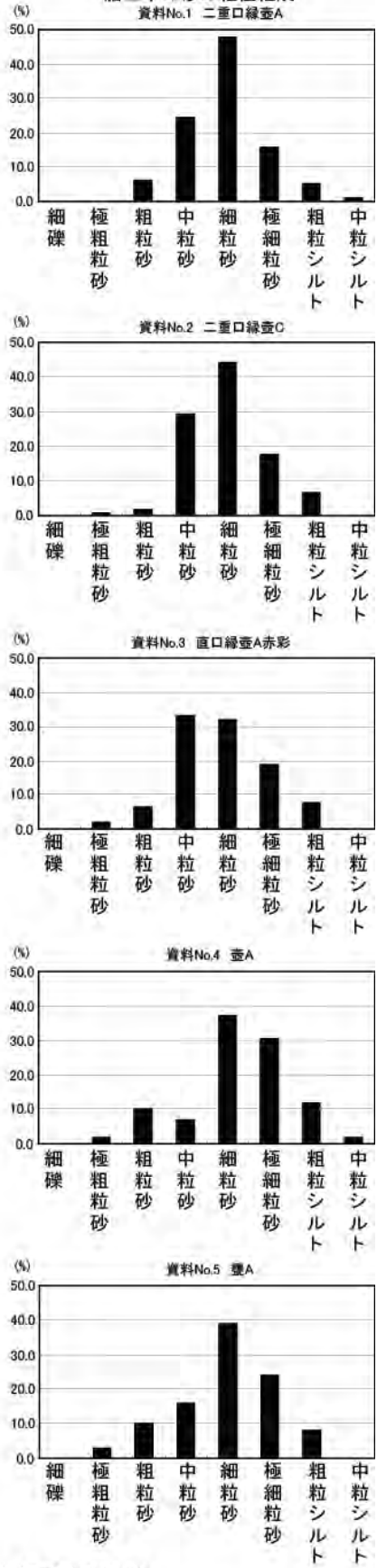


図1. 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その1)

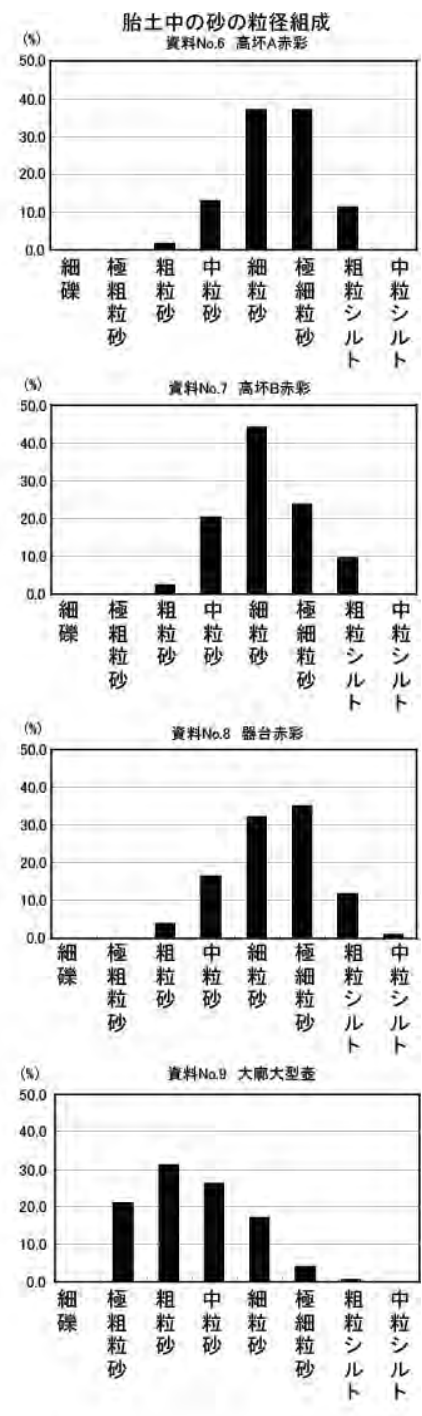
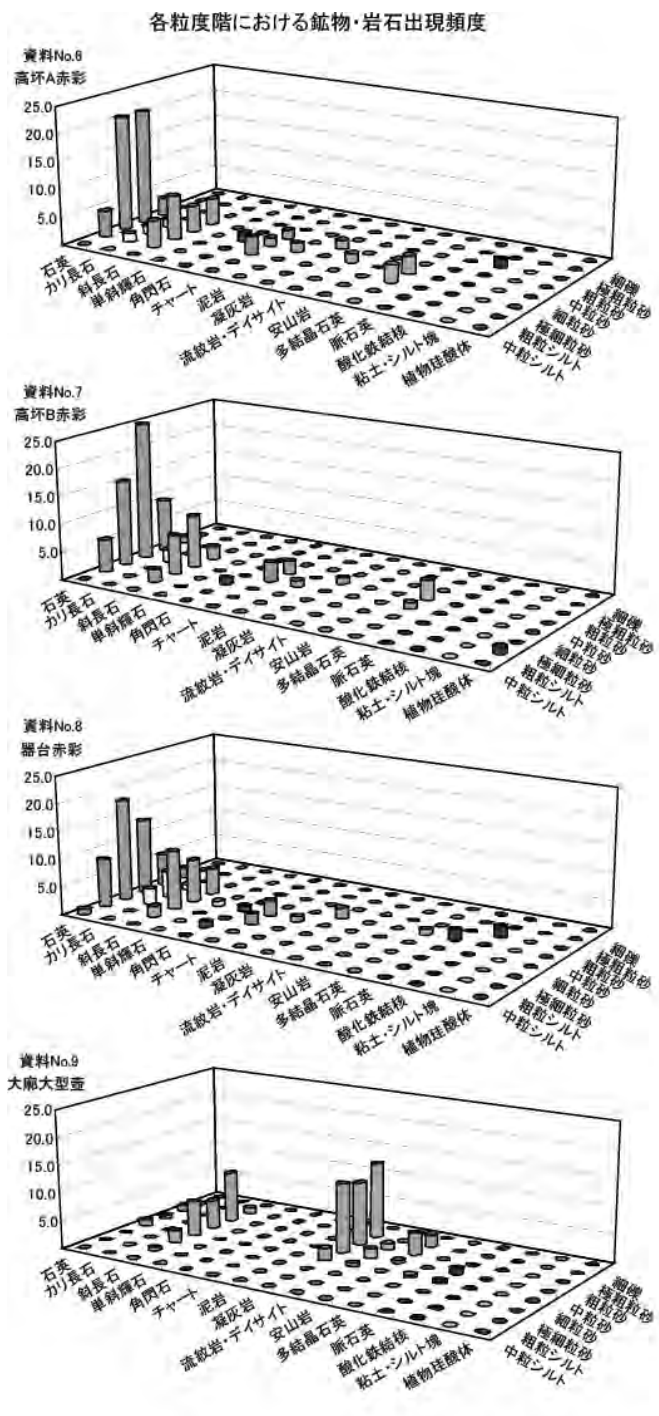


図2. 胎土の鉱物・岩石出現頻度と粒度組成(その2)

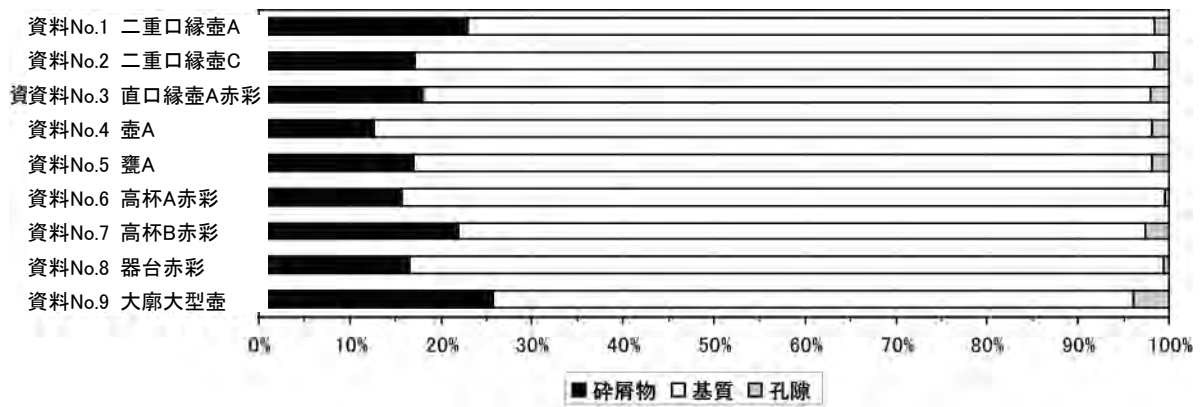


図3. 碎屑物・基質・孔隙の割合

### 3) 碎屑物・基質・孔隙の割合

碎屑物の割合をみると、9点の試料のうち、資料No.2、3、5、6、8の5点は15～20%であるが、資料No.4は10～15%の範囲にあり、資料No.1、7、9の3点は約20%以上を示す。

### (2) 蛍光X線分析

各試料の元素の含有量比を一覧表にして表7に示す。また、試料間の比較には、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図(図4)を作成した。

#### 1) 化学組成中で最も主要な元素( $\text{SiO}_2, \text{Al}_2\text{O}_3$ )

2) 粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素であるCaO、 $\text{Na}_2\text{O}$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ の3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合( $\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O} / (\text{CaO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$ )を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 $\text{K}_2\text{O} / (\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$ を縦軸とする。

3) 輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素である $\text{TiO}_2$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、MgOを選択し、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ を分母とした $\text{TiO}_2$ 、MgOの割合を見る。

4) 胎土分析における微量元素の中では指標とされることの多い元素であるRb, Srおよび次いで指標とされることのあるZr, Baの2組の元素間の割合をみる。

図4に呈示された5つの散布図のうち、 $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ および長石類主要元素の2図では、試料間の距離よりも位置関係でみると、資料No.1、3、7のグループと資料No.2、4、6のグループに2分することができる。このグループ分けは、他の散布図でも認めることができる。有色鉱物主要元素の図では、 $\text{TiO}_2$ の割合がほぼ同様の資料No.1、3、7とMgOの割合がほぼ同様の資料No.2、4、6とに分けられ、Rb-Sr図では、Rbが40～60ppm、Srが40～80ppmの領域内に収まる資料No.2、4、6とその領域外の資料No.1、3、7とに分けられ、Zr-Ba図では、Zrが130～140ppm、Baが200～400ppmの領域内に収まる資料No.1、3、7とBaが300ppm前後の値を示す資料No.2、4、6とに分けられる。これに試料間の距離も考慮すると、資料No.1、3、7のグループは、有色鉱物主要元素の図以外では、3点の試料間で互いに近接しているが、資料No.2、4、6のグループは、散布図によっては、ばらつきが大きい。

表7. 蛍光X線分析結果(化学組成)

資料 No.	遺物 No.	主要元素										微量元素					Total (%)
		SiO <sub>2</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na <sub>2</sub> O (%)	K <sub>2</sub> O (%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	
1	1	58.67	0.94	19.21	5.28	0.04	1.00	1.22	1.32	0.87	0.05	51	100	12	135	337	89.66
2	3	57.07	0.95	21.32	6.87	0.02	0.42	0.64	0.88	0.78	0.08	52	65	13	131	307	89.09
3	7	60.57	0.91	20.87	5.04	0.02	0.30	0.89	1.14	0.72	0.04	44	87	10	132	247	90.55
4	10	52.36	1.30	24.06	7.42	0.03	0.39	0.33	0.56	0.62	0.12	54	50	12	146	297	87.25
6	15	55.70	0.99	22.28	6.65	0.03	0.43	0.61	0.86	0.85	0.06	47	74	17	142	275	88.52
7	16	58.00	0.94	21.37	5.18	0.02	0.24	0.84	1.09	0.68	0.08	38	79	10	134	210	88.49

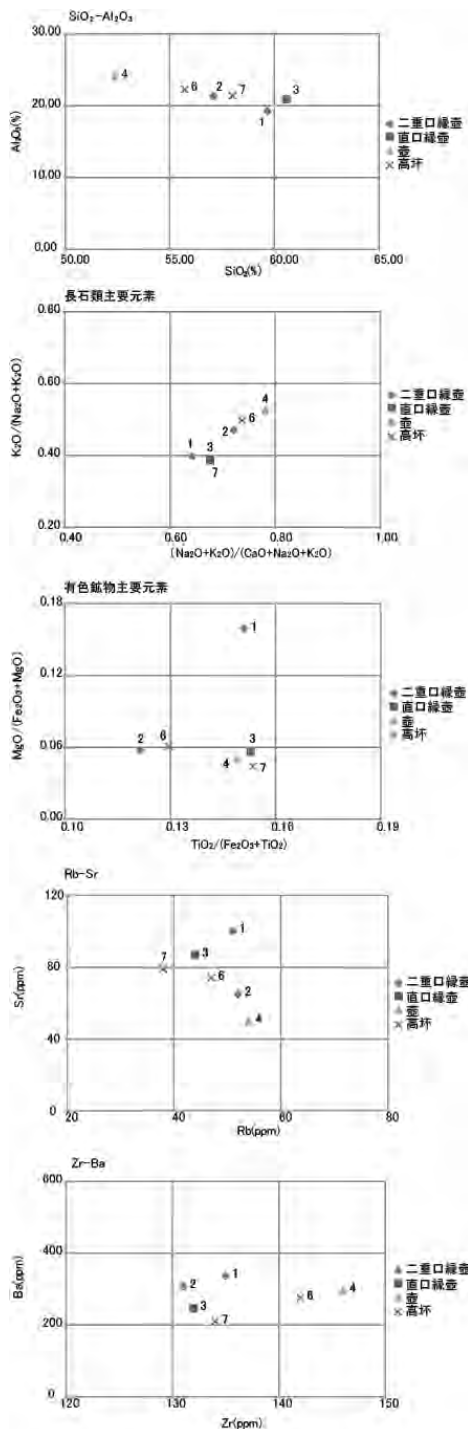


図4. 胎土化学組成散布図  
図中の数字は資料No.

#### 4. 考察

##### (1)地質からみた胎土の由来

9点の試料のうち、資料No.9を除く8点は、胎土中に含まれる砂粒の鉱物・岩石組成がほぼ同様であった。胎土中に含まれる砂粒の鉱物・岩石組成は、胎土の材料となった粘土や砂などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を反映していると考えられる。したがって、その組成が各試料間でほぼ同様であることは、各試料の材料となった堆積物の採取場所は、同一の地質学的背景を有する地域内であった可能性が高い。

例えば今回の試料が出土した諏訪台古墳群の位置は、養老川中流域から下流域にかけての地域とすると、その地質学的背景は、両岸に分布する市原台地と姉崎台地を構成する下総層群であり、さらに上流域の上総丘陵を構成する上総層群であると言える。下総層群は、第四紀中期更新世に形成された浅海成堆積物であり、上総層群は新第三紀鮮新世～第四紀前期更新世に形成された半深海成堆積物とされている(日本地質学会編 2008)。いずれの地層も、砂層と泥層および狭在する火山灰(テフラ)層からなるので、それらを構成する砂粒の鉱物組成や岩石片組成は、下総層群や上総層群を堆積させた海域の背後の陸地すなわち現在の関東平野を取り巻く山地の地質を反映していることになる。ただし、海底堆積物であるから、その由来となる山地を構成する全ての種類の岩石片が混在しているわけではなく、大抵は海底にまで至る間に物理的・化学的な破壊作用に耐えて残った鉱物や岩石片がほとんどを占めている。鉱物片で言えば、石英や長石類であり、岩石片で言えば堆積岩類特にチャートや泥岩・砂岩などである。それに、関東平野を取り巻く山地の中で堆積岩類に次いで比較的広く分布する凝灰岩類や流紋岩・デイサイト類となる。なお、安山岩類も関東平野を取り巻く山地には比較的広く分布するが、新第三紀鮮新世や前期更新世の安山岩類は比較的脆弱であることから、下総層群や上総層群の砂粒中にはあまり含まれていないと思われる。実際に、下総層群中の砂礫層の礫種構成としては、チャート、砂岩、泥岩、石英斑岩(おそらく本分析における流紋岩に相当する)などが確認されている(徳橋・遠藤 1984)。

ここで前述した8点の試料の胎土中の砂粒の鉱物片・岩石片組成をみると、上述した諏訪台古墳群の位置する地域の地質学的背景とよく一致していることがわかる。このことから、8点の試料は、諏訪台古墳群の周辺すなわち養老川中流域から下流域にかけて分布する市原台地や姉崎台地あるいは台地間の沖積低地を構成する堆積物を材料としている可能性が高く、それらの地域内で製作された土器であると考えられる。

なお、蛍光X線分析では、薄片観察では共通する組成の試料でも、2つのグループに分けられる可能性のあることが示唆された。このことから、材料採取地が諏訪台古墳群周辺とされる中でも、複数の採取地が存在したか、さらにはそれらの材料を素地土として調整する際に、複数の材料選択や配合などがあったことなどを考えることができる。ただし、6点という限られた点数の中での比較であることから、複数のグループの存在を明らかにするためには、より多くの測定結果によって検討する必要がある。

これに対し資料No.9については、他の8試料とは鉱物片・岩石片組成が大きく異なり、その材料は諏訪台古墳群の周辺の堆積物には由来しない。さらに、斜長石の鉱物片と凝灰岩が卓越し、それらの鏡下における特徴および胎土の基質も軽石や凝灰岩の破片に由来するガラス質物質で埋められている



ことなどから、資料No.9の材料として使用された砂および粘土は、おそらく新第三紀鮮新世頃の火砕流堆積物に由来する可能性があると考えられる。特に、鉍物片において石英の量比が少なく、岩石片において堆積岩類が認められないという砂粒の組成は、関東平野を取り巻く山地や丘陵の地質を考慮すれば、関東平野を流れる河川の下流域および東京湾を囲む房総半島から三浦半島に至るまでの地域を流れる河川の下流域の堆積物では、ほとんど存在し得ないものである。すなわち、資料No.9は、これらの地域以外からの搬入品である可能性が高い。なお、上述した鮮新世頃の火砕流堆積物という地質は、日本の地質を考えた場合に特殊な地質ではなく、関東平野を取り巻く山地や丘陵地にも各所に分布しており、関東地方以外の地域でも全国的に分布している。したがって、現時点では、資料No.9の具体的な産地まで言及することはできない。逆に、資料No.9の考古学上の所見から想定される地域があれば、それらの地域の地質学的背景を調べることにより、その地域産であるかどうかの検討が可能である。諏訪台古墳群の各古墳から出土した土師器についてさらに分析事例を蓄積することができれば、それら試料の考古学情報とのすり合わせにより、資料No.9と同様の胎土を持つ土器の地域性について、より具体的な推定のなされることが期待される。

## (2)胎土と器種との関係について

今回の試料では、二重口縁壺、直口縁壺、壺、甕、高坏、器台、大型壺という7種類の器種が分類されている。大型壺以外の器種については鉍物片・岩石片組成からは違いを見出せないが、粒径組成に注目すると器種との整合性が見出せる。結果で述べた粒径組成で分類された試料に器種を入れると、粗粒砂をモードとする:資料No.9→大型壺

中粒砂と細粒砂が同程度でモードを構成する:資料No.3→直口縁壺

細粒砂をモードとし、次いで中粒砂が多い:資料No.1、2→二重口縁壺

細粒砂をモードとし、次いで極細粒砂が多い:資料No.4、5、7→壺、甕、高坏

細粒砂と極細粒砂が同程度でモードを構成する:資料No.6→高坏

極細粒砂をモードとする:資料No.8→器台

となり、高坏2点が分かれるほかは、いずれも器種に対応している。一方、蛍光X線分析による化学組成で分類された2グループの器種構成を見ると、二重口縁壺2点も高坏2点もそれぞれ2グループに分かれてしまう。ただし、いずれの器種も、考古学所見による、より詳細な分類では異なる分類(二重口縁壺はAとC、高坏はAとB)とされている。蛍光X線による2グループを器種構成で見ると、二重口縁壺A、直口縁壺A、高坏Bのグループと二重口縁壺C、壺A、高坏Aのグループとに分かれている。

今回の試料では、二重口縁壺と高坏は2点、他の器種では1点ずつであるために、器種と胎土との関係は明瞭ではない。しかし、上述した粒径組成や化学組成と器種との関係が有意である可能性は充分にある。したがって、分析事例の蓄積は、胎土と器種の関係を検討する上でも必要であると言える。

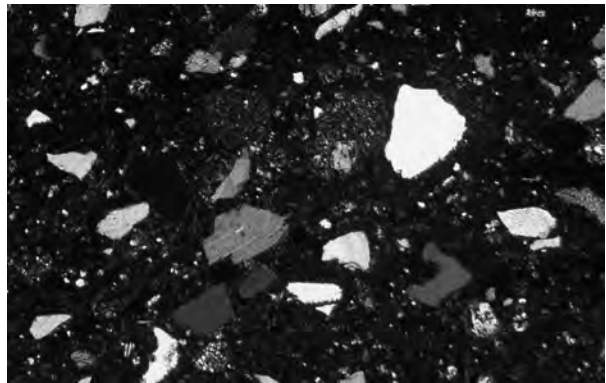
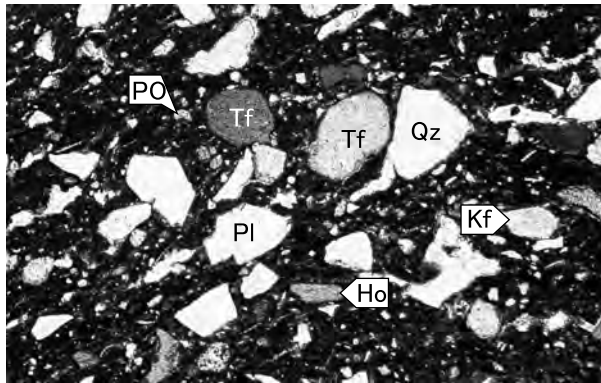
## 引用文献

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121。

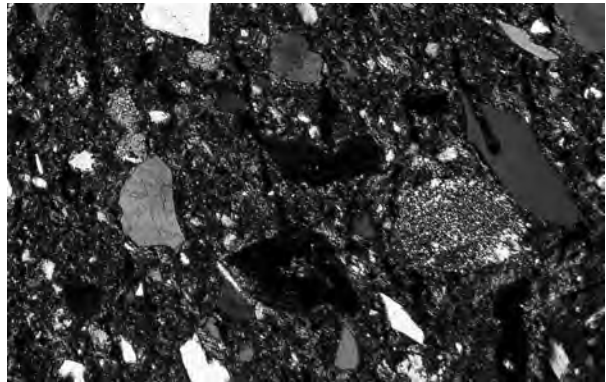
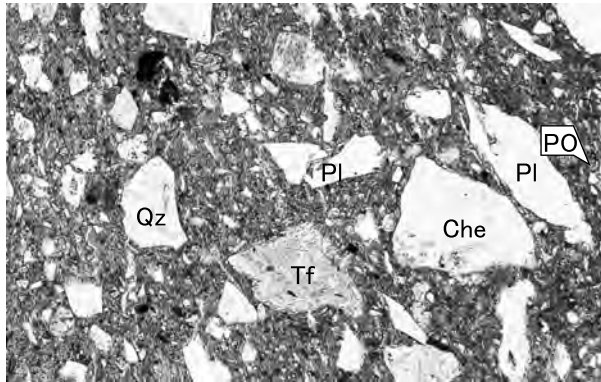
日本地質学会編,2008,日本地方地質誌3 関東地方。朝倉書店,570p。

徳橋秀一・遠藤秀典,1984,姉崎地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,136p。

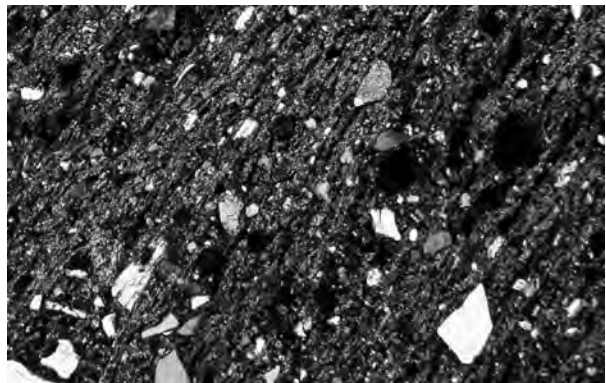
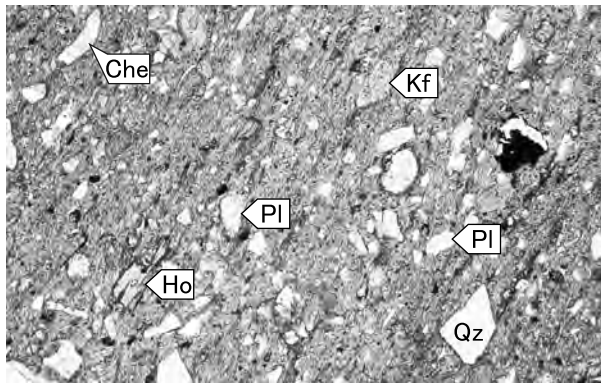
図版1 胎土薄片



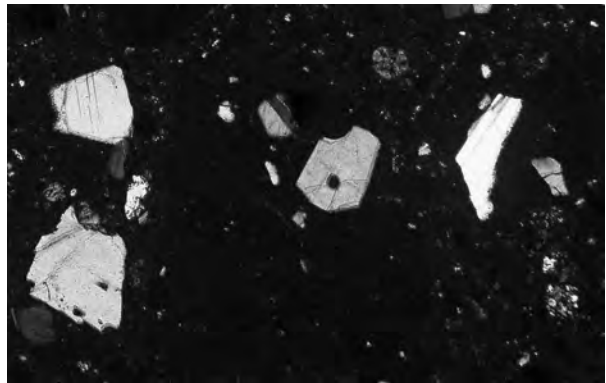
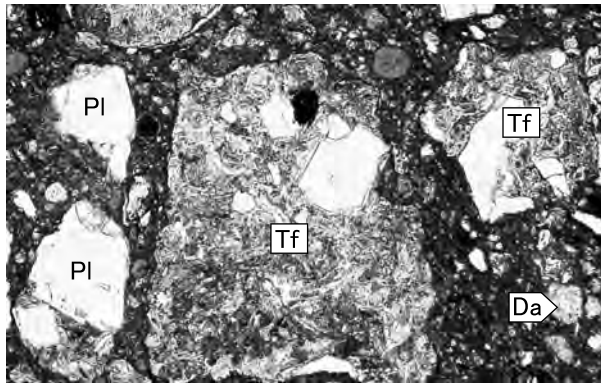
1.資料No.1(遺物No.1 前期古墳 方墳 セ28 遺構No.043 土師器 二重口縁壺(A))



2.資料No.3(遺物No.7 前期古墳 方墳 セ28 遺構No.043 土師器 直口縁壺(A・赤彩))



3.資料No.8(遺物No.23 前期古墳 方墳 セ28 遺構No.043 土師器 器台(赤彩))



4.資料No.9(遺物No.42 前期古墳 方墳 セ28 遺構No.043 土師器 大廓 大型壺)

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Che:チャート. Tf:凝灰岩.  
Da:デイサイト. PO:植物珪酸体.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

## 第2節 諏訪台古墳群から出土した釘付着木質の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

諏訪台古墳群は、養老川右岸の台地上に位置し、170 基の墳墓が確認されている。いくつかの古墳では、主体部から木質の付着した鉄釘が出土している。木質は、木棺に由来する可能性がある。本報告では、これらの木質を対象として、樹種同定を実施する。

### 1. 試料

試料は、諏訪台古墳群から出土鉄釘に付着した木質である。出土鉄釘は合計 29 点あるが、この中から選択された 6 資料(樹種同定委託番号 2,6,19,23,25,29)について分析を実施する。各資料には、2 点の部材に由来する木質が付着しているため、6 資料 12 点について分析を実施する。なお、本報告では、便宜上、釘頭のある側を外側、先端のある側を内側と呼称する。

### 2. 分析方法

木質は、鉄釘に由来する酸化鉄が付着することによって辛うじて形を保っている状態である。通常の切片作成法による同定は困難であるため、炭化材と同じく電子顕微鏡による同定を行う。

各資料から外側・内側の木片を採取する。木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Richter 他(2006)を参考にする。

### 3. 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。木質は、全て針葉樹であり、3 点がヒノキ科に同定された。解剖学的特徴等を記す。

#### ・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は、スギ型あるいはヒノキ型であるが、保存が悪く詳細は不明である。放射組織は単列、1-10細胞高。

### 4. 考察

古墳主体部から出土した鉄釘付着木質は、状況から木棺材に由来すると考えられる。各資料には、鉄釘で留められた 2 枚の部材に由来する木質が残っている。釘が打ち込まれた面の木取りは、外側の部材では板の木取りに該当する。外側の部材では、板目と柁目の双方が認められ、板目板と柁目板の 2 種類が利用されていたことが推定される。内側についてみると、釘の打ち込まれた面が木口になる資料と柁目になる資料がある。内側が柁目になる資料は、外側がいずれも板目になるが、2 枚の板の軸方向は平行ではなく、直交する関係にある。木取りの違いは、板の張り合わせ時の状況を反映していると考えられ、今後細かく検証することで、木棺の形状や張り合わせ方法を復元できる可能性がある。

表1. 樹種同定結果

樹種同定委託番号	新整理番号	整理番号	遺跡	遺構・位置	遺物番号	部位	木取り	樹種	掲載No.
2	124	118	099	4042	2	外側	柱目	針葉樹	SM1025 1-7
						内側	木口	針葉樹	
6	159	152	099	4060主体部上	9	外側	板目	針葉樹	SM1010 1-64
						内側	木口	ヒノキ科	
19	362	352	SW83	K14第2主体部	1008	外側	板目	針葉樹	SM1058 1-15
						内側	木口	針葉樹	
23	396	385	SW83	K15	3017	外側	板目	ヒノキ科	SM1008 1-31
						内側	柱目	ヒノキ科	
25	412	402	SW83	K17主体部	3006	外側	板目	針葉樹	SM1041 1-17
						内側	柱目	針葉樹	
29	460	339	SW83	K-18-1	3001	外側	柱目	針葉樹	SM1082 1-1
						内側	木口	針葉樹	

1)木取りは、釘が打ち込まれた面を示している。

これらの木質は、全て針葉樹であり、一部がヒノキ科に同定された。針葉樹とした資料は、保存状態が悪いが、分野壁孔がスギ型あるいはヒノキ型になること、観察した範囲で樹脂道が認められないこと等を考慮すれば、同じくヒノキ科の可能性が高い。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどの有用材が含まれる。一般的に、木理は通直で割裂性・耐水性が比較的高く、加工は容易である。大径木になるが、木理が通直で分割加工によって板が作りやすいこと、耐水性が比較的高いこと等が利用の背景に考えられる。

諏訪古墳では、これまでも木棺の樹種同定が実施されており、スギの利用が報告されている(鈴木・能城,1994)。市原市内のこれまでの分析結果を見ると、スギは西谷古墳や駄ノ塚古墳でも報告されている。一方、山王山古墳ではヒノキが報告されている(山内,1980)。関東地方の他地域の事例をみると、群馬県の多田山古墳や中里塚古墳(古墳時代末期)、茨城県の鏡塚古墳(古墳時代前期)、栃木県の七廻り鏡塚古墳や牛塚古墳(古墳時代中～後期)等で木棺の樹種同定が行われており、ヒノキの利用が多い結果が報告されている(伊東・山田,2012)。本地域では、これまでの調査ではスギの利用が確認されていたが、今回の調査結果から、関東地方の他の地域と同様にヒノキも利用されていたことが推定される。

#### 引用文献

伊東 隆夫・山田 昌久,2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.

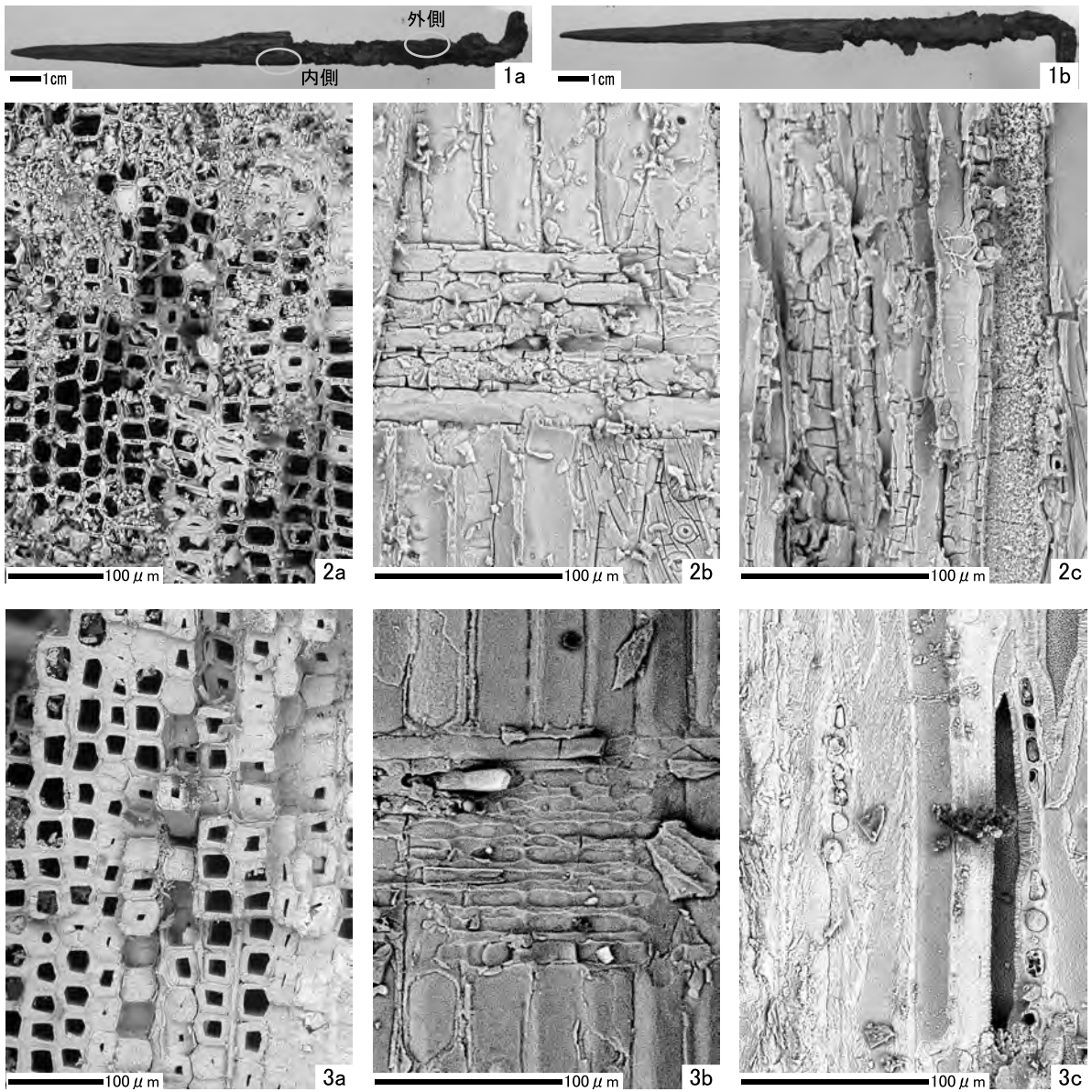
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) ,2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修) ,海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*]

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

鈴木 三男・能城 修一,1994,千葉県上総地方古墳出土木質遺物の樹種.土筆,第3号,土筆舎,32-42.

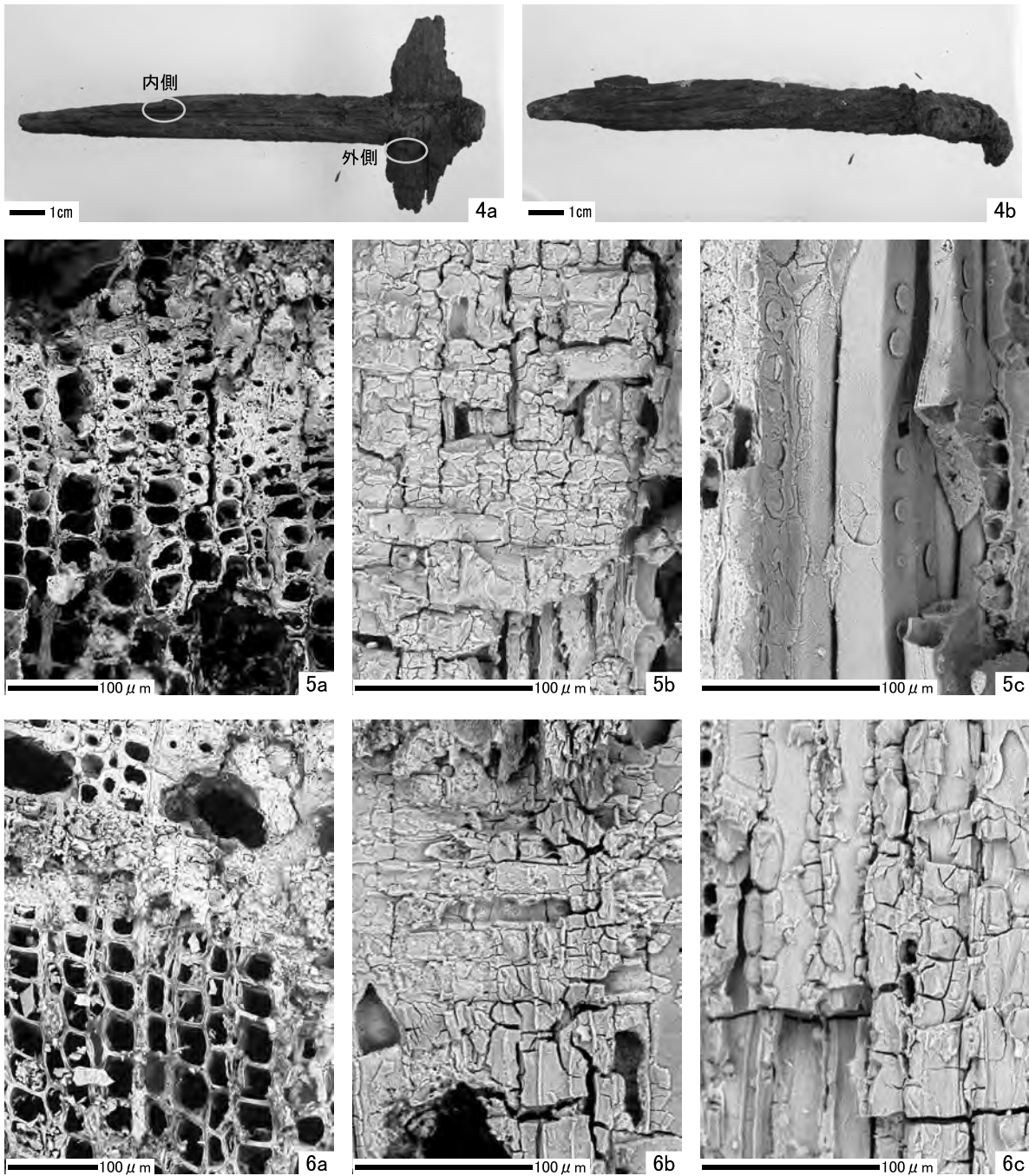
山内 文,1980,木質遺物について.「上総山王山古墳発掘調査報告書」,市原市教育委員会,232.

図版1 鉄釘付着木質(1)



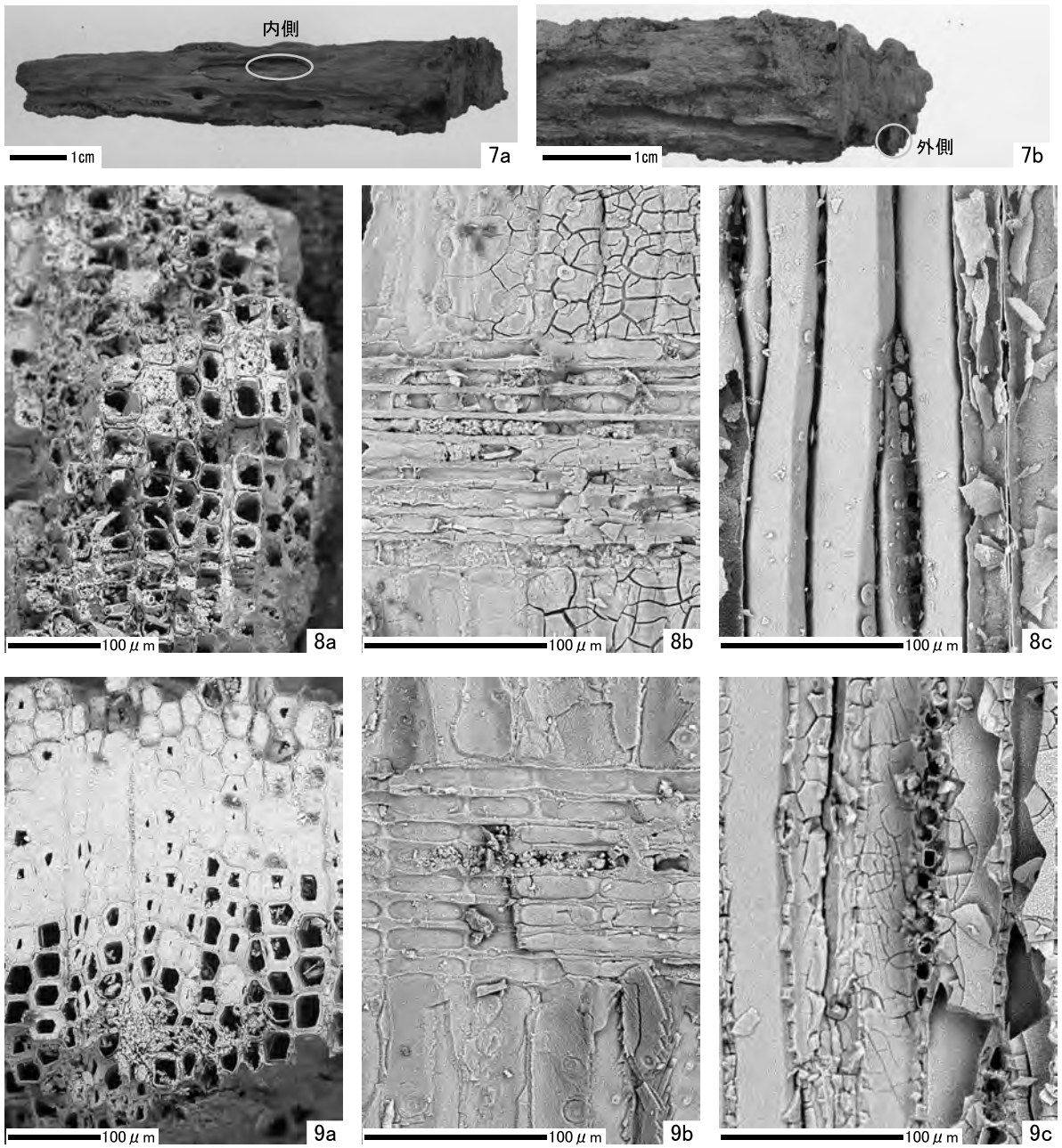
- 1.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号2)
- 2.針葉樹(樹種同定委託番号2;外側) a:木口,b:柁目,c:板目
- 3.針葉樹(樹種同定委託番号2;内側) a:木口,b:柁目,c:板目

図版2 鉄釘附着木質(2)



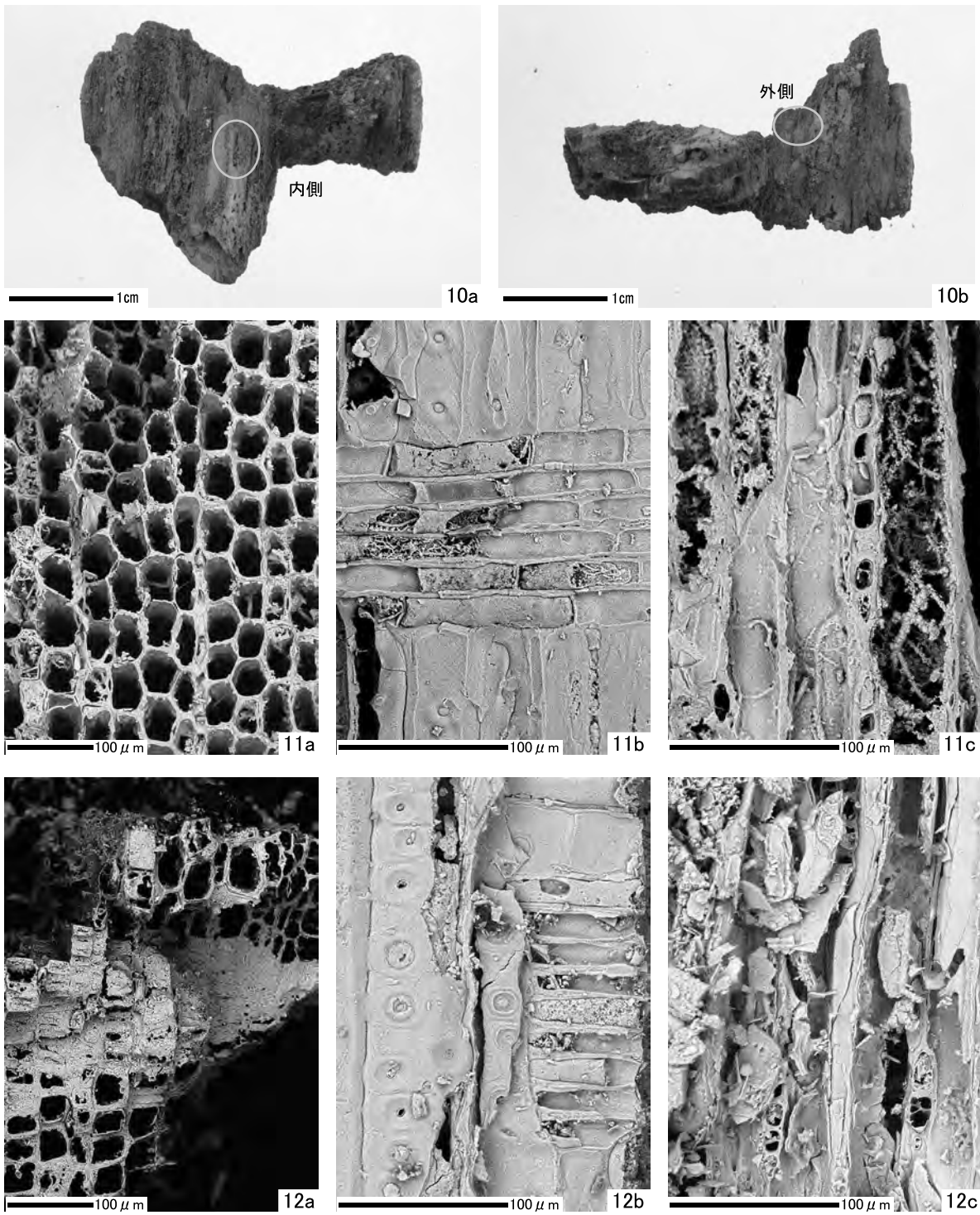
4.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号6)  
 5.針葉樹(樹種同定委託番号6;外側) a:木口,b:柁目,c:板目  
 6.ヒノキ科(樹種同定委託番号6;内側) a:木口,b:柁目,c:板目

図版3 鉄釘付着木質(3)



7.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号19)  
 8.針葉樹(樹種同定委託番号19;外側) a:木口,b:柁目,c:板目  
 9.針葉樹(樹種同定委託番号19;内側) a:木口,b:柁目,c:板目

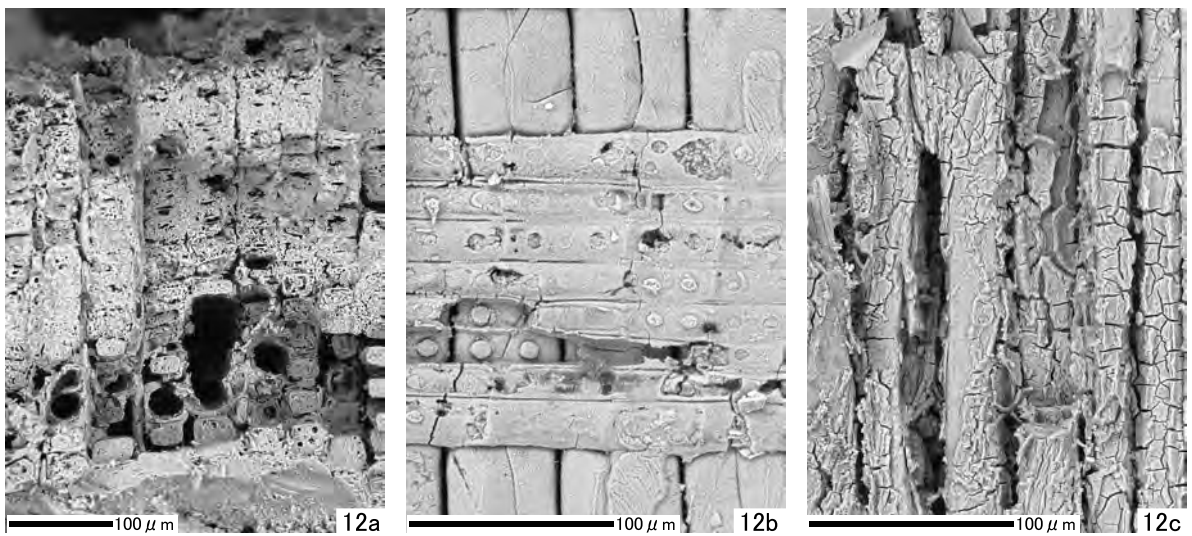
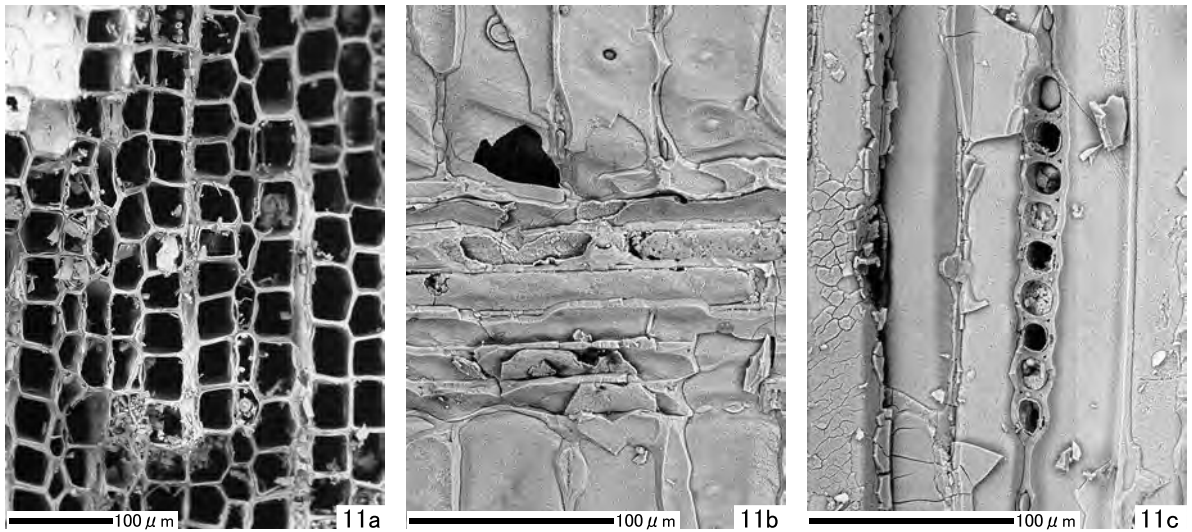
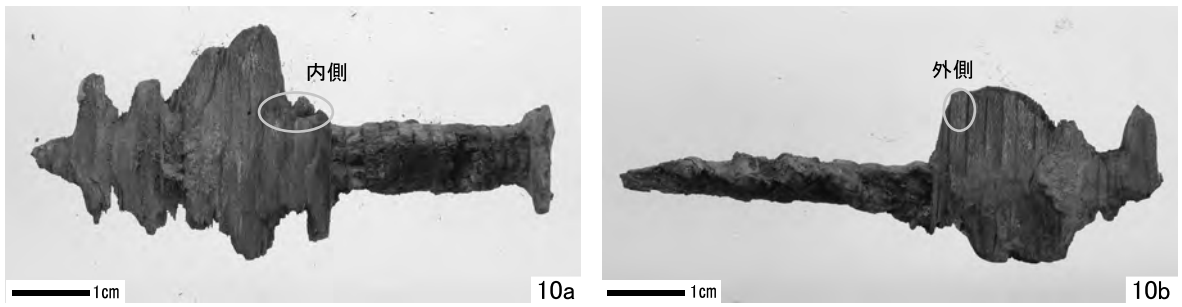
図版4 鉄釘附着木質(4)



10.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号23)  
 11.ヒノキ科(樹種同定委託番号23;外側) a:木口,b:柁目,c:板目  
 12.ヒノキ科(樹種同定委託番号23;内側) a:木口,b:柁目,c:板目



図版5 鉄釘付着木質(5)

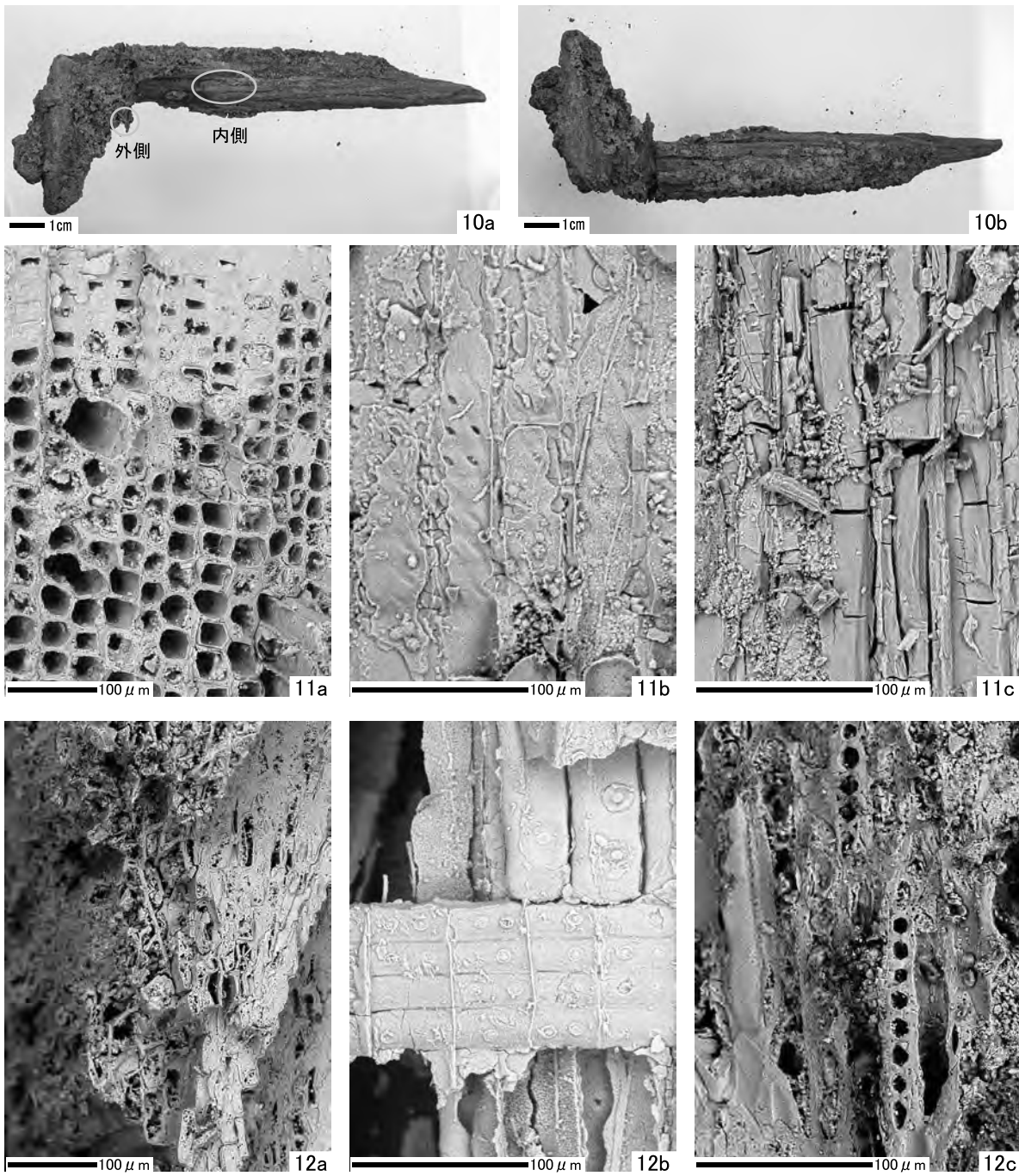


13.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号25)

14.針葉樹(樹種同定委託番号25;外側) a:木口,b:柁目,c:板目

15.針葉樹(樹種同定委託番号25;内側) a:木口,b:柁目,c:板目

図版6 鉄釘付着木質(6)



16.資料の全景と分析試料採取位置(樹種同定委託番号29)  
 17.針葉樹(樹種同定委託番号29;外側) a:木口,b:柁目,c:板目  
 18.針葉樹(樹種同定委託番号29;内側) a:木口,b:柁目,c:板目

### 第3節 諏訪台遺跡出土古墳時代人骨について

長岡朋人 1)、清家大樹 2)、平田和明 1)

1) 聖マリアンナ医科大学解剖学教室

2) 筑波大学大学院人文科学研究科

#### 1. はじめに

昭和 59 年に市原市教育委員会によって千葉県市原市諏訪台遺跡の発掘が行われ、(SM1083 より)古墳時代人骨が検出された。以下に人類学的な鑑定結果を報告する。

#### 2. 個体数・出土部位

##### 個体数

重複する出土部位はない。最少個体数は 1 個体である。

##### 人骨出土部位

頭蓋、下顎骨、左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右手骨、胸骨、右肋骨 7 個、左肋骨 8 個、頸椎 7 個、胸椎 10 個、腰椎 4 個、仙骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右膝蓋骨、左右足骨が残る。

歯は上下顎骨に植立しており、以下の歯式の通りである。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	×	7	8
	7	6	5	○	3	○	×		×	×	3	○	5	●	7	8

ただし、アラビア数字は残存永久歯を示す。○は歯槽解放を、●は歯槽閉鎖を、×は破損をそれぞれ示す。

#### 3. 性別・死亡年齢

##### 性別

大坐骨切痕が狭く、前耳状溝のレリーフが浅かったため、男性と推定できた(Bruzek, 2002)。

##### 死亡年齢

四肢長骨の骨端軟骨、鎖骨の胸骨端は癒合済みであり、蝶形後囟軟骨結合は消失していた。頭蓋縫合(冠状縫合、矢状縫合、ラムダ縫合)は内板が完全に癒合していたが、外板は約半分の癒合が認められた。寛骨では耳状面に多数の孔があり、Lovejoy et al. (1985)の 7 度であった。耳状面からの推定年齢は 50 歳以上であった。

#### 4. 形態学的所見

##### 推定身長

左上腕骨最大長は 288mm、右橈骨最大長は 232mm、右大腿骨最大長は 422mm、左大腿骨最大長

は 421mm、左脛骨最大長は 345mm であった。それぞれの最大長を藤井の式(藤井、1960)に代入して求めた推定身長は、154.4cm、159.2cm、159.1cm、158.8cm、159.2cm(平均値 158.2cm)であった。この値は、関東地方の古墳時代人の平均値 163.1cm(平本、1972)より約 5cm 低い身長であった。

### 頭蓋形態

眉上隆起、乳様突起、外後頭隆起が未発達であり、頭頂結節の発達も弱かった(図 1)。脳頭蓋最大長は 163mm、脳頭蓋最大幅は 142mm、脳頭蓋長幅示数は 87 であり、短頭に分類される。顔面頭蓋は幅広かった。鼻根部の陥凹は見られず、平坦な顔面であった。

### 5. 古病理学的所見

左上顎第 2 大臼歯の近心隣接面には歯髄に達する齲蝕が認められた。23 本の歯のうち 1 本が齲蝕であり、齲蝕率は 4%であった。

### 6. まとめ

出土人骨は保存状態が良好であり、個体数は 1 個体であった。50 歳以上の男性で、推定身長は 158.2cm であった。

### 参考文献

Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex using the human hip bone. *American Journal of Physical Anthropology*, 117: 157-168.

藤井明 (1960) 四肢長骨の長さと言身長の関係について. 順天堂大学体育学部紀要、3: 49-60.

藤田恒太郎 (1949) 歯の計測基準について. 人類学雑誌、61: 27-32.

平本嘉助 (1972) 縄文時代から近代に至る関東地方人身長の時代的变化. 人類学雑誌、80: 221-236.

Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., and Mensforth R.P. (1985)

Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: A new method of determining adult age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68: 15-28.

Martin R. and Knussmann R. (1988) *Anthropologie*. Band I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.

図の説明

図 1. 諏訪台遺跡(SM1083)出土頭蓋



付表 1. 頭蓋計測値 (mm) <sup>1</sup>

計測項目	計測値
脳頭蓋最大長	163.0
頭蓋底長	92.0
脳頭蓋最大幅	142.0
最小前頭幅	87.6
両耳幅	124.3
バジオン・ブレグマ高	125.0
顔長	95.0
頬骨弓幅	134.7
中顔幅	106.6
上顔高	66.3
前眼窩間幅	18.1
眼窩幅	41.6
眼窩高	31.5
鼻幅	28.4
鼻高	45.6

1.計測は Martin and Knussmann(1988)の方法に従った。

付表 2. 歯冠計測値 (mm) <sup>1</sup>

上下	歯種	近遠心径	頬舌径
上顎	中切歯	8.6	7.6
上顎	側切歯	—	6.9
上顎	犬歯	8.0	8.8
上顎	第1 小臼歯	7.1	9.6
上顎	第2 小臼歯	6.7	9.4
上顎	第1 大臼歯	9.9	11.1
上顎	第2 大臼歯	9.7	11.6
上顎	第3 大臼歯	—	—
下顎	中切歯	—	—
下顎	側切歯	—	—
下顎	犬歯	7.1	7.9
下顎	第1 小臼歯	—	—
下顎	第2 小臼歯	7.4	8.7
下顎	第1 大臼歯	10.8	10.7
下顎	第2 大臼歯	11.1	10.7
下顎	第3 大臼歯	10.6	9.6

1.計測は藤田 (1949) の方法に従った。

## 第4節 諏訪台古墳群・出土石器石材肉眼鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

市原市諏訪台古墳群は、古墳時代より下層を天神台遺跡と呼称されており、縄文時代早期・前期、弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期～終末期、平安時代にわたる複合遺跡である。

今回の自然科学分析調査では、縄文時代、縄文時代(古墳墳丘内)、弥生～古墳時代前期の墳墓、弥生時代以降の土壌、古墳時代後期以降の墳墓等の各遺構や包含層より出土した石器および石製品を対象として、肉眼による石材鑑定を行った。また、石材鑑定結果に基づき、可能な限り石材に関する候補産地の推定を行い、各時代・時期別の利用傾向を明らかにした。

### 1. 試料

試料は、縄文時代、縄文時代(古墳墳丘内)、弥生～古墳時代前期の墳墓・弥生時代以降の土壌、古墳時代後期以降の墳墓から検出された、石器や石製品計266点である。そのうち、縄文時代の石器の器種は、石鏃や剥片が中心であり、弥生～古墳時代および古墳時代後期以降の石製品では、管玉、白玉および勾玉を中心に試料が選択されている。

### 2. 分析方法

平成25年12月16-17日に、当社技師一名が市原市埋蔵文化財調査センターへ赴き、野外用ルーペを用いて石材表面の構成鉱物や組織を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の名前を付した。岩石名の付与に際しては、五十嵐(2006)の分類に従った。なお、岩石名や鉱物名の決定には、岩石薄片作製鑑定、蛍光X線分析およびX線回折分析などの自然科学分析手法を併用することにより決定されるが、今回の試料は文化財保護の観点から非破壊が前提であり、肉眼観察の範囲で、鑑定された石質名は概査的なものである点に留意されたい。

### 3. 結果

石材鑑定結果は、遺物の詳細とともに表1-4に示す。その内訳として、縄文時代出土石材の鑑定結果を表1に、縄文時代(古墳墳丘内)出土石材の鑑定結果を表2に、弥生・古墳時代出土玉類石材の鑑定結果を表3に、古墳時代後期以降出土玉類の石材鑑定結果を表4に示し、表6-8に器種別・製品別の石材組成を示した。

縄文時代出土石材では、火山岩類として、黒曜石6点、無斑晶質安山岩2点、無斑晶ガラス質安山岩2点、火山砕屑岩類として、凝灰岩1点、堆積岩類として、頁岩(古期)2点、珪質頁岩2点、チャート13点、変成岩類として、堇青石ホルンフェルス1点、ホルンフェルス1点、鉱物として、石英1点、玉髓1点が、それぞれ鑑定された。縄文時代(古墳墳丘内) 出土石材では、深成岩類として、片状黒雲母角閃石花崗閃緑岩1点、火山岩類として、黒曜石1点、流紋岩7点、輝石安山岩(新第三紀)1点、輝石安山岩(第四紀)1点、無斑晶ガラス質安山岩5点、無斑晶質安山岩3点、玄武岩1点、火山砕屑岩類として、石英斑岩(奥日光)1点、堆積岩類として、砂岩(古期)2点、泥質砂岩(古期)1点、頁岩(古期)6

表1. 縄文時代出土石材鑑定結果

No.	調査区	遺構No.	旧No.	取り上げNo.	地区	層位	器種	残存状態	石材	最大長(mm)	重量(g)	備考
1		31号	177	2188	4区	旧表土	打製石斧	完形	ホルンフェルス	105.7	144.9	コーナー住居跡
2		10号	156	2040	1T	周溝内	局部磨製石斧	一部欠	重晶石ホルンフェルス	68.3	54.4	
3		10号	156	2011	3T	周溝内	尖頭器	半欠	凝灰岩	33.5	7.5	
4		36号	252	2121	4区	旧表土	尖頭器	半欠	チャート	26.9	1.8	
5		36号	252		1区	周溝内	石錐?	半欠	石英	27.5	3.1	
6		36号	252		西側ベルト	旧表土	調整剥片	半欠	チャート	32.4	5.6	
7		36号	252	2121	4区	旧表土	調整剥片	完形	チャート	40.1	8	
8		36号	252	2128	1区	旧表土	調整剥片	一部欠	チャート	30.1	7.7	
9		36号	252	2148	1区	旧表土~漸移層	楔状石器	一部欠	チャート	36.1	21.2	
10	064	150号			SW	旧表土	楔状石器	完形	チャート	29.4	5.4	
11	064	150号			西ベルト	周溝内	楔状石器	完形	チャート	26.1	6.2	
12		36号	252	2121	4区	旧表土	楔状石器	一部欠	頁岩(古期)	21.6	3.1	
13		36号	252	2140	3区	旧表土	楔状石器	完形	黒曜石	18.2	1.9	
14		8号			1-1区	周溝内	石鏃	完形	頁岩(古期)	15.9	0.5	
15		31号	177	2109	4区		石鏃	完形	チャート	20.9	0.7	コーナー住居跡
16		11号			5T	周溝内	石鏃	完形	チャート	11.8	0.1	
17		36号			北側ベルト	旧表土	石鏃	完形	黒曜石	18.6	0.7	
18		28号			2区	墳丘盛土	石鏃	一部欠	無斑晶ガラス質安山岩	14.1	0.3	
19		31号	177	2110	4区		石鏃	一部欠	チャート	17.5	0.6	コーナー住居跡
20		11号	157	2016	5T	周溝内	石鏃	完形	玉髄	21.2	0.7	
21		36号	252	6192			石鏃	完形	チャート	22.2	0.7	
22	SW83	36号	252		1区	周溝内	石鏃	半欠	黒曜石	18	0.8	
23		36号	252		1区	旧表土~漸移層	石鏃	一部欠	チャート	17.6	0.6	
24		36号	252	2121	4区	旧表土	石鏃	一部欠	珩質頁岩	20.9	1.6	
25		8号	154	2249	3区	旧表土	石鏃	一部欠	黒曜石	15.1	0.7	
26		36号	252	2140	3区	旧表土	石鏃	完形	チャート	19.8	0.6	
27	SW83	28号	174		2区		石鏃	一部欠	無斑晶ガラス質安山岩	22.7	1.3	
28		36号	252	2121	4区	旧表土	石鏃	一部欠	珩質頁岩	22	1.5	
29		36号	252	2140	3区	旧表土	石鏃	半欠	黒曜石	13	0.4	
30		36号	252	2140	3区	旧表土	石鏃	完形	無斑晶質安山岩	21.4	1.4	
31		36号	252	2121	4区	旧表土	石鏃	一部欠	無斑晶質安山岩	16.6	0.9	
32		11号			5T	周溝内	石鏃(未製品)?	一部欠	黒曜石	21.9	1.8	

表2. 縄文時代(古墳墳丘内)出土石材鑑定結果

調査次	遺物No.	遺構種類	遺構No.	層位	器種	石材	残存状態	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
064	186	古墳	151	旧表下北ベルト	磨石	泥質砂岩(古期)	半欠	-54.2	(38.1)	(12.8)	47.8	
064	187	古墳	151	SW旧表下	不明	玄武岩	破片	(80.9)	(32.7)	(16.1)	64.8	
064	188	古墳	150	SW周溝内	磨石	輝石安山岩(新第三紀)	破片	(56.1)	(28.1)	(24.5)	48.9	
064	196	古墳	2B-42		砥石	流紋岩	半欠	(66.5)	32.5	14.5	48.2	
099	5		4006		敲石	砂岩(古期)	完	150.1	95.3	67.2	1061.7	
099	6		4061-A	下層	砥石	砂岩(古期)	一部欠	(70.1)	(67.9)	19.5	131.6	
099	7		4065-C	下層	敲石	輝石安山岩(第四紀)	破片	(50.9)	(56.3)	(50.8)	203.9	
099	8		4068-A	下層	磨石	石英斑岩(奥日光)	半欠	77.6	(48.9)	(27.5)	151.7	
064	122		150NW	旧表中	剥片	無斑晶ガラス質安山岩	破片	(29.5)	(14.5)	(5.0)	2.5	
064	123		150SW	周溝内	剥片	無斑晶ガラス質安山岩	破片	(27.2)	(11.9)	(4.6)	1.7	
064	124		150NE	8002	剥片	チャート	破片	(14.3)	(13.0)	(2.0)	0.4	
064	126		2B-21	谷チヨウ丘	剥片	チャート	破片	(13.0)	(8.9)	(19.0)	0.3	
064	127		2B-21	谷チヨウ丘	剥片	チャート	破片	(15.8)	(12.6)	(2.4)	0.5	
064	135		151SE	墳丘流土	剥片	頁岩(古期)	破片	(31.5)	(16.0)	(4.4)	2.2	
064	137		151NW	周溝内	剥片	無斑晶ガラス質安山岩	破片	(16.9)	(8.5)	(6.4)	1.1	
064	138		151SE	墳丘流土	剥片	チャート	破片	(20.8)	(10.4)	(2.3)	0.6	
064	140		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(22.3)	(16.7)	(4.3)	1.7	
064	144		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(18.4)	(16.4)	(5.8)	1.4	
064	145		151SW	盛土中南ベルト	剥片	重晶石ホルンフェルス	破片	(28.0)	-	-	5.6	
064	147		151NW	周溝内	剥片	無斑晶ガラス質安山岩	破片	(22.7)	-	-	1.5	
064	148		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(24.6)	-	-	1.8	
064	149		151NW	周溝内	剥片	無斑晶質安山岩	破片	(21.2)	-	-	1.1	



調査次	遺物No.	遺構種類	遺構No.	層位	器種	石材	残存状態	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
064	151		151SE	旧表中	剥片	チャート	破片	(33.8)	-	-	6.1	
064	152		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(15.7)	(15.2)	(2.1)	0.6	
064	153		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(15.3)	(10.4)	(11.2)	2.0	
064	155		151NW	周溝内	剥片	無斑晶質安山岩	破片	(27.5)	(27.3)	(13.9)	4.9	
064	156		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(22.7)	(16.3)	(7.5)	2.1	
064	158		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(27.9)	(13.2)	(5.9)	2.4	
064	159		151NW	旧表下	剥片	チャート	破片	(16.2)	(12.9)	(2.9)	0.7	
064	160		151NW	墳丘盛土	剥片	無斑晶ガラス質安山岩	破片	(32.0)	(20.8)	(9.5)	5.6	
064	164		151NW	旧表下	剥片	無斑晶質安山岩	破片	(22.7)	(19.8)	(3.7)	1.1	
064	166		151	東ベルト流土	剥片	頁岩(古期)	破片	(20.6)	(17.6)	(2.9)	0.9	
064	169		151NE	漸移層	剥片	黒曜石	破片	(12.8)	(12.6)	(6.1)	0.8	
064	175		151NW	旧表下	剥片	チャート	破片	(15.4)	(11.8)	(1.3)	0.4	
064	176		151NW	周溝内	剥片	頁岩(古期)	破片	(29.1)	(9.3)	(4.8)	1.4	
064	177		151SE	旧表中	剥片	チャート	破片	(19.3)	(15.1)	(1.8)	0.4	
064	178		151NW	旧表下	剥片	チャート	破片	(30.2)	(13.9)	(5.6)	2.2	
064	179		151NW	周溝内	剥片	チャート	破片	(26.4)	(9.2)	(3.7)	0.8	
064	183		152NE	旧表下北ベルト	剥片	チャート	破片	(34.6)	(33.2)	(5.9)	6.4	
099	3		4065	下層	剥片	チャート	破片	36	-	-	4.1	
099	4		4068A	下層	剥片	チャート	破片	19	-	-	1.3	
099	5		4068B	サンプル	剥片	白雲母石英片岩	破片	38	-	-	8.6	
099	6		4068B	サンプル	剥片	片状黒雲母角閃石花崗閃緑岩	破片	52	-	-	17.8	
099	7		4068B	サンプル	剥片	頁岩(古期)	破片	37	-	-	2.7	
099	8		4068B	サンプル	剥片	頁岩(古期)	破片	39	-	-	5.3	
099	G-31				不明	流紋岩					71.1	
099	G-32				不明	流紋岩					145.2	
099	G-33				不明	流紋岩					26.9	
099	G12				不明	粘板岩					14.3	グリッドHH56~60
099	G13				不明	頁岩(古期)					16.1	099NG-B
099	32		4061		不明	流紋岩						0994061A831221
099	7		4022		不明	流紋岩						0994022ME54.64
064			SB009 NW		不明	シルト岩						2点
セ28	10		121	セ280121	不明	砂岩ホルンフェルス						セ280121
SW83	G-8			099OH11	砥石	流紋岩					25.1	099OH11

表3(1). 弥生・古墳時代出土玉類石材鑑定結果

遺物No.	地区名	遺構名	日付	種別	石材	質量(g)	遺物	備考
2	099	3130 単独土壇 SK138	840313	琥珀	琥珀	0.5326	3	粉碎
3		3130 単独土壇	840313	石製管玉	滑石	1.9217	4	
4		3130 単独土壇	840313	石製白玉	滑石	0.7081	4	
5		3130 単独土壇	840313	琥珀管玉	琥珀	1.8762	3	
6		3130 単独土壇	840313	琥珀管玉	琥珀	1.8962	3	粉碎(接合)
7		3130 単独土壇	840313	石製白玉	蛇紋岩	1.0559	4	
8		3130 単独土壇	840313	琥珀管玉	琥珀	2.1983	3	粉碎(接合)
9		3130 単独土壇	840313	琥珀管玉	琥珀	2.7949	3	粉碎(接合)
10		3130 単独土壇	840313	石製白玉	滑石	0.7503	4	
1		3158 単独土壇? SK142		石製勾玉	滑石		5	
2		3158 単独土壇?		石製勾玉	滑石		5	
3		3158 単独土壇?		石製勾玉	滑石		5	
100-3		4065A 前期方墳 SS99		砥石	流紋岩	34.2		
4	セ54	30主体部 弥生中期 方形周溝墓 SS76	870909	琥珀勾玉	琥珀		3	
6		グリッド⑥		転用石錘?	流紋岩	47.6		転用石錘か
860915	セ28	139 前期方墳 SS105	6	石製管玉	滑石		4	

遺物 No.	地区名	遺構名	日付	種別	石材	質量 (g)	遺物	備考
860915		139 前期方墳	7	石製玉	滑石		4	
860915		139 前期方墳	8	石製玉	滑石		4	
860915		139 前期方墳	9	石製玉	滑石		4	
860915		139 前期方墳	10	石製管玉	滑石		4	
		J10 1		琥珀棗玉	琥珀		3	
3	セ72	020 単独土壙 SK329		石製丸玉	蛇紋岩	1.7816	4	
4	セ72	020 単独土壙 SK329		石製丸玉	蛇紋岩	1.7649	4	
5		020 単独土壙		石製丸玉	滑石	1.6538	4	
6		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.355	4	
7		020 単独土壙		石製勾玉	蛇紋岩	2.5141	5	
8		020 単独土壙		石製勾玉	蛇紋岩	2.8214	5	
9		020 単独土壙		石製勾玉	滑石	4.7544	5	
10		020 単独土壙		石製丸玉	滑石	1.9692	4	
11		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.4556	4	
12		020 単独土壙		石製丸玉	滑石	1.8928	4	
13		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.3404	4	
14		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.7305	4	
15		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.5093	4	
16		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.8281	4	
17		020 単独土壙		石製勾玉	蛇紋岩	4.3314	5	
18		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.5887	4	
19		020 単独土壙		石製勾玉	蛇紋岩	5.4395	5	
20		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.7042	4	
21		020 単独土壙		石製丸玉	蛇紋岩	1.7083	4	
002		33 単独土壙 SK331	880316	琥珀	琥珀	8.6286	3	
3		33 単独土壙		石製臼玉	蛇紋岩	2.4294	4	
004		33 単独土壙	880316	琥珀	琥珀	1.6079	3	粉々
006		33 単独土壙	880316	琥珀	琥珀	1.9555	3	粉々
007		33 単独土壙	880316	琥珀	琥珀	11.145	3	

表3(2). 弥生・古墳時代出土玉類石材鑑定結果

遺物 No.	地区名	遺構名	日付	種別	石材	質量 (g)	遺物	備考
8	セ72	33 単独土壙 SK331		石製臼玉	蛇紋岩	2.7204	4	
061		33 単独土壙	880323	琥珀臼玉	琥珀	4.9109	3	
126		33 単独土壙		石製臼玉	蛇紋岩	1.6903	4	
132		33 単独土壙		石製臼玉	蛇紋岩	2.6264	4	一部欠損
139		33 単独土壙		石製臼玉	蛇紋岩	2.6723	4	
143		33 単独土壙	880324	琥珀玉	琥珀	23.3086	3	
144		33 単独土壙	880324	琥珀玉	琥珀	15.1528	3	
145		33 単独土壙		琥珀玉	琥珀	23.1818	3	
146		33 単独土壙	880324	琥珀玉	琥珀	12.3607	3	
147		33 単独土壙	880324	琥珀玉	琥珀	2.2363	3	
72	セ28	D-8	850830	不明	溶結凝灰岩(奥日光)			レキー一括
		46 SS111	860306	垂飾品	ネフライト			
	099	不明		石製玉	滑石			

遺物 No.	地区名	遺構名	日付	種別	石材	質量 (g)	遺物	備考
		不明		石製管玉	滑石			
		GF48	821113	有孔円盤	頁岩(古期)			
覆土		1028	821123	石製勾玉	滑石			
4	セ73	001 C区前方部南半表土 SS101	880405	石錘	頁岩(古期)			
	セ28	037 C号主体部古墳時代終末期 15 SM1060		不明	滑石	49.9		縄文前期の遺物である可能性あり
	TJ	H139		炉壁のかげら?	スコリア質凝灰岩			刀子の遺物と一諸だった
	セ28	K-9	860327	不明	凝灰質砂岩	33.1		
		L-10一括4	860318	不明	凝灰質砂岩			
	セ28	046 6001下層 SS111		不明	団塊(酸化鉄)	5.9		
		G-12-7	850927	不明	凝灰質砂岩	69		
		H-8-1	860305	不明	凝灰質砂岩	28.8		
	セ72	3B-A-1		不明	スコリア質凝灰岩			
		001-006 SS97		不明	凝灰質砂岩	101		
		067-014一括		不明	緻密質安山岩	30.7		

表4(1). 古墳時代後期以降出土玉類石材鑑定結果

遺物 No.	新遺構 No.	地区名	旧遺構 No.	実測 No.	種別	依存度	出土位置	石材	長さ(径) (cm)	幅 (cm)	孔 (cm)	厚さ(高さ) (cm)	重量 (g)
	1002	099	4033	8	石製玉	一部欠	主体部	変質凝灰岩	0.68	0.8	0.55	0.72	0.2653
				9	石製玉	一部欠	主体部	変質凝灰岩	0.85	0.89	0.29	0.75	0.625
				11	石製玉	一部欠	主体部	変質凝灰岩	0.89	0.9	0.3	0.73	0.534
				16	石製玉	完形	主体部	変質流紋岩	1.05	1.06	0.32	0.88	1.3843
				18	琥珀玉?	接合	主体部	琥珀	0.98	0.91	0.30~0.26	0.6	0.532
				23	石製玉	2片を接合	主体部	変質凝灰岩	0.92	0.92	0.3	0.71	0.6259
				26	石製玉	ごく一部剥落	主体部	変質凝灰岩	0.85	0.85	0.30~0.05	0.66	0.3032
				33	石製玉	接合	主体部	滑石	0.91	0.9	0.30~0.27	0.8	0.5818
				61	石製玉	3片を接合	主体部	変質凝灰岩	0.82	0.8	0.40~0.29	0.61	0.2201
				62	石製玉	1/2欠	主体部	変質凝灰岩	0.8	0.6	0.23	0.65	0.1874
	1002	099	4033	12	石製勾玉	完形	主体部	瑪瑙	3.3	1.35	0.80~0.15	0.43	
				13	石製勾玉	完形		玉髓	3.45	1.35	0.70~0.20	0.52	
				14	石製勾玉	完形		玉髓	3.3	1.25	0.50~0.10	0.44	
				17	石製勾玉?	一部欠		滑石	2.5	1.2	0.40~0.20	0.5	
				19	石製勾玉	完形		玉髓	3.15	1.1	0.40~0.10	0.4	
				24	石製勾玉	完形		玉髓	3.45	1.1	0.30~0.10	0.42	
				25	石製勾玉	完形		玉髓	3.55	1.3	0.50~0.10	0.43	
				27	石製勾玉	完形		玉髓	3	1.2	0.30~0.15	0.36	
				28	石製勾玉	完形		玉髓	3.8	1.3	0.40~0.15	0.45	
				29	石製勾玉	完形		変質流紋岩	3.15	1.3	0.40~0.20	0.35	
				30	石製勾玉	完形		玉髓	3.35	1.4	0.70~0.15	0.45	
				31	石製勾玉	1/2欠		玉髓	2.5	1.4	0.30~0.10	0.5	
				34	石製勾玉	1/3欠	主体部	玉髓	2.2	1.1	0.35~0.10	0.38	
	1004	099	4081	B-1	琥珀玉		主体部	琥珀	3.21	1.94	0.95~0.20	1.74	7.82
				B-2	琥珀玉		主体部	琥珀	2.84	2.15	0.90~0.20	1.64	7.27
				B-3	琥珀玉		主体部	琥珀	1.92	1.7	0.26~0.20	1.36	4.04
				B-4	琥珀玉		主体部	琥珀	3.84	1.92	0.30~0.20	1.5	3.84
				B-5	琥珀玉		主体部	琥珀	3.49	1.64	0.33~0.18	1.48	5.44
				A-なし	石製切子玉	完形		石英	2.43	1.67	0.50~0.13	0.75	
				A-なし	石製管玉	完形		碧玉	2.72	1.05	0.22~0.12	1.06	
	1060	セ-28	037	B-005	石製白玉	完形	主体部	頁岩	1.13	1.16	0.37~0.35	0.75	1.5271
				B-006	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.83	0.86	0.28~0.25	0.79	0.7973
				B-023	管玉	完形	主体部	琥珀	2.08	1.36	0.50~0.20	1.5	2.9461
				B-024	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.05	1.2	0.70~0.10	0.9	5.9361
				B-025	管玉	一部欠	主体部	琥珀	1.15	1.34	0.40~0.30	0.9	0.8764
				B-026	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.89	1.15	0.36~0.10	0.8	6.3597
				B-027	管玉	完形	主体部	琥珀	1.1	1.05	0.18~0.16	0.8	0.681
				B-028	石製白玉	完形	主体部	滑石	1.05	1.19	0.38	0.84	1.4645
				B-029	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.8	0.82	0.29	0.7	0.5652
				B-049	石製白玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.84	0.89	0.40~2.00	0.51	0.9942
				B-050	管玉	完形	主体部	琥珀	1.66	1.05	0.40~0.22	0.84	0.9395
				B-051	石製白玉	完形	主体部	蛇紋岩	1.15	1.2	0.45~0.35	0.96	0.9395

遺物 No.	新遺構 No.	地区名	旧遺構 No.	実測 No.	種別	依存度	出土位置	石材	長さ(径) (cm)	幅 (cm)	孔 (cm)	厚さ(高さ) (cm)	重量 (g)
				B-052	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.85	0.91	0.30~0.25	0.81	1.5362
				B-053	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.95	1.15	0.40~0.14	0.65	4.6419
				B-054	石製臼玉	完形	主体部	滑石	1.05	1.1	0.45~0.35	0.77	1.432
				B-067	石製臼玉	完形	主体部	蛇紋岩	1.03	1.04	0.35~0.30	0.73	1.1589
				B-079	管玉	完形	主体部	琥珀	1.42	1.1	0.28~0.20	0.82	1.1332
				B不明1	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.5	1.3	0.60~0.10	0.8	7.9725
				B不明2	石製勾玉	完形	主体部	蛇紋岩	3.2	1.4	0.80~0.26	0.74	8.2389
	1060	セ-28	037	B不明3	石製管玉	1/6欠	主体部	変質凝灰岩	1.92	0.75	0.24~0.14	0.75	2.0154
				A-237	石製玉?	2片を接合	主体部	琥珀	0.59	0.61	0.20~0.19	0.42	0.1918
				A-252	石製玉?	完形	主体部	赤玉	0.26	0.25	0.09~0.08	0.26	0.0286
				A-372-2	管玉	完形	主体部	琥珀	3.59	2.39	0.50~0.25	1.45	8.0231
				A-373	管玉	完形	主体部	琥珀	2.31	1.12	0.36~0.22	1.18	1.7239
				A-374-1	管玉	完形	主体部	琥珀	3.3	2.03	0.60~0.08	1.29	6.2657
				A-375	管玉	完形	主体部	琥珀	3.59	1.89	0.60~0.20	1.14	5.1795
				A-376	管玉	完形	主体部	琥珀	4.74	2.51	0.60~0.20	1.88	15.1016
				A-377	管玉	完形	主体部	琥珀	2.6	1.52	0.50~0.28	1.12	3.146
				A-378	管玉	完形	主体部	琥珀	2.25	1.4	0.50~0.26	1.1	2.5328
				A-379	管玉	完形	主体部	琥珀	1.35	1.22	0.60~0.20	1.2	1.2277
				A-380	管玉	完形	主体部	琥珀	3.66	1.72	0.48~0.12	1.48	5.9735
				A-439	管玉	完形	主体部	琥珀	2.82	2	0.44~0.20	1.65	5.6148
				未確認1	管玉	完形	主体部	琥珀	2.93	2.15	0.70~0.28	1.92	
				未確認2	管玉	完形	主体部	琥珀	2.23	1.5	0.38~0.20	1.5	
				未確認3	管玉	一部欠	主体部	琥珀	2.38	1.41	0.40~0.24	1.2	
				0001	管玉	一部欠	攪乱坑内	琥珀	3.22	1.8	0.40~0.20	1.74	
				B-2	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.11	1.15	0.56~0.14	0.92	6.8511
				B-3	管玉	完形	主体部	琥珀	1.06	0.95	0.3	0.76	0.5981
				B-4	管玉	完形	主体部	琥珀	2	1.2	1.40~0.14	1.1	1.4578
				B-5	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.01	1.06	0.46~0.18	0.81	5.5844
				B-6	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.08	1.14	0.36~0.18	0.77	6.6257
				B-7	管玉	完形	主体部	琥珀	2.27	1.4	0.4	1.2	2.5764
				B-8	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	3.44	1.25	0.50~0.18	0.88	8.4407
				B-9	管玉	完形	主体部	琥珀	2.24	1.81	0.36~0.20	0.45	3.7341

表4(2). 古墳時代後期以降出土玉類石材鑑定結果

遺物 No.	新遺構 No.	地区名	旧遺構 No.	実測 No.	種別	依存度	出土位置	石材	長さ(径) (cm)	幅 (cm)	孔 (cm)	厚さ(高さ) (cm)	重量 (g)
	1060	セ-28	037	B-10-2	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.38	0.99	0.36~0.12	0.81	3.7552
				B-15-2	石製勾玉	完形	主体部	緑色岩	3.02	1.09	0.37~0.14	0.6	5.2922
				B-16	管玉	完形	主体部	琥珀	1.33	1.11	0.30~0.20	0.7	0.7731
				B-17	管玉	完形	主体部	琥珀	2.05	1.26	0.80~0.60	0.8	1.2549
				B-18	管玉	完形	主体部	琥珀	1.26	0.94	0.20~0.11	0.79	0.6744
				B-19	管玉	完形	主体部	琥珀	1.93	1.32	0.32~0.26	0.88	1.5329
				B-20	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.43	1	0.36~0.14	0.6	4.2083
				B-21	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.71	1.11	0.44~0.10	0.7	4.2713
				B-22	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.86	0.86	0.34~0.30	0.74	0.5506
				B-23	管玉	完形	主体部	琥珀	3.06	1.66	0.32~0.30	1.14	3.9582
				B-24	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.8	0.8	0.30~0.25	0.64	0.3711
				B-25	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.81	0.81	0.29~0.25	0.61	0.5192
				B-26	石製丸玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.89	0.9	0.30~0.27	0.66	0.5302
				B-33	石製丸玉	完形	主体部	翡翠	0.97	0.97	0.49~0.40	0.76	1.2478
				B-1002	石製玉	完形	主体部	滑石	0.85	1.03	0.50~0.38	0.63	0.9844
				B-1003	石製勾玉	完形	主体部	玉髓	2.63	1.13	0.46~0.16	0.66	5.2788
				B-1004	管玉	完形	主体部	琥珀	2.86	1.3	0.4	1.3	3.2807
				B-1008	石製玉	完形	主体部	蛇紋岩	0.95	0.95	0.35~0.30	0.68	0.7152
	1064	セ54	23	001	石製玉	完形	主体部	凝灰岩	1.05	1.05	0.27	0.85	
				002	石製玉	完形	主体部	滑石	0.85	0.85	0.30~0.28	0.61	
	1001	セ-28	029A	番号なし	管玉			緑色岩					
	1017	064	151	番号なし	石製玉?			頁岩					
	1002	099	4033	10	石製玉	半分	主体部	琥珀					0.8357
				85	石製玉	半分	主体部	琥珀					0.1109
	1014	セ-28	049A	374-2	琥珀管玉	破片?		琥珀					1.3769
				049A	琥珀管玉	一部欠		琥珀					1.7085
				049A	番号なし			チャート					?
	1014	セ-28	049B	11-2	石(礫)			董青石ホルンフェルス					27.0368
	1014	セ-28	049B	12-2	石(礫)			チャート					35.1788
				049B	13-2	石(礫)		チャート					44.3128
				049B	14-2	石(礫)		ホルンフェルス					1.059
				049B	27	琥珀玉	破片	琥珀					0.0901
	1060	セ-28	037B	73	小石?			頁岩					?

表5. 縄文時代出土石材組成

器種石材	調整剥片	石鏃	石鏃(未製品)?	尖頭器	楔状石器	石錐?	打製石斧	局部磨製石斧	合計
火山岩類									
黒曜石		4	1		1				6
無斑晶質安山岩		2							2
無斑晶ガラス質安山岩		2							2
凝灰岩				1					1
堆積岩類									
頁岩(古期)		1			1				2
珪質頁岩		2							2
チャート	3	6		1	3				13
変成岩類									
堇青石ホルンフェルス								1	1
ホルンフェルス							1		1
鉱物									
石英						1			1
玉髄		1							1
合計	3	18	1	2	5	1	1	1	32

点、シルト岩1点、チャート20点、変成岩類として、白雲母石英片岩1点、砂岩ホルンフェルス1点、堇青石ホルンフェルス1点、粘板岩1点が、鑑定された。弥生～古墳時代前期・弥生時代以降出土石材は、火山岩類として、流紋岩2点、緻密質安山岩1点、火山碎屑岩類として、溶結凝灰岩(奥日光)1点、スコリア質凝灰岩2点、凝灰質砂岩5点、堆積岩類として、頁岩(古期)2点、変質岩類として、蛇紋岩21点、鉱物として、ネフライト1点、滑石19点、その他に、琥珀17点、団塊(酸化鉄)1点が、鑑定された。古墳時代後期以降出土石材は、火山碎屑岩類として、凝灰岩1点、堆積岩類として、頁岩3点、チャート3点、変成岩類として、堇青石ホルンフェルス1点、ホルンフェルス1点、変質岩類として、緑色岩2点、変質凝灰岩8点、変質流紋岩2点、蛇紋岩12点、鉱物として、石英1点、玉髓22点、赤玉1点、瑪瑙1点、碧玉1点、翡翠1点、滑石6点、その他として、琥珀41点が鑑定された。

#### 4. 考察

縄文時代出土の石材と、弥生時代～古墳時代前期・古墳時代後期以降出土の石材とでは、使用される石材が明瞭に異なっている。本項では、縄文時代出土(古墳墳丘内出土を含む)と弥生時代～古墳時代後期以降出土において推定産地の検討を進めたい。なお、以下の地質の記述は、日本の地質3「関東地方」(日本の地質「関東地方」編集委員会,1986)にしたがう。

##### 1) 縄文時代(古墳墳丘内出土を含む)

縄文時代および古墳墳丘内出土の縄文時代の器種について概観すると、石鏃、剥片などの剥片石器と、砥石、磨石、石斧などの礫石器では使用される石材が異なっている(表6、表7)。おもに使用される石材や、その産地について、剥片石器類と礫石器類に分けて考察する。

石鏃、剥片および楔状石器などの剥片石器類には、黒曜石、無斑晶ガラス質安山岩、チャートがおもに使用されている。黒曜石や無斑晶ガラス質安山岩は、市原市において産出は知られておらず、搬入石材と考えられる。黒曜石の関東近縁における産地としては、神奈川県箱根地区、栃木県高原山、長野県和田峠～星ヶ塔、東京都神津島などが知られている。黒曜石については、含まれる微量元素分析による産地判定が望まれる。無斑晶ガラス質安山岩は、風化により象の肌状を呈し、極めて微量の斜長石斑晶や、その脱落孔が観察される(図版1-1)。無斑晶ガラス質安山岩は、群馬県下の武尊山、群馬-長野県境の八風山に産地が知られており、搬入石材と考えられる。チャートは、石鏃のほか、調整剥片、尖頭器、

表6. 縄文時代(古墳墳丘内)出土石材組成

器種	器種					合計
	剥片	砥石	磨石	敲石	不明	
石材						
深成岩類						
片状黒雲母角閃石花崗閃緑岩	1					1
火山岩類						
黒曜石	1					1
流紋岩		2			5	7
輝石安山岩(新第三紀)			1			1
輝石安山岩(第四紀)				1		1
無斑晶ガラス質安山岩	5					5
無斑晶質安山岩	3					3
玄武岩					1	1
火山碎屑岩類						
石英斑岩(奥日光)			1			1
堆積岩類						
砂岩(古期)		1		1		2
泥質砂岩(古期)			1			1
頁岩(古期)	5				1	6
シルト岩					1	1
チャート	20					20
変成岩類						
白雲母石英片岩	1					1
砂岩ホルンフェルス					1	1
堇青石ホルンフェルス	1					1
粘板岩					1	1
合計	37	3	3	2	10	55

楔状石器といった器種にも使用が認められる。チャートは、足尾帯に由来する石材と考えられる。足尾帯は、ペルム紀～ジュラ紀の砂岩および頁岩などからなり、各所にブロック～レンズ状にチャートの岩体を伴っている。足尾帯は、利根川水系の渡良瀬川流域の足尾山地を広く占めている。チャートは堅硬質であるため、下流域において採取可能である。

一方、砥石、磨石、敲石、打製石斧、局部磨製石斧などの礫石器は、流紋岩、輝石安山岩、石英斑岩(奥日光)、砂岩(古期)、堇青石ホルンフェルスがおもに使用されている。砥石に使用されている流紋岩は、斑晶が少ない岩相を示す。流紋岩は、市原市周辺では産地が認められない石材であるが、宇都宮市周辺の鬼怒川流域に新第三系の流紋岩類の分布が知られている。産地近傍で採取され、当遺跡に搬入された石材と考えられる。磨石に使用されている輝石安山岩(新第三紀)は、利根川水系の思川が流下する鹿沼市周辺に分布している。石英斑岩(奥日光)は、算盤玉状の石英斑晶が散在する岩相を示し、鬼怒川上流域に分布する奥日光流紋岩類に由来する石材と考えられる。敲石に使用されている砂岩(古期)は、堅硬緻密質である(図版1-2)。この岩相から、剥片に使用されているチャートと同様に、足尾帯に由来するとみられる。輝石安山岩、石英斑岩(奥日光)および砂岩(古期)は、硬質であるために、下流域において採取可能である。局部磨製石斧に使用されている堇青石ホルンフェルスは、一般に泥岩などの堆積岩類が、地下で花崗岩類の併入を受けて生じた変成岩で、関東地域では、渡良瀬川上流域の沢入花崗閃緑岩類の周囲や、多摩川・荒川源流域の甲府花崗岩体の周囲に分布が知られている。河床礫としては渡良瀬川流域において多く含まれる傾向がある。堇青石ホルンフェルスの表面に点在する堇青石は粘土鉱物化していることが多く、風化に対して弱く、溶脱して橙色の点紋が観察される(図版1-3)。

## 2) 弥生時代～古墳時代後期以降

弥生・古墳時代および古墳時代後期以降の主な石製品は、石製白玉、石製丸玉、石製勾玉、管玉、琥珀管玉、琥珀玉などである。これらの器種に使用されている石材は、玉髓、蛇紋岩、滑石、琥珀が主体である。

玉髓は、石製勾玉に使用されている。石英の微細な粒子から構成される鉱物で、帯状、縞状、同心円状を示すものは瑪瑙と呼ばれる(図版1-4)。産地の特定は難しいが、至近では栃木県日光市から宇都宮市北部にかけて流下する鬼怒川流域に新第三系の流紋岩溶岩・同質火砕岩が分布しており、当地域において産出する石材を採取した可能性がある。

蛇紋岩および滑石は、石製丸玉、石製白玉、石製勾玉に使用される。至近にある蛇紋岩の産地としては、埼玉県および群馬県下に分布する三波川変成岩類の岩体に点在して認められる。滑石は、緑色～褐色を示し、脂感に富む(図版1-5)。国内における滑石は、蛇紋岩分布地帯に産し、蛇紋岩が変質して生成された。したがって、蛇紋岩が産する上述の地域より持ち込まれたと考えられる。関東地域の滑石の産地としては、茨城県常陸太田地区や群馬県多野地区～甘楽地区、埼玉県長瀨～皆野地区など

表7. 弥生・古墳時代出土玉類石材組成

器種 石材	器種																不明	合計
	砥石	石錘	転用石錘?	有孔円盤	垂飾品	炉壁のかけら?	石製白玉	石製管玉	石製丸玉	石製玉	石製勾玉	琥珀	琥珀白玉	琥珀管玉	琥珀玉	琥珀勾玉		
火山岩類																		
流紋岩	1		1															2
緻密質安山岩																	1	1
火山碎屑岩類																		
溶結凝灰岩(奥日光)																	1	1
スコリア質凝灰岩						1											1	2
凝灰質砂岩																	5	5
堆積岩類																		
頁岩(古期)		1		1														2
変質岩類																		
蛇紋岩							6		11		4							21
鉱物																		
ネフライト					1													1
滑石							2	4	3	4	5						1	19
その他																		
琥珀											5	1	4	5	1	1		17
団塊(酸化鉄)																	1	1
合計	1	1	1	1	1	1	8	4	14	4	9	5	1	4	5	1	10	72

が知られている。琥珀は、樹脂の化石である。今回鑑定したもので、新鮮な琥珀は、赤褐色で透光性を有しているが(図版1-6)、観察したものの大部分は、表面が黄土色を呈して透光性を示さなくなったり、不規則なクラックを生じて小片になっている。まれに、黒色で頁岩に類似した様相を呈するものもある。琥珀の代表的な産地としては、岩手県久慈地方が挙げられる。このほか、千葉県銚子、岐阜県瑞浪などで産出が知られており、当遺跡からみて近隣の産地である千葉県銚子からの搬入品と考えられる。

また、石製丸玉に使用されている翡翠は、淡緑色の色調を呈し、肉眼では粒子が判別できないほどキメが細かい。翡翠は、新潟県糸魚川・青海地方が主な産地となっており、新潟県下のほかに、富山県、長崎県、兵庫県、愛知県下にも産するが、新潟県下で産出したものが、当時広く流通しているようである。翡翠に類似する鉱物としてネフライトがあり、肉眼ではしばしば両者の識別が困難であるため、蛍光X線分析やX線回折分析などの成分分析による確認が望まれる。



表8. 古墳時代後期以降出土玉類石材組成

器種 石材	小石	小石?	石(礫)	管玉	石製白玉	石製管玉	石製丸玉	石製玉	石製玉?	石製勾玉	石製勾玉?	石製切子玉	琥珀管玉	琥珀玉	琥珀玉?	合計
火山碎屑岩類																
凝灰岩								1								1
堆積岩類																
頁岩		1			1				1							3
チャート	1		2													3
変成岩類																
堇青石ホルンフェルス			1													1
ホルンフェルス			1													1
変質岩類																
緑色岩				1						1						2
変質凝灰岩						1		7								8
変質流紋岩								1		1						2
蛇紋岩					3		7	1		1						12
鉱物																
石英												1				1
玉髓										22						22
赤玉									1							1
瑪瑙										1						1
碧玉						1										1
翡翠							1									1
滑石					2			3			1					6
その他																
琥珀				29				2	1				2	6	1	41
合計	1	1	4	30	6	2	8	15	3	26	1	1	2	6	1	107

引用文献

五十嵐俊雄,2006,考古資料の岩石学.パリノ・サーヴェイ株式会社,194p

日本の地質「関東地方」編集委員会,1986,日本の地質3「関東地方」.共立出版,335p.

## 第4章 総括

### 第1節 諏訪台古墳群中における終末期方墳と律令制墳墓 (改葬系区画墓)の狭間

#### はじめに

諏訪台古墳群では、総数190基の後期以降の墳墓が調査され、内150基が終末期方墳とこれに連続する律令制墳墓(改葬系区画墓)であった。本報告書では、統括報告者の意もあり、便宜的に『千葉県発掘調査基準』における「古墳・塚」略号の「SM」記号を、後期以降の終末期方墳とこれに連続する方形基調の墳墓群についても与えて報告してきた。本来『千葉県発掘調査基準』に従うのであれば、所謂方形周溝状遺構については「SS」記号で対応すべきところではあるが、終末期方墳に連続する墳墓群については、特に房総では様々な論考が提出されており、所謂「方形周溝状遺構」という名称そのものが未決定の状況であるため、準拠に躊躇う。また、諏訪台古墳群中においても、その判別が困難な例が多々あり、敢えて「SM」記号で統一してきた。

ここでは、諏訪台古墳群における後期～終末期古墳を概観し、これに連続する律令制墳墓について纏めておきたい。

なお、房総における終末期方墳と律令制墳墓(改葬系区画墓)の概念については、既に纏めているので、今回は割愛させていただいた。(註1)

#### 1 前方後円墳

諏訪台古墳群では、合計7基の前方後円墳が検出されている。この内3基は当初から前方後円墳として築造されており、残る4基は円墳を改変した前方後円墳である。整理前、筆者は当初から前方後円墳として成立した墳墓は、少なくとも後期古墳の範疇に属するものと捉えていた。ところが、整理が進行するにしたがい、時期の判定が困難なSM1002を除けば、何れも検出須恵器などから7世紀末葉に位置づけられる前方後円墳の存在に愕然とした。なぜなら、これまでの通説では、7世紀代になると、次第に前方後円墳が消滅すると考えられていたからであり、7世紀末葉段階で成立する前方後円墳の存在はあり得ないとされていたからである。

次に円墳改変の前方後円墳を見てみると、SM1004がTK-217形式古段階での円墳から前方後円墳への改変が認められ、7世紀第2四半世紀末葉の年代観が想定される。SM1005では円墳から前方後円墳への改変期が、第1主体部を削平した第2主体部構築時と判断され、墓壙上部に供献された平瓶とフラスコ瓶から、7世紀末葉の年代観が想定された。SM1006では最終段階の遺物が7世紀末葉に、SM1007では、円墳段階がTK-43形式期、TK-217形式古段階～新段階への移行期に円墳から前方後円墳への改変が認められ、その改変期は7世紀第2四半世紀末葉～3四半世紀の年代観が想定される。

以上の結果から、諏訪台古墳群における前方後円墳は、7世紀第2四半期末葉頃から、まず円墳改変の前方後円墳として出現し、7世紀末葉まで存在した墳形であることが確認される。

#### 2 終末期前方後方墳

諏訪台古墳群では、合計6基の終末期前方後円墳が検出されている。この内3基は当初から前方後方

墳として構築されており、残る3基は終末期方墳を改変した前方後方墳である。中でもSM1008・SM1009・SM1010は当初から前方後方墳として成立した終末期の前方後方墳であり、群中最大のSM1008はTK-217形式新段階からTK-46形式への移行期頃、即ち7世紀第3四半期後半、実年代では670年頃に位置づけられる。群中第2位のSM1009は、出土遺物が少ないながら、須恵器広口長頸壺と須恵器長頸壺が認められ、8世紀初頭頃の年代観が想定される。群中第3位のSM1010からは、極めて多量の遺物が検出されている。馬具や鉄鏟、楔状鉄器等SM1008との共通点が多い。検出須恵器からはTK-46形式併行期、実年代で670～80年代に想定される。SM1011～1013の3基の終末期方墳改変の前方後方墳からは、具体的時期判定は困難であるが、終末期方墳改変であることから、7世紀末葉から8世紀初頭までには収まるものと想定される。したがって、諏訪台古墳群中における後期以降の前方後方墳は、前方後円墳に遅れて成立しているものの、終末期には共存していると見てよからう。

### 3円墳

後期～終末期の円墳は、合計27基検出されている。測定可能な面積の最大はSM1014の296.1㎡で、最小はSM1034の33.0㎡である。後期から終末期の対象を外せば、円形墳墓は今回報告範囲からはSSの円形周溝が存在している。時期の判明する13基の円墳のうち、時期的には6世紀後葉～7世紀中葉までに集中する傾向があり、最新はSM1016の7世紀第4四半世紀に下る。これらのことから、諏訪台古墳群中における後期以降の円墳の存続時期は、6世紀後葉から7世紀末葉までの間と捉えることができる。なお、8世紀以降に下る円形周溝の存在は確認できなかった。

### 4終末期方墳

諏訪台古墳群では、合計150基の終末期方墳と、これに連続する律令制墳墓（改葬系区画墓）を検出している。この内、埋葬施設未検出の墳墓は71基存在するが、面積測定不能や一辺6m以下の墳墓が46基と大多数を占め、一辺10m、面積で100㎡以上が10基、一辺6.1m、面積で37㎡以上、一辺10m未満が15基を占めている。

一方、埋葬施設の検出された遺構は合計79基に上り、この内、主たる埋葬施設が木棺直葬土壙例は56例あり、埋葬施設の検出された墳墓の70%強は木棺直葬例であった。また、仰臥伸展葬可能な主たる埋葬施設が土壙墓の10例を加えると、66例が仰臥伸展葬と想定され、実に埋葬施設の存在する墳墓の83%強が仰臥伸展葬で葬られている。このことは、諏訪台古墳群における終末期方墳の葬法の主体は、木棺直葬を主体とする仰臥伸展葬であることを物語っている。

諏訪台古墳群中最大の終末期方墳は、一辺27.45m級のSM1041で、その周溝内径面積は757.50㎡であり、最少は、一辺6.65m級のSM1127で、その周溝内径面積は43.70㎡である。いずれも仰臥伸展葬可能な木棺直葬の埋葬施設を採用しており、規模の大小だけでは両者を分別できない。更に、仰臥伸展葬可能な土壙墓を埋葬施設として採用する遺構まで繰り下げると、その最少は一辺6m級のSM1136で、その周溝内径面積は(36.50)㎡まで繰り下がる。いずれにしても、諏訪台古墳群における終末期方墳においては、一辺6m前後、面積で36㎡程度が仰臥伸展葬可能墳墓としての限界のようである。(註2)

諏訪台古墳群におけるこれらの現象を概観すると、筆者がかつて指摘した通り、方墳の小型化するものに対して、仰臥伸展葬可能な地山掘り込み墓壙の埋葬施設が検出される傾向が認められる。この

ことは、方墳の方台部内面積と仰臥伸展葬可能な地山掘り込み墓壙の構築面積関係に凝縮されていると考える。即ち、物理的に高墳丘たる十分な盛土を確保できない方台部面積小規模古墳が、地山掘り込み墓壙を採用する裏付けとなり、逆に、物理的に高墳丘たる十分な盛土を構築できる比較的大規模な方台部面積の古墳は、地山掘り込み墓壙を採用しなくとも、盛土内や旧表土層中に埋葬施設の棺底を保持していた可能性が極めて高くなる傾向があると見てよからう。

こう考えると一辺6m以上で、且つ方台部内面積が36㎡以上の墳墓は、全て盛土内に存在した埋葬施設を流出した古墳と捉えがちであるが、決してそうではない。筆者がかつて指摘したように、一辺8m級の埋葬施設未検出の所謂方形周溝状遺構では、盛土内での仰臥伸展葬可能な墓壙構築自体が困難であり、寧ろ低墳丘の中に納まりうる小規模埋葬施設を採用していた可能性が極めて高いことや、一辺5m級では、当初から盛土内に仰臥伸展葬可能な墓壙を構築することは不可能である事例が如実に物語っていると見えよう。(註3)

諏訪台古墳群中では、埋葬施設が特殊なSM1041を除いて、一辺16m、面積で250㎡前後が一つの基準となる。即ちこれ以上の墳丘規模の方墳が棺底を盛土内に収める傾向があるのに対して、これ以下の墳丘規模の方墳では、木棺直葬地山掘り込み墓壙を採用する傾向が認められる。ただし、一辺14m、面積で200㎡前後の墳墓群に埋葬施設未検出の傾向が認められるが、それらの遺構は、全て調査段階で既に後世の耕作等によって盛土を喪失した墳墓と捉えられるものであり、現在地山掘り込み墓壙が検出されなかったと言って、かつて盛土中に存在した当初からの埋葬施設が存在しなかったと言いきれる遺構ではないことを申し上げておきたい。また一辺8m前後の墳墓では、地山掘り込みの木棺直葬土壌の採用が多いことから、これらは方墳として捉えることができる。しかし、類似する墳丘規模を保持しながらも埋葬施設が未検出な墳墓の中には、諏訪台古墳群に限らず房総に展開する終末期方墳に連続する墳墓群を見たとき、意識的に仰臥伸展葬の地山掘り込み墓壙の採用を放棄したとの想定可能な墳墓も存在している。これらの墳墓は、必然的に低墳丘の中に納まりうる小規模埋葬施設を採用した改葬系の区画墓、即ち律令制墳墓と判断せざるを得ないであろう。(註4) また、一辺10mを超える比較的大規模な地山掘り込み墓壙の埋葬施設未検出墳墓は、物理的にも高墳丘が保持可能であり、盛土内に仰臥伸展葬の棺底を置くことが不可能ではないことなどからも、古墳の範疇に属する可能性が高くなっていくのである。(註5)

時期的には7世紀後葉～末葉および8世紀初頭に検出遺物が集中しており、以下8世紀第2四半世紀から9世紀代まで細々と継続し、中でも、SM1116周溝内検出の9世紀前半代の在地産須恵器甕が最新のものである(註6)。なお、国分寺台地区の御林跡遺跡(註7)や台遺跡(註8)、北野原遺跡(註9)で確認された終末期方墳の埋葬施設に地下式横穴墓が採用された例は、この諏訪台古墳群中においては1例も認められなかったことを申し加えておきたい。

### 5 終末期古墳に連続する律令制墳墓

一方、埋葬施設は存在するものの、仰臥伸展葬が完全に不可能な地下式小型横穴・小土壙などを採用する例は、諏訪台古墳群中では17例に過ぎず、この内時期の判明する例は8例しか存在していない。しかし、これらの律令制墳墓は、意識的にこれまでの木棺直葬等の仰臥伸展葬を放棄し、新たな埋葬施設の採用へと推移していることは改葬・火葬骨を検出するSM1083・SM1134・SM1169例などからも明白である。

筆者は、弥生時代から古墳時代へと連綿と連なるこれまでの埋葬法である仰臥伸展葬を意識的に放棄し、新たに火葬・改葬の採用へと推移した終末期古墳に連続する墳墓を、従来の古墳や所謂方形周溝状遺構という名称から分離し、これを「改葬系区画墓」と命名し研究課題の1つとしてきた。そして、少なくとも房総においては、国府成立期としての8世紀初頭を境に、次第に仰臥伸展葬の終末期古墳が消滅し、何らかの規制の下、火葬・改葬を主体とする改葬系区画墓へと変遷していく様相が、国府域の外郭である外迎山遺跡や上原台遺跡などにおいて確認されるに至っている。近年では、国分寺台地区の整理作業進捗の結果、国府域と想定される地域では、8世紀初頭を大きく下らない事例も確認され、これまでの「改葬系区画墓」を、律令制施行期に成立する新たな墓制として「律令制墳墓」と読み替えて論考してきた経緯がある。(註10)

これら一連の研究の中で、改葬骨ないしは火葬骨を検出する改葬系区画墓（律令制墳墓）は、方墳に比べ規模的にも小型化し、小規模低墳丘の中に納まり得る、地下式小型横穴・木炭小土壙・粘土小土壙等を埋葬施設として新たに採用していることに注目してきた。つまり、当域の小規模低墳丘の終末期方墳では、埋葬施設として仰臥伸展葬の地山掘り込み木棺直葬墓壙を堅持する傾向が認められるのに対し、律令制墳墓では、改葬や火葬を採用することによって、小規模低墳丘の中に納まり得る、小型埋葬施設の採用へと推移している傾向が認められるところに大きな意義を見出している。

諏訪台古墳群中では、この律令制墳墓の開始期が、時期の判明するものでは8世紀第2須半世紀には認めることができ、以後9世紀代に至るまで終末期方墳と共存する墳墓であることが確認されている。即ち、諏訪台古墳群のような一大墓域において、律令制開始以後には、仰臥伸展葬と火葬を含む改葬の両者は、一時期混在して共存していたのであり、墳墓築造に伴う葬法上の規制は、上総国府域では律令制開始以降に確実に存在していたと言い切れるものではなかった。ただし、第表に示したとおり、時期の判明する終末期方墳の内、具体的には7世紀末葉から8世紀初頭にかけての一時期に、駆け込み状態で20例と爆発的に増加する傾向は異常としか映らない。またこの傾向は、前方後円墳の築造でさえこの時期に集中する傾向と併せ、国府域における一大造墓地の、異常なまでの造墓活動と捉えることができると同時に、以後、当地における前方後円墳の確実なる消滅という結果をもたらしている。

この異常な造墓活動のピークを過ぎた8世紀第2四半世紀には、古墳の築造自体が大きく減少する傾向も見逃すことができない。即ち、終末期方墳ですら4半世紀に1基程度の造墓に停滞し、入れ替わるように、規模の著しく縮小した埋葬施設未検出の所謂方形周溝状遺構（改葬系区画墓）や律令制墳墓が台頭し始めてくる。この異常な造墓活動の要因として、迫りくる上総国府域での律令制開始に伴う造墓規制の存在と捉えることが妥当と判断されよう。また、この8世紀初頭を境に、規模を著しく縮小した律令制墳墓が増加する傾向が認められることから、国府域に立地する諏訪台古墳群における、律令制度開始直前の7世紀末葉から8世紀初頭に駆け込み的に増加する終末期古墳の存在は、現在の消費税増税期の駆け込み的需要的増加と同様、8世紀初頭段階に、何らかの律令的造墓規制が、この上総国府域に確実に存在していた背景が想定されよう。

## おわりに

諏訪台古墳群では時期の具体的に判明する古墳の内、7世紀末葉から8世紀初頭にかけての時期に、古墳築造件数が駆け込み的に増加する傾向を如実に認めることができる。この現象が物語っているのは、律令施行に伴う造墓活動の規制、換言すれば、これまでの自由奔放な古墳の築造ができなくなる

という実情が存在したことを意味している。

その法令の詳細までは定かではないが、少なくとも、仰臥伸展葬の古墳は確実に終止符を打ち始め、代わりに律令制に則った墓制墳墓が出現し、従来の古墳を凌駕してゆく。これこそが筆者の言う「律令制墳墓」であり、終末期古墳と律令制墳墓の狭間には、律令体制における造墓規制が確実に存在していたことを物語っていると言えよう。

#### 註および引用参考文献

- 註1 木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター1987  
木對和紀「房総における改葬系区画墓の出現期Ⅰ」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』1987  
木對和紀「房総における改葬系区画墓の出現期Ⅱ」『生産の考古学』同成社1997  
木對和紀「Ⅳ 台遺跡における律令制墳墓の形態」『市原市台遺跡C地点』市原市教育委員会2010
- 註2 千田幸夫『吉岡遺跡群』四街道市吉岡遺跡調査会1986  
ただし、県内における木棺直葬方墳の最小例は、羽根戸遺跡における5.06×5.00m（25㎡）が現在のところ最小規模である。
- 註3 木對和紀「房総における改葬系区画墓の出現期Ⅰ」『市原市文化財センター研究紀要Ⅰ』1987
- 註4 木對和紀「Ⅳ 台遺跡における律令制墳墓の形態」『市原市台遺跡C地点』市原市教育委員会2010  
これら仰臥伸展葬可能な地山掘込墓壙を採用しない小規模低墳丘墳墓の中には、須恵器短頸壺などを検出する例も多く、間接的に本来の埋葬施設が火葬系の小土壙を髣髴させる。
- 註5 木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター1987  
外迎山遺跡では、11号遺構の一边12.75m、面積で162.3㎡が木棺直葬の方墳、12号遺構の一边11.5m、面積で122.0㎡が粘土小土壙の改葬系区画墓であり、一边10m以上であるからと言って必ずしも古墳と断言できない遺構もある。
- 註6 9世紀前半代の在地産須恵器甕を検出したSM1116は、地山掘り込みの木棺直葬土壙を中心的埋葬施設に保持するが、遺物自体は周溝内のピット脇で且つ土壙墓の付近でもあるため、確実に本墳に伴う遺物とは断言しがたい。仮にピットに伴う遺物であれば、木棺直葬の当墳に伴う遺物ではなく、単独の蔵骨器等の可能性が否定できない。類似する遺物を伴うSM1158は、埋葬施設こそ未検出であるが、土師器坏を伴っており、在地産須恵器甕と併せて蔵骨器と想定され、当遺構が律令制墳墓であることを間接的に物語っている。
- 註7 木對和紀『市原市御林跡遺跡Ⅱ』市原市教育委員会2008
- 註8 木對和紀『市原市台遺跡C地点』市原市教育委員会2010
- 註9 小川浩一『市原市北野原遺跡』（財）市原市文化財センター2000
- 註10 木對和紀「台遺跡における律令制墳墓の形態」『市原市台遺跡C地点』市原市教育委員会2010

## 第2節 遺構の変遷

### はじめに

諏訪台古墳群・天神台遺跡では先に述べたように、計13地区146,890㎡を発掘調査し、その結果、縄文時代早期末から前期前葉の集落や地点貝塚や、遺跡北側に展開する弥生時代中期後半から古墳時代前期とされる集落跡、古墳群中に突然出現する平安時代とみられる竪穴建物跡と掘立柱建物群、14世紀後半から15世紀とみられる中世土壙群、そして本報告収録の弥生時代中後半から古墳時代前期、古墳時代後期末から9世紀代にいたる墳墓群など各時代の遺構が検出されている。

ここでは、本報告で扱った墳墓・土壙について段階を設定し、その変遷を検討する。その中で特記すべき遺構、遺物については項を設けて検討を加えているが、網羅的では無い。また、古墳時代後期以降の変遷については、本章第1節で木對が総括しているため、本来的には本節で扱うべきではないが、弥生時代中期から古墳時代前期までの墳墓の変遷に対し、分析の視点が大きく異なっているため、重複部分が生じるがその一部を検討範囲とし、これ以外の部分については第1節に譲ることとする。

### 1 墳墓

まず、本報告で扱う遺構の段階を設定する。区分は基本的に土器の地域編年（大村2009など）によるが、古墳時代後期以降は鉄鍬による編年（白井1992）および土器の広域編年で補完している。対象は検出した墳墓すべてである310基（SS119基、SM190基、SX1基）とし、これを段階に分けた。このうち出土遺物が無く、帰属時期が推定の域をでない遺構は時期不明として除いたが、列状配置をとる方形周溝墓など、周辺状況から時期の限定可能な遺構は集計に加えた。方形周溝墓の平面形態の分類は伊藤氏の基準に従っている（伊藤1996）。

諏訪台1期	宮ノ台式
諏訪台2a期	久ヶ原式（1式～2式古段階） ※変遷図（諏訪台1期）は、配置上2期に下る可能性があるものを含む。
諏訪台2b期	山田橋式（1式）
諏訪台2c期	山田橋式（2式） ※図示していない
諏訪台3a期	中台1式
諏訪台3b期	中台2式
諏訪台4a期	草刈1式
諏訪台4b期	草刈2式
諏訪台4c期	草刈3式
諏訪台5期	
諏訪台6期	TK43-209段階、生実・椎名崎Ⅱ・Ⅲ古期
諏訪台7期	TK217古段階、生実・椎名崎Ⅲ新～Ⅳ新期
諏訪台8期	TK217新段階－TK46段階、生実・椎名崎Ⅳ新～Ⅴ期
諏訪台9期	7世紀末～8世紀初頭、生実・椎名崎Ⅵ期

諏訪台10期	8世紀
諏訪台11期	9世紀

以下の記述中の計測値は、面積aが方台部・墳丘部裾上端、面積bが周溝外側上端を、主軸長c1が方台部・墳丘部上端間、主軸長a1が周溝外側上端間を表している。また、(数字)は復元値である。

**諏訪台1期 (Fig.636)** 本期は宮ノ台式段階に対応する。この段階の墳墓は16基である。

SS11、SS22～SS26、SS30～SS32、SS34、SS37、SS44、SS56、SS59、SS64、SS76

この他に確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが42基認められる。よって、推定のもを含めると、この段階の墳墓は最大58基となる。

墳墓形態は、16基の内15基がA1類とされる四隅陸橋型で、いわゆる典型的な方形周溝墓が主体となる。A2類としたSS76についても、調査区境界に近いことや、立地が斜面地であることを考慮すると、A1類に含まれる可能性が残る。主体部の検出は2基で、位置は方台部に位置するが、この段階においてのみ、周溝内に組合せ式の土器棺埋葬が確認されている(SS30、SS31、SS37、SS64、(SS76))。遺構規模は、最大がSS56で、面積(a=161.1m<sup>2</sup>/b=211.1m<sup>2</sup>)、主軸長c1=13.44m/a1=14.66mを測る。最小はSS11で、(a=53.7/b=74.5m<sup>2</sup>)、主軸長c=17.46m/a1=9.52mである。

この段階の遺構分布は、大きく2群に分かれる。ひとつは台地最高位付近から北斜面に展開する一群。もうひとつは南斜面に1基のみ築造されている。2群に共通して、この段階以前の遺構は皆無であることから、造墓を契機として新規に開発された区域といえる。この2群における被葬者の出自が異なるのかは想像の域は出ないが、何れの群についても造営主体となる集落は確認されていない。

**諏訪台2a期 (Fig.636)** 本期は久ヶ原式段階に対応する。久ヶ原2式期新段階の墳墓は認められないが、遺物の無い墳墓が多いため現状では空白期とは断定しない。この段階の墳墓は4基である。

SS27・SS78・SS89・SS92

この他に確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが9基認められる(SS20・SS21・SS28・SS29・SS35・SS77・SS79・SS81・SS91)。よって、不確定なものを含めるとこの時期の墳墓は最大13基となる。

墳墓形態は、4基の内2基が前段階から続くA1類である。ただしD2類としたSS92も、調査区境界に近いことや、立地が斜面地であることを考慮するとA1類に含まれる可能性が残る。平面形態では大きな変化が無いが、主体部の検出は3基で、検出率では前段階に比べ高くなる。位置は方台部に限定され、SS78で組合せ式木棺が検出されている。SS78では周溝内から大型壺が出土している。

遺構規模は、最大がSS89で、面積(a=188.1m<sup>2</sup>/b=258.5m<sup>2</sup>)、主軸長c1=13.92m/(a1=16.64m)を測る。最小はSS27で、(a=114.9/b=160.6m<sup>2</sup>)、主軸長c1=10.92m/a1=13.48mである。前段階より規模が大きくなり、僅かに平均化される。また、SS89では、主体部から162個のガラス小玉が出土し、突出した内容を有する。この時期の遺構分布は、前段階に続き大きく2群に分かれる。北斜面に展開する一群では、列状を形成するものの、主軸方向と列方向が前段階とは異なる。南斜面の一群でも同様に前段階とは主軸方向を変えて並ぶ。おそらく、この時期から台地北側で集落の展開が開始される。よって、集落と墓域は明確に分離されて位置している。

**諏訪台2b期 (Fig. 636)** 本期は山田橋1式段階に対応する。この段階の墳墓は7基である。



## SS13～SS19

墳墓形態は、前段階から大きく変化を見せる。前段階から続くA1類は1基にとどまり、3本の直線周溝で一辺の周溝を欠くA2類（SS14）、「コ」字形周溝に直線の周溝が付くB1類（SS13）、「く」字形周溝に2本の直線周溝が付くB2類（SS15）、1隅が断絶するC1類（SS19）、全周するD1類（SS16・SS17）などが認められる。平面形態は多様性とD1類の出現が本期を特徴づける。主体部の検出は全ての墳墓で認められ、SS15、SS16では複数基認められている。主体部の検出率では、前段階からの傾向が強まっている。位置は方台部が主であるが、SS16では方台部裾に位置する。

遺構規模は、最大がSS17で、面積（ $a=134.2\text{m}^2/b=180.8\text{m}^2$ ）、主軸長（ $c_1=12.20\text{m}$ ） / （ $a_1=14.40\text{m}$ ）を測る。最小はSS16で、（ $a=41.9/b=60.4\text{m}^2$ ）、主軸長（ $c_1=6.92\text{m}$ ） / （ $a_1=8.24\text{m}$ ）である。前段階と比べ最大規模は大きく変わらないが、平均規模は小さくなる。SS13・15では底部に焼成後穿孔がみられる壺形土器が出土している。この時期の分布は、前段階に続き大きく2群に分かれる。北斜面に展開する一群では、列状を形成するものの、主軸方向と列方向が前段階とは異なる。南斜面の一群でも同様に前段階とは主軸方向を変えて並ぶ。墳墓の分布は前段階と変わらず2群に分かれるが、大きな変化は、より居住域に近付いている傾向があることで、これまで南斜面に展開した1群は途絶え、代わりに北方の北斜面で新規に展開する。

**諏訪台2c期** 本期は土器編年上の山田橋2式段階に対応するが、該当する墳墓は認められていない。ただし、土器を伴わない墳墓の中に、該期に含まれるものが存在する可能性はあり、現在整理中の集落部分の成果によって影響を受ける。

**諏訪台3a期 (Fig.637)** 本期は中台1式段階に対応する。この段階の墳墓は1基である。

## SS87

この他に、確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが4基認められる（SS85・SS86・SS88・SS93）。よって、推定を含めるとこの時期の墳墓は最大5基となる。

この段階では良好な形態を保つ墳墓が少なく、遺構形態に推定を含む。伝統的とも言えるA1類は皆無となり、「コ」字形周溝に直線の周溝が付くB1類（SS87）、推定を含むが「く」字形周溝に2本の直線周溝が付くB2類（SS86・SS88）が認められる。遺存状態の悪さと、遺構数が少ないことから平面形態は参考程度に見ておく。主体部は2b期とは大きく異なり、全く検出されていない。

遺構規模は、SS87が面積（ $a=184.7\text{m}^2/b=266.1\text{m}^2$ ）、主軸長（ $c_1=15.36\text{m}/a_1=18.60\text{m}$ ）を測り、前段階より大きくなる。SS13・15では底部に焼成後穿孔がの壺形土器が出土している。この時期の遺構分布は1群のみで、台地辺々部へ向かう。おそらく周溝を共有しているとみられる。

**諏訪台3b期 (Fig. 637)** 本期は中台2式段階に対応する。この段階の墳墓は14基である。

## SS1～SS10・SS94・SS12・SS117・SS119

この他に確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが6基認められる（SS83・SS107・SS108・SS109・SS116・SS118）。よって、推定を含めると、この時期の墳墓は最大20基となる。

墳墓形態は、周溝が全周するD1類が主となり、6基を数える（SS1、SS2、SS4、SS8、SS12、SS117）。ほかにA1類、B1類、B2類、対向する側辺部の周溝を欠くD3類などが認められる。特筆されるのは、前方後方形の墳墓の出現で、SS117→（SS118）→SS119の順序が想定でき、前方部の発達段階を追うことが可能である。また、明瞭な前方後方形をとるSS94をこの段階としたが、直口壺形土器1点は、

次の段階までの幅を待つ。主体部の検出率ではSS8、SS9で認められる以外は皆無であり、前段階より低い。位置は方台部に限られる。

遺構規模は、方形であるSS117が最大で、面積 $a=130.7\text{m}^2$  ( $b=216.7\text{m}^2$ )、主軸長 ( $c_1=12.30\text{m}$ ) / ( $a_1=15.80\text{m}$ ) を測る。最小はSS1で、 $a=54.1/b=89.8\text{m}^2$ 、主軸長 $c_1=7.52\text{m}/a_1=9.76\text{m}$ である。規模については大きな変化が無いように見える。この時期の分布は、前段階に台地縁辺部に進出した傾向が強まると同時に、集落周縁部に展開する。これまで大きく2群であったが、前段階から続く西辺部に加え、集落周縁部、新しく南西部の南斜面の3群となり、広く展開する。列状を意識するものの、主軸方向は画一的ではなく、周溝は共有しない傾向が強まっている。

**諏訪台4a期 (Fig. 637)** 本期は草刈1式段階に対応する。この段階の墳墓は6基である。

SS95～SS97、SS99、SS113、SS114

この他に確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが1基みとめられる (SS110)。よって、推定のものを含めるとこの時期の墳墓は最大7基となる。

墳墓形態は、前段階と同様の傾向が続き、周溝が全周するD1類(SS96、SS99、SS113)、ほかに前方部がハンマー形に発達した前方後方墳のSS97が出現する。SS95、SS99、SS114をこの段階としたが、次の段階までの幅を待つ。主体部の検出率は前段階と同様だが、SS113では帰属関係が判然としないものの、周溝外縁に沿ってSK250が位置する。

遺構規模は、方形であるSS99が最大で、面積 ( $a=141.8\text{m}^2/b=279.5\text{m}^2$ )、主軸長 ( $c_1=12.16\text{m}/a_1=17.52\text{m}$ ) を測る。最小はSS113で、( $a=47.3\text{m}^2/b=68.2\text{m}^2$ )、主軸長 ( $c_1=7.52\text{m}/a_1=9.76\text{m}$ ) である。規模については大きな変化を見ないが、僅かに墳丘面積 $a$ に対し周溝外周面積 $b$ の比率が高くなる傾向が看取される。この時期の分布は、前段階に台地縁辺部に進出した傾向が強まると同時に、集落周縁部に展開する。これまで大きく2群であったが、前段階から続く西辺部、南西部から、台地の頂に向けて集中する傾向が表れ、群としては1群に近い分布形態を示す。

土器では二重口縁壺形土器が安定的に組成に加わる。

**諏訪台4b期 (Fig. 637)** 本期は草刈2式段階に対応する。この段階の墳墓は6基である。

SS101・SS103・SS104・SS106・SS111・SS112

この他に、確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが1基認められる (SS102)。よって、推定のものを含めるとこの時期の墳墓は最大7基となる。

墳墓形態は、前段階とは様相が異なる。D1類(SS111)が減じ、方形を基調とはしているが、周溝の一部が断絶するC1類 (SS103)、E1類 (SS104、SS112) など、陸橋部の存在が顕著となる。SS111をこの段階としたが、次の段階までの幅を待つ。主体部の検出率は、圧倒的に高くなり、盛土中の埋葬が安定的にみられる。

遺構規模は、方形であるSS99が最大で、面積 $a=288.6\text{m}^2/b=457.5\text{m}^2$ 、主軸長 $c_1=19.36\text{m}/a_1=24.80\text{m}$ を測る。最小はSS111で、( $a=107.4\text{m}^2/b=193.7\text{m}^2$ )、主軸長 ( $c_1=10.28\text{m}/a_1=14.40\text{m}$ ) である。規模については大型化がピークを迎える。また、前段階に見られた墳丘面積 $a$ に対する周溝外周面積 $b$ の比率が高くなり、墳丘に対し周溝がより大きく造られていることが判る。この時期の分布は、前段階からの台地最高位に向けて集中する傾向が顕著となり、1群を形成する。また、立地はこれまでと異なり、養老川に面した南斜面側を意識する。

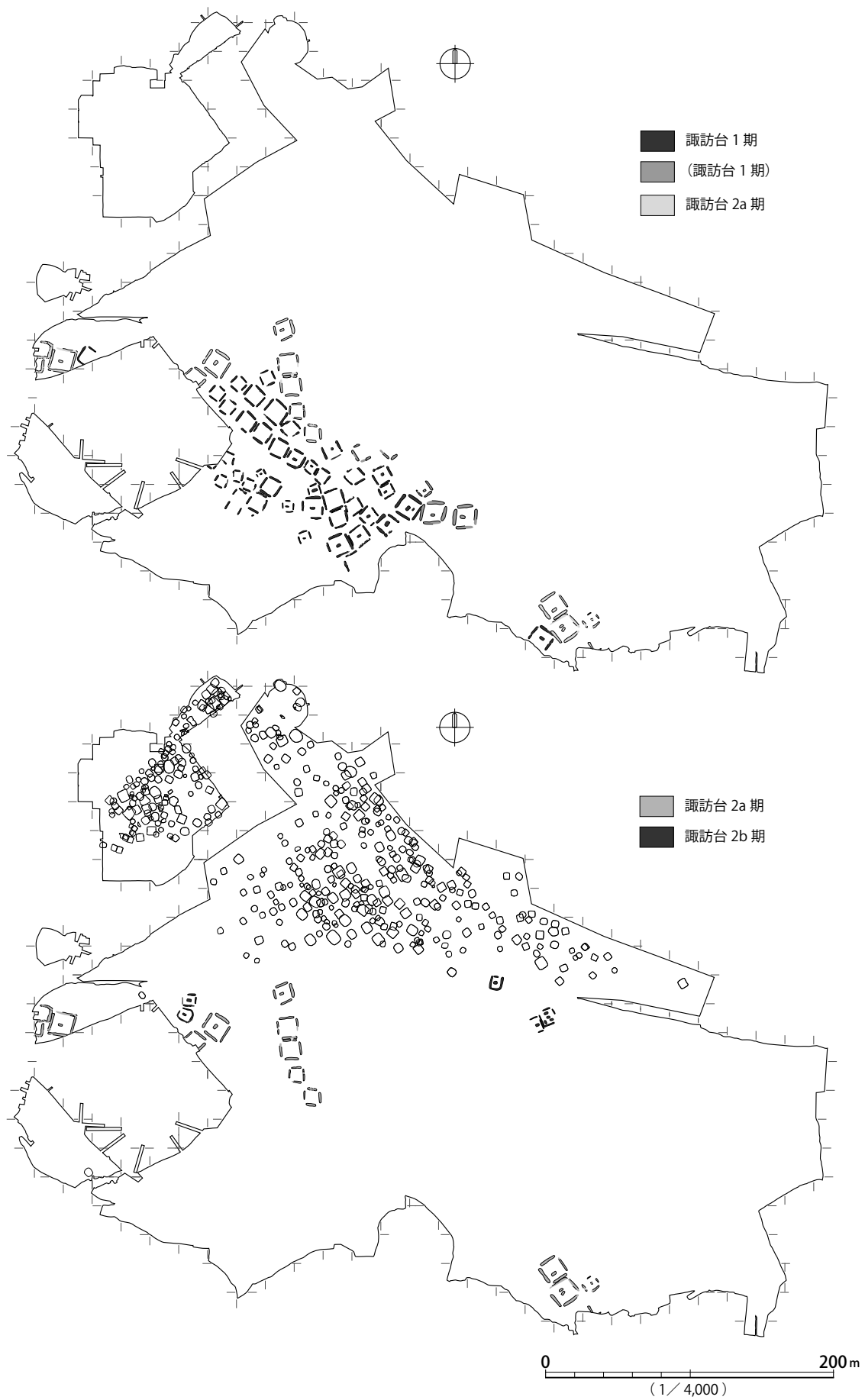


Fig.636 遺構変遷図 (1)

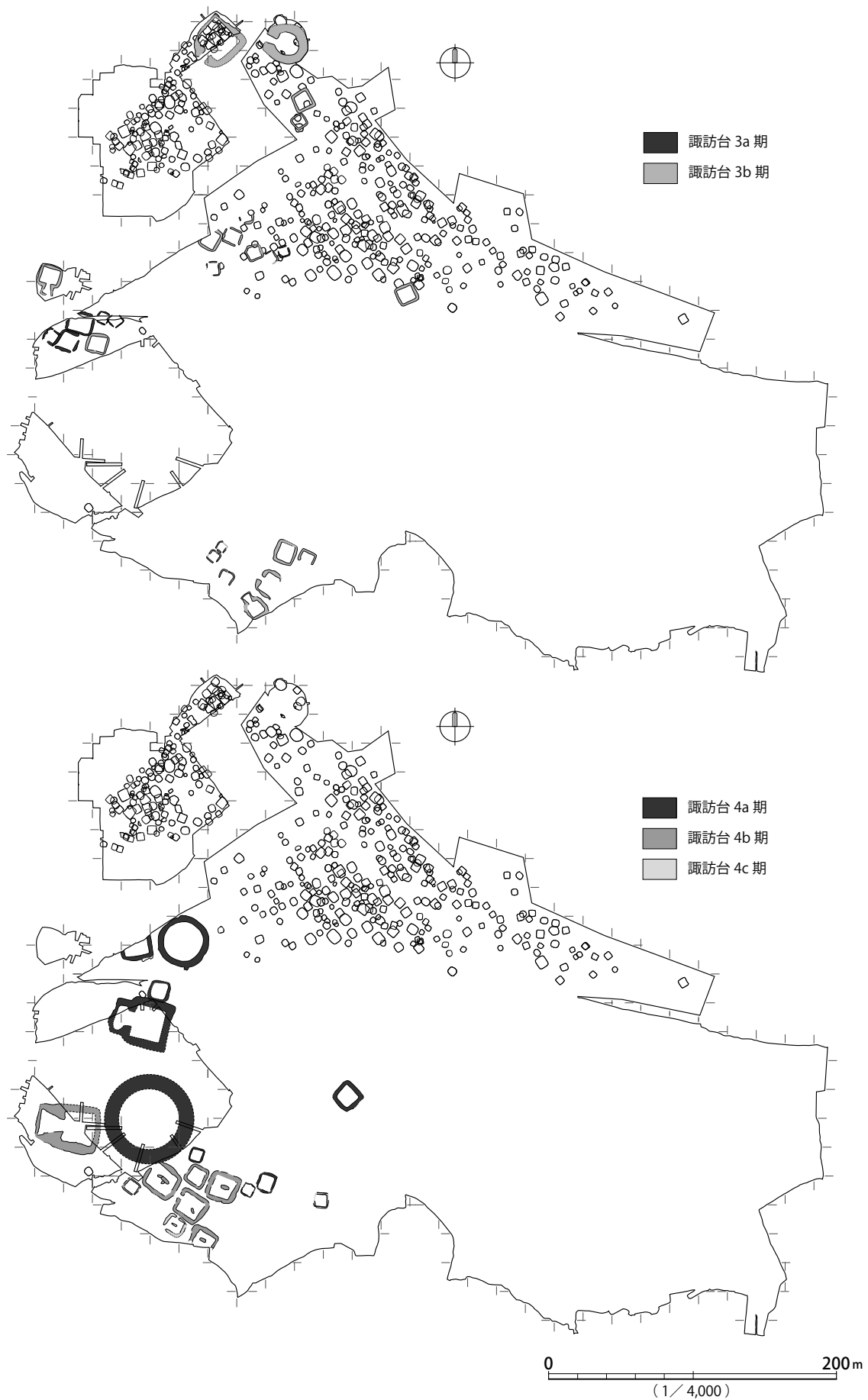


Fig.637 遺構変遷図 (2)

副葬される遺物は種類、量ともに豊富となり、盤龍鏡、剣、ガラス小玉などが認められる。

**諏訪台4c期 (Fig. 637)** 本期は草刈3式段階に対応する。この段階の墳墓は1基である。

SS105

この他に、確定的では無いが、この段階に含まれる可能性があるものが1基認められる (SS115)。よって、推定のもを含めるとこの時期の墳墓は最大2基となる。

墳墓形態は、周溝の一部が断絶するC1類 (SS103) である。

遺構規模は、面積 $a=106.3\text{m}^2/b=174.9\text{m}^2$ 、主軸長 $c=11.20\text{m}$  ( $a_1=15.44\text{m}$ ) を測る。規模については、小型化が顕著となり、前段階に見られた墳丘面積 $a$ に対する周溝外周面積 $b$ の比率については大きく変化しない。この時期の分布は、南斜面に前段階の墳墓を避けて下位に造られている。基数が激減し、この後の段階で造墓活動は明確に断絶する。集落と連動する動きであるのか注視される。

### 宮ノ台式期～久ヶ原式期

複数の列から成る。A群が最も遡る可能性がある。SS71は黒沢編年のB4期にあたる。

A群は、セ72地区のSS84に至る列状の配置となる可能性もあるが、現状は塊状でややまとまりに欠ける。

B群は、部分的に2列配置となっており、南東側はさらに分岐する。ただし、当初から複数列の配置が意図されていたかは不明。時期的には、SS30・31が黒沢編年のB5期、SS44列が黒沢編年のB6期にあたる。おそらく、A群とともに、台地上最も高所になるSS22～SS25が起点となって、南東方向に債列されたと考えられる。宮ノ台の方形周溝墓は、別にC群がある。配置上、B群に連続するようにも見えるが現状では連続しない。

久ヶ原式期の方形周溝墓は、SS37など宮ノ台式期から久ヶ原1式期の過渡期に遡るものがあり、おそらく宮ノ台式期と時期的に連続する。列状の配列はD群で認められるが、D群はB群から派生し、北方向に配列される。それ以外に、B・C群周辺に不連続に配置された可能性がある。この段階の方形周溝墓は、溝がやや幅広になる傾向が認められる。天神台遺跡集落部分の整理作業が進んでいないが、久ヶ原式期の竪穴住居跡は確実に存在する。

### 山田橋式期

久ヶ原式期の方形周溝墓は、久ヶ原1式期が中心であり、少なくとも久ヶ原2式新段階期までは連続しない。山田橋式期の方形周溝墓は5基が散在する。時期は山田橋1式期に限定される。

### 中台式期

中台式～草刈式期の墳墓は、宮ノ台式期～久ヶ原式期の墓域を避けて造墓している。中台1式期は、セ72地区の台地西側縁辺部に墓域をもち、溝を共有しながら連続的に造墓された。しかし、中台2式期になると、広範囲に散在する。この時期、セ28地区に前方後方形墓のSS118・SS119が出現する。なお、前方後円形墓の諏訪台1号墳、諏訪台2号墳については、時期吾的に確定できない。中台2式期の散在性から、この時期に一応比定しておく。前方後方形墓のSS94出土の内湾壺も、中台式から草刈1式の幅を認める必要があるが、諏訪台1号墳、諏訪台2号墳と併せて、この段階に一応比定しておく。なお、隣接地にある前方後方形墓の東間部多2・16号墳は、ともに草刈1式期である。

### 草刈式期

神門以降となる草刈式期になると、墓域にまとまりが認められるようになり、個々の墳墓も大型化

する。とくに、大型の円丘墓である諏訪台10号墳の造墓が契機となる可能性あるが、その時期は確証がない。国分寺台地区周辺では、古墳時代中期に持塚1号墳など大型円墳が出現することから、中期の可能性も考えられる。また、宮ノ台式期の方形周溝墓A群が、10号墳下に連続していた場合、古墳前期段階では、造墓を避けた可能性が高い。しかし、持塚1号墳や、東間部多1号墳、稲荷台1号墳、山田橋大山台2号墳など、この地区の中期円墳は散在的で、群を構成することが比較的少ないこと、諏訪台古墳群内で、10号からSS112に至る墳墓は、弥生時代の方形周溝墓とともに、台地上最も高所を占地している。このことから、ここでは、10号墳を前方後方形墓であるSS101及び方形墓群のSS103などの起点となる墳墓とし、草刈1～2式期に比定しておく。

なお、SS101についても、時期が判然としない。Fig.144-3・4を根拠としたが、SS101の年代は、10号墳の年代に影響する。

これ以降の段階は第1節で扱っており、重複する部分であるが、ここで簡単に触れ総括とする。

**諏訪台5期** 本期は和泉式～鬼高式(TK10)段階に対応するが、調査では該期の墳墓は確認されていないため、本遺跡の造墓活動断絶期となる。

**諏訪台6期 (Fig.638)** 本期はTK43からTK209並行段階、生美・椎名崎Ⅱ・Ⅲ古期段階に対応する。この段階の墳墓は10基である。

SM1004、SM1005、SM1007、SM1014、SM1017、SM1019、SM1020、SM1022、SM1024、SM1028

墳形は円墳を改変した前方後円墳が4基 (SM1004、SM1005、SM1007、SM1014) であり、円墳築造後この段階の内に墳形を改変 (格上げ?) している。そのほかは円墳のみで構成される。分布は諏訪台10号墳 (保存地区の大型円墳) を取り囲んで展開し、既存の古墳間に墳丘を切り崩して入り込むように築造している。

**諏訪台7期 (Fig.638)** 本期はTK217古段階、生美・椎名崎Ⅲ新からⅣ新时期段階に対応する。この段階の墳墓は15基である。

SM1001～SM1003、SM1006、SM1015、SM1016、SM1018、SM1021、SM1023、SM1025～SM1027、SM1032、SM1033、SM1037

墳形は前方後円墳が3基 (SM1001～SM1003)、円墳から前方後円墳に改変が1基 (SM1006)、そのほかは円墳である。分布は前段階と同様に、引き続き諏訪台10号墳を囲むように前段階の古墳に近接し、間に割って入るよう築造されている。

おそらく前方後円墳・円墳という円系譜の古墳は、この段階で築造が終焉を迎える。次の段階では墳丘形態が前方後方墳・方墳に刷新される。しかし次段階としたSM1010、SM1060など、7期の古墳に近接する一部の前方後方墳・方墳は、本段階に含まれる可能性を残す。

**諏訪台8期 (Fig.638)** 本期はTK217新段階からTK46段階、生美・椎名崎Ⅳ新からⅤ期段階に対応する。この段階の墳墓は10基である。

SM1008～SM1013、SM1059、SM1060、SM1085、SM1089

墳形は前段階の円系譜から前方後方墳・方墳に刷新される。しかし、くびれの少ないSM1010、ハンマー形の前方部を持つSM1012、方墳に前方部を造り足しているSM1011・SM1013など、前方後

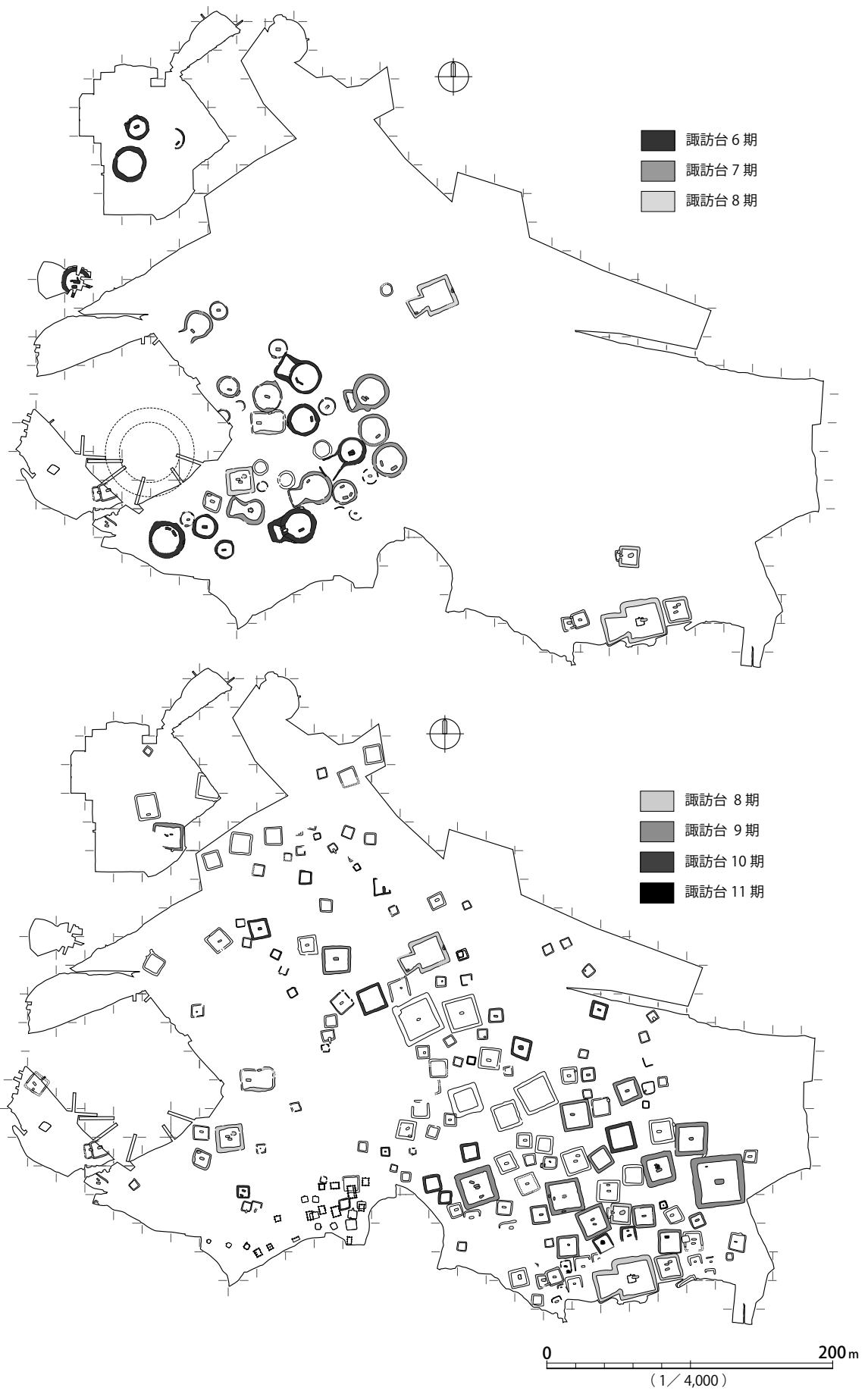


Fig.638 遺構変遷図 (3)

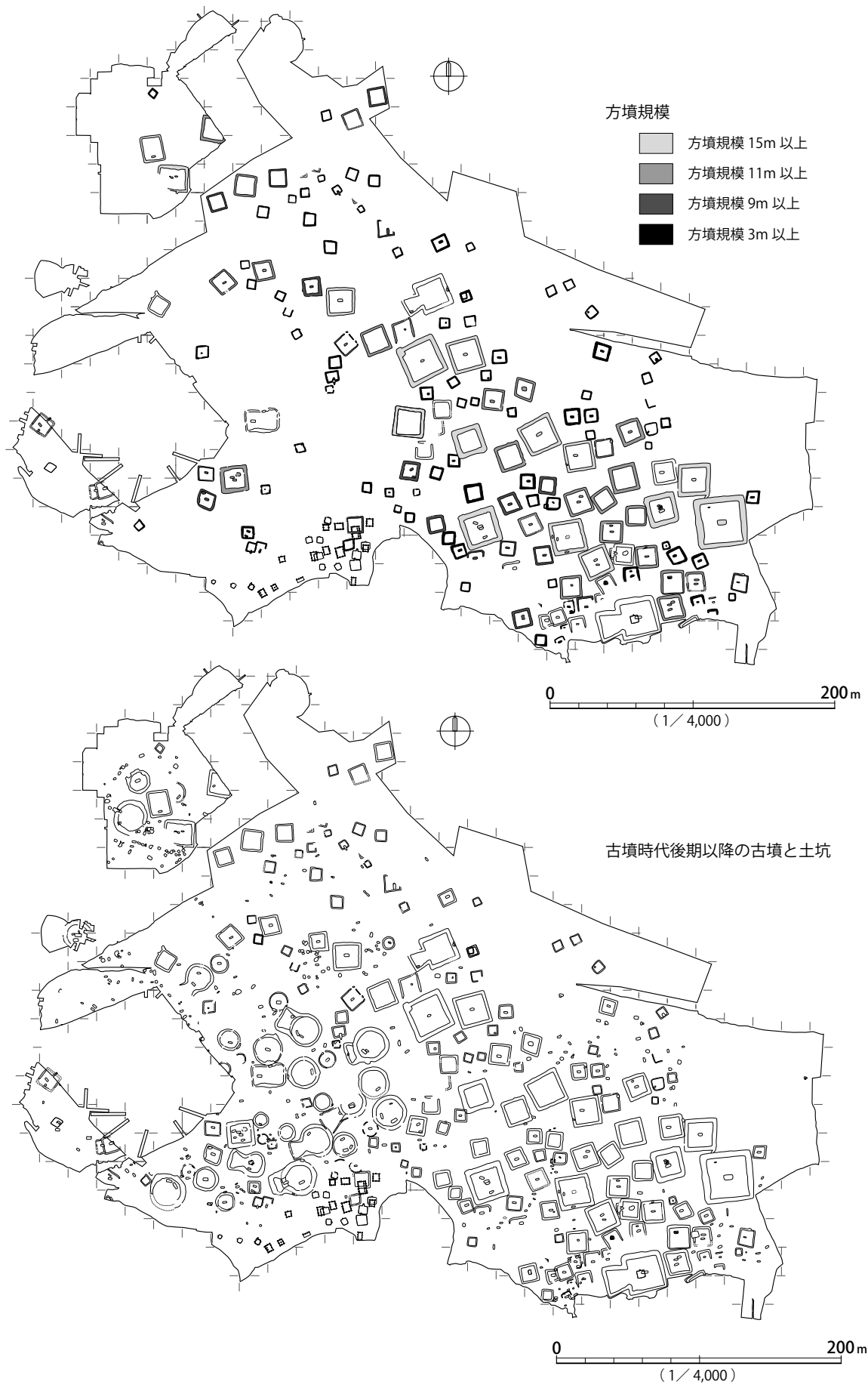


Fig.639 古墳時代後期以降遺構分布図



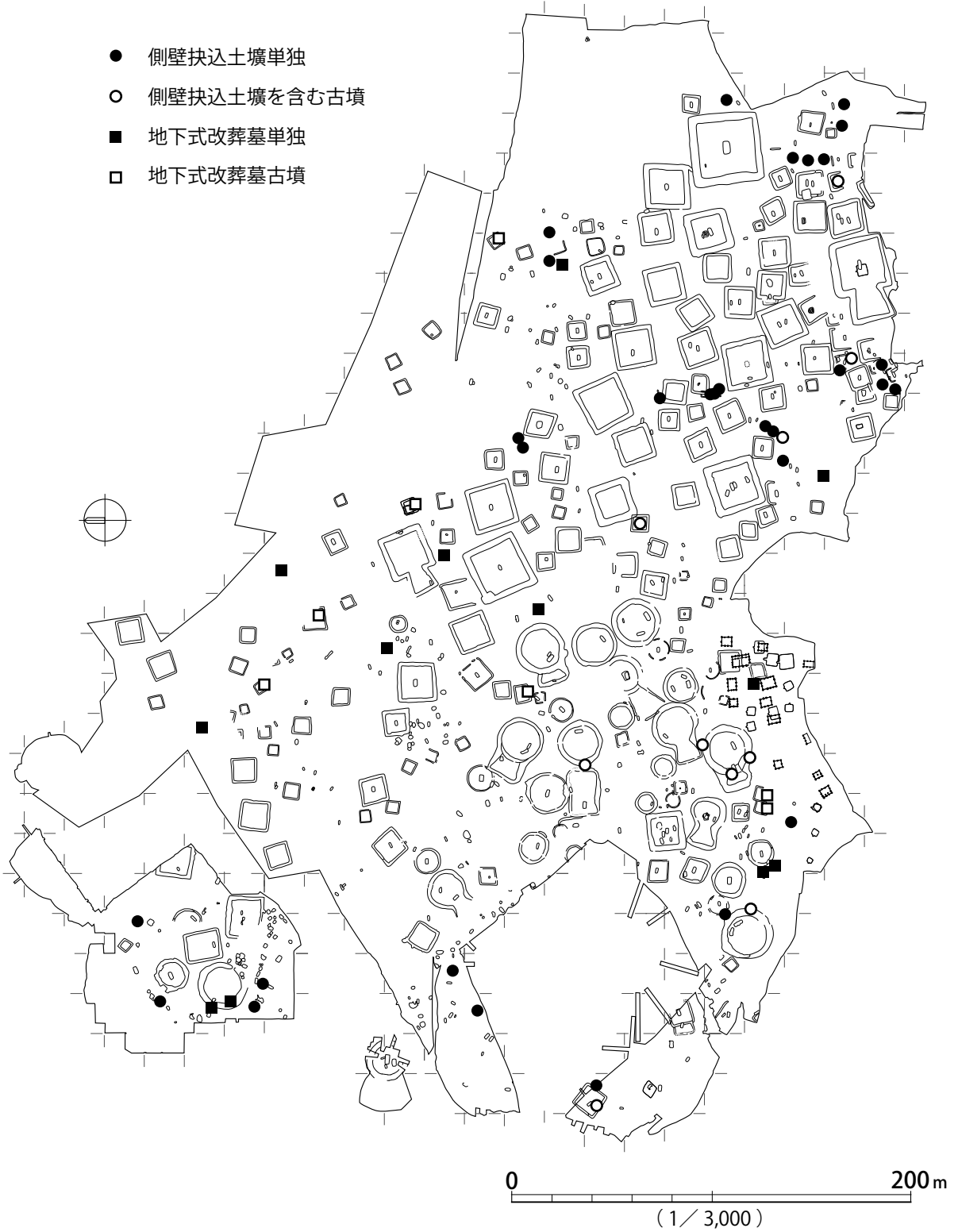


Fig.640 主体部種別分布図

方形とはいえバリエーションが存在している。墳形の変更が画一的な設計を伴ったものではなく、前方後円墳ではない前方後方形的なものという意識が伺える。遺構分布も新しい展開を見せる。前段階の造墓域である西側域のほか、新たに東南域への展開が開始される。SM1019は北側域に単独で位置する。他に帰属時期が明らかなSK331、SK332がセ72地区に位置することは、この地区からセ73地区間の保存地区内への展開も想定される。こうした伝統的な造墓域から新たな区域への展開は、社会背景の変化によるものとみられるが、同時的では無く、西側域→東南域・北側域のように段階的な変遷を経る可能性がある。また、平面形態も円形→方形の傾向は明白だが、SM1026などの遺物だけ見れば併存する可能性は残るように見える。よって本期は更に小段階に分かれる可能性を含む。

**諏訪台9期 (Fig.638)** 本期は生美・椎名崎VI期段階に対応し、7世紀末から8世紀初頭の年代を想定する。この段階の墳墓は17基を数える。

SM1041～SM1048、SM1058、SM1064、SM1066、SM1067、SM1073、SM1081、SM1104、SM1106、SM1107

この段階はSM1041を筆頭に大型の方墳のみが東南域で展開する。墳形も安定し企画性が伺える。SM1046など、南東域から周辺域への拡散傾向が僅かに認められるのも本段階の特徴である。

**諏訪台10期 (Fig.638)** 本期は8世紀の年代を想定する。この段階の墳墓は18基を数える。

SM1049、SM1051、SM1072、SM1077、SM1083、SM1087、SM1095、SM1097、SM1101、SM1115、SM1127、SM1129、SM1135、SM1157、SM1158、SM1164、SM1178、SM1181

この段階は、前段階の流れをそのまま受け、墳形は方墳であることのほか、分布域・基数に共通性が認められる。これに対し墳丘規模は明らかに縮小傾向を示し、前段階からの変容を見出せる。埋葬主体に関しては伝統的な木棺直葬が主となる中で、新たにSM1083の方形区画を伴う地下式土壇に、改葬骨の埋葬が出現する。本地域では火葬が開始される時期であるが、ここでは火葬の痕跡は明瞭ではないものの、埋葬方法の変更という画期は本段階に含まれている。

**諏訪台11期 (Fig.638)** 本期は9世紀の年代を想定する。この段階の墳墓は3基である。

SM1116、SM1173、SM1175

後で検討しているが、墳丘規模が7m～6m以下の墳墓の多くは、埋葬施設を検出しておらず、出土遺物も希薄であることから、帰属時期の判定には限界が伴う。しかし、ここに挙げた3基の内容と、墳丘規模の縮小という前段階からの傾向とをみれば、そのほとんどが本段階に含まれるものと考えられる。ただし、検討が十分とはいえなことから、ここでは可能性を示すのみに留めておく。

遺構の分布状況はこれまでの傾向を踏襲し、拡散傾向を明確にするが、既存墳墓の周辺に分布域があるように見える。この段階の埋葬主体に関しては、SM1175で唯一検出しており、方形区画内の小土壇中で火葬骨が出土している。火葬の事例が確実に認められることになる。火葬については地下式土壇の奥壁に玄室を造る事例が認められ、小土壇のものに先行する可能性があり注視される。こうした埋葬方法の変更である火葬の開始時期や、蔵骨器の採用時期・種類等は検討できていないため、変遷過程は明示できない。

これ以外にも方形区画を伴わない土壇や、小土壇内の蔵骨器埋納なども存在する。本地区の墓域として機能は、断続的に近世・近代まで続くが、諏訪台古墳群の終焉時期とすればこの段階となる。

**時期不明の古墳 (Fig.639)** 変遷図(Fig.636～638)に示した墳墓のほかに、時期不明とした墳墓

については、遺物を伴わないことが多いことから、帰属時期の判断は墳形や規模から求めるしかない。問題が無いわけではないが、ここでは、墳丘規模を基準として区分し、その傾向を示しておく。なお、規模の区分単位であるが、本来、墳墓の築造企画や、尺度を問題とすべきであるが、計測方法や計測部位について明確な理論を持たないため、ここでは高麗尺や古韓尺は使用せず、メートルを基準としている。規模の区分は任意とした。まず分類に当たっては、墳墓の長軸長を基準とし、機械的に規模による分類を行った。その分類に対し、時期の明確な遺構をプロットし、傾向のつかめるものについて検討を加えるといった手法をとっている。

この結果、古墳時代終末期～奈良・平安時代とみられる方形の小区画を伴う墳墓について、一定の傾向が認められた。①墳丘規模15m以上のものは諏訪台9期のSM1041を契機として展開する。②墳丘規模11m～15mには、諏訪台9期と10期のものが主体となる。③墳丘規模9m～11mでは諏訪台10期が主体となる。④墳丘規模3m～9mでは、諏訪台11期が主体となる。

雑駁ではあるが時期を追って墳丘規模が縮小する傾向は明瞭である。詳細にみると、墳丘規模7m付近で区分が可能とみられるが、検討が不十分である。

## 2 土坑・土壙 (Fig.640)

総数350基を数える。分類の結果、本遺跡で検出した土坑は、土坑208基、埋葬施設とみられる土壙は142基（土壙98基、側壁扶込土壙31基、地下式改葬墓（地下式土壙）12基、地下式坑1基）となった。

土坑・土壙は遺物を伴わない遺構がほとんどであり（SK231は蔵骨器として須恵器短頸壺が伴う）、帰属時期の判明したものは極めて少ない。また遺構の性格についても然りで、資料的な限界を持つ遺構ではある。しかし、墓域としての展開を考える上では墓である土壙の抽出は必須である。ここでは土壙を抽出することを目的として行った作業について、その方法を確認した上で、判明した事項について記しておく。

遺構の平面形状でⅠ～Ⅶに大分類した。その上で遺構底面における段の有無で中分類を設定。段の位置が遺構上位か下位かで小分類とした。しかし本遺跡での小分類は対象に乏しく有効性のある基準とはなりえなかった。有段のもの内、玄室の平面形状で小分類を行った。また、他の属性により細分が可能である（棺の形態や蔵骨器種）。

大分類は7分類とした。Ⅰは矩形でも長方形で、縦横比が1:0.5以上のもの。Ⅱは矩形でも長方形で、縦横比が1:0.5未満で、Ⅲではないもの。Ⅳは矩形でも正方形に近いもの。Ⅴは長楕円形のもの。Ⅵは円形に近いもの。Ⅶは砲弾形のもの。Ⅶは不正形のものとした。中分類は2分類で、aは無段、bは有段とした。小分類は2分類で、1は遺構上位に段、2は遺構下位に段である。細分類は小分類中2にあたるものみに適用で5分類。長方形をi、正方形をii、楕円形をiii、砲弾形をiv、不正形をvとした。分類の表記は、「Ⅰb2i類」等となる。形態分類の後、時期の判る土壙（遺物を含む、古墳の主体部である、古墳周溝に伴う等）を根拠に、帰属時期の想定を行うという手法をとった。この結果、Ⅳb2類とした中の地下式土壙や、Ⅰ・Ⅳ類のb2i・iiiに含まれる側壁扶込土壙について、古墳群の変遷に関連する有用な要素と判断するに至った。

**地下式改葬墓（地下式土壙）** Ⅳ類のb2に含まれるものに地下構造を持つ埋葬施設がある。本遺跡からは13基が検出されている（うちSK35は中世期の地下式坑）。



0 10 20 30 40 50mm  
計測・作図：奈良県立橿原考古学研究所

SK1、SK2、SK33、SK35、SK41、SK87、SK151、SK181、SK221、SK222、SK232、SK252、SK299

また、こうした地下構造を有する土壌を埋葬主体とした方形区画を伴う墳墓も7基検出されている。SM1083、SM1128、SM1134、SM1144、SM1146、SM1147、SM1169

SM1083が諏訪台10期である以外は帰属時期を確定できない。しかしSM1083以外は小規模の方形区画を有する墳墓であることで共通する。墳墓規模の傾向に照らすとこれらが10期を遡ることは考えにくく、同時期か後続する時期である可能性が高い。こうした傾向から、短絡的ではあるがSKを冠する区画を伴わない単独土坑については、諏訪台10期～11期で捉えておきたい。

なお、SM1144については、本報告の事実記載では主体部無しとなっているが、写真から判断すると方形区画を伴う地下式改葬墓として扱ってよいものと判断している。

**側壁抉込土壌** ここではI・IV類、b2 i・iiiに含まれる「有天井土壌」または「側壁抉込土壌」と呼ばれる土壌について触れる（以下側壁抉込土壌とする）。31基が単独土壌として検出されている。

SK11、SK39、SK42、SK84、SK154、SK155、SK183、SK194、SK198、SK200、SK203、SK205、SK206、SK215、SK284、SK286、SK287、SK288、SK292、SK293、SK294、SK305、SK307、SK313、SK316、SK319、(SK324)、SK330、SK337、SK347、SK348

また、この側壁抉込土壌で、古墳周溝内や、墳丘内での主体部への採用が10基検出されている。

SM1007-第3～5主体部、SM1014-第3主体部、SM1019-第2主体部、SM1075-第2主体部、SM1116-第2主体部、SM1119-第1主体部、SM1184-第2主体部

側壁抉込土壌は、千葉縣市原市菊間遺跡の事例で底面より伸展葬の人骨が検出され、埋葬施設であることが確認されている（田中1985）。特徴的な形状や古墳周溝内に位置するなど、他の土壌に比べ指標的な遺構として利用しやすいように見える。しかし、この種の遺構からは出土遺物が極めて少なく、条件の良い周溝内土壌においても帰属時期について上限は決めやすいが、追葬を考慮すると下限が確定し難い事例が多い遺構でもある。また、東北においても事例があり、8世紀～10世紀の年代観の中で捉えられている（佐久間2005）。特筆されるのはこの遺構が検出される遺跡のある地域からは関東系土器が出土することで、直接的な人の移動（移民）が背景にあるとの指摘もある（今泉1992）。

本遺跡での墳墓に伴う、もしくは主体部となる側壁抉込土壌は、主たる遺構の時期がSM1007・SM1014・SM1019が諏訪台6期（A群）、SM1116・(SM1119・SM1184)が諏訪台11期（B群）と大きな隔たりをみせる（SM1075は帰属に検討の余地あり）。内容を見るとA群は円墳のみで、周溝内土壌であり、B群については括弧付きではあるが、方墳のみで周溝内土壌と、墳丘内の主体部であることが各群で共通する。また、分布もA群が遺跡南西側、B群が南東側に偏在する特徴がある。

こうした傾向を踏まえてSKを冠する単独土壌の分布をみると、B群とした遺跡南東側周辺に分布の集中が見られ、また、諏訪台11期という時期の特徴である拡散傾向も重なることから、単独で存在する側壁抉込土壌の帰属時期は11期を中心とした段階で捉えておきたい。

### 3 その他の遺構と遺物

ここでは特徴的な遺構・遺物について概観する。

玉類は総数1,527点（ガラス小玉1,366点、管玉40点、勾玉40点、丸玉30点、棗玉20点、切子玉2

点、白玉12点、その他17点)を数える。ガラス小玉については形状分類を行ったが、変遷を捉えるには至っていない。諏訪台2a期が168点で1遺構(SS89)、諏訪台4b期が97点で3遺構(SS103、SS106、SS112)、諏訪台6期が480点で1遺構(SM1014)、諏訪台7期が167点で3遺構(SM1002、SM1015、SM1027)、諏訪台8期が56点で2遺構(SM1013、SM1060)などとなっている。点数のみ見ればSM1014が突出するが、SS89も久ヶ原1式期という時期では特筆される。そのほか雑駁ではあるが、SS段階では色調が均一であるが、時期が下がるに従い、多様な色調で構成される傾向が看取される。また、鋳造品も時期と共に増加する傾向があるように見える。これは生産地の増加と流通経路の多様化が背景にあり、それが表出した現象とみられる。

この他には、SS76の琥珀製勾玉(諏訪台1期)や、SM1014ガラス製管玉(諏訪台6期)、また本地域の特徴である銚子産とみられる琥珀製粟玉がSM1004、SM1014、SM1060、SK138、SK331から出土しており特徴としてあげられる。

金属製品では銅鏃、鉄剣、大刀や象嵌鏢付小太刀、轡、金銅製耳環などの出土が特記できる。

**盤龍鏡** 盤龍鏡については、その製作地に関して新しい見解は見出せず、これまで通り舶載鏡である可能性をなぞるに留まる。また、出土遺構の帰属時期についてもSM112に対し先行する可能性を指摘するが、この鏡を時期的な判断材料とはしていない。また、出土状況においては主体部A掘り込み面付近にガラス玉と共に出土しているなど、特殊な状況を有する。主体部Aの掘り込みが隣接古墳のそれと比較すると、突出して深いことから、直交する主体部Cとの関連も含め、他事例との更なる比較検証の余地があるように思われる。また、第2章第1節で示したが、実測図化作業にあたり、3D画像の観察結果もあって、これまで正文帯を2頭の盤龍とした理解であったが、対向する盤龍と虎の2頭の獣形文である可能性を指摘した。龍虎鏡という名称も存在するが、盤龍鏡の分類中に含まれるため、名称はそのままとしている。

**二重口縁壺 伊勢型二重口縁壺 大廓式土器** 二重口縁壺とする器形の土器は、総数17個体、出土した遺構数は7基を数える。

SS4、SS96、SS97、SS101、SS104、SS106、SS112、SS117

時期はSS4・SS117が諏訪台3b期、SS96・SS97が諏訪台4a期、SS101・SS104・SS106・SS112が4b期である。特にSS112の周溝出土土器は、草刈2式期の良好な土器群を示す。二重口縁壺、直口壺、高坏、開脚高坏、器台、など他器種で構成される上、大廓式の大型壺や、伊勢型二重口縁壺など、外来もしくは外来に系譜を持つ土器を伴う。これらの内、伊勢型二重口縁壺とした2個体について、SS112-10とした二重口縁壺は、櫛描文を肩に巡らし東海西部の影響を受けたものとみられ、胎土分析では在地土器と捉えている土器群と同じグループに含まれる。また、SS112-11とした口唇部に櫛歯状工具の押圧による刻みを有する個体についても、在地土器の可能性を考慮しており(註1)、明らかに他地域よりもたらされた土器はSS112-9の大廓式の大型壺のみである。それ以外の在地で製作されたとみられる土器のうち、SS112-5・6・8とした二重口縁壺は整形・調整技法から、胎土、色調、法量に至るまで極めて共通要素が多い個体で、同一製作者の関与を想定している。

大廓式の大型壺については、大廓Ⅲ式期段階のものとされる(註2)。出土状況の記録が限られるが、注記により、西側周溝内の一括取り上げ遺物であることや、調査担当者のコメント等により限界はあるが出土状況が裏付けられている。大廓Ⅲ式段階は大廓式土器の拡散期とされるが(柳沼2013)、古

墳出土のものは少なく、その上、口縁部以外を含む個体は極めて限定的である。

**鉄鍋と鍋被り土壙** 概報によると、TJ地区では、第99号住居跡の覆土中に掘り込まれた土壙から、黄瀬戸を伴う鉄兜出土の記載があるが（谷島1975）、そこには実測図が掲載されていない。遺物の所在不明のまま整理終盤に至って片口の鉄鍋を発見し、それが、鉄兜とされていた出土資料であると判断した。ただし、発見が既に整理作業終盤であったこともあり、本報告でも図示できない。そのため、観察した内容だけここで触れておく。現場のラベルは確認できず、一度基礎整理された状況で、ラベルには一度「68号遺構」と書かれたが、後に消されている。「Po5」「鉄製品」「カブト首」などの記載が確認できる。遺物は片口の鉄鍋1/4個体ほどの破片と歯を含む人骨とみられる骨片である。概報にある「黄瀬戸」は確認できていない。以上のことから、概報でカブトを伴うとした遺構は、鍋被りの土壙墓であった可能性が極めて高い。よって、099地区のSK130事例を含め、2例が検出されていることになる。また、遺構外出土の金属器37は鉄鍋の脚部とみられ、何れかの個体に接合する可能性がある。

**多字一石経（礫経石）** 第2章第3節第4項の遺構外の遺物の内、石製品15（Fig.543）について補足する。多字一石経とした礫経石の形状は、扁平なものではなく、ある程度丸みのある礫が使用されている。表面は、大きな空白を作ることなく墨書文字で埋められている。多文字であることは確認できるが、判読出来ていない。肉眼観察により判明しているのは、①文字が右肩下がりであること ②梵字を含んではいない可能性が高いこと ③墨書のほかに、線刻による「○」の図形が認められることなどである。このうち③は、その位置が中央寄りであることから、これを正面としている可能性が伺える。自然石に墨書文字が書かれた人工遺物としては、経石以外考えにくいこともあるが、経石が初期において経典を保存する目的で作られたものから、次第に極楽往生、現世利益、追善供養など願意を込めたものに内容が変化するとされることから、本資料の墨書文字が、経典以外の願文等であっても、経石に分類されるものと理解している。経石に書かれた経文の種類は法華経、阿弥陀教、般若心経、華嚴経、弥勒経、大日経、金剛頂経などの経典の抜粋である事例が多く、そのうち法華経は、宗派に限定されず幅広く用いられる経典であることから、出土する事例も多いとされる。

参考ではあるが、岩手県盛岡市の宿田南経塚から出土した186点の経石の分析では、法華経を書写した資料に共通する書風として、右肩下がり、文字の編や旁が省略されていることが指摘されており、この書風は鎌倉時代中期から後期のものとされている。

本資料はグリッド一括取り上げ資料のため、厳密な出土場所は検討できないが、グリッドは諏訪神社境内に近い。経石の多くが経塚に伴い、また経塚は社寺に造られることが多いとされることから、本遺跡内に墳丘を利用した経塚があった可能性がある。

**滑石製装飾品** 第2章第3節第6項の諏訪台古墳群墳丘出土の縄文遺物のうち、石器232（Fig.635）について補足しておく。装飾品の可能性が高い不明石製品とした滑石製品である。出土遺構はSM1060（セ28-037）の主体部となっている。出土位置は、現場図面から主体部の土壙覆土上層からとみられる。ただし、主体部は墳丘下の旧表土を掘り込んで造られており、主体部築造後に土壙壁面が崩れ、その際に旧表土下の遺物が主体部土壙内に入り込んだ可能性も考えられる。そのように考えると、本遺構の下層には縄文時代の遺構が位置し、この遺構に帰属する遺物である可能性を考えたい。この石製品は『天神台遺跡Ⅰ』の整理段階では、古墳主体部の出土であること、その形状が特異であること

から縄文時代より後の所産と判断され報告が見送られたが、出土した遺構の時期において同様な遺物の類例がないこと、また、群馬県松井田町の新堀東源ヶ原遺跡包含層出土の滑石製扁正方形垂飾(大賀2004)に、線刻による「×」による区画や、「○」などのモチーフが似る事例があることなどから(註3)、縄文時代早期末～前期前葉の所産であると判断した。

最後に、諏訪台古墳群・天神台遺跡の変遷を概観する。弥生時代中期後半に方形周溝墓の造営で始まった墓域は、方形の伝統を保ちながら変容し、前方後円形を含む円の系譜を取り入れて古墳の発生を受容した。しかしこの円の系譜は継続せず、伝統的な方形の系譜が古墳時代中期直前まで継続する。古墳時代後期後半に再度造営した古墳は円墳・前方後円墳で占められ、古墳時代終末期に至り方形へ劇的に転換する。終末期後半から奈良・平安時代にかけて徐々にその規模を縮小しながらも、古墳の伝統をかたくなに保持しつつ、改葬・火葬という新しい埋葬法を取り入れている。幾度となく発令された薄葬令への反応として、方形区画規模の縮小、火葬が選択されたのであれば、意識レベルではその直前までは厚葬であり、変質はしているが古墳を造る指向があったと捉えたい。よって諏訪台古墳群の終焉は、まさしく本地域における古墳の終焉だったといえるのではないだろうか。

諏訪台古墳群・天神台遺跡の成果と、周辺地域である国分寺台地区の古墳や、村田川の北側に位置する草刈遺跡(小林2007ほか)、また最近報告された姉崎地域の海保地区遺跡群(大山ほか2014)との対比は、本報告では及ばなかった、今後必要な作業であり、それが国府・国分僧尼寺を設置した地域の墓制の解明につながるものと期待して、不十分ではあるが報告を終えたい。

---

(註1) 酒巻忠史氏の教示。上総地方でよく似た胎土の土器は見られるとのコメントを頂いた。

(註2) 柳沼賢治氏教示。

(註3) 西野雅人氏、鶴岡英一氏を通じて小林清隆氏よりご教示頂いた。

## 参考文献

- 安藤鴻基 1992「終末期方墳」『国立歴史民俗博物館研究報告 第44集』国立歴史民俗博物館
- 伊藤敏行 1996「個別形態論」『関東の方形周溝墓』同成社
- 岩崎卓也 1992「関東地方東部の前方後円形小墳」『国立歴史民俗博物館研究報告 第44集』国立歴史民俗博物館
- 大谷弘幸 2004『千原台ニュータウンXI 一市原市草刈遺跡(C区・保存区)一』  
千葉県文化財センター調査報告第479集 都市基盤整備公団千葉地域支社 財団法人千葉県文化財センター
- 大塚初重 2000「前方後円墳の終焉とその後」第5回東北・関東前方後円墳研究会大会  
《シンポジウム》前方後円墳の終焉とその後 発表要旨資料東北・関東前方後円墳研究会
- 大村直2004「弥生時代後期の山田橋遺跡群」『市原市山田橋遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第88集
- 大村直2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』  
市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 市原市教育委員会
- 大村直ほか2009『市原市南中台遺跡・荒久A地点』上総国分寺台遺跡調査報告XX 市原市教育委員会
- 大山祐喜ほか2014『市原市海保地区遺跡群I』大成建設株式会社 国際文化財株式会社
- 小沢洋 1992「上総南西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告 第44集』  
国立歴史民俗博物館
- 小沢洋 2002「上総における古墳の地域色」第7回東北・関東前方後円墳研究会大会  
《シンポジウム》前方後円墳の地域色 発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会



- 加納実ほか1996『市原市武士遺跡1 ―福増浄水場埋蔵文化財調査報告書―第2分冊』  
 千葉県文化財センター調査報告第289集 千葉県水道局 財団法人 千葉県文化財センター
- 川崎志乃2002「伊勢型二重口縁壺の基礎的研究」『Mie history』vol.13 三重歴史文化研究会
- 栗田則久 2005「千葉県における前方後円墳以後と古墳の終末」第10回東北・関東前方後円墳研究会大会  
 《シンポジウム》前方後円墳以後と古墳の終末 発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 黒沢浩 1997「房総宮ノ台土器考 房総における宮ノ台式土器の枠組み」『史館』第29号 史館同人
- 黒沢浩 1998「続・房総宮ノ台土器考 房総最古の宮ノ台式土器」『史館』第30号 史館同人
- 小橋健司2014「千葉県の様相」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器研究会
- 小橋健司2009「千葉県の前期古墳―市原市域を中心にして―」『第14回東北・関東前方後円墳研究会大会  
 《シンポジウム》前期古墳の諸段階と大型古墳の出現』
- 小林清隆ほか2007『千原台ニュータウンXVII ―市原市草刈遺跡（K区）―』  
 千葉県教育振興財団調査報告第565集 独立行政法人都市再生機構千葉地域支社  
 財団法人千葉県教育振興財団
- 佐久間光平 2005「古代の「側壁扶込土坑」について」『宮城考古学』第7号 宮城県考古学会
- 白井久美子 1992「上総北西部における古墳終末期の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告 第44集』  
 国立歴史民俗博物館
- 白井久美子 2002『古墳から見た列島東縁部世界の形成』千葉大学考古学研究叢書2
- 白石太一郎 1992「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告 第44集』国立歴史民俗博物館
- 杉山晋作 2000「千葉における前方後円墳の終焉とその後」第5回東北・関東前方後円墳研究会大会  
 《シンポジウム》前方後円墳の終焉とその後 発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 高橋透 2011「7世紀の東日本における湖西産須恵器瓶類の流通」『駿台史学 第143号』駿台史学会
- 田嶋明人2014「二重口縁壺にみる推移と変革(上)」第3号 東日本古墳確立期土器研究会
- 田中清美ほか1992『奉免上原台遺跡』財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第43集  
 財団法人市原市文化財センター
- 田中新史 2002「有段口縁壺の成立と展開―特化への道程・類別と2地域の分析―」『土筆』6 土筆舎
- 田中新史 1985「古墳時代終末期の地域色」『古代探叢Ⅱ』
- 田中新史 1985「古墳時代終焉期の地域色 ―東国の地下式系土壙墓を中心として」  
 『古代探叢Ⅱ―早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集―』
- 田中裕 2009「千葉県域における前方後円墳の消滅」『東国古墳研究会シンポジウム東国における  
 前方後円墳の消滅 発表要旨』東国古墳研究会
- 田中裕ほか 2009『東国における前方後円墳の消滅』東国古墳研究会
- 當眞嗣史 2002『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅷ ―大山台遺跡（古墳群ならびに方形周溝墓群）―』  
 木更津市教育委員会
- 仲山英樹 1992「古代東国における墳墓の展開とその背景」『研究紀要 第1号』  
 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 萩原恭一 2002「千葉県における古墳の地域性」 第7回東北・関東前方後円墳研究会大会  
 《シンポジウム》前方後円墳の地域色 発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 春成秀爾 1993「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告 第49集』 国立歴史民俗博物館
- 広瀬和雄ほか2013 「終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告 第179集』国立歴史民俗博物館
- 北條芳隆 2004「前方後円墳の終焉に関する予察 ―東部瀬戸内と関東地方を素材として―」  
 『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 柳沼賢治 「大廓式土器の広がり ―駿河以東について―」『静岡県考古学会2013年度シンポジウム資料』

## 報告書抄録

ふりがな	いちほらしすわだいにふんぐん・てんじんだいいせきに
書名	市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ
副書名	上総国分寺台遺跡調査報告
巻次	XXVI
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	北見一弘・木對和紀・忍澤成視
編集機関	市原市教育委員会(市原市埋蔵文化財調査センター)
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489 TEL0436(41)9000
発行年月日	2015年(平成27年) 3月27日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いちほらしすわだいにふんぐん・てんじんだいいせき 市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ	いちほらしむらかみ 1664番地ほか	12219	761・760	35度 29分 27秒	140度 06分 29秒	1974・1979・ 1980・1982・ 1985・1986・ 1987・1988	146,890	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ	古墳群・集落跡	縄文時代		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶磁器、土製品(挾状耳飾、ミニチュア土器)、石製品(挾状耳飾、石器、砥石、滑石製模造品)、金属製品(銅鏃、盤龍鏡、鉄剣、鉄鏃、大刀、象嵌鍔付小太刀、銚、馬具、釘、刀子)、玉類(勾玉(琥珀製含む)、管玉(ガラス製含む)、棗玉、ガラス小玉、切子玉、白玉、丸玉)、炭化部材など。	弥生時代中期後半に造墓活動が開始され、弥生後期、古墳時代前期後半まで継続するが、古墳時代後期後葉まで空白期が存在する。その後古墳時代終末期、奈良・平安時代(9世紀初頭)まで区域と墳形が変遷しながら、墓域として存続する。再度の空白期を経て、中世後期段階に台地整形を伴う墓域が形成される。
		弥生時代	中期方形周溝墓58基 後期方形周溝墓20基 終末期方形周溝墓(古墳)10基 土壇・土坑		
		古墳時代	前期古墳(方墳、前方後方墳)16基 後期～終末期古墳(円墳、前方後円墳、円墳改変前方後円墳、方墳、前方後方墳、方墳改変前方後方墳)52基 終末期堅穴建物跡1棟 土壇(側壁挾込土壇含む)・土坑		
		奈良・平安時代	律令制墳墓21基 土壇(側壁挾込土壇、地下式改葬墓含む)・土坑(火葬墓含む)		
		中世	地下式土坑1基 土坑・土坑 台地整形4箇所  他時期不明溝31条、集石遺構1か所		

要約	<p>「諏訪台古墳群」は古墳、「天神台遺跡」はそれ以外に対しての遺跡名称で、縄文～中世までの複合遺跡である。本書では、墓・墳墓を対象としている。主要な遺構は墳墓が310基(弥生時代中期後半方形周溝墓から、古墳時代前期古墳までが119基、古墳時代後期から終末期古墳、奈良・平安時代の律令制墳墓が191基)、古墳時代終末期堅穴建物跡1棟、土壇・土坑が350基、溝31条、大地整形4か所、集石遺構1か所などで構成される。ほかに本書には古墳出土の縄文遺物についても掲載している。</p> <p>前方後円形の弥生時代終末期とみられる1号墳、古墳時代前期の円墳とされる8号墳や、古墳時代終末期方墳など14基については本報告には含んでいない。</p> <p>市原台地でも屈指の密度と、断絶期はあるものの長期にわたる造墓活動は、当該地の土地利用の性格を色濃く反映したものとして特徴付けられる。また、本遺跡は、弥生時代終末期後半とされる神門壇丘墓群と、その被葬者の母村と位置づけられる中台遺跡とは、小谷を挟んで対向する位置関係にあり、神門造営のあり方を考える上で、比較資料として重要な位置を占める。</p> <p>既に本遺跡の縄文時代早期後葉～前期前葉の集落跡・貝塚については「天神台遺跡Ⅰ」で報告済みであり、弥生後期～終末期を中心とした集落跡、平安時代の掘立柱建物跡群等については「天神台遺跡Ⅲ」で報告予定である。</p>
----	---



市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第31集

上総国分寺台遺跡調査報告XXVI

## 市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ

平成27年3月27日 発行

編集発行 市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター

住所 市原市能満1489番地

TEL 0436(41)9000

印刷 株式会社 弘報社印刷

住所 千葉市緑区古市場町474-268 ちば印刷団地内

TEL 043(268)2371(代)

